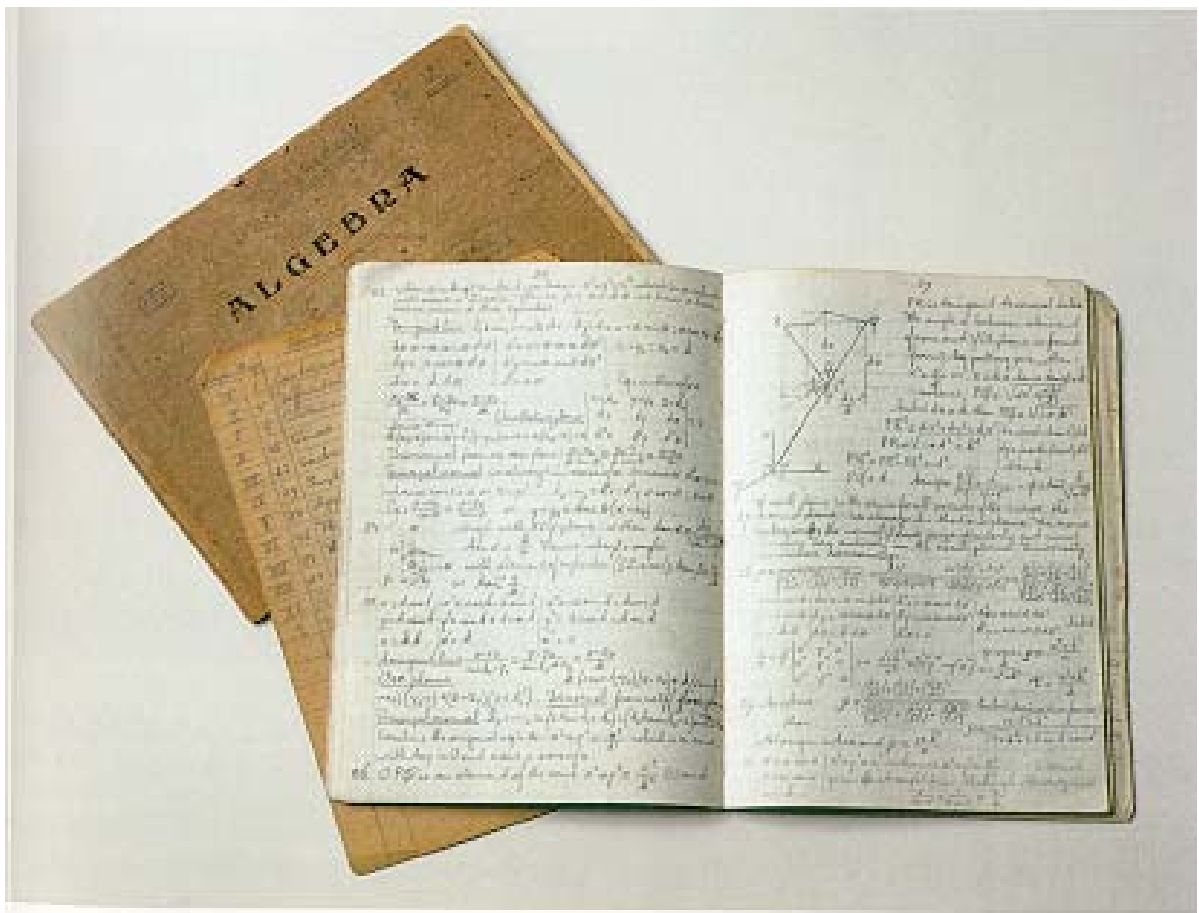


# 日記でみる日本占領時代の蘭印

福岡に於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した<平和友好交流計画>から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

福岡に於いて書かれた日記

編纂 : Jeroen Kemperman

編集 : Elisabeth Broers

翻訳 : Naomi Bom-Mikami and Reiko Suzuki



## 目次

背景	1
序	3
移送と宿泊	48
拘留所の組織／欧州人と日本人の責任者	93
日本人による戦争捕虜達の取り扱い	114
食糧と物資事情	144
仕事	214
健康と医療情況	269
イラスト	325
娯楽と信仰	327
収容所の雰囲気／戦後の生活に関する考え	364
互いの関係	383
拘留所外部との接触	401
戦況に関する情報と噂	411
日本降伏の知らせ	457



## 出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる〈日記シリーズ〉が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バックナー社（アムステルダム、2001–2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅搜索の際に日記が見つかることを受けられる可能性があった。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。

選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分を中心に細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがあり、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分の日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後から書き

加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。



## 前書き 福岡俘虜収容所 (日本)<sup>1</sup>

日本軍はアジアを通り抜ける大成功の征服行軍間、14万2千766名のイギリス人、オランダ人、アメリカ人、オーストラリア人、カナダ人とニュージーランド人を捕虜にした。彼等の4分の1以上、正確には27パーセント、が仕事を請け負わされる為最終的に日本へやって来た。<sup>2</sup> 約3万7千名のイギリス、オーストラリア、アメリカ、カナダ、そしてオランダの戦争捕虜達が関与した。彼等は鉱山、工場そして港の仕事に追いやられた。彼等の中には約8千名のオランダ人が居た。最初のオランダ人グループは、1942年5月と12月に到着した（それぞれはセレベスからの500名とジャワからの600名）。1943年末と1944年半ばに到着した他のグループは、ジャワからと泰緬鉄道<sup>3</sup>出身であった。

この原稿は福岡県の戦争俘虜収容所が取り扱われている。戦争捕虜達はこの県の炭坑で働かされた。この収容所連にはオランダ人だけでなく、他の連合国の国民も居た。

### 日本への海運

約3万7千名の連合軍戦争捕虜達が日本に到着した。日本行きの旅を開始したこの捕虜数はかなり高い：大勢は決して最終目的に辿り着く事無く、海運輸送中に死亡した。これらの輸送は酷かった。戦争捕虜達は貨物—そして旅客船の船倉内にて輸送された。好天候の際は彼等（部分的）の上部にある上げ蓋が開けられたので、換気は船が航行し続ける間充分であった。しかし船が静止、或いは悪天候の為上げ蓋が閉められようものなら、この船倉は即座にかなり息苦しくなり得た。横になる空間は最善の場合60 x 180センチ、故に1平方メートル余りあったが、それはしばしばもっと狭かった。いくつかの事例では人々はもはや全身を伸ばして横たわることが出来なかった；彼等はそれ故立膝で座り続けるしかなかった。輸送中は大抵僅かばかりの飲料水しか供給されなかったので、人は船倉で絶え間のない喉の渇きを覚えた。この水の欠乏は又身体の衛生問題を引き起こした。旅が長びくにつれ、捕虜達は益々不潔になり始めていった。<sup>4</sup>

戦争が長引くに従って、船舶連は日本へ渡るのに更なる時間を要した。初期はシンガポールから日本への旅に10日から20日間かかったが、1943年以降は連合軍の増加する活動により、大概はもう不可能となった。この護送船団連は今や東シナ海の近くを通過して航行しな

---

<sup>1</sup> この原稿で述べている戦争捕虜達は原爆投下を経験しなかった。ここで取り扱われる福岡俘虜収容所は全て北九州（そこで炭鉱の仕事に従事させられた）にあり、捕虜達が長崎に原爆が投下されたのを見たが、彼ら自身は九州の南西に居た（彼等は主に長崎の港で働いていた）。

<sup>2</sup> L. ドゥ ヨング、*Het Koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog*. (ライデン 1985) 11b巻、第2部半編、578.

<sup>3</sup> ドゥ ヨング 11b 第2部半編、742.

<sup>4</sup> E. ファン ヴィッツン、*Krijgsgevangenen in de Pacific-oorlog (1941 – 1945)*. (フラネケル 1971), 164-167.

ければならず、時として航路が安全になるまで長時間港で待機し続け、或いは敵の潜水艦や飛行機を避ける為かなりの回り道をした。輸送はそれ故に時として途中2ヶ月以上長くかかった。決して全船舶が到着したわけではなかった。<sup>5</sup>

戦争捕虜達が輸送された船舶連は日本軍により特別な目印が備え付けられていなかったため、彼等は連合軍に認識してもらえなかった。この様な貨物船団の襲撃はとにかく例外ではなかった。警報の間上げ蓋は閉められ、捕虜達は益々息が詰まってくる環境の中で、危険が過ぎ去るまで時として長時間待たなければならなかった。<sup>6</sup> 日本へ曳航された捕虜の一人、J.C. ハーメル牧師は戦後書いた：「特に、夜中のそういった警報は常に含まれている大きな緊張より極度に動揺させ、1人以上の捕虜達が自らの恐怖を曝け出していた。」<sup>7</sup> 船が魚雷や飛行爆弾にあたったとしたら、数少ない出口や不十分な救命道具しか積み込まれていない為、船倉内に居る人々にとって逃亡はほぼ不可能であった。ファン ヴィッツンの見積もりによると、約8千500名の連合軍戦争捕虜達が日本へ向かう輸送中死亡した。<sup>8</sup> 彼等は連合軍の活動によるだけでなく、又船上の悲惨な状況のせいでも死亡した。

生きて日本へ辿り着いた捕虜達は、門司（九州の最北端にある）に到着し、そこから全国に散らばっていた収容所連へと輸送されていった。門司到着は良く組織されていた。保税倉庫を通った後、捕虜達は他の監視人と共に無人の建物へと行進した。そこで日本の兵隊達が貰ったのと同様に、彼等も食事と飲み物を受け取った。束の間の滞在（時として半日）後、駅に向かって行進した。九州の福岡ー収容所に指定された捕虜達は数時間の汽車の旅後目的地に到着した。収容所到着後は荷物の検査と続き、そこで多くの物が没収され、こうして新しい収容所の生活が始まった。<sup>9</sup>

## 福岡 - 収容所

日本には合計85の戦争捕虜収容所があった。収容所人口は300から800人と多様だった。収容所は各々ひどく異なっていた：一方は十分な衛生設備の整ったまづまづの兵舎連であり、他方は原始的で不潔であった。<sup>10</sup> ファン ワーテルフォードによれば福岡県（九州の北方）には23の収容所があったという。<sup>11</sup> これらの収容所連の名称と番号は時としてかなり混乱

---

<sup>5</sup> ファン ヴィッツン、166.

<sup>6</sup> ファン ヴィッツン、167.

<sup>7</sup> J.C. ハーメル、Soldatendominee. Ervaringen van een legerpredikant in Japanse krijgsgevangenschap.(第3版、大規模な出版、フラネケル 1975)、177.

<sup>8</sup> ファン ヴィッツン、173.

<sup>9</sup> ファン ヴィッツン、152-153.

<sup>10</sup> ドウ ヨング 111b 第2部半編、742-743; ファン ヴィッツン、158.

<sup>11</sup> ファン ワーテルフォード、Prisoners of the Japanese in World War II. (ジェファーソン/ロンドン 1994)、

している：色々な収容所が‘福岡第1’と呼ばれていたり、又様々な理由から他の名前が使用されたりしている。この原稿に出てくる収容所連はここ下方に連述されている（その後に日記著者達の名前と共に）：

福岡第1（福岡市）	J. オーステルハウス（1944年12月－1945年1月）
福岡第9（宮田町）	C.F.ヘレと M.M.ヒルフマン（1943年12月－1945年8月）
福岡第15（折尾村?）	J.F.ファン ウェスト ドウ ヴェール（1943年5月－1945年8月）、J. オーステルハウス（1943年7月－1944年12月）そして G.H. イェッテン（1944年6－1945年8月）
福岡第17（大牟田市）	C. ウェストラ <sup>12</sup> （1944年6月－1945年8月）
福岡第21（中間市）	J.D. ルーゲ（1944年6月－1945年8月）
門司	J. オーステルハウス（1945年1月－1945年8月）

上記の収容所連は適度に近所に集まっていた。門司は九州の最北で、下関市の向いに位置していた。南西に向って約20キロメートル先、折尾と八幡の間、に福岡第15収容所があった。南へ数キロメートル先、中間の近く、には福岡第21収容所。<sup>13</sup> 更に先の南へ向って、宮田の近く、に福岡第9収容所。<sup>14</sup> 南西に向って約30キロメートル先（福岡市の南6キロメートル）、ヒダオの近くには福岡第1収容所。福岡市の南約65キロメートル、大牟田の近く、には福岡第17があった。

## 福岡第1

この収容所は10ヶ月の期間（1944年3月から1945年1月）内に3つの異なった用地を巡った。<sup>15</sup> 最初は約600名が居た。彼等は飛行場を建設しなければならなかった。この仕事の遂行後、彼等の内大半は1944年12月初め何処か他の場所へ移送された。彼等の場所は様々な福岡収容所連<sup>16</sup> から来た120名のオランダ人を含む約650人の捕虜達によって占められた。

1944年12月オーステルハウスは福岡第15から福岡第1収容所へやって来た。

---

202－205.

<sup>12</sup> J.C. ハーメル牧師も同様にこの収容所に収容された。

<sup>13</sup> 福岡第15も八幡の近くにあり、九州の最大工場主要部。ファンワーテルフォードによると福岡第21は中間の傍にあった。（ワーテルフォード、204）。

<sup>14</sup> 日記著者ヘレによればこの収容所は福岡第21からかけ離れて車で1時間半、そしてそれは20キロメートル以上の長距離と示唆している（NIOD、蘭領東インド日記収集、C.F.ヘレの日記、2部、28）。

<sup>15</sup> ワーテルフォード、202.

<sup>16</sup> NIOD、蘭領東インド日記収集、J. オーステルハウスの日記、198－199.

そこはその時遂行したばかりの飛行場の隣にあって、長い、樹皮で作られた兵舎連からなり、‘少ない藁と多い隙間’、とオーステルハウス。新参者達はなかんずく福岡の近く数キロメートル先に新兵舎を建造しなければならなかった。又彼等は隣接する駅で砂利貨車の荷下ろしもしなければならなかった。1945年1月18日捕虜達は新しい宿泊所へと移された。1週間後日記著者オーステルハウスを含む50名のグループは港町門司へと輸送された。

## 福岡第9

ヒルフマン軍医と戦争捕虜ヘレは1943年12月405名の他のオランダ人と共に福岡第9収容所に到着した。この収容所はいくつかの木造兵舎から成り、ヒルフマンに寄れば「非常に原始的な建造 [...]。風は裂け目や穴を通して至る所から唸った。[...] 私は頭からすっぽり毛布の下に潜り込んだが、暖かくはならなかった。」<sup>17</sup> ヘレは‘滑稽な収容所’だと思った：「引き戸や紙製の格子でできた日本の人形の家。壁は藁を木と土で混ぜたもの、5センチ厚みの莫藎の床、そこで我々は寝なければならない。」<sup>18</sup>

この収容所は山腹に面して高い木造の柵に囲まれていた。入り口は斜面の一番低い所にあり、その後ろには日本人監視人達の詰め所、日本人所長の事務所と数個の独房があった。斜面に兵舎連は建てられていた：宿泊兵舎、食堂、集会場、台所、病院部（検査室と納戸）そして3つの病院兵舎。用地の中央には入浴場があった：原始的だが、ゆったりした建物で、暖房設備と入浴するのに2個の大きなコンクリート水槽（2 x 3メートルの面積。に約80センチの深さ）。宿泊兵舎連は紙で貼りつけ塞がれた木の格子からなった引き壁で外部の一边が仕切られていた。それは実に頑丈な建造ではない代物であった：風は多くの隙間から中へ吹き込んだ。1944年6月更に100名の泰緬鉄道からのオランダ人が到着し、1945年4月と6月にはイギリス人グループが到着した。1945年7月には福岡第9に500名のオランダ人を含む約800名の戦争捕虜達が居た。<sup>19</sup>

## 福岡第15

戦争捕虜ファン ウェスト ドゥ ヴェールが1943年5月ここに到着した時、彼は「両側に点呼場のある木造兵舎の無愛想な薄暗い収容所。」と記した。この収容所は明らかにぞっとさせた、とファン ウェスト ドゥ ヴェールは書いた：「それは東の間我々を恐怖に陥れた」<sup>20</sup>

<sup>17</sup> M.M.ヒルフマン、Fukuoka 9. Arts in krijgsgevangenschap. (ユートレヒトーアントウェルペン 1985)、49-50.

<sup>18</sup> ヘレの日記、86

<sup>19</sup> ヒルフマン、132とNIOD IC001. 143.

<sup>20</sup> NIOD、蘭領東インド日記収集、J.F. ファン ウェスト ドゥ ヴェールの日記、67

<sup>0</sup> その時この収容所には既に150名の戦争捕虜達が居て、彼等は1ヶ月前にシンガポールから到着していた。人々は部屋の莫藪に4人ずつ寝た。1943年の後半と1944年初めここには約500名のイギリス、オーストラリア、アメリカそしてオランダの戦争捕虜達が居た。<sup>21</sup> 1944年6月には更に泰緬鉄道から300名のオランダ人が到着した。

## 福岡第17

1944年6月に大牟田から歩いて1時間、既に500名のアメリカ人が住んでいた福岡第17収容所に250名のオランダ人グループ(ウェストラとハーメル牧師を含む)と150名のオーストラリア人が到着した。ハーメルによればそれは模範収容所に見えた:「床には莫藪、紙製の扉、毛布、棚用に十分な木の板を備えた大きくゆとりのある収容所。夢ではないかと思った。」<sup>2</sup>

<sup>2</sup> ウェストラも同様にこの海の近くにある収容所には大変満足であった:「場所は最高だ。14人部屋の兵舎連、歯科医の居る病院と完璧な装備。 [...] 電燈。水道。」<sup>23</sup>

良い宿泊に大部分感謝すべきは捕虜達が働くべき鉱山を運営していた三井財閥の関与にある様だった。1つの病院と薬局や多くの仕事場もあった:靴屋、缶詰工場、散髪屋そして大工作業所。この収容所は後で更に新しく、ゆとりのある兵舎連、かなり大きな炊事場、食堂、新しい遊び場、そして大きな湯船のある浴場と拡張された。<sup>24</sup>

日本の占領期間中ここには1859人居た:821名のアメリカ人、562名のオーストラリア人、218名のイギリス人そして258名のオランダ人。<sup>25</sup>

## 福岡第21

戦争捕虜ルーゲは1944年6月この収容所に到着した。彼は次の様に記した:「この収容所は凡そ1ヘクタール大はある。建物は頑丈ではないといふものの、奇麗だ。各部屋には5センチ厚さのマット。」<sup>26</sup>

---

<sup>21</sup> オーステルハウスの日記、101; ファン ウェスト ドゥ ヴェールの日記、92

<sup>22</sup> ハーメル、183

<sup>23</sup> NIOD、蘭領東インド日記収集、1944年6月27日のC. ウェストラの日記。他の戦争捕虜が記述した:それは新しい収容所だ、大部分が木造で建てられている。[...] 到着後即我々は**食堂**で食事を貰った。何と贅沢な、丁度昔の兵舎の様。(NIOD、蘭領東インド日記収集、1944年6月19日のJ. ペルクインの日記。)

<sup>24</sup> ハーメル、191.

<sup>25</sup> ワーテルハウス、203

<sup>26</sup> NIOD、蘭領東インドの日記収集、1944年6月24日のJ.D.A.ルーゲの日記。

## 門司

オーステルハウスは1945年1月末に福岡第1収容所から他約50名と共にこの港町にやって来た。彼は、元はアメリカの組織であるYMCA（キリスト教青年会）の大きな石造建物に宿泊させられた。オーストラハウスによると「それは木造の兵舎連[前収容所、福岡第1の]よりそんなに寒くなかったとはいうものの、暖房はやはり無かった。しかしもっと素晴らしい暖炉付きの、とはいえこれは単に飾りの様だが、奇麗な食堂。」<sup>27</sup> 戦争捕虜達は港で船舶の積み下ろし、倉庫に荷揚げそして貨車の積み下ろしをしなければならなかった。彼等は強化しつつあるアメリカの爆撃の益々頻りに防空壕入りしなければならなかった。

## 拘留所の組織

収容所の所長には大抵日本の中尉がなり、彼は仕事の進行の責任を負っていた。各日本の戦争捕虜—或いは強制収容所の様に、収容所長の人柄は相当重要であった。毎日の彼等の仕事に良心的で監視人達を良く取り締まった所長達は居た。その結果は故に満足のいく収容所であった。他の所長達は全く取締りを行せせず部下の思いのままにさせた。この場合各日本兵は独自で罰を与えることが出来たので、仕事の上では戦争捕虜達の法外な数が犠牲となり、常に食糧盗難が起り、宿泊や安全性に問題が多くそして医療救済は不十分であった。収容所連におけるこれらの粗末な状況の原因の一つは日本人監視人達の行動に影響を及ぼしたに違いない日々の日本のラジオと新聞による反連合軍宣伝活動にあった。<sup>28</sup>

戦争捕虜達が日本へ連れて行かれたのはそこで仕事をする為であった。戦争が長引くほど、日本では労働力の欠乏が深刻になった。この欠乏を何とか埋め合わせる為、日本陸軍省は1943年5月日本の工業を戦争捕虜達の裁量に任せる命令を發布した。これは戦争捕虜達が軍隊により大きな産業グループ（‘財閥’）に貸し出されたことを意味した。<sup>29</sup> 恐らく福岡の炭鉱であくせく働かされた大半の戦争捕虜達は三井財閥によりこの仕事に雇用された。その様にヒルフマン（戦後）は福岡第9について記した：「この炭鉱は平民取締役の民間事業だった。社長はこの収容所に居る我々の所へ頻りに現れ、無愛想な印象は与えなかった。彼は平民服に、運動靴で歩いた（皮の欠乏の為）。」<sup>30</sup>

1艘の船に2人の船長は意見の不一致が起りやすい。炭鉱運営は殆ど何もすること

---

<sup>27</sup> オーステルハウスの日記、208.

<sup>28</sup> ファン ヴィッツン、154.

<sup>29</sup> ファン ヴィッツン、156.

<sup>30</sup> ヒルフマン、56. これらの‘運動靴’は日本の‘じか足袋’であった：ゴム底で布製の靴。これらの靴の着用は非常に常時であり、皮の欠乏とは結局何の関係も無い。

が出来ないやせ衰えた病人達からは殆ど儲けがなかった。福岡の炭鉱で三井運営は彼等の労働力を何とか水準維持することのみならず、時として何か捕虜達の為に尽くしたが、軍隊は明らかにその様な配慮を気にも止めず、こういった種の先導には常に抵抗した。<sup>31</sup> ハーメル牧師は書いた：「運営側[三井の]は時々玉葱や葱、ムール貝、イソギンチャク、時としては日本の蜜柑も収容所に持ってよこした。軍隊はこの意思表示を妨害し、これらの寄贈品をしばしば1週間或いはそれより長く放置させた、大部分が腐るまで。」<sup>32</sup> 日本市民と軍隊との振る舞いの違いは、1944年5月に福岡第9でメモしたヒルフマン医師によって裏付けられている：「鉱山の日本人達とここ収容所の軍当局間には確実に論争が起こっている。鉱山では働き手は100パーセント健康である者が採用される。彼等は頻繁に病人達を収容所へ送り返した。それでも鉱山にやって来る病人が、働きに来たが為に、そこで殴打を受けるということが時として起こっている。しかし軍当局はなるべく多くの人間を鉱山に送るという原則に従い、故に病人でさえもそこへ駆り立てたのだ。」<sup>33</sup>

ヒルフマンは又更に福岡第9での他の事件も記述し、そこから平民企業連の位置が軍隊の収容所長のそれに比べてかなり強力であったことが分る。鉱山取締役の一人が訪問中(故に平民)ヒルフマンはいくつかの重要な事柄に彼の注意を促す為彼に話しかけた、中でも不十分な栄養からくる戦争捕虜達の目の低下。暫くして後日本人収容所長がオランダの将校達に出頭を求め、‘部外者達’と話すことは断じて禁止することを彼らに刻印した；もし文句があったならば彼等は彼の所へ来るべきであった。この収容所長は鉱山取締役に対してのヒルフマンの所見で軍司令部から注意を促された様だ。<sup>34</sup> 2週間後収容所長は別れのスピーチをした：「別のスピーチで、彼は将校達にその様な胡散臭い仕掛けはもうするべきではないことを警告した(失明についての鉱山経営者と私の話し合い)、というのはこれが故に彼は今この職を取り去られたからだ。」<sup>35</sup> とは言えこの様な権威筋からの介入はかなり珍しいことであつたらしく、例え既にこういった形で介入されたとしても、それは状況がどんどん改善されていくという事を決して意味するものではなかった。日本での収容所連は日本陸軍省の戦争俘虜管理部の監督下にあり、時々視察が行われ、同時に収容所連について準備された報告書を受け取った。いかに収容所連の状況が酷く、それが最高機関まで浸透しても、改善されるだろうことがその時約束される以外は何も起こらなかった。「結局自問してしまう」、と書いているのはファン ヴィッツン、「収容所連を司る真の管理があつたのか、或いはそれは単に政策の指示であつたのか、それ以降収容所連は放置されてしまった。」<sup>36</sup>

日本での収容所連は様々な機関、中でもスウェーデンとスイスの保護国の代表者達に

<sup>31</sup> ファン ヴィッツン、157.

<sup>32</sup> ハーメル、186.

<sup>33</sup> ヒルフマン、77.

<sup>34</sup> 同所、82.

<sup>35</sup> 同所、85. この‘事件’は1944年7月に起こった。

<sup>36</sup> ファン ヴィッツン、154-155.

よる訪問を受けた。<sup>37</sup> 又国際赤十字社の代表者と東京のヴァチカン教皇代理人もいくつかの収容所連を訪問した。この視察を受ける収容所は日本の収容所指揮により前もってあらゆる手段がこうじられた：食堂が設けられたり、全ての品物が供給された（戦争捕虜達はここからは何も買うことが出来なかった）、収容所は磨かれ人々は出来得る限り多数仕事に出された。訪問者達は1人の捕虜とも1対1で話す機会を得る事が出来なかった。<sup>38</sup>

福岡第9は1944年4月国際赤十字社の代表、スイス人のマックス・ペスタロツィ、の訪問を受けた。この機会に際して収容所は花で飾られ、そしてこれはこの訪問が終わった後再び取り去られた。<sup>39</sup> 常に日本人大佐<sup>40</sup> の同席のもとではあったが、収容所年長者ヒルフマンはこの代表者と率直に話すことが許可された。

## 拘留所の生活

L. ドゥ ヨングによると日本における収容所連の状況はビルマーそしてパカンバルでの鉄道やフローレスとモルッケンで働かされた時のものより悪くはなかった。空腹の苦しみが少なめで（相対的に見て）病人の看護がもっと可能であった。その上相当数の収容所で人は戦争経過をある程度辿る事が出来た：‘大事件’に関する情報は大半の収容所連に浸透した。それは日本人監視人達、時として又日本市民達<sup>41</sup> との接触による結果だった。

日本における戦争捕虜達の状況は、主に辛い、危険な仕事をしなければならなかった為にやはり厳しかった。日本で働かされた色々な国籍の約3万7千名に及ぶ戦争捕虜達の内、炭鉱で働かねばならなかった7千400人<sup>42</sup> が恐らくは最悪の厳しさに悩んでいた。鉱山では労働時間が頻繁にとっても長かった：日に10時間から12時間。休日が少なく、通常は月に3日（10日に1回程度）、いくつかの例では2日のみ。休日であったとしても、戦争捕虜達は更に防空練習、兵舎清掃等、あらゆる他の細々とした仕事をさせられた。

鉱山では交替制で作業された。福岡第17では3交替組があった：1組は朝5時に鉱山入りし午後5時に戻った；2組は朝11時半に出発し真夜中近くに帰宅した；第3組は夜8時に出かけ翌朝8時まで鉱山に居た。<sup>43</sup> 10日目（大抵休日）毎にチームは職務を交替した。一

---

<sup>37</sup> 保護国とは交戦国家の利権を請け負って代表し、その敵の陣地にいる国民を保護すべく中立にいる。1929年のジュネーブ協定によれば、保護国の代表者達は全ての捕虜収容所連を訪問して各捕虜と1対1で話しをしても良い。スウェーデン政府はオランダ利権の保護国として面倒を見たが、日本により占領された中国でもスイスがこの仕事を担当した。（D.ファン ヴェルデン、*De Japanse interneringskampen voor burgers gedurende de Tweede Wereldoorlog.*（第4回目出版、フラネケル 1985）、130-131.）

<sup>38</sup> ドゥ ヨング 11b 第2部半編、594.

<sup>39</sup> ヘレの日記、93.

<sup>40</sup> ヒルフマン、74-75.

<sup>41</sup> ドゥ ヨング 11b 第2部半編、744.

<sup>42</sup> この数は1945年3月に発する。ドゥ ヨング 11b 第2部半編、744.

<sup>43</sup> ハーメル、187.



方から他方への職務の変わり目は時として極度に不運であった。福岡第15でこの職務交替による不運者は、例えば夜10時から朝8時までの夜中の仕事から入浴して寝る2～3時間後、更に続いて午後2時から再び22時まで作業しなければならなかった。<sup>44</sup> 鉱山での仕事は石炭を採掘すること、石炭や瓦礫を手押し車に満積すること、手押し車をレールに沿って押すこと、入り口を補強する材料を担ぐこと、レールを敷いたり、特別に熟練或いは長期の訓練を要求しないあらゆる他の仕事類から成り立っていた。抗外の仕事はなにかんづく瓦礫の片付け、荷下ろしー積み、石屑から鉱滓を探し出すことであった。

いくつかの鉱山連はそんなに深くなかったが、入り口の縦抗がやはり傾斜して敷設されていたり、又ある所は石炭層が表面下から遠く離れていて、そこへ行くのにエレベーターが無い為段毎に梯子で降りて行かなければならなかったりした。1つの鉱山では水平坑道が余りに深いところにあつたので、戦争捕虜達は彼等の仕事日の開始前に2時間かかって下降しなければならず、続いて仕事の後は2時間半かかって再び上に登った。

鉱山労働は定義から言えば辛い仕事であり、その上日本における大半の石炭坑は特別原始的であった。日本では燃料の欠乏が余りにも増大したので、既に長期間放置されていた鉱山が再び使用され始めた。この作業は汚く、埃っぽくそして厳しく、そして余りにも頻繁に極度に不愉快な環境の下で実施されなければならなかった。特にかなり安全策に欠けていたことが鉱山の生活で神経を擦り減らす要件となった。大なり小なりの事故は日常茶飯事であった。多くの戦争捕虜達はそれ故落下する石に押し潰され、或いは外部から閉ざされることを当然恐れた。

この生きて帰れないという恐怖が余りに大きかった為、未知数の捕虜達が抗外の仕事へ逃れられることを願い自ら負傷することに決めた。「逞しいオーストラリア人達は鉱山に入りたくない一心で自らの足指を岩塊で押しつぶした」、とベイツ。<sup>45</sup> ハーメル牧師は彼の本に、大牟田収容所(福岡第17)の何人かのアメリカ人捕虜達は故意に鉱山の荷車で自らの足を切断しそして「多くは腕を折るとか指を打撲する‘運’にありつくことを待ち望んだ、そうすれば彼等は数週間だけでも鉱山から出て行けるからだ」、と述べている。<sup>46</sup> ガヴァン・ドウスは更にもっと大牟田収容所の度肝を抜く例を与えている：

鉱山に潜っている者は頭に付けているランプの蓄電池酸、もしくは便所の石灰を使って彼等の作業剥け傷につけたり、或いは亜鉛精錬工から化学性アルカリを持って来たオランダ人の所へ行ってそれを腫れ物に擦り付ける。溶接工の火吹きランプを見入って目に閃光火傷を受ける。鉱山で働いているある者は起爆薬で手を爆発させた。友人達の為に、喜んで腕や足を折る連中が居た。[...]手持ちさく岩機かドリルでそれを申し出るプロが居た。大牟田は2人プロの骨圧搾人が居たー1

<sup>44</sup> ファン ウェスト ドウ ヴェールの日記、71。

<sup>45</sup> N. ベイツ、De verre oorlog. Lot en levensloop van krijgsgevangenen onder de Japanner. (メッペル 1981)、259。

<sup>46</sup> ハーメル、188。

人は鉱山から客を運ばなくても良いなら少々安めで引き受け、夜の呼び出しはもっと値が張った。人はそれをして貰うのに貯蓄した。<sup>47</sup>

ドウスによると、ほぼ全自己傷害者と骨折者はアメリカ人であって、ハーメル牧師も又、1人のオランダ人とて、そういった必死の行為に誘惑された者は居なかった、と敢えて断言した、「とは言え彼等にとっての恐怖心もアメリカ人のものより弱いわけではなかった。」とも。<sup>48</sup>

戦争捕虜達の仕事は最後まで厳しく、汚くそして不愉快なままであったが、1945年の春にはあちこち日本人現場監督達の間で士気がなくなり始めた：何人かの現場監督や監視人達は捕虜達の仕事の成就に益々関心を無くしていった事や汚職が周囲を取り巻いた。戦争の疲労が明らかに出てきていた。<sup>49</sup>

鉱山の仕事外に各収容所では雑用があった。どこの収容所でも、最も人気のあった雑用は炊事班であった；一番人気のなかった仕事は仮設便所の樽を空にすることであった。1944年2月福岡第9の捕虜達は土を耕し食物を植えなければならなかった。ヒルフマンは記した：「耕作は収容所内の小さな空き地で行った。土は黒く、炭塵の様だった。とは言えそれでも何かは育ってくれたようだ、我々の場合はキャベツ（要するに炭の上にキャベツ！）。キャベツを高価な宝として大切にした日本人監視人達の考え方は奇妙だった。」<sup>50</sup> 1944年4月から日々10名から30名の戦争捕虜達が、福岡第9から汽車で30分の所にある農家へ行った。そこには牛がいて酪農が行われていた。捕虜達にとってそこでの仕事は鉱山の仕事より非常に楽で楽しかった。彼等がそこで接触した日本市民達は無愛想ではなく、多くの捕虜達はそこで牛乳を飲ませてもらった。<sup>51</sup> 福岡第17（大牟田）でも鉱山ではもはや働けなかった虚弱者と年長者達は畑の敷設や世話を手伝わされた。<sup>52</sup>

特にこの‘外部労働’中、日本国民は戦争捕虜達に対して全く敵対視はしなかった様だ。<sup>53</sup> 日本男性軍は荒っぽく、無愛想であったが、女性達がそれに反してとても親切で世話好きであるとハーメルは思った：「歩哨が注意していない時、日本女性は例外無く雑草を這い抜けて自分達の多少の果物を捕虜達にこっそり渡した。」<sup>54</sup> 福岡第9では何人かの捕虜達が鉱山の深い所で日本人労働者と接触した。多少日本語が分かり鉱山で働いていた年配の日本女性との接触を取り付けたオランダ人軍曹のことについて、ヒルフマンは述べている。時々彼女は食物を持参し、日本の新聞に包んできた。彼の仕事が終わった後、この軍曹はこの包みを収容所へこっそ

---

<sup>47</sup> ガヴァン・ダウス、*Prisoners of the Japanese. POW's of World War II in the Pacific.* (ニューヨーク 1994), 313. (オランダ語訳：Gevangenen van de Japanners. Krijgsgevangenen in de Pacific gedurende de Tweede Wereldoorlog. (バーン 1996)、345.)

<sup>48</sup> ハーメル、188.

<sup>49</sup> ファン ヴィッツン、217.

<sup>50</sup> ヒルフマン、67.

<sup>51</sup> 同所、73.

<sup>52</sup> ハーメル、191.

<sup>53</sup> ヒルフマン、142. ファン ワーテルフォードが記述している：「いくつかの場所では日本国民は戦争捕虜達に親切だったが、他の地区—特にアメリカの飛行機に爆撃し続けられた場所—はかなり嫌悪された。」(ワーテルフォード、187) .

<sup>54</sup> ハーメル、191.

り持ち込んだ。そこには日本語の読める中尉も居たので、捕虜達はこの方法で戦争経過について唯一の情報を集めることが出来た。<sup>55</sup>

収容所連における将校達は特別扱いの地位を持っていた。彼等は鉱山の仕事をする必要は無く、その上更にあらゆる他の特典を楽しんでいた。将校達が常にこれを自ら要求したというわけではなかった：福岡第9の日本人収容所長は鉱山労働者達が彼等の仕事から帰ってくる前に、将校達がまず入浴するべきであると自発的に決めていた。兵士達の風呂の水はすぐに汚くなり、油っぽくそして黒ずむが、将校達は故に毎日綺麗な風呂に入った。<sup>56</sup> 又将校達が彼等の部下達よりも良い扱いを受けていたことはごく平素の事であった—そしてこれは‘規定通りの’軍隊生活における推移続行以外の何物でもなかった—、とはいうもののこの種の事項は、当然ながら特に一般市民出身の多くの部下から立腹を買った。

世間は部下の将校達に対する不平を嫉妬と片付けることが出来るが、軍医の日記覚書に、収容所年長者ヒルフマン（福岡第9）も等級間での扱いの違いは確かな気詰まりと話している。「又彼等が病気に、ましてや重病になったことはまず無い」、と彼は将校仲間達の事を書いた、「又彼等はその他の者達ほどやせ細ってはいない。」<sup>57</sup> 兵士達が僅かしか使用しなかった小さな図書館があった；将校達はこれを大いに活用した。‘納得’、とヒルフマンは述べている、「彼等は鉱山へ行く必要はなかったし、病人は殆ど居なかったから。」<sup>58</sup>

頻繁に点呼が行われた：全収容所で朝と晩、鉱山へ向かう労働グループの出発前と彼等の帰還時。特に冬場、日本兵達が捕虜達を身の切られるような寒さの中に待たせて置いた時は、この点呼が実に苦痛の種となりかねた。「我等の将校達にとってこれは何も辛くなかった」、と書いているヒルフマン、「しかしながら更に1日中鉱山で働かされた兵隊達にとっては、これはほぼ耐えがたかった。」<sup>59</sup>

## 食糧と保健

日々の配給量は2100から2500カロリーの間を変動した。<sup>60</sup> これは仕事が無い、或いは軽い仕事だけしかする必要のない人々にとっては、事によれば丁度足りたが、鉱山労働者達には勿論充分ではなかった。<sup>61</sup> 働いている戦争捕虜達は日本市民達より確かに多い割り当てが貰

---

<sup>55</sup> ヒルフマン、108.

<sup>56</sup> ヒルフマン、58 - 59.

<sup>57</sup> 同所、77.

<sup>58</sup> 同所、120.

<sup>59</sup> 同所、52.

<sup>60</sup> ファン ヴィッツン、157.

<sup>61</sup> J.F. ドゥ ワイン、Deficiëntie-verschijnselen bij krijgsgevangenen. Waargenomen bij langdurige ondervoeding in krijgsgevangenkampen te Batavia en Fukuoka ( Japan ) gedurende de Japanse bezetting van Nederlandsch Oost-Indië ( 1942 - 1945 ). (ユートレヒト国立大学博士論文 1947)、40. デ ワインによれば重労働を強いられていた日本での戦争捕虜達は夏最低2800カロリー、冬は3000カロリーであった。(ドゥ ワイン、14) .

えた（1945年において日本市民達への公式配給は日に1680カロリーであった）が、<sup>62</sup> ここに加記されるべき事として日本人はヨーロッパ人より平均小さく、戦争捕虜達は彼等の配給で労働に甚だしいエネルギーを供給しなければならなかったのだ。

福岡第9では朝パン（小麦粉とイースト菌のみだが）と小鉢一杯の野菜スープ、昼は更に小鉢一杯の飯と大根、そして夜は又2杯目の飯と野菜スープが貰えた。肉や魚を貰うのは稀であった。<sup>63</sup> 各人が同量の食糧を貰ったわけではなかった：‘兵舎病’（鉱山へ行くには体調が悪いが、入院させられるほど重病ではない者達）は労働者達より相当少なく、重病人達は皆の中で最少量を貰った。この酷い食糧事情が長く続くほど、益々体力の蓄えが落ち始めた。戦争捕虜達は栄養不良によって益々全面的な衰弱状態に近づいていった。

福岡第17ではオランダ人医師ヘリット・プラスが栄養不良の事例を欠かさず付けていた。栄養欠乏症は既にいち早く頭角を顕わした。最初の年（1943年）には収容所の連中の25パーセントが蛋白質の欠乏による栄養浮腫に悩んでいた。2年目（1944年）には50パーセントとなり、1945年初めからは殆ど各人が、ある程度から重症まで様々ながらこの症状を示した。<sup>64</sup> 他の収容所連での健康状態も多分比較し得ると仮定する。福岡第15では1944年2月／3月、490名の全収容所住民中105名の兵舎病患者が居て病棟には47名入院していた。<sup>65</sup>

赤十字小包という形態で配給の少量付加は可能であった。日本の手中にある全戦争捕虜達から日本へ船で輸送された者達は、恐らく赤十字配給の品物の一番多い分量を受け取った。<sup>66</sup> 1944年と1945年の戦争捕虜ファン ウェスト ドゥ ヴェールの日記に赤十字社の発給が何度か記されている。とは言えこれらの供給は焼け石に水で、そのことでドゥ ヴェールはそんなに感激していなかった。戦後随分経って、後になってから、彼が自分のメモを読み直した時、彼は書いている：「私の過去35年間における記憶では、我々が赤十字-供給などを受け取ったことは殆ど無かったし、今これを私のメモにタイプで打ち直していて、それがそんなに多かったことに驚いている」。<sup>67</sup>

食糧補給がこれらの小包の供給によって確かにかなり補充された収容所連はあったが、大半の場合は日本人監視人達が赤十字社発送を彼等自身欠乏している物の埋め合わせと見なし

<sup>62</sup> ファン ヴィッツン、157と216。

<sup>63</sup> ヒルフマン、52とNIOD IC 081.038.13。

<sup>64</sup> ダウス（オランダ出版）、344-345。

<sup>65</sup> ファン ウェスト ドゥ ヴェールの日記、92。

<sup>66</sup> 日本により占領された地帯の連合軍戦争捕虜達と民間強制収容者達へは合計して4回赤十字社発送がある。2回の発送はロレンツ・マルクス経由で行われた：1942年7月アメリカ、カナダそして南アフリカの赤十字から2万個の食料品小包と他の援助品がシンガポールと日本へ船で送られ、1942年9月イギリス、南アフリカそしてオーストラリアの赤十字から約14万個の小包が蘭領東インド、香港、マニラそして日本へ送られた。3度目の発送（特にアメリカとカナダの赤十字から14万個の食料品小包）は1943年10月ゴアから出発し、マニラと日本へ届けられた。アメリカ、イギリスそしてオランダの赤十字によって融資された4度目と最後の発送は、ソ連の極東にあるナホトカ経由で進んだ。1944年11月200トンの援助品（20万個と見積もる食料品小包みを含む）のこの発送は次の様に分配された：150トンが朝鮮、800トンが日本、50トン余りが中国、そして残りがタイ、シンガポールそしてジャワ。（ドゥ ヨング 11b、第2部半編、589-590 そして ファン ヴェルデン、171, 174, 176.）

<sup>67</sup> ファン ウェスト ドゥ ヴェールの日記、103（脚注）。

ていた。<sup>68</sup> しかしながら1944-45年の年越しでは多くの収容所連で赤十字小包が多かれ少なかれ分配された。それから即新しい小包が届いた。少なくとも、これらの新しい在庫のある分量が戦争捕虜達に届いた事が色々な収容所連から報告されている。この時期赤十字社の手紙も中に届いた。それらは収容所連で配達されたが、多くの収容所連ではそれらが収容所事務所に置かれたままで、戦後やっと宛先人の下に、或いは殆どが届かなかった。<sup>69</sup>

日本の冬は寒かった（寒い）。かなり氷結する長い期間は珍しくなく、大半の冬戦争捕虜達は辛い寒さに苦しんだ。衣服や履物は一般的に不十分な数が供給された。大半の戦争捕虜達は熱帯向きの服で到着していた；多くが肺炎で死亡した。不運にも1944-45年の冬は40年以來の寒さであった。<sup>70</sup> 戦争捕虜達にとって収容所には不十分な暖房、不十分な衣服と毛布しか無かった。‘凍死’と称する現象が起こった：まず最初体温が35度以下まで下がり、脈拍が1分間に60回以下に落ちた。これらの連中は働く気力が無くなり、夜中には自力で暖たまる事が出来ず、必要な体温の欠乏と、長期に渡る栄養不良により死亡した。<sup>71</sup>

福岡第1収容所での戦争最後の年についてはかなり多くの資料が揃っている。<sup>72</sup> 1944年の夏には収容所住人達は未だ主に献立にある消化の悪い豆による下痢に悩んでいた。不十分な食糧によって（兵隊達は1944年の夏日に約2100カロリー、秋には2260カロリー貰った、しかし最低約2800から3000は必要であったところだが）翌冬には多くの犠牲者が出た。

	死者	入院患者	兵舎病人
1944年10月-12月	11(2%)	9%(600名から)	50%(600名から)
1944年12月-1945年1月	16(2,7%)	60(10%)	
1945年1月-2月	11(2,3%)	98(20%)	
1945年2月	2,3%	20%	43%
1945年3月	1,3%	15%	23%
1945年4月	1,3%	12%	20%
1945年5月	0,4%	8%	
1945年6月	0,2%	10%	

<sup>68</sup> ファン ヴィッツン、157-158. ファン ワーテルフォードが記している：‘もっと多くの赤十字小包が他の占領地より日本へ配分されたが、多くの監視人達が、戦争捕虜に属する全ては大半が日本政府の所有物であると言いながら小包を冷酷に盗み取った。’（ワーテルフォード、187）

<sup>69</sup> ファン ヴィッツン、219.

<sup>70</sup> ダウス、301-302. 福岡第9のある戦争捕虜は1945年1月と2月「鉛筆をしっかりと持つには寒すぎる」と思った。（ヘレの日記、14a）.

<sup>71</sup> ファン ヴィッツン、216.

<sup>72</sup> J.F. デ ワイン、26-28.

1945年8月	0,7%		
---------	------	--	--

1944年秋には兵舎病患者数が上昇した為、福岡第1では冬月配給が2400カロリーまで多少上げられた。1945年2月病人達は主に栄養浮腫、霜焼け、凍傷や肺炎に苦しんだ。冬の後には状況が再び多少良くなった。丈夫になる為1945年3月と4月捕虜達は平均日に2880カロリー貰ったが、夏には再び配給が2540カロリーに下げられた。食糧と健康状態が他の収容所によって全く形状が違っているとは考えられない。

福岡収容所で死亡した戦争捕虜達は火葬されて、壺或いは小箱に詰められ、それは収容所へ戻された。埋葬は慣例の儀式に則って行われた。出席した全戦争捕虜達は長い列に整列しそして敬礼させられた。普通に門の傍に立っていた日本兵達も整列し敬礼した。<sup>73</sup>

福岡第17では時として三井財団が花を準備した。又その収容所内では、死亡した戦争捕虜達の壺を納骨出来るコンクリート製地下納骨所の敷設を日本軍が先導した。この地下納骨所は食堂に向かう道に沿って置かれ、其処を通る各人が敬礼する様日本兵達がそこに立っていた。<sup>74</sup>

日本における8千名のオランダ人戦争捕虜達から832名(10,4%)が屈服した。<sup>75</sup> 日本での戦争捕虜達の死亡数は一般のオランダ人戦争捕虜達より多くはなかった：日本軍の手中にあった合計4万2千233名のオランダ人戦争捕虜から8千200名の捕虜が死亡した(それは19,4%で5人に1人となる)。この違いは日本での戦争捕虜達が(相対的に見て)ビルマーパカンバル鉄道やフローレスとモルックンの戦争捕虜達よりも空腹に餓える事が少なく、病人達への看護にもっと可能性があったという事実に恐らく裏付けられる。福岡収容所連における死亡数の比率が日本における他の戦争捕虜収容所連の死亡数と比べていかなるものかは未知である。福岡第15収容所(折尾)では1943年7月から1944年12月まで19名のオランダ人が死亡した。<sup>76</sup> 福岡第1収容所では1944-45年の冬に600名の収容所住人達から少なくとも38名が死亡した。<sup>77</sup> 福岡第9収容所では800名の収容所住人中46名の戦争捕虜達(40名のオランダ人と6名のイギリス人)が死亡した：それは5,75%の死亡数である。この収容所での最後の死者は1945年8月23日に亡くなったイギリス人で、日本の降伏が公式に発表された翌日であった。<sup>78</sup> 火葬されたオランダ人死亡者達の灰は

<sup>73</sup> ヒルフマン、64とハーメル、208.

<sup>74</sup> ハーメル、208-209.

<sup>75</sup> L. ドゥ ヨングは日本での死亡数に728という数字を挙げている(ドゥ ヨング 11b 第2部半編、742)。しかしながら前戦争捕虜と遺族(EKNJ)財団の前会長である、D.ウインクレル(父)氏は832名の死者のリストに関して整理している。日本における戦争捕虜の死亡数は一般にオランダ人戦争捕虜達の内ではそんなに大きくはない：日本軍の手中にあった合計42,233名のオランダ人戦争捕虜達から8200名(それは19,4%で、5人に1人である)が死亡した。日本での戦争捕虜達は(相対的に見て)ビルマーパカンバル鉄道やフローレスそしてモルックンの戦争捕虜達より空腹に餓える事が少なく、病人達の看護はもっと可能性があった。

<sup>76</sup> オーステルハウスの日記、236(付録2)

<sup>77</sup> ドゥ ワイン、27(上記の表参照)。

<sup>78</sup> ヒルフマン、141.

戦後オランダ或いは蘭領東インドに運ばれた。

## 終戦

1945年8月15日既に大半の収容所連で戦争が終結したことが知られていた。この日はもはや仕事は命令されず、いくつかの収容所では日本軍がもっと食事を提供した。何人かの捕虜達は日本の天皇が彼の国民にラジオ演説して降伏を伝えたことすら知っていた。

1945年8月22日（大牟田福岡第17では21日目）福岡収容所連では日本司令部の名の下に公式に戦争終結が報告された。9月2日ラジオで戦争捕虜達が収容所連の監視を受け継ぎ、彼等自身で収容所連を管理していくべき命令が来た。この日又3万7千名の戦争捕虜達のマニラへ向けての輸送が始まった。この作業は10月初め完全に完結した。

## 日記著者達

ヘレ

C.F.（フェリー／フェルディ）ヘレは1914年5月7日、推定ではフロニンゲン出身の両親から蘭領東インドで生まれる。彼は高等市民学校卒業後デイヴェンター植民地農学校の教育を受けた。彼は1940年9月3日、この年の5月東インドに来たヒルダ・ホルトロップ

（1918年10月13日生まれ）とバタヴィアで結婚した。彼等は息子、フォッケを儲けた。ヘレの両親はスラバヤに住み、彼自身は彼の家族と共に日本の侵略中恐らくバタヴィア或いはスカブミに住んでいたと思われる。彼は東インドには生まれものの、彼自身‘全く欧亜混血人ではない’と感じていた：

オランダ人の両親から生まれた者達であっても、ここで生まれればそこへ属するとしばしば考えられた。いくつかの小群ではここで生まれた者を基準にして考え、他では蘭印混血人は血筋の問題であるとされた。僕は自分自身全く蘭印混血人だと感じていないので、自ら血筋の問題だと考慮した事に満足している。<sup>79</sup>

ヘレはある農園に勤めていたが、太平洋で戦争が勃発した後、恐らく1941年12月彼は既に動員された。1942年3月初め彼の部隊はバタヴィアからバンドゥンへ撤退した。数日後蘭印

---

<sup>79</sup> ヘレの日記、35.

軍は降伏した：「戦争が終わったことを僕は正直言って残念だとは思わなかった、というのは負け戦に尚未だ戦う事には気が進まなかったから。」彼の部隊兵士達から更にゲリラ戦と一緒にする気のある志願者が求められた。42人からたった6人だけが名乗り出た。しかしながら1時間後にはこれら6人はしょげて戻って来た：ゲリラが組織化されていないことが分かり彼等は意気消沈してしまったのだ。ヘレは彼の情熱の欠乏に対して次の様に弁解した：

僕は良い兵士であることを約束し、自分の義務だと思ったことは全てするつもりだった。しかし僕等が体験していかなければならないこの絶望的な集団と意気消沈した混乱の中で、先を戦う事に確信を持つ、というのはやはり無理を強いることだった。誰も信用しなかった。

ヘレは戦争捕虜としてバンドウンの第15大隊兵舎にやって来た。彼の日記は彼の戦争捕虜生活の初めから1ヵ月後、1942年4月8日に開始している。彼はそれを自分の妻‘ヒル’に宛てて書いた：「今日僕は既に体験している出来事について日記ごときを始める。出来事はそれ自体余りにも小さいのですぐに忘れてしまう。僕が君、子供、に手紙を書くとしても、この生活が余りにも単調に思えるので、何を書いてよいか分からない。“この鉄条網の中では何も起こらない”といった風かな。こんな日はいずれにせよ今充分時間があるので、その日一瞬頭を掠める思考をこんな風にして君の為に少し書いておく事にするよ、ダーリン。」

既に1942年4月10日ヘレは戦争捕虜の身が彼にとってとても厳しいものであることを示唆していた：「とにかく僕は余りにも空虚さを感じる、その精神的な空しさが僕の思考をもはや集中させない、何も思い巡らすことが出来ない。ただ座り、周りをウロウロするだけだ。いかなる将来があるのやら、何も分からない、ただカワット[鉄条網]の中に居ること以外は、しかしどれほど長く居るのは分からない、それは正に悲惨だ。もはや目的が無く、‘静かに成り行きを見守る’というのは気をつけなければ半分気違いにさせる。」4月22日、3人が逃亡して間もなくだったが、その戦争捕虜達は銃剣を持った日本軍により再び捕らえられ虐殺された、彼は書いた：「僕は[この]戦争、が早く終わることを切に願う。僕には合わない。」しかしヘレにとっては最初、拘置の肯定的な他の面もあった：彼は再び人々に囲まれて居た。農園では彼は一日中1人だったので、他の人達と話すことがとても少なかった。しかし収容所ではそれに当てはまらなかった：

僕は愛想良くなり始めた。[...] 周囲に居る多くの人々とは仲間として付き合っ  
て行かなければならないからね。僕は考えるという事を又しても忘れさせられて  
しまったから、これで又自分の思考をもう一度良く整理出来たと思う。周囲に居  
る人々はやはり育成と精神的健康にとって無くてはならないものの様だ。(19  
42年5月16日)



この社交的な効力は時が進むにつれ恐らく徐々に少なくなっていったように思えるのは、1942年8月26日彼は書いた：「共同作業、仲間意識等、ここオランダ人男性群の元では探す必要は無いね、なぜならそれは存在しないからだよ。利己主義がここでは‘唯一蔓延っている’。」そして2年以上たった後の日本で、彼は愛想良く話すことを再び全く止めてしまった：「僕を見て君が驚かないことを願うよ、なぜって君の元へは衰弱した骸骨が帰還するからさ、多分未だほんの少々息はしているだろうけど相当もの静かで口数の少ないのがね」（1944年10月15日）。

既に早くもヘレは戦後蘭領東インドを離れる事をあれこれ考えていた。蘭領東インドで日本降伏後に‘混乱’が起こるだろうということを彼は予測していた：

世界市場に影響を及ぼす事に誰も未だ確信が持てない間は、前もって全てを再開し再建することは無意味だ。[...]何が最善か僕には分からないが、もし僕達がここで余り幸せでなければ、南アメリカへ引っ越すのが一番妥当に思えるのだが、さもなければ蘭領東インドが社会的そして経済的に相当変革するべきだ。僕等がここ蘭領東インドの農園で余りにもあくせく働いてきた事に、僕はうんざりなんだ。（1942年6月18日）

顕著なのはマレー語に対する彼の嫌悪である。1943年3月26日一正にちょうどヒルダから数枚の葉書が届いた一彼は書いた：「僕達がお互いマレー語、多分日本語と同じだけ多く忌み嫌っている言語、で書かなければならないことは本当に残念だ。」

1942年6月21日ヘレはチラチャップにある収容所へ向かって出発した。そこは規律がバンドゥンよりかなり厳しかった：「我々はその言葉通り今実際強制収容所に居る。それはバンドゥンの[第15大隊-キャンプ]更に療養所付といった風だ。（1942年6月22日）」1942年8月から彼は収容所看護師として働いた。1943年1月初めチラチャップにおけるほぼ半数の戦争捕虜達が未知の目的地へ連れ去られた。後に残った者は40歳以上の兵隊達と農場主達（ヘレを含む）であった。2月初めこれらのグループはバンドゥンの第15大隊へ連れ戻され、そこに彼等は以前と同じく実に8ヶ月間居た。

最高司令部が世界に未だ楽観的な情報を送っていたにもかかわらず、蘭印軍の早い倒壊には全く落胆してしまった多数に登る他の兵士達の様に、ヘレも収容所のオランダ人将校連を高く評価しなかった。彼は‘彼等の相当思い上がったやり方’を嫌った。ヘレによればバンドゥンの将校連は蘭印混血人達に命令する事に慣れてしまっていたので、彼等はこれらの姿勢を採った。

将校達は実に素直な蘭印混血人達を完全に管理しきっていた。純然たる人種の差がかなり優位を占めている。彼等はチラチャップから来た多数のオランダ人達にこれを平静に貫き通し、この戦前の姿勢が全く間違いであることを知るには余り

に愚か過ぎたようだ。オランダ人はゴミではないぞ。いい加減にしてくれ。(1943年4月30日)。

恐らくこの爆発はヘレがこの瞬間相当打ちひしがれた気分であったという事実から生じたものであったようだ。翌日、1943年5月1日、<sup>80</sup> 彼は自分の日記に書いた：

ダーリン、ああ、可愛いダーリン、僕は感傷的になっている、忌々しい、余りに辛いから僕は君の写真を見ないように投げ捨てる。なんと酷い混乱、そしてそれはロッカーズが断言したように多分1945年まで未だ2年は続く。何とも絶望的な混乱。彼等が互いに壊し合おうと僕には関係ない、僕が君の傍にさえ居られればね。彼等が僕達をタイ、或いは神のみが知る終点まで引きずって行くのを僕達はただ待っている。これは実に何と悲惨な事だ。僕達は未だ生きてはいるものの、これでは生きる何の価値があるというのだろうか。自問自答してしまう、後になれば、後になれば... 又僕等は十分取り戻せる、しかしあー神様、それは一体いつになったら、時として先のほんの小さな望みまでも消え失せてしまう。その汚らわしく、重苦しい、絶望的な気分。

1943年7月後半ヘレはチマヒの収容所へ連れて来られた。8月の輸送はバタヴィア第10大隊キャンプへと続き、そこ以降9月最後の週には日本への旅(シンガポール経由)が始まった。1943年9月26日ヘレのグループはバタヴィアを離れ、30日にはシンガポールに到着した。5週間後の11月6日、彼等(1200人)は再びシンガポールを出発し、サイゴン、フォルモサそして上海を経由して日本へ輸送された。途中フォルモサの港を離れて2日後、護送船団がアメリカの飛行機によって襲撃された。1隻の大きな貨物船がそれに命中して沈没し始めた。船の乗客達は他の船舶連、中でもヘレの船に移されることになった。場所を空けるのに戦争捕虜達は更に重なって押し込まれた。

1943年12月の第1週に捕虜達は門司に到着した。ヘレは非常に寒く感じた。1200人はグループに分けられた。ヘレが配属させられたグループ400名は汽車に乗せられた。「日本人野郎の汽車は僕達蘭印の物より綺麗で素晴らしいスプリングだ」、とヘレは思った(1943年12月11日)。3時間の汽車の旅後彼等は鉱山地帯にある小さな村の駅(宮田)に着いた。そこから先は歩行、長い道程、様々な工場の様な建物(後でそれは縦抗であることが分かった)の傍を通り1時間の歩行後彼等は収容所に到着した：福岡第9。<sup>81</sup> ヘレはその周辺を「山と松の木に囲まれて素晴らしい。僕達の収容所から川の連なり、又堤防等も見下ろせ、まるでジャワの様。」だと思った。更に彼の目を引いたのは、大半の日本男性達がヨーロッパの服を着ていた(着物は殆ど見ない)事と村が余りにも貧しかった事だった(「この田舎全体が貧困で

<sup>80</sup> ヘレ自身はこの「1943年4月31(?)日」に書いたメモを不当だと思った。

<sup>81</sup> ヘレ自身が述べている：福岡第12! (彼の日記の第2部、後部の葉書参照)

あった様だ」(1943年12月13日と20日)。

400人の到着したばかりの兵士達から即100人が既に療養所へ入院させられている。12月12日に最初の戦争捕虜がこの新しい収容所で死亡し、それから未だ1週間も経たずしてヘレ自身下痢で病院に寝ていた。それは重症ではなかったが、12月20日彼は初めて鉦山へ行き、差し当たりは抗外のみだったが、数日後には既に坑内で働いた。クリスマスに捕虜達は赤十字社から10個の小包を受け取った。「日本人兵隊野郎達はそれに干渉しない様にするのにはこの上なく手こずった。奴等は皆泥棒だ」、とヘレは述べていた。最初彼は鉦山の仕事をきついとは思わなかったが、彼等が貰う僅かな配給で、それと又日本側がもっと生産を高めたがった為、それを持ち堪えるのはやはり非常に困難であった。

1944年3月初めヘレは再び入院した、今度は気管支炎で。治癒するのに数ヶ月かかり、それは彼がその間鉦山へ行く必要が無いという利点となった。多少回復した時、彼は収容所の畑で軽い仕事を始めた。それから後彼は鉦山上方(坑外)の仕事をさせられ、6月初め坑内の鉦山労働には充分回復したと見なされた。彼はこれを15日間のみ持ち堪えた：足に出来た湿疹の為、再び彼は暫く抗外に許可された。そこで彼は朝鮮人と商売を打ち出した：彼はその男から1箱につき60セントで日本のタバコを買い、それらを再び収容所内にて1ギルダーで売った。彼は現場監督達に英語のレッスンさえもし、その返しに日本語のレッスンを受けた。しかしこれはそんなに長く続かなかった：7月半ば彼は再び鉦山下方へ行かなければならなかった。

1日の坑内作業は彼をして再び倒れさせてしまうには充分であった。7月終わり彼は尻に出来たねぶとの為‘兵舎病’になった。これはオランダ人医師M.M.ヒルフマンが日本人看護師に許可を得ることなく、彼等を兵舎病と表明した為、彼と他28名に1夜の独房入りを引き起こした。翌日このグループは再び鉦山へ行かなければならなかったが、それまでにヘレは日本人看護師から数日間の兵舎病の許可を得た：「こいつ等の思考過程にはもはや全く着いて行けない」(1944年8月1日)。戻ったヘレは鉦山では又しても長く持続しなかった。彼は新たに兵舎病になった；今回は指の炎症の為。こういったパターンで彼の日本での残る期間は過ぎていった。坑夫であるより兵舎病の方が多かったとは言え、彼も徐々に鉦山での重労働に慣れ始めた：「鉦山労働の良い所は時間がすぐ過ぎるということだ。こんな風に又1ヶ月が過ぎた。」(1944年9月3日)。

1945年1月と2月ヘレは日記を書かなかった。彼はこのことに2つの理由をあげていた：まずは「鉛筆を握り締めるには寒過ぎた」事、2つ目は彼が「余りにも移動させられ、鈍感になり、退化しそしてうんざりしてしまった」(1945年3月1日)事。厳しい冬は彼を入院させることになった。1月彼は酷い下痢をし、それ以降ねぶとに悩んだ。彼は余りに衰弱してしまったので、鉦山での仕事にはもはや着いて行けなくなった。彼は毎日日本人現場監督に殴られ、「そして鉦山に居る自分の仲間達でさえも馬鹿にし始めた。‘ろくでなし’、等、と僕は呼ばれた。[...]それはここ収容所の典型的な現象なんだよ、もはや一緒にやって行けない連中は残りの者達に拒絶されるか対象外にされるんだ。」(1945年3月1日)。2月中彼は兵舎病で、軍医(ヒルフマン医師?)の軽い手伝いをした。2月終わりには終に右臀部に切開しなければなら

らない膿瘍が出来た。この不運は彼を1945年5月26日まで入院させることとなった。

1945年8月22日戦争の終結が収容所で公式に発表された。30日にB-29が食糧小包を収容所の上に投下した。それから何日も経って戦争捕虜達は‘安泰’で生存し(9月4日)、帰還する輸送を待っていた。9月20日沖縄経由でマニラに向かう船旅が始まった。ここでは彼等はキャンプに収容され、ヘレはそこで記した：「東インドのニュースは芳しくない。僕は君達がスラバヤで人質としてスカルノの仲間によって拘留されていることについて一日中思い悩んでいる。余りにも時間がのろのろ進む；ジャワは即占拠されるべきだったし、今みたいに安売りしない方が良いのに。僕達は又しても実に闘争好きだ。」(1945年10月7日)

しかしその闘争心は10月18日再び多少弱められた。武装した軍隊でオランダの権威をジャワで取り戻すことに果たして未だ価値があるのか、ヘレは自問していた：

僕達のジャワに何が未だ残っているというのか、もはや皆無だ。[...] 僕達は自らの家の為そして家族の為に戦うことになるのだろうが、結果は何で、何を得るというのだろうか。所詮はインドネシア人と欧州人の間の歪んだ関係をいつも持ち続けるわけだし。僕は反抗的な有色人の奴隷監視人とか制圧者には向いていない。労働者と上司の間には良い協調が必要で、それは腰につけた拳銃や鞘に納まりきっていない小刀では手に入れられない。全く、何と言う混乱だ。

とは言えヘレは彼の日記を未だ楽観的な思いで終了していた：

もういい加減にしてほしい、僕達は又それを整え直す。何が起ころうと。僕達は既に余りにも沢山の事を経験してきたし、それ以上に酷い事はもう有り得ないだろう。僕の頭は君が見るごとく、又普通に戻っているよ。僕は自分の周辺で起こったことに又もや文句を言い反応を示している。自分の状況に全く気付かず、毎日の生活に受身で引っ張られていく程悪い事は無い。(1945年10月18日)。

## ヒルフマン

モーゼス・モーナス・ヒルフマン(1903年12月12日スリナムのパラマリボで生まれる)は蘭印軍の軍医であった。彼はヨハナ・ファンダムと結婚し3人の子供達(2人の娘と息子1人)がいた。彼はバンドゥンで戦争捕虜になり、第15大隊キャンプに閉じ込められた。1943年7月に日本人収容所長から彼がバンドゥン出発を指示されたことを聞かされるまで、一年間は毎日かなり単調に過ぎて行った。バタヴィアとバンドゥンの収容所から約1000人の3個‘大隊’が一緒に編成された。ヒルフマンは‘ローズ大隊’に配属された。彼は日記を始めた：「我々が歴史の1こまを開始したという事を私は明らかに感じた、そしてこれは後で記録されな

ければならないということ。」<sup>82</sup> 1943年7月23日輸送と一緒に編成されたグループはチマヒ第9大隊キャンプへ移された。8月末彼等はバタヴィア第10大隊キャンプへ向かって出発した。ほぼ1ヶ月後、9月26日に、このグループはタンジュンプリオクにてマカッサル丸に乗船した。4日後この船はシンガポールに到着し、兵隊達はチャンギに閉じ込められた。

11月7日ヒルフマンは1228名の他の者達（ヘレを含む）と共にシンガポールの港から蒸気船ハワイ丸で出発した。途中、海の真っ只中、3隻の船からなる小さな護送船団は長い日々続いた嵐に悩まされ、それにより海水が船倉の中に入り込み、甲板にある捕虜達の炊事場が崩壊して船外便所が水中にたたきつけられそうになった。戦後ヒルフマンは記述した：

赤痢患者達は他の全員と同等に用足しに船外箱を使用しなければならなかった。多くが余りにも衰弱していたので船倉から階段で甲板まで、しばしば数人の仲間に支えられながら、上がる事すら大困難だった。嵐の間はこれが更にもっと大変だった。患者達は時として便を持ちこたえることが出来ずそれを噴射させてしまい、風がその便塵を船倉の至る所に吹き飛ばした。<sup>83</sup>

11月27日この護送船団は数機の連合軍飛行機に襲撃された。攻撃は僅か数分しか続かなかった。1隻の船がかなり損傷を受け、徐々に沈没し始めた。この船の船客900名はハワイ丸へ移された。これらの人々に場所を空けるのに、戦争捕虜達は全員甲板に場所を取りに船倉から押し出された。甲板は今やあまりにも場所が少なかったため、隣人が膝を立てて座っている姿勢なら誰かがやっとのことで横になれた。

1943年12月3日船団は寒い門司に到着した。岸壁埠頭で戦争捕虜達は小さなグループに分けられ、それぞれが他の目的地へ運ばれていった。ヒルフマンは約400人のグループと共に福岡第9収容所へ向かって出発した。彼等はそこで木造兵舎に収容された。各捕虜は4枚の毛布と上着を受け取ったが、それにもかかわらず「寒さで誰も寝られなかった。」（1943年12月4日）。この寒さは毛布の欠乏よりも持続する栄養失調の方がまず明らかに原因であった。

ヒルフマンは福岡第9のオランダ人収容所指揮官となった。「全部下達は新しい番号を貰った、私は1番だった。」それは全く無条件な喜びでは無かった：「それは厄介だった！しょっちゅう私は哨舎から日本兵の怒鳴りを聞いた：ナンバーワン!!；そうすると私が再度出頭しなければならず、日本兵の誰かに気を付けの直立姿勢をとって指示を受けるか、或いは日本軍の意図でないことが何か収容所で起こった場合は釈明と弁明をしなければならなかった。」<sup>84</sup> 何か罪を犯した戦争捕虜達に罰則を強要することはヒルフマン指揮官の仕事と期待された。多数の者に対して生意気といった様な軽い非礼には叱責で十分だった。彼は特に食糧の窃盗には大抵‘追

<sup>82</sup> ヒルフマン、18.

<sup>83</sup> 同所、45.

<sup>84</sup> 同所、52.

加調達’の控除で処罰した。何度も繰り返される違反は‘兵舎泥棒の提示’の様な更に厳しい処罰、或いは時として‘隔離’、そこでは収容所住人達が罪人と話をすることは禁じられ、常習犯自身他の兵舎連に来ることはもはや許されなかった。

ヒルフマン自身驚いていた事は「不愉快な環境に居るこの部下達は彼等の強要された罰則—と秩序に敏感であり、少なくとも私の知る限りでは—それに対して反抗が持ち上がった事例等全く無かった。」<sup>85</sup> 但し彼が優遇された地位に居るといふ点は常に非難された：「上官は鉱山の悲惨さを自分で経験していない、上官がそれを想像することは出来ないはずだ、と私は何度も聞いた。」（1945年1月8日）ヒルフマンは確かに重労働をする必要の無かった自分の幸運を喜んだ、そしてそれは次のことに役割を果たした「大半の判断力は災難によって混沌としていたが、私は未だ普通に判断出来た。」（1945年1月8日）。

ヒルフマンは又どの部下が兵舎病になるのか、誰が軽い仕事に適しているかを指示した。時々日本軍は兵舎病患者達の下で‘手入れ’をし、彼等の多くを鉱山へ送り込んだ。1944年8月以降日本人看護士の許可無しにはもはや誰も自宅に留まる事は許されなかった。この拘束にも拘らずヒルフマンを驚ろかせたのは「我々はこんなにも長い期間、日本軍の干渉無しに随分沢山の決定を自ら下すことが出来た。」<sup>86</sup> この収容所には又日本人の医者、鈴木医師が居た。ヒルフマンは彼の事を記述した、「小柄な、愛想の良い男で、かなり上手なドイツ語を話した。彼は何度も私と連絡を取り、あらゆる事について話し合おうと試みた。しかし私は彼と‘友好的に’話し合うことに対する抵抗心に打ち勝たなければならなかった。」鈴木医師はヒルフマンに戦後互いに連絡を取り続けようという希望を述べた。しかしヒルフマンはこれに気をそられることはなかった：「日本に関する全ての物への嫌悪は私をして戦後何ら歩み寄りを見せることを拒んだ。」<sup>87</sup>

ヒルフマンにとって殆ど毎日決まったパターンが経過していった。朝の点呼後彼は病欠届けと中隊報告、その後で彼の‘朝食’が準備された。それから軍病院の病室回診と続いた。病室回診後ヒルフマンは大抵多少自己の時間があり、療養所—検査室、或いは自分の寝室で過ごした。彼は収容所にヴァイオリンを持っていて、ほぼ毎日練習することが出来た。「それは顕著だ」、と戦後記述したヒルフマン、「日本軍はこれに対して異議を唱えた事は一度も無かった。」<sup>88</sup> ヒルフマンがヴァイオリンを弾いていた部屋へ一度若い日本兵が入って来た。この日本兵はヴァイオリンを取り上げたが、ヒルフマンはそれを取り返し、「ワイフ プレゼント！」（‘私の妻の贈り物’）と叫んだ。日本兵はこれを尊重した。<sup>89</sup>

彼の記憶を維持する為、ヒルフマンは毎日記憶練習を行った：彼は毎日詩を4行暗記し、前日の詩を復習した。最終的に彼は多くの詩を暗記して言えた：「私は誰も私から取り上げ

---

<sup>85</sup> 同所、53.

<sup>86</sup> 同所、85.

<sup>87</sup> 同所、73.

<sup>88</sup> 同所、62.

<sup>89</sup> 同所、92.

ることの出来ない自分の宝庫を隠している気分だった。」<sup>90</sup> 彼は又バンドゥンから持ち込んだヘブライ語の教科書を勉強することに満足を得られた。

戦争が長く続行すればするほど、収容所の雰囲気は益々意気消沈していった。ヒルフマンもそれから逃げる事は出来なかった：

この期間私には[1944年5月]不安と落胆の気持ちが繰り返し起こっていた。どれほど長く未だこの状況が続くのか、そして更にどれだけの犠牲者がでてくるというのだろうか？[...] 私は初めて自らの鈍感さを意識させられた、まずは主に美の世界において。私が毎日忠実に続けてきたヴァイオリン演奏は機械的になった。私が実に感嘆していた詩はその魅力を失くしてしまった。<sup>91</sup>

更に同じ月彼は記述した：「ここは今実際不吉な洞窟で、私はかつてよりもっと密接に死と接触してきた。毎回私の目の前で誰かが死亡した時、私は思った：今日は彼、明日は私だと。私は余りにも容易に起こる習慣付いた感情に対して抵抗する努力をした」。<sup>92</sup>

ヒルフマンはかなり規則的に自分の日記をつけ（彼自身は‘公式に’日記—ジャーナルと呼ぶ）、彼はそれを日本では目立つ場所に保管した。日本軍の依頼で彼は全病人のリストを欠かさず付ける役目を果たした。この記録を彼はこれ見よがしに開放し、療養所にあるテーブルの上に剥き出しのまま置いた。ヒルフマンは彼の日記に、日本軍はどっちみちこれを読むことは出来ないし、故にこれが最も安全だ、何故なら保管するのに一番疑われない場所だから、という考えに端を發したと説明を加えた。<sup>93</sup> 彼の‘公式の’日記の次に彼は時々‘私的一日記’もつけ、そこには自ら保管しておきたかった個人的な思いを記述した<sup>94</sup>

ヒルフマンは仲間関係の憂鬱な像を略述した：「お互い尊重し合うこと、他の者の関心を考慮すること、は少なく或いはもはや起こらない。自分だけのことしか考えない。自分しか耳を貸さない」<sup>95</sup> ことによるとヒルフマンはこの時余りにも否定的であった。時としては期待していない所から助けがやって来た：「最近何度も気が付いた事は、他者を助ける大半の積極的助力が、収容所の‘ごろつき’であったこと[...]。病人が助けを必要としている場合、彼等は即準備完了である」<sup>96</sup>

ヒルフマンに寄れば日本の労働方法が‘暴走するか静止する’に要約されていた。それは暴走しているより寧ろ静止していた、とこの医師は確証していた：「彼等が働く場合、巨速で一生懸命、故にそれは維持出来るものではない。そうすると彼等は突然弱り直ちに寢床に入る。

---

<sup>90</sup> 同所、63.

<sup>91</sup> 同所、77.

<sup>92</sup> 同所、79.

<sup>93</sup> 同所、55-56. この‘公式の日記’はNIODにより複写された。

<sup>94</sup> 同所、7. この本Fukuoka 9. Arts in krijgsgevangenschap (ユートレヒト/アントウェルペン 1985) は、‘私的一日記’からの文節と戦後の記憶を付け加えて公式の日記—ジャーナルに収めた。

<sup>95</sup> 同所、109 (1945年1月9日)。

<sup>96</sup> 同所、133 (1945年8月4日)。

鉦山を見渡せば、至る所眠っている日本人だらけだ。」ヒルフマンは日本人の気質と気候との間に関係が有ることを発見したと思った：「双方気まぐれだ。時々日本軍はとても礼儀正しく友好的だ；一瞬にして荒れ狂った激情、そうなると彼等は誰かを叩きのめす。そして気候；ある瞬間は太陽が輝いている；その直後暴風と雹。」<sup>97</sup>

広島と長崎の原子爆弾にはヒルフマンは何も気付いていなかった。とは言え長崎周辺地帯のチフス蔓延についての噂はあった。日本の降伏後ヒルフマンは鈴木医師により日本の病院へ連れて行かれ、そこで彼は何人かの重病患者を診察させられた：「ベッドに寝ていた全く無感動な1人の老女を私は思い出す。鈴木も私もこの徴候が何から来ているのか理解出来なかった。「随分経ってから私は放射能感染について読み、それでやっと理解した。」

98

1945年9月15日ヒルフマンは10名の重病患者と一緒に日本より良い看護を受けることの出来る沖縄島へ飛行機で出発した。患者達を引き渡した後、彼としては出来得る限り一刻も早く福岡第9に居る彼の部下達の所へ戻りたかったが、猛烈な台風の為、9月21日になって彼はやっと戻った。この収容所は既に撤退された様だった。ヒルフマンは戦争捕虜達が船で出発するはずの長崎へと急いだ。都市は完全に破壊されていた：「何マイルも遙か全てが平らだ。唯一の工場の煙突が真っ直ぐに立っているが、3メートル高さの所に煙が入っている。数個のコンクリート壁が割れて立ち、前方に傾きながら。鉄製の骨組みは完全に折れ曲がっている。至る所瓦礫の中を探し、慰めようの無い顔つきの日本人達、。」<sup>99</sup>しかし彼の収容所仲間はどこにも跡形が無い。ヒルフマンは彼らに追いつく事を願って船で沖縄へ出たが、彼がそこへ到着した時彼の部下達の船は既に去り行き、フィリピンへ向かってしまった。

ヒルフマンは続いて爆撃機でマニラへ飛び、1945年9月25日到着してキャンプに収容された。10月初めそこへ福岡第9の部下達も到着した：「[Th]パウ、[G.J.]ディッセヴェルトそして後何人か他の収容所仲間と解放されて挨拶が出来た時、それは私にとってこの上ない安堵だった。収容所のその他の者達とはそれ以上会わなかった。部下達は多くのテントに分けられ、もはやグループとして一緒に居ることは無かった。日本の戦争捕虜の身という‘話’の現実には小説家が考えつくものより別の結びが用意されていた。」<sup>100</sup> ヒルフマンの仲間達はその時彼の持ち物を返すことが出来た：彼の書物、彼のヴァイオリンそして彼の日記。10月最後の週彼はマニラを発った。モロタイとボルネオを経て彼は10月29日バタヴィアに到着した。ここでヒルフマンの日記は終わっている。彼の妻と子供達はアデック強制収容所に居て、ヒルフマンはバタヴィアに到着後最初の夜をそこで過ごした。その後この家族は軍病院の部屋に収容された。それは落ち着いた宿泊所ではなかった：近くにある村から繰り返し発砲された。1945年12月ヒルフマンはクアラルンプール（マラッカ）へ移され、彼の妻と子供達はオランダへ送還され

---

<sup>97</sup> 同所、105-106.

<sup>98</sup> 同所、139.

<sup>99</sup> 同所、153（1945年9月21日）.

<sup>100</sup> 同所、156.



ることだろうと聞かされた：「私達はこれでやっと安心した：蘭領東インドは動乱し、故に不安全だった。何年かの戦争後やっとオランダに静寂と安全！」彼等をオランダへ運んだ船、‘ニューアムステルダム’に麻疹蔓延が発生した。子供達は危篤となり数日後彼等の息子と娘の1人が死亡した。「私が喜ぶのは早過ぎた；私達の家族は戦争を潜り抜けたがやはり戦争の痛手は受けてしまった。」<sup>101</sup> 1946年末この家族は再びバタヴィアに居た：ヒルフマン、彼の妻、ヨ一、彼の娘ミリヤム（1938年生まれ）そして（恐らくオランダで）養女にした娘。1950年彼等は最終的にオランダへ帰還した。

ヒルフマンは1988年アムステルヴェーンにて死去した。

#### イエッテン

ヘーラルド・フーベルト・イエッテンは1907年5月28日にブルックシッタード(リンブルフ)で生まれ、マリア・ヨハナ・スサンナ・ファン マールスヴェーンと結婚した。彼は1932年、1936年そして1939年と戦前3人の子供に恵まれた。イエッテンは蘭領東インドの行政官であった。彼はカトリック教徒で、宗教は彼の人生に大きな役割を果たしていた。彼は自分の日記の事をこう語る：「人間はある状況の中で水準を維持するには気力を持たなければならず、疑う余地無くそれを神の恩寵に見出すことだろう、さもなければ人は状況に溺れてしまうかもしれないという例示である。」彼の日記は元々彼の妻と子供達に宛てたもので「いかに我々が気力を持ってそこを切り抜けたか。」を知らせる為であった。「この日記が神の偉大な栄光と栄誉の為何かに役立つくれるならば」、この様にイエッテンは戦後戦争ドキュメント研究所に宛て書きし、「それなら貴方に複写を許そう」、と彼の日記は1942年4月16日、ガルトのタルン戦争捕虜収容所で始まった。彼の最初のメモに記されているのは一かなり特有一次の様に：「神父様が御出で無い。忠誠なグループを通じて5月に一6月にも毎日数珠で祈りを唱えた。我々全員の願いは、特にこの時期、我等の愛する神の友愛を失わない事だ：準備完了そして待機中」続いて彼は先行する週の様々な宗教集會を記述し、その日の彼のメモを締めくくった：「3人が逃亡した、その中から最も若い逃亡者が銃殺された：彼の為に我等は祈る。」恐らく大半の戦争捕虜達はこの処刑を最も重要な記述すべき出来事としたことだろう。イエッテンは違っていた。この傾向が彼の次の日記メモに続いている：それらは主に彼が拘置されていた収容所での宗教的生活についてである。

1942年6月イエッテンはチマヒ第6大隊キャンプへ移され、そこでは一‘大幸運’一何と神父が居たので、毎日聖ミサを行うことが出来た。7月最後の日曜日神父は「痛烈な説教：収容所における神様の冒涇と“女性に関する話”についてであった。この事で自己を抑制しなかった者は妻と娘達を持つ資格は無く、後に残った彼女達にもし何かが起こっても、とやかく文句

---

<sup>101</sup> 同所、158.

を言う権利は無い。」これは「観衆に大きな感銘」を与え、彼等は明らかに最も深く感じ入った。イエッテンの日記には神父の説教に相当関心が注がれている。イエッテンにとって良い宗教的な保護が収容所で最も重要なことであった。

10月23日イエッテンは第6大隊から第4と第9大隊ーキャンプ、蘭印混血用キャンプ、に移った。<sup>102</sup> 11月11日彼はスラバヤの定期市ーキャンプへ移され、そこでは2人の神父が居たが、ミサは行うことを許されなかった：「天国から地獄」、とイエッテンは思った。しかし秘密のミサが何人かの奥義を授けられた者達の為に行われ、聖体拝領が兵舎連に分け与えられた。12月6日突然礼拝が再び許可された。約1ヶ月後には捕虜達は再び移送されるという事を聞かされ、そのことがイエッテンに次の溜息を引き出した：「地上では追放に合い、どこも安全ではない；この真実が今身に染み込む」（1943年1月3日）

彼等は1943年1月4日出発し翌日マカッサル村のココナツ畑の中にある彼等の新しい収容所、メイステルコルネリス（バタヴィア）に到着した。イエッテンによればそれは「検疫キャンプ」であった。1月14日彼等はタンジュンプリオクへ走行し、彼等をシンガポールへ輸送する予定の貨物船に乗せた。5日後彼等はシンガポールのチャンギ収容所に到着した。彼等はそこには長く居なかった：1月27日彼等は泰緬鉄道で働く為タイのジャングルへ送られた。31日（日曜日）途中下車の間彼は聞き耳を立てた：「午後5時に下車した時私は鐘の音を聞く、ここどこかにローマカトリックの教会があるに違いない。」

鉄道の収容所連でイエッテンはカトリック教徒である戦争捕虜達の精神的保護の為何か出来るかもしれないと全力を尽くした。彼は病人達と危篤者を訪ね祈祷礼拝を指導した。プロテスタント側からその様な集会を今後共同で行う事が提案された。イエッテンはこの選択を数人の「理知的な」信仰仲間達と話し合った：「彼等は例えこの状況の中であっても[なかったにせよ]原則に留まる、ということで譲渡しない、という私と意見を同じくした；それは我々の意志薄弱者達に危険を意味するかもしれなかったからだ。」<sup>103</sup> とは言ってもイエッテンに言わせればプロテスタントとカトリックの聖職者間の協調は悪くない：「我々はそれに関しては充分お互い尊敬し尊重する。誰か「重病」[危篤]でプロテスタントである場合我々は牧師様を呼び、もしカトリックの場合彼は我々に知らせる。」<sup>104</sup>

イエッテンは赤痢と高熱で酷く衰弱した。彼は病院キャンプ「下町」（チュンカイ収容所）へ輸送された。1943年5月初めチュンカイのイギリス人カトリック教徒達が神父到来の為に9日の祈り（ノヴェーン）を始めた。オランダ人達も参加し、6日間祈った後に神父が近くの収容所からやって来るだろうという知らせが入った。神父の為に簡単な教会が建てられ、そ

---

<sup>102</sup> 1942年5月末日本軍はチマヒの戦争捕虜達を蘭印混血人（混血出身のオランダ人、しかし東インドで生まれたオランダ人も）と「トクス」（純血オランダ人）に分けた。第4と第9大隊は蘭印混血人、第6大隊は純血オランダ人用に意図された。1942年ガルトからチマヒに輸送されたイエッテンと一緒に戦争捕虜グループはチマヒの駅到着の際純血オランダ人と蘭印混血人に分けられた。1942年10月この2つのグループ分割は突然中止された。第6大隊の戦争捕虜達は第4と第9大隊へ移された。

<sup>103</sup> イエッテンの日記、9。

<sup>104</sup> 同所、10。

れはイエッテンの手で何回か草花が飾られた。この病院キャンプの悪状況の中にあつてさえ、「神父様と相談したあと、常には教会に、或いは全く行かない人々の下で活動が始まった。」<sup>105</sup> 数人が洗礼を受け堅信の秘跡を受けたが、改宗熱意はいつも成果を上げた訳ではなかった。ある戦争捕虜、J.Chr.ヒスケルの様に、彼は死の床に伏していたが、どうみても余り信仰心はなかった。知らせを受けた神父が夜彼を訪れたが：「ヒスケルは全て引き延ばし：‘また明日に’。神父様は彼に、明日はもう来ないかもしれないと諫めた。しかしヒスケルは言った：‘また明日に’。翌日ヒスケルは朝早く死亡したらしい。「彼は我々を失ってしまった、チャンスを利用しなかったから。悲劇。[...] 神父様はこの事例を相当気に掛けておられた。」<sup>106</sup> 彼等のチュンカイ滞在についてイエッテンは記述した：「それは我々にとって容赦の時だった」。<sup>107</sup>

1943年11月17日殆ど全オランダ人がチュンカイ収容所からノンプラドゥックへ向けて出発した。ここには神父は居なかったが、イエッテンは病人達と危篤者の下で教訓的な仕事を休まず続けた。1944年5月10日日本軍が予期せぬ収容所内の視察を行った。どのような紙切れであっても全て押収されたので、イエッテンの日記メモも。とは言え彼は冷静だった：彼は禁制品を道路に運ぶ仕事を申し出て、「そして憲兵隊の目下で私はそれらを[彼のメモ]再び自分のポケットに隠し、他の者達と一緒に没収された荷物を日本軍事務所へ運んだ。」1週間後、1944年5月18日、イエッテンは彼が日本へ輸送されるだろうということを聞かされた。

日本へ向けた航海は1944年6月前半に行われ、約10日間かかった。門司到着後彼にとってまず目についたことの一つは：「山の斜面に可愛い伝道教会が見える、港には我等が愛する聖母マリア様像」（1944年6月18日）。門司の近くにある鉾山収容所（福岡第15）が最終目的地であった。ここでも彼は出来得る限りカトリック教徒達の精神的保護を試みた：彼は祈祷礼拝、ノヴェーンや他の宗教礼拝を準備した。時としてローマカトリックのキャンプコーラスによって光彩が添えられたこれらの集会は、日記の中で顕著な場所を占めている。イギリス人達でさえも彼に死亡した仲間の為の祈祷礼拝を求めたが、ただし英語である：「そしてそれを私は神様のお助けと共に真剣に準備した」（1944年11月1日）。

しかし収容所では神父に事欠いていた。これは特にクリスマス（1944年）時には大きな欠陥であった。しかしここでも又何かが見つかった。鉾山で日本人現場監督の1人がカトリックであるらしかった。「ところで、彼には他の日本兵よりこれっぽちも良い所が無い」、と述べたイエッテンであったが、この男を通して、八原の近くにいる宣教師（‘パパフランソ’、恐らくフランス人）と情報を交換することが出来た。この宣教師は収容所での彼の信仰仲間に2つの聖ミサを奉仕することを約束した。復活祭（1945年）も同じく行われた。日本軍による厳しい罰則による恐怖からこの接触は秘密の場所で行われた、というのも「日本人所長は日本軍の

---

<sup>105</sup> 同所、12.

<sup>106</sup> 同所、13.

<sup>107</sup> 同所、15.

中では人間らしさがあったが、彼の部下達が指揮を取っていた為、彼等のやり方で我々を‘虐めた’からだ」(1945年2月14日)。

ここ数ヶ月収容所生活が益々厳しくなってきた。鉦山では続いて事故が起きていた。イエッテンは特に理由なくしては起こらない崩壊を恐れた。一度思いがけず鉦山の壁が崩壊した。彼はその時まさにそれで仕事をするとところであったスコップの取っ手まで埋められてしまったが、寸でのところで横に飛び跳ねる事が出来た(1945年4月19日)。大勢が毎日収容所で鉦山からの安全脱出を祈っていたことは不思議ではない。

1945年8月15日戦争捕虜達は戦争が終結したことを聞いた。翌日食堂でそれぞれが戦争から生き残った事についてカトリックの感謝礼拝が行われ、そこでイエッテンは熱烈な感謝の演説をした。この礼拝は王家の為に祈りを捧げて終了した。8月17日全く違った集会が行われた。大世界大戦は殆ど終結し、ヨーロッパとアジアの大部分が破壊され、将来は実に不安定であったが、日本の収容所に居る前戦争捕虜、バタヴィア石油会社のボーリング専門部長でアルティス名誉会員のALファンダイクは次のことについて講演した：「我々の動物園の為に我々は何が出来るのか；動物領域での経験、実験と体験」。8月22日になってやっと公式に収容所で日本の降伏が発表された。8月28日アメリカの爆撃機が初めて食糧投下を実施した。

9月初めイエッテンは司祭を訪問しに門司へ行った。無効果：日本到着(1944年6月)の時即彼の目についた山腹の教会は、‘日本海軍に占領され’、神父は1年前既に離れていた(1945年9月6日)。イエッテンは彼の探索訪問を諦めず、翌日その近くにある捕虜収容所に、炊事班長であったアメリカ人神父を見つけた。この司祭は聖ミサを行うことと懺悔を聞く為に9月8日イエッテンの収容所を訪問した：「そこに居た者は英語で懺悔をすることが出来た。英語が出来なかった者は‘多い’或いは‘少ない’、‘重いか軽い’で言及することにより祈祷書にある十戒の表示で十分であった。」

1945年9月18日戦争捕虜達は長崎へ輸送された。そこで彼等はアメリカの貨物船に乗り、それは彼等をフィリピンへ運んだ。彼等はマニラ近くのテントに収容され、それはイエッテンの全要求を満たした：「ここには美しい教会とローマカトリックの司祭様がおいでだ」(1945年9月25日)。テントの赤十字社事務所にジャワの女性収容所の写真が掛けられてあったが、「後で人はそれらを取り去った、余りにも痛ましい。」(1945年11月26日)。イエッテンがバタヴィアの飛行場に着いて、チデンの前女性収容所にて妻と子供達を見つけたのは1945年の大晦日であった。その日に彼は日記を閉じた：「マリア様は再び我々に耳を傾けて下さった：妻と子供達の居る安全な‘我が家’。神様に感謝！」

それから後彼等はオランダへ向けて出発した。1947年1月20日この夫婦は男の子と女の子の双子を儲けた。1947年12月イエッテンは‘ウィレム・ラウス’で再び東インドへ舞い戻った。彼の妻と子供達は暫くユートレヒトに残っていたが、彼の後に続いて旅立った。1950年11月ジャカルタにて6番目の子供が生まれた。この家族がいつオランダへ再帰したのかは明らかではない。イエッテンは中等学校の先生として彼の経歴を終えた。彼は1994年9月アムスフォートにて死去した。

オーステルハウス

ヤコブ(ヤープ)・オーステルハウスは1916年11月5日ローデスホール(フロニンゲン州)で生まれた。彼はこの日記に‘M.’(彼女の愛称の頭文字)と称されるピーテルケと婚約していた。1939年オーステルハウスが蘭領東インドへ出発した時、彼女はオランダに残った。1940年3月彼は‘不在結婚’の為の書類をオランダに送った。この不在結婚は1940年5月後半に行われるはずであった。しかしオランダにおけるドイツ軍侵入後オーステルハウスはもはや何も耳にしなくなった。彼は結婚したと思っていたが、これは戦後そうではなかった事が分かった。彼は教師でバンドゥンにあるファンデルカペルン学校の小学校に勤めていた。太平洋の戦争勃発の時彼はバンドゥンのダゴ通りに住んでいた。

彼の日記は1941年12月8日、日本の真珠湾攻撃のニュースが発表された時に始まった。彼はこの日記を彼の婚約者の為に書いた。これは彼女に宛てられ、そして書いている間まるで彼女が彼の横に居る様に彼は感じていた：「とにかく君と話し続けることが実際その目的であって、1939年のヤープから1945年の僕とを見分けるその距離にほんの少々橋を掛けて置く為」、と日本の占領直後に彼は記述した。<sup>108</sup> 彼は自ら自分の日記を「実際、君‘M’に当てた1枚の続いた手紙」だと見ていた(1945年8月18日)。

1941年12月オーステルハウスは動員され、チェリボンに野営した第4大隊の第3中隊に配属された。彼の任務は‘戦闘地’での在庫、弾薬、炊事等を運ぶ馬車から成り立っていた部隊の下士官であった。

1941年2月28日の真夜中、3月1日に日本軍がジャワの北海岸の3箇所に上陸したことが知らされた。オーステルハウスの部隊はチェリボン近くの海岸に待機した。朝3時第4大隊は退却する命令を受けた：「僕達はお互い顔を見合わせた！さっぱりわからない。僕達は戦いたい！撤退なんかしたくない！どこへなんだ？誰も知らない！[...]戦争、今ジャワで！そして僕達は撤退しなければならない！徐々に到来する新しい夜明けはチェリボンを離れる落胆した兵士達の部隊のみを見い出す。」<sup>109</sup> 未だ1弾すら失っていない前から、既に気力は明らかに壊されていた。この大隊はバンドゥン方向へ向かって出発した。撤退してから約1週間後、警備を交代中、命令が届き、第4大隊はチマヒの兵舎へ戻らなければならなかった。戦いは終わった：「そしてそれから僕達の頭の中で物事が明確になり始めた。そしてそれ故に僕達のその素晴らしい根性(?)と意気は空気の抜けた風船の様に互いに埋没してしまった。罵りー涙ーそして沈黙。果てしない縦列が終に再び動き始める時、そこから負けた軍隊は引き上げる。」<sup>110</sup>

1942年8月戦争捕虜達は日本軍に忠実と信棒を約束する忠誠宣言に署名しなければならなかった。大多数はそれが強制の下に行われた宣言ゆえ全く価値は無いものとして、とにかく署名だけはする決心をした。オーステルハウスも署名はしたが、その下に‘強制の下に’と

<sup>108</sup> オーステルハウスの日記、222.

<sup>109</sup> 同所、6.

<sup>110</sup> 同所、10.

入れた。5日後署名することを拒否した14名が日本人収容所長に呼び寄せられた。オーステルハウスは、彼が強制の下で証明した時の付加が明らかに拒絶と見なされたので、その内の1人となった。所長の警告後5名が更に署名した。オーステルハウスを含む後に残った強情者は翌朝新たに所長に召喚された。拒絶者は最後の警告を受けた。オーステルハウスに寄れば「ひょっとして死に繋がるかも。M、君の婚約者の困難な時と日々を君は理解してくれるはずだよ。これは価値があるだろうか？これは正当だろうか？この署名がそんなに意味深いものかなあ？「彼は英雄を気取りたがっている！そしてもっと他にも多くの事で。」<sup>111</sup> 彼と他2人はとにかく署名することにした：「僕が君に言えることは M、このところこんなにも死について考えたことはなかったということだよ。[...] ある声が言う：「君は死ぬ準備が出来ていない、君に死ぬ勇氣はない」。でも僕は知っている、この収容所が僕に沢山のことを教えてくれても、僕達に山頂の説教の下りを要求する救世主に、僕の人生は残念ながらまだまだ答礼出来ないことを。」<sup>112</sup> 未だ拒否していた6名は鞭打たれ終には強制的にやはり署名させられた。

1942年9月末オーステルハウスは彼をかなり補強した宗教的経験を得た。神様が彼を回復させ、そして彼の人生に再び「豊かさ、真実の豊かさ」がやって来た、と彼は書いた。<sup>113</sup> 彼の宗教的感情は又捕虜の身としての残りの期間彼に相当な支えと慰めを与えることとなった。とは言うものの彼には又「弱い」時もあった：「今信仰の力とは何だろう？あー、これがしばしば弱くて悲しい。今僕の心に生きるべき喜びはどこにあるのだろうか；信頼と黙従はどこなのか。あー神様、これはなんと途方も無く難しいことなのでしょう。」<sup>114</sup>

この収容所生活は厳しい通関料を要求した。オーステルハウスは人間が変わってしまう事を恐れた：「M、僕は今の君を想像する事が出来ない。君は未だ僕のことを愛しているだろうか、今、僕は内面的にも外面的にも変わってしまったけれど？多分これは本当ではないにしても、以前には無かった無気力さが今の僕の生活にある気がする。華やかさは姿を消した、もしそれがあるとすれば、それは嘘の陽気さだ！他人は僕の事を退屈で嫌な人間だと思っているだろう。」<sup>115</sup>

1942年10月25日オーステルハウスは戦争捕虜達グループと共にバタヴィア方向へ出発した。汽車の小窓は開放しておくことが許されたので、捕虜達は外を見ることが出来た：「土着の青年達は至る所で“ブランダズ”（オランダ人達）に向かって拳を握り締め、既に日本軍の良い生徒であったことを見せつけた。」<sup>116</sup> この輸送はタンジュンプリオクへ向かい、そこで捕虜達はユニカンポンに閉じ込められた。彼等は間違い無くジャワから国外追放されるだろうと認識していた：「楽観的観測はここで永久に破壊される。」<sup>117</sup>

しかし出発に際して予防注射、身体検査、血液検査そして荷物の検査等の支度が完了するまで、

---

<sup>111</sup> 同所、26.

<sup>112</sup> 同所、27.

<sup>113</sup> 同所、40.

<sup>114</sup> 同所、71.

<sup>115</sup> 同所、44-45.

<sup>116</sup> 同所、54.

<sup>117</sup> 同所、55.

1943年1月半ばまでかかった。1月16日にはその時が来たが、予想に反して彼等はジャワからは連れ去られず、汽車でスラバヤまで輸送され、そこで彼等は統治—高等市民学校に閉じ込められた。14日後彼等は再びどこかへ引っ張られ、今回はオーステルハウスを含む800人は確実に彼等を海外へ運ぶ船に乗せられた。

2月9日これらの男性達はシンガポールに上陸した。約2ヵ月後の、4月3日オーステルハウスを含む約1000人のグループはハワイ丸に乗船し、日本へ向けて出発した。4月24日彼等は最終目的に辿り着いた。途中6名の戦争捕虜達が死亡し、大勢が病気になった。オーステルハウスと約100名の彼の仲間達は余りにも衰弱した為、到着後小倉の‘病院’に入院させられた。そこでオーステルハウスは医者達から幾分見放された：

医者には良く見ようとしな—必要無い。「我々はもはやどうする事も出来ない、彼は明日まで持たない」。何たる事だ、そして..... それは4月24日のこと。春、桜が咲いている、1934年4月24日の時と同じ様に、そして僕のどもった質問に彼女は答えてくれた：‘はい、勿論！’そして僕を世界中で一番幸せな人間にしてくれた。そして今再び4月24日、最後の、というのは：死んでいく、そして..... 僕は怖かった、僕は死にたくない、僕には死ぬ勇気が無い。僕はどこへ行くのだろうか？神様は存在するのだろうか？彼は生きている？[...]僕は一つだけ分かっている：僕は怖い、死ぬほど怖い、そして僕は誰かを呼ぶ、多分そこに居るその誰かを、でも僕はその人を知らない... そうしたらそれがやって来る、神様の言葉を真実にする為、話す為：ここに私は居る、安らぎを、平和を、永久の平和を与える為に！信じられない！今それで十分だ、実に十分。僕は別れを告げる：さよなら父さん、さよなら母さん、おばあちゃん... ピート！いつの日か僕は又貴方達に会うことだろう！！医者は、翌朝、何が何だかさっぱり理解出来なかった。いや、これは理解の問題ではない...<sup>118</sup>

小倉病院は病院と言う名前には匹敵しない機関であった、というのは宿泊（隙間風の入る木造兵舎）と医療管理に問題が多かったからだ。但し食事は状況からすれば悪くなかった。小倉での約11週間後オーステルハウスは福岡第15収容所へ移送された（1943年7月13日）。

オーステルハウスは鉱山の仕事に殆ど携わらなかった。重症の下痢と‘焼け足’の為彼は既に早く病院兵舎に落ち着いた。彼の収容所到着から最初の4ヶ月彼は日記に余り書かなかった。「書きたい気持ちなど、ここでは完全に失くしてしまった、ところで多くの他の物への意欲もここでは消えてしまった」、その様に彼は書いた（1943年11月25日）。彼は自分の思いを適当に紙面にすることは不可能だという考えであった：「期待したいことや我慢できない、時として心をかきたてる郷愁など簡単には記述できない。語彙が余りに貧困だから。」（1943

<sup>118</sup> 同所、250.

年12月4日)。一方収容所生活はオーステルハウスによれば余りに‘普通’そして‘平凡’であって、「退屈さから日々の違いが、ほぼ分からない時がある」(1943年11月25日)

ほぼ6ヶ月入院していた後、オーステルハウスは1944年1月‘練兵休’(兵舎病)となり、彼は軽い仕事をしなければならなかった。長時間ではなく。4日後彼の足は再び腫れ始め、足指の間に炎症が起きた。ペラグラ、壊血病、口峡炎、ベリベリによる苦しみで、彼は再び病院兵舎にやって来た。3月軽い収容所の仕事をする2度目の試みが続いた。今回彼は長く頑張った。彼は図書館(とりわけ本の修復)で働き、チェス競技を企画し、収容所で交換を提供されたり要望された品物のリストを作り、数人の収容所仲間の洗濯をし、そして彼等に又語学をレッスンした。

1944年を通して彼の宗教的感情は益々強化された。1944年2月29日彼は記述していた:「僕は再び祈ることが出来る!そしてそれは力強い!3倍の飯分よりもっともっと良い。」—そしてそれは食事が頭から離れない環境にはかなり意味深いものがあった。彼は毎朝—そして興味の有る者達の為に夜の聖別も行った。しかしオーステルハウスは決して聖者ではなかった。彼は自分の日記に‘弱点’を見せることも恐れなかった。彼は病棟でスープ配給係として働いていた時、自分自身にはいつも他の者達よりもう少し多めに入れたことを明らかにした(1944年1月15日)。自分の仲間達から何かを盗む誘惑を自制することがいつもとはかぎらなかった点さえも認めた。「あ一人間は余りにも素直で正直になれるものだ、もし.. 全て十分所持しているならね、僕はここで気付いたのは、戦争捕虜の身[...] というものは人間に隠れているもの全てを捨り出すということだ、それは全く良い事ではない!」<sup>119</sup>

又彼は常に誘惑されたけれど、神は人を見捨てはしない、と確信していた。ところでオーステルハウス自身も盗難の犠牲者となった:収容所仲間が便所用一紙として、或いは刻みタバコを巻く為に使用したことから彼の日記は数枚ページ足りなかった。

1人の日本人監視人、テガス、は特別オーステルハウスを虐めていた様だ。彼はオーステルハウスを何度か殴る為にあらゆる機会を利用した。他の日本人、看護士の吉川はこの犠牲者を哀れんでいた。あれこれの理由で彼はオーステルハウスが収容所作業人として居続けられるよう、そして鉱山に行かなくても済むように世話をした。これは大変な幸運であって、彼は故に又自問した、どうして彼が、「取るに足りない人間、他の者より価値もなければ立派でもない、寧ろ色々な点で他の者より劣って意地悪なのに、どうして僕が、そして僕だけが、784名の戦争捕虜達の下でその様な例外的な優遇された位置を天の父から貰ったのだ!」(1944年8月21日)。とは言え彼の幸運は長く続かなかった。彼は労働時間中自分の部屋で捕らえられた為、図書館での楽な仕事から解任された。殴られた後、今後は‘本当の’仕事をしなければならないことを理解させられた。11月初め彼は工作中(丘の掘り起こし)喫煙した為、3日間寒い独房で過ごした。

1944年11月11日他の収容所への出発を希望する捕虜達が居るかどうかが質問さ

---

<sup>119</sup> 同所、222-223.



れた。良い確約が為されたのでオーステルハウスも申し込んだ、成功は期待せずに。しかし彼は出発に考慮された45名のリストの中に居た（主に‘厄介な連中’である収容所作業人と長期病例）。12月3日このグループは福岡市から南へ約6キロメートルの、福岡第1（ヒダオ）へ向かって出発した。

約650名の捕虜達と一緒に連れて来られたこの新しい収容所は寒さに威圧されていた。10日間でここでは11人が死亡した。とは言えクリスマスと新年間は‘素晴らしい時’であった、主に沢山の赤十字社物品が供給された為：「この満たされた、豊かな気分を説明するのは不可能だ」（1945年1月1日）。1945年1月18日捕虜達は‘飛び散る雪—と雹の嵐の中’6キロメートル先にある、自ら建設を手助けしなければならなかった収容所へ移動させられた。ここでも寒さが威圧していた。1週間後オーステルハウスを含む50人（特に病人と衰弱した様子の人々）が港町、門司へ出発し、そこで彼等はYMCAビルに収容された。「全ての移動の後で僕が唯一出せる結論は溜息だ：暖められた食堂、美しい風呂場、良い収容所指揮、僕の多くの友人達とおいしい食事付きの居心地の良い第9（第15）収容所に居られたら良かったのになあ」（1945年4月9日）。

1945年2月、3月そして4月はオーステルハウスにとって厳しい月々であった。彼は肺炎、肋膜炎そして下痢に苦しみ、死が近づいたことを感じた。彼が1945年内徐々に自分の日記をつける事が少なくなったのは決して不思議ではない：「最近の月々は精神力、閃きそして表現様式が減少していることを明らかに感じる」、その様に彼は戦後この時期からのつましいメモを解説した。<sup>120</sup> 門司に大型のアメリカの爆撃、6月末、そして下関に、7月初め、は彼に再び勇気を与えた：これはもはや長くは続かないに違いなかった。しかし7月20日彼は記述した：「M、僕はもう駄目だ。[...]僕の魂は死んだ。僕の身体はくたくただ。」8月彼の内臓の調子が余りにも悪かったので、何日も食べる事が出来ず、彼の足もかなりの炎症を起こしたので普通より2倍に膨れ上がった。戦争の最後の週はその為に彼はもう働く必要はなかった。

日本の降伏の公表後は前戦争捕虜達に何が起こるかを待つだけであった。オーステルハウスは直ちにオランダへ送り帰される期待を抱いた。彼はまず蘭領東インドへ戻る気は全く無かった。日本軍に対する大多数の将校達の姿勢に彼は余り満足ではなかった：「今（イギリスの）将校達が日本軍に対して従順過ぎた事を非難されている。確かに彼らの（そして僕達の）日本軍に関しての姿勢はしばしば多少不確かで、どっちつかずだ。或いは彼らが既に自由の身であって日本軍の下にはいないことに未だ良く慣れることが出来ないのか。3年半の圧力は確かにそんなに簡単には切り離せないものだが。」<sup>121</sup>

戦後の最初の週あたりは食糧が未だ尚戦争捕虜達の生活の最重要点であった。オーステルハウスは彼の日記に未だかなりの時間食糧前線の日々進展を記していた：「食事に関するこの長い詳述は門外漢には恐らくかなり狭量な響きがあることだろうが、目下これらの事がここで

---

<sup>120</sup> 同所、205（メモ）

<sup>121</sup> 同所、220.

は話題になっている。」<sup>122</sup> 彼の有難い話題は天気のことであった。酷い暑さであった：「だから時々戦争捕虜収容所というよりも一裸体主義者クラブの様に見える。記述出来そうなもっと重要な話題はないものかねえ？日記著者がが少々退屈していて、そんな時何を書いてよいのやら分からないということを君はこの話題から正直気付くはずだよ」、と白状する彼。<sup>123</sup>

退屈で、あきあきする収容所生活と食糧の没頭で、8月31日と、更に王女の祝日に行われたアメリカの飛行機による食糧投下が戦争捕虜達にとって大事件と考えられたのは意外なことではない。ある意味では、この記憶すべき日は日本降伏の公式な発表よりも彼等にとっては‘本当の’解放の日であった。「これは一生に一度だけ起こる日だった」<sup>124</sup>、その様にオーステルハウスは歓喜した：「嘗て本に書かれたり、或いは人々により示された全ての歓喜一爆発は実際ここで披露された。パラシュートは大半が開かず、半数がパラシュート無しで下降して来た事、その結果としてそのドラム缶が簡素に建てられた日本家屋に完全な衝撃を与えた事、そして屋根を突き通って部屋の中へ落ち、数人の死者でさえも出る原因となった事、これ全て、華やかな歓喜を弱めることは出来なかった、と僕は言える。」<sup>125</sup> 飛行機は日々続いて規則的に引き帰り、更にもっとドラム缶を投下したので、収容所で人は終に溜息をついた：「もう今日は彼等に来てもらわなくてもいいよ」<sup>126</sup>

捕虜達は徐々に取り戻した自由を活用した。彼等はますます頻繁に収容所を離れ、近所の町を散策し、食糧や酒類を購入し、汽車に乗って国中を旅した。昔の友人達を他の収容所に訪ねた。「この拘束されない自由さから、幸運をととても使いきれものではない。[...]最初の酔っぱらいは大勢にとって再び‘昔’に戻った印だ、‘歌声’と大騒ぎは僕達を深夜まで眠らせなかった」、とオーステルハウス。とは言え歓喜は時々憂鬱な思いに取って代わった。オーステルハウスは将来を案じていた：「M、君は未だ僕を必要としているかい？僕達は余りにも離れ離れで成長したのではないだろうか？僕にはもう分からないよ。僕はもはや昔の自分が分からない。僕にはこの先自分達が、男性として（未だそうであるなら？）未だ活用出来るのかどうかもはやわからない。僕達は今とにかく退化している；それが本音で隠せない真実だ。」<sup>127</sup>

1945年13日と14日の真夜中、収容所は撤退された。戦争捕虜達は9月14日長崎に到着した、「実際、それが嘗ては長崎だった。何キロメートルにも渡って僕達は‘原子爆弾’が残忍にも実施されて、完全に破壊された町を走行した。」<sup>128</sup> オーステルハウスは下痢とベリベリの痛手に苦しんでいたため、彼は丈夫になる為アメリカの病院兵舎に入院した。9月19日彼はフィリピンへ航海する上では十分回復した。彼は1945年9月22日マニラへの輸送を待っていた沖縄のテントで最後の日記メモを付けた。

---

<sup>122</sup> 同所、221.

<sup>123</sup> 同所、221.

<sup>124</sup> 同所、223.

<sup>125</sup> 同所、224.

<sup>126</sup> 同所、226.

<sup>127</sup> 同所、223.

<sup>128</sup> 同所、227.

オランダに戻り彼は婚約者のMと結婚した。彼は以前の職業である教師を再び受け入れた。1962年彼は再生したキリスト教徒となった。1970年彼は日本へ旅し、彼の捕虜時代の場所を新たに訪ねた。折尾で彼は自分の前監視人達の内3人を捜し出す努力をした。1人は既に亡くなっていて、2人目は東京に住み、3人目、いつも彼を保護してくれたヨシカワは彼と会うことを受け入れた。「そう、彼だよ。この26年というもの少しも変わっていない。僕達はロビーの木製ベンチに隣同士座った。昔が再び甦る。僕の日本語は再び戻り、彼は英語に自らの最善を尽くす。それとで僕達はお互い理解する。」<sup>129</sup>

ヨシカワは彼を前福岡第15収容所のあった場所へ連れて行った：「時間が止まっている。夕方の太陽を浴びて僕達はそこに立っている；彼は僕の3歩後ろに、言わば僕に過去を味わい、試験する時間を供与するかの様に—各思い出が後光に包まれるまで。僕は別れを告げる：‘さよなら’、僕達はもう敵ではない：友達だ。」<sup>130</sup>

オーステルハウスは又門司を訪れた。彼が自分の戦争捕虜の身で最後の8ヶ月間収容され、門司ではほぼ唯一の建物であったYMCAビルは荒廃一途のアメリカの爆撃に持ちこたえて残り、未だそこに建っていた、変わらずに。

ヤコブ・オーステルハウスは現在アムステルダムに住んでいる。

ファン ウェスト ドゥ フェール

法学博士ヨハネス・フレデリック（ヤン）・ファン ウェスト ドゥ フェールは1910年4月5日テテリンゲンで生まれる。彼はドレンテ出身であった。彼はフランス語圏スイス出身（1912年9月24日ロシアのベルディアンスクに生まれる）のJ. N. R（リリア）ティッフエンバッハと結婚し、3人の子供がいた：ロバート・ヤン・パウル（‘マンシー’、1938年生まれ）、ピーター・エドモンド（‘ピトゥス’、1939年生まれ）そしてリリアーマリアナ（1941年生まれ）。太平洋戦争勃発の時、この家族はパレムバン（南スマトラ）に住み、そこでデヴェールは臨時の国家評議会の代理登記官として働いていた。彼等もバタヴィアのボンティウス通りにある家に住んでいた。

1941年12月10日デ ヴェールは武装したグループの下で陸軍予備兵となり、内地、ラハットへ向かわされた。実際彼の軍隊における職務は南スマトラの臨時軍法会議の登記官であったが、この時彼は歩兵と一緒に行かせられた。彼はこれが余り気に入らず、機会が訪れた時、パレムバン領地司令官、L. N. W. ヴォーヘルサング中佐の特別オートバイ当番兵（彼の趣味はオートバイであった）という仕事に身を委ねた。ドゥ フェールがこれに乗り換えたのは、各歩兵は榴弾に当たるかもしれない塹壕に横たわりながら待ち、その泥沼の中にて窒息す

---

<sup>129</sup> 同所、251.

<sup>130</sup> 同所、252.

るかもしれない、といった戦争の話をいつも残忍だと思っていたからであった。<sup>131</sup>

1942年正月リリアと子供達はバタヴィアへ向かって出発した、というのは日本の爆撃に際してそこの方が安全そうだという考えからであった。しかし日本軍はかなりの間用心していたので、ドゥ フェールは後でこの時期のことについて記述した：「全体からみればパレムバンでの初期の戦時中は特別楽しかった；我々は多忙ではあったが、それは興味をそそる種の忙しさだった。」<sup>132</sup> それは1942年2月14日日本の落下傘兵達がパレムバンの周辺に落下してきた時完全に変わってしまった。4名のオートバイ当番兵中の1人がその場所の事態に関する情報を手に入れる為、飛行場或いは近くの前線に行かなければならなかった。ヴォーヘルサング中佐は志願者を求めた。不安な静けさが続いた。ドゥ フェールは「これらの時期特別に爽快な仕事を楽しんだ後で、初めて何か不快な事を求められた今喜んで協力しようとせず黙止していたこれらの4人の連中！」を恥じた。<sup>133</sup> ドゥ フェールは自ら申し出た。彼はこわごわ任務を遂行した一ところで彼はこの為に全くの前線へは行く必要が無かった一そして怪我一つ無くパレムバンへ戻った。

翌朝町の近くの石油設備が無傷で日本軍の手に渡らない様、蘭印軍によって破壊された。蘭印（そして英）軍はジャワへ渡る為スマトラの南東一先端部へ退却した。途中ドゥ フェールのオートバイは力尽きた。この故障した交通機関を使用不可能にしようと、彼はオートバイに火をつける為燃料タンクを開けた、

しかし、約40メートルの距離からペルスティン[それは夜中であった]の見にくい自動車のヘッドライトで、私は燃料タンクを3回もやり損なってしまった。土着兵が少し近くに立って、ライターで火を点けた：突然高い炎が道路全体に上がった一これらは雨が降っていたことから未だ濡れていて、その上に気付かずしてガソリンが流れ出ていた一激しい燃焼。そこに立っていた兵士は走り去り、私は燃え立つ足で暗闇に逃げ去ったこの滑稽な顔を決して忘れることは無いだろう。<sup>134</sup>

4

ドゥ フェールの遠征は後相対的に問題なく経過して、2月17日から18日にかけての夜中彼はバタヴィアに到着し、そこで彼はリリアと子供達に再会した。彼は陸軍予備第4大隊に配属され、学校に収容された。

ドゥ フェールは連合軍のジャワでの防衛成功の見込みは暗いと見た。彼はボンティウス通りの家を売り、収益をリリアに与えること決心した、そうすれば彼女と子供達はもっと安全な場所へ出発するかどうか、そして期日を自ら決める事が出来た。住居は1万ギルダで明け

---

<sup>131</sup> ファン ウェスト ドゥ フェールの日記、9.

<sup>132</sup> 同所、23.

<sup>133</sup> 同所、30-31.

<sup>134</sup> 同所、49-50.

渡した。ドゥ フェールは仲間の陸軍予備兵達と戦争の見通しについて頻繁に討論し、これらの話し合いの1回で何人かが断言した、「彼等は自分達の生き残れる見込みをよく熟考して、自らの命を父国、この場合は蘭領東インド、の為に捧げることにする、と。今現在ここでの見込みは相当悪いと私は見たし、そんなにすぐ私は同調しなかった、;もし未だ完全に見込みがある、その時に命を賭けるといふのなら、私は違う風に思っただろうが。」<sup>135</sup>

1942年3月8日蘭領東インドが降伏するであろう事が彼等に知らされた時、ドゥ フェールの大隊はバンドゥンに居た。ある上官がその後でゲリラ戦実施の為に志願者を募った。部下達は5分間考える時間を貰った。ドゥ フェールには長く考える必要は無かった：彼は先抵抗することは意味が無いと考えた。又彼は申し込もうとしていた同僚達を見放したけれど、彼等に対する偽りの羞恥心から申し込みたくはなかった：

私は下を向き、我々が先日そのことについてしたばかりの話し合いから見て、今確信して申し込むだろう他の者達を見上げる勇気が無かった[...]。私は顔を上げた...誰も申し込まなかった！私はその時自分で何を思っていたか描写できない。各人深い信念を表していた綿密な話し合いに何の意味があったというのか！それは私にとって恐ろしい体験だった。<sup>136</sup>

戦争捕虜の身としての長い時期が到来した。

ドゥ フェールはバンドゥン防空兵舎に拘置された。1942年4月6日この収容所は訪問を閉鎖した。日本軍は次第に厳しく行動した。誰かが手紙を鉄条網の上から投げ捨てたことで、罪を犯した者が自ら名乗り出るまで全戦争捕虜達が整列し、気を付けの姿勢で立たされた。名乗りが無く、連続して直立不動のまま26時間たった後やっと部下達は兵舎に帰ることが許された。4月22日、いかにして3人の逃亡し再び捕らえられた海軍兵士達が銃剣所持の日本軍によって虐殺されたかを見る為、全収容所が整列させられた。戦争捕虜達は動揺し、恐怖はそれ以降しっかり植えつけられた。オランダ人達もこれからは自ら監視をしなければならず、再び誰かが逃亡しようものなら、工作中である監視人も同時に処刑されることになった：「どんな心境で兵士が監視に立ったかは描写出来るものではない！[...]我々は実に恐れた。」<sup>137</sup>

1942年6月半ばドゥ フェールの陸軍予備大隊は完全に破壊された港の瓦礫を掃除する為チラチャップへ移された。ドゥ フェールはその他更に収容所にて日本語、マレー語、写真、民族学、心理学、簿記、ロシア語そして哲学の勉強について行く時間があり、同時に彼は又更に色々な本を研究し、広範なメモを付けた。バンドゥンで彼は既に日本語習得本の調達を始めていた、というのは「我々には未だ考えがあった、日本軍が蘭領東インド全体を統治出来ない

---

<sup>135</sup> 同所、58.

<sup>136</sup> 同所、58-59.

<sup>137</sup> 同所、60.

としたら、間違いなく蘭領東インドの公務員と特に司法官史が必要になってくるに違いない。」<sup>138</sup> 1943年1月初め陸軍予備軍はバタヴィアへ輸送され、セネン収容所へ配置された。そこでドウ フェールは湿疹で入院した。彼の仲間達が1月15日見知らぬ目的地へ輸送された時、ドウ フェールは自分の病気によりセネンに残った；彼等は泰緬鉄道へ行った。職業軍人グループと共にドウ フェールは2月9日日本船に乗せられ、それは彼等をシンガポールへ運んだ。

この船旅はドウ フェールにとって良いものではなかった：シンガポールでは赤痢と湿疹（‘チャンギーボール’）によりドウ フェールはチャンギ収容所の病院に入院した。

1943年3月そこで彼の財布や様々な個人所有物が盗まれた：彼の父、母、妻と子供達の写真、リアの最後の手紙と彼女の数珠、彼の万年筆と彼の日記。「この損失は私の戦争捕虜時代で個人的に起こった最悪事の一つだ。時々妻と子供達の写真を見、最大の自慢で他の者達にそれを見せる事が出来るのが我々皆にとってとても大切なことなのだ。」<sup>139</sup> 彼は戦争勃発の瞬間から出来得る限りの範囲で、自分の日記の復元を即始めた。1943年4月23日ドウ フェールは日本行きの船に乗せられた。

1943年5月20日彼は門司に到着した。そこから汽車で福岡第15収容所へ行き、そこで捕虜達は鉱山作業をしなければならなかった。この仕事は交替制で実施された。ある鉱山労働は（‘シフト’）時として1週間、ある時は10日続いた。鉱山労働の業務で捕虜達は日に15セント、3日毎に15本の煙草と1週間に1度クッキーを貰った。特に最初は多くの事故が起き、「そして毎日、私が鉱山から出て来たら、感謝の祈りを捧げた、というのは自分が無事に上がって来ればそれは御慈悲と益々思えるからだ」。<sup>140</sup> 彼は神に守られていると頻繁に感じた。そしてドウ フェールには全ての保護が必要であった、というのも彼は特別に彼を捕まえようと狙っている日本人鉱山現場監督に辛く当たられた：「ところで、私は又毎日あらゆる事で殴られ、戦争の終わり、まさに降伏近くになってやっと、自分の日記に書いたが、この日には殴られなかった」。<sup>141</sup> 多分日本軍はドウ フェールがいつも仕事をサボり、鉱山での怠業の主導権を握っていたので、彼を嫌っていたのだ。彼等は何度も彼に向かって殺してやるぞと言った：「286番は実に邪悪な労働者だから、罰を受けるだろう」。<sup>142</sup>

注目すべきことには日本軍は仕事の間、戦争捕虜達と‘普通’の話し合いも実施した。彼等は最初外人達に聞いた、彼等は市民生活でどういった仕事をしていたのかと。「私の番が来た時」、とドウ フェールは話した、「私は言った：“判事”（私はそれをどう訳してよいのか分からなかったので：国家評議会の代理登記官）。彼等の答えはこうだった：“お前は嘘をついている、何故ならお前には髭が無い！”」。<sup>143</sup> 何人かの日本人監督達は彼等の捕虜達にかなり個人的な事を話した。短気ですぐに手を上げるタイプのドウ フェール組の監督もその様に話しをした、

---

<sup>138</sup> 同所、61.

<sup>139</sup> 同所、63.

<sup>140</sup> 同所、71.

<sup>141</sup> 同所、69.

<sup>142</sup> 同所、72.

<sup>143</sup> 同所、138.

「彼の妻が又しても流産した事。我々も心から彼女に同情した。」<sup>144</sup> その他にはドゥ フェールは、ある時は重労働するが、他の日々は殆ど何もしなかった日本人の鉱山労働者達の労働リズムに驚いた「そして無分別でいたなら、彼等は仕事を故意に妨害している、と言えたことだろう」。<sup>145</sup>

捕虜間における仲間関係について彼は否定的であった。ドゥ フェールによれば、収容所の厳しい状況において少しも驚きではないのだが、戦争捕虜の身での部下達はかなり頑固になった：「故に自らの生命保護の為各人自分勝手」。この陰気な視点は彼が収容所（福岡第15にはたった2人の司法官しか居なかった）で‘罰則—と規律評議会’の一員として処理しなければならない多くの盗難や喧嘩事例により、疑う余地なく強まっていった。しかし彼は少なくとも一度人間愛と思える感動的な体験をした：「私がとても衰弱して痩せていた時、救世軍兵士[S.] ドゥヴェコットが私に彼の割り当て飯を贈り物として与えてくれた、彼はそれに代わって煙草を欲しがったわけではなく、私にはそれがどれだけ必要であったかが彼に分かったからだ！！」ドゥ フェールはその時点から救世軍の募金にはいつも何か差し出すことに決めた。<sup>146</sup>

かなり多数の他の者達と同じ様にドゥ フェールもオランダ人将校達に対して強く批判した。彼等の部下達に対する態度がかなり悪いと彼は思った：「アダム中尉を除いては全員、恰も我々が労務者である様な言葉を使う。彼等は鉱山労働者より良い食事さえ取っていて[...]、太り、栄養十分、そして随分不愉快な生活をしている我々に対して大口を叩く」

(1944年2月10日)。ドゥ フェールは沢山読書したり、彼の家族のことを思い、宗教や他の知的な事について非常に深く思考することによって空腹、旧套そして毎日の喧嘩から逃れようと試みた。収容所への到着時彼は自分の聖書と日本語習得本を所持する事を許された。れらは日本の印が付けられていた、つまりこれらの本は日本人検閲官によって承認されたことを示した。この印は本、或いは自分の日記を欠かさず続けた書物の上に「彼は貼り付けた」ので、彼は発見を恐れる必要が少なかった。

1943年8月から10月に掛けて、ドゥ フェールは彼の日記をもはや書き続けないかった、というのは彼は内臓を病んでいたからだだった。その上仕事がきつく、食べ物が粗末であった：「私は自分を引きずって仕事へ行き来する、純然たる疲労から全く話さなくなった。」<sup>147</sup>

9月彼は下痢の為14日間兵舎病になった。彼がその時貰った休養は彼を回復させ、その後の期間彼は丈夫になる様に余分な食事を貰った。しかし1943年10月/11月彼に黄疸症状が出た為、新たに数週間兵舎病になった。ドゥ フェールは回復し、彼の日本在住期間の身体的な条件は良いと言うには程遠かったが、彼の仕事班での大多数の人員より彼は鉱山での仕事を長く持続した。明らかにこれは「出来得る限り重労働は最小に押さえ、万一の場合は殴打を受ける」

---

<sup>144</sup> 同所、142.

<sup>145</sup> 同所、76.

<sup>146</sup> 同所、138.

<sup>147</sup> 同所、70.

<sup>148</sup> という彼の方式に感謝するべきところであった。

1945年3月からアメリカの爆撃が益々頻繁に激しさを帯びてきた。殆ど毎日空襲警報が鳴った。日本軍はアメリカ軍の日本上陸時、全員を殺害すると戦争捕虜達を脅した：彼等は防空壕に閉じ込められて、地下にはガソリンが上からかけられ、上に来た者は誰であっても銃殺されるだろうと。<sup>149</sup> この脅迫は実際実施されたのであろうか？原子爆弾の為にこの質問には返答が無いままとなっている。

1945年8月28日低空飛行したアメリカの爆撃機が食糧品、衣服そして薬品を投下した。全落下傘は収容所の外に落ちた。日本の村の近くで14歳の少女が落下してきた容器で死亡した。ドゥーフェールは記述した：「我々は皆それを悲惨だと思い、寄付を集め、家族関係者達に中尉を通じて事務所から提供された1000円と一緒に弔辞を作成した。

後で我々は感謝と、それが女の子であったのでそれは必要でなかったと言う返答を受け取った。」

<sup>150</sup> 次の投下では近くに落下してくる容器が戦争捕虜達にとっても明らかに危険であった。ドラム缶を落下傘に結わえてあった綱が常に切れたので、それらは猛スピードで下に来て、各人安全な場所に逃げなければならなかった：

1つがヘイムスケルクの兵舎を破り、壁を突き抜け部屋に落ち、そこではポーラックとヘイムスケルクが彼等の寝床のすぐ傍周辺をその物が一撃したのを見た。ヘイムスケルクは何が起こったのかを見る為、彼の頭を壁から外へ出した時、大きな歓声が上がった。二重のドラム缶が（互いに溶接された）イギリス人達の兵舎層を突き破って一撃し、果汁と共に全て下に撒き飛び散った。他のは図書館の近くに、更には数箇所他の兵舎連に。最も上出来はこのドラム缶が日本軍事務所を突き破って一撃し、そして我々各人を相当酷く扱った中尉の聖なる誇り高き家宝であるサムライ（=刀）、を壊した事だ。<sup>151</sup>

食料品投下のお陰でドゥーフェールは14日間で5キロ体重を増した。

8月30日にも小包が投下された。ドゥーフェールと他の者達は近くの丘に落ちて来た容器を取りに収容所から歩いた、「我々は自由な自然から眺め、住民達の貧困を見た。村で我々の目に付いたのは、余りにも多くの栄養浮腫と怪我だった、丁度我々の“兵舎病”の様に。」<sup>152</sup>

<sup>2</sup> きつい鉱山労働中でも日本国民の悲惨さを物語る兆候はあった。日本人監督達は鉱山の外で引っくり返して空にされることになっている石の積まれた手押し車の中に、時々多少の石炭を投げ入れた。これは山の瓦礫の中から唯一の石炭を探しに来て、それを家で燃料に使う日本女性

---

<sup>148</sup> 同所、71.

<sup>149</sup> 同所、142.

<sup>150</sup> 同所、139.

<sup>151</sup> 同所、139-140.

<sup>152</sup> 同所、141. ファン ウェスト ドゥーフェールは“バレンドライヤーズ”を恐らく軽い兵舎病と意味した。



達用に意図したものであった。オランダの戦争捕虜達も常に多少の石炭を手押し車に落とし、決まり文句を言った‘女性達の為に！神々へのある貢ぎ。’ ドゥ フェールによると捕虜達は日本女性達に大変同情心を抱き、「そんなに謙虚に彼女達は慎み深く自分達の夫達を信じて助力していた。悪天候の時彼女達はしばしば東インドでも使用される“パジョン” [雨傘]を持って自分達の夫を鉱山まで迎えに来ていたのが見うけられた。鉱山から出て来た汚れたアラキさん[日本の現場監督]は、彼の妻から雨傘を受け取ったので、彼女は雨の中を彼の後ろに歩かせてもらった。」<sup>153</sup>

アラキさんは戦争捕虜達には全く気楽な監督ではなかった、そして今降伏後、復讐の時が来た。デ ヴェールは特別な方法でそれをした。彼は自分のリュックサックを粉ミルク、バター缶、コンビーフ、ジャムそして煙草で一杯にし、アラキさんの留守時彼の家へ行った。彼はその人の妻に言った：

「私は286番で、アラキさんには日々殴打されていた者です。私は今家に帰りますが、貴方には同情します、なぜなら貴方は留まらなければならないからです。だから私は今貴方と貴方のお子さんにちょっとした物を持って来ています。」彼女は当惑して受け取ろうとはしなかったが、我々はそれを後ろに置いて歩き去った、彼女の嘆きを後にして。それを彼女はアラキさんに必ず伝えるだろうし、それが私の復讐だ、それで私は同時に自分の憎悪心を処理した。<sup>154</sup>

日本人現場監督との精算はしかしながら未だ終了していなかった。9月14日ドゥ フェールはアメリカ軍により指示された‘戦犯調査委員会’の‘裁判長’であった。約50名の日本人達が告訴された。前捕虜達は前に進み出て張本人を指摘し、彼等の話を述べ、それが委員会によって記述された。「我々が話し終えた日本人達は食堂へ立ち去ることが許され、そして我々側の者達に外で待ち伏せされていた、彼等はその連中に‘糞雑役’ [便所桶を空にする事]をさせたが、今回はまず桶を縁まで一杯にし、それからそれを駆け足で塵穴へ担いでいかなければならなかった。それは勿論周囲に零れ落ち、何人かは泣き出した！！彼等が我々を虐めていた時は、誰も泣くのを私は見た事が無かった。」<sup>155</sup> 開廷後アメリカ軍に提出されるべき報告書が作成された。

9月17日、夜、収容所は排除された。汽車で部下達は長崎へ輸送された。この町に接近して

我々が見たのは崩壊し、焼き払われた平地、そしてそこには20cmより高い物は何も無さそうだった！通りは何とか見覚えがあってもその周りは全て灰と炭塵であった。ある場所では湾曲して半分溶けた管が空に多少高く突き出ている、ひ

---

<sup>153</sup> 同所、142.

<sup>154</sup> 同所、143.

<sup>155</sup> 同所、148

よっとすると鉄筋家屋の残骸？平地の最後にある駅に到着するまで、我々は真ん中を突き抜けて、何も無い中央を、走行した。吐き気を起こさせるような嫌な死体の生臭い臭いがした。<sup>156</sup>

長崎の港で彼等は航空母艦ルンガポイントに乗船した。9月19日ルンガポイントは沖縄へ向けて出発し、そこで彼等をフィリピンへ運んだ貨物船に乗り換えさせられた。マニラの近くのテナントで蘭領東インドへの復帰を待たなければならなかった。

10月末ドゥ フェールはリアから手紙を受け取り、そこには彼女と子供達が無事である事が記載されていた。彼女達は未だバタヴィアに居た。11月初めドゥ フェールは軍法会議での職務を遂行する為、モロタイ島へ向けて出発する可能性を貰った。彼は即座に受諾した：彼は将校になり得るだろうし（正確に言えば：大尉）、再び彼の以前の職業である司法官に戻る事が出来た。飛行機でモロタイ島へ行き、「我々が降りた時、余りにも長い年月後初めて再び蘭領東インドの大地、我々はやった、更にもっと大勢が今も我々の後も続く事だろう：我々は大地に跪き口付けをした。」<sup>157</sup> ドゥ フェールはリアと子供達に家族再会の為モロタイへ来させた。再会のその瞬間、1945年11月18日、ドゥ フェールの記事は終了した：「何という瞬間、私はリアと子供達を腕に抱きしめて、彼女達の可愛い顔にキスをし、全ての恐ろしい年月が私から抜け落ちて行った。新しい人生が始まった。」<sup>158</sup>

又この新しい人生は戦争の続きであった。戦後35年経った1980年12月 ドゥ フェールは彼がその瞬間まで自分の日記をの1ページすら読み直した事が無かった事を記述した、「夜収容所時代の話し合いが長引くと、私は大抵夜中に日本軍との戦争の悪夢を見た経験を既にしたもので。」<sup>159</sup> とは言え1980年12月のある日、彼はやはり1度極度に小さく書かれた鉛筆の走り書きからなる自分の日記メモを捲った。鮮明になった事は「私がこの時期と比べて変ってしまった： 私はこれらの時期を今35年余り経て明らかに“消化した”。」<sup>160</sup>

ウェストラ

クルト・ウェストラは1922年1月7日デンハーグで生まれ、バンドゥン技術専門大学の学生であった。1941年の春からジャワに住んでいた16歳の若い少女が彼の女友達であったが、彼はアネケとやらにも興味を抱いていた。

彼の戦争捕虜の身としての最初の時期はバンドゥンで過ごした。1942年6月17日彼はチラチャップへ行った。ウェストラの日記は1942年7月20日からチラチャップ収容

---

<sup>156</sup> 同所、149.

<sup>157</sup> 同所、154.

<sup>158</sup> 同所、154.

<sup>159</sup> 同所、1.

<sup>160</sup> 同所、1.

所で始まっている。厳しい日本軍の振る舞いと特に数人の戦争捕虜達が罰として銃剣で処刑されたニュースにより、彼は暫くの間大変恐れた、「特に又僕が無力であったので、今までに無く不安だった。その時僕は突然斜視達に同情する（彼等がこれを読んだら僕は捕まる）、‘概念、を持った。僕は更にもっと思考するにしたがって自分が平和主義であることを確信した。僕はそういったことを全く良心の呵責無しに（外面的にも多くは内面的にも）出来るという、そこまで鈍感にさされてしまった彼等に同情したのだ。」<sup>161</sup>

1943年初め（恐らく1月）ウェストラはタンジョンプリオクのユニカンポンへ運ばれた。彼をシンガポールへ運んだ船に乗る以前、ここに彼は1週間留まった。そこからは汽車とトラックで泰緬鉄道へ行った。鉄道区間の仕事は殺人的であった。悲惨なのは特にアジア人の労働者達の下で酷く、彼等はいよいよ確約でこの仕事に誘惑させられた：「これらの人々は彼等の全家族と一緒に上流へ行き、森林で犬ころのように何千人とそこで死んでいった。至る所骸骨と腐った死体が横たわっていた。日本軍からは埋葬に時間が貰えず、取られるべき最善の衛生的状態と処置すらも、ここでは不十分だった」<sup>162</sup> ウェストラは1943年4月、既に病院キャンプへ運ばれる事になり早く成功した。それには確かに理由があった—彼は自分のひかがみに膿瘍ができ、足に傷をしていた—、しかしウェストラは安全策を取った：「日本人医師の検診中、僕は無理やり仮病を使った。」<sup>163</sup> ウェストラはもはや労働キャンプには送られず、1943年11月鉄道は公式に開通した。

1944年1月初め—彼はノンプラドックに居た—彼は酷い高熱があった：「僕はとても怖かった。僕には全く気力が無かった。誰かが僕の傍に居る間は何とか過ごす。でも暗くなると怖い。」<sup>164</sup> 彼は発熱から生き延び良く回復した。1944年5月28日彼は日本への輸送（シンガポール経由）に選択された：「5月28日僕等は出発する、十分休養し、健康、陽気、再度シンガポールへの行き道より100パーセント快調。機嫌は最高！」<sup>165</sup>

彼等はアラミス丸で日本へ輸送された。人々は重なるように接近していて、暑さははなはだしかった。アラミスが一部を構成していた護送船団は北へ向かってジグザグに進路を取った。途中数回警報が鳴った。ウェストラは（日本到着後）穏やかに所見を述べた：「後から思えばそれは実に深刻に成り得たかもしれない」。6月17日彼等は門司に到着した。人々はグループに分けられた。250名のオランダ人と150名のオーストラリア人からなるウェストラのグループは、福岡第17収容所へ行った：「驚愕、僕等が炭鉱で働く為にやって来たという事を聞いた時！」この収容所には既に500名のアメリカ人が住んでいて、彼等は「かなり墮落し、不親切」に見え、又‘彼等は益々喧嘩と挑発を探し求めている」。

最初のショックの後鉱山での仕事は思った程のことはない様であった：「数日後僕は慣れてしまった。全屋根天井がまさか下に落ちてくる事は無いだろう。せいぜい数個の塊くら

---

<sup>161</sup> ウェストラの日記、2.

<sup>162</sup> 同所、9.

<sup>163</sup> 同所、8.

<sup>164</sup> 同所、12.

<sup>165</sup> 同所、14.

い。」(1944年7月3日)この楽天的な概算はウェストラを持続させなかった。1945年3月7日数日前他の戦争捕虜が倒壊により死亡した場所で彼は労働した：「僕は恐怖から殆ど泣かんばかりだった、そこは余りにも危険で恐ろしかった。自らもう少しで石炭の層を僕の背中の上に受けるところだった。」

朝鮮人達も鉱山で働いていた。ウェストラによると彼等は戦争捕虜達よりも良い取り扱いを受けていた。明らかにそこには彼等と唯一接触する可能があった、というのは彼等はある時数個の鉱山ランプの灯元で一緒になって座ったとウェストラは彼の日記に述べている。とは言えこれがアジアとヨーロッパの鉱山労働者達間のより良い認識には何の役にも立たなかった、少なくともウェストラには。朝鮮人達は質問を浴びせ(‘迷惑な質問’、ウェストラによれば)そして突然、「何の洗練さも教養も無いその男、低い血統と身分に思える、日本軍には見下げられ、いつもは彼等にとって手の届かない雲の上の白人達、今突然そのヨーロッパ人達と同等にいる、’その曇った黄色い顔’を目の前にする’ことが彼を酷くイライラさせ始めた。この人種差別主義的な爆発に酌量すべき事情として引き合いにだすことが出来るとすれば、学生ウェストラによるこの接触はあくまでも自発的には行われなかったわけで、家からは遠く、友達や知り合いからも遠く離れ、外国で、敵の強制の下、そして過少食糧に対して暗く危険な鉱山で彼があくせく働かなければならなかった点であろう。<sup>166</sup>

日本在住期間中彼は主に休日に書いた：それは10日毎であった。彼の精神を多少気分転換させる為、彼はチェスや野球(恐らく収容所でアメリカ人達により頻繁に実行された)そして時々読書をしたり、牧師の説教を聴いたりした。1944年8月初め彼は深刻な発疹と吹き出物(ねぶと?)の為10日間‘兵舎病’になった。彼は再び数学書を勉強しようと試みたが、集中する事が最大の問題であった。戦争捕虜の身になって1年後、彼はいくつかの簡単な事もはや分からなくなっていた。この経験は彼が「僕は後でもう何の価値も無くなる」ということを恐れていたの、彼を意気消沈させた。とは言え後で彼はこの否定的な考えに微妙な差があることを知った、1945年6月戦争の終わり近く、「彼は下劣で仕事には在り付けないだろう」と思った彼の友人にさえ腹を立てた(1945年6月29日)。彼はほぼ1年前自ら同じ様な思いを抱いていた事を明らかに忘れていたのだ。

最後まで彼の身体的精神的な状態は、たまには大変緊張したり神経質になったりはしたとはいうものの、妥当であった。又彼は夜中の空襲警報やそれにより防空壕に留まることによる睡眠不足とも戦った。ウェストラは明らかにかなり自分に自信があったので、戦争捕虜の身で翌年冬も未だ生き残れるだろうということを彼は1945年6月18日敢えて断言した。しかし彼はそれを楽しみに待っていたのではなかったわけで、約1ヵ月後に彼は記述した：「僕らの衰弱した身体と日々粗悪になっていく食べ物によってここで更に冬を越す事は望

---

<sup>166</sup> その上朝鮮人達の‘迷惑な質問’が特に捕虜達の伴侶、婚約者そして友達に関するとなれば驚くには至らない。福岡第15収容所の抑留者、ファン ウェスト ドゥ フェールは彼の日記にこの事について記述した：「ジャワの日本兵によると、やはり他の男性達や日本軍とベッドを共にしたという我々の妻達についての日本軍の汚い冗談に又多く反逆がある。」(ファン ウェスト ドゥ フェールの日記、70)。

まない。」(1945年7月23日)。それは幸いにも必要無かったようだった。

1945年8月20日収容所で終戦が公式に公表された。ウェストラは即将来を考えた：「ジャワはどうなっているだろう？相当爆撃されたのだろうか？かなり日本化しただろうか？即仕事を見つける事が僕は出来るだろうか？勉強する気はもう無い。僕は今自分の人生を歩みたい。」<sup>167</sup> 日本から早く脱出する望みはすぐ打ち砕かれ、退屈さが襲った。9月15日になってやっと収容所は取り払われた。このウェストラの日記はフィリピンで終わっている。

戦後ウェストラは彼の勉学を終了し土木技師になった。1947年8月から11月彼はデンハーグのジャワ通りに住んだ。1948年1月2日彼はアガサ・アダマと結婚した。彼等は3人の子供を持った。ウェストラは1987年エジプトのルクソールで死去した。

---

<sup>167</sup> ウェストラの日記、28.

## 移送と宿泊

オーステルハウス

海上で

1943年2月2日

ジャワ海、マイバシ丸乗船潜水艦による攻撃で短い警笛6回と長い汽笛1回があった。各人いち早く甲板へ行き、予め海に飛び込む前に、日本人輸送司令官の命令を待つ。

それは愉快的な面ではないが、確かに僕達は再び何か戦争を感知し始めている。1月31日日曜日、朝6時から10時までかかって僕達はスラバヤ高等市民学校を後にした。<sup>6</sup> 駅へ向かう行進：日本軍を無視して僕達を励まそうとする大勢の女性達。（「皆さんはマドゥラへ行くのですーお元気で。」）列車内での見解は：マランへ。際限の無い車両の入れ替えで行ったり来たりでの走行。終に確定：[タンジュン] ペラック(スラバヤの港)。そこには凡そ5千トンの平底荷船が停泊している。既に甲板の上には他のグループが見える。僕達も‘積み込まれる’。これがそれに唯一当てはまる言葉だ。僕達は800人で第7船倉に居る。真っ直ぐ横たわる事は大勢の者には不可能だ。この狭い空間（かつての僕達の見解ではせいぜい200人が横になれる）の暑さと汚染された空気には耐えられない、特に夜中。半分は縦続くわか雨で濡れている。

食事：日に2回。幸い僕達は1日の大半を甲板で過ごしても良い事になっている（ここでもすし詰めだったが、少なくとも爽やか）。「公式な」報告に寄れば僕達は30日間かかって日本へ行くということだ。果たして僕達がこの‘奴隷の巢’を30日間持ちこたえるかどうか僕には分からない。と言うか僕達には寧ろ良く分かっているんだー僕達は全てに慣らされてきたのだから、この事にも。しかし魚雷には全員が怯えている、と思う、特に真夜中は。夜は全ての明かりを消さなければならない。船倉は荷物と人間で覆われ、それらが互いに重なり合っている。そして最悪なのは：外へ向かう2つの狭い、危険な急勾配の梯子。言い換えれば、800人が夜中ここから出てくるのは完全に不可能ということだ。

（僕は甲板で暫く落ち着いて書くことの出来る場所を探した。）そして白い鶏冠の波を見、船のうねりを感じる時、僕には3年半前にした他の船旅の思い出が否応無しに再度浮上してくる。その後それが自然に他の思い出と結びついていく... しかし将来の夢は皆無。多分日本軍が徐々に僕達を打ちのめしてしまったので、それらの望みや期待は、心の中の実に小さな隅へと追いやられてしまい、殆どもう出て来られない。僕達は今その日暮らして、明日が来るかどうか

---

<sup>6</sup> 定期市場から数百メートルのケタバン地区の中、スラバヤのH. B. S. 通りにある統治高等市民学校 (H.B.S.) の大きな建物は1942年3月から1943年2月まで東ー中央ジャワから来た戦争捕虜達の為の寄せ集め立ち寄り収容所であった。HBS収容所はジャワ或いは南東アジアの何処かの労働キャンプ、或いは日本へ向かう送還の予備的収容所として意図されていた。(A. C. ブルスハート その他、Soerabaja. Beeld van een stad. (プルメレンド1994), 40-41 と J. ファン ドゥルム その他、Geillustreerde atlas van de Japanse Kampen in Nederlands-Indië 1942-1945 (プルメレンド2000)、171)。

か分からない。そして実際日本へ来たら、まさか、そこで良くて素晴らしい事なんて誰が考えるだろう... ?

僕達が推察した所では、シンガポールが僕達の最初の燃料補給港となり、そしてそれから先へはアメリカの潜水艦と飛行機の危険を出来る限り避ける為、タイとインドシナ沿岸を通って日本へ向かうだろう。乗船中の最悪事の一つは、紙巻煙草或いは刻み煙草が貰えない事、そして他の「問題」は一ほぼ同様に酷い僕達の汚い、汗まみれの身体を洗えない事だ。ジャワの沿岸は今もはや見えなくなった。とはいえ僕達は未だ尚西向きに航海している。昨日舳先の前で水上へ飛び跳ねてきた数匹のイルカを見た。

オーステルハウス

シンガポール

1943年2月8日

君の誕生日、M.<sup>7</sup>、僕はそれをシンガポールの手前に停泊した時「祝う」。全てが今では何と非現実的なことだろう。あらゆる事が汗まみれの兵隊達、飯と生臭い魚味、魚雷の危険、そしてもっと全てそれら他の事々とは何と縁遠いことか。そう、その全ての他の事々：9日間の乗船後、今や既に余りにも慣れてしまったので、それをもう殆ど普通に思ってしまう。

僕達はスラバヤからバタヴィアへ行った。[タンジュン]プリオクの手前に1日半居たので、そこから僕達の以前の「ユニカンボン」<sup>8</sup> がある場所を見る事が出来た。190名が赤痢<sup>9</sup> 或いはまがいの赤痢（そしてそれはそんなに厄介なものではなかった）の為上陸；約40台の日本軍用トラックが積み込まれ、加えて日本兵達と他のガラクタ。3日間の静かな航海後は、幸いにも未だ船酔いはなく、僕達は今シンガポールのすぐ手前に居る。

日本軍は僕達をかなり自由にさせている。日中は幸い「甲板」に居られる（車、台所ユニットそして日本兵達を積み込んだ後で、後部甲板が少なくとも未だ多少空いていければの話だ

<sup>7</sup> 彼の婚約者ピーテルケの愛称の頭文字。

<sup>8</sup> タンジュンプリオクの港連の東部にあるユニカンボンは、王国郵便輸送会社、ロッテルダムロイド船会社そして「オランダ」汽船会社の港湾労働者達用の居住兵舎キャンプ場であった。日本の占領中はユニカンボンがイギリス、英印そしてオーストラリアの戦争捕虜達用の合流収容所として使用された。1942年10月からここ隣り合うコジャ村地区でも大多数のオランダ人戦争捕虜達が収容された。同じ時期、バタヴィアから海外の労働キャンプへと戦争捕虜達の輸送が始まった。ユニカンボン／コジャ村の一部はそれ以降後背地から乗船に向かう戦争捕虜の大グループの短期救済による「緩衝キャンプ」として使用された。1943年10月ユニカンボン／コジャ村は半永久的に居住する戦争捕虜収容所としては閉鎖された。（ファン ドゥルム その他、86）。

<sup>9</sup> 熱帯の国々での大腸（血便或いは赤い下痢）の深刻な伝染病で、細菌或いはアメーバーによって生じる。アメーバー赤痢によるこの病気は時として慢性化する。もしこの病気が悪化すれば、しばしば肝臓膿瘍、或いは腸膜炎を起こす。（M. B. コエロ、Zakwoordenboek der geneeskunde: bevattende de meeste in de geneeskunde voorkomende uitheemse en Nederlandse woorden, uitdrukkingen, afkortingen enz./ コエロークローステルハウス(アンネム 1989年、第23版)、209）。

が)。夜中この船倉は地獄だ。殆ど夜中中寝られない、上げ蓋が開いているにもかかわらず。これが故に突然のスコールが僕等を驚かせようものなら、夜中に大規模な滝を招き、上げ蓋の下に居る人も荷物も一瞬にしてびしょ濡れにする。

あらゆる噂が巡る：恐らく僕達はここに数日留まり、それから僕達を長崎(?)へ連れて行く他の船に移る。ここは時々すごく楽しい雰囲気になる：ハーモニカの名人は時として全船倉に歌わせることを心得ている。

オーステルハウス

シンガポール

1943年2月12日

シンガポールー島。昨日シンガポールで降ろされた。車で僕達の現収容所へ向かう大変な旅。何度目か分からないほどの仮定は立証されなかった。丘陵はイギリスの兵舎で覆われ、海を見晴らす素晴らしい所にあり、今何千人もの戦争捕虜達が住んでいる：アメリカ、イギリス、オーストラリア、シーク、オランダ人達。[...] 自分達に今何が起こるのか僕達には分からない。‘人’が言うにはここに留まることになる、と。乗船中は余りに暑く、ここは余りにも寒い。今既に24時間雨が降りっぱなしだ。僕達の荷物と衣服はここへ来るまでの遠征で(約45分)既に雨でびしょ濡れになった。

ファン ウェスト ドゥ フェール

シンガポール

1943年3月31日

1943年1月13日 [バタヴィアのセイネン収容所で<sup>10</sup>]：今日私は湿疹で入院した。それは[1月]15日同僚達が未知の目的地へと収容所を出発した時、私は彼等に同行しない結果となった。それで私は2月9日になってやっと到着し、その時結局職業軍人達のグループに入ることになった。我々は[タンジュン]プリオクへ向かって列を組んで出発させられ、そこで日本船に乗せられて、蒸し暑い、奥深い船倉に押し込められた。私は海軍従軍司祭[E. M. I 男爵]ファン フォルスト トット フォルストの隣に居た、双方半裸、そして我々には場所が余りにも僅かしかなかったので、人が反対側に向きを変えて横になりたがった場合、全列が同じ方向に転換しなければならなかった。上げ蓋の傍、遠い高所には我々が許可無しに外へ出ようものなら、

---

<sup>10</sup> 後背地からの最多数の戦争捕虜運搬の時期、1942年4月から1943年末までは、中央バタヴィアで未だ数件の小規模な仮説収容所が使用されていた。[...] セイネンでこの時期ある中国の学校に数十人の戦争捕虜達が強制収用されていた。(ファン ドゥルム その他、93-95)。



空襲警報の時と同様、発砲するに違いない機関銃ピケ隊が立っていた。我々は順番で日毎束の間外気を吸うが許されているが、今はそれが帽子一斉検査の為と分かった：<sup>11</sup> これは空襲警報の際日本軍がかぶることを意図し、それによってこの船がオランダ船であると見せようとした。果たしてこの爆撃機操縦士がオランダ人戦争捕虜達を見逃してくれるだろうか！この船の下方は上方にいる日本兵達の怒鳴りを伴って我慢出来ない暑さ、そして空襲警報或いは魚雷の際には、我々を外に出さないという彼等の確約で不安な居留だった。

2月15日：シンガポール到着の際、我々は直ちにトラックに乗せられ、それから魅惑的な別荘連や、クリケットやフットボール用と見られる、至る所果てしない芝生を供えた前イギリス駐屯兵舎のある、かなり伸び続く‘緑’の起伏に富んだ丘陵の郊外を通り抜けて走行した。このキャンプは全てイギリスの統治の下にあって、日本軍はやって来ず、ここはそのイギリス人司令官と接触するだけだ！！この船旅は私には余り良くなかった。まず私は2月22日に赤痢で入院し、これは幸いなことに早期発見ではあったが、その後2月26日、湿疹で皮膚科に入院した。

オーステルハウス

海上にて

1943年4月6日

南シナ海、サイゴンの標高。

こんなわけで僕達は確かに何度目か分からないほど他の収容所を訪れている。僕達は4月2日に出発するだろうと言われていたが、僕達の大尉(感じの良い男)が4月1日現在未だ僕達の出発に関して何ら決定的な事を知らないでいたというのに、延期や中止さえものあらゆる噂が入って来た。午後5時半頃、突然通知が来る：翌朝7時半出発。急いで未だ連絡の取れる知り合い達と別れの挨拶をする；荷造りされる、そしてその後、朝5時に起床ラッパがなるだろうと公布された。睡眠は昨夜取らなかったが、数人も共に。神経がここには作用している、と思う。夜中2時更に命令が来て、僕達の半分が6時半既に出発しなければならないという。ということはつまり朝暗い中で急がされ、追い立てられる。(ここにはつまり殆ど街灯が無く、日本時間に関連中は、朝7時半になってやっと明るくなる。<sup>12</sup>)

僕達は2食分持参しなければならない。台所は真夜中働き続けている、そしてすごくたくさん...！朝は無限量のナシゴレン。食用鍋には米と6本のウビ [サツマイモ]。お茶と砂糖！以前の習慣で更に数時間遅れは取ったものの、終に1000名がシンガポールの埠頭に到着した。客船、ハワイ丸に乗船。‘僕達の’前の平底荷船より幾分良く見える。後はいつもと同

---

<sup>11</sup> 1942年8月ファン ウェスト ドゥ フェールがその時居たチラチャップでの戦争捕虜達は、彼等の軍隊用麦藁帽子を引き渡さなければならなかった。

<sup>12</sup> 1942年4月1日から日本時間が適用された。ジャワでは‘普通時間’より1時間半先行する東京時間が有効であることを意味した。

じ状態。船倉にまとめて詰め込まれる。甲板でなく。しかし食事は一最高！既に僕達は何ヶ月にも渡る戦争捕虜の身になってから、実際初めての経験。4月3日早朝、僕達は4隻の船と一緒に護送船団として出発する：1隻は右、1隻は左、そして1隻は後ろ。救命胴衣は全員自ら所持する。不測の潜水艦の危険に関連して同じ警告「前回の様に」が再度言い渡される。（横断は前回より現在のところ危険度が少ない。）そして今3日間の航海後サイゴンに停泊している。僕達は更に先へ行くことだろう：或いはフォルモサ [へ]、或いは日本 [へ]。

ファン ウェスト ドウ フェール

シンガポール

1943年4月24日

昨夜12時15分、75名中30名の在郷軍人達が明朝8時半には準備完了で待機してなければならないと通告があった。暗い中で荷造りし、将校を呪う。私の湿疹は余り良くない。抵抗したが、健康な者達は看護、炊事そして食堂の職務を施行する為に収容所に残らなければならない。 [...] 11時我々は車でシンガポールを通り港へ向かって走行した。自由は何と心地よいことか。部分的に垣根で囲われた中で4時まで待ち、その後乗船した。クヌスト [グレイヘン] とクラスに会う。<sup>13</sup> 一日中荷積みされ、ヨッカ丸ナマに乗船して私は良く眠れなかった。

ファン ウェスト ドウ フェール

海上にて

1943年4月26日

日本へ向かって出発。12時水雷艇駆逐艦や他の船と共に出発、ジグザグに航行しながら。私の湿疹は船倉内の暑さでひどい。

ファン ウェスト ドウ フェール

海上にて

1943年4月27日

炊事を志願して、肉切りに採用された。食事は適度に美味しく、栄養がある。甲板で温水入浴が

---

<sup>13</sup> ファン ウェスト ドウ フェールは日本の侵略時代クラス、クヌスト・グレイヘンと一緒にパレムバン領地司令官ヴォーヘルサング中佐の特別オートバイ当番兵グループの一部を構成していた。（N I O D、蘭領東インド日記収集、J. F. ファン ウェスト ドウ フェールの日記）。

出来た。私はあばら肉が上手く切れなくて、解雇された。

ファン ウェスト ドウ フェール

海上にて

1943年4月29日

帝の誕生日。<sup>14</sup> 我々はサイゴンにあるセントージャックの停泊地に居る。

ファン ウェスト ドウ フェール

海上にて

1943年5月3日

サイゴンに10隻が到着し、我々は1隻の水雷艇駆逐艦と共に出発した。[...]海水水浴は多分湿疹の為には良い。ファン アルフェンは‘ガンティ（代理人）’[ここでは：乗船中互いに交替組で仕事をする者]として2日間働き、その後冷たい風の中しばしば立っていなければならなかった。日本軍は聞き苦しい程に女性の話をする。現在缶詰食が取られている、盗難により[我々は]一日食事が抜かれる。

オーステルハウス

小倉病院、日本

1943年5月7日

それはひどい旅になった。サイゴンから始まった。(料理人はサイゴンで逃亡した)。縮小型の嵐一船酔い — 夜中下方の息苦しい船倉内での悲惨な情景。(‘皆場所さえあれば嘔吐した。’)徐々に寒くなっている。腹痛患者が加わる。(特に印人達がひどく悩まされている)。間もなくほぼ10パーセントが下痢或いは赤痢に苦しんでいる。我々の医師連は自分達の出来得る手当てをしている。[H.]ラッパルド医師自身も早くに患者となった。最重症患者達の為日本軍は終に後方甲板にある数個の離れた船室を空ける。私自身も直ぐに罹ってしまった。既に早くも所謂‘病室’に横たわる。フォルモサ後は益々寒くなって来ている。甲板にある氷の様に詰めた便所を頻繁に使用する多数の病人達に持ち上がる悲惨な状況を書く事はもう意味が無い。大多数はもはや食事には我慢出来ない。状況は危機に達し、その救助として、最終的に4月24日目的地に

---

<sup>14</sup> 帝（文字通り：高貴な門）は日本の天皇陛下の称号である。4月29日は裕仁天皇の誕生日であった。

達する時、病人達は出来る限り早く病院へ運ばれ、そこで良く看護されることが日本人医師により約束される（乗船中6人死亡した）。

そして下船。病人達は埠頭に置かれ、灼熱の太陽の下に。何時間も放置された。終にトラックに積まれ、家畜の様に、そして連れ去られた。悪い道を非情な速度で通って、我々は何百という数で終に‘病院’に着いた。そう呼べる代物ではない。木、ガラスそして竹で建てられていた。前から後へ隙間風が入る。ここには幸いな事に1組のアメリカ人の若者達が我々をそのあと助ける為準備万端整えている。ここでは今5人から7人で小部屋に寝ている。

ファン ウェスト ドウ フェール  
タカオ、フォルモサ  
1943年5月9日

他の日本船舶連を待つ為タカオの埠頭に居る。

ファン ウェスト ドウ フェール  
福岡15  
1943年5月20日

日本の南島、九州の門司に到着。到着直前に [J. J.] ファン デル ドウッセン中尉が死亡し、我々が既に上陸した時更にヘルマン・ブラウウェルが。ヘラウフは多少回復した。大勢の日本軍が乗船して来て、少女達のはつらつとした顔付きで岸壁埠頭に立って見ている。我々は100人ずつのグループに分けられ、私は8番グループ、そしてそれから甲板で更に尻からガラスの試験管を入れ、そこに自分の番号が記入される‘環取り’<sup>15</sup>方式の赤痢検査が行われた。長蛇の列の中でこの様なことを、一人一人命令でズボンを下げ、後ろを向いて、深く前方に屈む。そうすると口マスクをした日本兵により環取りが行われ、そして命令を受ける：出発！これ全て日本の少女達の関心によせて多くのくすくす笑いのもとで続行した。

船の直ぐ後ろ、操車場で我々は待たされた。我々にかかなりの英語が話せる日本人中尉が居た。パンの受け取りは100パーセント期待以上のものだった。病人達は下船させられ車で病院へ行った。風景は既に上陸した時点で目立った：急勾配のチョッテン [丘陵]、全て灰色、そして木造の建物、そして混み合った汽車の通行、いたる所工場。

1時に最初のグループがきれいな2等列車で出て行った。イギリス人達はプラットフォームの他の場に居て、我々は自分達の balan [荷物] を持って他の駅へ向かって歩かされた、

---

<sup>15</sup> 環取りによる赤痢の直腸検査で、ガラスの試験管で行われた。

何たる重労働だったことか、というのは私には2つのリュックサックがあった、一つは前に、一つは後ろに！2時に我々はそこで汽車に乗った。3時まで長く果てしない工場センターを通過して走行した。我々が下車した時、ファンフルストが私の為に1つリュックサック担いでくれ、炭鉱労務者達に意図した物と我々には明らかな、両側に点呼場所がある木造兵舎の無愛想な薄暗い収容所へと！それは我々を一瞬ぎよつとさせた。日本人中尉の訓話を受けた。この収容所には既に150人居て、彼等は我々の1ヶ月前に到着していた、同じくチャンギ経由で。彼等は乗船中日に2度の食事を貰っていた：27名が船外に出され、更に27名がここで死亡した。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1943年6月8日

新しい連中が収容所にやって来た、つまりイギリス人達で、彼等は5月15日チャンギを出発した。途中1人死亡そして7人が重病。彼等は不潔で衰弱している。[...]今は幸い寒さが和らいでいるが、雨が多く、その為にぬかるみだ。

オーステルハウス

小倉病院

1943年7月2日

僕達は今ここに[小倉病院]2ヵ月半居る、すなわち僕達の本来の数(約100名)から15名だけが未だ残っている。残りは死亡、或いは‘収容所’に向かって出発したか(日本中至る所つまり数十件の戦争捕虜収容所が設置され、そこにはアメリカ人、イギリス人、オーストラリア人そしてオランダ人達が収容されていた)。[...]初期には未だ新しい‘輸送連’が到着し、その中には病人達も中に運ばれてくる、殆どはイギリス人とオーストラリア人達。とはいえ彼等は僕達よりましな旅をし死亡事例はそれほど多くない。アメリカ人達が僕等に話すには12月なかに到着したアメリカ人輸送では1200から300名が死亡した、ということだ。

ちょうど僕達の内23名が通知を受け、来る月曜日(7月12日)収容所へ向かって出発するという。僕も幸いな事にそこに入っている(コト[のせいで]！<sup>16</sup>)。

---

<sup>16</sup> コトは日本人伍長で病院看護師であった、オーステルハウスに寄れば‘人間の姿をした悪魔’。(N I O D、蘭領東インド日記収集、J. オーステルハウスの日記)。

オーステルハウス

福岡 15

1943年8月28日

7月13日ここに到着。約500名のイギリス人、オーストラリア人、アメリカ人そしてオランダ人達。[ここは] 鉱山労働キャンプ。炭鉱は直ぐ近く。[僕達は] 3交替制で働く。

ヒルフマン

海上にて

1943年9月26日

[バタヴィアから] 3グループで出発。第1グループは(参謀を含む) [朝] 3時半に起床ラッパ。5時に出発。コーニングプレインー駅へ向かって歩行。そこから列車で [タンジュン] プリオクへ。将校達の荷物は各将校につき1梱包で我々の為に輸送された。我々と一緒にオランダとイギリスの上官グループが同行した、そこには [G. J. F.] スタティウス ムラー陸軍大将、[T j.] バッケル大将、[S.] ドゥーワール中佐、そして我々の到着の際既にバタヴィアに居たグループ指揮官 [C. H.] ノーブルの1団を含む。木戸軍曹が医療品荷物の世話をするだろう。我々は今自分達の分18個の木箱を所持し、日本軍により我々に供給された6木箱。

約8時我々はプリオクにある埠頭の一つに入る事が許され、そこには数隻の日本船が横たわっていた。私は [港で] かなりの破壊を見ることと想像していたが、全ては無傷だった！ただ出航の際マストを水面から突き出した2隻の沈没した船を見ただけだった。2時[午後]に我々全員(かなりゆっくり)これらの船舶の一つに乗船させられるまで、埠頭で灼熱の太陽の下に何時間も残された。それから瞬く間に我々は出発した。乗船の条件はひどいものだ。それは約5千トンの貨物船だ。船倉やその上の甲板には戦争捕虜達が互いに重なりあっている。足を伸ばせる場所などは無い。便所は無い：船外(!)に底の開いた4個の木箱が両側に吊ってある！食事：粘ついた飯に‘スープ’(殆ど水)、日に2度配分される。しかし同じ船倉に実際数人の日本人野郎達(!)もいて、彼等にはもう少し場所があり食事も幾分良い。水浴する水は無い。各人なるべく大便をしなくてもすむよう出来る限り少なく食べる。戦争捕虜達は見事に行儀良く、多少機嫌よくしている。

ヒルフマン

海上にて

1943年9月27日

昨夜は雨だった。皆びしょ濡れ、鉄道車両（甲板に置かれ輸送されるSS-貨車 [国鉄の貨車]）の中に這って行った数人の参謀以外は。我々は更に北或いは北西方面へ航行している。約11時に我々はバンカ海峡を航行する。

ヒルフマン

海上にて

1943年9月28日

又しても夜中に雨が降った。甲板上の部下達には絶望的な状況。幸い赤痢は出ていない（3件の不確かな事例）。しかしながら数人の喘息患者、その中の一人は激しい発作。3名の日本人軍曹達<sup>17</sup>の小屋で話し合い。

ヒルフマン

シンガポール

1943年9月29日

今朝早く我々が南方方面へ航行している事に気が付いた。昨夜は雨が降らなかった。大勢の連中一何百人一は足に浮腫が出来ていて、数十人が軽い貧血。恐らく長期に渡る強制された姿勢による機械的な鬱血。確かに運動により浮腫は多少良好。午後シンガポールに碇を下ろした。

ヒルフマン

シンガポール

1943年9月30日

突然雷鳴を伴って激しいにわか雨そして船のすぐ横にカミナリ命中。甲板組は5時間雨の中に留

---

<sup>17</sup> G. J. ディッセフェルト中尉はこの話し合いで通訳の役割を果たした。彼は東アジア省の公務員であり、日本語に精通していたので、日本軍は下手な英語やマレー語で自己表現する必要は無かった。ところでこの話し合いは他に何の格別性も齎さなかった。(M. M. ヒルフマン、Fukuoka 9. Arts in krijgsgevangenschap (ユートレヒト/アントワープ 1985)、33そして‘蘭領東インド赤十字社の報告’、1945年5月24日付け (NIOD, IC 080243<sup>2</sup>)、4)。

まらされた。約11時下船。トラックでシンガポールを横切りチャンギへ運ばれ、そこには大規模な戦争捕虜収容所があり、主にイギリス人達。以前はここに9万人の戦争捕虜達が居た。3500台のベッド装備の病院がある！

オーステルハウス

福岡15

1943年10月15日

南京虫、プラッチュス<sup>18</sup> と蚤がここに君臨している。痒みには参るし、それらを取り除く事ができない。ここでは最近寒さにも同様に参っている。

ヘレ

シンガポール

1943年10月23日

日本軍が所持している中で最も粗末に思える平底荷船による3日間の船旅後、僕達はシンガポールに到着した。最初から始めよう。僕達はかなり朝早くコーニングプレイン [バタヴィアの] へ連行され、9月26日 [タンジュン] プリオクで下車させられた。埠頭で3時間ほど留まり、[それから僕達は] 終に乗船した。それは小さな平底荷船で、4千トン以上は無い、そして僕達はそこへ2600人乗り込まなければならなかった。まずは全員船倉へ、出来る限り多く。下方へ向かうのに1つ階段があり、船倉内の2つの甲板間に彼等は板床を作ったので、各80センチ高さの階層だ。やっとのことで直立に座る事が出来た。座る場所があったが横になることは絶対に不可能だった。この船倉に全員詰め込む事は出来なかったので、残りは外の甲板に泊まらなければならなかった。

さて、それはひどいものだった。下方では暑さでびしょびしょだ。すぐさま濡れになり僕の皮膚のしわは湿気で伸ばされる。全員上方へ逃げた。甲板には場所が無いから立っている、押し合いへし合い。立つ、立っているのみ、というのは歩けないから。後方甲板に夜中奪い取る場所があるのを僕は知っていて、本当は来る事が許されないのだが、そこで自分の頭をどれかの鉄の塊にのせて寝た。真夜中強い風を伴ったにわか雨。僕等はそこに上半身裸で立っていた。それはそれは寒かった。この様に僕等は3日3晩過ごした。あらゆる事にもかかわらず、可笑しなことに尚且つ眠れるものだ。どのようなであれ寝むった。

朝僕達は暫く機械室で僕達の衣服をよく乾かした。その壁がいつも焼付くように熱

---

<sup>18</sup> 毛虱の蘭印軍一隠語。(N I O D、蘭領東インド日記収集、J. オーステルハウスの日記)。



かったからだ。便所はどんな風だったか分かるかい？下方が幅広い割れ目になった木枠、船外にぶら下げられている。ロープで。甲板の手摺りの上からその木枠の中に潜り込み、それから用を足した。全ては結局のところかなり滑稽だ。君の[夫]は全てのそういった災難の中で相当ひょうきんだ。君は小さな身体を大綱と防水帆布の間に挟み、雨風を避けながら、汚いブリーフと首に巻いたタオル以外何も身に着けていない君の夫をかつて見たことがあるだろうか。僕はそれを嫌悪して回顧することは出来ない。状況が悲惨であればあるほど、そこには益々滑稽さがあった。

9月31日<sup>19</sup> シンガポールで僕等は下船させられ、トラックで町を通り抜け、兵舎のあるチャンギへ向かった。この都市はかなり被害を受けていたことが見られる。未だ多数の車が走行していたが、他にはこの都市は相当静まり返っていた。僕等は爆撃された家屋等の傍を通過して全市を通り抜けた。日本人船員集団が歩いていたので、かなりの軍艦が停泊している様だ。チャンギにて僕等は兵舎連で停止、そして僕が最初に見たのは、1月の輸送で故意に残留したベルトだった。彼は元気そうに見え、ピート・サロモンズと兵舎で一緒だった。彼はその赤痢により2度の輸送では残留した。彼はここで2回赤痢になった為、この様に残留していたというわけだ。とても元気そうで、徐々にピートと同じ様に。

[10月]20日僕達は再びシンガポールを出発した。‘僕達’と呼ぶのは僕等の1団、‘ピンク大隊’の事だ。紫大隊は既に数日前先に出発していた。僕はベルトと一緒に居ようとして言い逃れをした。日本軍がここに敷設する飛行場へ向かう僕等の雑用の一つで、僕は流感とも何か他ともつかない物にかかった。それが何であるかは知らないよ。彼等がそれをマラリアと考慮し、出発の日に病院へ送り込まれるまで、とにかく僕はそれを利用した。僕は自分のマラリアと称するもので残留し半勝を得た。というのは僕の所に昨日突然紫大隊が戻って来たもんだ。急いで船から引き戻された。彼等は既にあれからずっと停泊中で、多分余りに多くの赤痢事例が出たので、再び下船させられたのだろう。ここで現実多くの赤痢が出ている、それは全くその通りだ。ピート・シレヴィスも残留し、彼は重症の赤痢発病で大病院に居る。とにかく、‘紫’が戻り、ベルトと一緒に居られる僕のチャンスは恐らく失われてしまった。‘紫’が再び出て行く時は、僕は彼等と一緒に日本へ行かなければならないだろう。かなり寒さに僕達は悩まされることだろう。暖かい衣服は供給されたが、日本軍は出し惜しむ。僕達はそれらをここで受け取り、僕達が全ての将校達から上級軍長に至るまで供給出来るちよほどの数だった。僕達には何もない。

ヒルフマン

シンガポール

1943年11月6日

朝11時半トラックで出発、夜6時ハワイ丸に乗船。2つの船倉がある：1つは前、そこに92

---

<sup>19</sup> 日記著者は恐らく9月30日を意味している。

9人が詰め込まれ、後方の船倉には300人。16名の将校達、軍医5名、軍属薬剤師2名、歯科医1名、海軍将校3名、陸軍将校5名を含む合計1229名の人力の輸送。更に未だバンドゥンから我々持参の17個の医薬品梱包荷物。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月7日

朝9時半シンガポール出発。赤痢患者1人。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月8日

1等海軍大尉の測量はを、前方船倉、690平方メートルに919人そして後方船倉、265平方メートルには310人と決め、それは1人につき平均77平方センチメートルということになる。昨夜は全ランプが消灯され、全舷窓は閉じられる。大気は悪臭を放つ息苦しさ。午後、ハタ軍曹から命令を受けた、とりわけ：もはや誰も甲板には来られない。唯一9時から10時と15時から16時までは上げ蓋に座る事が許されたが、そこにはせいぜい50人が可能なので、各人朝と午後に10分間だけ大気を吸う事が出来る。患者：赤痢2人、下痢1人、腎結疝痛1人、火傷2人（粥鍋が下落）。

ヒルフマン

サイゴン

1943年11月11日

午後4時サイゴンの停泊地に到着、そしてそこに停泊。赤痢と下痢はたいした事無し。

ヒルフマン

サイゴン

1943年11月12日

ここでの停泊中はもはや全く甲板に行く事は許されない、小便と大便以外は。この船倉内の大気は蒸し暑く、前方船倉も同様。我々は全員半裸で発汗がひどい。入浴のチャンスは無く、手を洗う事さえも。我々の衣服は悪臭を放つ。日に2回の食事、飯にたった匙1杯粗雑な野菜種と数個のサイコロ肉。飲料に日本茶を貰う。現在腸炎4人、<sup>20</sup> 下痢1人、左足に2度の火傷1人。赤痢患者達は今合計8人で、彼等は後方船倉で一緒に寝ている。この赤痢はかなり良性だ。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月13日

夜6時。サイゴンを出発。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月15日

今朝、側面にフランス国旗が描かれた淡い色の対向船！我々の護送船団は明らかにたった3隻からなりたっていて、時として小さな水雷艇駆逐艦、時として水上飛行機によって護衛される。好天気、かなりのうねり、その為若干数の軽い船酔い。新しい病人無し。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月18日

荒れ模様の天気、全舷窓は閉められたまま、船倉は悪臭。夜中絶えずゴキブリが我々の周囲や上に。私は常に鼠の排泄物の臭う隅に居る。午後嵐。甲板にある我々の台所は波によってバラバラに打ち砕かれた。既に出来上がっていたカチャンーイジュスープ [小さな、青豆] は甲板上に流

---

<sup>20</sup> 腸粘膜の炎症

れ出た。今は日本軍台所で料理されなければならない。前方—後方甲板の便所は、場所を移され、傷つけられた、船外に打ち碎かれる恐れがある。未だ水が絶えず前方船倉内に打ちつけている。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月19日

嵐。この船は前進に手こずっている。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月20日

嵐。昨日の如く。日本軍は上げ蓋から水が中へ流れ入ってくることや便所が船外に打ち碎かれるのを何も防ごうとしない。

ヒルフマン

タカオ、フォルモサ

1943年11月21日

昨夜この船は今までになく荒れ狂った。12時タカオ(フォルモサ)の停泊地に到着。間に合った、というのはこの2日間野菜がもう無かったのだ。今日は飯と魚屑。ところで我々は嵐の為2日間遅れて到着した。

ヘレ

タカオ、フォルモサ

1943年11月22日

5日間の嵐の後、昨日フォルモサに到着。僕達は11月6日にシンガポールを出発した、又しても‘突然’。僕達は前夜それを聞いた。僕はベルトの為に煙草入れ袋を仕上げたばかりで、即それを彼の所へ持って行き、別れを告げた。阻止するものが何も無かったので、僕は同行しなければならなかった。僕達はハワイ丸に積み込まれ、その後直ちに航行した。[11月]10日サイ

ゴンの手前、というか寧ろサンージャック岬或いは日本軍が呼ぶサンジャコの停泊所で碇を下ろした。その後沿岸つたいに北東へ向かって出発した。海岸は美しい、ただし酷く荒れ果てている。玄武岩が重なり合った高くそびえた岩山。あちこちは砂浜。沿岸で曲がった時、僕達は激しい風力を受け、相当なうねり、多くの船酔い等。食事は単調だった。日本軍は缶詰に玉葱を加えて割り当てたので、僕達は毎日細切れ肉の殆ど入っていない大飯を食べた。それは最終的に美味しかった。近頃は飯に焼き海苔を貰った。

フォルモサは既にかなり寒い。噂では明日暖かい衣服が配布されるとの事だ。そう望む。港には日本軍隊を一杯乗せた多くの貨物船と1隻の航空母艦が停泊している。これらの連中は僕達より不安な将来に直面しなければならないだろう。フォルモサ港は悪くない。戦略的には素晴らしい。丘陵つたいの新しい入り口やその後ろには大きな港のドック。船舶は長く停泊し続けない。

ヒルフマン

タカオ、フォルモサ

1943年11月23日

甲板の臨時台所は日本軍によって再建される。日本軍は我々各人に綿ネルの毛布を配布した。我々には暖かい衣服も言い加えられたが、これを貰う事は無かった。我々は岸壁埠頭で魚を買おうと試みる。

ヒルフマン

タカオ、フォルモサ

1943年11月24日

我々は岸壁埠頭で何も買えない。少量の食糧が荷積みされる。

ヒルフマン

タカオ、フォルモサ

1943年11月25日

今後我々は食事用の油が貰えず、肉は半量（我々はどっちみち既に肉など貰っていない）、と日本軍から通達が有る。甲板上の台所は再び組み立てられ、使用されている。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月26日

タカオを11時に出発。

へレ

海上にて

1943年11月26日

5日後、僕達の直ぐ前に航空母艦と数隻の駆逐艦を含む13隻の護送船団がタカオ港を離れた。その間僕達が分散されると聞いた：僕達から350名が神戸につき次第、他の収容所へ行く。食物は未だ粗悪だ。乾燥米に微塵切りのワル [南瓜]。大飯、少々 of 南瓜。この中に微かな肉がある、そう称するほど価値は無いが、一方では日本兵が食べきれず、船外に投げ捨てている、卑劣な奴等。既に相当寒くなってきていて、更に寒くなる一方だろう。僕達は暖かい衣服の代わりに一枚の毛布を貰った。何も無いより多少はました。僕のベッドカバーはもうそんなに枚数がなかった。

ヒルフマン

海上にて

1943年11月27日

揺れる海。野菜の分量は日本軍により半分に減らされる。朝9時半空爆。12時 [護送船団の] 1隻に命中したので、乗客達はそこを離れなければならなかった。結果：乗船してきた約900名の難船者達に場所を作る為、戦争捕虜達は後方船倉から前方船倉へ。数時間蒸気をたて続けた後、中国の沿岸内にやって来た。穏やかな気候、時速約10マイル。海水は濁っている（揚子江の河口）。前方船倉内は困難だ（空間と人数について数値を参照<sup>21</sup>）。

---

<sup>21</sup>ヒルフマンはここで、この項目以前、1943年11月8日付けの彼の日記抜粋を参照する様指示している。

へレ

海上にて

1943年11月28日

昨日11時に華麗な出来事があった。僕達は航空母艦のちょうど後ろに航行している。この横にはタンカー、その前は第1号船、大型の平底貨物船がついている。突然この護送船団がアメリカの(?)3機或いは4機の、これには相当様々な見解があるが、飛行機に攻撃された。主要攻撃は航空母艦で、これは数回‘近接爆撃’をした。第1号船は1弾を受け命中そして‘近接爆撃’、これは1万トンには過剰だった。僕達は静止し続け、全乗客達を引き取らなければならない。見積もりでは、僕達現在2600名で航行している。1隻の水雷艇駆逐艦が乗客達の移動を助けた：女性、子供そして兵隊達。5時間後、その船は沈没し、僕達は先を航行した。最高なのは300名の船尾の全戦争捕虜達が、僕達の居る船の前部に収容されなければならなかったことだ。僕達は又重なり合う、2つの船倉に1200名、だが僕達は未だ横になれる。食事はこれで良くなるわけがなかった。僕達は既に乏しかった、そして今は勿論移された難船者達によって更にもっと少ない。この船は全速力で航行し、日本に早く着く事が予想される、又多分難船者達の為の間他の港に。とかくする内に冷たさは石のごとくだ。今年は寒い聖ニコラスとクリスマスになる。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡第15

1943年11月9日－30日

後2日でここに来て半年になる。年月はかなり早く過ぎ去ったとは言うものの、我々は多くの不愉快な時期も経験してきた。今はこの寒さが多くの心配事の要因となるだろう。数日寒い、風の強い日々があり、鉱山から戻るや否や、食事或いは点呼で凍えながら立たなければならない時まで4枚の日本製毛布の下で横になっていた。4時半に起き、食事をし、凍えながら点呼に立ち、そしてそれから鉱山に行くという朝の作業は全く冗談ごとではない。鉱山に居た時はいつも新たに嬉しかった、。全衣服をつけて寝るのだが、時として十分暖かにならない。そして温度を上げる為のストーブでさえ何処にも無い。11月21日に僕達の体重測定があった時、そこにはストーブが燃されていた：何と気持ち良かったことか！

ヒルフマン

海上にて

1943年11月30日

昨日午後5時満潮を待つ為揚子江前で停泊。夜9時汽船で向かったのは?(上海の近く)。朝上海の埠頭で停泊。12時出発。滑らかな海。

ヘレ

海上にて

1943年12月1日

昨日上海に寄港した。前日水が既に黄色みを帯び、後には茶色になった。僕達が上海に近づけば近づくほど、それは益々ぬかるみっぽくなっていった:中国の黄土。僕達は野菜や米を積み込む為朝上海に留まった。又千個のパンを積んだトラックも待機していた。心地よい天気だった。冷たいが、風はほぼ無くそして気持ちの良い太陽。僕達は野菜を船に積み込み、僕は数本の人参をポケットに隠した。何と蘭印の人参と全く味が違うことか、もっと柔らかい。パンは今朝朝食に貰った。本当の小麦粉だ。それらは悪くなかった、あの粥の後では美味しかった。今朝僕達は攻撃以来もはや近くにいなかった護送船団の後ろに追いついて再び航行した。それはかなり弱くなっていた。航空母艦、2隻のタンカーそして1隻の閉延平底荷船が未だ残っている。僕達はとてもゆっくり航行したが、聖ニコラス前にはやはり日本にいる、と思う。僕が揚子江の他に上海或いは中国で見たものは殆ど無い。家々は同じで、まるで全域中国の収容所みたいだ。中国人達は全員青か時として淡い赤の服に身を包んでいた。要するに全東領域は全て同じということだ。でも日本は違うことだろう。

ヒルフマン

門司、日本

1943年12月3日

新しい腹部患者。午後5時門司の停泊地に到着。風の為もう少しのところでこの国にぶつかる所だった。氷のように冷たい。



ヒルフマン

福岡9

1943年12月4日

[門司到着後] 全下痢患者の試験管検査。午後5時下船。大きな倉庫(映画館?)に集合。夜9時半列車で目的地へ。夜中1時に駅から収容所へ向かって約45分、相当困難な徒歩の旅。収容所では更に詳しい検査まで、**全ての**荷物を手渡さなければならない。外で整列。全て凍りつく寒さ! 木造兵舎連に配分され、そこには各人用に4枚の毛布と1対の上着があった。兵舎連は無暖房。毛布があるにもかかわらず誰も寒さで眠れず。

ヒルフマン

福岡9

1943年12月5日

寢室兵舎以外更に日本式風呂場、1つの食堂、1つの炊事場、1つの集会場、3つの病院兵舎と1つの外来診療所がある。この収容所は周囲に高い木製の囲いが続いて完璧に閉鎖され、溪谷にあり、一方地面は全体に傾斜している。厳しい日本の警備。[...] 10件の兵舎があり、そこに我々のグループの407名が配分された。

オーステルハウス

福岡15

1943年12月15日

ここでは最近身に突き刺す寒さだ。気温は大抵零下のちょっと上をさま迷っている。そしてその上殆ど服が無いので、僕達は病棟で少なくともほぼ一日中毛布の下に居る。

ヒルフマン

福岡9

1943年12月6日

常に夜間の霜、寒さで寝つきが悪い。

へレ

宮田(福岡9)

1943年12月11日

聖ニコラスの日に日本へ着きそして寒い、それは実に寒かった。それは門司港であったと推測するが確かではない。海岸に一直線の山地。僕達の上を謂わば道と市電が走っているのが見えた。僕達はそこで降ろされ、長い数読みの後、港の映画館に収容された。そこで全員が完全にバラバラに飛び散っていった。1200名が異なったグループに再分割された。合計6グループ、そこから僕達は第6グループ、400名からなる。僕達はパンを貰いそれから駅へ。日本野郎の汽車は綺麗で素晴らしいスプリング、僕達蘭印の「汽車」よりもっと良い。3時間走行後僕達は小さな村の駅に到着した。ここからあばら道を、そして1時間の歩行後収容所に着いた。道は村を通り抜けて様々な工場風建物の傍を通り、それは縦抗らしかった。僕達は鉾山地帯に上陸させられ、鉾山で働かされることになりそうだ。石炭の掘り起こし。

この収容所は滑稽だった：引き戸と紙製の窓でできた日本の人形の家。壁は木と粘土に藁を混ぜたもので、床は5センチ厚さのマット [で作られ]、そこで僕達は寝なければならぬ。

へレ

宮田(福岡9)

1943年12月13日

この国自体は山と松林で素晴らしい。僕達の収容所から田園の連なり、土手等も下に見え、まるでジャワの様だ。ここでは松林が境界線になっている。背景にある大きな山々、一部は松林、一部は他の物が一面に生い茂って、それらが秋の紅葉で緑を背景に一際目立つ。この村自体も独特だ。引き戸の家々。子供を背中に乗せた年配の女性達。東洋と西洋ごちゃ混ぜのうわっぱりを着た若い女工達。大半の男性は西洋の衣服を着て歩いている。着物は殆ど見ない。恐らく(?) 鉾山で働いているある種のうわっぱりに身を包んだ女性達。全員例の日本軍帽をかぶった男性連：市民或いは軍隊、皆同じ。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1943年12月21日－24日

我々が4時に「鉾山の仕事から」帰宅すると、外は未だちょっと気持ちが良いのだが、それから

冷え冷えとし、手拭を頭にシミトンをはめて、毛布の下に引き籠もり始め、既に我々の全ての服と4枚の日本製毛布以外の布なら何でもその上にかけて寝る。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年1月24日

毎日素晴らしい天気が続いている。何と実にすごく温和な冬だろう。少々夜中の霜程度だが、日中はここ最近良い天気だ。

オーステルハウス

福岡15

1944年1月26日

近日中に150名の新参者達がやって来ることだろう。囲いが取り去られた。2件の新しい兵舎(病人達用)が加えられた。

オーステルハウス

福岡15

1944年2月1日

夜中4枚の毛布の下では暖かくなるとは言うものの、この寒さは未だ耐えられる。そして既に他の物事にも慣れる：虱が最高のペットとなる；時々余りに凶々しいゲストを殺し、後は血に委ねる彼等の良い生活を許す、未だあればの話のだが。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年3月3日

彼等は2件の兵舎を空にした、僕達に近々かなりの数による収容所住人数の拡張があるらしい。噂では：100名のアメリカ人がそこへ加わる。

ヒルフマン

福岡9

1944年4月1日

3月28日3名のアメリカ人看護士達が到着した。彼等は1942年4月にバターンで捕虜となった。

ルーゲ

シンガポール

1944年6月5日

アラミス(フランス船)に乗船する。

ルーゲ

海上にて

1944年6月6日

約10時出発 [シンガポールを]。タンカーも同様に。我々は2隻の戦闘機に護衛される。大勢の高官<sup>22</sup>。将校連と婦人達が乗船。場所はかなり狭いが、我々は順番で甲板へ出る事が許される。食事は非常に少ない。

ルーゲ

海上にて

1944年6月10日

昨日ある人が脳性マラリアで死亡した、軍曹士官候補生 [A.W.] ルーカッセン。今日船外に出された。船は停止しない。全ては滞りなく進行した。

---

<sup>22</sup> ‘P’ 或いは ‘P.’ s’ に関してはルーゲは彼の日記の中で日本人を意味している。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年6月7日-14日

[6月14日] 我々は移転しなければならず、ドゥ フリース中尉の下、第5兵舎内の、台所の隣で6人一緒の上段部屋に配属された：[軍曹 F.J.] スホットホルスト、[J.W.] ル コムテ、[A.G.D.] ヘンゼル、[Th.A.] セルダーベイク、[S.] デュヴェコットそして私、だから今は部屋で一人くつろぐ事は終わった。しかし私はやはりこの組み合わせを幸いに思った。故にもはや書くことは出来ないだろう。

ルーゲ

門司、日本

1944年6月16日

門司島の湾岸に到着。

イエッテン

門司、日本

1944年6月17日

1944年6月5日から15日まで船旅；耐えられない暑さ。我々はまるで缶詰の鯛のようで、全く換気無し。6月16日：夜爆撃、我々は何処に居るのか分からない。対空砲火ががなりたて、地獄の雷鳴。我々はまるで袋の猫の様に感じる。

ルーゲ

門司、日本

1944年6月17日

全員が日本の消毒キャンプのあった島へ行った。全員クレオリン風呂と称するものに入った。この中に5分入っていなければならない。それから後少々綺麗な熱い湯でしっかり洗い落とす。王様気分の贅沢風呂、乗船中の暑さの後では。

イェッテン

折尾(福岡15)

1944年6月18日

消毒施設に運ばれた後、我々は鉄-石炭工場のある九州の北方港、門司の湾岸麓に居る。山のあ  
る傾斜面に綺麗な伝道教会、港には我等の愛するマリア像が見えた。折尾の近くの鉱山収容所に  
到着。

ルーゲ

福岡21

1944年6月18日

11時。全員この島福岡に上陸。ここで我々は自分達の先導者連(朝鮮人達)から日本人に引き渡  
された。朝鮮人達は再び戻って行った。全島は工場都市だ。石炭とセメント。水上は全て軍事交  
通。至る所女子と婦人達が働いている。全員化粧をしている。住居は木造で実に倒壊しそうだ。  
[夜] 10時列車に。電[気の]車の客室はかなり広くて綺麗だ。[夜] 11時半折尾に到着。  
乗換え。

ヒルフマン

福岡9

1944年6月18日

今日ホルストハウス1等中尉先導の下に100名が到着。全員オランダ人で、ほぼ全員ヨーロッ  
パ人。彼等は1942年以来タイにて非常に悪い状況の下で働いていた。[彼等は]多くの死者  
を出し、ここは良いと思っている!

ルーゲ

福岡21

1944年6月19日

我々の収容所に2時半到着。それは鉱山地帯、中間だ。1ヶ月の休養後、我々はここへも働く為  
に来ている。[...]我々は300名の人力で、その半数は職業軍人達。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年6月19日－20日

夜中1時に300名の新参者達が収容所にやって来た。[...]我々が朝、[6月]19日目、鉦山から戻ってきた時、そこに300名のみすばらしい髭を生やしたオランダ人達が整列していた。彼等はかなり太って見え、シヤムからやって来た、そこでは恐怖支配の下に2つの鉄道幹線を敷設し、赤痢等による大勢の死者、そして時には殴打されて半殺しの目に遭わされた。1万5千名のオランダ人中、約2500名がそこで死亡した。<sup>23</sup> これは私が実際のところ一緒に行くはずのグループだった。<sup>24</sup> これで又しても気付くごとく、神の処分は我々自身で選択したがるよりも大抵好転的で、我々にとって最良である事が後になって分かる。ニッテルとウェルドムラーが元気で、最初のはビルマに、他のはここの何処か近くに居ると私は聞いた。[B.]スハウテマーカーと[H.G.]クフドは死亡した、<sup>25</sup> 私は殆ど想像出来ない。クフドからは思いもしなかった、彼は栄養士としてあらゆる種類の植物の中で食用になる物を良く知っていたのに。彼等は未だ何かもっとジャワからの事を聞いていた：女性達はそこで収容所に居るだろうが、足りない物は無い。彼等によると今全戦争捕虜達がジャワから出て行った、という。バンカはかつて爆撃された。この戦争の経過から彼等はここで収容所に居る我々よりもっと僅かな楽天的な考えを持っていた。

鉦山では我々4名でへとへとになるまで働かされているが、タイからの全てを聞くと、ここで余り文句は言えない。新参者達はかなり元気そうに見えた、というのも彼等は12月からある種の静養キャンプに居たからだ。鉄道の敷設間、彼等は日に分隊ごとに職務を受け、病人が出ても彼等はやはり一緒に仕事に連行された、万一の場合には担ぐか或いは松葉杖で。他の連中がこの職務を仕上げなければならず、時としてランプの光で12時まで、そして彼等がそれから再び4時に起きなければならなかった時には、時として数人が死亡していた。又彼等は時々作業中棍棒で殴り殺された。数件の収容所では25名中3人だけが生き残り、残りはコレラやマラリアで死亡した。

---

<sup>23</sup> 泰緬鉄道では約1万8千名のオランダ人が働いていた；彼等の中から約3千数百人がそこで死亡した（ドゥ ヨング 11b第2部半編、697）。

<sup>24</sup> この項目以前、1943年3月31日の日記抜粋参照。

<sup>25</sup> ベルナルド・スハウテマーカーは1943年3月25日キンサヨクで死亡した；ヘニング・グンター・クフドは1943年4月19日チュンカイで死亡した。（『蘭領東インド軍と東インド抵抗運動の榮譽名簿；NIOD』）。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年6月21日

3日前、[6月]18日に、100名のオランダ人が加わった。彼等はタイから来て、そこでは鉄道で働かされていた。彼等の一部は更にチラチャップからで、[1943年]1月出発した2100名だ。大勢が死亡し、大半はコレラ、マラリアそして赤痢で。ここへ彼等と一緒に来た中尉はそこで死亡した連中、2800名のリストを持っている。戦争捕虜の70パーセントがそこで死亡した。

ロールとヤンセンはその中に入っている。彼等が活着しているかどうか僕は耳にしなかった。パウル・ドールマンとタフ・ハウジンガ、同じ船でここ日本へ到着したとはいうものの、他の収容所へ配置された。

ルーゲ

福岡21

1944年6月24日

この収容所は約100メートル平方大だ。建物は綺麗だが、もろく建てられている。全室には5センチ厚さのマット [が敷かれている]。1人3枚の毛布。

ウェストラ

福岡17

1944年6月27日

タイー日本間の旅の期間。日本へ向けて。僕達はそこへ5月のサクランボと桃の時期に到着する！僕は衣服を十分持参している、健康だし、良い友達は居るし、陽気だ。怖くはないぞ？しかし、思いの外がっかりだ！6月2日の朝早く僕達は [ノンプラドック(タイ)から] シンガポールに着く。この旅は以前より少々まだ、とはいうものの規則的に日に2回食物を与えられ、のどの渴きを癒してもらうことで僕は未だちょっと家畜の様な気分だが。入浴はかつてタイの国境にある駅で出来、その後は川で。シンガポールで僕達がやって来た豚小屋は、ジャワから来たばかりのオランダ人1団によって開け放たれたばかりだった。彼等の知っていた限りではジャワは全て未だ大丈夫らしい。未だ何も必要としていない。市民達もジャワから連れ去られたという。父さんは既に出て行ったのだろうか？勿論北フランスで上陸が行われたはずだ。シンガポールはひどい欠乏に苦しんでいる。日本軍はそれを気にかけていないようだ。彼等は事情をそのままにさ



せている。明らかに経済指導力の概念が全くない。住民達は猛烈な反日本。特に中国人達。僕達の近くに日本軍には従いたがらないグルカのキャンプがある。彼等は日本軍の相当な拷問に耐えなければならない。誰かが黒水熱で死亡した。<sup>26</sup> ノンプラドックのオーストラリア人1団は未だ僕達と一緒に旅をしている。イギリス人達は僕達より1日前に出発し、僕達より随分後に日本へ到着した。

数日後僕達はメッサジェリス・マリティメスのアラミスで出発した、未知の目的地へ。僕達は又しても近くに重なり合い、暑さはひどい！食事はまあまあだ。飲み物は十分 [ある]。僕は時間の大半甲板にいることに成功。気晴らしに頻繁にチェスと読書。幸い日本軍は我々を虐めない。有力者や芸者達が乗船している。見つとも無い！広いニッカーズに後は全て西洋の服、大きな角縁眼鏡をかけて。朝はビスケットを食べ、一種の非常携帯食或いは船用堅パン。午後と夜は飯に魚のスープ或いはカレーとかそういった物。誰かが暑さで脱水した。塩水注射で [彼は] 何とか持ち応えた。僕達は護送船団でジグザグに航行する。途中数回警報が鳴った。後から思えばそれは実に深刻に成り得たかもしれない。船は素晴らしい。徐々に僕は忍び込んだり歩き回って事情を偵察した。再びちょっと西洋の贅沢を見ることは嬉しい。更に北へ来るに従って寒くなっている。甲板ではこのところ毛布すらかけて寝ている。

僕達は6月17日門司に到着する。夜中爆撃を経験した。僕はベッドに寝ていて、流弾が飛び散るのや、サーチライトが見え、飛行機と爆弾を聞いた。上陸してクレゾール風呂で消毒。環取り検査 [赤痢検査に関連して]。上陸して異なった収容所連へ行く色々な集団に分けられる。250名のオランダ人と150名のオーストラリア人が一緒に福岡俘虜収容所第17へ。驚愕、僕達が石炭鉱で働く為にやってきたと聞いた時！6時間余り素晴らしい列車で走行。大牟田から約1時間ばかり歩行！実に空腹で眠い！

この収容所は既に500名のアメリカ人が住んでいて、彼等はフィリピンから来ている。大半はそこからそそくさと追い出されたごろつきどもだ。荷物が検査される。僕達はパンと豆スープの3食を貰う。本当の粉で出来たパンを食べるのは再び贅沢だ。こうして見ると‘ここは天国’だ！場所は最高だ。

14人部屋の兵舎、歯科医所属の完全装備の病院。<sup>27</sup> [...] 別の食堂。売店は価値が無い。電燈。水道。僕達は本物の日本軍によって監視されている。朝鮮兵達はここでは見ない。衣服はここでは軍隊から十分貰っている、鉱山の物と同じく。僕達は鉱山の仕事を請け負わされる。僕は良質の日本製ゴム靴、敷布団、2枚の毛布を貰う。この収容所は海の近くにある。近くには垂鉛工場、化学工場、更に数個の鉱山がある。鉱山と同じくこの収容所にも良い温水入浴場所がある。

<sup>26</sup> 熱帯マラリアの複雑化したもので、血液破壊と腎臓損傷を伴う。かなり暗色の（‘黒’）小便が出ることにより患者は危篤に陥る。（N. ベイツ、De verre oorlog. Lot en levensloop van krijgsgevangenen onder de Japanner. (メッペル、1981), 245)。

<sup>27</sup> ウェストラは後になってここに描写した：「最初は十分な医薬品。後では徐々に少なくなる。最後の2ヶ月は非常に悪い交通状況によりもはや何も無かった。」(NIOD、蘭領東インド日記収集、C. ウェストラの日記)。

ウェストラ

福岡 17

1944年6月28日

昨日ノンプラドックのイギリス人1団が到着した。彼等は、僕達の14日間に反して、28日間乗船していた。彼等はマニラとフォルモサを通過して行った。彼等の護送船団の水雷艇駆逐艦1隻とタンカーが魚雷攻撃された。又、更に日本が見える所で、500名が救助された900名の戦争捕虜達を乗せた船。推察するに僕達がシンガポールで出会ったオランダ人達。<sup>28</sup>

オーステルハウス

福岡 15

1944年7月1日

300名が確かに終にやって来た！そして... それはオランダ人達だ。まるで空腹の狼の様に僕達は彼等に向かって突進した：そこに未だ知り合いが居るだろうか？何処から彼等は来たのだろうか？彼等は更に僕達知っている他の連中のニュースを持っているだろうか？

それは哀れな話となった。彼等はタイから来ていて、そこではバンコクからラングーの鉄道幹線の敷設に携わった。血と涙、災難と辛苦の鉄道。見積もりによるとこの大型鉄道の枕木には5万人の命が横たわっている：少なくとも名前が判明しているだけでも、6千名のオランダ人。更にもっと居るのかなあ？1万2千人強のイギリス人！そして残りはタンビ人(労務者達)。そして僕達はここで互いに驚き見合う：僕達はここでかつて苦しんだ事があるだろうか？これは可能だったのだろうか？これは戦争か？そしてもう一度僕達は生き残った最強のこれらの連中を見る：殆ど全員オランダ人男性達。僕達にとってこの話を聞く事は、ここが未だそんなに悪くは無いという事に気付く意味で良い事だ。連中の3分の1が埋葬されたマラリア、コレラそして熱帯伝染病はここでは未だ皆無。いや、この陳腐な決まり文句はここでは正しくない：墓の事について話すとならば、ジャングルの何処かに投げられ、土と枝で覆われた死体の山より他の事を想像するだろう。何人の‘無名兵士’がタイの原始林の中に横たわっているのだろうか？何人の父親や婚約者達が彼等の愛する者達の横たわっている場所をおおよそでも知ることはないだろう。いやはや、今まで僕達の知る収容所連範囲で、650名のオランダ人が出て行き、そこから200名が戻り、或いは又150名の内から2名が引き戻って行った、などというものは無い。[...]それが日本の戦争行為だ。全ての物は時間が癒してくれると人は言う。しかし僕達にいつの日かこのことを忘れることが出来るのだろうか？(どの馬鹿げた取り決めが日本人達

---

<sup>28</sup> これはトモホク丸で、772名のオランダ人戦争捕虜達を乗せシンガポールから出発した。彼等の内560名が命を落とした。(ファン ヴィッツン、183)。

をヨーロッパ人に昇進させたというのか?<sup>29</sup> )

ヒルフマン

福岡9

1944年7月4日

今日更に200名の戦争捕虜達この収容所に運ばれてくるだろうと聞いた。日本軍は新しい兵舎を近くに建て増しすることで忙しい。食堂と台所は拡張されることだろう。病院は現在建て増しされている。木製の床になりそして木製ベッドが据え着けられる。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年7月16日

近頃ここには虱がたくさんいる。それらは皆床が覆われた日本製マットの中に居る。たくさんいて、時として寝られない。他には更に嬉しい蚊と日中は蠅がいる。

オーステルハウス

福岡15

1944年8月31日

食堂と風呂場は現在拡張され、一方では僕等の収容所の隣にある兵舎で大工仕事が行われているので、やはり多分近々400名の‘新参者達’を待つ事になるかもしれない。

ウェストラ

福岡17

1944年9月5日

[9月] 3日フィリピンから62日間の旅(6日間が普通)の後、200名のアメリカ人が到着した。港から上手く出航する為に17日間マニラにてそして14日間フォルモサで [待つ]。

---

<sup>29</sup> 1899年、所謂日本人法令が布かれ、蘭領東インドに居る日本人達はヨーロッパ人として同じ法的地位を得ることが定められた。

ウェストラ

福岡 17

1944年9月10日

最近の朝は石の様に冷たい。僕は殆ど暖まらない。冬場はどうなるのだろう？

ヒルフマン

福岡 9

1944年9月17日

荒れ模様。収容所に多くの被害。囲いが吹き飛ばされた。植物は傷ついた。兵舎は水つき。

オーステルハウス

福岡 15

1944年9月21日

この10月末に400名の新参者達が来るだろうとかつて予告されていた。勿論彼等がどこから来るかとかどの国籍だろうとか果てしない議論。「もし彼等がタイからくるとしたら、僕は太平洋についてのこれら全ての情報を信じない」、そういった事柄。純日本式のやり方、拡張されたばかりの食堂が、又もや増築される、等。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年9月24日－10月3日

月末〔9月〕我々に新しい分隊－配分〔作業班割り当て〕、付け加えて兵舎移動をさせられた。私はフェルプーフエン、スホットホルスト〔軍曹〕ともう同じ部屋に居なくてもすむ事が嬉しく、〔ヤン〕ル コムテと私は〔ヴィム〕ドゥ ハーン、フランス・リヒトと一緒に快適な雰囲気だと思った。最初の者は大抵塞ぎ込んでいて、しばしば殆ど助け出せない。鉱山では自分達の同じ指導者達と作業仲間を持つ。今は既に多少寒くなってきて、又しても締め付けられる気持ちでそれによる災難を待ち受けることになる。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1944年10月21日

今朝、我々が鉾山から戻ってきた時、朝鮮人キャンプに向かう整地でまず半時間の雑用をさせられ、それは400名にのぼる新参者達の次期到来用に加えられる。これの報酬は1箱の煙草、それは私に4分の1のパンを意味する。

ヒルフマン

福岡9

1944年11月15日

1ヶ月前我々に日本人司令官から報告されたのは、約200名の新しい戦争捕虜達がやって来るだろうという事だった。彼等は上部〔傾斜面〕に建て増しされる兵舎に住むことになるだろう。

ウェストラ

福岡17

1944年11月20日

この収容所は再び拡張された。新しい連中がやってくるらしい。数日実に寒く、冬の服が実に良く役立った。最近は気候がかなり穏やかだ。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年11月26日

噂ではこの収容所が再度建て増され、23名のアメリカ人将校達が到着するにちがいない。食堂は余りに小さくなったので拡張され、特に現在各人テーブルで食べ続けなければならない。というのは兵舎で食事する事が流行したことがあったからだ。‘びっこ’が厳格な方法で終止符を打つまでは、誰もが自分の食事を鍋に投げ入れ部屋に持参した。兵舎病であろうと無かろうと、全員がこの日は鉾山へ送り込まれた。今は食堂に十分場所があり、特に祭日は、僕達500名が同時にテーブルに座らなければならない。

オーステルハウス

福岡 15

1944年11月27日

僕のこの収容所滞在はもう長くない！まず始めに：何ヶ月も前既に大工、煉瓦職人、左官等といった仕事の求人があった。突然11月11日再求人。これらの連中は東京へ行き、もっと良いことが。最終的には未だ6名足りなかった。「君はどうかね？」とディック・ザウデマが僕に聞いた。「いいよ、申し込んでくれ」、何が起こるのか考えもしないで。しかしやはりそうだ、僕がこの収容所では‘非常に上等でない’もので、軍曹は謂わば僕の申し出を待っていたかのようなのだ、なぜなら僕は直ちに‘その’名簿に載せられ、これについて45の名前が出揃ったようなのだ；連中の大半は僕と同様の事例にあり、歯痛のごとくここにはいなくても良いらしい（常設の収容所作業人、長期に渡る病气事例、刑務所に居た連中、等）。そして今、今日の午後の通達：出発する者達は赤十字社から受け取った衣服を引き渡さなければならない。今は待つだけだ。大きな期待で心臓が踊る。（この冒険は僕をまだ尚引き付けていた、というのは誰も目的或いは目的地を知らないからだ。君の昔のヤープを未だ覚えているかい、M. ?）

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年11月27日－12月2日

44名の大工職人達が近々出発し、彼等の赤十字社の供給物、靴や衣服等を引き渡さなければならなかった。とりわけ [ヤープ] オーステルハウスと今台所で働いている [ヤン] ドゥ モスが一緒に行く。私には彼がそこに未だ何の改善を期待しているのか分からない；彼は今安楽な生活を送っている。多分彼は自らそれを全く認識していない。

オーステルハウス

福岡 15

1944年12月2日

そしてそれから僕達の出発：このことについて広まった噂は以前のものと比べてはるかに限度を超えていった。[...] 勝手にしてくれ。事實は：明日8時全く未知の前途に向けて僕達は出発する。2食分持参する。収容所長が僕等を連行し、2人のオランダ人医師を含む他の連中を連れ戻った。僕達は大多数が‘非常に上等でない’の45名で出発する。とりわけヤン・ドゥ モス

も同行するので、少なくとも2人して困難を乗り越える事が出来るだろう、という思いが常に気休めになる。よし、今が止める時、この‘危険な’財産を門外に持ち出す為、日記の最後の残りを以前の物に加えて僕のリュックサックの2重仕切りに縫込む時だ。他の収容所で一又会おう！

ヒルフマン

福岡9

1944年12月2日

明日大工職人として申し出た27名が他の収容所へと出発することになっている。彼等は自分達の全毛布、又個人の物もここに残していかなければならない。彼等に代わって他の者達が帰って来る。その内の1人が日本の事務所へ行き、かなり以前に引き渡さなければならなかった彼の指輪と万年筆の返還を要求した。指輪は返還されたが、万年筆は地面に投げつけられ、踏みつけられ、そしてその破片をストーブの中に投げ込んだ。[...]

今日初めてストーブ点火 [検査室に]。今までのところ、病欠届けの時のみ古い石油缶に石炭の火を燃した。

ヒルフマン

福岡9

1944年12月3日

今朝27名が出発した。[...]今日の午後27名の部下達が福岡第1収容所から到着した。彼等は一見部分的に弱っている様に見える。私がバンドゥンにてKMA<sup>30</sup>で取り扱った予備役将校候補生ムルダー（[頭文字] L.A.）がここに入っている。彼等は飛行場で働いていた。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年12月3日—4日

44名の大工職人達が出発し（そこには [F.E.S.] ホルムも居る）、その後間もなく、それと交換に45名のイギリス人達がやって来た、彼等はここから2時間の所に飛行場を敷設し、そこでは相当ひどい取り扱いを受けていた、日に3度150グラムの米、それは我々のところでは収容所

---

<sup>30</sup> 1940年の秋、ドイツ人達によるオランダ占領後、蘭領東インドに王立陸軍士官学校（KMA）と上級士官学校（HKS）が設立された。バンドゥンのKMA以外スラバヤには王立海軍学校（KIM）が設立された。

作業人が貰う分だ。彼等は少ない睡眠と多くの殴打を受けた。<sup>31</sup>

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年12月5日

一昨日ここに27名の新参者が、移送された25名の大工達と交換にこの収容所へやって来た。これら27名の中にペイター・ホルトザップフェルが居た。この連中は僕達の移送における最初の500人で、僕達以前にバタヴィアで移送された。彼等は3件の収容所を経験した。一般的にはより良い食事を取っていたが、もっと悪い立地条件に居た。その間既に又12月5日となり僕達はこの忌々しい国にちょうど1年居る。こと僕に関してはここが破壊されても一向に構わない。

ルーゲ

福岡21

1944年12月10日

ここ最近には既にかなり寒い。鉱山に居ない時は、全毛布を身の回りにかけてベッドに居る。我々は足を暖める為の石製の湯たんぽを貰った。又近い内食堂にストーブが入るだろう。

ヒルフマン

福岡9

1944年12月11日

ストーブのついた検査室は厄介だ。‘レコード’[日本人監視人の渾名]は我々の煙突が煙っているのを見つけた。それは許可されていなかった。故にストーブは再び消去。それ以降[それは]再度点火が許された。我々は地面から拾い上げた石炭で点火しなければならなかった。そういった虐めは日常茶飯事であった。

---

<sup>31</sup> イギリス人達は福岡第1収容所からやって来た。



ウェストラ

福岡 17

1944年12月12日

最近の弱まる月で又相当寒い。一瞬雹さえ降った。山々には雪が積もり、早朝は凍る。寒さに耐えることは思ったほどのことはないが、風が吹くとひどいものだ。今日は僕の特別な全戦闘衣を身に着けた。[...]

96名の部隊が出発し、それに代わってオランダ人達がやって来た。彼等は14ヶ月前直接ジャワからシンガポール経由でここに到着した。1件の良い収容所と1件それより少し落ち目の収容所を経験してきた。大多数は印人の若者達だ。彼等は製鉄所と飛行場で働いてきた。

32

オーステルハウス

ヒダオ(福岡1)

1944年12月20日

第1収容所—ヒダオ、福岡市から南に約6キロメートル。僕の悴んだ指でいくつかの印象を紙面に書こうと努力する、その一つ、圧倒的な印象が：寒さ、そして更に寒さ！仮の夏キャンプ！敷設されたばかりの飛行場の隣に在って、樹皮で建てられ、藁は殆ど無く竹が多い。100人用の長く、高い兵舎連そして... 仕事は無い、なら1時間ばかり多少のりくらしと過ごす。夜中の気温は零下を少々下り、日中はいくらか上昇する。雹一と吹雪。脂肪無し。これが現在常の圧倒的な印象だ。

ここには飛行場を敷設した約600名が居た。連中はその大半が色々な収容所(第2、第7、第9、第10、第11、第14、第17、第20収容所)から鉱山労働者達と交替させられた。ここには今約650名が居る：120名のオランダ人、約150名のアメリカ人、約250名のイギリス人、約100名のオーストラリア人。残りはカナダ人、フィリピン人、ノルウェー人1人。数件の収容所はこれを‘上等無い’—分子、例えば病人、継続する収容所作業人等を排除するのに良い機会だと思った。結果：約4分の1がここでは多かれ少なかれ病気。結果：最近の5日間で10名死亡！！日本人司令官はこれに相当憤慨して関係当局に厳しく怒鳴り、これは療養キャンプではないことを指摘し(僕達の将来の職種は今のところお先真つ暗ではあるが)、故に最終的な結果として、自分の収容所で死亡するだろうと懸念した27名の虚弱な患者達を慌てふためいて車に積み込んで、銘々の収容所へ送り返し、27名の健康な者達と交換した。

---

<sup>32</sup> 恐らくこれらの戦争捕虜達も福岡第1収容所出身であった。故に福岡第9、第15は第17と同じく、福岡第1と捕虜達が交換された。

そして今待機中、何故なら僕達は他の収容所、ここから約6キロメートルの冬キャンプへ行く事になっている；海から500メートルで福岡のすぐ近く；森林の中にある。これは建設中だ。この2日間僕達の収容所から70人がその建設を手伝いに行っている。収容所長も、多分多数の死者の影響で、今朝この寒さによる門外での作業に苦しんでいる連中と出来るだけ早く他の収容所へ移りたいと思っている。[...]

他の収容所連の状況に関して：鉦山労働者達の収容所連はそれぞれそんなに違いがあるわけではないらしい；ある所は2回[労働]交替、他は3回。食糧は大抵同量、数件は僕達より少々多めで、他は少な目。数件は裕福そうな鉦山経営が、僕達には無いむしろ大量のウビ[サツマイモ]、クッキー、砂糖、ロンボク[唐辛子]そして他の‘美味しい物’を結構常に供給した。1件の収容所は蒸気暖房が贅沢に備わっていた。他は長崎近くの造船所の、第14収容所が相当有利な例外だった。[そこでは]相当多い配給量(約900グラム)、沢山のウビ等。短めの労働時間、かなり良い収容所長(最近までシラビ、キリスト教徒)等。それらの連中が話すには日本の護送船団が7月アメリカにより攻撃され、12隻の内4隻が沈没した、と：600名の戦争捕虜達の400名が溺れ死んだ。[彼等の内]200名は長崎の第14収容所に収容された。ここにその生き残りの内の3人が居る。<sup>33</sup>

この収容所に関して他には：僕達は全員勿論自問している：戻りたいか？今までの所僕達の大半は言う：イヤ。勿論イヤだ！僕達は冒険を試みた、変化を検索した、改変！そしてここにはそれが一杯、毎日、そして特に近づいている前途を待ち望んでいる。数人の弱者達はただ1つの不愉快の要因、惨めな寒さ、それに打ちのめされて、前収容所(タイのでさえ)や、鉦山等での全ての不愉快さを突然忘れてしまっただけで戻りたがろうとする。(僕達は直ぐに災難や不愉快さを忘れてしまい、楽しくて良い事みの特性を持っている、この戦争捕虜の身でさえも維持し続けている、そして... 幸いにも。)

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1944年12月17日—23日

9名の大工[12月初め福岡第15から出発した]が病気の為戻って来た。ホルムは死亡した、残念。他の収容所は良い健康状況を自慢していた、他に食事はだいたい同じで[我々がここで受け取る物]、少ない仕事、粗末な住居、我々の所の噂と同じ。現在400名の連中が異なった収容所から近辺に集合して来た、そこには4~5ヶ月前にフォルモサの手前と長崎の手前で魚雷に当たった(ジャワのオランダ人達)連中も含まれていた。この収容所は軍隊の統治で<sup>34</sup>、2名の良いオランダ人と1人のアメリカ人医師達が居た。

<sup>33</sup> 恐らくこれはトモホク丸(脚注23参照)の災難のことを示唆している。

<sup>34</sup> これは軍隊が炭鉱や個人の採掘経営以外の仕事について支配していた事を意味した。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月23日

[日本軍は] 小さな鉄製の石炭壺を病棟の暖房へ供給する。卵形の石炭も [貰った]。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月4日

虱災難：衣服虱。兵舎連から病院まで。今日も私の衣服に虱が湧いていた。我々のストーブの上に組み立てられた原始的な蒸気装置で、1人分の服を半時間蒸気洗浄出来る。病院は常習的に虱駆除に努めることだろう。[...]

病院用の足温器はもはや卵形石炭が無い為、燃やせない。規則的な補給というものを日本軍は知らない。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年1月

1月の朝の交替は又してもひどく寒かった。我々は水筒に暖かいお茶を入れてベッドに持って行くが、5枚の日本製毛布と2枚の上着では暖かさを維持するのに不十分だ。だから私は平均1夜に3回小便に立たなければならない。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月21日

かなり寒かった：零下8度。厚い氷、ほぼ10センチ。又かなりの雪。新しいオーストリア人達がビルマから入って来た。彼等は暫くサイゴンに居て、実に良い時を過ごしたと話した！又ノンプラドックにも居たことがあり、そこは爆撃された。アンネムは突破、アーケンの近くを一撃、メッツの近くでロメルは戦死した。ロシア軍はオーストリアに、バルカンはほとんど解放。サイゴンとタイには未だ多くのオランダ人達。これが彼等から僕達に伝えることの出来る事実だ。

ウェストラ

福岡 17

1945年2月6日

フィリピンからの新しいアメリカ人1団が入って来た。彼等はひどい旅をして来た。2日に1回2匙の生の米。彼等は2回の魚雷と何度にも渡る爆撃を受けた後、1600人中400人が生きて到着した。<sup>35</sup> 彼等が居た [フィリピンでの] 最終日、リュゾンが攻撃されたことを彼等は聞いた。彼等は出発した最後のグループだった。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月4日

自然が目覚め始めている。僕は時々既に冬のジャケット無しでさえ歩いている。既にあちこち緑の草むらが目に付く。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月10日

今日新しい戦争捕虜達が元気に到着した：つまりイギリス人(将校連)、アメリカ人(将校連)、オーストラリア人(将校連)、オランダ人(将校と市民達)。この中に昔の知り合い達：[K.] ドロウスト中佐と [S.] ドゥーワール中佐、[H.] シュルス大尉と [P.S.] ユー大尉。彼等はフォルモサから来ている。2人のイギリス人医師達 (少佐-外科医1人、大尉-総合医1人) と3名のアメリカ人が加わっている。

---

<sup>35</sup> 1944年12月13日オーリョク丸は1600名余りの戦争捕虜達を乗せてマニラの港を出発した。更に同日この船は連合軍の飛行機により爆撃され、それにより船倉では多くの死者と怪我人が出た。オーリョク丸はひどく破損し避難しなければならなくなった。1300人余りの生存者達が12月27日2隻の船に乗り込まされた：エノウル丸とブラジル丸。タカオ(フォルモサ)の港でブラジル丸の乗組員達はエノウル丸に移された。数日後、1945年1月9日、エノウル丸は空襲中に命中し、又しても戦争捕虜達は何百という死者を後にして、彼等の船から離れなければならなかった。約1000人の生存したアメリカ人達は日本へ航海するブラジル丸に乗船した。途中戦争捕虜達の半数以上が死亡し、日本到着後1ヶ月以内に更に約150人が亡くなった。(ダウス、293-295)。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月11日

新しく到着した将校達はドゥロスト中佐の下に別のグループを形成する。下級士官達は私の支配下に来る。新しいグループの印象は訓練されていない集団、特にイギリス部隊。彼等は約10名の病人を連れて来て、その中の一人はかなり重病。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年3月13日－20日

火災の危険により、我々の兵舎から天井が取り除かれ、それが至る所から書くに忍びない汚物を出した。

ルーゲ

福岡 21

1945年3月24日

寒さが多少和らぎ始めている。既に我々には、もう1ヶ月前からストーブが無い。

ヘレ

宮田(福岡 9)

1945年3月30日

僕達の収容所は又もやかなり建て増しされた。3月10日180名のイギリス人、オーストラリア人そしてオランダ人が大勢の虚弱者と病人と共にこの中になだれ込んで来た。これは台湾(フォルモサ)で事が余りに熱狂してきた為、移送された残留者達だった。彼等はそこで毎日襲撃を予期する。この移送では4人中佐が居て、[その中の] 2人はオランダ人：ドゥロスト中佐とドゥワール中佐。後に未だ通商航海のオランダ人高級船員連1組。ドゥワール中佐とシュルス大尉は僕達がバンドゥンに居た時双方そこに居た。この収容所は今700名を数える。大勢の豚どもは残飯を少なくする、赤十字社の雑品は今勿論すぐなくなってしまう。この寄せ集めはタイからの残留者達でもある。タイからの27隻の船舶中15隻が魚雷を受け、その中に戦争捕虜

達を乗せた1隻も含むと聞いた。何とまったく、更にもっと死人が。その国では既にやはり合計1万8千名のイギリス人とオランダ人が死亡した。この最後のグループに宣教師と牧師が同行して来た、双方イギリス人。

オーステルハウス

門司 (YMCAビル)

1945年4月9日

[オーステルハウスはヒダオ(福岡第1)の‘第1収容所’に未だ居た時、1945年1月以来事件の記事を供給している。]

その間に新しい収容所がほぼ完成に近づいている。<sup>36</sup> 1月18日僕達はそこへ引っ越した：吹雪一霎の嵐の中を、首に僕等の全荷物を掛け1時間半歩行。新しい収容所は古い物より魅力的に見えた：松の木々の下に、少なくとも隙間風の通らない木製の壁で建てられた。そこでの作業も僕達にはすることがなかった、ゆえに日本軍は僕達に一日中（そしてしばしば未だ夜も）整列又しても整列、あらゆる馬鹿げた収容所内の雑用をさせて、僕達を虐めた。多い雪と寒さ。ストーブとか何かそういった物もそこには存在していなかった。[...]

1月24日又しても整列のラッパが鳴った。日本人収容所長が彼のスタッフと日本人医師を連れて出席していた。この最後のが一目見て病人診断のようなことをし始めた！虚弱と病気に見える連中が選り出された。僕はその頃腹痛に悩み、その上かなりの顎鬚を生やしていたので、最良の顔付きではなかった。（よかった、ピート、その時の僕を君が見てなくて！もう僕のことを愛さなくなった事だろうよ！）僕もそこで選り出された！この収容所から100人が出て行くだろうという、既に長期間流れていた噂は事実と信じられる所がありえるし、突然明らかとなったのは僕達はその100名だった。その時から果てしない整列が続いた：編入に再編入、その時僕に戻るチャンスはあったが（ヤンドゥモスが理由で僕はもう少しでするところだった）、最終的には為すがままにさせた。エリックとエルンストもやはり同行する！とはいえ最後の瞬間2つのグループに分けられた：50人-50人。僕はそのうちの一つ、エリックとエルンストは他の方。残念！全てはその時急がれた。最初の50人のグループ（君の婚約者を含んでいる、ピート）は1月25日朝7時に出発する予定。ヤン [ドゥモス] は僕に最後余分の大鉢一杯の米をくれた；ヤン・ボス、カーレル・エモンズそしてヤン [ドゥモス] と別れを告げ、僕達13名のオランダ人（その中には僕にとって誰一人として知り合いは居ない）、そして残りはイギリス人、アメリカ人そして1人のオーストラリア人が未知の前途に向かった。

そして今僕達は門司に居る。日本の最も重要な港の一つだ。そして全ての移動の後で僕が唯一出せる結論は溜息だ：暖められた食堂、美しい風呂場、良い収容指揮、僕のたくさんの

---

<sup>36</sup> これは‘冬キャンプ’と称し、‘第1収容所’から約6キロメートル（1944年12月20日のオーステルハウスのメモ参照）。

友人達とおいしい食事つきの居心地の良い第9(第15)収容所に居られたら良かったのになあ。僕はここでYMCA [キリスト教青年会] の大きな石造の建物に収容された。あの木造兵舎よりそれほど寒くはなかったが、やはりここにも暖房は無い。でも美しい食堂に更にもっと綺麗なストーブ付き、とは言えこれは単に飾りのみらしい。(僕がこれを書いている間、幸いにもやっとなんとかと再び少々暖かくなり始めている。)

ヘレ

宮田(福岡9)

1945年4月19日

天気は素晴らしい。何日も良い天気が続いたので、上半身裸で外に座って太陽を浴びる事が出来た。僕は既に冬服を仕舞い込み、それによって虱からも逃れた。その蔓延は厚い服の中で素晴らしく、蒸気洗浄し続けなければならなかった。

ウェストラ

福岡17

1945年4月25日

今日は必要な者以外の将校連が数人の使用人を連れてこの収容所を出て行った。彼等は一人につき赤十字社物資品を受け取った。<sup>37</sup>

ヒルフマン

福岡9

1945年4月25日

新しく到着した将校連から [...] 今日 [全] オランダ人、アメリカ人そしてオーストラリア人を含めた102名の将校連が出発した。イギリスの将校連は大尉以上の等級からのみ。

---

<sup>37</sup> 彼等は満州のムクデンへ移動させられた。

ヘレ

宮田(福岡9)

1945年5月14日

大尉級までの全将校連が他の収容所へ移された。故に我等の上官達ドロスト中佐とドゥーワール中佐も出て行った。

ヒルフマン

福岡9

1945年6月20日

福岡第1収容所から100人が新しく到着。ここの中に13名のイギリス人将校。[1944年12月3日]この収容所から出発した27名の‘大工職人’に属していた10名の下士官兵達。39名のアメリカ人、19名のオランダ人、19名のイギリス人下士官兵達、10名のオーストラリア人が加わっている。膝下を切断した者2人、骨折から治癒の悪さで足の不自由な数名。大勢が腸炎、ベリベリ、ペラグラ。<sup>38</sup>

ルーゲ

福岡21

1945年6月21日

今日の午後300人が加わって来た。オーストラリア人、イギリス人と15名のオランダ人。彼等は長崎から来ている。彼等の多くが既にここには2年半居て、造船所で働いていた。全員健康そうに見える。

---

<sup>38</sup> ベリベリはビタミンB-総合の不足によって起こる欠損疫である。ベリベリは麻痺や瘻れを起こす乾燥型、そして湿気型は栄養浮腫として知られる。(ファン ヴェルデン、357)。ペラグラ栄養不良に繋がるビタミンB-総合、動物性蛋白質と脂肪分の欠乏によって起こる。食物内の長期のニコチン酸不足、ビタミンB-5 (これらは動物性内臓、玄米そしてイースト菌に含まれている) 不足は赤から茶色のシミを伴う皮膚病、ペラグラ皮膚炎を起こす重要な要因である。ペラグラの他の症状は‘ネウリティス’で、神経性の異常から生じる神経炎：キャンプ眼病、キャンプ耳病そして‘熱い足’。他は陰膿皮膚炎(‘チャンギボール’)と下痢(‘腸ペラグラ’)を起こす。(コエロ、594,851)。



ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年5月29日－6月23日

分隊1から6以外は兵舎移動なので、シャムー1団は今主に朝鮮キャンプに居て、我々はドウヨングの下にニナベルと共に現在第11と番付けられた兵舎に。[...]

とても嬉しい事に、長崎と福岡から来た新参者達の中に既に2年半前マカッサルとスラバヤを出発した160名のオランダ人、[そして] ワケに追放され、後では港で働いていた140名のアメリカ人（彼等のロンブロッソ型－顔付き<sup>39</sup>から見てシン－シン [刑務所] 出身と推測する）。

ヘレ

宮田(福岡9)

1945年6月23日

[6月] 20日100名の新しい居住者がここへ加わって来た：福岡 [市] の近く、ここの近所の収容所から来たイギリス人とオランダ人達。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月25日

新しいオーストラリア人達の中へ。彼等が働いていた製銅所は36時間続いた爆撃の間、爆撃されて使用不可能になってしまった。彼等は10ヶ月前にチュンカイを出発した。彼等は僕達と比べて健康そうだが、そんなに重労働でなく、多少はより良い食事を取っていたのだろう。

---

<sup>39</sup> セサーレ・ロンブロッソ（1835－1909）はイタリアの精神科医そして犯罪学者であった。彼は犯罪者の心理学についての彼の研究で知られている。1876年彼はThe criminal manを執筆した。彼の学説によれば‘真の犯罪者達’（全犯罪人の約35パーセント）は祖先まで隔世遺伝による逆戻りに基づいて、犯罪者として生まれている。ロンブロッソ型－顔付きというのは日記著者によりロンブロッソによって作成されたステレオタイプの特徴リスト、例えば頭、耳、鼻、口、顎の異常な形やサイズに答えた顔を意味している。

ヒルフマン

福岡9

1945年6月26日

45名の将校連(44名のイギリス人、1人のカナダ人)が新しく到着、四国出身。

オーステルハウス

門司(YMCAービル)

1945年7月2日

1月末ここにフィリピンからのアメリカ人移送の残りがやって来た：1600名は出発、450名が残留。2回彼等の船が文字通り爆撃と魚雷に遭って彼等の下の方から立地が奪い取られたのだ。更に大勢の病人；50人が僕達の収容所へやって来た。その中から現在未だ27人が生き残っている。悲惨、悲惨そして更に悲惨。

ヒルフマン

福岡9

1945年7月14日

現在収容所に居る：

オランダ人 : 将校8名、平民15名、下士官473名

イギリス人 : 将校107名、下士官136名

アメリカ人 : 軍隊下士官28名、平民15名

オーストラリア人 : 下士官10名

カナダ人 : 将校1名

ヒルフマン

福岡9

1945年7月26日

出発した[10名の戦争捕虜達の]番号：45-53-110-422-440-441-442-509-514-515.

## 拘留所の組織／欧州人と日本人の責任者

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年6月15日－26日

〔最近〕スウェーデンの領事が我が政府の為に自分達を視察に来るので、我々は収容所へ早めに帰って来なければならない、と我等がオランダ人収容所司令官、スレウ中尉。領事は彼に、我々の妻達への世話は取り計らわれており、我々は冬季赤十字物資小包を受け取ることだろう、と述べた。この収容所は〔彼の訪問中〕整って見えた、というのも我々は新しい青色っぽい上下一式を貰ったばかりで、しかも図書館と売店が機能していた。翌日は全てが売店から再び取り去られた。

オーステルハウス

小倉病院

1943年7月2日

ここでの退屈さは大変なものだ。毎日が又しても同じ調子とくる：5時半の‘床’（起床ラッパ）。日本人当直将校による点呼。それから即10分間の体操、そして食事。朝はいつもお決まりの‘タウチョー’－〔発酵した大豆の〕スープ、その中に玉葱、ロバック〔大根〕、キャベツ或いは‘海藻’、それと引き割りの穀粒（若い竹の子！）入りの飯。それから後は幾分健康な者達用の雑用、通路の拭き掃除、草むしり、便所掃除等からなる。年長者達は彼等の寢床に留まるか、或いは外に出て多少散歩をする。[...] ‘散歩している’患者達（そして現在僕達全員）は短い廊下や外ではあつという間に‘歩き終わる’。しかしながら雨がよく降るので、僕達はしょっちゅう室内に留まっていなければならない。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月5日

数日前殆ど全日本軍隊が収容所を出発した（前線へ？）ので、僕達には今現在平民の歩哨が居る。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月5日

[ヒルフマンは前夜この収容所に到着した。] 手続き。宣誓に署名しなければならない。<sup>35</sup> [...] 荷物—検査の開始。全てのリュックサックとスーツケースが取り上げられる。同様に全ての兵隊ナイフ、筆記道具（将校達はそれらが彼等の仕事に必要であろうということで所持することは許可されていた）。部下達の再分類。各自新しい番号 [を貰う]、私は1番 [だ]。<sup>36</sup> [...] 日本人収容所長の所には日に2回全将校達の報告書。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1943年12月5日—20日

収容所は [今] 平民管理の下 [にある]。[...] 12月5日軍隊から平民歩哨に交代。[...] とは言ってもこの収容所には数人の軍人が留まっているが、それは運営と当直将校<sup>37</sup>どまりだった。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月13日

今日全兵隊は彼等の貴重品（腕時計、指輪等）を引き渡さなければならなかった。将校達と兵舎司令官達だけはそれらを所持することが許された。

---

<sup>35</sup> 恐らくここでは日本軍の全ての命令に従順する厳粛な宣誓、或いは逃亡の試みを企てない確約を扱っていた。その様な‘宣誓’はもっと多くの戦争捕虜収容所連で行われた。（ドゥ ヨング 11 b、第2部半編、599-602 参照。この項目内の後方、1944年6月20日付のルーゲの日記抜粋も参照）。

<sup>36</sup> ヒルフマンはこの収容所内の将校連で最上級の最年長将校であって、これが理由で日本軍により収容所最年長者と指名された；公式の代理人。

<sup>37</sup> 平民歩哨は恐らく炭鉱を経営していた日本の鉱業財閥（三井）によって供給された。とは言え収容所の一般運営は日本軍隊の手中にあったので、完全なる平民管理は無理であった。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月26日

視察（日本人記者達？）。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月31日

日本人収容所長は我々に彼の「2月のプログラム」を説明した：ビタミン B の供給、長めの睡眠時間と「医療スタッフのもっと積極的な仕事」。最重要点である食物がこの様にして次第にうやむやにされてしまうか、或いは第2番目にされてしまう。

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月1日

休日。鉦山における「真面目な仕事」の褒美として70人に煙草の分配。演説、いつも通り中味の無いもの。これらの演説が現在習慣となった。我々3人がベンチの上に立つ、日本人所長、日本語－英語の通訳、彼は演説の1文1文を破格の英語で訳し、そして私がそれをオランダ語にする。この集会は常に娯楽場で行われ、それはありきたりの木造兵舎で、何の楽しさも無い。[...] 点呼（朝一夜の点呼）で1つ改善がある [...]。これは最初野外で行なわれていた、実に寒く、長く待つ；今はこの娯楽場内で、[朝] 6時そして [夜] 8時半。<sup>38</sup>

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月25日

鉦山側は将校達に彼等が課された仕事に対しては支払いたい（将校一人につき日当たり90銭）意向を示した。将校達は仕事に賃金を受け取るべきではないことから、我々は報告書にこの件は

---

<sup>38</sup> 娯楽場での点呼維持は短期間しか続かなかった；それ以降点呼は再び野外の点呼場で行われた（ヒルフマン、65）。

勘弁してもらおうよう求めた。<sup>39</sup>

ヒルフマン

福岡9

1944年3月1日

2月28日日本人大佐の重要な視察があった。この視察のために各人10日前から既に多忙を極めていた。私は日本人中尉に毎日50リットルの牛の血を、少なくとも1ヶ月間、各人に供給する事を提案した。<sup>40</sup>

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年3月3日

日本兵は[オランダ人]将校達のことを気にせず、そしてこれらの連中は僕達のことに関与する必要性を感じていない：それが少なければ少ないほど、日本兵は寧ろ好ましく思っている。彼は僕等の将校達を排除し、僕達に関して全てを統制している。

ヒルフマン

福岡9

1944年3月5日

4匹の兎が届いた。300匹の兎と100匹の鶏で養殖が開始されようとしている。[日本人司令官の所での]報告書で新聞がもはや手に入らない事が我々に通達された。後は、近々軍隊に代わって鉱業経営がこの收容所を引き継ぐ事になるだろう。<sup>41</sup>

---

<sup>39</sup> ジュネーブ協定によれば将校達は実際仕事を実行する必要は無い（ドゥ ヨング 1 1 Ib、第2部半編、581）そしてファン ウィッツン、参照）。ヒルフマンの作業実行に対する報酬受け入れへの異議はもしかすると、これがやはり将校達に仕事を請け負わせる可能性の明白な承認と見なされるかもしれない、という恐れから生じている。

<sup>40</sup> この提案には反応が無かった。（ヒルフマン、69）。

<sup>41</sup> ところで家畜保有数が拡張されたこの計画は実行されず、新聞はヒルフマンによればやはりもう手に入らなかった。（ヒルフマン、69）。先の脚注45も参照。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年2月20日－3月12日

昨日の午後全収容所が4時から〔夜〕6時半まで整列しなければならず、その間兵舎連の家宅捜査が行われて、色々な鍋から、僕達が1食抜かされる休日、に食べようと貯め置いた合計バケツ2杯分の米が押収された。後で鍋は取り戻された（恐らく僕等の将校達の苦情と説得後、彼等はこれが‘予備品’であって‘余分’ではない事を説明しなければならなかった！）。

ヒルフマン

福岡 9

1944年3月16日

昨日事務局の大佐による視察。〔私は〕自らの願望を知らせた。

ヒルフマン

福岡 9

1944年3月21日

日本人司令官は最近将校達にとっても好意的だ。この収容所が視察により1番になったらしいゆえん。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月18日

過日〔4月10日〕この収容所が鉱業経営に引き継がれた。今は鉱山の直接指導者である1人の民間日本人が居る。彼は日本語しか話さない。[...]昨日日本人司令官と数人の軍役人を除いて全ての日本軍隊が出て行った。

ヒルフマン

福岡9

1944年4月25日

今日横浜に住んでいる国際赤十字の代表、マックス・ペスタロツィ氏の訪問があった。彼と一緒に日本赤十字の代表も [やって来た]。他は最近我々を視察した同じ大佐。我々の収容所<sup>42</sup>から7名の将校達が彼に [ペスタロツィ] に紹介された。彼は数点質問し、それらには私が返答した。我々が求めた最重要点：肝油、スルファピリディネ、プルフィスドフェリ、<sup>43</sup> 歯科医用具一式；肉と魚の缶詰；衣類と履物。我々の部下達が余りにも酷使され、余りにも衰弱している事を説明。オランダと蘭領東インドに居る家族ともっとそしてより良く接触する為情報を受け取る許可を要求。一行の為、我々将校達も共に自分達の炊事場で調理された食事をした。午後は鉾山経営者と共に全員農場<sup>44</sup>へ [行き]、その場所で温かい牛乳を飲み、牛を視察した。其処で私は非公式に大佐と代表に何か話す事が出来た。ジュネーブとの接触はシベリア経由のみ可能。我々が受け取る赤十字物資小包は仲介船から来たものだ。[私は]赤十字物資小包を受け取って、我々の感謝の意を表明し、我々の気持ちを伝えた。<sup>45</sup> 公用語は英語だった。

ヘレ

宮田 (福岡9)

1944年4月29日

僕がこれをベッドの上で書いている。足元には暗赤と紫がかかった赤に白線の入った2本綺麗なチューリップがある。僕達は1週間前赤十字社員でスイス人の視察を受けた。良い印象を与える為日本軍は収容所に花を溢れさせた。視察が終わった時彼等は再び大半を取り去り、チューリップは僕達が保持することが出来た。スイス人はここで更に食事をし、オランダの炊事場は15人

---

<sup>42</sup> この7名の将校達は：M.M.ヒルフマン大尉（軍医）、Th.パウ（軍薬剤師）、そしてG.J.ディッセフェルト中尉（通訳）、以下中尉連、M.A.レイス、J.W.デ フリース、H.スヒンケルとE.E.バウテンであった。（1945年5月24日付の‘蘭領東インド赤十字社の報告’（NIOD,IC080243<sup>2</sup>）,4-5）。

<sup>43</sup> プルフィスドフェリは液体、鯨系魚類の肝臓から取った脂っこい油、高ビタミンの栄養と治療薬として使用。スルファピリディネは抗細菌の粉薬である。

<sup>44</sup> 項目‘作業’1944年4月18日と21日の日記抜粋参照。

<sup>45</sup> 赤十字発送品は鎌倉丸とテイア丸経由で受け取られた。国際赤十字代表達の訪問日、まさにちょうどテイア丸経由で届いたカナダ赤十字社からの食糧品小包が受け取られた。赤十字代表訪問時の最後に発送された新聞は1943年11月の日付けであった。日本人収容所長は「最終的に戦争捕虜達の間の不安を避ける為」新聞を隠した、と説明した。赤十字代表はこれらの規制が全ての福岡収容所に関連していると思なした。ヒルフマン大尉は戦争捕虜達の名の下に赤十字物資小包、医薬品、衣服とちょうど受け取ったばかりの履物に対する彼の感謝の意を表明した。彼はもっと食糧品小包を貰いたい希望を表明し、肝油と大きなサイズの下着と靴の必要性を訴えた。戦争捕虜達はオランダ或いはジャワから何の便りも受け取っておらず、今許可されているよりもっと頻繁に書く事を希望した。将校達は年に6通の手紙を書くことが許され、下士官達は4通そして兵隊達は3通。戦争捕虜達は今までに英語による約55文字の葉書1枚を送った。（1945年5月24日付の‘蘭領東インド赤十字の報告’（NIOD、IC080243<sup>2</sup>）、4-5）。



分の欧州料理を調理しなければならなかった。日本軍は最初彼に食べさせ、その後猿真似をした、  
というのはナイフとフォークでアスパラガスを食べるのが彼等には困難だったからだよ。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年4月20日－30日

天皇陛下の誕生日〔4月29日〕に腹痛－内臓苦情を申し出ることになり、そのリストが出来上が  
った時、これらの者達は酒を全く貰えなかった。日本軍はリストが作成された真面目さに大い  
なる快樂を味わったものと推察する。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月23日

‘トビアス’〔日本人飛松中尉の愛称〕は昨日自ら独房へ閉じこもった。彼の部下達が無礼を働  
いたらしい。彼等の悪行は彼の教育が至らなかったものとして、彼自身も責任があると思ったの  
だ。我々の主人達は経理が全く出来ない。彼等はとてつもなく長く手間を掛けているのに、尚間  
違ひが多く見つかる。ところで彼等の経理は実際の状況からかけ離れている。それは組織に起因  
するのでなく、‘経理だけの目的’だ。計算さえ合っていれば、皆満足なのだ。彼等はあたかも  
組織を勉強し、其処で経理も習ったように見えるが、経理はあくまでも手段に過ぎない事を彼等  
は理解していない。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月31日

日本人司令官がここ1週間留守だ。人が言うには：神経衰弱の為病院に〔入院〕。

ファン ウェスト デ フェール

福岡 15

1944年6月7日—14日

[休日に] 我々の部屋が又しても家宅捜査されていた間、自分達は自らの全履物を持って整列させられ、2時間整列したままだった。かなりの食物や盗まれたバラン [品物] が出てきた。私は最近50本の煙草で2食分の米を受け取ったが、直ちに食べるのが常だった。スレウ [中尉] は点呼の時、有難迷惑な事に、死亡した者から彼の息子に当てた金の指輪を盗んだ馬鹿な奴がいた事を明らかにした。しかしながらこれは後で間違った報告であることが分かった：この指輪は既に [R.A.] パルマーの死の何ヶ月も前に盗まれていた [...]。ファン ヘルデレンの所で500円が見つかり、彼はこのお金を彼のカレー商売によって貯蓄した。495円が日本軍により‘貸付’として簿記され、残りは‘妥当な財産’として彼が所持する事を許可された！ [...]

[6月] 13日に我々が鉾山から戻ってきた時自分達の毛布を手渡し、同日5時に我々は同じ毛布を再び戻し受けることが出来た。明らかに経理のどこかで間違いがあったのだ。

ルーゲ

福岡 21

1944年6月19日

[ルーゲは昨夜この収容所に到着した。] 9時起床ラッパ、[午後] 2時新しい編成の為整列。上級から下級まで、要するに等級度で我々は番号を受け取る。僕は68番だ。

ルーゲ

福岡 21

1944年6月20日

宣誓を行った。逃亡、暴行、妨害をしない等。

ルーゲ

福岡 21

1944年6月23日

余分な荷物の引渡し。

ルーゲ

福岡 21

1944年6月24日

我々の歩哨達は未だ嘗てオランダ人を見たことが無かったらしい。彼等は猿の様に興味津々だ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月6日

鉱業経営者達（第5鉱山）の訪問で私は数点の事実、中でも大勢の目の減退を報告した。今日前收容所長が中にやって来て、[薬剤師 Th.] パウと私以外のオランダ人将校達を出頭させ、彼等を收容所の外に導いて門外漢達（！）と話をする事は絶対に禁じられていることを演説した。文句があったなら、彼の所に持ってくるべきであった。彼は私の苦情によって本局に呼び出され、そこで叱責を買ったのだ。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年6月21日－7月7日

合計50人の新しい警備兵隊が收容所にやって来た。それは收容所の拡張を示唆している。

オーステルハウス

福岡 15

1944年7月20日

明日は一体どういった視察になるのやら、全ては記述以上のものになるだろう。そして今準備されていることにより、以前の無意味な視察や閲兵式作業は全て影が薄くなってしまふ。10日前既に僕達は開始した。明日（休日）の実際の視察に部屋が如何に為されていなければならないかという一般的な練習。あわてて即興で作成された4枚の報告書で、多少は歩ける者達全員、休日後には又練兵休〔兵舎病〕を貰うことが出来るという約束で、2日間程鉦山へ送られ、‘視察’の目には仮にも‘健全’であると言わなければならない。赤痢患者達は奥まった部屋のどこかに押し込まれ、それに関して何か聞かれた場合は‘下痢’（オヤオヤ!）と彼等は答えなければならない。ともかく要するに：この曰く有りげに視察している男性に見せるべき全てのもので、僕が今までこの事で経験してきた全てのインチキは影が薄くなってしまっている（又しても外人の領事或いは赤十字代表だと、人が口笛を吹く）。呆れた事にはヤープと未だ他1人か2人は鉦山へ送り込まれていなかった。

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月21日

愛称トビアス、飛松前日本人司令官による別れの演説。彼はジャワ或いはスマトラへ行く。将校達への別の演説で、彼は我々が二度とその様な胡散臭い仕掛け（失明<sup>46</sup>について鉦業経営者と私の話し合い）をするべきではないと警告した、というのはそれが故に彼は今この地位を取り外されたからだ。

オーステルハウス

福岡 15

1944年7月27日

‘この’視察は終わった。そしてそれは領事ではなく、赤十字社員でもなく、ごく普通の日本人少佐だった。彼は僕達をかなり寛がせた：1回45分の整列が既に十分過ぎるほどだった。この点呼の時僕達には衛星要求の相当巧妙な書簡が公表され、それが、その紙面に載っている如く、

---

<sup>46</sup> この項目内の1944年7月6日付けのヒルフマン日記抜粋参照。

僕達の健康と人生の楽しみの要因となるにちがいない、というのだ。ここに下記する写しは、普通の時なら恐らくそんなに滑稽には聞こえないだろうが、今の僕達には笑いを込み上げさせる。

当局は貴殿に自らの健康に関して有益となり得る数点を指示するべしものなり。当方は病院資料とヨシカワ医師の情報に則って貴殿にこれらの指示を供与するものである。統計は一般的にこの収容所に多くの病人が居ることを示している。この原因は気候と貴殿の全面的に変化した生活様式にあることは疑う余地が無い。

(やっとの事で懸命な言葉！)

しかしながらこれらの不利な点にいち早く慣れる事は貴殿の義務(原！)である。当局は特に貴殿が自らの衛生に配慮される事を願望するものである。当局は喜んで(?) 貴殿の医療管理には当局の最善(?) を尽くす所存である。しかし当局は自ら十分気を配る様貴殿側に要求する。汝がいつの日か家に帰還される時、貴殿の健康状態が優れたものでなければならず、それゆえこれは当局の義務と見なすべし。

#### 急性胃痛の原因

1. 突然起こる胃痛の多くの原因の一つには鉾山の煮沸していない水を飲む事にある。その水はあまりに多くのミネラルと塩分が含まれている為飲み物としては不適當である。
2. 収容所の水道口からも水は飲まぬべし、なぜならばこの水も同じ理由により、その上一方では送水管が信用できないことから、飲み物としては不適當である。
3. この収容所内で当局は貴殿になるべく栄養価の高い食糧を供与するべく努力する。

(努力も美德である！) しかし米に入っている大豆と引き割り麦は消化するのが困難である。この食物は故に良く嚙まなければならない。もし十分嚙まなければ、その結果として胃痛や下痢がおこるのであろう。この軍隊では我々も同じ飯を食べており、1口に30回から50回嚙む事を勧められ、我々は少なくとも30分食事を取る。(鉾山で時として食事にたった10分しか貰えない場合、それは思いの他難しい。)

4. 胃痛の他の原因は腐った食物を食べる事にある。視察の際部屋に既にかかりの時間保存されていた食物が頻繁に見つかる。しかし暑い気候では食物は直ぐ腐ってしまい、胃痙攣や下痢をひき起こす。貴殿の為に余分な食物を食べる事を避けなければならないことから(原！)、余分な食物は(！！)炊事場に引渡すことが忠告される。特に当方は生の食物や残飯を食べる事に貴殿の注意を向けなければならない。下痢だけではなく、他の病気もこれが結果となり得る。

5. 貴殿の多くがズボン下だけで就寝されているので、腹部が寒さから保護されていない。これも下痢を引き起こす：故に腹巻をするか、或いは何かそういったも

のを就寝時は腹部に巻くべし。

1. 炊事場では鉱山へ水筒を持参する為と、収容所での飲み物としても、人々の為にお茶が用意される。このお茶は特別貴殿の為に用意されている。利用されたし。
2. 汝、諸君方は当局が貴殿に供与する医薬品のみ信用するだけでなく、汝自分自身（！！）に支えを見つけ健康に留意しなければならない。更に汝下痢に苦しんでいる場合は食事をしないか、或いは普段より少なめにし、飯の代わりに粥にするべし。貴殿にこれらの助言を既に供与することは当局自体の慰めとするところであり、そして汝当局の助言に従われることを希望するのは、貴殿の健康の為である。誰か下痢の発作を起こした時は、直ちに薬を取りに行き、その日の間は食事をするべきではない。貴殿が治癒するのは薬でなく、汝自分自身に回復を見出すであろう。汝自分自身が厳守しなければ、いくらどれだけの薬を持ってしても効果は全く期待出来ない。貴殿の胃の健全さは貴殿の身体の健全さである。

#### 収容所における伝染病の予防

当方が前もって述べたように、部屋を出来る限り綺麗に維持しなければならない為、衣服、毛布、マット等は日干しするべし。汝うがい出来る所（食堂、応急手当所、風呂場）はどこでもうがいをするべきであり、ジフテリアや他の伝染病 [を予防する] には汝毎日日光浴をし、来る冬に耐えられるよう貴殿の身体を冷水で擦るべし。このようにすれば去年の様な高い病人数を避ける事が出来るであろう。高い数の皮膚病の原因は不潔さにある。更にそれは伝染病を起こす要因の一つである。貴殿の衣服と寝台用具はいつも清潔に保ち、貴殿が見に付けている衣服は水洗いし、出来る限り綺麗に洗った服を着るべし。貴殿の衣服だけでなく、貴殿の身体もいつも清潔にしておかなければならない。もし温水風呂に入ることが可能でなければ、冷水をかぶるべし：病気は清潔な身体により予防される。清潔な兵舎と便所の責任は兵舎指揮官に与えられている。医薬品は実際それを必要としている患者達に供与される。（又いつもとはかぎらない！）

古い日本の諺（？）に：「健全な魂（？）は健全な身体に宿る」。故に汝が身体的に健康であれば、幸せな毎日が当てに出来る。貴殿を助けるのは薬ではない；衛生が薬より大切なのである。当局は汝がご自身の健康に配慮される事を希望する。各人が自らの生活様式をより良く監視できれば、病気の数値はかなり下回るであろうし、生活がかなり楽しくなる事であろう。これが当局の願望である。そして更に貴殿が再び家に帰還される時、誰一人として埋葬されて後に残留される事の無いこと（？）も当局の願望と致す所である。

I 煮沸していない水は飲まないこと。

II 貴殿の部屋を清潔に保つこと。

III 貴殿の身体と衣服を清潔に保つこと。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年7月

[7月21日大佐による視察があった。]この視察で病人達[...]は赤痢である事を言っはならず、全員一人数以外一病人数を低く保つ為2日間鉱山へ送り出された。当直将校によって指を叩き折られた男は溝に落ちたと言わされた。スレウ[中尉]は出し抜けに既に半年もグダン[倉庫]に腐るまで置かれていた80缶のクッキーの缶詰を購入する許可を得たが、彼は断った。その為煙草はある期間抑制されクッキーは捨てられた。

ヒルフマン

福岡 9

1944年8月19日

日本人大佐[菅沢亥重]、全戦争捕虜収容所の指揮官による大掛かりな視察。

ヒルフマン

福岡 9

1944年10月10日

今日空襲警報訓練があった。各人休日で兵舎に居た。全員第8鉱山へ[行かされた]。それから後収容所へ戻り、[そこで我々が受けたのは]禁制の品物とお金の身体検査。その後我々が4時間も長く外に立たされ続けている間、兵舎連の検査。第5鉱山で14時間(!)の作業から[朝]10時に家に戻った夜中の交替組も同じ様に立たされていた。

ルーゲ

福岡 21

1944年10月31日

全ての番号が1万高まった([僕の番号は今]10.068)。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年11月19日－20日

以前暫くの間、我々は食事を全グループ用にバケツで取りに行き、快適な方策だと思ったが、11月19日より今現在我々は又しても個人で食事を取りに行かなければならない。

オーステルハウス

ヒダオ (福岡 1)

1944年12月20日

数日前ここに数人の赤十字代表者達 (日本人) がやって来ていて、彼等の中でも色々な '小屋' の代表者達に何か心に思っている事を聞いた。そしてこれらは率直に思っている事を述べたが、中でも求めた物は :

1. 衣服と履物 (特に後の方はここに居る大半の者に是非とも必要だ)。又食事に脂肪。(ここで赤十字の紳士方は軽く笑った)。
2. 病人達用の医薬品 [...]
3. 通信、特別オランダ人様に、彼等は既に3年未だ何も受け取っていない。
4. 最後に手つかずの赤十字小包、炊事場や日本軍のそれぞれに相当抜き取られて小さく分配されていないもの。

前もって収容所長にはかなり外交的に、差し出された赤十字物資を分配した彼の正直なやりかたに敬意が表された。 [...]

将校達はここで特有な地位を占めている。本来彼等は全ての不浄な雑用作業に当てられているのに、それは我々が今実行している : 便所一担ぎ [大便と小便のバケツを空にする]、水運び等。最終的に彼等は一連の事態に何の言い分も、或いは発言権が全く無いとくる。部下達は収容所長と同様に彼等に話す事は許されない。(最上級の役人はイギリス人大佐だ!) だからクリスマスの祝いや赤十字配布等に関しては日本人収容所長が間違いなく彼のやり方で進める。ここでの通常の案件はかなり積極的でエネルギーなイギリス人上級曹長により取り計られている。



ヒルフマン

福岡 9

1944年12月26日

又しても炊事場と風呂場の人事変更が間近かに迫っている。日本軍は自分達の変更をもたらす事が出来ないにご機嫌斜めだ。そのことから継続する不穩。彼等は今にも新しい計画を持ってやって来るに違いない。それを彼等は先導だと思っているらしい。全て彼等の思い通りに進行すると、彼等の感覚では何かが間違っている。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月8日

「上官は鉱山の悲惨さを自分で経験していない、上官がそれを想像することは出来ないはずだ」、と私は何度も聞いた。確かに私は急き立てられる事の無かった自分の幸運を喜んだ。[...] 一方では大半数の判断力が災難によって混沌としていたが、私は未だ普通に判断できた。収容所指揮官として<sup>47</sup> 健全な分別で判断することは確かに必要だ。部下達の理解、罰則、評価；赤十字物資の供給；医療取り扱い—最後であっても決して軽んじられない！

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月9日

視察が間近かに迫っている。図表が作られ、収容所は清掃され、一般的に活気。第2ホールに結核患者達は隔離される、突然に！廊下は封鎖され、他の患者達は今後戸外（雨、雹）を通過して便所に行かなければならない。結核患者達の為に一つの便所が仕切られた。彼等も暴雨をくぐって、彼等の窓経由でそこまで行かなければならなかった。日本軍の頭脳！

---

<sup>47</sup> 実際；収容所最年長者。脚注36参照。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月14日

視察は一昨日平穩に進行した。視察前の予めの日々。安田軍曹はもし兵舎連が整頓されていない場合、彼が全ての毛布と上着を取り去り、我々は1週間寒さの中に居る事になることだろう、と脅迫した。

昨日日本人司令官は、各人朝と晩背中と胸を擦り、日に2回は塩水でうがいをするべしと発表した。これが為されない場合は将校達の責任とされる。日本人歩哨達による検査。今朝は喜劇の開幕だった。将校達は日本兵がやって来た事を警告する為点呼ベルの後直ちに兵舎連へ[行った]。[...]

‘フェルナンデル’ [日本人司令官の愛称] は内気なタイプで、彼自身の部下達から馬鹿にされていた。これが今向かい火を放つ。彼は突然検査官として名乗りを上げた。全てを検査し、自己の部下達をも。勿論そこには(簿記帳の中も) 途方もない不正があったようだ。結果、戦争捕虜達は今あらゆる物にもっと量多く貰っている、例えば魚類、脂肪、野菜、味噌 [味噌汁の素]。実話の顕著な心理的筋書き。ともかく、我々は恩恵をこうむっている。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年1月20日-26日

クリスマスの時自らの労働者達によって肩に担がれた今居る軍曹は、確かにこの収容所内に違った風を吹き込んでいる。それはあらゆる小さな事なのだが、それが正にしばしば心地良さをくれる：各テーブルにナイフ；‘鍋を所持しない者’ は皿とジョッキを貰う；歩哨兵達は兵舎や食堂（今居る兵隊達は殴打や我々の炊事場で物乞いをしたりしない）にもはや頻繁には来ない；散髪屋が一人居る；鉦山に着ていける冬の上着が赤十字ジャケットやイギリス軍ジャケットと交換された；赤十字物資小包の正確で即座の分配；[鉦山における] [日本人の] 指導員達は [戦争捕虜達の] 不平によって厳しく叱責される；規則的な煙草の供給、同様に海草、辛子、マーマレードにケセメック [オレンジ、粉吹き甘い果物]；夜食堂で卓球等など。尽きる事はない！！我々の生活は急進的に変容した。

ヒルフマン

福岡9

1945年2月7日

噂によれば我々の新しい収容所長になる（日本人）1等中尉が昨日到着した。

ヒルフマン

福岡9

1945年2月11日

昨日年配の紳士的な新しい収容所長から呼び入れがあった。前任者よりもっと品がある。日本語しか話さない。

ヒルフマン

福岡9

1945年2月14日

新しい日本人司令官は冷静に行動する：自己に自信があり、公正で、穏やかだ。全ては良い前兆だ。[日本兵達は] 全員彼の為に飛ぶように走りまわっている。殴打される事は彼自身による以外はもう許されない。炊事場は全種をもっと多量に受け取る。

ヒルフマン

福岡9

1945年2月20日

全戦争捕虜収容所の最高幹部である、[菅原亥重] 大佐の視察。かなり良い結果。大佐は中でも農場をへ向かった、人が言うにはこの収容所に宿泊し農場で働く事になると思われる色々な国籍の150名からなる将校達の件に関連する為の視察らしい。

新しい収容所長はかなり厳しい規律を保つ。衛生は強力に改善された。喫煙は決まった時間のみ許され、それ用にベルが鳴る。起床ラッパは5時15分過ぎ。点呼は5時半（と[夜]8時）。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年2月25日－28日

日本軍は色々なかわいしい胡散臭い連中に ‘十字と円’ の布切れを渡し、それを彼等は身に着けていなければならない。泥棒、精神病人そして闇商人達が [いわゆる] ‘十字軍従軍者’ となったのだ。理解できない事だが、[H.G.W.] ストルケルと [H.] クワードフラスも (もしそれが彼等の交換取引で生じたとしたら、全収容所が間違いなく十字軍従軍者になってしまうに違いない。)

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年8日－12日

休日に我々はきたる視察に備え収容所を掃除させられた。食堂のテーブルを我々は外で掃除したので、そのあと結霜による花がそこに出来た。視察は陸軍大将によって行われ、彼は我々を良く観察し、我々のやせ細った顔付きに勿論気が付いた。

ヒルフマン

福岡 9

1945年4月12日

数日前収容所長の交代。前者はテフモク (警告) の名で記憶に残る事だろう、というのも彼は点呼の時いつもその様に警告しなければならなかったからだ。彼はこの収容所で良くやった。新しい司令官は2等中尉で、自己を主張しない：下士官達は又しても大口を叩き、規律は減退している。再び頻繁に激しく殴打される。

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1945年4月19日

収容所の大掃除を厳守していた良い司令官はいなくなり、新任は何にも干渉しない。この収容所は又しても猪小屋になる。残念だ。今沢山の物を綺麗に保持する為には勿論戦争捕虜達を追い立

てなければならない、さもなければいい加減になってしまう。気力は抜けてしまっている。彼等の罪ではない、その様な事への興味は随分前に自然消滅しまった。

ヒルフマン

福岡9

1945年5月10日

約2日前新しい司令官、典型的な軍曹姿勢を持つ1等中尉と多少の英語を話し、恐らくフティンス〔感染性肺結核〕とみられる通訳が到着した！

ヘレ

宮田（福岡9）

1945年6月23日

今朝演説があった。僕達は全員収容所で受けてきた取り扱い、食糧等に関する僕達の印象を書かなければならない。都市におけるアメリカの盲めっぽうな攻撃について、赤十字物資と戦争捕虜達の大半が襲われた事、そして或いはこの‘無差別’爆撃を続行すべきか否かについて僕達の意見を葉書型にした作文も。全事実とは言っても宣伝目的に使用されるのだ。僕達は自分達の感じた事を怖がらずに書いてよい、と日本人通訳が言ったけど。どっちにしても沢山の赤十字食糧品を僕達はもはや貰えないだろうという事は分かっている。焼けてしまった、と彼等はごく普通に言うから。

ヒルフマン

福岡9

1945年7月8日

この収容所で重症の人々について日本人通訳と対談。益々極端に衰弱していく事例。そこに加えて相当な重労働、特別将校達用に（！！）そして余りにも少ない食糧、分量と同じく質の面でも。日に450グラムの米に追加として小麦粉か米、仕事によってではあるが。野菜に関して：竹或いはキャベツの葉、と水。塩抜き。私は大惨事を警告した。食糧に全く改善が生じない場合、我々は近い内大量の死亡事例を出す事だろう。

ヒルフマン

福岡9

1945年7月10日

通訳が私を呼び日本人収容所長の回答を通達した:この困難な時期に戦争捕虜達は食事に対して不平を言うべきではない。しかしながら数日以内に改善されるだろう(ごく普通の約束)。もうこれ以上病人が出ないように私は気を配り、兵舎連を回って、そこでの病人達を治療し、人々が腹部をさらけ出して寝るから病気になるのでそれに気を配る、など等(ところで、兵舎には病人は居ない、なぜなら彼等は全員病気にもかかわらず仕事に就かされる為だ。

ウェストラ

福岡17

1945年7月23日

視察の間日本軍が[僕の仲間コニーの]鉛筆、鋏、日記等を取り上げた。今後から日記を保持する事は禁止された。<sup>48</sup>

ヒルフマン

福岡9

1945年7月23日

福岡から[菅原亥重]大佐の視察。収容所長はもし部屋が綺麗になっていない場合、禁煙と最初の休日には働かせると脅迫した。

ヒルフマン

福岡9

1945年8月5日

この[日本人]司令官は我々には空気の様だ。彼は未だ嘗て誰の話も聞いた事がなかった。空軍中佐、ペトリー大佐そして私の3人で彼との話し合いを要求した。イエスでもノーでもない。マチュー空軍中佐は各日本兵が、特に我々にはわけの分からない理由で、頻繁に殴打される事につ

---

<sup>48</sup> 日記の保持は既に常に禁止されていたが、ウェストラは明らかにそれを知らなかった。

いて彼に手紙を書いた。これにも何ら反応はなかった。この空軍中佐が殴打について手紙を書くほんの少し前、[日本人] 通訳が[G.J.] ディッセルフエルト中佐に伝えたところでは、[日本人] 司令官が今度から政治方針を「権杖と鞭」に従うことにする、という事だった。

## 日本人による戦争捕虜達の取り扱い

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年6月8日

収容所到着後の最初の夜イギリス人達が飯を投げ捨てた。罰として彼等は今少なめの飯を貰い、我々が彼等と話す事は許されない。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年6月15日

私は炊事一軍曹に英語のレッスンをしている。彼にカンニングをさせると、彼はそれを面白がったが、何の食べ物も横流ししない。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年6月27日－7月3日

営倉（拘置所）にて。

6月26日から27日にかけての真夜中、鉾山で [A.L.] スヘルペニッセという名の青年が彼の腰に石が当たるといふ難に見舞われた。我々が帰り道に上へ行こうとした時、彼が私に、地面に横たわりながら、本当に歩けないのでトロッコで上に上がっても良いかどうかを日本兵に聞くよう頼んだ。日本兵は [けがをしている] 彼は歩けると言ったので、貴方は医者なのかと私は聞いた。ともかく、我々は先を歩き続けなければならなかった。驚いたことに、その青年は最初彼の仲間に少々抱えられた後で、多少遅れて上によろめきながらやって来た。上では日本兵が私に腹を立て、収容所で私は収容所長の事務所に連行された、私が咎められたその事柄には誇張があって、私が：「日本人が何か受難した時は、トロッコを使用できるが、オランダ人は歩かされる」と言ったという。それは [J.C.] ウェンデルが言った事で自分ではないと、私は否認した。日本人収容所長から自分達の小隊<sup>49</sup>を扇動したとして私は非難された。もし私が罪を認

---

<sup>49</sup>小隊とは鉾山労働者小隊を意味する。1つの小隊は20名の3個の分隊（作業組）から成っていた。



めなければ、白状するまで私はそこに拘束され続ける事だろう。もし私が罪を認めれば解放されるだろう、といった申し出に乗る事は賢明ではないと私には思えた、というのは‘白状すること’は、我々がバンドゥンで見た如く<sup>50</sup>、処刑になり得ることがあるからだ。私はあれこれと、すなわちその青年が言った事—つまり彼が歩けなかった事—をただ‘翻訳’して尚且つ説明したが、何の助けにもならなかった。<sup>51</sup>

私はトイレ以外何も無い木造の独房に閉じ込められた。夜中はとても寒く、沢山の蚊がいた。日に3回私は握り飯とコップ1杯のお茶を貰い、その半分を私の出血している痔の掃除に使用した。便器の蓋を私は枕として使い、起こり得る強制自白について心配していた。3日後私は日本人中尉の所に呼び出され、彼も又その間鉦山職員から私の‘履行’と今の悪行、口の上手さそして‘悪意’の告発についても聞き及んでいた。だから起訴されるかもしれない：侮辱、扇動、悪行。もしくは：‘悪意’まで等。私の独房へ連れ戻された時、私は深く祈り、非常にリリアや子供達の事を思った。

日再び中尉の所へ連行された。私は自分の弁論を十分準備しておいた。私は彼に嘘をつく為の許可を求めた。彼は私に理由を聞いた。なぜなら、と私、蘭印兵は自分の上司に嘘をつく事は許されないのです、今彼から私が扇動したがった事を認めれば自由になれると言われたからだ、と述べた。それは偽りだったからだ。しかしながら私は日に3個の小さな握り飯で生き続ける事は出来なかった。だから解放される為には嘘をつかなければならなかったのだ。彼は激怒し、ぶつぶつ言いながら出口を指し、そして私は自由になった。

---

<sup>50</sup> ファン ウェスト ドゥ フェールはここでKNIL（蘭印軍）の1人の海軍兵と2人の下士官の処刑、それぞれ水夫、H.カルセンと砲兵隊員A.ヒルケマとJ.W.メルクスを示唆している。この3名は収容所から逃亡し、再び捕らえられた。1942年4月22日の朝彼等は鉄条網の囲いに縛られ、将校連や他の拘留者達が強制されて傍観させられていた中、日本人銃殺刑執行隊により刺殺された。この処刑は拘留者達に深い痕跡を残した。（NIOD、蘭領東インド日記収集、J.F.ファン ウェスト ドゥ フェールの日記、59-60とドゥ ヨング11b第2巻半編 640-643参照）。

<sup>51</sup> ファン ウェスト ドゥ フェールは1981年ここに次の事を記入している：「現在私がここに付け加えることができる事は、当時私の日記の紙にさえも敢えて秘密を打ち明けなかった事だが、私はこのけがをした青年に歩けない事を主張し続けるように助言し、そうすれば日本兵は彼をトロッコで上へ運ぶ事を余儀なくされるだろうと私は言ったのだ。私を日本人収容所長に通報した[日本人]作業指導員はこの事を明らかに理解していたが、彼はそれを証明できなかった。私にとってはそれ故に‘妨害工作の発端’と思えるそれぞれの見せ掛けを否定する事は最も重要であった。」（NIOD、蘭領東インド日記収集、J.F.ファン ウェスト ドゥ フェールの日記）。

<sup>52</sup> ファン ウェスト ドゥ フェールは後でここに次の事を付け加えた：‘作業日の最後にしばしば指導員、マイドさんはどれほど頻りに各中央と通路側を排便の為に隔離しなければならなかったかと聞いた。私が23回と言ったら、彼は言った：「24回行ったこの者を、私は兵舎病と病欠届けを出すことにしよう」。これが私の営倉一体験の結果であった。私は実際自分の作業指導員のこの明らかな差別行為に関して愚痴をこぼす必要は無かった！！’（NIOD、蘭領東インド日記収集、J.F.ファン ウェスト ドゥ フェールの日記）。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1943年7月

我々は1日休みを貰ったことはあったが、私が赤痢により日に数十回も便所へ行かなければならないことから、休みを貰う事を願望した。しかしながらそれには一切関係なく、私の拘置所‘記録’を見て、何の寛大な取り扱いも望むことは出来なかった。下痢止め粉は貰ったが、勿論それで何か治癒するわけは無く、内臓と腹部の凄い痛みの中のたびに排泄する血の付いた粘性性の固まりは、全く少なくならず、時としては日に20回以上も行った。それでも鉱山で働かなければならなかった。それに熱も伴い、時々気を失うのではないかといった気がした。<sup>52</sup>

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1943年8月

明らかにもはや気が確かではなくなってしまった1人のオーストラリア人が収容所から逃亡し、勿論直ちに住人達により通報された。我々はこの為に点呼に来なければならず、彼は処刑されることだろうと公表された。

オーステルハウス

福岡 15

1943年9月8日

少し前1人のイギリス人が逃亡した。銃殺された。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月5日

僕には簡単に忘れられない日がある。ここ日本で僕にとっては初めての日本兵からの殴打。朝[日本兵達の]事務所で掃除[をしなければならなかった]。[僕は]タバコの吸いさしを探す[これ

が見つかってしまった。] 結果：当直将校、テガスの鞭打ちと中世の懲罰教練。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月27日

12月25日は僕にとって又もや‘友’テガスとの愉快でない出会いをもたらせた。夜、まさに点呼の前、暗闇の中で僕は未だバケツ半分の余分なシチューを下痢病棟へ持って行きたかった、[そしてそこに] 彼が突然僕の前に立ちはだかった。そして即彼は叩き始めた。最初の命中弾で僕の眼鏡は粉々に飛び散った。僕達の収容所司令官への報告後、医者と僕は翌日の昼日本人司令官の所へ踏み出し、この事例を報告した。彼が新しい眼鏡を約束し、暫くしてテガスが事務所に出席させられ、そこで彼はかなり叱責された。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月29日

昨日の朝事務所に召集。そこに新しい眼鏡が置いてあった、1日半で仕上がった、丸くはなく、同様に再び流行遅れの縁。これはテガス氏にかなりの大金がかかったことだろう。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月31日

昨夜日本人曹長（彼は残留した軍隊のたった1人で、日本人収容所長の補佐<sup>53</sup>）が自分の常日頃の狂気沙汰を見せた：点呼 [中]、普通は夜7時。しかしながら整列が彼の意図しているものより迅速さが足りなかった。[僕達は] 戻され [そして] 待たされた。再び [点呼の] ベルが鳴った。未だ早さに欠けた。またしても兵舎に逆戻り。その時病院の電燈が消されたので、兵舎の実に暗く寒い廊下を少々行ったり来たりする。眠り込んでしまうことを恐れて、毛布の下に潜り込むことは敢えてしない。終に10時15分過ぎ再びベルが鳴る：整列。それから [やっと] 寝ることが出来る。僕達、病院からの連中には大したことはない。しかし朝4時に又再び起床する

---

<sup>53</sup> 項目 ‘拘留所の組織／欧州人と日本人責任者’、1943年12月5日付けオーステルハウスの日記抜粋参照。

午前組には「堪える」。

ところで、睡眠は日本兵達にとって必要不可欠とは見られていないようだ。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月9日

それから僕はとうとう‘友’テガスと3度目の出会いをした。きっかけは又しても典型的な日本軍の取り扱いの結果だった：「僕は」診察室にタバコの火を取りに「行った」。(収容所の規律：火のついたタバコで収容所の外に出てくることはならず。それ故に：僕達全員はマッチ或いはライターが無い為、理論的には自らの兵舎でタバコを吸うことは決して出来ない、というのも‘火の元’は：診療室、風呂場の炉辺と炊事場のにある。) ちょうどそこへ友「テガス」が中に入って来た。「彼は」タバコを吸っている僕を見た。「それはそこでは」許可されているのだが、勿論習慣から(?)、「彼は」やはり既に僕の疲れた頭に拳骨を与え、後は有難い事に僕にはどの言葉も分からない悪口雑言を連発していた。やっとのことで彼は離れ、僕は外、兵舎へ逃げ出す。とにかくそうしようと努めた、というのは明らかにここで待ち受けていた僕の日本の友人は、突然前に飛び出て来てこの遊戯を又しても始めたのだ。ともかく、彼は僕に殴打を与える前に、少なくともまず僕の眼鏡をはずした。(それは火を取りに行く事の余りの危険負担だ。)

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月4日

ここに雪が降った！単純だろう？彼等の人生で初めて見た蘭領インドの若者達や多くのオーストラリア人達には理解できない。それと一緒に組み合わされた惨めな寒さを頭に入れておくことも無理。又日本人上級曹長が夜の点呼後命令した、暗くじめじめした雪の中収容所を横切る駆け足の影響を考慮することも無理：彼らの中から7名の連中が気絶してしまった。(そして鉱山労働者達は通常何事にも動じない！)

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月8日

[コル ファン] ラヴィーレンは10日間‘服役’。原因：鉱山内で指導員との喧嘩。[彼は]空腹、寒さと喉の渇きで死にそうで、自分の権威を惜しみなく乱用した日本人歩哨の好みの為すがままにされた。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月11日

[ファン]ラヴィーレンは今診療室で実際の温かさがどんなものか身に感じようと努力している所だ(彼は夜7時まで自分の独房外に留まる許しを得ている)。彼は食べる事も忘れてしまった：彼が5日間で食べなければならない30個の握り飯中、ちょうど12個彼は貰っていた。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年2月10日－19日

私は相当量の石炭を上‘上り’<sup>54</sup>から下方に引き降ろし、その横に座りながら、私の下に立っていたファン ヘルダーとカキタ(自分の手前に引く作動をする鋏)を交換する為に待っていた、そしてそれを彼の前に引っ張って置いた。アラキさんはそれらの石炭を引っ張って行かなければならないのに座っている私に向かって大声で怒鳴り始めた。私は言った、私は上で作業したのだから他の者がそれを今ここで処理しなければならない、と。彼は真っ赤になって怒り私を叩いた。私は何もし返すことを許されていないので、唯一の方法として私が彼を恐れてはいないという事を気付かせ、再度私の据わる、そして未だ据わり続けていた理由を説明した。彼は叩きそして私の頭を蹴った。私にはその時立ち上がって作業をする準備に取り掛かるふりをするのが賢明に思えた。しかしながら私は飯を多分貰えないだろうし他の2人も無理。翌日の夜中彼は他の連中に握り飯の半分を申し出たが、全員これを断った。彼は思わぬことにびっくりしてしまった為、ショックから私はその時握り飯をまるまる貰った！

---

<sup>54</sup> 上部に続いている坑道。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月18日

3日前、友、テガスから[僕の]4度目の殴打[を受けた](又しても悪名高い火を手に入れる事)で)。「彼は言った:」[「衛兵、ゴー[病人兵舎へ]」(日本語-英語)。そこで[僕は]コックと一緒に(毛布の下で喫煙した[為])。僕の顔面に数回の拳骨で僕は済んだ。コックはそういうわけにはいかなかった:[彼は]1時間半気をつけの姿勢[で立たされた]。その間時々数回拳骨[を彼は受け]、それは:(1)彼の鼓膜が破れ、そして(2)地面から5メートル宙に飛ばされた。(後で[コックは]診療室にて[H.]ラッパルド医師により‘手当て’された。何も言うこと無し。)

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月24日

又しても日本式懲罰教練の数件の典型的な実例:2月20日頃‘その’上級曹長が診療室の中に駆け込んで来た。いつもの状態:凄まじい罵り合い、特にその医者に対して(彼はこの医者が收容所長の傍でとても正しいやり方で益々彼を笑い者にするを知っている、彼は我慢出来ない)。それから後は全員ベッドに送られ、警備人も寝ずに起きていることは許されなかった。ストーブは消される。後の約12時の検査は床に多少の埃が落ちていることを示す。医者がベッドから呼ばれ、3名の看護師達と歩哨へ。そこでは寒い中、気をつけの姿勢でゴムの鞭で打たれた。

の狂気沙汰:2月22日2個のマイトが鉾山から消えて無くなった(=爆発信管の針金)。家宅捜査。[マイトは]2箇所の違った部屋内で見つけられた。尋問。成果無し。夜点呼の時全員立たされ続けた:2時間[も長く]、座ったり交互にしながら。痛烈な寒さ。終に年長の男性[G. J.]スロットが前に進み出た:「ワタクシ[がしました]」。彼は信じてもらえない。続いて部屋の他3名の連中が前に進み、自発的に報告した。[彼等は]信じてもらえなかった。とはいえ日本軍は、解散後、警備所で未だほんの少々‘特別’を分け与えることが必要と見た。それは2時間ひざまづくこと(寒い中を!)、‘それに似合った’休養を交互に、という結果をもたらせた:殴打、冷たい水を首からかけるとかそういったこと等。

オーステルハウス

福岡 15

1944年3月3日

[W.] ドントは3月2日 [死亡した] 41番目となった、原因は？ [彼は] 日本のコートをストックの近くで焦がしたのでその罰に寒さの中1時間半跪かされた：肺炎、死亡。

オーステルハウス

福岡 15

1944年3月10日

アリオス<sup>55</sup>でさえも格別うんざりする（「ニ ヒヤク ニ バン ハルト ノーグッド！ サマー サマ ミナ ミナ ノーグッド」<sup>56</sup>）。上級曹長から僕達は良く慣らされた：連兵休達 [兵舎病人達] は最も変な時間に整列する、なるべくなら‘朝食’間で、寒さの中で半時間或いは長く立っている。2晩前 [僕達は] 寒さの中で2時間立っていた、彼らに言わせれば日本のシャツが盗まれたからだ、と。（2名 [の連中が] 気絶した）。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年2月20日－3月12日

寒さと寝つきの悪さで1日中が終わった後の夜、我々は整列させられた、というのはスロット、[ファン] ラヴィーレン、ファン フレイズンそしてブロムの部屋で雷管が発見され、それを鉞山から持参した者は自ら名乗り出なければならなかった。我々はその間外で気をつけの姿勢で待たされていた。それら4名の連中はゴムの鞭で打たれ、水が彼等の首に流し込まれ、そして彼等はひざまずかなければならなかった。その時スロットが言った：「もし誰も10数える以内に名乗らなければ、私がそれを持参したと言うことにする」、そしてそれを彼は実行もした。日本軍は彼を信用しなかった。それから [ファン] ラヴィーレンが名乗り出た。同様の経過。それから第3番目が名乗り出たが、彼の服の中にも入っていたので皆が疑っていたブロムは口を嚙んでいった。故に3番目が営倉 [独房] に行き、我々は解散できた、2時間の寒さの後、その内の1時間

<sup>55</sup> オーステルハウスはここにこの者は（少ない）‘良い日本人達’の1人であったことをメモした。（N I O D, 蘭領東インドの日記、J. オーステルハウスの日記）。

<sup>56</sup> 日本語、英語とマレー語の混ぜこぜ、この意味はオーステルハウスによれば：「君等は皆間違っている」。（N I O D, 蘭領東インド日記収集、J. オーステルハウスの日記）。

は地面に座らされる。この間に全70名も又兵舎病になった。

日彼らの中のイギリス人が死亡し、それから間もなくしてスヘルペニッセ [2月23日]; 当時私は鉱山で当人の為に身代わりになり、そのことでその時3日間倉入りとなった。<sup>57</sup>

<sup>7</sup>双方の死亡原因: 完全な衰弱。日本人医師はこれから多分少々驚いたのか、即翌日我々には既にずいぶん長い間保留されていたハリファービタミン [と] A&D-錠剤が取り寄せられ、発給された、又飴やタバコさえも1日早く。<sup>58</sup>

いた所によれば赤十字社物資が日本軍の警戒の下に相当減っているのに、スレウ [中尉] が苦情を述べた時、彼は日本人中尉の為にコンビーフを取り出さされ、それから日本人中尉は彼の目の前でそれを全部食べた。[...] 鉱山での日本人指導員達も又彼等の考えについては大変あからさまだ: 「お前達がもっと死ねば死ぬほど、益々物が我々に残る、というものだ。」これは彼等の家も困窮している、という印。 [...]

3月2日 dont が死亡した、とても優しい男、雪の中での2時間の点呼で患った肺炎で。[...] 3月8日夜死亡したスヘルペニッセの日本軍シャツが盗まれたらしい。我々は又もや寒さの中とりわけ約100名の兵舎病患者達で7時から9時半まで整列させられた!

ヘレ

宮田 (福岡9)

1944年3月22日

日本軍がだしぬけにいやに愛想良くなっている [が]、何か事が起こっていて、敗北に苦しんでいると考える根拠が我々にはある。もっと多目の飯を貰い、彼等はビリヤードを娯楽室に持ち込み、ラジオが中に入った、そして収容所長が演説した内容では、彼は僕達に戦争について思い悩ませたくなかったの、もう新聞は受け取れなかったのだ、と。それが悪い経過だと思ってはならなかった。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年3月13日-31日

我々の疲労が最頂に達していることから、鉱山内で毎夜中約4時頃言い争う。指導員達は極度に

---

<sup>57</sup> この項目中の1943年6月27日-6月27日付けのファン ウェスト ドウ フェール日記抜粋参照。

<sup>58</sup> 大抵捕虜達は各週1回砂糖とクッキー、そして3日毎に1箱のタバコを受け取っていた。項目‘食糧及び物資事情’、1943年11月25日付のオーステルハウス日記抜粋参照。



いらいらさせるし、しょっちゅう叩かれる。これが私にとって余り問題でないのは、自分が前営倉住人〔前拘置所住人〕であり、粗悪な労働者として既に日々殴打されていた為だが、狼狽することには今は‘ましな’労働者達も殴打される。彼等には更に激しいのが飛んで来る、なぜなら彼等は未だ鍛錬が足りないからだ。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年4月1日－19日

我々の指導員達はリング〔日本の現場監督〕や第2分隊の指導員達に対して自分達がいかに我々を苛めているかということ自慢した。我々がすること全てに対して彼等が怒鳴り罵倒するやり方はひどいものだ。そしてリングはこれを面白がっている。〔彼は〕自分で罵倒し始め我々に地面のゴミを拾い上げさせ、そして私が汗をかくから我々の鉱山服が汚れる、と腹をたてて、我々は自分達のジャワ－衣装を鉱山では身に着けるべきである等など、と言う。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月7日

収容所の雰囲気は突然大変悪くなっている。最近まで親切だった収容所長が、今気難しくなり、怒りっぽく、気まぐれで不当に罰し、あらゆる不可能な仕事を命令する。我等戦争捕虜達により日本軍へ売買されたあらゆる品物を憲兵隊が追跡している。収容所長は今誰が売ったか調べている。これは多くの鞭打ちを伴うことだろう。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年5月11日－17日

全てに慣れるというのはおかしいことだ。バンドゥンとチラチャップで我々が未だとても心を動かされた事など、今ではかなり普通で、もはや感動しない。例えばドゥ フリース中尉は音楽作りの許可を貰った後、パン製造所でギターやハーモニカを演奏させ、そこで数人の者達が口笛を吹いたり歌ったりした。しかしながら日本軍によれば歌うこと或いは口笛を吹く事は音楽作りには属さない、というので、ドゥ フリース中尉は警備所で数時間ひざまづかされ、殴打された。

表札を間違えて掛けた<sup>59</sup>者は鞭打たれる。自らの食事容器をベルトで自分の肩に掛けた者は、ベルトを肩の上に置く代わりに、そのベルトで彼の顔を打たれる。それは余りに毎日見る光景なので、こういったものに我々はもはや引きつけられなくなっている。食器洗いの時鉢を割った場合、1日拘置所でひさまずいている。

ヒルフマン

福岡9

1944年5月21日

ここの収容所内では鉱山の日本人達と軍当局の間に確実な論争が起こっている。鉱山では働き手は100パーセント健康である者が採用される。彼等は頻繁に病人達を再び収容所へ送り返す。それでも現れる病人は、働きにやってきたことが理由で叩かれるといったことが時々起こっている。軍当局はなるべく多くの人間を鉱山に送るという原則に従い、故に病人でさえもそこへ駆り立てたのだ（指令に注意：「健康に留意！」）。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年6月21日－7月7日

今又してもこの収容所内に下痢の大波（私も既に数日間日に10回）、看護師はこれにかかっている労働者達に2日間絶食することを推奨した。その上全員収容所の周囲を棒と鞭を持った兵隊達を後ろに6回（合計約4キロメートル）駆け足しなければならなかった。頻繁にそして激しく叩かれた。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年7月13日－21日

鉱山での指導員達による取り扱いはひどい。私はアラキさんに彼の頭の上にあるグラグラの石版を指摘した。耳に平手打ちをくったが、彼にひび割れを指摘し、指で小片をバラに取ったら、その後すぐ15キロの6片から10片が彼の立っていた所へ落ちてきた、そしてその時彼から顔に

---

<sup>59</sup> 大抵捕虜達は各週1回砂糖とクッキー、そして3日毎に1箱のタバコを受け取っていた。項目‘食糧及び物資事情’、1943年11月25日付のオーステルハウス日記抜粋参照。

激しい殴打を受け、彼は私が引きちぎったのだと怒鳴った！この話は私がいかにこの殴打に動じないかということをよく示している。私がやはり先へ進んでいくには自分が彼等の事を怖がっていないことを見せ、可能な限り彼を卑劣に見ることに喜びを感じるしかない。これに関して嘆くことはしない、第一に営倉に居た<sup>60</sup>最初の私の日本における‘前科’、しかし他は、彼が放り出されない限り、それもまずは起こりえないだろうし、更に彼がとげとげしくなるだけだから。その上日本人中尉によって公平さを認められることがあるとしても、どうぞ警備所に呼ばれてそこで隠れて叩かれるのが落ちだ。結局日本軍の間違いが判明しても；不詳にしておくのが無難だ。

ヒルフマン

福岡9

1944年7月21日

最近又しても更に多くの殴打がある。その上〔日本軍は〕銃剣で叩いたり突き刺したりする。今日ノールデコープ〔収容所番号〕214番が、公衆便所に立ってタバコを吸っていた為拳銃の台尻で叩かれ、銃剣で足の上部を突かれた。止血出来ない大量の血が出た。結局〔彼は〕日本の病院に運ばれ、その場所で動脈縫合；大腿動脈の支流に命中した。

ヒルフマン

福岡9

1944年7月22日

日本人司令官の所で昨日の当直将校による銃剣使用に対する異議が申し立てられた。彼は二度と起こらないようにこれを調べるとのことだ。その1時間後それにもかかわらずヤスタ軍曹の所に出頭させられ、彼は我々に（〔G. J.〕 ディッセフェルト中尉と私）ひどく怒鳴った。

ヒルフマン

福岡9

1944年7月31日

昨夜ヤスタ軍曹が釜山に行かなかった全員を整列させた。殆ど全員私が見抜いた所では病気の為収容所に留まっていた。彼等は日本人看護師からの手紙を何も持っていなかったなので、彼等を罰

---

<sup>60</sup> この項目中1943年6月27日－7月4日付けのファン ウェスト ドウ フェールの日記抜粋参照。

しない様と私の即座の嘆願にもかかわらず、29名は3個の小さな独房に入れられ、そこで一夜を過ごした、もし誰かに罪があるとしたら、それは私だった。

朝日本人司令官によるこの出来事の取調べ。私がこれらの連中を自分の職務権威で自宅に留めた為、相当厳しい罰則の威嚇。彼等はその間午前7時に解放され、直ちに鉦山へ送られた。今後は患者も私も厳しく罰せられることだろう。日本人看護師の手紙でのみ人は自宅に留まることが許される。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年8月1日

昨日初めて営倉に入った。日本野郎の任意。僕達は医者から兵舎病を貰った、日本人看護師の許可も求められること無く。それは必要も無かった。昨夜これが急に必要となり、この処置は兵舎病患者達29名の拘置所入り序曲で制定された。14 [人が1個の] 独房。僕達は寝なかった、君には分かるだろう。翌朝7時に僕達は各人自分の交替組と一緒に鉦山へ行かなければならない、という通知をもって解放された。僕のグループは夜中組なので、夜まで時間があつた。10時日本人看護師から僕に [8月] 3日まで兵舎病を与える、という手紙を貰った。奴等の思考過程にはもはや付いていけないよ。

ヒルフマン

福岡9

1944年8月3日

日本人看護師に手紙を依頼しに行く患者達の内、毎日数人が拳骨一或いは棒叩きで戸から放り出されている。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年7月29日－8月4日

鉦山で私は久しぶりに又新たにアラキさんから相当叩かれた、10回も、一方で私は彼を完全にさげすんで見続けていた。それに対して彼等は概して逆らえない。その上彼等は上に向かって叩かなければならない、というのは我々の方が大きくなるので、手を届かせるのに前かがみになるで彼

等を完全に苛めている！この殴打の原因は、ある指導員が我々に上の方へ行ってよいと言った為、我々は立ち上がったのだと私が言ったことにあった(命令は彼から受けなければならなかった)。

ヒルフマン

福岡9

1944年8月15日

昨夜日本の台所が押し入れ、多少の油と砂糖がさらわれた。罰として罪人が発見されるまで、我々は油を貰えない。

ヒルフマン

福岡9

1944年8月17日

報告するに値する事は昨日10時[夜]15分前に喫煙した為、2人他の者が独房に閉じ込められることになった時、自らの動揺から2名責任があるとして名乗り出た。そういったことはこの収容所で初めて起こり、多分再び高まっている道徳心の兆しか。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年8月28日

日本軍には益々うんざりさせられる。ここ鉱山内でも彼等は又しても殴打し始める。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年9月5日-16日

腫れている足指の為私は収容所作業人となり、初めての全休日を寝て過ごした(警備所の前で1時間半気をつけの姿勢で立っていなければならなかった以外は、それは私がそこを通る時挨拶をしなければならなかったのを忘れたから)。

オーステルハウス

福岡 15

1944年9月21日

日本軍は近頃信じられないほどうんざりする。[僕達は] [Th. A.] セルデルベイクの部屋で夜の聖別 [をしていた]。彼自身は食堂 [に居て]、彼の番号は上に掛かっている<sup>61</sup>：283番（僕が283番となる）。[僕は] ちょっと便所に立って、戻って来ると、僕が番号札を2秒掛け直さなかったのに気付いている日本兵が僕の後ろに立っている。‘283’は取られた。僕は歩哨へ。3名の日本兵達は彼等の様々な棒で僕を鞭打つ必要ありと見た。今僕は徐々に殴打されることに慣らされて来た：タバコの火を取りに行く事、挨拶をしない事、番号を忘れる事等、それぞれ同等に1人の戦争捕虜に実に快くひどい殴打を与える要因となる。しかしやはり不愉快だ！ [...]

まずは寝ることにする。9時になった；ベルが鳴ったら部屋に居なければならず、蚊帳の中、毛布の下に。さもなければ殴打される、だから可能ならばの話だが、やはり今のところは何とか免れようとしている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年10月20日

このところ日本軍の恐怖支配は益々ひどくなっている。鉱山でも頻繁に殴打され、虐待され、しばしば訳も無く。ヤスダ軍曹によれば、日本の命令が良く従われていないからだ、と。その間私は日本人医師と日本人司令官のところで鉱山におけるこの理由の無い殴打を持ち出すことが出来た。収容所生活が相当厳しいので、私は日本軍の日常的な命令をより良く順守するよう監視することに決めた、例えば：兵舎で食べない事、部隊が外出する時は弁当を用意する事、ナイフ、指輪そして腕時計を持たない事。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年11月11日－20日

我々の指導者達による取り扱いはまだ尚且つひどい。彼等は可能なものは何であっても虐める。

---

<sup>61</sup> 脚注60参照。

叩きそして常に怒鳴る。鉦山或いは収容所に行く時話をすると、彼等はそれを禁じる、なぜなら自分達が関心を持っているからで、時として我々が何について話をしているのかも聞きただす。どんな返事をして、彼等の答えは平手打ちか一蹴りだ。

ある日ヤン ル コントと私は他の者達より鉦山から早めに上方に上がり、日当たりのよい所で柵にもたれて座っていた。突然アラキさんが前に立ち、我々に向かって喚いた。私は自分の目を明ける事さえせず（というのは既に彼の声に聴き覚えがあったからだ）、吠え声の音だけ出した：‘ワン、ワン’、私が全てに何を答えようと、要するに平手打ちが来るだろうから。ヤン ル コントは即座にこれを理解し、死ぬほど大笑いをした。アラキさんはさっぱり理解できず、歩き去って行った、今又これが何であったのか自問しながら。[...]

鉦山で最近今までに無く最悪の日があった。我々は指導者達の喚きと殴打の下に、上りで7個の荷車を満杯にし、彼等は後でそれを大変‘上等’であった、と言った。彼等は最初更にもう1杯の荷車の後は我々に休養を与えようと言ったが、それから我々は未だ2杯分満杯にしなければならなかった。若いリングがその近くに立ち、共に叩く蹴るをした。すなわち、実に悪魔のカップルだ。収容所への帰り道我々は言った：「大したことは無かったな。」こうして我々は互いに励まし合う話で助け合い、最も当たり前の事柄の中で今自分達の大満足を感じた。

オーステルハウス

福岡15

1944年11月27日

営倉について話そう。ここをも知ることが無かったとしたら僕は良い戦争捕虜とは言えなかった事だろう。僕は弱い印象を与えることになるだろうが、それは僕には意味深かった、というのはこれがこの戦争捕虜の身で僕に一番長く記憶に残るだろう物事の一つであったからだ。11月3日朝：丘を平らにならす。10時休めそして一本のタバコ（これは休めの一番大事な事だ）。しかし僕達の内2人勿論オーステルハウスを含めて、が即大工から‘新兵舎連建築’での手助けに呼び返された。だからタバコ無し（このタバコを記憶しておくように、というのは全てが変転するから！）。新しい仕事では日本軍が作業していて、その内の大半が仕事で喫煙している（公式には僕達は仕事で喫煙してはいけない）。ちょっと数服。直ちに収容所長が天から落ちて来たごとく僕の鼻先に立っている。説教、殴打（どれもそんなにひどくはない）そして一営倉！それは実に大変だ。警備所の後ろに板と竹で作られ、隅にかなり有用な道具のある2メートル半平方の小屋がある。それが僕の臨時の居住地だ。どのくらいの期間？分からない。隅に座ってみてなかなか心地良いとわかる！僕が日本兵をちょっとばかしからかっている；好都合の休めであり一僕の食事は時間に運ばれてくる。

ただし：時間がやはりなかなか早く経過しない。今民間警備が交替する：今は11時。そして終に、そう、軍隊：今現在は11時半だ。幸い、今彼等が早く食事を持って来る。そ

してそれをたいらげると、さて、ちょっと又座ることになる、そして一待つ。待つ？何を？それが正に分らないことなのだ。どのくらいそこに居る？1日、2日、或は3日？或は多分1週間？さあ、床の板をちょっと数えることにしよう。次は壁のを。なんと、そこは2枚多い！間違いなく小さ目。そうさ、そこには確かに数枚の小さいのが間にある。次は他の壁を。ほらね、終わった。待てよ、今木に釘が。今何時だろう？たった今1時半の歩哨が行く。それから僕は自分が何をして全時間を費やすか考え出そうとする。この正方形の中での私の居住地は何歩あるか：22（僕がそれらを余り大きく取らなければ）。それから斜めにだから約7歩だ（何とピタゴラスは有用なことか。）それから僕は今突然百回自分の部屋を歩き回る、そうすれば間違いなく4時のベルが鳴るそして—それから彼等は即再び食事を持って来る。... 21... 25... 69... 終に100！何だって？ようやく2時半の歩哨？勿論：100 x 4 x 2½メートル=1キロメートルそして又すごくゆっくり歩いたとしても、1時間以上はかからない。

は寒くなっている。毛布は持っていない。そして僕がかなり特別のテガスの好意を喜んでいるので、彼はちょうど平日勤務で、それを貰う事も出来ない。竹がそんなに多くないよ。戸と格子窓（ガラス無し！）から少々光が入る一隅がある。そこに僕は胎児の状態で自身を曲げ折る。全く骨まで寒さがしみることを既に僕は感じたので、横になることは既に全く可能性が無かった。かつてこんな夜中を過ごしたことがあるかい、膝に頭を置いて毎時5分うとうとし、1時間半駆け足と体操をする、自分の血が再び循環し始めるという幻覚を自分自身に与えるといったような？

これは11月3日、朝10時に始まった。[...] それから11月5日になった。今誕生日を祝うのに最適な場所は確かに独房ではない、戦争捕虜の身でなくとも、ただ3度の食事を運び、勿論残念に思っている台所の男性から祝ってもらっただけだ。11月5日、午後4時5分前、[A. D. G.] ヘンゼル<sup>62</sup>が軍曹に114番は今日誕生日であることを伝えた。4時重い戸が開いて僕は外に立っていた、ちょっとふらついた足で。僕は気違いにならず、毫碌もしななかった。その上コル [ファン] ラヴィレンは冬のひどい寒さの中、10日間入れられていた、日本軍の粗悪な取り扱いと不十分な食事とで！

そして出て来たら最初に何を？まず眩しい陽射しの中で周囲をびくびくしながら、どこかに挨拶或は‘敬礼’をしなければならぬ日本兵がいないかどうかを見回し、自分自身何も欠けている所が無いかどうかを調べる、なぜならまるでその広い外の空間に、鮮明な光の中で、まるで裸で罪深く感じるからだ。それから最初のタバコを吸う為食堂へ行き、それから自分の‘部屋’へ行く。

---

<sup>62</sup> A. G. D. ヘンゼルはこの時台所で働いていて、オーステルハウスに食事を運んだ人であった。



ヒルフマン

福岡 9

1944年12月2日

鉦山での虐待に関する多くの不満により、私は日本人司令官の所に苦情を申し立てた。私は最悪の暴君である4名の名前を挙げた。その結果：即鉦山に電話された。これら4人の男達は消え去り、恐らく転属。 [...]

一昨日ドッペルト、[収容所番号] 248番が歩哨により禁煙の場所で喫煙していたところを見つげられた。鞭打たれ燃え滾るストーブの傍に気を付けの姿勢で置かれた。もし少しでもわきに寄ろうものなら、彼は又しても殴打された。結果：右膝下の側面に2度－3度の火傷、病院に入院。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年12月3日－4日

数回我々は鉦山でリングからウビ[サツマイモ]さえも貰った、つまりアラキさんが不在の時に、ゴシマさんが‘農夫’[1人の日本兵の渾名]に良い影響を及ぼした。それから後になってリングが私にひとかけらのサツマイモのをくれた時、アラキさんがそれを目にし、彼は嫉妬で爆発して私をそのことで叩き蹴ったが、私はサツマイモを既に食べてしまっていた！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年12月5日－7日

誰かが鉦山にタバコを持参したところを見破られた為、我々は又しても1週間タバコを奪われてしまった。ヒルフマン

福岡 9

1944年12月8日

盗みを働いた我々の2名の逮捕者達は今現在警備所で中世時代の方法で殴られている。彼等は既に数時間前かがみになり何度も棒叩きを受けている。彼等の顔は灰が塗り込まれ、赤熱した木片

で皮膚を焼かれた。彼等の痛みの叫びは遠くまで聞こえた。1つのごく普通の処罰はひかがみに棒でひざまずかせ、時々そこを蹴られる。

ヒルフマン

福岡9

1944年12月11日

[私は]日本人‘看護士達’に呼ばれた。又しても突然気分が悪くなったという、実はどこも悪くなかった‘フリッピー’[1人の日本兵の渾名]を検査した後、水増しの酒を貰った。[...]私はコップ1杯だけ飲み、彼等は2杯。これはかつて日本の病院からのアルコールであったので、彼等が我々の物を飲みつくした全てのアルコールの復讐を私は喜んで行った。

ヒルフマン

福岡9

1944年12月12日

[R.]スタム<sup>63</sup>は彼が‘刺し屋’に昨夜、理由も無く激しい殴打を受けたことを報告した。

ヒルフマン

福岡9

1944年12月13日

今日ザウルンベルフ、[収容所番号]192番、が野菜を持ち去りそして食べつくしてしまったので棒叩きを受けた。ドゥ ハース副中尉は彼に棒叩きを与える命令を受けた。彼が十分激しく叩かなかったので、当番ペータースが彼に棒叩きを与えなければならず、そしてペータースが十分激しく叩かなかったので、彼は日本兵から殴打を受けた。こういった種類の処罰は日本軍の流儀である。その間ザウルンベルフは日本軍自身によりひどく打ちのめされた！！

---

<sup>63</sup>R. スタム軍曹は歯科医で福岡第9の収容所病院で志願看護士として働いていた。(ヒルフマン、91)

ルーゲ

福岡 21

1945年1月3日

1月以来P. [日本軍] が実に怒りっぽくなっているのが非常に目立つ。全員何の問題もない者或は最も取るに足りない者まで興奮して殴る。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月4日

ここでの気候が日本軍の気性に多分影響を及ぼしているのではないかと私は自問する。双方同等に気まぐれだ。時々友好的で礼儀正しいかと思えば、瞬間にして激情して不運にも誰かを殴る。ある瞬間素晴らしい陽射しかと思えば、すぐ暴風雨。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月7日

日本人達の群居本能の実例。各日本人は1月1日が誕生日だ。個人的な誕生日は存在しない。他には彼等はこの日を自分達の‘クリスマス’と呼んでいる。1月1日には全将校が日本人司令官の所に招集され、コップにビール、海苔、乾燥イカそして乾燥魚卵を貰った。後で再度‘ポーリス’の所で深酒をしていたタカキからご馳走になった。もう一度全将校（と [薬剤師助手のP. A.] モーリン）が中に呼ばれた。[我々は] 酒 [を貰った]。全員同じ小さな、金属製の盃（そこに一口）。多くの盃が飲み干された。日本人司令官は着物を着てソファーテーブルの上に胡坐をかき、向かい側には‘ポーリス’が日本の徳利を持って彼等の間に入って。彼には着物が西洋の衣装よりどんなにか良く似合っている。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年1月前半

午前の最後我々はアラキさんとゴシマさんからの殴打に苦情を申し立てた。2日間の間に我々は

双方のそれぞれから4回殴られていて、つまり[収容所]番号173, 208, 275そして286(それは私だ)、一方彼等は多分日に15回は殴り蹴るをし、互いにそれを笑っている。彼等が殴る例は、荷車を一緒に押さない場合、その後ろには既に4名が押している(押す場所がもう無い)、一番後に歩く場合(やはり誰かが一番後にならなければ)、話をする、許可無しに便所へ行く場合、立つことが出来ない上りにて座っている姿勢で穴を掘る間、籠の中に手を入れて支える場合など等。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1945年1月9日-18日

我々の苦情後第1日目は成功だった。1月13日アラキさんが我々を集合させ、我々が良い仕事をしなかった場合は、歩哨に殴らせることにすると彼が言ったが、彼自身は極度に落ち着いていて、電線火薬を待つのに1時間休憩を与え、4人の代わりに3人にかかせ、夜中じゅう自ら大人しくしていた。それは彼が我々の指導者となったこの1年以来最も静かな夜だった。リングと他の指導者達は不満を受けた彼をあざけた;それを彼は面白く思わなかった。この持続した交替時間中彼等は双方とも大人しく、十分睡眠を取り、無駄口は少なく、そして我々は普通に楽しく鉦山へ行った、それは余りに寒いのでなおさら暖かさの中に入って行くことは嬉しい。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1945年1月19日-26日

この交替の最後の3分、'農夫'[1人の日本兵の渾名]が私に最初の平手打ちを与えなければならなかった、というのは私がいわゆる余りにも小さな石を2人で荷車に投げ入れたかったからだ。

ヒルフマン

福岡9

1945年1月26日

日本軍による'ずる休み'<sup>64</sup>を追跡する一斉検挙。ディッセフェルト中尉と私は2時間続けて

---

<sup>64</sup> 病気により鉦山から向きを変えて逃げようと試みた者達。

[日本軍の] 事務所に居て、その場所で棒叩きの証人等。結果として今事務所に病欠届けを求めなければならない病人達の為に新しい規則が採用された。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年1月27日－2月16日

収容所の雰囲気は最近の良い天気と共に大変良く、全てが現在我々の利点に転換していることは少なくとも関係が無くはない。数人の収容所作業人達を寒さの中に立たせて置いた1人の日本兵が、「彼等は寒いと思ったから」、と日本人中尉と軍曹により激しく叩かれこの収容所を追放された。少ない石炭が我々の収容所の中に送られてきた時（日毎1人につき4キロ）、軍曹は夜中の交替組を1時間遅れて鉱山へ行かせ、少ない燃料により食事が遅れたことを彼等が報告しなければならなかった。軍曹自身更に空き家になっている朝鮮人収容所へ行き、数個の戸を踏み潰して燃やす材料として台所へ持って行かせた。

鉱山から我々の自宅到着の際彼が、良質の石炭をごまかし持ってきたかどうかを聞いた！我々はこの夜中1時15分この収容所の中へ来て、翌日全‘リングン’が日本人中尉により喚起されこの残業について叱責された。ローズボームはなお悪いことには彼のポケットにあるタバコを忘れていて、鉱山検査で見つけられ営倉に入れられた。彼が少々頭が弱いと見られことで我々は1週間のみの集団処罰（タバコ無し）を受けた。

オーステルハウス

門司（YMCAビル）

1945年2月1日

[オーステルハウスは彼の前収容所、ヒダオ第1収容所における自分の体験の概要を供与している。] 書き留める価値があるのは[外部雑用に] いわゆる忌々しい—日本野郎が歩哨として同行したその日だ。それは朝殴打と怒鳴りで始まった。僕達が駅に来た時、その年寄は姿を消し、野菜の積荷と一緒に戻って来て、再び出て行った、かなりの数のタオチョー[発酵された大豆]と数杯の手一杯の塩を持って戻って来て、又出て行き最後に謎めいた包みを持って戻って来た、そしてその中から彼は最高の髄骨を取り出した。（いかにして彼が貧困な日本からこの少なくとも1人の戦争捕虜の為にチャンスを見つけることができるのか—ご馳走を引っ張り出してくることはいつも謎めいていた。）結果は1人につき2つ鍋一杯の脂肪入りスープ、それで僕達は食べ疲れそして満足した。

最後に数個のみかんを中に取り込んだことが更に僕をして1時間ばかり時間を食った、

僕はそれを一生忘れないことだろう。身体検査の時それらが見つけられた。夜点呼の後ヤープ・オーステルハウスは警備所に出頭させられ彼等の顔にサディスティックな笑みを浮かべ、兵隊達が僕を鞭打った。最初前かがみ、それから竹と縦帯で殴打し続けた。あー、これを記述する努力をすることは価値が無い。自身でこれを体験していない場合、これは不可能だ。いつか‘ふぬけ’の様にと人が言う。夜兵舎にふらふらしながら帰って来た時、僕はこの表現をもう少し良く理解した。(数日後誰かがこの同じ日本人歩哨により殴り殺された。

ヒルフマン

福岡 9

1945年2月27日

新しい日本人司令官の着任以来、第8鉦山ではもう殴打されなくなっている。<sup>65</sup>第2鉦山では未だにそうだ。残念な結果は、我々の連中が生意気な態度を取ろうとしていると、日本人司令官に報告されたことだ。私は点呼で警告した；我々は日本人司令官の好意を損なわないよう全てをさなければならぬ、と。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年3月1日－7日

我々が塩搔きで遅くなった<sup>66</sup>ある夜、私は未だ鉦山で入浴しに行った。風呂の火照り（そして勿論清潔）で整列に行った時、驚くべきことにアラキさんが未だそこに居て、私にどこから来たか聞いた。‘便所’は当てはまらず、彼がそれを言い当てた時、私は仕方なく‘はい’と言った。彼はこれを歩哨に報告したが、彼は幸いそのままにさせた。[...] [軍曹は] 3月5日にやって来て、恐怖支配を実行する新しい歩哨に何も出来ないのか、或はしたくないのか：ボタンが外れていれば殴る、挨拶をしない事（それはかなり一般に相当の罰と見なされた）、ポケットに手を入れて歩く事、襟を‘立てる’或は‘ねかせる’は与えられたその反対の命令による。ともかく、我々がアメリカの接近を気付いているので、そういった事だけなら文句は言えない。

---

<sup>65</sup> 項目‘拘留所の組織／欧州人と日本人の責任者’、1945年2月11日付けのヒルフマン日記抜粋以下参照。

<sup>66</sup> 項目‘食糧と物資事情’、1945年2月25日－28日付けのファン ウェスト ドゥ フェール日記抜粋参照。

イエッテン

折尾（福岡15）

1945年3月1日

休日というのに、全収容所の全員が整列した。盗みが行われた：日本軍台所から少々の米。罪はオランダ人収容所司令官に加えて第7兵舎の上部回廊の日本兵にある。彼等は公然とさげすまれた。彼等は自分達がどういった罪を犯したのかを公然で懺悔しなければならない。「私はこれだけの…」等。私はこれを不快な見世物だと思った。終に日本軍は我々全員に彼等が何回棒叩きを受けるべきかを聞く。オランダ人大尉がこれを繰り返す。いかに我々もこの状況で特別のものがめの中で‘盗み’をしても、この裁判の方法は我々の趣味ではない。我々は全員黙りこみ、どうしてよいかわからない。私は自分の顔を背けイエスキリストの処刑を思う、そしてこれは我々が今日の午後苦難の話で取り扱うことになるだろう。神の慈悲無しには我々は皆天国への切符を手に入れることは無いだろう。

ルーゲ

福岡21

1945年3月8日

今朝鉦山から帰宅中我々は4時に警備所で気を付けの姿勢で立った。理由：我々が毎日傍を通る家々で新聞を盗難したらしいのだ。我々が解放された時、多数が一步も歩けなかった。幸い天気は良く、太陽が照っていたが、寒かった。我々の履物は寒さと雪に対して耐えられない。

ヒルフマン

福岡9

1945年3月13日

日本人司令官が殴打の事例は彼の所に報告されなければならないことを公表した。1件の事例が既に処理された。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年3月13日－20日

歩哨はボタン、挨拶そして不平等に恐怖支配を実行する。彼は誰かをレスリングの要領で地面に投げた、そのとき彼は自分の頭から落ち気を失った（難しいことではない、日本兵の攻撃と厳しく処罰されることが説明されているので、対抗者が攻撃をかわす動きをすることさえ許されなかった）。彼が気を取り戻した時、うめき声を出し、自分が鉾山へ行けなかった為に真夜中営倉に行かされた。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年3月21日－31日

第9カタで我々は第2小隊と一緒に働いていた、そして‘黒猫’[1人の日本兵の渾名]がリングとして同行した。この男、彼は昔紳士だったことだろうが、今は一番怒鳴りそして罵倒する。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年4月5日－11日

日本人指導者達は又しても以前の様に怒鳴りがちで殴りがちで、そしてこれは改変した戦争展望による全面的なものだ。<sup>67</sup>軍曹は今も一番厄介だが、今月の歩哨は幸い再び多少穏やかだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年4月12日

1人のアメリカ人がいわゆる‘逃亡の試み’の為憲兵隊により銃殺された。もう1人は殴り殺された。[...]鉾山の日本軍はもはや殴打を許されない。彼等は極度に神経質でいらしている。彼等は未だ戦争について話し始めている。僕達は彼等に対して自分達の姿勢について厳しい指示

---

<sup>67</sup> アメリカの進軍と爆撃による。



を受けている。

ヘレ

宮田（福岡9）

1945年4月19日

又しても簡単に殴打される。<sup>68</sup>挨拶をしない或は間違った挨拶、或は囲いの余りに近い傍を歩く事、など等。それは以前余りにも良すぎた。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1945年4月12日－21日

鉦山の日本軍は多くそして頻繁に殴る、それは最近のニュースが原因だ。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1945年4月22日－5月11日

我々は再び数日‘人間的な’気分になったアラキさんとだけで働いた。数日後‘農夫’もそこへやって来た、そしてまずは非常支柱が置かれないなら、危険な屋根の下に行くことを我々が拒否したその瞬間、彼は言った：「お前達が全員死んでしまえば良い、そうすれば我々にもっと多くの米が残る。」この思考過程は日本軍も自らの損害を受けているのだ。1人のリングが言った、日々の爆撃は約150回を数え、既に3百万が死亡した、と。「しかしやはり余りに大勢だったので、そんなに大したことではなかった」、と彼はそこへ付け加えた。

ドゥ ヨング大尉は日本人軍曹にユリアナ王女の誕生日[4月30日]により赤十字社の供給物を我々が貰えないものかと聞いた。「お前達は余分の糞紙を貰うことが出来る」、とそれが答えた。[...] 冬服の引渡しの時、軍曹が見つけた虱を持ち主の口の中へ入れた。幸い彼はそんなに一生懸命探さなかった、というのは皆が虱を持っていたから。

---

<sup>68</sup> 部下達を良く手中に収めていた前日本人司令官の出発後。項目‘拘留所の組織／欧州人と日本人の責任者’1945年4月12日と19日付けのヒルフマンとヘレ、それぞれの日記抜粋。

ヒルフマン

福岡9

1945年5月20日

イギリスの将校達はかなり粗野に扱われている。彼等は日々の‘レッスン’つまり義務労働、或は390グラムの米のみを貰う。彼等はここに加えて何度も殴打され、青年達からも。[...] 近頃我々オランダ人将校達から5名が点呼に立ち、残りはこの継続する時間、再度我々の荷物を侵害した青年達をチェックする為、‘あまえんぼう’の命令で巡察しなければならない。その結果今は紛失事例が少ない。

ヒルフマン

福岡9

1945年6月1日

多くの殴打。ドウ フェンテ副中尉が自家製の電気ライターの使用により数回気を失うまで殴打され、独房に入れられた。全兵隊と将校達は警備所へ出頭させられ、彼等の尻に鞭を受けた。我々はそこで荒々しく吠え立てられた。その間ドウ フェンテは我々の近くの道で半裸で気絶していた。数人の日本兵達が最終的に気絶がひょっとして見せ掛けかどうかを試す為、彼の足の裏に火を持って忙しくしていた。ドウ フェンテは2日間閉じ込められ、残骸の様に再び前に現れた。彼は更に数回鞭打たれ、そこで気を失ったと話した。連中は彼にバケツ1杯の臭い水を身体の上にかけて、又それを飲むように強制した。同時に1週間禁煙と共に全収容所の全てのタバコが引き渡された。(後で1日減ぜられた)。

ファン フレウトンは3日間閉じ込められ、その全時期売店で立たされ続け、食事は抜かれ、その時期1杯の水だけだった。理由：日本の野菜倉庫の強盗。

ヒルフマン

福岡9

1945年6月3日

日本人通訳は本当の権力者だ、[M. A.] レイス中尉を無礼と不十分な仕事と見なされたことにより殴り続ける。

ヒルフマン

福岡 9

1945年6月11日

一昨日ある数のイギリス人将校達が、彼等の兵舎を通過して歩いていて、満足のいく挨拶をしなかったと断言した日本人兵隊によってひどく鞭打たれた。その間イギリス人将校達を確かに快樂をもって鞭打ったこの日本人兵隊は特別だ。毎夜彼は彼等の兵舎にて他の部屋を選び、彼の拳銃の台尻或は竹で信じられないほど殴打する。その結果ラットクリフは軽い脳震盪と殴打で麻痺した足の為入院し、一方他の2人は(ハンコックとフォート)兵舎病を貰い、同じ様に腫れて、殴打で麻痺した足の為。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月20日

昨夜又しても空襲警報。北方向に火事が生じた。相当のもうもうと立ち込めた煙。[僕の友人] コニーは余分の鍋を兵舎へ持参する為台所で夜中の雑用をしていたが、彼は不器用だった。彼は見つかри、厳しく鞭打たれそして独房に入っていた。どれほど長く？これはそのリスクだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月25日

コニーは1日独房に入っていた。処罰として外部の農夫として仕事を受けた。幸い鉾山の作業人にはならない。

オーステルハウス

門司 (YMCAービル)

1945年7月23日

僕は再び家に居る [港での雑用は無い]。[...] しかし今は休日ではない。あきらめなければならぬ。昨日の朝僕は未だ仕事に引きずっていったが、その時は僕の力の限界だった。歩哨は僕を休ませたが、'軍医伍長'に來させた。これは人間の姿をした悪魔だ。彼は僕達を手首の太さ

はある鉄製の管で殴った。これが終に壊れた時、木製の梁で後を続けた。痛みを振り曲げる為僕達が即横たわったぬかるみと水の中で、僕達は未だなお蹴られ、殴られた。イギリス人達は表現する：「ヒー ビーツ ザ シッツ(糞) アウト オブ ユー」；それは2種の意味で僕に当てはまる。僕の運命を共にする仲間はそのから再び仕事をしなければならなかった。僕は幸い横たわり続けていられた (!)。そしてこの日僕は今大きな、大きな得で中に留まる事が出来る、疲労等で食べることが殆ど出来なかった5日間後は。日本の回復方法の見本。これは例外ではなく、常に起こっている。

ヒルフマン

福岡9

1945年8月5日

日本人達へは偽善者という名前がぴったりだ。文字通り彼等が宣言した全ての理想は彼等自身の手で踏みにじる。正直！公正！協力！彼等は我々の、そして互いのを盗む！実際いかに彼等が我々の所に来て全て、主にタバコを分けるかを見るのは愉快だ。今の所1人につき日に2本貰っている。昨日内部作業班の所で現場監督として任命されていた‘若僧’の1人が彼等を1列に並ばせ、全てのポケットを調べ全タバコを取り上げ、鞭打ちにやってきて命を危険にさらす数人の自分の友達にこのことについて伝えると脅かした。これは一連のそういった強奪の例に過ぎず、一つ一つ記述するには余りに多すぎる。

ハーヘン、[収容所番号] 202番とヤンセン、306番が独房に入って7日になる。日本の品物の盗難による。彼等はそこで常習的にとことん飢えさせられ、飲み物も最低量貰った。彼等はその期間日に少量の飯2杯と小鉢1杯の水を得た。その上彼等は何度も鞭打たれた。ハーヘンは自分の小便を飲んでいただけだろう。

ヒルフマン

福岡9

1945年8月8日

昨夜全イギリス人将校達が前かがみになり鞭打たれた。理由：空軍中佐が欠乏している食糧を指摘する為に日本人司令官の所へ行った(初めて成功した！)。

昨晚日本人通訳により様々な国籍の全ての‘代表者’に英国政府へ、降伏することを勧める内容の書簡に署名することが提案された。最初は全員断った。それからそれをする命令が来た、一方ではイギリス人将校達を鞭打った伍長が彼等にこの方法の命令に従わない時には処罰されることを報告した。それにもかかわらず私は通訳の所へ行って、私が署名したくない事を

言った。その時彼は答えた：「もし貴方が進んで署名したくないのなら、私は貴方に押し付けはしないが、この収容所での貴方の生活が不愉快なものになることだろう」。

又しても多く殴打される：風呂場で歌う、或は口笛を吹く場合（これは以前も許されていない）、ボタンを失くす場合、手を横或はお互いの肩に或は背中に置く場合、決まった時間外に喫煙する時、灰皿無しで喫煙する場合、横になって喫煙する場合など等。我々は犠牲者達に降りてくる絶え間の無い竹棒の軋みを耳にする。信じられないほど激しく殴打される一方、比例して連中は自ら良く維持し不平を言わない。

ヘレ

宮田(福岡9)

1945年8月16日

[8月15日ヘレは最後として鉦山で働いた。]

日本軍は最近激しく殴打する。特に[7月]20日交替した前歩哨は上出来だった。鉦山では活発な通商が行われていた。食糧に対してアメリカのタバコ、衣服、つまり日本軍がほしがっていたもの全て、ジャガイモの弁当が間違った手に落ちるまで。日本の商売人は警備所に連行され、彼が商売した2名を示した。今彼等は、私が今まで誰も見たことの無いほどの鞭打ちを受けて‘修正’させられ、それから10日間食事抜きで独房に。彼等は鉦山へ行く時だけ解放された。中間達が内緒で食事を鉦山へ持参した、さもなければ食事抜きで10日間働かなければならなかったことだろう。

近頃は平手打ち或は蹴り上げ無しで日を終えることは困難だった。外で歩哨からそれを受けなかった場合は、鉦山の中或は帰宅した時に受けた。最も些細なこと、理由の無いことで、拳骨で殴られた。我々はそれに関してほとんど無感覚になってしまった。

## 食糧と物資事情

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年5月29日

日に10セントの手当てとタバコを貰うが、ここではこの金銭で自ら何かを買うことが出来る。

[...] タバコは日に5本貰い、もし可能ならば私はそれでパン半分と交換する。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年6月15日

貯蔵品の入ったリュックサックを2個目以上は引き渡さなければならない、休日にその立ち会いをすると言われているが？ 食事は良いが、我々の作業には不十分だ。不思議なことに、私は空腹ではない。多分疲労から？私はぐっすり眠る。

オーステルハウス

小倉病院

1943年7月2日

ここ [小倉病院] の食糧は幸い今のところとても良い。頻繁に魚 (1週間に約4回) : 揚げる、煮る、焼く或は塩漬け、そして少量ではない。更にしばしば美味しいスープが飯につく(カレー、玉葱) [...]。又他に取り扱いが僕達がジャワ [収容所] にてかつて楽しんだよりもっと良い(タバコ、'パン' キャンディー等。)

オーステルハウス

福岡 15

1943年9月8日

食糧は悪い。月々の'体重測定'が毎回体重の低下を表している。

オーステルハウス

福岡 15

1943年10月15日

衣服はここでは高い(タバコ)値段で取引している。日本軍は僕達に更に余分な衣服を約束する！  
食事は今僕達(それは病人達)には十分(分量の話)だが、鉱山の連中にははるかに少ない。ほん  
の最近から今僕達は午後パンを1個貰っている。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年10月31日

私は今朝隅々までしっかりと洗った、というのは昨日この5ヶ月内で2度目になる小片の洗濯兼  
化粧石鹸の供給を受けたもので。[...]

収容所には惨めな人々がいる。その1人、彼は死亡者の荷物が初競売された内の1回  
で、ズボンを120円で入札した、我々が月に3円稼ぐという一方で！彼の考え方はこうだっ  
た：自分がどれだけで入札しようとか関係ない、このズボンが手にはいるなら、支払うことはやは  
りどうしても出来ないのだから。彼はそのことで結局だまされた結果となった、というのは今  
我々は月に4円50銭稼ぎ、それでちょっとしたものが買えるのだが、彼は月々2円差し引かれ  
るから、戦争が更に5年続けば、彼はこのズボンをやっと支払い終わる勘定だ！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1943年11月9日-30日

私が余分の食糧を貰った2ヶ月目には<sup>70</sup> 体重が再び3キロ増し今は63キロだ。1月1日を  
もって65キロになったら、余分の食糧を止め、自分自身で再び元気を取り戻さなければならな  
い。そうすれば食糧救済が次の番に行くに違いない。我々が、この修繕班の様に働く必要がほと  
んど無いなら、多分もっと以前に回復したことだろう。

---

<sup>70</sup> 1943年9月ファン ウェスト ドウ フェールは14日間兵舎病であった；彼は重病の下痢だった。  
再び回復する為、彼はそれ以降しばらく余分の食糧を貰った。

オーステルハウス

福岡 15

1943年11月25日

どのように日が常務或は他の物事に分割されるかではなく、もっぱら食事によって分けられるのは不思議なことだ。1食が終われば、再び次に注意が向けられる。ところで食糧はここでは相対的に良質で十分だ、要するに我々の以前の収容所連 [ジャワ] と比べればの話。最近では再び日に3度飯だ。(しばらく我々は毎午後300グラムのパンを貰っていたが、イースト菌が又再び無くなったので、今又それを待たなければならない。ところで、鉱山へ行く連中は飯の方を好む、なぜならパンの量は全く不十分であり、そしてパンを食べ終わってからが実にすごい食欲が出始めるだけなので。飯に大抵鉢1杯のスープを貰う、それらは：サウイ [白菜]、タレス [塊茎植物]、蓮の茎、豆腐、ローバック [大根]、時にはジャガイモの小片と3~4日毎に馬肉がスープの中に。そして同様に同時期あたりに魚がスープの中に、或はスープの代わりに揚げた魚も。

昨夜は例えば‘格別に’良かった：飯 (これはいつも割り麦が混ぜられている)、鉢半分魚の煮込みと大根入りのカレースープ、加えてサツマイモ1個。正直に白状すると、僕は、特に最近、‘脊髓の’注射<sup>71</sup>7本の結果、すごい食欲が出始め、時には以前にかつてあった場合よりもっと‘美味しい食事’を楽しんでいる。この後者はパンが無い場合、必ずいつも昼食に付いてくる。‘昼食’の成り立ちは：飯、‘ナイルギ’ (これは彼の文字通りの鉱山言葉、ケチャップで炒めた乾物の魚、すなわち佃煮)、豆腐と醤油。これは互いに混ぜ込まれ、よだれが出そう。とはいえ今この後者のメニューは病院用のみで、僕は余りにも幸いなことにまだなおそこに居る。鉱山に行く連中は自分達の飯と魚の弁当のみを貰う。そして彼等 [労働者達] にとって食事は少しも十分ではない。鉱山で働いている全ての連中が、一日中飢えた胃で歩き回っている、と言うことが出来る。それは‘交替組’が戻って来るとよく気が付く、彼等が自分達の友人連を病院に訪ねて来るその数回の自由時間に。僕達は食べ物の残りをなるべく多くいわゆる飢えに苦しむ者達の為に保存する努力をしている、というのは彼等は狼の様に食べる。ところで僕も最近はその：茶碗2杯の飯 (2杯の皿山盛り) が簡単にあつという間に腹の中へ。

食糧課題の別面は‘余分食’だ。常にクッキー、ケーキ、飴、そしてタバコを積んだ車が収容所へやって来る。1週間に1回程度、時にはもう少し頻繁に、25から30枚(時にはもっと)のクッキー (長フィンガーの種類で美味しい)、或は20から25個の飴 (咳キャラメルの種類) を貰う。そして間食に数個の小さなケーキ。3日毎に10本入りのタバコ1箱(時には2箱も)。しかしながらこれ全て大半は日本軍がここの収容所で盗み取る数にも寄っている。(彼等は毎回見積もって約250から300個のクッキーと15から20個のケーキが入った半缶を貰っている。これは彼等の‘普通’の配給量だ。) お互いにここではクッキーとタバコ間の活発な物々交換が行なわれている。(後者は大変重要であらゆる物事に紙幣としても役立ってい

---

<sup>71</sup> 脊髓にする注射。



る。)2日前病院で全員突然本当の鶏の卵を貰った。この4ヶ月間の経過でそれは僕達が手にした約8個目の卵だ。

4日前‘赤十字’と上に書かれた異なる木箱と小包が収容所の中に届いた。(これは終に当時スウェーデンの全権公使が予報した余りに長く待っていた赤十字―物資小包だろうか?)<sup>72</sup>噂によると中に入っているのは: コンビーフと飴類。しかしながら僕達はまだ何も見たことが無い。卵の入った2個の木箱も赤十字から来たものだ。(しかしながら日本人医師は約100個の卵と4缶のクッキーをくすねた。日本人看護士達がこれをもう一度繰り返したので、宛先人達の手に入るのが全てでないことは明らかだ。)更に1000個のオレンジもこの収容所の中に届いたはずだ。(これらはこの全期間中で僕達がここで見る初めての果物となる。)

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1943年12月1日

日本の台所が閉められるようだ;少なくとも全ての在庫が取り払われている。我々の売店からタバコ、クッキーそして飴も消えてしまう。又いくつかの兵舎連は平民毛布を受け取る為に軍用毛布を引き渡さなければならない。<sup>73</sup>

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1943年12月5日―20日

台所が別の指導下に入ったことは、<sup>74</sup>即食糧に気付く。我々は未だ日に730グラムの飯を貰っているが、今は2日毎スープに入った魚か肉を貰う、これは以前には決して起こり得なかった。売店は未だ再組織されていない;紙巻タバコはここ10日間手に入らない、そのことで喫煙者達の下にパニック状態が起こっていた。

---

<sup>72</sup> 1943年6月後半スウェーデンの領事が福岡収容所第15を視察し、その機会に領事は捕虜達が赤十字物資小包を受け取る予定であることを予告した。(項目‘拘留所の組織/欧州人と日本人の責任者’内における1943年6月15日―26日付けファン ウェスト ドゥ フェールの日記抜粋参照。)

<sup>73</sup> これは恐らく日本の採鉱企業グループが収容所の管理における大きな役割を受け、軍隊がI歩下がったと言う事実と一緒に繋がっている。項目‘拘留所の組織/欧州人と日本人の責任者’1943年12月5日と1943年12月5日―20日付けのオーステルハウスとファン ウェスト ドゥ フェール、それぞれの日記抜粋参照。

<sup>74</sup> 脚注73参照。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月5日

紙巻タバコとクッキーに関しては目下何ら改善は無い。食事に関しては今の所良い、少なくとも質に関して、量に関してではない。僕達はいつも空腹だ。時には真夜中に空腹に悩んで目が覚める。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月5日

食事は全て日本食だ。茶碗1杯の日本の飯(割り麦の様な荒い穀粒)と小鉢1杯の野菜スープ(大抵大根だけ)。肉或は魚がそこに入るのはかなり珍しい。食糧は故にかなり不十分だ。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月6日

誰も未だ毛糸の靴下を受け取っていなかった、数人は未だ裸足で歩いている。

ヘレ

宮田(福岡9)

1943年12月11日

[この収容所に到着した時]僕達は暖かい服を受け取った、1人に付きオーバー1着と毛布4枚。これらのオーバーはイギリスの軍隊コートだ。未だひどくはないこの寒さに対しては十分間に合っている。穏やかなヨーロッパの冬と言えそうだ。毎夜中数度氷点下になり、時々雹が降る。近々1月にはどうなるやら誰が知ろう。

ヘレ

宮田（福岡9）

1943年12月17日

そろそろクリスマスだ。2個の赤十字小包がここの倉庫にある。1つはロウレンゾ マルキス（南アフリカ<sup>75</sup>）からで他のは日本のだ。多分クリスマスには何か多少は貰えるだろう。僕は彼等を自分が生きている限り思い出すことだろう、‘赤十字’。ありとあらゆるスピッツファイアー基金より自分達のお金をそこに費やすべきだった。<sup>76</sup>

ヒルフマン

福岡9

1943年12月20日

野菜スープはここ2日間改善され [そして今入っているのは] イカ、豆腐 [搾り出した大豆のケーキ]。

ヘレ

宮田（福岡9）

1943年12月20日

日本軍から作業服を貰った、シャツ1枚と1本のズボン。他には布製の靴、鉱山作業帽1つ、日本帽1つ、木製の弁当箱1個、水筒と仕事に持参するまとまった物を包む風呂敷。食事は良くなっている：大根はそんなに多くなく、イカと豆腐、もう少し多めの飯。

---

<sup>75</sup> ロウレンゾ マルキスはポルトガル領東アフリカ（今のモザンビーク）の首都であった。

<sup>76</sup> ヘレはここで1940年5月以降蘭領東インドにおいて設立された連合軍戦争施行活動用に募金する様々な基金を示唆している。これらの基金の1つはスピッツファイアー基金で、それは英国政府によるスピッツファイアー飛行機の購入に援助する為、数件の大きなオランダ商会の協力を得て蘭領東インドで働くイギリス人達によって設立された。東インドに存在していたこういった基金の1ダース以上は、1941年2月‘ベルナルド王子ースピッツファイアー基金連合’として統一された。（ドゥ ヨング、11a 第1部半編、529-530）。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1943年12月21日 - 24日

我々は今再び夜にスープをマグカップ2杯貰っているが、今又薄くなってきている。 [...]

我々の以前の考えではとっくの昔に捨ててしまっていたに違いない靴だが、未だ長く歩くことが出来るというのは信じられないことだ。3ヶ月前我々は鉾山用に1組の運動靴を貰い、外側にかぎが付いていて足首で締める。それらは1サイズ大きかったが、小さいより常にましだ。100日後からはそれらが磨り減っても文句は言われずそしてその前に穴が開いていたので、毎日自分の靴の中に自然に入ってきた泥で足が中であちこちツルツル滑った。計画された新調日は4サイズ大きい靴しかなかったので、私は自分のサンダル靴で格闘し続けた。カギは壊れ、その中に針金の断片を用意した。それとは別に靴底が余りにも薄くなったので、各石を足の裏にそして1分以内に染み透る冷たさを感じた。私のかかとと左足首の外半分の底が靴の上にはみ出た時、未だ私の足を針金で巻き込んで直すことが出来た。更に底とかかたとに磨り減った穴が出来たが、それはもはや大変ではなくなった、というのはもう既に靴は漏れていたからだ。とはいえこれらの巧みな修繕にもかかわらず、私は新しい靴を強く切望し始めている。

へレ

宮田 (福岡9)

1943年12月23日

僕達がどの位魚の配分量を貰っているか分かるかい？ 400人に対して40センチ長さの魚8匹。魚が主要食のこの国で。

へレ

宮田 (福岡9)

1943年12月26日

彼等は [日本人達] 全てをタバコと交換しようとする。僕は日本人通訳と剃刀の刃をタバコ1箱で交換した。彼等は革製品に夢中だ、どうもここでは革が大変不足しているようだ。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1943年12月25日－31日

我々は白木綿の靴下と手袋、ハンカチそして石鹸の塊を貰った。少し経ってから古い日本製革オーバーが我々に供給され、実に大喜びだ、というのは今はかなり寒く何度も霜が降る。これは赤十字資金から我々用に調達されたものだと私は思う。それらは十分暖かいオーバーでフード付だ、でもそれは不明の理由で命令無しではかぶることが許されていない。又これらのオーバーは鉦山で着ることは許されないの、私は自分自身のオーバーを有難く維持し続けられそうだ。[...] 今終に新しい靴そして帽子も貰え、早くも陽気なクリスマスの贈り物の様な気分だ。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月29日

僕はこれを心地良く暖房された（医療検査）部屋で書いている、そこには少なくともストーブがある。今は極端に寒く、昨夜は再びかなり凍った。僕は毛布の下では温まるが出来なかった。そしてそれから暗い朝6時に氷の様に冷たい広場で整列（又大半が病人達、僕を含めて）。鉦山で働く連中は日本製上着とオーバーを受け取っていたが、僕達には無い。そして僕達の大半は実に衣服がほとんど無く、そして... 脂肪無し！僕達はここで毎月体重を測定される。

僕の体重は幸いよく増えている。小倉から<sup>77</sup>今まで47キロから、50, 51, 53, 55, 57, 60, 62½, 65½キロまで上昇したが、脂肪は1グラムすらない。蛋白質もここではほとんど不十分で、それに伴ったことが結果として起こってくる。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月31日

鉦山の[日本人]民間労働者連中は僕達に飯を求める！腹が減った、腹が減った！これはこの言葉になった。飯の分量は日毎少なくなる。

---

<sup>77</sup> オーステルハウスはここで彼が小倉病院に入院した時期を示唆している。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年1月初め

この時期他に目立つ事実は話の題目、つまり食糧：誰がもっと多く得たか、誰が少なめ、配分の不正行為に直面すること、以前何を食べたか、いかに料理したかの調理法、何が食べたいか等。これは完全に精神病質で空腹と共に密接に繋がっている。更に強力なのは病室内だ。何人かは食糧の生々しい想像力を持っていた。ところで、嫌な事に私はしばしば厚いバターと砂糖をのせた食パンを夢に見た。ここ1週間は毎日のように食糧の夢を見た。2晩だけは食糧の夢を見なかった、というのはその前夜に5本のタバコで茶碗半分の飯を引き受けたからだ。この購入は又自尊心の法典ごときが存在する：飯は必要としてが、タバコを吸いたい者からは買わないこと。イヤ、飯は下痢になったばかりの者から買う。そうすると医者助言：腸内を空にし、洗浄する機会を与える為に24時間食べないように。そうすればその後下痢が続かないチャンスはある。ところで売買用のタバコを飯の為に貯めて置く。そうすれば後で又他の者からこれらのタバコで余分の飯を買い取ることが出来るから。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月2日

今夜（或は昨夜という方が<sup>78</sup>）突然赤十字の缶詰が中に届いたという嬉しいニュースが巡回した：合計約570個、しかしながらそこから95個が日本軍のところで消え去ってしまった。残りは僕達のオランダ人収容所司令官の手に渡った。人に言わせるとそれらはタバコ、ミルク、コンビーフ、果物、レバーパテ、ジャム、バター、チーズ等からなっている。しかしながら板チョコと大半のミルクは即日本軍により我が物にされてしまった。恐らく自分達のの食事にほんの少々混ぜられた残りを僕達は貰うのだから、ほとんど気がつかないことだろう。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月6日

今飯の配給量が再び減量されている：日に720グラムから580グラムに。この戦争における

---

<sup>78</sup> オーステルハウスはこれを1944年1月1日の夜中から2日にかけて書いた。

日本の食糧事情に関しては、ある意味で意味深長な事実。同様に石油や鉱山での爆薬物の不足、それにより生産が毎日減少している。

それから赤十字に関する大きな騒動は終に沈静された：その半数は缶詰を人々に配分したが、他の半数（収容所指揮を含む）は数回の余分な食事を供与する為にそれらを台所へ差し向けたとした。今後者の方に決まった。そして最初の驚きとして僕達は2日前ひとなめのチーズ或はレバーパテののったクリームクラッカー（小さなビスケット）を食べた。それはあっという間になくなったが、それがほとんど忘れてしまっていた記憶を呼び起こした。更に42缶のトマトスープから美味しい‘シチュー’が供与される；それから43缶の豆、エルテンスープ（グリーンピースのスープ）やそういった更に美味しいスープ。その上‘甘い物’が一緒にされ（砂糖、ジャム、マーマレード等）、それにより僕達は別々の粥食を貰った。そして最後1月31日に缶詰の脂肪、バター、ベーコン、ハムそしてコンビーフの入ったナシゴレン（インドネシアの焼き飯）。このようにして僕達は全員少しづつ全ての物を味わった。

オーステルハウス

福岡15

1944年1月9日

差し迫った飯の減量は僕達の収容所指揮にナシゴレン食を繰り上げる決心をさせたので、一昨日はナシゴレンを食べた。それは確かに美味しかったが、僕達の美味しい蘭量東インド料理と呼ぶことは出来ない。42缶のマーガリンとその中に混ざったベーコンは多くの衰弱し痩せ衰えた者達にはちょっと油がきつ過ぎた。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年1月9日

食糧は相変わらず少ない。空腹の上に更に空腹。僕達は日に割り麦の混ざった600グラムの飯を貰ってはいるが、余りにも少な過ぎる。ほとんど副食は無い。ヒル、ねえヒル、僕は自分の前に放っておいた全ての食糧が欲しい。スーニンガーで捨てられた胡椒の効いたサワークラウド（塩漬けにして発酵させたキャベツ）ですら更に食べてみたい。君が家庭の妻の義務としてまずすべき事は、僕にたくさんの美味しい食事を作ること、さしずめ1年目は、僕が75キロになるまで。僕は今空腹というものを知った。それはどこでも同じであろうとは分かっているが、これが何とか長く続かないことを望む限り。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月10日

1月初めには既に我々のお金が円に変換されることだろう。それから数日後我々には全部戻って来ないことを聞き知った。最高で将校達は50円、下士官達は25円そして兵隊達は10円戻る。残りは銀行の口座へ通貨へ行く。私の銀行口座は321円20銭になる。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月11日

貼り付ける為に少々の粥を取りにちょうど台所へ行った時だった。僕はここで実に楽な図書館作業をして良いことになっている：数冊の古い書物を修繕する等。しかし粥を取りに行く目的は達成された：鉢は縁ぎりぎりまで満杯にされ、再び余分食にありついたので僕達は少なくとも空腹感がちょっと無くなった。明日は休日で同時に甘い粥（各人鉢2杯）が約束された。台所には既に缶詰が用意されていた：‘クリームライス’、‘シロップ’ 砂糖、ジャム、飴2缶等。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年1月11日－14日

今日赤十字小包から砂糖とプリン、そして果汁もの入った甘い粥を貰った。とても美味しかった。タバコは10本に付き15から23セントに値上がりした。我々の注文品ロンボック [唐辛子] とハリファ（ビタミンA&D）は未だ中には来ていないので、我々のお金は役にたたない。カルシウムを取る方法として我々は今自分達の歯を磨いた後磨き粉を飲み込んでいる。ところで、我々が今もっている空腹の限界でもって、食糧から可能な限りの創意が生まれてくる。私が5分で平らげてしまえるマグカップ1杯の飯について言えば、鉱山で45分間咬む－そこでの合計休憩時間、同時に我々を早めに再び働かそうとする指導者達を邪魔する為－そのあと水筒のお茶で鍋を洗い、その洗いを後から飲み干す。飯粒が炭塵だらけの鉱山作業服に落ちこぼれたら、私はそれを自分の真っ黒な指で拾い上げむしゃむしゃ食べる。我々のもとでは飯粒が失われることは無い。 [...]

32のカナダの赤十字物資木箱が中に届いた。そこから何が貰えるのか興味津々だ。



オーステルハウス

福岡 15

1944年1月15日

それは起こった：オーステルハウスはほぼ6ヵ月‘病室’滞在後、連兵休〔兵舎病〕になった。既に！！出来事の経過はこの状態を繰り返した。つまり今日新しい配給量が実地された。新しい配給量は次の通りだ：病室に居る人々へは日に330グラムの飯。それは1食につき110グラム、すなわち1オンス。（病人達は確かに何もしないわけで！）この配給量は将校達も同じだ。更に連兵休達には490グラム、590グラムが内部作業（料理人、看護師、釜焚き人達）そして700グラムが鉱山労働者達に。「それでは私は働くことが出来ない、それがこのように続いたら私は仕事を放棄する」、というのが〔H.〕ラッパルド医師の意見だった。即彼は又もう少し多めの飯を手に入れさせる為に‘病室’から7名を退院させた。[...]

ちょうどこの医者はここの診療室で、不十分な食事に関してナガタとヨシカワ（それぞれ事務所に居る日本の平民で日本の行政上の看護師）と話し合ったことを引き合いに出す。しかしながらナガタ自身は全てを理解できなかった。「我々も食べている」、と彼は言った。「貴方がたは小さい人達で我々は大きい」、と医者は返答した。その上彼等の食糧には魚と卵が補充されている。

の重要なニュース：256個の小包が入った32個の赤十字木箱が中に届き、各中味は16個の缶詰。（日本軍が更に9個の小包を盗んだに違いないので、だから未だ2人に付き1個の小包が残る。）中味：胡椒、砂糖、塩、お茶、コーヒー、ミルク、バター、チョコレート、ハム、コンビーフ等。僕達の前回の発送品から、最近の休日には各人にミルク、缶詰の果物、砂糖、生姜等の入ったとても美味しいマグカップ2杯の粥を食べた。確かにそれはとても美味しくコップ2杯の粥は実に強力だったので3杯目の鉢はもう入らなかった。数日後に食べた‘トマトスープ’はただ名前だけで他には何もそれらしくない、普通の美味しい調理法だったが、スープそのものの味は良かった；15から20個の缶詰も500人には完全に不十分だ。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月18日

新しい配給は大騒ぎを引き起こし、そして今は再びだいたい沈静された、そして感情は多少落ち着き、全ての本質はかなり明らかに前に出てきた。そして僕達は気付く：考えてみれば思ったほど大変なことではなかった。将校紳士連は既にいち早く異議を申し立てた。結果：彼等は今450グラムとそれに加えてパンを半分貰う。更に：病室は現在残り物を全部こっそり貰っている。

ならば誰が‘叱られない’<sup>79</sup>なのか？ 連兵休達。彼等の中では（つまり3種類ある：職務、軽い職務、そして休職）いわゆる‘職務作業人達’は基本的には他の者達よりもっと多くの飯を貰っていた。結果：思いがけず後者の2グループが前者に殺到。しかしそれは今日から中止になった。唯一の利点は[兵舎病人中の労働者達用に]更に朝90グラムのパン半個。他の結果：バンドゥンの赤十字仲間[N. J. A.]ファン フルスト、気の良い‘男’、同時に連兵休、夢：飛行機の中に居る、全部‘クラ’<sup>80</sup>で成り立った雲提を突っ切っていく。この時期の徴候。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年1月15日ー1月末

今報告を受けたところでは、730グラムという我々の配給量が鉱山作業人達(354人)の場合700グラムに減少し、590グラムが内部作業人達(32人)、同じく兵舎病人達に、そして330グラムが12名の将校達と下士官達そして31名の病人達。後者にこの割り当ては絶対に飢え死にさせる。日本軍は今日[その順守を]検査したが、ところどころ未だ変更する試みが為されている。さもなければこれは勿論全収容所において均等に担われる。それはここでの典型的な風潮ー‘各人自分勝手’ーそれに未だ同意しない者達がいる、病人用の330グラムははぐらかされることだろう。スープは最近又鉢1杯まで下がった；魚はほとんど見ないし、肉に至っては皆無。

妙だ、食糧は上がったたり下がったりして経過していく。日本軍はやはり厳しく取り締まり、他の者達には譲ってはならない。将校達は100グラム追加され、そして我々においてはかなりの闘争後、自分達の飯を受け取ってから約スプーン1杯を有志から[病人達の為に]譲り受けることで合意に達した。

十字の発送品で300本のとても美味しい咳薬、ペルトウッシンが入っていた。ブレダでの私の幼少期にかつて貰ったことがあり、我々はそれをフランボーズ飲料と呼んでいた。我々は2人に1本貰っている。今はパンの時に、飯の時に咳をしようがしなかりが飲んだ！  
[...]今未だ気分は良いが、自分の顔がかなり厚く、健康でなく、浮腫だと私には思える。それだから多分私の体重も同じに留まったのだ：水。[F. J. P.]グロスキャンプが突然厚い顔になった、ちょうど[H.]クワードグラスの様に、彼等は双方兵舎病で、結果として：半分の割り当て、330グラム。

<sup>79</sup> オーステルハウスに寄れば蘭印軍ー隠語：「そして誰が犠牲者？」

<sup>80</sup> 実際は：‘ケラック ナシ’、飯釜の焦げくず、捕虜達の下ではとても人気のあった‘美味しいもの’。

へレ

宮田（福岡9）

1944年1月18日

又今日再び体重測定があり、僕は又2キロ半減った。今57キロの重さだ。僕が戻ったら、食事がまず第1で、君は僕がなるべく早く再び75キロになるまで世話をする、出来ればの話だがそれ以上に。ヒル、ひどいことだ。僕達は今1人当たり日に割り麦や大豆の混ざった550グラムの飯を食べる。余りに少ない。彼はそれ以上与えようとしない、日本兵、それどころか更に少なく。僕達は最初の80キロが下降していった。皆体重が減り、1人あたり平均して約4キロ。

ヒルフマン

福岡9

1944年1月15日と21日間

1月15日頃我々〔将校達〕は支払い期間の過ぎた月々の給料を受け取り、10月と11月一緒に245円そして12月は95円50銭だった。これが（50銭を除いて）我々の口座に振り込まれたので、私の口座は今661円20銭だ。

ヒルフマン

福岡9

1944年1月22日

一昨日軍隊にタバコが配分された（鉱山からの供給）。昨日飴が売られた（17個の飴が15銭）。皆1袋貰った（袋は又引き戻され、タバコの箱も引きわたさなければならなかった）。数日前日本人収容所長によりカナダ赤十字からの26木箱が私に見せられ、私はその‘管理’を受けた、ということは私が再度日本人炊事伍長に分け与えてもらえるかどうか伺いを立てなければならなかった。

3日前2回目の皆の体重測定。1943年12月6日以来、平均〔体重〕は落ちていく：2, 4キロ（1943年12月6日の平均体重：60, 1キロ、1月13日には57, 7キロ）。

ヒルフマン

福岡9

1944年1月23日

[今日の午後] 2時20分、A. L. ファン ホーヴン、兵士、衰弱で死亡した [...]。これは6件目の死亡事例だ。ここには日本人軍医が出席していた。私は彼に前記の体重数値を指摘した。それからすぐ将校達が日本人収容所長の所へ出頭さされ、彼が述べたところでは、鉱山へ視察に行つて作業されているやり方に関して非常に満足し、その結果食事は1発で量的にも(飯、割り麦)、質的にも(肉、魚)20%上昇されることだろう、と。

ヒルフマン

福岡9

1944年1月24日

カナダ赤十字の最初の木箱が開けられた：粉ミルク、バター等。大歓迎！主に病人達の為に。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年1月24日

日本人医師が来て、朝僕達は20%飯を多く貰う。又1月26日にパン焼きが始まる。電気オーブンが持ち込まれた。そうなることを祈ろう。これが僕の最後のインクだ。僕達には余分な荷物を持つことが許されないのだから、僕はそれを使い切る。僕はジェルーク [柑橘果物]、タバコそしてお金にする為、自分のゲートルを日本人に売るつもりだ。お金で僕達はここでちょっとしたものを買うことが出来るが、それは又つましいものだ。前休日は17個の飴が15セント程度だったが、今日は1個のケーキが11セント。タバコは23セントで1箱買える。僕はタバコをなるべく少なく買っている；僕達が鉱山の10日間で3箱貰う場合、何とかなる。僕が自分のお金を使うのは、食物だけだ。恐らくビタミンCの欠乏で、口の中がすごく痛い。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月29日

1時半P.C.J.E.ファン ドウラ、軍曹、栄養失調の浮腫<sup>81</sup>で入院していたが心臓麻痺で死亡した（7番目の死亡事例）。公式には日本人司令官の努力により、今日251個の卵が18円90銭で買うことが出来る。ファン ドウラの死亡後即座に、病人達にとって何が補充食として必要と見なすかを示す為、私は医療職務の軍曹のところへ呼ばれた。私は卵、ミルク、果物をあげた。各死亡事例の後我々はそのような譲歩を日本軍と取り付けた。確かに一般状態は多少改善された、多目の飯、少々の魚或は肉、多くの野菜。しかしながら脂肪は無く塩はほとんどない。今日から日に1人に付き約300グラムのパン1個。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月31日

数日前の食糧改善後（上記参照）、割り当てが又しても悪くなった。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年1月末-2月初め

台所の経緯は日に日に悪くなっている。時として我々の配給量は525グラム、時には750グラムだが、湿気のある飯で900グラムにまではなるべきだった。我々は今鉾山でも大変空腹で、目立って弱くなっている。ちょっと身をかめようものなら、その後目まいがし、全て目の前が真っ黒になる。鉾山におけるそのような空腹気分の中、私は明らかに日本人野郎の弁当から落ちこぼれた素晴らしい飯の山を地べたに見つけ、スプーンでその上半分を私の弁当に取り入れた。我々の仲間達からの批判は様々で<sup>82</sup>、そしてその時誰かが言った、彼は吸殻を拾い上げるより一層悪いと思う、と（禁じられていることだが、未だなお起こっている）、私は言った、それなら彼は通報すべきでむしろ自ら依頼する、と。翌日私はこれに関してドウ フリース、炊事-中尉に呼ばれた。私は言った、誰もパンを道に置きっぱなしにはしないだろうし、上部半分は私自

<sup>81</sup> 浮腫はビタミンB2と動物性の蛋白質の欠乏による新陳代謝の一般妨害と見なされる。大抵は足と膝下、後では顔（特に夜の睡眠後）や、そして大腿部の腫れから始まる。（ファン フェルデン、357）。

<sup>82</sup> 病気になる危険により。

身の飯と同様きれいだったので、私は不必要な食べ物を道に捨てるようなことはしないから、そのままにしておくことはしなかった、と。それは認められた。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月1日

僕達は昨日市民生活の1口を再び味わった:古い赤十字小包から数個の正方形チョコレートと半分溶けかけた果物飴、長い間忘れていた物が僕達の前にぼんやりと現れた。今日又兵舎病人達と病院 [の病人達] にもオーバー (昨夜は再びかなり気温が下がって凍結した。) が [来た] [...] 僕達はウサギの餌の豊富な残飯のお陰で未だ餓死していない。(我々の70匹のウサギはここでは比較的健康的—食糧の欠乏により5~6匹は死んだというものの!)

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月1日

我々は251個の卵の入った木箱を18円90銭で購入した (軍隊価格;自由取引の値段はもっと高い)。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月11日

各食事につく2個の握り飯は約汁椀半分の飯 [と同等] を供給し、それは我々の公式割り当ての半分だ。日本人収容所長は出来るだけ再び汁椀2杯のスープを夜の食事に約束した。今夜既にそうなるらしい。その結果は凡そこうなる、お椀1杯のスープの材料は2杯分に分けられ、かなり水増しされるといふ呆れ返る簡単なものだった。言い換えれば、カップ4分の3の水に約4分の1の浮遊している葉っぱを執拗に探し、その中に実際時々ジャガイモ或は人参のかけらを見出す。(エーマンでさえも、食後まだもう一回その同じくらいの割り当てを平らげることが出来る、と今日の午後強調した—それで察しがつくというものだ。)

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年2月10日—19日

一番困っている時、神は近い。この言い回しの真実を私は再び経験した：誰かが私に15本のタバコで茶碗1杯の飯を申し出た、近頃では珍しく、そしてそれは私に残り1日力を与えた。とりわけ何か胃の中に入れる為に食べるというのは奇妙だ：数個の皮を剥いていない生のジャガイモ（とてもあじけない）、皮ごとの蜜柑（皮の中にあるエーテル性の油でアルコールを飲んだかのような気分になる）、骨ごとのニンジン。今は全て食糧に向く。[...] 休日は540グラムの飯と180グラムのパンの代わりに、我々が何もしないのだからということ飯だけだった！奇妙な思考過程だ。[...]

3日間ここに雪が積もり、そこを我々の薄くて漏れる運動靴で歩く、一方では雪が約8センチ積もっていてその中を通して鉱山へ行かなければならない。[...] 雪が溶け始めた時のぬかるみはひどいもので、我々の足は更に冷たく濡れた。とはいえ多少寒さは和らいでいる。典型的な日本軍の実例として、今になって足りないイギリスの冬オーバーが配分され、我々は新しいカーキ色の長ズボンと長袖の鉱山服を貰った。それらはサイズが余りに大きいので、我々の中の一番大きい者でさえ、未だ余りがあった。[...]

全てのニュースがここで我々を捕らえる。空腹で食糧の夢を1週間見続けた後で、パンを茶碗4分の3の飯と交換する約束を取り付けた時、夜中興奮してほとんど眠れないことが続いた。翌日[我々の]破れた服と新しい物が交換して貰えると知った時も、私の眠りを邪魔された。各人いかにして自分のぼろきれを鉱山で縫い目を解いてもう‘持ち堪える’ことが出来ない印象を与え、古着を引き渡して最善の品物を再び取り得ることが出来るように考え出さなければならなかった。(私の古い鉱山上着を私はとても巧妙に維持していた。)食糧についての夢は再び頻繁になる。[...]

2月15、16、と17日に我々は[2年前の]シンガポール陥落[の2年目の祝日]による握り飯1個の供給を鉱山で受け(イギリス人達にはそれがほぼ喉につかえっぱなしになることだろう)、即もう少し続ける元気が出た。日本人指導者達と‘リング’[日本人現場監督]は握り飯(275グラム)の入った木箱の残飯を食べ、それは彼等ももう良い生活をしていないという印だ。2日目に指導者達は我々の内の何人かに‘握り飯無し’の処罰を与えることにより自分達ももっと食べることが出来ると思った。突然彼等は理由無しに怒鳴り始めた。[...] 私には自分達の飯を貰えなかった他の2人に譲ることは当然に思えた。我々は全員そうした、当然再びG.を除いては。指導者達は各人2個半の握り飯とそこへ未だ大根も食べた。翌日我々は丸々1個の握り飯を貰った。指導者達は明らかに鉱山経営に対して彼等の遊戯を続けることは敢えてしなかった。

とにかく、我々は今満場一致でG.を今後無視する決心をした。

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月12日

1944年2月1日の平均体重：58，2キロ。2月11日：57，9キロ。予報された食糧の向上はただ部分的に成就した。多少多目の飯と時々多少の魚と多少の肉。大半の日々は同じ様に動物性蛋白質が無い。[...] 1人につき約4個の‘みかん’を支払えば手に入れられる機会があった。鉱山での活発な物々交換：衣服に対して食物。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月22日

食糧。他の戦争捕虜収容所連の本の話についてかつてびっくりしたことがある：食物を口にしない等。等。僕達はここで貰うものは何でも食べる、まるで菓子のように。議論の余地無く、食べること、特に夜、僕等の戦争捕虜認識に相応して美味しい。お椀2杯のスープ！昨日はマグカップ満杯のココアと1個のみかん（短期間に3個目）。頻繁にさば1切れがつく。しかしながら僕達がとても重要な成分を定期的に欠いているという真実は変わらない、例えば：脂肪、蛋白質と全てのビタミン。昨日塩（1人に付き約125グラム）と砂糖（1人に付き約40グラム）の供給。今日は石鹼1個。この後者もかなりまれな品物だ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月25日

目下我々は日毎かなり定期的に40個の卵と4キロのみかんを貰うことが出来る。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月29日

パン1個（約90グラム）の‘小売価格’は数週間内にタバコ5本から20本にまで上昇した！



今晚はそれを自分で支払わなければならない、というのは今晚僕の‘食券’<sup>83</sup>が無くなっていたので、その結果僕には食べ物が無かった。

オーステルハウス

福岡15

1944年3月3日

全ての配給量は（鉱山労働者達を除いて）600グラム、或は500グラムの飯に100グラムのパン。今月は1000キロ余分なタウチョー〔発酵された大豆〕？29袋の圧延されたケデレ〔大豆〕が中に。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年3月3日

測定一覧表が益々下降していったので、僕達は再び（90グラムの）飯を割り増して貰った。僕は〔前回〕既に56,4キロ。今僕の体重がどのくらいかなど、推測することはもうしない。[...]パンは今の所止められた。イースト菌が全市に無い。流通に障害。カーレル・フェルスステイフが定期的に手にすることの出来る果物と他の物を持って来る、とても親切。彼は台所に居て、腹の具合が良くないのだが、未だ元気そうに見える。

オーステルハウス

福岡15

1944年3月10日

数日前1200個（？）の卵が収容所の中に届き、既に250個で作られたスープを食べた。残りは重病患者達、名誉なことに僕も含めて：〔僕達は〕昨日から日に卵2個を貰う。[...]近頃僕達は取引に忙しい：箸、鍋<sup>84</sup>、皿、手袋等、全てをタバコに。

---

<sup>83</sup> 恐らくこれは戦争捕虜達が食事を取りに行く時見せなければならない1枚の木札或は番号である。

<sup>84</sup> ここでオーステルハウスは料理鍋類を意味している。

ヒルフマン

福岡 9

1944年3月11日

将校達が第1病院兵舎に收容されて2週間になる。好意で彼等は日に2回アングロ [こん炉] に火を熾す事を許可された。彼等の仕事への感謝として鉾山からりんご1木箱をプレゼントに貰い、みかん1木箱は売買の申し出を受けた。食物は最近再び下降線を辿っている。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年2月20日－3月12日

このところ赤十字小包からのコンビーフがかなり供与されていたが、それ故に日本軍からは肉も魚も全く供給されていない。[...]我々は今ワカモトビタミンB-錠剤の供給を受ける。私は3本の瓶をお金とタバコ2本で買った。飯相場は茶碗1杯に付きタバコ25本にまで上昇したが、この価格でさえも私は昨日、苦勞してかき集めている半分気の狂ったブルッフマンからは貰えなかった。錠剤が盗まれないように、気をつけることが大切だ。

オーステルハウス

福岡 15

1944年3月14日

いつ赤十字小包が分配されるかという(既に356個)、スレウ中尉の質問に対して回答された：「まず憲兵隊の立ち入り検査が行われていなければならない」。

オーステルハウス

福岡 15

1944年3月23日

それから未だ僕達の‘取引’がある。(取引万歳!)昨日ジョクジャの銀製タバコケースと同じライターをタバコ30箱で買った。[...]少なくとも僕が完済するのに4ヶ月かかる、すなわち：喫煙しない。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年3月13日 - 31日

食糧は最近ひどく悪い。肉や魚（500人に10キロしか）はもう見ない、野菜は実に少なく、我々に飯に混ざった圧延された大豆が全く貰えないとしたら、それはシンガポール一食<sup>85</sup>となることだろう。[...]

[何日も経って。] 肉と魚皆無の長い時期後、今我々は数日前から魚のパテ1匙を貰っていて、奇蹟を期待している。

オーステルハウス

福岡 15

1944年4月8日

最近食糧（又しても食べることは割合良い。ということは実際戦争捕虜達にとって何が良くて何がそうでないのか言うことはとても難しい。一日中空腹だと、全てが美味しい。公平な人々に判断してもらおう：「今日の献立」（台所からの新しい考案）。ある種のブラックユーモアで各食事に次の様な例で食堂に黒板がかかっている：

朝食（ハ、ハ、朝食！）：	飯とスープ：タウチョー [発酵された大豆]、余分のお椀 1杯：皆無
昼食：	飯とスープ：タウチョー、余分のお椀1杯；皆無
お茶：	飯と野菜スープ 余分：サンバル ゴレン 鯨肉！
弁当 [鉾山用に]：	魚の卵と塩漬けの白菜（それは昨日でした）
或は 朝食：	上記参照
昼食：	上記参照
お茶	飯とスープ：野菜、魚、豆腐、鉢2杯（万歳！） 余分：皆無
弁当：	魚の卵と塩漬けの白菜（それは今日です）

オランダでは天気の話をする（以前そうじゃなかったかい？）。ここでは飯重量についての話をする、鉢1或は2杯のスープ、弁当の品（‘又しても大根！’）、或は粥が濃いか薄いか、或はその結果半分、或は全部飯と、同様の粥と交換する骨の折がいがある。そして昨夜再びその‘美味しい物’の夢を見、今日の午後は余りに少ない野菜（実際：ウサギの餌葉）だった等、等、等。

<sup>85</sup> ファン ウェスト ドゥ フェールはここで1943年2月から4月にかけて彼がシンガポールのチャング収容所にいた時の食事を示唆している。明らかにそれは彼がそこで貰った最悪の食事であった。

そしてそれについて話し終われば、又最初から始める。そしてはや分からなくなったら、今夜の食事が何であるか既に噂をキャッチした隣人の話を聞く、それから再び4時半：(幸い!) 食事を取りに行く! そしてそれを食べ終わったら、ほぼ点呼、それから早く寝る、そして再び目を覚ましたら(6時) 又点呼そしてそれから再び一食事を取りに行く! (これは老年による老衰或はここに合う言葉は無いのだろうか?)

そしてこの全ての後、僕は貴方に憲兵隊が終に、5日前、赤十字小包を最終的に‘認定’した時、それが僕達にとってどんな意味を持っていたかを明らかにしたいと思う。そしてそれから僕達が夜誕生日の子供の様に、僕達の‘宝’の後ろに座り、皿に陳列した一8人で分配するもの：ジャム1缶、ビスケット12個、砂糖1オンス、スモモ16個、干しぶどう400粒、風呂用石鹼1個、板チョコレート6枚、チーズ1塊—その時全てをいかに、どの組み合わせでそしていつ食べるかという相談に大変な時間がかかった。そしてそれから終に結論が出て、ジャム、砂糖と干しぶどうは粥の中に混ぜるべきで、チーズは(正しくサイコロに)1枚半のビスケットの上に慎重に塗り、そしてチョコレートは1ミリづつかじって食べる。分かる? こんな風に以前の市民生活では決して経験しなかったごとく、祝宴のご馳走だ。そして3日後は再び8人で‘豚肉’の缶詰を分ける為に貰い、今日は鮭の缶詰(マッチ箱2個と同じ大きさ)そして明日はコンビーフの缶詰、もうそんなにいろいろ考えるのはやめる、日本軍が半分以上盗んだことだろうから。

オーステルハウス

福岡15

1944年4月13日

スレウ[中尉]の部屋にある赤十字木箱はずいぶん前から僕達にいろいろ想像させた：アメリカの刻みタバコ、アメリカの紙巻タバコ、そして10本のパイプは文明化した世界の品物であり、その結果ここでは度を越した贅沢だ! そして僕達が1オンス半の刻みタバコ1箱或は紙巻タバコ20本そして僕達の内10人さえもがパイプ1本(君も含めて、ニック!)を受け取る時、誕生日の子供の様にその美しい包みに見とれている。取引は降盛をきわめている：この食糧、刻みタバコ、紙巻タバコ、パイプと、円で結ばれている取引は多方面にわたるオランダの市場日を影にすえる。

そして食糧も再び良くなっている。(いつも僕達は何かが良いと判断するまでにはまだ至っていない。)‘献立掲示板’は午後のケチャップスープの最大なる美味しさを予告し(確かに予告されただけのことはあった)、夜は同様に油や余分にりんご半分と魚のパテ。これって誕生日のご馳走ではないかなあ?<sup>86</sup>

---

<sup>86</sup> オーステルハウスは4月11日である彼の仲間ニックの妻の誕生日による祝いを示唆している。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年4月1日-19日

飯は又してもかなり減量だ。4日間我々はマグカップ満杯のイカンテリ [乾物で、塩漬けの魚] を貰い、1つ28円で50個の籠が収容所の中に届いた。ということは日本軍にとっても生活は高くついているに違いない。それはつかの間の楽しみで、食べつくされた時には、後でもう手に入ることはなかった。その間我々はマグカップ2杯のスープの代わりに1杯を貰った。更に良いびっくりプレゼントは私の誕生日の2日前、突然カナダの赤十字小包が分配されたことだった。点呼後我々の部屋の全分隊が分配に集まり、とてつもない祭り気分を与えて各人に引き渡された：マーマレードののったラスク1枚、チーズののった半枚 [のラスク]、干しぶどう45粒、スモモ2個、板チョコ半分、石鹼8分の1個と砂糖半匙。我々は全部すぐに平らげてしまい、祭り気分だった。[...] 再び体重を測定され、全員又多少増量した、私は今62, 5キロ。食事は多少野菜が入って少し良くなっている、そして今はもうそんなに寒くないので、自分達の身体が食物をもっと有効に消化しているのだ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月22日

自分達の運営の下に受け取った全赤十字物資品は、将校部屋の後ろにある第1病院へ運ばれた。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年4月20日-30日

4月22日我々は2度目の赤十字小包を受け取り、8人で分けた。それは最初の仕事日の朝でちょうど良かった、さもなければ食事を1時までひたすら待たされたわけで、それはだから前夜の5時からだった。[...] 盗難に対して自分達のあらゆる鍋にいろいろ彫る：妻と子供達の名前と生年月日、この戦争と戦争捕虜の身になった日付、聖書の1節と良いことわざ等。今は相当良い気候なので、私は倉庫に自分の暖かい衣服を片付ける。

へレ

宮田（福岡9）

1944年4月29日

僕はそこで〔鉱山で〕仲介人に〔多少の自分の品物を〕売買させ、再びかなりの大金を保持している。平民シャツと緑の短パンは共で7円になった。僕はその時刻みタバコ1箱を交換し魚1箱とケチャップを買った。味はサユール〔野菜料理〕に美味しく染み透った。僕は大概ここでサユールを作っている：夜、というのは病院にはいつも未だストーブがあり、野菜はいつもなんらかの方法で手に入るから。大半は後方にある野菜畑を通して貰っている：ネギの切り株、タマネギ、そして他は更に自分で数個のキャベツ―或は野菜の葉を切り取る。毎晩僕はこのようにして2倍の割り当て分を食べている。[...] この時期畑からかなりの収穫がある。日に20キロ辺り。とにかく、君、明日皇女様<sup>87</sup>の誕生日で何か余分を貰うことを望んでいる。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年5月1日―10日

2回私はそれぞれ15本と19本のタバコでそれぞれ鉢まるまると鉢半分の飯を買い取った、ファン ヘンゼルから。かれは要するに自分の決まった出所先を持っていて、同日それが供給された時、彼は全部平らげることが出来ずに売り渡した。しかしいつものごとく、紳士というのは何か奇妙なところがあるものだ。我々は約束した：夜の鉢はタバコ9本で、それは450グラムの重量であろうが或は500グラムの重量であろうが。それは安い取引だった。朝の残りですれが625グラムになった。そうしたら彼は言い訳等などを持って私の所へやって来た。[...] 食糧、盗難、料理の本の読書、食糧の夢について話すことは、食糧に今再び多少栄養価が出てきたので止めになった。食糧は今再び多少栄養価があるそれで大半の人々に浮腫も消えている。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年5月11日―17日

この休日我々は水疱瘡の予防注射を受け、赤十字からの靴が中に届いた、そしてそれらは一全て前回と同様の靴とプルオーバー―我々用でなく、どうせ日本軍が手に入れることだろう。我々

---

<sup>87</sup> 4月30日、ユリアナ皇女の誕生日。

は自分達用3度目の、今回は各4人にチーズとジャムのついたラスク、干しぶどうそしてチョコレート  
の赤十字分配を貰った。

私は25本のタバコで鏡を、10本で1本の鉛筆と交換し、今再び南スマトラについて私の日記を  
続行することが出来た。<sup>88</sup> 今月私は2キロ体重が増え、水分でないことを祈って。我々の大豆皮入りの飯720グラムという配給量は今、160グラムの飯[1食分]に加えて100グラムのパン、240グラムの弁当飯、そして夜は220グラムのパン、更に割り麦を飯に交換。

ヒルフマン

福岡9

1944年5月23日

赤十字物資の管理をしているのは我々の主人達であることにしょっちゅう気付く。最初は日本人軍曹がカギを持っていた倉庫にこれらは積み上げられていた。しかし約1ヶ月前から我々はそれらを自ら監督し誰も近づくことが出来ない。‘ご主人達’はゆえに自らの在庫を持たなければならない。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1944年5月28日

食糧は最近多少落ちていることから、その結果私は鉱山から帰ってくると又しても相当疲れ気味で、他の連中も弱々しく感じている。今夜私は余りにたくさん食べたので、それ以上は無理だった：オーブンが壊れた為我々はパンの代わりに小麦粉の握りを貰った。夜これらが酸味を帯びてきつつあるらしいので、それらは我々に発給され、私が食べたのは：鉢2杯の魚のスープ、茶碗1杯の飯、魚1匹と小麦粉の握り10個。

盗難に対して自分達の持ち物に黄色のペンキを塗らされた。個人の財産に私は書いた：‘ドゥ フェール’。日本軍の品物には私の収容所番号、[その番号で] 日本軍からも話しかけられる：‘286番’、‘二 ヒャク ハチ ジュウ ロク’。我々は靴磨き粉（それで私は自分の革製品を多少手入れした）、靴紐、歯ブラシ、歯磨き粉（これをパンの上ののせて我々は食べる、味をつける為）、手箱に入った裁縫道具、安全剃刀、髭そり用石鹸と剃刀の刃を貰った。シ

---

<sup>88</sup> 戦争勃発から欠かさずつけられてきたファン ウェスト ドゥ フェールの日記は1943年チャンギ（シンガポール）で盗まれた。彼は即復元の作成を始め、そこで明らかにとびとびにつけていた。（前書き、..... 参照）。

シェービークリームは心地良い文明の気分と匂いを供与する。5ヶ月と5日間使った私の鉦山靴（私は故に節約家だ！）を10文半の代わりに11文半のサイズに交換しなければならない、ぶかぶかだ。巻きゲートルを巻いて端を縫うことで少しは助かる。[...] この午後の職務中私は自由時間に家事仕事をし、例えば衣服に番号を縫う事、繕う事、衣服に布を当てる事—すなわちアンダーシャツと寝巻き—衣服を洗う事、磨く事等。我々が未だに完全な物質主義でい続けているかというのはおかしいことだ、というのは私の小さな粗末な所有物を保持し、守りそして何度も眺める、ちょうど以前ジャワでの自分達の財産の様に。このようにして私は徐々に物質領域においてあらゆる願望をタバコと交換することで実現している：鉛筆、毛糸の靴下、安全剃刀、刑法でさえも。そして私が持った物はいつもかなりつましく保存したので、他の者達のが既にぼろぼろになり始めている一方で、知り合いの中では私が最も多く服を持っていた、。私の最近の獲得品はかがり針だった。これは全て喫煙を止めたことで、タバコと交換できることに私は感謝する。例えばビタミン剤に物々交換することは価値高いと思う。9月以来私は500個のAとD、4000個のビタミンB [剤] を食べた。

オーステルハウス

福岡15

1944年5月31日

ニック [曰く]: [僕は] 鉦山でベルトを売りタバコ2箱、刻みタバコ2箱そして瓶1本のロンボックを得た。取引について話す (取引万歳!): [僕は] [F. A.] ベルフからアザラシ革の財布をタバコ4箱で買った。[...] ピート・ストルクのポケットナイフ1本を買った、商標: 日本の缶詰、タバコ15本で。髭剃り鏡を探した。ラッパルド医師はそれを2つ持っていて、突然僕に1つを只で申し出る。

ほんの少し前赤十字供給 [があった]。3人に付き: シェービークリーム1チューブ (乾燥髭そり用)、裁縫袋1つ、中味: はさみ1個、針2本、かがり針1本、縫い物用の糸、3つのボビン縫い糸、3本の安全ピン、ボタン16個。更に 安全剃刀、剃刀の刃5枚、2組の茶色い靴紐、茶色の靴墨箱 (アメリカの靴が12月以来倉庫にある)、歯磨き粉1チューブ (パン、飯の上に或はそれだけで消費されている)。僕が貰った物: 安全剃刀、2つの裁縫袋、剃刀の刃1枚。[僕は] 即裁縫袋をシェービークリーム1チューブと取引し、安全剃刀は2円とタバコ1箱で取引した。



ヒルフマン

福岡 9

1944年5月31日

最近は頻繁に赤十字物資品を分配している。聖霊降臨祭ではバター、ジャム、コーヒー。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年5月29日－6月6日

6月1日我々は再び赤十字供給を6人で分け、加えて各兵舎に付き15組のアメリカの靴。将校達はこの機会を利用し自分達の靴を新しいのと交換した！[...] 配給量は又もや30グラム減量され、今は240グラムが3回になった。今日は同時に私が鉱山労働者となって1年になる。次の10日間我々は毎日6人で赤十字小包配給を受ける。6月4日日曜日我々はぶどうを貰った：病人達に持って行くふさわしい贈り物！ [...]

[翌日] 私は2夜前蚊[と虱]で寝られなかったので、その時から始めた蚊帳を作り終えた。これ[蚊帳]は私のベッドカバーの部分、布切れそして私が引き渡した蚊帳の一部(だからこれは不完全で引き渡された)で作られた。これをし終えて5時間後、我々は日本製蚊帳供給を受けた。なんたることだ！とにかく、それで冬の寒さに対してその下で眠ることが出来る。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年6月7日－14日

我々の休日に赤十字物資の残りが手渡され、内容は：プルオーバー、下着、ネルのパジャマ、冬の布、毛糸のシャツ、木綿のスーツ、手袋そして靴下。私は木綿のスーツを貰ったがそれを素晴らしいプルオーバーと交換した。私はタバコ100本で長いイエーガーの下着と交換した；後で全ての下士官達は更に毛糸のシャツを、兵隊達は手袋か靴下を貰った。私は靴下を貰った。最後に食糧の残りが開放されたので、再び10日間具がのっているパンが供給される。それらのものは来る冬に重要だ；去年の相当数の肺炎をこれで防止することが出来るだろうから(主にこれらの布地供給を私は意味している)。[...] 素晴らしい夏の陽気が、ハエの異常発生を引き起こした。各人25匹殺し、日本兵に引き渡したハエでタバコ1本調達。収容所作業人と病人達は2500匹のハエ獲得を記録した！おまけにこれを数えるという汚い仕事まで引き受けされる。これらの日々の収入は今タバコ相場を下落させ、タバコで表示すると飯が高めになる。

ヒルフマン

福岡 9

1944年6月11日

鉾山での日本人達との取引は再び溢れんばかりに栄えている。蘭領東インドのお金を買い占める日本人達が居る！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年6月19日－20日

射撃被覆電線室の日本兵が私に胡椒とかがり針を売ってくれて非常にうれしい。それらのものは円と引き換えられる、というのは私の頭の中にはタバコを鉾山に密輸する気が無いので。彼に何か食糧を私に売る気がないか更に試みたいが、外も全ては配給制なので疑わしい、一方タバコだけはもうしばらく25匹のハエでまだ供給されることだろう。これは今まで熱狂的となった。余分に儲ける為何人かの収容所作業人達はこれを素に常に日毎2から4箱のタバコを稼いだ。

再び赤十字物資が中に到着し、新しい日本人軍曹によって同日分配用に開放された。何と日本軍隊はたかが軍曹ごときが権力をもっているのか！前任者では分配が時として半年も止められていた。日本人中尉はそこに何の影響力も持っていないようだ。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年6月21日

ベン・タコマはここで台所に入ったので、太ることだろう。僕の58キロでは嫉妬しやすい、この冬病院に飛び込む前より1キロ多かっただけだ。

ウェストラ

福岡 17

1944年6月27日

食糧は各食：飯、コリアン [ダー種子] そして季節野菜のスープ。肉は殆ど見ない。分量は余りにも少ない。多くの変化は台所には無い。時々、小麦粉があれば、6食に1回はパンを食べる。

食糧は益々悪くなっている。僕達は新鮮な物から乾物品へと移行する。この国は徐々に後退している。

ウェストラ

福岡 17

1944年6月28日

今夜僕達は豆腐 [搾った大豆のケーキ] を貰った。各週に1度それを貰う。1人の病人の残したもので僕は満杯だ。又一度何か油っぽい物がぜひ食べられたらなあ。ドイツ降伏 [の祝い] の為僕はハムの缶詰と卵を未だ保存しておいた。

ウェストラ

福岡 17

1944年7月3日

食糧は今重要となり始めた！胃を満たすには余りにも少ないが、カロリー、栄養価等に関してはきっと学術的に一定に規定されている。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年6月21日－7月7日

日本軍の最近の奇異行為があった、赤十字の靴供給を受けた我々は、それと共に整列しなければならなかった。その時これらをぼろぼろになった日本の靴と交換させられた！

ルーゲ

福岡 21

1944年7月7日

鉦山作業服を受け取った。全ては余りに大きく、靴は（布製）並外れて悪い。

ルーゲ

福岡 21

1944年7月11日

今日赤十字から靴の発送品（16木箱）が到着した。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年7月16日

朝鮮人の1人とそこで〔鉱山で〕かなりの取引に手を出し、今の所まで無料喫煙に成功した。僕も日本の刻みタバコを1箱60セントで買い、ここではそれを再び1ギルダで売った。紙巻タバコは自分の使用に保存していたが、無料喫煙に成功する為十分に儲けを稼がなければならない。

[...] 僕の蚊帳がぼろぼろで完全に駄目になった。彼等は僕に古い蚊帳を戦争に送り込んだ、嫌な奴等。医者はそれを死亡した連中の1人の物と交換することをきっぱり断った、というのは彼はそれらを焼却用の材料に使用し、ぼろぼろになった蚊帳は彼には役立たない。食糧はこのところ多少良くなってきている。僕達は再びパンを食べ、毎日脂肪を塗りつけ、とにかく何かラードの様なもの。それを僕達の夜食にも貰い、すごく美味しい。終に再び脂肪を食べた。

ヒルフマン

福岡9

1944年7月21日

明らかに盲目の増加について最近の苦情後、我々は今約2週間ばかり毎日食糧に脂肪を受け取った。しかしながら肉や魚はここ1ヶ月見たことが無い。

ヒルフマン

福岡9

1944年7月25日

新しい‘軍隊命令’：1人に付き日毎の飯量は次の通り：鉱山労働者達は705グラム、内部作業人達は510グラム、病人達390グラム。病人達はゆえに飢え死にするかもしれない。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年7月30日

食糧は近頃かなり良い。‘朝はパンにバター’。それは実際脂肪或はラードだが、とにかく塗りこめる。午後は飯と少しの魚そして夜はジャガイモとタマネギのスープ。僕達はここ最近タマネギで忙しい、大きな白いボンベイタマネギ。ジャガイモの食事はいつも最高に美味しく、ただ余りに少ない。兵舎病人達はもっと少量を貰う。全ての4分の3 [普通の1食分] だが、日本軍は彼等をより早く鉱山へ追い立てる為にそうするのだ。[...] 1ヵ月後の明日は再び8月31日だ。<sup>89</sup>再び赤十字物資を受け取れるよう望む、ひよっとするとタバコが。日本軍はそれらをもはや配給しない。僕はそれらを定期的に今月中へ密輸することが出来、その余分を2倍の値段で売り、ゆえに月中は無料喫煙できた。僕はこのところ日にタバコ5本程度しか吸わず、1本のタバコが軽く5から6セントかかることを自覚すれば、それでも未だ多い。僕はそれらを8から10セントで売り、それらを簡単に処分している。それは今終わってしまった、当分は。

オーステルハウス

福岡15

1944年7月31日

一般的に印人達は甘党と言える、これを得る為に自分達の他の品物と交換するするのに一生懸命だ。僕達は皆少々耄碌したようだ、それは次のことで分かる：ひたすら食物のことばかり話をする人々を日頃嫌っていた。そしてある夜のことで、ミルク缶の蓋の前に座り、箸とナイフ更に数個の道具でどれだけ混ぜればよいか見積もる、調理の重大な検討をすることで、自分もそうであることを見破る。決断：板チョコの削り屑を1小匙、バター1½小匙、同量の粉ミルクそして多少の冷茶。（薬局用の秤が無いので多少は不足する。）それらを蓋の中で混ぜる、かなり気をつけて。混合物のスプーン10分の1を味見し、もう少し粉ミルクを、或は板チョコを、或は又バターをそこに加えることを真面目に納得する。（そして突然自分が完全に馬鹿げてしまっている事を確信する。）

他の事：本を読む。[本の中の] ある紳士が葉巻に火をつける！（あー、これらの常に葉巻—そして紙巻タバコをくゆらせている本の中の紳士達、又いつも軽率に朝食、昼食そして夕食—なるべくならメニューがそこにあって。）ところで、この紳士はこの葉巻で外へ散歩に出かける、この火のともった葉巻で、要注意！たちまち頭に思いが浮かぶ：「君、気をつけろ、叱られるよ。<sup>90</sup>君の灰皿（水の入った！）はどこにある？」即君には分かるだろう、この混合物の

<sup>89</sup> 女王の誕生日（ウィルヘルミナ女王の誕生日）。

<sup>90</sup> この意味は：困難に合う。

ところでも又分かったと思う。

コーヒーを買う（コーヒー1缶につきアメリカの紙巻タバコ3箱）、3缶半とコーヒー強迫観念に捕われるまで。（今まで慎重に保存して置いた僕のコーヒー1缶を8月23日まで保存できることだろう、それと僕の2箱の‘アメリカ人’、母さん？）（[8月23日は]彼女の誕生日。）

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1944年7月29日－8月5日

食糧はなお未だ重要な点だ。8月1日私はタバコで食器洗い組から飯を譲り受けることが出来、それから夜中の2時と翌日の午後2時の間に食べ、普通鉢2杯の代わりに5杯の飯、腹十分だったが、未だ満腹ではなかった！この感覚は脂肪が入ってやっと得ることが出来る。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1944年8月5日－10日

我々は食器洗い雑用をし、余分の飯とスープを貰った、2食分：24時間内に6倍の飯と6倍のスープ。日本軍台所の分配する残り物の多さ次第で常に興奮させられる。10歳までは誕生日に興奮するが、今はそれが食器洗いの番だ：あらかじめ台所の自分の知り合い達に話しをしておき、その日が来たら、期待で心がどきどきする。

我々<sup>91</sup>の様に空腹を経験しなかったタイの1団はこれも全く知らず、それに対してごく普通にしている。我々も飯は上げない、下痢でいかに食欲が無くとも：それで紙巻タバコかパンと交換する（紙巻タバコはその間再び交換手段として使用することが出来るようになり、今捕まえるべきハエが少なくなっている）。

---

<sup>91</sup> タイの1団は1944年6月泰緬鉄道で働いていたタイから日本へ移送された約300名のオランダ人達からなっていた。タイでの最後の月々彼等は鉄道での辛苦から回復する為ある種の静養キャンプに留まっていた。（項目‘移送と宿泊’、1944年6月19日－20日付けのファン ウェスト ドゥ フェールの日記抜粋参照。）その静養キャンプにいた戦争捕虜達は日本よりもより良い食糧を貰っていたかもしれないのだが、或は鉄道での配給量に当てはめられたのも疑わしい。

ウェストラ

福岡 17

1944年8月13日

最近僕はすごく空腹だ。後で僕はたくさんのピーナッツ、バター、蜂蜜、蜂蜜入りケーキ、アドヴォカード（ブランデーに卵や砂糖を加えて造るリキュール）を飲み、そして全て菓子製造販売人達の物なら何でも食べる [つもり]。

オーステルハウス

福岡 15

1944年8月21日

収容所作業人のみ配給減量: 200グラム3回が150グラム3回に！定期の収容所作業達だけはここから除外。どうして僕がそこで勘定に入れられていないのか、不可解だ（そして又少々イライラする！）。しかし僕はそれに対して自分1人心で戦っている—このイラツキに対して、納得！（というのはヤッピーはいつも少々、又時にはその2倍も自分勝手に、利己的で、すぐに腹を立て—彼はいつも言うわけではないが—敬意を表されていないと感じたら！）しかしそれもその内再び上手くおさまることだろう！神様が取り計らってください！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年8月21日—25日

飯の中に再び、多少ましな栄養を供与する割り麦と大粒の大豆を貰った。自分のパン食を私は飯と交換する。他には収容所作業人達の配給量が又しても減量された。彼等は今150グラムを3回貰うが（我々 [鉱山労働者は] 240グラムを3回 [貰う]）、それでもやはり働かなければならない病人達に対して恥ずべきだ。<sup>92</sup>

---

<sup>92</sup> 鉱山労働者達は（軽症の）病人達で、彼等は鉱山で修繕の為のあらゆる小さな仕事に奉仕した。この項目、1944年1月18日付けのオーステルハウス日記抜粋も参照。

へレ

宮田（福岡9）

1944年8月28日

<u>鉱山労働者達</u>	<u>兵舎病人達</u>	<u>病院</u>	
飯705グラム	飯570グラム	飯390グラム	
野菜120グラム	鉱山と同量	鉱山と同量	
脂肪25グラム	鉱山と同量	鉱山と同量	
パン200グラム	鉱山と同量	鉱山と同量	（あるかぎり）

上記は日本の戦争捕虜達の配給量で、これを我々は少なくとも日々貰っている。魚或は肉そして骨質、もしあれば：1ヶ月に3-4回、或は全く無し。パンは疑わしい。小麦粉があったとしても、又してもイースト菌が無い或はイースト菌を作る為の砂糖が無い。

ハライ<sup>93</sup>で働く連中、とりわけ私、は普通の鉱山労働者達よりもっとこくのある弁当を貰っている、というのはハライはもっと厳しい状況の下で働くからだ。‘ハライ弁当’は約300グラムの飯（乾燥した）の重さがある。

オーステルハウス

福岡15

1944年8月31日

来る9月6日鉱山労働者達の配給減量：[彼等は]日に60グラム少なく[貰う]？

へレ

宮田（福岡9）

1944年9月3日

女王の誕生日[8月31日]には確かに祝宴のご馳走を貰い、僕は食べ過ぎてしまった。美味しいブイヨンの味が出たワルーサユール[カボチャの野菜料理]と相当量の飯。ソーセージ入りのパン、パン工場からの、赤十字の色々な物がその間に入ってそれから大きなマグカップ1杯のスモモプリン、或はカスタード。それはちょうどその中間をさまよっていた。僕は殆ど破裂しそうだった。僕の胃はそんなに多くの量に慣れていなかった。とても美味しかった。

---

<sup>93</sup> 一種の鉱山通路のことで、背景を考慮して他の鉱山通路の仕事よりきつかった。



ウェストラ

福岡 17

1944年9月5日

僕は自分の持っている指輪に感謝している。可能ならすぐ、その1つを食糧に代える。2日毎に貰う紙巻タバコで僕も食糧を買い、結構上手くいっている。パイナップルジャムが食べたい。

ウェストラ

福岡 17

1944年9月10日

最近再びお金があるので又食糧。鉱山では誰も[僕の]指輪に興味が無い。疲れを感じるが、何とか元気だ。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年9月5日—16日

[私は最近収容所作業人となり]そこに休みの日を入れて日に3回配給量150グラムの6日間休日があった。それは少ないが、幸運にも台所の雑用をしたので、毎日何らかの余分を貰った。

オーステルハウス

福岡 15

1944年9月21日

今日は再び配給量変更：飯から40グラムの豆[が無くなり]それに代わってパン[を貰う]。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年9月24日—10月3日

新しい日本人軍曹のお陰で我々は発給された冬のオーバーを既に受け取り、数日後には我々の日

本製冬のスーツ、これは裏地がピロ<sup>94</sup>の去年の特に外側を触れると余りに寒い感じがした古い物よりもいつもとても暖かい。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年9月30日

既にかなり寒くなり始めている、。冬の到来だ。暖かい赤十字供給品を貰った：高い襟の暖かいセーター、数組の靴下とハンカチ1枚。8つの組み合わせがあり、その内の1つの組み合わせをくじで引くことが出来た；僕は最初の組み合わせを貰った。

第1組み合わせ：セーター＋靴下＋ハンカチ

第2組み合わせ：イェーガー＋手ぬぐい

第3組み合わせ：イェーガーズボン＋シャツ＋手ぬぐい

第4組み合わせ：パジャマ＋シャツ

第5組み合わせ：パジャマ＋ひさし帽

第6組み合わせ：仕事着＋ひさし帽＋ハンカチ

第7組み合わせ：仕事着＋靴下＋手袋

第8組み合わせ：シャツ＋靴下＋手袋＋ハンカチ

500人用に110の完璧な一揃えがあったので、皆何かを貰った。僕はいつもほしいと思って自分のセーターが貰えてうれしい。靴下は綿だが、僕は未だ数組の毛糸の物を持っている。この冬を越したら家に帰る。彼等は後未だ半年戦争を予期していて、それからは全てが終わる。

食糧に関してだが近頃は良くなっている。僕は食養生する：飯半分、ティム半分 [二重鍋で炊いた飯]そしてそれがここで貰う最高の配給量だ。規定の食糧より相対的にもう少し多目に貰う。僕は実際何も調子が悪いわけではないが、腹痛があるという言い訳を持って医者の方へ行って既に1週間食養生をしている。実に満足。

ヒルフマン

福岡9

1944年10月1日

過日、赤十字から受け取った全ての衣服を分け合った。それらは110着の完全装備だった。くじ引きで各人何か貰えた。外部への販売には厳しく処罰。仲間内の交換と売却は許可された。

---

<sup>94</sup> ピロは半分リネル、半分綿の織物で特に仕事着として使用される。

ウェストラ

福岡 17

1944年10月10日

[僕達には] パンがもう無い。肝油と紙巻タバコはメウルマンズ（あー、彼は墮落！）と合意[に達した]。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年10月15日

僕は君の誕生日[10月13日]に米搗きで儲けた余分量の飯を自分にご馳走した。米搗きはただ透き通った白米を食べたがる日本人用だ。僕達は赤米を食べる。‘デデック’（実際玄米のみ）を盗むのに僕は苦勞した。温かいお茶を飲むことはものすごく健康で栄養価がある。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年10月10日－20日

食糧は今私には十分だ、といえる。パンは美味しく、大豆、鳥の餌<sup>95</sup>、そして割り麦の入った飯は珍味。ただ寒くなると一既に多少始まっている一この献立では我々が再び空腹になることだろう。今収容所に散髪屋がいて、私は2日毎に髭を剃って貰い10日毎に坊主にしてもらう。

ルーゲ

福岡 21

1944年10月18日

[日本] 国民はとても貧しく、ぼろぼろの服にほとんど履物が無い。大半は木靴で歩いている。鉱山で働く全員は布の付いたゴム靴を履いている。我々の賃金は：兵隊達は日当たり10セント、下士官達15セント、予備役将校候補生達25セント、将校達は月々30円。このお金は殆ど価値が無い。収容所では紙巻タバコで取引が行われている。

---

<sup>95</sup> 恐らくファン ウェスト ドウ フェールは示唆する：コリアンダーの種子。

ウェストラ

福岡 17

1944年10月22日

数日とても寒い日々があった。僕は今日初めて長ズボンをはき、4分の3ズボンはもう穿かない、他はシャツとジャケット [を着る]。時々セーター。[...] 先月 [僕は] ほぼ15円稼いだ。それは多くの食糧を意味する！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年10月21日－11月10日

天気がすごく悪い。私はベッドカバーからズボンを作っているが、股は難しい。フラネルで私は又手袋、ナイトキャップそして靴を作った。[...] 食糧はとても良くなっている: 多目の割り麦、野菜と魚。[...] 自分に何かが起こった場合、ここ収容所における自分の財産をルコムテ、[フランス] リヒト、[M.] ニーブルフそして [H.] プリンスで配分してもらい、前者に私の指輪、腕時計、覚書、調理鍋ををリアに渡してもらい、そして更に何枚かの衣服を [ウィム] ドウハー、[S.] ドウヴェコット、[M. G. D.] ブルックマン、[G. H. F.] スナイダースそして他の連中に上げることを私は自分の本 *Jesus van Nazareth* (ナザレのイエス) の中に遺言した。

その間未だなお良い天気で、我々を不安にさせた寒さ無しで気持ちよく睡眠をとる。私は5月から自分の靴で幸い相当長い間過ごしたので、今日本製下駄、サイズ11を得る資格が出来た。他のサイズは全て織物(?) からできた靴で、12日間しか使えず、1日湿った日の後は既に駄目になってしまう。( [それらは] 布地とボール紙で [作られていた])。

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1944年11月5日

[鉦山における] 残業日<sup>96</sup>の後は報酬としていつも、乾いた飯と一緒に固め、拳ぐらいの大きさの2個が共に新聞紙に包まれた握り飯を貰う。大抵は数小片の塩辛い大根をそれと一緒に貰う。僕は自分のパンを食べたばかりで、それは実に美味しい。特に硬くなったパン。[...] 紙巻タバ

---

<sup>96</sup> 余分に長く残業させられた日、12から14時間継続。項目‘作業’内、1944年7月30日付けのヘレ日記抜粋参照。

コは殆どもう貰えず、噂ではもはや全く貰うことができなくなるだろう、という。僕達は今、中国りんごとも呼んでいる、たくさんのケセメックス [オレンジ、水分の少ない甘い果物] を貰っている、僕達のお金を使い果たそうと思えば。それらはまず洗みを取り除く為温水で前準備される。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1944年11月11日 - 20日

時々相当寒く、我々はマスク供給を貰った、これは出発する前の整列に、或は鉱山から戻って来る時義務としてつける。みっともない。それに冷たい鼻が最悪なのではなく、冷たい足の方がもっと大変だ。半分裸足で長く歩く、今はもう靴が無い。余りにひどくなると、週間司令官がドゥハーンの様子に多分収容所作業人にしてくれる。彼は1ヶ月収容所作業人だった。その時彼の靴は回収された。彼は1日鉱山へ行き、'靴が無い' 為再び解放された。彼は収容所作業人の配給量が少ないのに反対したが、鉱山ではもっと大きな不安があった。彼が働いていたある夜中、部屋で23本の紙巻きタバコが盗まれた。非常に災難。彼は完全にしょげ返って言った：「僕は泣きたいよ」と。

彼は戦争捕虜の身で未だ十分 '鍛え' られていないが、これが紙巻タバコの価値を実に明らかに表している。

ヒルフマン

福岡 9

1944年11月15日

多くの戦争捕虜達は食糧の強迫観念に捕われている。これはとりわけ食糧が腐るまで、或は日本軍の大きな怒りをかうまで、愚かに保存する。私は今、食事は食堂で取らなければならない、兵舎で食べてはならないという規定の日本の命令を明らかにした。それは食堂で警告され、それでも食糧を持って行く者はそれが取り上げられる。

一昨日 '敏速' [日本人軍曹の渾名] が報告したところによると、彼は鉱山労働者達に日に100グラム飯を多く与え、さし当たっては2ヶ月継続！そして実際下方鉱山で働いている我々の連中は日本人歩哨達より2倍の飯を貰っている - '敏速'、'びっこ'、'甘ちゃん' 等のような重要紳士達を除いては：彼等は十分楽しんでいる。

この国では全てが高くなっている。明らかにお金のインフレーション。1個のカボチャが外部で2円する。外部の闇市で10本の紙巻タバコが5円（これは日本人が支払う額で、こ

れらが収容所では1本60セントで売られる)。大都市では柿(ケセメック [オレンジ、水分の少ない甘い果物]) 1個が2円50銭もする。全日本人はお金を持っていても、配給制の為何も買うことができないので、そのことに関して自ら苦情を述べている。

ウェストラ

福岡17

1944年11月20日

食糧は：飯にコリアンダー種子(麦)とサウィー或はローバックスープ [白菜-大根のスープ] 或は大根の葉。夏の新鮮な野菜は今使い果たされた。事態は転がるように後退しつつある。飯の中に時々豆、ジャガイモ或はサツマイモそして最近では圧延された豆が入っている。この後者は鉾山からの余分供給だ。又‘採炭’-と‘処理’-労働者達用の余分割り当て。<sup>97</sup>最近僕達はかなり規則的に魚、特に鰯を貰っている。労働者達は塩漬けの野菜が付いた割り当て分を貰っている。パンはずいぶん長い間無かったが、近い内に再び入ってくるらしい。[...] 売店に何かがあるとすれば、それは：挽いたロンボック [赤唐辛子]、カレー粉、クッキー、柿、飴、紙巻タバコ、りんご、ジェルック [柑橘類]、みかん(とても美味しい!)、若布、そして日本軍ですら全く有難がらないほどの悪い菓類。

ヘレ

宮田(福岡9)

1944年11月26日

僕は針仕事で忙しい。台所にいる誰かにスリッパを作った、勿論それが何か齎すかもしれないことを祈って。多分その内来るだろう。今までの所 [僕は] 未だ大したことはない：タバコ1本とサツマイモ1個。そのことについて聞きただしたくはない。再びもうすぐ聖ニコラスだ。到着した新しい12個の赤十字木箱から何か手に入ることを期待している。とにかくクリスマスには相当豪華なご馳走を貰えると思う。

---

<sup>97</sup> 採炭-割り当てで鉾山労働者達用の食物が示唆されている。処理-割り当ては何が示唆されているのか明らかではない。

オーステルハウス

福岡 15

1944年12月2日

赤十字物資荷物が又再び興味の中心になっている。近々何か起こるべきで、執拗な話ではそれが既に中に届いていると断言している。どちらにしても‘その軍曹’はクリスマスには赤十字物資が来るだろうと約束した。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年12月3日—4日

最近の週は余分のサツマイモを頻繁に貰っていることで食糧がかなり良い。[...]既に数回私は月の初めから発酵した大豆で下痢になり、思うに私の胃がもはや消化出来なくなっているこの余分の食糧から来ている。[...] サツマイモは残念ながら今食べ尽くされてなくなった。

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1944年12月5日

聖ニコラスに大した何かを期待したが、何も無いよ。赤十字からも何も来ない。空騒ぎ。最近は飯の中になんかの量のサツマイモを貰っている、大きな塊‘甘いジャガイモ’。味はとても良いが、飯の量が同時に後退した。今は確かに以前よりもっと多いサツマイモ、250グラムの飯の引渡しに対して日に1000グラム、を貰う。

ルーゲ

福岡 21

1944年12月8日

11月14日以来我々は毎朝最高に美味しい約270グラムのパンを貰う。

ルーゲ

福岡 21

1944年12月10日

今朝最後のパン。新年後まで [我々はもうこれを貰えない]、クリスマスを除いては、その時は又パンを貰う。食糧は未だ良い。特にこしらえ方に関しては最高に満足だ、ただ量がちょっと足りない。

ウェストラ

福岡 17

1944年12月12日

再びパン！飯の割り当ては労働者一余分配給がもう無いが、普通の‘鉢平均’。未だなお結構多い魚。スープは美味しいが、栄養価は無い。そして美味しさは単に空腹から来ている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月13日

大量のみかん発送に驚かされた、1人に12個、日本人達からの供給。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月19日

今日アメリカの赤十字から450個の大きな箱が届き、その中から127個がこの収容所宛だった。大喜び！素晴らしい眺め！去年最初の発送で起こった様に、余り多く何人かの指がまといつかなければ良いが。我々は今病院に日毎ドーモーミルク缶1個と肉或は魚の缶詰1個を供給している。恐らく今はドーモを2缶供給出来るだろう。



オーステルハウス

ヒダオ（福岡1）

1944年12月20日

時間を潰す出来事はここには十分あり、少なくとも戦争捕虜達への出来事は。まず最初に赤十字供給。これは僕達の生活で最高の出来事の一つ、特に自分自身余りに少なく受け取った場合（1人に付き約小包半分、つつましく配分されて）、特に他の収容所の連中は小包丸々を手にしたと聞いた場合、特にアメリカ人達は既に7個の小包を受け取ったと聞いた場合。ところでこの収容所ではちょうど104個のカナダからの小包が届いた所だった。これらはクリスマスの為に保存される。しかしながら突然：整列、各兵舎から3名、というのは... 赤十字小包が開放されることになった。何の為？

それらは確かに‘点呼広場’の真ん中で開放され、開封されて品目毎に分類された。残念ながらバターとチーズは病院用に選別され、肉—そして魚物は同様に台所へ、そして残りが兵舎連へ[行き]そして[そこで]配分する。（これは、特にこういうことには公平だとされる、この司令官らしい。）そしてそこに僕達は再び居る、子供達のように：7人で粉ミルク1缶、干しぶどう1箱（1人に約3粒半）、7人で板ミルクチョコ1枚、小さな1袋の塩と胡椒、ジャム1缶、砂糖1袋（約半オンス）、1箱の‘クリームクラッカー’（柔らかめの‘固パン’）、お茶1パック。僕達は再び‘料理’した：主要献立は砂糖で混ぜた粉ミルクによって形作られ、戦争捕虜達にとって実に最高の美味しい食事（多分普通の市民生活でさえも）。そして取引された：クリームクラッカー2枚で茶碗1杯の飯等。

余分なボーナスが翌日やって来た：既に多くの噂が旋回していた670個のアメリカの赤十字小包が中に持ち込まれた。毎日僕等の‘連合軍’将校達の内5名が‘倉庫’で仕事をす為福岡にある赤十字本部に行く。そして彼等は僕達に、ロシア政府と多くの問題があった後、やっと赤十字物資品がウラジオストック<sup>98</sup>から福岡に、衣服、医療薬品、本、そして少なくとも1人に付き食糧小包4個が入って到着したことを伝えた。それらから僕達は今最初の発送品を貰い、恐らくクリスマスに分配されることだろう。想像してみてください：1人に付き1小包まるまる。単に未だ想像出来ず、敢えて実感できない、特にこの司令官がいつも肉食品と魚をそこからとって台所へ持って行き、バターチーズを病院用へ保管した事。[...] ゆえに：完璧な期待で僕達の心が弾む。その上福岡の倉庫には未だアメリカの砂糖、小麦粉、塩そしてチョコレートがうんざりするほどあり、これらは近い将来もはや日本により供給することが出来ない為、戦争捕虜

---

<sup>98</sup> 日本は1943年4月アメリカの赤十字からの提案に同意し、それはアメリカの援助品がロシア船によりウラジオストックへ運ばれ、そこから毎月日本船が安全通行を保障されて日本領土に居る戦争捕虜達と民間拘留者達の下に配給する為これらの品物を取りに行っていたとされる。しかしながらこの計画についての交渉は1年以上先まで引っ張られていた。ロシア政府はウラジオストックに日本船を許可したくなく、その近くの小さな港、中でもナホトカを許した。日本政府はここに最初は同意しなかった。1944年7月になってやっと最初の日本船がナホトカに到着し、2千トン余りの援助品を持ち帰った。しかしながらこの毎月のナホトカからの品物携行は全く無駄に終わった。（ファン フェルデン、170-172.）

達の補給として意図されていた。

食糧に関して：飯とキビの量は僕達の以前の内部作業割り当て分とほぼ同量だ。（だから収容所作業人達 [の割り当て] より多目。）大抵はここにサツマイモが混ざり、それでとても美味しいのだが、それにより栄養価が後退している、同様にキビからも（或いは籾穀物）。スープは今までのところ平均して僕達の以前の収容所より未だ良い。回数多く肉或いは脂肪或いは魚のかけら、タウチョー [発酵させた大豆] とケチャップ。1週間前1人に付き約10個の美味しいみかんを40セントで貰った、それは以前の収容所では決して貰うことが無かった。そして昨日は再びジェルック（＝オレンジの種類）を満杯に積んだ車が中に到着した！！

ヒルフマン

福岡9

1944年12月20日

日本人中尉が今日突然全戦争捕虜達を自ら測定した。飯をもっと多く与えているのにもかかわらず体重が下がっていることが彼には分からない（言葉を変えて言えば、彼は我々が重量測定の間違った結果を供与していると思っている）。私は結果に興味津々だ。既に8名の出席していた将校達の内1名だけが [体重が] 同じで、他は1, 3キロ落ちていた様だった。‘開墾’<sup>99</sup>の結果、栄養を増やすこと無しに。

測定の結果：

Aグループ：55, 6キロ（-0, 5 [キロ]）

Bグループ：58, 95キロ（-1, 15 [キロ]）

Cグループ：55, 5キロ。<sup>100</sup>

合計平均体重：56, 24キロ。

---

<sup>99</sup> ヒルフマンは、やつれは將校達が余分の食糧を貰う事無く任務を施行した畑仕事の結果であることを示唆した。項目‘作業’の1944年11月15日付けヒルフマンの日記抜粋参照。

<sup>100</sup> 1944年6月18日タイから新しいオランダ人戦争捕虜達のグループが到着した。ヒルフマンはこの時から古いグループをAという文字で、新しいグループを文字Bで示した。Cグループは福岡第1収容所から来た27名の戦争捕虜達のグループを指示した。このグループは1944年12月3日福岡第9収容所へ到着した。項目‘移送と居住’の1944年6月18日付けと12月3日付けヒルフマンの日記抜粋参照。

へレ

宮田（福岡9）

1944年12月20日

僕達は毎日鉱山で余分のパンを、最近の2日間は握り飯をご馳走になっている。今日は体重を測定され、結果は各人痩せた。僕は今52キロ、想像してくれよ。さて、これからどうなるというのか誰が知ろう。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1944年12月17日－23日

この島九州に居る9千人の為に4万個の赤十字小包が届いた。意図はクリスマスに1人1個の小包、それから月毎に1個の小包を3回だった。[...] 寒さから我々は今再び空腹だ。零下近くの気温で毛布の下で温まるのは困難だ;我々は毛布をたたむか或いは自分達の周りを包み込むかあらゆる方法を考える。

へレ

宮田（福岡9）

1944年12月25日

ここ数日数個の小さな厄介なパンの為に鉱山で血と膿の汗をかいた。彼等はクリスマスに僕達を馬鹿にした。しかし今は終にここまで来た。僕達は今朝クリスマスのパンとコーヒー、11時にコーヒーとチーズ付きのラスク、12時には大きなカップ1杯の飯とコンビーフサヨール[野菜料理]を貰った。3時にはお茶とクッキー9枚そして残りをくじ引き、例えば紙巻タバコ、歯磨き粉、剃刀の刃、刻みタバコ、パイプ等、2個のジェルック[柑橘類の果物]を慰め賞に付けて。僕は剃刀の刃5枚が当たり、僕がもっと頻繁にひげをそらなければならないという間違いない当てこすり。今夜は大きな驚きがやってくる、ビールで食事を共にする等。何を食べるかは未だ大きな不意打ちだ。ここ最近僕はとてもお腹が空くので、たくさんあることを僕は期待する。[...] 今夜は再び飯を食べる、と聞いたばかりだが、より美味しい副食があるだろう。様子を見よう。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月26日

不思議：この石炭国で全く石炭が無い。今ストーブ、台所そして風呂場には炭塵だけ。我々は捨てた灰の中に燃えなかった石炭を探させる！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1944年12月24日－1945年1月初め

今日790個の赤十字小包が中に届き、そこから缶詰類は軍曹が予期していた食糧難の日々の為保存される、

ルーゲ

福岡 21

1945年1月1日

再びクリスマス小包を受けた、今アメリカの。前はカナダのものだった。

オーステルハウス

ヒダオ（福岡 1）

1945年1月1日

再び新年だ。そして僕達は未だ依然と第1収容所〔ヒダオ〕に居る。そして未だに寒い、僕達の心は温かいよね、M。僕達はクリスマスから新年まで素晴らしい時間を過ごしたね。多分それは大変良くないことだろうが、素敵な食事のお陰でクリスマスは素晴らしい祝祭になった。まず第1に赤十字小包。それらは、司令官が缶詰のコンビーフ、魚、ミルク半缶、石鹼1個を取り出した後、確かに第1クリスマスの日配分された。しかし最後に1人に付き1個の大きな段ボール箱を貰い、中味は：干しぶどう（或いはスモモ）1包み、チーズ1箱、チーズバターと称する小さな缶詰3個、粉ミルク半缶、角砂糖100個入りの1箱、コーヒー1缶、ビタミンチョコレート（いわゆる非常食）2枚、ジャム1缶、レバーパテ1缶、豚のパテ2缶、紙巻タバコ5½箱（カメルとチェスターフィールド）。満たされた気分になったこの贅沢を記述することは不

可能だ。そして粉ミルク、砂糖、コーヒー、チョコレートそしてバターから醸造される多くの組み合わせも記述することは不可能だ。とにかく最後にその結末は、今ちょうど自分の最後になった豚のパテを手からスプーンですくって食べたところで、それで僕の赤十字物資品の価値ある最後を締めくくった。僕達は率直に言った：むさぼり食った、と。

例えばある晩のこと：バター2缶とジャム1缶をさっさと食べてしまった。これらの物がどんなに美味しかったか、描写する事は出来ない。

ウェストラ

福岡17

1945年1月2日

12月は完全なる‘産出日’となった。新年は朝1人に付き半分の赤十字小包で始まった。朝は普通に食事し、午後は茶碗に豆の混ざった白米と脂肪入りスープ。夜はパン、鍋に豆腐と肉が入った美味しいスープ、多くの野菜、魚の卵、ビールと2枚の美味しいサブレー。次の休日には‘赤十字スーツ’<sup>101</sup>の残りの半分を受け取る。僕が持っていた物は：干しぶどう、コーヒー、ミルク、砂糖、缶詰の肉、鮭、ジャム、パテ、バターチーズ、チーズ、チョコレート、石鹸、チェスターフィールド50本とチューインガム。又ジェルークス [みかん] と収容所タバコを只で貰った。

鉦山はクリスマスに鉦山パンを2個、みかん、小片の肉、タバコ3本と各部門にお茶1箱という‘たくさんサービス’を供与した。恥ずべきだ。鉦山-2本線 [日本人現場監督] は褒め称えられた様な顔付きで配っていた。まるで非常に大したものだったかのように。アメリカ人達は全て好意的に笑いながら受け取り、オーストラリア人とオランダ人達は無情な眼差しで、全く熱狂せずに。

終に、1月1日、僕は再び急に嬉しい気分になった、夜中満腹のせいでそんなに寒さに悩むことが無かった。満足だった。他の日々では食糧を補充した時、食べ過ぎという気はしたが満足ではなかった。今回は脂肪分と甘さで本当に美味しかった。又後では引き続き食事が出来た。僕の身体は益々もっと要求するのだが、自分の胃が消化出来なくなっている。皆がその時は柔和で楽しそうな雰囲気だった。そしてあらためてこれが‘普通の食糧’だと考えれば。我が家での普通のパン1食は僕が昨日貰った全食事よりもっと脂肪分と栄養が含まれている。

---

<sup>101</sup> しかしながらこの2度目の分配は不明確な理由で実行されなかった。(N I O D, 蘭領東インド日記収集、C. ウェストラの日記)。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月5日

突然日本人司令官による体重測定。[...]合計の平均体重: 56, 26キロ(0, 02キロ増し)。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月9日

1人に付き日毎の公式な飯の割り当て量: 病人達390グラム、内部作業人達570グラム、鉦山外部765グラム、鉦山下方850グラム。

ルーゲ

福岡 21

1945年1月10日

水腫症の多くの事例が判明した: 約100事例。原因: 余りに偏った栄養。我々が[鉦山に]働きに行ったら、食糧は増されるが、未だなお達成しない。毎日かなり寒く、零下5から6度。[我々は]飯に大根を貰い、他には何も無い。[...] [捕虜達の]体重は毎月更に減っている。多くが歩く骸骨の様だ。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月11日

たくさん食べた: [つまり] 赤十字物資品から取り置かれていた鉦山パン。だから満腹で足は冷たくない。靴が傷み始め、新しい物は供給されない。僕自身は幸い自分の革靴が未だある。[...] 僕達は赤十字小包を全く貰わなかった。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年1月9日—18日

測定で私は1キロ半減った。大半の者に低下は重要だったが、時として食糧を売ってタバコに代えたりする結果である。ラウディとダンカールトは今タイの時より15キロ少ない。ファン ゾンは今44キロだ！

休日我々は再び最高に美味しいバターの付いたぶどうパンを貰った；これは感傷的にさせた。更に我々は未だチェスターフィールドの紙巻タバコ、チューイングガム、小さなチョコレート塊（これを私は茶碗1杯の飯に交換した）、コーヒー、鮭煮込みそしてロンボック [唐辛子]、辛子と‘マーミット’ [菜食の辛いパンに塗るもの] と称するもの。日本軍は赤十字の砂糖をイースト菌作りに使用している。[...]

我々は湯たんぼ供給を受け、それを風呂場で一杯にしてから即最初の夜中既に楽しんだ。我々は又食堂に夜9時まで居ることが許可され、何と楽しいことか。1月1日後即、茶碗洗いが廃止された。自分の鍋を持っていない者は、鉢1個或いは皿を1枚貰った。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月20日

少し前数袋の赤十字衣服を受け取り、それらは今日配分された。かなり簡素化した供給、例えば1人に付き1枚のセーター、1枚のアンダーシャツ、或いは1枚のパジャマズボン等。各人未だ持っていない物を受け取るべきところだが、配分はくじ引きで実行された。

昨日から‘フェルナンデル’が病院へ大量の飯の割り当てを認定した。日本人の典型的なのは、コカがベラス [脱穀された米] を多目に台所へ供給することを断ったので、一般の鍋から減らさなければならぬことになり、それは不可能というものだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月21日

食糧は最近の日々多少良い。[僕達は] ブイヨンと甘い豆 [を貰う]。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月22日

今日574段ボール箱（各4小荷物）食糧小包の受け取りに署名した；毛糸の男性用衣服9袋、男性用オーバー5袋。今日9袋の卵型石炭が病院用に集められ、そこから1袋はフェルナンデルへ、3袋がフォッキング、5袋がスウィート（甘ちゃん）へ。<sup>102</sup>フェルナンデルと [G. J.] ディッセルト中尉間におけるより多い赤十字食糧品の供給に関する話し合い。

ルーゲ

福岡 21

1945年1月23日

今日再び80木箱 [各木箱に4小包] の赤十字物資品が届いた。当分は倉庫に保存される。更に他の荷物の入った5木箱も同様に。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月24日

日本製靴下が我々の為に届いた、各人に1組。しかし分配はどのようにするか？1組の古い靴下を引き渡した者は新しい1組を貰う。誰もが古い靴下を持っているわけではないので、日本軍は既に自分達の（事務所）部下達に各人8組を考えていた！日本製靴下はかかとが無い。長所：サイズの違いが無いし長持ちする、というのは靴下を回転させることが出来るので、全面積が接地面として役立つからだ。

日本人達はとてつもなく早く食べる。5分で終わりだ。彼等は全てをがつつ食べて可能な限りなるべく早く中に入れ、[看護師R.] スタムによれば日本の病院でもそうらしい。今日日本兵達は‘スウィート’から、養鶏人、スフラーフェンダイクをどこかに送って鶏の首を捻り、赤十字の箱に入れて彼（スウィート）の所へ持ってこさせるように、との命令を受け、そしてそれは実際行われた。夜 [M. A.] レイス中尉によりスウィートー彼自身週将校である一に、鶏の数読みで1匹足りないとの報告がなされた。

---

<sup>102</sup> フェルナンデル、フォッキングそしてスウィートは日本人達の渾名である。



ヒルフマン

福岡 9

1945年1月25日

今日赤十字から洗面道具を入れた5個の木箱が届き、それらは直ちに日本人達(!)により開放され分配された。皆には十分でなかった。だから鉱山で良く働いた戦争捕虜達だけが貰った。ところで分配はかなり乱れていたもので、日本人紳士達はかなり沢山の物を手に入れることに成功した。‘フォッキング’は裁縫袋と歯ブラシを分け前として貰った；彼はこれを見下げた身振りをしてストーブの中に投げつけてしまった。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年1月19日－26日

今突然購入に限界がなくなる：乾燥ケセメック [オレンジ、水分の少ない甘い果物] が3円。これはパンの上と飯の中に入れて美味しく、私は紙巻タバコ2箱をケセメック3個に交換し、更に4個購入した。結果：私は3回起きて小便する必要がなくなった；私に心地よい暖かさが残っていた。多少余分のカロリーさえあればここは耐えられるほど悪くもない。[...]

私は日本製コート代わりにもっと暖かいイギリスの軍隊コートと6枚目の日本製毛布を貰った。これは夜中かなりの重さが自分の上にかかり、悪夢を促進する。我々は3日間家に戻ると握り飯を貰い、800個の赤十字小包がこの収容所に届いた。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年1月27日－2月16日

朝、数ヶ月前に我々の内の1人が1人の日本人に‘ヤン’<sup>103</sup>のコートを売ったことが発見された。処罰として来る休日には赤十字の配給は供与されない。それから数時間後、[J. H.] ドゥローが肺炎で死亡し (海軍兵で、未だ4重唱で歌っていたし、[我々にすれば] この時期を実に元気で生きながらえる人間だった)、軍曹は言った：「オーケー、赤十字の配給を進めよう。」我々が鉱山から真夜中戻ってきた時、前の赤十字在庫を4日内で食べつくしてしまわないといけない、と聞いた。ということは毎日スープとナンチャンプール [野菜の混ざった飯] と魚或いは肉、そ

---

<sup>103</sup> ここでは海軍コートを意味している。

して日本軍自体はこれにより飯以外はほぼもう配給しない。夜12時半から1時半まで食堂にて楽しくストーブの周りで（その為に我々は自ら石炭を密輸しなければならない）。その後美味しく食べた後一暖かい湯たんぽと水筒をベッドへ。

ベアトリックスの誕生日〔1月31日〕に我々は（同様に次の休日）230グラムのバター付きの干しぶどう食パンを貰った。有頂天で、我々全員感傷的に頭を左右に振りながら、チョコレートミルク或いはコーヒー、そして同日後で更に赤十字のスープ、ナシシャンプール、板チョコレート（私はこれをナシシャンプール半量〔割り当て〕に交換した）、チューインガム、石鹸、紙巻タバコ、剃刀の刃と裁縫道具とで楽しんだ。大抵の魅惑的な物々交換はここから生じている。紙巻タバコで食糧に交換することは今禁じられ、もはや起こることは無いだろう。〔...〕2月と3月に関して我々は赤十字一配給のメニューを持っているので、ほぼ毎日何か余分を貰っている。それは貰ってもよいはずで、日本軍は最低量と頻繁に飯とスープの大根ぐらいしか配給しない。シャークはこれに次の様な機知に飛んだ題を付けた「日本人の裏切りスープ」！〔...〕〔鉱山での日本人指導者達の良くなった態度によりこの仕事は耐えられるようになったことから〕そして余分な食糧により、私の体重は61キロから62キロと上昇した。再びケセメック〔オレンジ、水分の少ない甘い果物〕とマルミートが来た。私はラッパルド医師にアメリカの紙巻タバコ3箱を12円で売り、又金持ちだ。うっかりして私はパンの日に飯を2回取りに行った、それ用に私が自分の両方の鍋を分配人達に差出したので、彼等は私が他の者と私の為に〔2人の割り当て分〕分け与えるのだと思っていた。私はパンとスープを食べ終え、弁当（鉱山での飯用木製箱）を飯で満たしそして残りの1鉢は‘多過ぎた’。戻しに行くのはやはりちょっと厄介だった、というのは誰にも知られはしなかったわけだから。

ルーゲ

福岡21

1945年1月27日

今日赤十字小包が配給され、それはこの寒さから我々を救ってくれることだろう。

ヒルフマン

福岡9

1945年1月31日

今日から〔我々は〕10日毎にアメリカ赤十字からの30個の小包を受け取り、それは今までの

所2倍半の多さだ。ミルクは病院で日に6缶、加えて農家<sup>104</sup>から瓶10本、23, 5リットルの濃いミルク。これらの重要な栄養手立ての増加に関連して、我々は2月一杯試みとして[自分達自身による]処罰者達にタンパク質と脂肪分を許可し、甘い物とタバコだけは止めるようにした。

オーステルハウス

門司 (YMCAビル)

1945年2月1日

[オーステルハウスは彼の以前の収容所、ヒダオ(福岡第1)における自分の出来事に関して記述している。]

12月末僕は‘ステーションパーティ’<sup>105</sup>と一緒にいけることとても嬉しかった。(僕達はつまり各20名で2つの決まった雑用があり、これらは毎日手押し車から砂利を荷下ろす為近くの小さな駅に出かけた。)これは良い雑用と見られ、ここが全ていかに貧しいか、本当に極貧であることに気をつけてみる時のみ想像しか出来ないだろう。どれだけ全てがここで配給されるかは微々たるもので、自由取引では何も手に入らない。僕達が自分達の収容所でもタバコと時々数個のみかん以外は何も、本当に何も補充して買えない事実を考慮する時にしか想像しか出来ないだろう。

ところで、そう考えればこれは良い雑用だった：ほぼ毎日平民一班長[ここでは作業班の長]が僕達にみかん(1個につき30セント)とロンボック[唐辛子]が提供した。ほぼ毎日僕達は余分の野菜を買う、或いは何とかして手に入れる(人参葉、大根、時々白菜)ことが出来、僕達のすばらしい木炭七輪で相当量のスープを料理することが出来た！そして又その途中、倉庫からスコップを取りに行く行った時、更に必要な物を失敬した：だし、ビール、豆等、それらを細心の注意を払って飯の下、或いは余分のスープの中に吸収させた。

ウェストラ

福岡17

1945年2月6日

更に赤十字供給。なんと贅沢なことだろうか！紙巻タバコでたくさん補給した。

<sup>104</sup> 項目‘作業’内、1944年4月18日付けのヒルフマン日記抜粋参照。

<sup>105</sup> パーティは作業班の暗示である。

ヒルフマン

福岡 9

1945年2月7日

我々は今のところ日にミルク9缶、加えて3リットル半の新鮮なミルク [農家から] を供給している。約20人が日に1リットルのミルクを貰っている！

ウェストラ

福岡 17

1945年2月13日

すごく腹が減る。特にこの寒さで地面の上はすごくはっきり分かる。そして特に近頃の配給量では相当感じる。僕は52キロだ。いつになったらこれがやっと終結するのだろうか？

イエッテン

折尾 (福岡 15)

1945年2月14日

D. が彼の手首を切ろうとした、血の海。幸い人はこれが起こる事を間に合せて予防できた。ひどい状況、日本軍もそこに。収容所にとっては悪い宣伝、1人の戦争捕虜が空腹の為自らの命を絶とうとしたことは、3日から4日ごとに収容所作業人の番を貰うと日本人司令官から豚と鶏用の残飯が貰えるのでとても嬉しい。[...] 多少の赤十字分配は天恵だ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年2月27日

新しい日本人司令官<sup>106</sup> 就任以来各人日に紙巻きタバコ4本と石鹼丸々1個 (以前は鉱山下方労働者達のみしか貰えなかった) を貰っている。

---

<sup>106</sup> 項目 '拘留所の組織/欧州人と日本人の責任者' 内、1945年2月7日付け以下のヒルフマン日記抜粋参照。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年2月25日－28日

ヤン・ルコムテが鉱山内の塩床のことを耳にし、そこに注意を促してフランス・リヒト、ヤン[ルコムテ]そして私は仲間組みを結成した。そして我々が上方<sup>107</sup>へ行った時、ヤンが見つけたほかの通路に行き、壁から塩の結晶を匙で掻き、自分達の弁当に入れ、収容所へ戻ってから水に溶かし、沈殿させ、漉し、そしてオーブンで蒸発させた。我々はそれで素晴らしい塩を得た。ヤンはそれを売りパンにした；フランスと私は今のところそんなに空腹ではなく、自分達の食事にむしろ塩を楽しんでいる。

ある日我々が家に戻った時、辛子粉半缶と赤十字石鹼の半塊配給を貰い、後者を再び私は辛子半分と交換し、辛子全缶をとともかわいいアルミ製カップに交換した。アメリカの紙巻タバコ30本で私は更にイギリスのフォークを購入し、これでテーブルには今見事な食卓器具がある。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年3月1日－7日

我々は更に今月9回ミルク1カップを貰っている。収容所配給量は200グラムを3回まで上げられ、多分タイグループのD.の自殺行為に関連しているのか、彼は食糧を買う為歯ブラシを盗んだところを捕まった後、自分の手首を切ろうとした。

ヘレ

宮田（福岡9）

1945年3月3日

他はこの収容所内で相当多くの改変がある。本部はこの収容所における多数の死者、時には日に2人というのにおびえ上がった。今34人目を数える。その結果、僕達はこの収容所の健康状態を改善する為の義務を負う新しい収容所長を迎えた。全てのアメリカ赤十字小包は開放され、毎日僕達は今赤十字補給食糧を貰っている、バター25グラムか100グラムのコンビーフ、豚肉、茹でたハム等、或いはチーズ1塊；時には鮭100グラム或いはレバーパテ。赤十字の全て

---

<sup>107</sup> その意味は：鉱山での作業日の終わりには再び地上へ行くという事である。

に、日本軍は何もそこに提供しない。

献立は飯とローバック [大根]、時々120キロのスープ髓骨或いは魚(イカ)、しかし又多くはない。小麦粉はあるが、イースト菌が無く砂糖も無い、だからパンは無く、ゆえに小麦粉も後は溝鼠に食べられてしまうことだろう。各休日、つまり10日毎に、僕達はびっくりプレゼントを受ける:干しぶとうとスモモ入りの米粥(大きなカップ1杯)そして3日から4日毎に朝砂糖入りのコーヒー。最近はもっと喫煙品も貰い、日に約紙巻タバコ4本、赤十字タバコからで、チェスターフィールド或いはカメルの様な。ここから僕達は月に約2箱貰っている。収容所長は、この収容所の平均体重を56キロから60キロに持ち上げるまでは休養するわけにはいかない、と言った。3月11日我々は[次の]体重測定をする。赤十字だけを当てにしていたのでは、彼は決して到達はしないだろう。[...]

鉱山で僕のセーターが盗まれたことを君に未だ書かなかったが、これを僕は失くしてしまった。僕達は更に赤十字の配給を受け、僕はパジャマのズボンとハンカチに当たった。僕はそれから自分のコンピベッドカバーを12円50銭で売り、それでパジャマの上着を11円で買った。医者から僕は死亡した者のイエーガーシャツをプレゼントとして盗難されたセーターの代わりに貰った。心地よい暖かさなので、僕は再びかなりかなり衣装もちになっている。服は未だかなり持っている、ただ靴がもう無いが、これも何とかなるだろう。

ウェストラ

福岡17

1945年3月4日

空腹で気を失いそうだ。身体がもっと多い食糧にあえいでいる気がする。いつになったら再びほしだけ食べられるようになるのだろうか?後は元気で陽気だ、というのは特に今再び暖かくなり始めてきているからだ。[...]僕達はお金を得る為に衣服を売ろうとしている、僕の指輪も。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1945年3月8日—12日

私は又もや1キロ半体重が減り今61キロだ。3月1日から我々の給料が5セント上昇され[しかし同時に]タバコの値段が2セント上がったので、我々は1週間に数セントの儲けを得る。再び急に寒くなった;雪が積もり、道には氷。新しい鉱山靴の発給で私は12或いはもっと大きい全ての組の中から10文半のサイズを見つけたのはラッキーだった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月13日

我々はこのところ野菜としてローバック [大根] とまるで黒いマカロニの様な見てくれのヒジキだけを貰う。日本人はこれを並外れて質が悪いと思っている、恐らくそれは彼らの慣れている臭さがないからであろう。それは我々にとっても未だ多少食べられないという同じ様な理由だ。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月17日

鉾山パンはもう停止されたようで、鉾山では余分の飯食を貰うことになるだろう。[...] 僕は51キロだ。悪漢連は赤十字物資を供与するが、労働者達だけに！

ルーゲ

福岡 21

1945年3月24日

今日僕は最初から既に倉庫に保存されていた1組のアメリカの靴を受け取った。我々はそれらを鉾山へ履いて行くことは許可されなかった、さもなければ数ヶ月でぼろぼろになってしまう為。[...] 時々だが数日パンを貰う。売店ではかなりたくさんのロンボックー辛子 [唐辛子の] とフリーカーキー [飯の上にかける香草のふりかけ] が買える。紙巻タバコはかなり不規則に供給され、35セントとなっている。終に再びスープの中には大根の代わりに野菜が。肉と魚はほとんど見ることは無く、たとえ肉があるとしても、10から15キロ。或いは魚なら300人に木箱の半分、木箱1個、或は木箱2個。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年4月1日-4日

[4月1日]。この日は4月馬鹿ではないが、私と他の50人はこの1年間病気で欠席する事無く鉾山で働いた事で新しい鉾山服、石鹸、辛子と紙巻タバコを貰った。嫌な権力者、アラキさん

と‘農民’の下で286番‘イチバン ジョートー ナイ’（「一番良くない」つまり：最悪）にとってはなんという功績。又ル コムテとリヒトも1年は欠席することはなかった。我々は更に自動的に‘真面目な働き手’として‘ボーナス’を受ける資格が与えられた。私がその報酬として紙巻タバコ1箱を受け取る為、前に出てこなければならなかった時、至る所でくすくす笑い。

1945年復活祭第1日目。心地よい暖かい春の陽気と2回のナシチャンプール〔野菜を混ぜた飯〕それに干しぶとうパンが素晴らしい日にし、我々は全員楽しんだ。窓は紙の隙き間を防ぐテープが再び剥がされ、広く開放された。10日後には我々全ての冬服（下着―と上着）湯たんぽと冬のオーバーを引き渡さなければならず、そして我々は再び夏へ向かっていく。夜明けにされたところでは、服を貰った51人の鉱山作業人達は自分達の古い衣服を再び引き渡さなければならないということだ。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1945年4月5日―11日

私は丸々1交替中パンを私の気に入っている飯とスープに交換した。我々は今飯とローバック〔大根〕だけで動くモーターだ、というのは他は何も中に入らないからだ。[...] 私の体重は半キロ上昇し、それは第9カタ〔層〕で働く者にとっての特権だと思う。<sup>108</sup>

ウェストラ

福岡17

1945年4月12日

紙巻タバコは塹壕〔空襲警報の間〕での多くの喫煙者達により高価になっている〔食糧との交換手段として〕。それが僕の胃に食べ物を持ってくる。食糧はなんと重要なことか！

---

<sup>108</sup> ファン ウェスト ドゥ フェールは9層の鉱山通路での仕事がきついということを示唆している。



ヘレ

宮田（福岡9）

1945年4月19日

赤十字のものはなくなった。未だ800個の個人小包があるが、日本軍はそれらを未だ開放しなかった。多分その内くることだろう。残念だ。最近の月はイギリス人達による収容所の拡張で厳しくなっている。<sup>109</sup>多くの豚どもは残飯を少なくする。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡15

1945年4月12日－21日

食糧は最もがっかりだ：飯とローバック [大根] だけ、今まで言うのを忘れていたが、時として多少の若布、これはこの [先] 年かなり規則的に貰ってはいたものの、食糧として考慮することはほぼ無い（多分不当）。

ウェストラ

福岡17

1945年4月25日

休日そして赤十字物資品。ちょうど都合が良い！ [...] 大きな‘4本線’<sup>110</sup>鉢の飯、多くの肉、魚そしてムール貝。これからは各休日に [僕達は] 赤十字缶詰を食糧に貰う。僕達が今食べ終わった物：犬肉、鯨肉、イカ、蛙、馬肉、蛇肉、ムール貝、イソギンチャク、イカンテリ [乾燥した、塩漬けの小魚]、小さいわし、ニシンの種、鮭、蟹。[...] 飯は今12から14本の紙巻タバコを要し、それは喫煙しない者達には利点だ。特に今もう雨が降らず、気候は穏やかで乾燥しているからもっと喫煙される。

全てのお金が回収された。朝鮮人達ももはやお金は貰えない様だ。日本軍は彼等の給料を受け取るのが頻繁に遅く、彼等の話し合いから察すると、それがかなり気に食わない。

---

<sup>109</sup> ヘレは1945年3月10日この収容所へのイギリス人戦争捕虜達の到着を示唆している。項目‘移送と居住’内、1945年3月30日付けのヘレ日記抜粋参照。

<sup>110</sup> 恐らく日本人現場監督達の様な割り当てを貰った。

ヒルフマン

福岡9

1945年4月25日

日本軍により我々に認められた赤十字物資品は使い果たされた。食糧はゆえに再び以前の様に悪くなった。その上小麦粉の在庫は無くなり、4月28日が最後のパン配給となるだろう。今は又割り麦の入った飯になる。野菜だけは改善された：今又たくさんの野菜がサユール [野菜料理] に入っている、ローバック [大根] だけの何ヶ月もの後。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1945年4月22日－5月11日

野菜としてローバック [大根] の3ヵ月半後、今は何も外部から入らなくなった、恐らく軍隊がこれを必要としているのだろう。民間にとっても今はあきれたことに大根 — 我々が今のところまで皮肉たっぷりに言っていたのは、これが唯一十分 — 配給されている、と。恐らく自らの畑からの野菜の儲けは以前より半分以上少ないだろう。[...] 食糧は苦しむほど少ない。私は3本のタバコで1本或は2本の大根と多少の‘恥毛’ (ヒジキ) を買い、いざ大急ぎでここを出発する<sup>111</sup> ことがある場合に備えて服を直しておく。

ヘレ

宮田 (福岡9)

1945年5月14日

僕達は10日間パンが無かったが、今又毎日パンを貰っている。味はなかなかだ。僕が自分の誕生日に [5月7日] それを貰えなかったのは残念だ。赤十字は未だ開放されない；そこには未だ1000個の個人小包がある。最近はとにかく又肉や魚が貰え、明日は更に20キロの米が。[...] 僕は今52、8キロだ。悪い体重じゃないだろう？15年前も僕はそうだった。

---

<sup>111</sup> この収容所で戦争捕虜達がどこかへ移送されるだろうという噂が旋回した。項目‘戦争の経過に関する報知と流言’内、1945年4月12日－21日と1945年4月22日－5月11日付けのファン ウェスト ドゥ フェール日記抜粋参照。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年5月12日—19日

最近の缶詰でない赤十字物資包装品がスレウ [中尉] に手渡された。私が一緒にこの戦争を体験してきたこの良質の‘ヤネン’ 一靴 [海軍の] を払い足して (異教徒—自然崇拜、呪物崇拜嫌っているからこそ、私は理性的な人間としてうち勝ちたかった) 素晴らしい茶色のアメリカの靴と交換した。[...] [5月] 16日我々は申し分のない夏服を貰った：そう、ズボンにパンツ、だが休日だけに着るもの、他の [日々は] 禁止。

ヒルフマン

福岡 9

1945年5月20日

検査室の横の小部屋に積まれた赤十字小包は、日本人司令官の事務所へ移された。我々は腐りやすい全ての品物を取り出して分配する許可を得る。しかしながらここからはかなり物が隠された。その上日本人伍長が彼の食糧内でスパム [茹でて、缶詰にしたハム] を食べた (だからいわゆる保存された缶詰) ところを証人は目撃した。他は昨日アメリカの紙巻タバコの包装20個を日本人事務員の命令で焼却されなければならなかった。<sup>112</sup>

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年5月29日—6月23日

我々の婚約日に採炭 [鉱山労働者達] の配給が20グラム上げられ、常務の畑耕作人やバレンドライター<sup>113</sup>は120グラム減らされた。[...] 我々は今自らの畑から多く野菜を貰っている。[...] 私の体重は又しても1キロ減って60, 5キロだ。多くの虱や蚊でよく眠れないが、それに対して6月6日蚊帳を貰った。ある日我々は大豆をスープ椀一杯貰った、これは酸味が出た為廃棄処分にした兵隊達から購入することが出来た。その後続いた食事で全く空腹感が無かったのは過去何年間で初めてだった。この突然の他の食糧には良く噛んで胃に入れることが大切であるので、我々は十分そして長く噛まなければならない、とドゥ フリース中尉が食堂で言った。

<sup>112</sup> それは紙巻タバコが既に日本人たちのポケットに消えてしまっていたことを意味した。

<sup>113</sup> 恐らくファン ウェスト ドゥ フェールはこれで‘収容所作業人’ (軽い兵舎病人達) を意味している。(脚注92参照。)

イギリス人への必要性から彼は言った：「骨を良く噛むように」、まるでこれがあばら肉か鶏の様に、彼自身驚いて自問自答した！ [...]

貧困 [日本国民の下で] も益々増し、それは日本人達が既に裸足で鉱山へ行き、今弁当箱は藁製、竹製の水筒、巻きゲートルは紙製、という事実に見られる。 [...]

たくさんのソラマメが中に入ってきた。我々は数回これが飯に混ぜられたものを貰った後、再び止まり、圧延された大豆に代わり、ソラマメは弁当飯で貰った。野菜はかなり多いが、魚や肉は何ヶ月も、卵などは全く見ることはなかった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年6月3日

5月28日あたりに、私は日本人通訳と [...] 各人の体重減少について対談を持った。彼は近い内配給量の増加予定だと言った。

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1945年6月4日

この万年筆を僕は昨日チェスターフィールド1箱の為にもう少しで買うところだったが、はやり早めにそれをドゥ ヨング [質屋?] の所へ譲り渡した；高等市民学校の教師、分かるだろう。だから今僕はそれが必要な場合それを借りることが出来る。これは実に簡単だ。彼は道徳的にそれを私に貸す義務がある、というのは私が自分の万年筆を永遠に失う前に、彼が何ヶ月も長くそれを借り、又駄目にしてしまったからだ。ところで僕にはもうインクも無いし、万年筆、鉛筆とかそういった類はもはや持つことが許可されない。禁制の品物だ。

昨日はイギリス国王の誕生日で、僕達は再び豪華に歓待された、朝はコーヒーと干しぶどうの米菓子で始まった。普通の米で、干しぶどうを混ぜ、それからオーブンで焼いた物。それはいつもご馳走だ。それからアメリカの紙巻タバコ2箱と板チョコ1切れ。夜はとても小さなラスクぐらいの大きさのパンとチーズの煮込み、普通の配給量より多い。僕達は最近全く悪い食糧は貰っていないし、なかなか良い。今の所はムール貝で忙しい。僕達は既に何日間もムール貝の入ったスープと飯の上にムール貝ののったのを貰っている、悪くない。

最近彼等は農家から2頭の若い雄の子牛を、3日前には再び子牛を1頭連れて来た。収容所長は彼の猫を殺す様に命じ、医者の子犬もそうする他無かった (将校連内の1人により他に思案もなく終に斧で脳を打ち割られた)。これらの動物は日本人の命令でスープにされ、彼

はもっと多くの犬を約束した。昨日彼等はそれで2匹の大きな車引きの犬を連れて来た。兵舎病人達は前回の休日に水田で蛙や蛇を捕まえさせられた。溝鼠の後を追いかけてさせられなかったことは不思議だ、ここには一杯いると言うのに。

赤十字は開放された、今までの所は、腐りやすいものだけだが、例えばチーズ、紙巻タバコ、チョコレート、コーヒー、干しぶどう、砂糖。肉食品は彼等が保存した。ミルクとバター、肉や魚食品も開放するようにとの医者への依頼に対して、今ここに居る日本人通訳は答えとして、日本船団により外国の港から赤十字小包が持って来られ、僕達にいき渡る事を喜ぶべきで、日本国には肥料として使用されなかった、と言った。肥料として... 彼自身はすごく欲しがっている、泥棒目。イギリスの将校連が日本軍により一刻も早く開放されたものを分配することを後押ししている；彼が再び取り戻すことも出来たのだが。[...]

他には君にここの収容所で品物の値段の映像を与えよう。カメル1箱15円、チェスターフィールドは少々安め。1食[食べ物]20円。お金は価値が無い。全ては品物に交換される。昨日僕はイギリス製毛糸のシャツをチェスターフィールド1箱と僕のチョコレート半分で交換した。チョコレート半分で完全な夕食(最高)或はアメリカの紙巻タバコ30本が貰える。シャツは良質で冬まで着られるから、十分使用できる。少なくとも後悔はしていない。

ヒルフマン

福岡9

1945年6月11日

食糧は又もやかなり悪い。話によれば[日本の]学童達が我々戦争捕虜達の為に野菜を集めているとか。結果：煮詰めた草の茎。

ウェストラ

福岡17

1945年6月13日

僕は鉾山で赤十字石鹼を食糧、例えば魚や豆に取引する。[...] [僕達は今]食糧が少し前の非労働者達[が貰ったもの]よりもっと少なく更に悪い。

ヒルフマン

福岡 9

1945年6月13日

平均体重 [...] : 56, 13 (0, 51キロ増し)。この体重増加の可能な要因：<sup>114</sup>

1. 夏
2. 鉱山における重労働の削減
3. 食糧に豆とムール貝。

コークは彼の経験を伝えている：彼は上方鉱山にて年配の日本男性と年配の女性と一緒に働いている。軽い仕事。日本人達はすごく嘆いている。彼等は衣服に交換する為時々食糧を持参する。彼等は彼にヤギを1匹300円で申し出、それを彼は買う可能性もその気も無かった。彼がジャワではそのようなヤギが1円すらしないと彼等に話した時、彼等は大きな目を見張った！

ヘレ

宮田（福岡9）

1945年6月23日

僕達は最近かなりの赤十字配分を貰っている。僕は今カメル2箱とチェスターフィールド2箱を持っている。他は更にアメリカの紙巻タバコ40本と刻みタバコ2箱。他に何も無い場合はそれで全月喫煙できる。後はここ近日毎日ミルク入りのコーヒー。チーズは食べつくされたようで、チョコレートも。鮭と他の種々の缶詰が待たれている。食堂は市場の様だ。ひと揃えのコーヒーはひと揃えの朝一夜サヨール〔野菜料理〕に交換され、僕は頻繁に交換する。2倍のサヨールは大変な価値がある。

日本人達はその後もものすごくイライラしている、よく理解できるのは、都市が一つ一つ叩きのめされているのだ。彼等はずいぶん前62キロの米を取り上げ、それでかなり気が付く。ここは他の収容所より少ないとはいえ、食糧補給は未だ大変良い。もっとひどかったかもしれないのだ。日本の配給に栄光あれ、戦争中のジャワでの軍隊配給よりもっとよく組織されている。

---

<sup>114</sup> 戦後ヒルフマンはこのことについて記述した：「結局のところ体重の変動は保有される水分の増減、つまりは浮腫によるものと私にはより思われる。」（ヒルフマン、129）。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月28日

昨日僕達は赤十字段ボール箱から板チョコレートを貰った。今後は各休日に小さな配分。美味しい！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年6月24日－7月10日

私は幸運にも1組のピッタリした鉦山靴を交換した。1年に3組は多くない；何人かはサイズ40がピッタリだろうが、サイズ45で歩いている。鉦山では藁ぞうりか裸足の日本人達を何度も見る！

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年7月11日－12日

明日は40グラムの配給減量なので、鉦山労働者達、内部作業人そして病人達の配給は次の通りとなる：650、550そして410グラム。食糧事情は全体的に悪い。飯は最近又既にマッシュポテトに代わった；夜〔割り当て〕は飯が120グラム減量されるのに対して500グラム。

ヒルフマン

福岡 9

1945年7月23日

傑作な出来事：収容所長の飼っている豚が徐々に痩せていく。「その原因は」、と誰かが言う、「戦争捕虜達がこの豚の餌を食べているからさ」(!)。「そうじゃないよ」とD.、「我々がそのような餌を貰っていたならどんなに良かったことか！」食糧は確かにここ数週間以来かなり悪い。

(7月8日〔日記メモ〕参照。<sup>115</sup>) 数週間以来〔我々は〕全く野菜も貰っていない！幸い3日

---

<sup>115</sup> 項目‘拘留所の組織／欧州人と日本人の責任者’の中でヒルフマンが参考にするよう指示している日記抜粋。

以来多少改善：大豆が飯に混ぜられている。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年7月21日－26日

食糧はすごく少ない、野菜は殆ど無い（昨日1064人に39キロ）が、飯の中に50%入っている豆は大変良い。いつまでそれが続くことやら。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年8月1日－7日

我々は新しい配給量を貰う：3度の異なった食事に分けて処理される225グラムの飯、210グラムのパンと225グラムの大豆。初日我々は腹の調子がかかなり悪かった。多分どちらかというと苦く酸っぱいスープ(?)からか、というのは他の日に私は紙巻タバコで買って補給し、550グラムたて続けに食べ、満腹感は無かったが、腹十分でたくさんのガスがたまったが、腹痛は無かった。[...]

採炭作業〔鉱山で〕の10日後の減量配給で私の体重は1キロ半減り59キロまでになった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月8日

明日（休日）我々は2食分しか貰わない：180グラムのパンと180グラムの飯。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月13日

少ない食糧の一時には僕達より少ない—そして不規則に貰っている日本人達に反して、僕達は自



分達の食糧を未だ規則的に貰っている。とはいえ彼等の食事はいつも僕達のものより良質だ。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年8月12日—14日

僕は未だ [O. H.] ストルツから豆を買い、それで夜中2時まで豆を嘔吐するようになったほど食べ続けた(後者は既に酸味があり、栄養価には大して悪くないとはいえ、余分なガスが出る)。

オーステルハウス

門司 (YMCAビル)

1945年8月14日

[何か]未だ僕がちょっと言わないといけないことがある、つまりいわゆる門司<sup>116</sup>での補充食。ここに関連したことを全て報告する為本に書き込めることだろう。それは今では余りにも悪意が無い: 全てそれら食糧品の運搬と全てそれら倉庫での作業、時としてすごい誘惑されるものがある、でも自然に、戦争捕虜が全てこれらの中央で降ろす時、彼がそこから何か一そして可能ならたくさんでさえ一手に入れようとする。[...]

そして今緊張させる対立が一方は戦争捕虜達、他方は班長達 [現場監督達] と ‘チェッカーズ (格子組)’ の間にある。危険度は高いが、一時として勝ち取る結果も大きい。数件の例: 砂糖の倉庫で働く。仕事に胃とポケットに一杯の ‘砂糖’ を隠す。最初のは大抵よいと認められるが、最後のは班長やチェッカーズにより認められない。ずうずうしいなら更に未だ ‘エプロン’ の4分の1か半分砂糖を一杯隠し、これを他の班の誰かに内緒で持ち去らせる。これは単純な事例だ。

2番目の事例: 缶詰が置いてある倉庫で働く、例えばそこから20メートル。日本人がちょっと注意をそらせたその瞬間を利用する、こっそり立ち去って缶詰1個を自分の ‘エプロン’ の中に押し込める、あけられた木箱からでも、まず未だこじ開けなければならない満杯の木箱からでも。この危険は余りに大きい。缶詰の中味は大抵最も汚い便所で美味しく消化された。

---

<sup>116</sup> オーステルハウスは門司港での彼等の作業中戦争捕虜達が余分食を集めるいろいろな方法を意味している (主に食糧袋の積荷一降ろし)。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月15日

僕は50キロだ！

へレ

宮田（福岡9）

1945年8月16日

スープは1ヶ月食べていない。僕達は飯と小麦粉の粥、或はパンと白湯。野菜は無い、葉っぱは無い。イースト菌があったら、パンは貰った、さもなければ小麦粉の粥が作られた。時々骨の積荷が中に到着したので、それから2日間ブイヨンを買ひ、後は再び飯以外何も無い。アンパスターフー [搾り出した大豆] が飯に加えられた唯一の食べ物で、時として味用に少しのカレー粉が混ぜられる。僕が夜中の任務に居た時、たまには朝7時半、アンパスの樽で豆腐工場へ取りに行く雑用を受けた。その場合報酬として日本とオランダの台所からスープが与えられ、双方2倍の相当量。こんな風で僕は朝5食分のスープで朝食を取ったことがある。大した物ではなかった、水と茹でたジャガイモの欠片、多少のアンパスターフー、だが日本人のスープには時として未だ豆腐と小魚が入っていた。彼らも野菜は無かった。最近は何か中に入ってきている。今の所多少のケティムン [キウリ]、時々テロン [茄子] 或はワルー [カボチャ]。

下方労働者達の日々の献立は：朝160グラムのパンと弁当として240グラムの飯、夜は120グラムの粥と160グラムのパン。粥と飯はそれぞれ同じ。下方と上方鉱山間の違いはパンにある。僕達は鉱山（下方で働く [者達]）から、労働後、日本の字が上に付いた2枚の正方形の木札を買ひ、各札につき160グラムのパン。上方鉱山は各札で120グラムのパン用である2枚の長方形の木札を貰う、一方では兵舎病人達が作業をしたなら日に180グラムのパン1個を貰う。病院は全くパンは貰えない；彼等はゆえにもっぱら360グラムの飯と小麦粉で生きている。[これは] 又兵舎病人達 [用] にも通用する。塩はもはや全く無い、ケデレ [大豆] も無い。僕達はまだ14日間それが飯にまぜられて食べていた。

オーステルハウス

門司（YMCAービル）

1945年8月18日

僕がもう戦争捕虜として書かない最初の文章。[...] とはいえ僕に戦争捕虜として（少なくとも

年代順に)の自分の時期を終了させて欲しい。その章は：補充食。<sup>117</sup>

3つ目の事例(これはただ最高にずうずうしい)：自分の仕事をする倉庫以外に他の倉庫へ入り込む。誰も働いていない倉庫、或は他の戦争捕虜達のグループ。

これら全部の事例後は、最も重い、つまり物をこっそり持ち込む内部禁制の仕事だ。食べたり盗むことは時に仕事上見て見ぬ振りをして認められ、収容所へ持参することは厳しく禁止。時々これが発見されると、間違いなく数日の独房入り、一方ではその者自身‘すごく’叩かれる。‘禁制袋’を見つけるその多数の発見手口には信じられないものがある。何かを隠すのに最も都合の良い場所は長方形の袋で殆ど誰でも自分の長ズボンの内部に縫い付けた。それも歩哨に発見された時、別々の禁制袋は脇の下にしっかり結わえられた。しかしながら4本のビール瓶一杯のカチャン [ピーナツ] –そして魚の油は勿論この方法で中へは持ち込めない。

M、多分君は時々頭を振ったことだろう、そして確かに今僕が後で振り返っても<sup>118</sup>(そして又その最中にいた時も)、僕は自分自身自問した：これは全て良いことだろうか？これは神様が許されるだろうか？僕は最後まで良く分からなかった。そしてそれは臆病心であった。しかしM、君には多分前もってほんの少々、これが僕達、戦争捕虜達にとって少々の余分な食糧を食べることがどんな意味を持っていたかを考えることができるだろう、人間らしい打算に従えば、その相当な厳しい時期に生き延びていく為にはそれが唯一の方法であったことを。

---

<sup>117</sup> オーステルハウスはここで1945年8月14日に彼が始めた話を続ける。

<sup>118</sup> オーステルハウスは意味する：「今戦争が終結した」。

## 仕事

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年5月29日

[ファン・ウェスト・ドウ・フェールのように、新規到着した者はまだ炭坑の仕事ではなく、湿地を埋めるための石を運んでいた。]

僕たちは日曜に休みがもらえず、ここでは10日に一度の休みで、聞くところによればその日が、炭坑の3交代制昼夜労働シフトの交代日でもある。雨が降ったので僕たちは数日間体育学校でゲームをしなければならなかった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年6月8日

今日、初めて、見学のために炭坑に入った。我々の中のリンブルグ [オランダの炭鉱地区] 出身者によれば、幹線坑道は大丈夫そうに見えるとのこと。僕たちが働くことになる脇縦坑はあまり良くない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年6月27日－7月3日

炭坑の中での仕事はどんどん重労働になってきており、多くの人達は過労状態だ。僕たちは何人かで、重労働は、たとえヤップが殴ったり蹴ったりし始めたとしても、絶対に一人でしかしてやらないことに決めた。殴られたりするの僕たちにとって多少屈辱ではあるが、エネルギーは使わずに済む。作業班のリンブルグ出身者が注意してくれる危険な仕事も、必要な補強が施されない限り僕たちは拒否することにした。ヤン・ル・コントと僕にとっては作業妨害をし、なるべくヤップたちのためにならないようにするのが僕たちの‘自尊心’を保つために必要なことなのだ。他の人達にとっては自分たちのエネルギーを消費しないようにすることのほうが大切なかもしれない。僕たちが最低限の仕事しかしない事を条件に、これ以上の詮索はやめよう。

このやり方は僕たちの中の教養のある人達からは賛同を得ているが、‘職業 [軍人]’

は〔日本人に〕蹴られる事に不服な人が多い。我々の下士官も彼の分隊がしっかり仕事をする方を望んでおり、これはそうすれば彼の日本人作業長からの覚えがめでたくなるからだ。<sup>40</sup> [...] ある夜、屋根から石がごろごろと落ちてきて、僕の頭をかすめ、手を軽く傷つけ、すんでの所で僕の足に当たるところに落ちた。毎日のご加護の祈りが聞き入れられたのだ。いつもかがまなければならぬのは、僕の痔やジフテリアによる内臓の痛みのために、ひどくつらい。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1943年7月4日

前線<sup>41</sup>でダイナマイトを爆発させるときは、最低35メートルは離れているか、脇抗に入っていないなければならない。[j.j.] ティンホーフェン [ファン・デン・ボーハルト] は、ずんぶん離れて立っていたにもかかわらず、頭に石が当たって大怪我をした。

オーステルハウス

福岡 15

1943年9月8日

ここの‘若者達’の‘生活’は、炭鉱での労働—食事—睡眠—炭鉱での労働...で成り立っている。事故は日常茶飯事だ。(ここの全て同様、炭坑も実に日本的で、作りが悪くて信頼が置けない)。

---

<sup>40</sup> ファン・ウェスト・ドゥ・フェールは後に追加している：‘時には僕らは、忌々しいヤップよりも我々自身の下士官にひどい目に遭うことがある、といえる。だが [F.J.] スポットホルスト下士官は、ヤン・ル・コントと [H.G.W.] ストルカー、ファン・ヘルダーと僕とで完璧なシステムにした妨害作業については反対する傾向にあったとはいえ、決して行き過ぎることはなかった。のちになって、[ヴィム] ドゥ・ハーンと [フランス] リヒト、それにファン・ゾンもこの‘イチバン・ジョートーナイ’、つまり‘最悪労働者’の一隊に加わることになった。もちろんこの一隊は最も力のない者たちだ。[A.G.D.] ヘンゼルや [G.H.F.] スネイダースのような、前リンブルグ炭鉱労働者たちは別の立場に立っており、我々が作業長であるアラクさん(残酷で乱暴なことが多い) [や] ゴシマさん(後には柔軟になった)のお気に入りでもある。僕たちは第一分隊の第二小隊 [炭鉱労働者隊] に属し、最初は20人居たが、病気と死亡のため12人に減った。時にはここに何人か加えてグループが大きくなるが、しかしその度にまた減っていく。(NIOD、蘭領インド日記コレクション、J.F.ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記)。

<sup>41</sup> ‘前線’は鉱石(この場合は石炭)を切り出す面のことを指す。切り羽。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年11月9-30日

炭坑では修繕班に入り、やっと初めて簡単な仕事をしている。直角にまがっている坑道を曲線でまがるように変えていて、我々は石や籠や包装材などを渡す助けをするのだ。あるイギリス人は炭坑で指を4本失った、冗談ではない。[...]

今我々が働いている新しい坑道は基本的にとっても楽で、一日中ひどく重いトロッコを押しただけでもそれほど疲れなかった。以前の‘サン・カタ’（地下三層目）で働いていた時とは大きな違いだ。他の人達にとっても同様に、あそこは空気が悪かったからあんなに疲れたのだろうと我々は言っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月1-4日

日本の作業長達が、どれほど炭坑で怠けることがあるか、信じられないくらいだ。ある時には、例えばいわゆる石炭日には仕事をするが、そのほかの日にはほとんど何もせず、よく知らなければ彼らはわざと全ての作業を妨害していると思ってしまうだろう。[...]

収容所は北側と東側に向けて拡張され、我々の休日には、そのために2時間砂掘りの仕事をさせられた。

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月4日

僕は今病棟にいますので、一日二回、[ベルナルド] アダム中尉の本の配布を手伝っている。もうすぐ、退院になった後も、炭坑に行かずに図書館で仕事に就けることを密かに願いながら。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月5-20日

炭坑では我々は赤輪（幾つかの作業班の検査官で坑道用ランプに赤い輪が付いている）から、第四分隊があまりにひどい成績なので、その第四分隊に代わって暑い坑道に行かされた！（我々は第三分隊）これは主にヘンゼル（頑健なリンブルグの元炭鉱労働者）のおかげで我々が被った、良い評判に起因する悪い結果だと思った。それならば、再び涼しい坑道に戻るために最大の努力をすることに決め、我々は一丸となってそれを実行に移した。我々は5日間、暑い、換気の悪い第三カタ〔地下三層目〕で働き―赤輪にとって残念にも―台車に7台、5台、3台、3台、7台分を生産した。彼はこれ〔お粗末な結果〕を罰しようとして、交代が下に降りてくる3時半まで待たせた。その後、我々は全く急がずに、5時には機嫌良く収容所に着いた。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1943年12月11日

僕たちは〔12月〕16日〔から〕炭坑で働くことになる、といわれている。

ヒルフマン

福岡9

1943年12月20日

12月18日初めての炭坑行き。ここしばらくは半日のみの仕事で、地上作業だけだ。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1943年12月20日

今日は僕たちの初めての炭坑労働の日だった。[...] 炭坑は興味深いものではあった。露天掘りだったが、縦坑もあるようだ。僕たちの帽子の前側にランプを付ける場所がある。ここでは全てが軍隊式だ。運営者から技術者に引き合わされ、それからまたキオツケで技術主任に引き合わされる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月21-24日

僕たちはこのシフトで、もっと寒い坑道で仕事をした。D-カタ [階] で、普通に外気の中だ。今では夜になると少し凍ることもあり、食事室に行くことができる4時半から、運動靴を履き、すねをむき出しにして炭坑に入る7時までに、点呼、警備点呼、炭坑点呼、炭坑灯取り出しなどでしょっちゅう外に立たされると、それで我々は完全に凍えてしまう。炭坑の中では、僕は手持ちの服全てを着て仕事をしており、それは毛糸の下着、裏打ちした毛糸のベスト、緑のシャツ、炭坑用コート、裏布の当たった青い運動用半ズボン、そして炭坑用長ズボンだ。炭坑に行く道は、煙草4箱で袖つきコートに仕立てさせたケープのおかげで助かっている。[...] 炭坑では、ワタナベさんと一緒に、また落ち着きを取り戻した。我々は大きく曲がったアーチ状の坑道を掃除している。そこには電気機関車が通っており、台車を押す必要がない。欠点は仕事場に行くまでに坑道を約7km自分たちで歩かなければならないことで、僕は基本的にこれだけで疲れてしまう。しかし、このシフトが始まったことは、日中シフトに残れたことと、もうあの右3カタ [第三坑道の右支道] で、怒鳴り立てる‘農夫’ [一人の日本人のあだ名] と一緒にならなくて済んだことで、埋め合わせがついている。 [...]

僕たちはクリスマス1日休みになるといわれていたが、いわゆるその休日には先ず第一に、朝煙突掃除をし (石炭の質が悪いため、毎日掃除しなければならない)、それから1時から5時までには拡張地域で土掘りをしなければならなかった。我々は今、午後シフトになっていて、定期の朝シフトの仕事は終わった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月25-31日

12月21日から25日までのシフトで、僕たちはまず最初に定期の日中シフトから午後シフトに移され、それによって暑い‘右三カタ’ [右坑道の左支線] のノボリで仕事をしなければならなくなった。一方ではこれは僕にとっては悪いことではない、炭坑の中を7km、2回歩かなくて済むからだ。僕たちは今では2時の気持ちの良い太陽の中を、胸当て付きの炭坑用の服だけを着て、この1年で一番昼間の短いときに、通りを歩いている。

このノボリは、元の入り口から25メートルの高さで水平に50メートルの長さになるはずのもの、10メートル程のところだった。腰をかがめても足を延ばして立てるような場所はなく、なぜなら高さは75cmしかないからだ。作業長は怒鳴り声と殴打で僕たちを追い立て、そばにいるリングは僕たちの力を全て出させようとする。僕たちは最初に下に降りていき、



彼は僕たちを11時まで働き続けさせ、そのためいつも僕たちが最後に出ていくのだ。[...]

いろいろなものを直すのを、僕がいかに楽しく感じるかはおかしなくらいだ。炭坑に行く前の、どうしようもない45分間を、僕は縫い物に使う事が多く、ズボンやパジャマにつぎを当てたり、ボタン付けをしたりしている。これは一種の先祖返りだ、なぜって僕の母が縫い物や刺繍をしているのをあんなによく見ていたものだから。

今や内部作業員になるのは、居心地の悪いもので、丸一日収容所の中において、土掘りその他の作業を寒風の中でしなければならない。それに、彼らには厚手のコートは配給されていない。ヤップはエレウホン<sup>42</sup> (=ノーウェア [どこでもない場所]) が書いたあの本にあるように、病気であることを悪いことをしていると思っているようだ。内部作業員、つまり軽い病気のために炭坑には入らないが、収容所内の仕事をする元気はある人達は、健康な人達よりも冷遇される。炭鉱内でも、病人は食事をする必要がない、というのは普通にいわれていることだ。ヤップの、同情心のかけらもない態度が、このような考え方に影響しているのだろう。プレウリス<sup>43</sup>のフィッシャーも収容所で屋外作業をしなければならない!

へレ

宮田 (福岡9)

1943年12月26日

僕たちは今日初めて地下で仕事をした。鉱山ランプを帽子に、電池を尻に付け、弁当をもって。そこでは2班に分かれて30分間<sup>44</sup>、空気圧掘削機が崩したかけらを台車に投げ込む仕事をした。初めてやるときは面白いが、仕事は重労働で、面白さもなくなるだろう。坑道は真っ直ぐではなくて斜め下に向かっており、僕たちはスチール・ケーブルに吊られたトロッコで下に送られる。唯一良いことは、下は暖かいことだが、しかし、良いことはそれで終わりだ。今や1日11時間仕事をしなければならない。[朝の] 8時に出て、夕方7時に戻るか、夕方8時に出て、翌朝7時に戻る。大変な重労働だ。唯一良いことは、帰って来るといつも熱い風呂が待っていることだ。

---

<sup>42</sup> ファン・ウェスト・ドゥ・フェールはここで英国の作家サムエル・バトラー(1835-1902)の書いた風刺小説エロワンErewhonを指している。「エロワン」では、主人公の羊飼ひヒグスが、危険な旅の後、山の向こうにある禁制の国、エロワンにたどり着く。この国の住人は病気を犯罪であり、「本人の責任」とみなしている。病人はそのために容赦なく罰せられ、牢屋に入れられる。エロワンでは、人々は自分自身の(不)幸に責任がある。バトラーはこの小説でビクトリア朝時代の病気に対する考え方と、「伝染病法」などの、強制的に人々を検査の対象とし、施設に収容することを可能にする法律に対する批判をしようとした。

<sup>43</sup> プレウリス (Pleuritis) は胸膜炎。

<sup>44</sup> おそらくへレは掘削班と片づけ班が30分毎に交代する事を指している。

オーステルハウス

福岡 1 5

1943 年 12 月 31 日

男達はこの頃では 2 時間余分に炭鉱で働かなければならない。例えば；

朝グループ： 起床 4 時  
整列 6 時 1 5 分  
炭鉱から帰着 夕方 5 時半か 6 時  
午後グループ： 整列 [午後] 2 時  
炭鉱から帰着 夜間 2 時半など。

溶けそうに暑いノボリ（しゃがんで、あるいは座って、ほとんど裸で仕事をしなければならない坑道）で働き、汗をかき、それで地上の厳しい寒さの中に戻る。（オーバーコートは何か訳の分からない理由によって、炭鉱に持ってこられなくなった。）[...] 10 日に 1 度は、いわゆるヤスメの日だ。文字通りに取れば休息日を意味しているが、実際には、‘シフト’の交代の日ではない。夜間グループが朝の 8 時か 9 時に戻ってくると、食事の後、直ぐに戦争捕虜の‘リクレーション’のために曹長が考え出した、あらゆるくだらない仕事に取りかかることができる。空襲警報訓練、検問、兵舎清掃等々があり、‘ヤスメする’こともあまりできず、睡眠などはもっと少なくしかできない。

ヒルフマン

福岡 1 5

1944 年 1 月 1 日

2 つの炭鉱で仕事をしている。日中グループと夜間グループ。重労働で、大体 8 時間から 9 時間続くが、休憩 1 時間、集合整列、帰宅行進を入れると、グループは大体 11 時間は収容所から出ていることになる。帰ってくる度に、[炭鉱で働いた人達は]日本式の風呂に入る。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944 年 1 月 9 日

1 月 6 日は絶望的な日 [だった]。霰や雪の中、僕たちは外の露天掘りで仕事をした。それはもう寒く、ずぶぬれだ。これは僕たちが初めて見る雪だ。きれいではあったが、もう少し寒くなければね。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年初頭

1月3日に、僕たちはノボリの第2カタ〔階〕を始めた。屋根は劣悪で、僕は補強されていない部分で石炭や石を集める（その後担いで運ぶために籠に入れる）のを拒否した。後になって、大きな石が3回、小さなものが5回落ちてきた。ヤップは僕を営倉（＝牢屋）に入れると脅したが、自分自身はその下で仕事をしようとはせず、通りかかったガス計測係りには屋根について注意した。僕に対するこの態度は、僕を殺してやるという言葉に即しているものと思う。<sup>45</sup>[...]

最近では、僕たちは全くの作業奴隷として使われている。朝4時半に点呼で、それから僕たちは食堂に行くが、そこには夜間グループがまだ座っているので、僕たちは立って食事をしなければならない。6時に収容所前で点呼、そして炭鉱のために整列だ。炭鉱ではトロッコ1台か2台（仕事をする場所の高さによる）で下っていき、それから又長々と作業場の坑道まで降りて行かなければならないことがほとんどだ。これに30分は掛かることが多い。そこで僕たちは午後5時頃まで仕事をする。5時半から6時の間に収容所で風呂に入っていると、もう食事の鐘が鳴る。もしその時急いで病気報告に行かなければならないとすると、座席を確保するには遅すぎることになる。その後7時に点呼で、その後にまだ病気報告に行く機会がある。すると8時15分前には‘自分の時間’で、腰を下ろし、8時半に、8時間の睡眠を確保するために眠りにつく。4時半から7時半までは、立って走り回り続けることになる。[...]

ノボリの仕事は、後になってみれば結構悪くない、というのも座ってすることが多いので、それほど疲れないからだ。欠点は支柱が良くないこと、掘削が難しいこと、それに前進する時のひどい姿勢だ。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年1月11-14日

[1月]12日から僕たちは夜間作業になって、整列が楽になり（夜10時はそれほど寒くない）、〔夜〕7時過ぎの食事の後、テンコ（＝〔点呼のための〕整列）まで、僕たちは食堂で座って本を読んでいる。

---

<sup>45</sup> これは日本人の作業長がファン・ウェスト・ドゥ・フェールが悪い労働者であるからという理由で、何度も彼に言ったもの。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月18日

今や僕も‘労働者’だ。<sup>46</sup>これは主にその日の寒さに立ち向かう気力を奮い起こすことを意味している。作業そのものはそれほど重労働ではない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月15日から月末まで

ノボリの屋根は、端の方はやはり危険だ。夜間グループの誰かの足には石が落ち、僕が丁度[Th.A.]セルダーベークに、あるところに座り続けないように注意したとたん、200kg はあろうかという塊が落ちてきて、注意しなかったら、彼は完全に押し潰されていただろう。数層下のヤップの働いている坑道が落盤した。何人かが死に、多くが重傷を負った。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月22日

昨日は‘休日’。これ[休日]は月に3回ある。その日に、日中グループと夜間グループが交代する。

ヘレ

宮田(福岡 9)

1944年1月24日

休日も、もう休みではなくなった。ごろつきどもは、僕たちに畑仕事をさせ、兵舎毎に2時間ずつだ。さらに、先回の休みの日は木を取りに行くのにかかり出され、それぞれが首に二束ずつ乗せて運んだ。その報酬として、一人砂糖を2塊ずつもらった。いずれにしても、10日に1度の休日の代償として手に入れたのだ。[...] 仕事は、こんなに疲弊していなければ、そんなにきつく

---

<sup>46</sup> オーステルハウスはここで、軽い半病人の役目の‘レンペイキュー’を意味している。

はない。

オーステルハウス

福岡 15

1944年1月26日

‘庭’は毎日炭鉱労働不可とされた人達が耕している。新発見がある。ケイギョウという、回復期にあるレンペイキュウ [半病人] で、炭鉱にまだ入らない人達だ。8時から5時まで、鉱山の上にある工場で仕事をする。炭鉱労働者と同量の食事がもらえる。その結果、皆がケイギョウになろうとしている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月1日

午後に、日本の司令官の命令で、収容所内の仕事、これは籠編みだが、そのために衰弱した者14人が選び出された。これはその中の何人かに取っては、大きな改善になる（心臓病、衰弱、老化）。彼らは炭鉱労働者と同じように、1日10銭もらうようにすらなっている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月末から2月始めまで

ノボリはやり終えた。屋根は時間が経つほど状態がひどくなり、ある日、全く作業長のいなかった日に、丁度重い巻き上げ機をノボリの中に引っ張りこまなければならなかった。‘赤輪’ [日本の監視官] がしょっちゅうやって来たが、僕たちがしなければならぬことを見ると、その仕事には関わりたくないらしく、早々に引き上げていった。僕たちはこのところ、頭を使って仕事をしており、巻き上げ機が入り口まで来たときに、みんなで寝てしまった。それに続く何日も、最小限の仕事をした。支柱溝に鎖を入れていたり、切り羽の掃除をしたりで、[日本人の] 作業長もどうやらやる気がなさそうだった。こういう静かな日々があると、身体も回復する。

ある日、代行で、酔っぱらったリングが来て、鎖はまだ4本に分かれて坑道に置かれているのに、僕たちに、なんとモーターを付けさせようとした。彼は鎖を、溝を通して上まで引っ張り上げるのを手伝い、僕たちは歌を唱って、ある一定の音のところと一緒に引っ張るように

した。彼はしかし、事実上ほとんど一人で鎖を引き上げていたことに気付いていなかった！彼は  
‘ちんぴら’ というあだ名だった、僕たちの前のリングの送別会に来ていたらしい。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月4日

昨日はまた坑道の一部で落盤があった（よくあることなのだが）。3人の日本人が重傷、オランダ人1人が軽傷を負った。（この間は、日本人5人がこのために亡くなった。）ヤップと‘連合軍側’との、そして連合軍同士の殴り合いは日常茶飯事だ。時々、それで牢屋にぶち込まれることもある。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月8日

またもや‘炭鉱事故者’が運び込まれてきた。[被害者は] ハコ [炭鉱の台車] とケブク [木製の支柱] に挟まれたのだ。おそらく骨盤骨折 [を起こしている]。

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月12日

全ての将校は、僕も含めて朝6時20分から7時20分前まで、掘り起こしをしなければならなかった（それ以外の人達も、その上昼間も掘り起こしや植え付けをさせられた）。無意味なことに思われるが、これは‘我々の健康促進のため’。しかし、必要もないのに隊員達を雨や寒さの中に立たせている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月10-19日

僕たちはまた‘ミギ・ヒダリ・カタ’ [右坑道の左支線] に入っており、そこでノボリを始める。労働による疲労という面では、毎日ひどく疲れた上方の坑道よりずっとましたが、しかしより危険ではある。僕たちのリングは、兵士になったので、突然いなくなった。ヤップが何も告げずに行ってしまうのは特徴的で、彼らは毎回、辞めるとは言わずにいなくなってしまう。新しいリングとはたちまち争いになり、それは変なヤップが来て僕たちに命令したとき、僕たちは食事をしていて、直ぐに跳び上がって‘ハイ’と言わなかったからだ。彼は‘ヘタイ’ [銃剣] で脅したが、僕たちは知らぬ振りをしていた。その時丁度‘二重リング’が来て、彼はこの男に、僕たちが、自分たちは日本の収容所中尉と友達だから、中尉は完全に僕たちの味方だ、といている、と告げた。それで彼は爆発し、僕たちは全員整列させられ、‘二重リング’の長いスピーチを聞かされた。彼は一気に怒鳴り散らし、ひどく興奮して顔からは汗が噴き出し、それから又僕たちが分かったかどうか、と怒鳴り、僕たちが分からないと言うと、うろたえて別の言葉を探し、僕たちが理解するとまた興奮し、といった具合だ。 [...]

2月11日から21日まで、僕はまた夜間作業になったが、まだひどく寒いので [朝] 10 [時] から [夜の] 7時まで僕たちはベッドの中にいる。脚気で兵舎病のヤン・ル・コントは、収容所内でレンペイキュウ [兵舎病] として寒さの中で仕事するよりはと、1日後には、飯が1人前もらえて暖かな炭鉱労働に行かせてくれと頼んだほどだ。

オーステルハウス

福岡 15

1944年2月29日

炭鉱情況。 [炭鉱労働者の] 話しから、こういうことであろうと思う。シドージン [監督官] やショータイチョー [炭鉱労働小隊の監督官] たちは、ひどく落ちた生産性を上げようと、追い立て、悪口雑言をわめき散らしている。痩せこけて、まだ残っている身体 (それ以上のものではない) は、もっと頑張るようにと殴られる。(韓国人は僕たちの2, 3倍の米をもらい、2倍のスープと魚を毎日もらう。)

へレ

宮田（福岡 9）

1944年3月3日

炭鉱労働は激しさを増している。増産また増産で、僕たちを互いに競争させる。最初は煙草を使  
ってだ。ある [一定] 期間中に、最もよく仕事したものは5箱もらえ、それ以外は2箱ずつ。定  
期的にもらうことは一切無い。このやり方は効果がないとわかり、今度は支払い方法に細工しよ  
うとしている。優良労働者は高額 [もらえる]。もし衰弱していて頑張れなければ、もちろんそ  
んなこともできないが。 [...]

歩ける兵舎病人達は、この収容所中に作物を植えた。収容所司令官がビビット [種]  
を提供し、今や全てはキャベツとサウイ [白菜] で覆われ、幾つかの畝はジャガイモがある。残  
りのキュウリ、トマトなどは春を待ってからだ。これを担当しなければならないのは [E.E.] バ  
ウトン中尉だ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月20日-3月12日

僕は [兵舎病で] 労働しないレンペイキュウ（内部作業員）として登録し、そのために100グ  
ラムのパンももらえないのに、僕たち全員が今日はフダン [倉庫] の掃除をしなければならなか  
った。結果的には運が良く、というのもちょっと僕のバラン [荷物] のところに行って、塩と石  
鹼を取り出したのだ！休日にはすでに何ヶ月も、ここに入ることができなかったのだ。 [...]

僕は今、司書として1日2回、1時間ずつの仕事をしており、これで100グラムの  
パンがもらえる。それ以外は沢山寝て、食事や点呼や病気報告の待ち時間の間をなるべく休息し  
ようとしている。 [...] 図書の仕事があるおかげで他の作業からは解放されて、とてもラッキーだ。

オーステルハウス

福岡 15

1944年3月14日

レンペイキュウ（最も虐げられている人種！）について。1時、食事。食堂で腕を前にして座っ  
たとたん、‘レ [ンペイキュウ] 全員集合！’ 83人の男達が最大限の遅さで‘本部’に向かう。  
その途中で、すでに11人が密かに消える。整列。‘仕事無い’も‘仕事少し’も‘仕事沢山’  
[のCATEGORYの人達] も一緒くだ。警備司令官は区別無く36人を数え、残りは‘引き取っ



で’よい。36人は門へ。不平、抗議、ヤップの怒鳴り声。石炭車が入ってくる。荷下ろし。（‘ミシ、ミシ、ナイ [まだ食事をしていません]’ ヤップは [そんなことには] お構いなしだ。）

やっと4時。[M.A.ファン] ヘッキング・コールンブランダーの葬式。<sup>47</sup> ‘別れ！急いで食事！死体が門を出るか出ないかの内に‘レ [ンペイキュウ] 全員集合’ 石炭運び！食事は重要ではないようだ。気管支炎、下痢、浮腫の人など。いったいいつまで続くのか。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡15

1944年3月13-31日

僕はスレウ [中尉] に炊事係になることが可能かどうか聞いてみた。‘料理の腕前についてはあまり保証はできないが、どんな場合も正直にやることは確実です。’と僕は彼に言った。しかし、あまりうまく行かないような気がする。<sup>48</sup>

僕のグループは9階で働きに行くらしく、そうすると今度は500段ではなく、2100段もの階段を上ったり下りたりしなければならない！どうやって僕たちがそれをやるものか、興味のあるところだ。

[数日後] [僕の娘] マリアナの誕生日 [3月13日] に始まった仕事は、幸いにも聞いていたような第9主坑道ではなかった。僕たちの小隊の他の2つの分隊が、そちらに行ったのだ。それは2時間歩いて下っていき、2時間半登り返るということだった。[...]僕たちは炭鉱内で最ものろのろと仕事をしており、そのテンポなら僕も一緒にやれる。それでも夜にはくたくただ。

ヒルフマン

福岡9

1944年3月21日

一週間前から、収容所の近くに一枚の土地と池をもらい、これはそれぞれ作付をするためと、養魚をするためだ。毎日[J.W.]ドゥ・フリースの指揮の元に数人の戦争捕虜がそこに仕事に行く。

---

<sup>47</sup> ‘健康と医療情況’の章、オーステルハウス 1944年3月14日、ファン・ウェスト・ドゥ・フェール 1944年3月13-31日の日記抜粋参照。

<sup>48</sup> ファン・ウェスト・ドゥ・フェールは、実際に炊事班に入れられなかった。‘健康と医療情況’の章、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋 1944年3月13-31日、1944年4月1-19日の文参照。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年3月22日

この間にも、彼らはずるいやり方で我々の休日を取り上げた、犬どもめ、今や全くの‘重労働者’だ。我々は7時半にここを出て、夜の7時に戻る、つまり11時間働き、12時間出かけている。点呼、食事、炭鉱、風呂、食事、点呼、就寝とびっしりと続き、それ以外はなく、全て大急ぎだ。ほとんどの人達は疲労困憊している。[...]

ここ [病院] の静けさに本当にほっとする、炭鉱のこともヤップのことも考えない。少し良くなったら、しばらく畑仕事をしなければならない。最初は1日1時間、その後はもっと長く、僕たちが炭鉱の奴隷労働と奴隷使役者たちに耐えられるようになるまで。真っ平だ！

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月11日

日本の司令官に我々の兵士達が炭鉱で、あまりにも酷使されているという苦言を呈した。病気報告での症状はもう熱や咳などではなく、脱力感と失神だ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月18日

一週間くらい前から、毎日10人から30人くらいの人達がここから列車で30分の所にある農場へ行く。そこには牛が40頭おり、畑仕事もしている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年4月1-19日

結構静かな午後作業だった、台車がいつも足りないの、僕たちの成績も3台半から6台、それでも僕にとっては、ひどく疲れて上にあがることになる。[...]

僕の誕生日 [4月5日] に、ヘンゼルが台車に飛び乗り、頭を横梁にぶつけ、半分気

を失って倒れた。その翌日、ヤン・ル・コントはかけら集めの時、石が後頭部に当たり、5分間気絶していた。アラクさんは坑道にのびている彼の上に飛びかかり、彼を引っ張り上げようとした、大げさにやっているだけだと思ったからだが、ヤンは頭の穴から血を流しながら、彼の腕に布巾のようにぶら下がっていた。しばらくして‘リング’と‘二重リング’が来た。彼らはヤンが真っ青な顔で板にもたれて座り、中空を凝然と見ているのに、ほとんど様子を見ようとしなかった。そしてリングは腹を立てて、頭に怪我をしたヤップは、そこに布を巻いて、また働き始めるのだから彼も仕事をしろ、と怒鳴った。足か腕が取れたときにだけ、ヤップは上に運ばれるのだ。怒鳴り散らしながらリングは消えていった。ヤンはそれでも座っていることができたが、我々は仕事を続けなければならず、ヤンに構ってはならなかった。作業長たちの機嫌は全くひどいもので、毎日我々は殴りつけられる。[...]

炭鉱内ではまたもや作業長達が、悪口雑言を言い、激しく殴打する。今や僕たちは6人（21人で始まった分隊のうちの！）しかおらず、仕事も軽くはならない。ある日、僕たちは他に貸し出された。3人は第4カタ〔階〕へ、後の3人は第2カタへ。僕は後者のグループで、怒鳴る作業長もおらず、しっかりした屋根のノボリで気持ちよく作業をした。2時間半の休憩さえあった。それでも収容所に帰ったときには僕は疲れ切っていた。[...]

ところで、僕たちはここでの我々の仕事と、オランダの炭鉱労働者が8時間でする仕事内容を一度比べてみた（リンブルグで働いていたヘンゼルとスネイダーの実際の経験を基にして）。〔オランダの炭坑夫は〕22の台車を石炭鉱石でいっぱいにし、加えて坑道の補強をし配管をし、レールを敷く、言い換えれば、ノボリで〔比較すれば〕1 x 3 x 25メートル〔の容積〕を砕き、片づけ、支柱補強することになる。（ということは、僕はオランダ炭坑夫の2%位をしていることになる）これにはヤップもかなうまい。白状すれば、ここでの作業補助器具がひどく遅れていて原始的なのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年4月20-30日

新しいシフトで3日間炭鉱に入り、それから下痢のため兵舎病になった。〔それで〕8時20分から11時半までと12時半から5時まで、軽い作業をしなければならなくなった。ひどく嫌なことだが、しかしそれでも炭鉱よりましだ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月21日

将校全員と〔日本の〕収容所長が、農場見学に行く。炭鉱取締役と食事。その後で、戦争捕虜の大きなグループを毎日ここで働かせる話し合いをした。<sup>49</sup>

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年4月29日

僕はもう2日間当番として医者のところでは仕事をした。昨日、ずるいやり方でそこから出されるまでは。昔看護人だった男が僕の代わりに当番になった。炊事場の仕事に就けると良いのだが。そこには空きができています。〔炊事場で働いていた〕一人が、炭坑内でヤップに売ったので炭鉱労働に送られたのだ。[...]炭鉱労働者たちは今日は何もエクストラのものをもらえずに2時間余計に仕事をしました。普通は余分に仕事をすれば、炭鉱で余分の飯をもらえる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月1-10日

今日もまた、大勢の病人が炭鉱に送られた。僕は1シフトを通じてこんなに調子よく、炭鉱から戻っても疲れが少ないことは今までになかった。これは不思議でも何でもなし、時々卵やウビ〔サツマイモ〕やオレンジを支給されているからだ。

---

<sup>49</sup> 1944年4月25日、赤十字代表団が、炭鉱主の所有であるこの農場を訪れている。赤十字社の報告書によれば、農場は収容所から炭坑用鉄道で20分ほどの所にあった。農場では、報告書によれば、大体20人ほどの戦争捕虜が仕事をし、40頭のホルスタイン牛の世話をし、牛舎の掃除をしていた。炭鉱会社では家畜を80頭に増やすことを考えていた。農場の仕事は弱っている捕虜によって行われ、赤十字報告書によれば、‘その多くはこの分野の専門家’であった。ヒルフマン医師は、これらの男達はあまり丈夫ではないし、多くは40歳を越していて一肉体労働になれていないので、炭鉱労働は重すぎると伝えた。そのため、炭鉱で仕事をしている男達も、一定期間おきに数日間は農場で仕事をする機会が与えられれば大変喜ぶだろう、と伝えた。収容所長は、20日間炭鉱で仕事をした者は皆、2、3日農場で仕事をする機会を与えられる、と赤十字代表団に語った。（‘Mededeelingen van het Nederlandsch-Indische Roode Kruis’, 1945年5月24日付け、(NIOD, IC 080243<sup>2</sup>), 4-5).

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月31日

炭鉱では9日間昼夜シフトで働き続け、10日目に‘休憩’する。この休憩日にも彼らは自由ではなく、農作業をしなければならない。リラックスする時間はない。

ヒルフマン

福岡 9

1944年6月1日

第5炭鉱の労働者達は今朝、そこで捕まった。‘ハライ’労働者たちは17時間仕事をし続けた！

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月29日－6月6日

今僕たちの分隊に残っているのは最後の組分けの12人の内4人で、元々は21人居た組だったのに！[...]

ブルハルト、ル・コントと僕で炭鉱の台車を押していた。台車が少し傾いているため、支柱にぶつかり、屋根から石や木が落ちてきた。それは一瞬の出来事だった。僕は左のこめかみを打たれ、台車から飛び離れ、僕の隣ではブルハルトが歩きながら‘ドウ・フェール、僕の指が取れた、どうしたら良いんだ、僕の指が取れた’と叫び続けた。彼の左人差し指が手のひらのすぐ近くでほとんど切り取られており、骨が斜め上に突き出していた。これは彼が台車の鉄製の縁を押さえているところに石が落ちてきたからだ。僕たちは彼の腕に包帯を巻き、指に小さな木で添え木を当て、ヘンゼルと作業長とともに、上に上がった。僕たちは炭鉱病院ではなく [H.] ラパルト医師のところに行こうとし、幸運にも丁度きたトロッコで上がることができた。

収容所ではラパルトに、治療に必要なものが無いといわれ、それで僕たちは、うめき続け、指を失ったら職業 [軍人] としてやっていけるかどうか心配し続けるブルハルトと一緒に [炭鉱病院に] 行った。病院では大変親切な看護婦に迎えられ、他のくすくす笑いをする看護婦達がしょっちゅう見に来る中で指を消毒してくれた。30分後に若い医師が来て、指は切断しなければならない、と言った。彼はブルハルトに、それでよいかと聞いた。僕たちの会話はドイツ語の筆記で行われた、声を使っては理解しがたいが、筆談ならかなりよく分かる。僕はブルハルトをブルフマン [中世の、説得力があったので有名な神父] のごとく説得し、指はすでに壊死し

て、爪床もダメで、医師は他の事をしようにも方法がない、と説明した。最後には彼は承諾せざるを得なかった。

麻酔注射は痛かったが、しばらくすると指は無感覚になった。ヤップは天然痘の予防注射をするときには皆マスクをしているが、この手術は窓は開け放しで、マスクもなく、僕たちは汚れた炭鉱服のまま励ますためにそばについて、行われた。指がきれいに切り取られ、骨は少し切られて平らに磨かれ、全て縫い閉じられるまでに45分間掛かった。それから医師は‘さて、有り難う、と言いなさい’と言い、僕たちは‘アリガト’と言った。僕もその時までにはこめかみに絆創膏を貼ってもらっていた。

収容所に戻るとブルハルトはレンペイキュー [兵舎病] に、僕は収容所内労働者になった。もう一度落ち着いて考えてみると、これだけで済んで僕はやはり感謝する。次の日、僕は頭痛のため警備に出なくてよく、目に見える炭鉱事故者はいつも丁重に扱われる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月7-14日

あの炭鉱事故で、やはりちょっとショックのようなものがあつた。炭坑に入るのがこれまで以上に嫌になり、何というか、初めて、戦争捕虜であることに対していらいらし始めている。僕も、多くの人たちと同様に、‘後どれだけこれが続くのか’と泣き言をいいそうになる。収容所労働者は、8時半から11時半と12時半 [から] 5 [時] まで仕事で、自分の時間はほとんどない。 [...]

僕たちの分隊 [作業班] で [まだ] 炭坑に行くのはヘンゼルと僕だけだ！ 全く冗談じゃない、アラク-サンは最大限に僕たちをかりたてて、11時40分から夜7時まで—35分か40分の食事時間を除いて—仕事させ、しかもそれは第1分隊から借りた2人のひ弱な男達と一緒に、台車を4台いっぱいにし、掘削し、時には坑道の補強をし、その上全ての台車を押していかなければならない。この全部のエクストラな仕事は赤十 [字社] 小包からのエクストラの食糧のためにやっている。今はこれがたくさんあって、というのもスレウ中尉はこれを [6月] 17日 (ヤップによれば、300人の新捕虜が収容所に来るという日) 前に全部使ってしまうなければならないのだ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年6月11日

この休日にも我々の兵士達は皆農場に送られる。昨夜は点呼の時に、休日にも我々に仕事をさせなければならなくて残念である、という演説があった。こういうことは今後数回しかないであろう、これはここしばらくの我々の食糧確保のために必要なことである、と。(この様な話をしじゅう聞かされる)

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月19-20日

炭坑では、しょっちゅう殴りつけ、怒鳴り、自分は寝てしまう作業長と、それ同様に寝に来る新しいリングとで、ひどい状態だ。僕たち二人と手伝い二人[別のグループからの]に対して[一日]5台の台車を要求し、そのために一時も休めない。彼らが寝ていると思ったら、僕たちはそのままの姿勢でじっとして、ランプを彼らに向けないようにし、立ったままで眠ってしまいそうになる。

ヘレ

宮田(福岡 9)

1944年6月21日

夏の始まり。僕はもう15日間も炭鉱で仕事をした。その結果：今朝の体重測定で3kg痩せ、足に湿疹ができた。湿疹が無くなるまで、明日は上炭鉱に入る。5月2日以来、ファン・オーエンと僕は上炭鉱で働き、そこで1ヶ月間続けた後、下の重労働に送られた。その結果：ひどい空腹、以前よりもひどい。上にしばらく居られるように努力してみよう。

ウェストラ

福岡 17

1944年6月27日

医療検査<sup>50</sup>に受からなかった物は皆収容所内作業となる。その人達はうまくやった。[他の人たちは] 2日間練習、そして炭鉱の中で指導を受ける。病気の者は病院に行くか、半病人として仕事無しか、あるいはアメリカ系ヤップのベネットの下で所内軽作業かだ。[...]

炭坑の主坑道は20%の傾斜で地中に下り、スヘルデトンネル<sup>51</sup>を思わせる。最初の数日は上炭坑で昼間、指示を受けた。その後は、シフト制になる。激しい仕事だ。地下の状態は思ったより良い（最初数日間の印象では）。息苦しくなるのではないかと思っていたが、そんなこともなかった。色々なことを考えてしまう。全てを書き留めるのは難しい。

ウェストラ

福岡 17

1944年6月29日

炭坑は思ったより大丈夫だ。換気は十分。風邪を引きそうなくらいだ。ヤップの上司の下で、僕たちと韓国人が働いている。

ルーへ

福岡 21

1944年6月30日

全員が11の班に分けられている。僕は第10班（セメント班）だ。班は掘り起こす人、鋸をひく人、掘削する人、セメント作り、電気技術屋などに分かれている。毎日炭坑の理論：炭鉱の構造、支柱作り、安全確保に運搬、[そして我々は] P [日本人] に技術用語「を学ぶ」。

---

<sup>50</sup> 日本に到着時点で。

<sup>51</sup> アントワープのスヘルデ河の下をくぐるトンネルのこと。当時のオランダにはマース河下のトンネルしかなかった。



ウェストラ

福岡 17

1944年7月3日

炭鉱に行くのが、今は当たり前になった。数日間で僕は慣れてしまった。屋根裏が一拳に落ちてくるなんて事はまず無いのだ。せいぜい数かけらだ。ここに居るリンブルグの炭鉱夫によれば、そんなにひどく危険ではない。ただ、保安設備はあまり整っていない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月21-7月7日

ヘンゼルは、ヤップ炊事場に任命された、彼の背中が変形して、それがひどく苦痛であるかの様にふるまったからだ。彼のやり方で正しいのだが、しかし今や作業班にいるのはル・コントと僕だけで、日本の作業長は鬼のようにになっている。誰かが病気になると、彼らが「早く死んでしまえ」と言うのはごく普通のこと、これは本気で言っているのだ。彼らは頻繁に僕を殺してやる、と繰り返してる！[...]

僕たちの分隊が、12人からいかに縮小してしまったかは注目に値する。[F.J.P.]グロスキャンプは、異動になった。駄目になってしまったのは：[H.]プリンス、セルダーベーク、ファン・ヘルダー、[N.J.A.]ファン・フルスト。仮病なのは：[J.]ボールスマ、スネイダースとヘンゼル。ブルフハルトは指1本無くしたため [働けない]。まだ病気：スホットホルスト [曹長]。残りはヤン・ル・コンテと僕。我々が炭坑に入っていく様子は、まったく哀れなコンビである。

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月4日

この頃は我々の中からより多くの人々が発電所で働かされるようになった。空襲の危険があるからか？

ルーヘ

福岡 21

1944年7月7日

63人の技術者は別グループになった。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年7月11日

炭坑労働の前練習に、僕たちは炭鉱病院や僕たちの収容所などに防空壕を造っている。僕はルーデスの聖母マリアのメダルを身につけている。僕たちは奴隷のように上半身裸で仕事をしている。[...]炭鉱の女奴隷達は太い支柱を運んでいる。

オーステルハウス

福岡 15

1944年7月11日

外見的には君の婚約者はこの収容所で良い暮らしをしているように見える。彼は朝8時半に‘4打のベルで’軽業たち[回復期の兵舎病人]と整列する。それからあの魔法の言葉‘図書館’が効力を発揮して、彼はたちまちまた引き下がる。9時には図書館にいて、9時半まで、それから午後1時半から2時まで。それ以外には彼を監視したり邪魔したりするヤップはいない。午後5時にまた何度も出てくるベルで整列するだけで、そして公式に引き下がる。炭鉱に入る機会には決して巡り会えない！僕の‘友人’のヨシカワが僕の番号を永久に炭鉱には向かない、と宣言したのだ。僕は彼に気に入られている。なぜだか僕には分からない。他の人は全員、炭鉱か収容所内の仕事をしている。そしてみんなヤップによって決められた時間通り仕事をしているかどうか、多かれ少なかれ監視されている。そしてヤップはそれから何をしているか。

1. スレウ [中尉] (僕は彼にもまた気に入られている) に頼まれてチェス大会を組織した。
2. 我々の収容所の需要と供給リストを作る。<sup>52</sup>
3. マーフンダンス、ヤン、そして [ディルク] ファン・ヘルダーの (そして時には自分自身の) 洗濯物をする。

---

<sup>52</sup> このリストには抑留者達が物々交換のために提供するものと、人々が何を求めているかの両方が書かれていた。例えば煙草と交換に万年筆、ひげ剃りと交換に詰め切りなど。オーストハウスは物々交換の仲介センターの役割を果たしていたらしい。

4. 図書館の本を補修する（これが彼の本来の仕事だが、彼は時間のあるときにだけこれをする）。
5. 読書をし、チェスをし、商売をし、トランプのペイシェンスをし、眠り、ヘールトを訪問する。
6. ヘールト、デューヴ[S.デューヴコット]と [ヤン] ヤンスンに語学を教える。
7. 毎日、朝と夕の祈りを指導する（時には罪と恥を感じながら）。
8. 点呼の後、兵舎の蠅を差し出す。<sup>53</sup>
9. そして最後に彼は、いつも兵舎にいて、自分の時間が自由に使えて、そして皆を良く知っている人でなければならない、あらゆる事をする。

ウェストラ

福岡 17

1944年7月13日

この5日間、僕のグループは朝シフトだ。僕たちは5人で、それぞれ6, 8, 15, 11そして5台の台車をいっぱいにした。僕は4人の屈強な炭鉱夫たちと一緒になので彼らに遅れを取るまいとして、少々疲れ気味だ。しかしこれからはゆっくりやることにしよう。

ルーヘ

福岡 21

1944年7月14日

今日、我々の教育期間は終わった。

ルーヘ

福岡 21

1944年7月15日

休日。10日に1度休日があり、つまり5日、15日、25日、5日、となる。

---

<sup>53</sup> 蠅の害に悩まされて、それぞれの兵舎で蠅を捕らえ、差し出すことになっていた。500匹毎にたばこを1箱貰えた。

ルーへ

福岡 21

1944年7月16日

炭鉱に入った。もう数年間使われていない古い炭鉱。崩れた場所が多く、水と泥がたくさんあり、工具も良くない、等々。[...]天井のとても低い場所が多い。

へレ

宮田（福岡 9）

1944年7月16日

明日は多分僕の最後の上炭坑の日だ。今日まで卵形石炭の所で引き延ばしてきたが、隊長が今日また一斉検査をし、僕はもう逃げられないと思う。まあいいや、そしたらまたゆっくりと地下に行こう。僕もいい時を過ごしたのだ。 [...]

僕が卵形石炭の場所で上司に英語のレッスンをする仕事を気分良くしていた時、今日の午後に、おそらくは炭坑にまた潜るために、かり出されたのだ。僕は背中に炭坑用ランプ電池のアルカリ液がかかって大きな傷になっていたためにこれだけ長く居続けることができたのだ。この傷が炎症を起こして、それ以来上炭坑にいた。

ルーへ

福岡 21

1944年7月18日

警備長の[W.]ダールマン死亡。天井の一部が彼の頭上に落ちてきたのだ。2時、僕たちの代表者による最後の別れをした。彼は焼かれた。

ルーへ

福岡 21

1944年7月20日

5人、折り重なったトロッコに挟まれた。3人が病院へ。幸いにも、思ったよりひどくなかった。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年7月22日

悔い改めた聖女、マグダレナのマリアの祭りの日に、僕たちは初めて炭坑に下りた。

ウェストラ

福岡 17

1944年7月23日

仕事では僕は頑張っている。疲れるが、何とかできる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月21-28日

今日は新規到着者たち<sup>54</sup>が初めて自分たちの分隊で炭坑に入り、もちろん突然激しく仕事をしすぎて、1分隊で30分に5台も一杯にしてしまった。僕たちは今日6人で1時間に1台だったのに！ [...]

支柱のない場所でイギリスグループが掘っていたところ、全体が落盤した。[E.G.A.]ケレナス曹長、25歳は横に避けようとして却って真下に来てしまい、即死した。他の二人は膝と足をつぶされた。ケレナスの葬式は日本の炭鉱管理者参加の下の行われ、彼らが葬式費用を払い、未亡人に400円を支払った。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年7月26日

炭鉱で死亡事故。ケレナスという、曹長で、セマランの刑事、カソリック教徒。夜に、病院の一室に花に囲まれて安置され、カソリックのミサが行われた。彼の魂の安寧のためにロザリオの祈りを捧げた。

---

<sup>54</sup> 1944年6月19日に到着したグループ。‘移送と宿泊’の章、1944年6月19-20日のファン・ウェスト・ドウ・フェールの日記抜粋参照。

オーステルハウス

福岡 15

1944年7月30日

アテル・ディース [不幸の日]。夜間シフトで炭鉱事故があった。一人死亡（ケレナス曹長、  
‘シャム人’<sup>55</sup>）二人重傷、二人軽傷。（1トンの粘板岩が落ちてきたら、最強の男でもつぶされる）これは炭鉱事故二人目の死亡者だ！ヤップたちによれば、彼は栄誉の死を遂げたのだ！体裁良く書かれた‘敬意の明かし’と遺族への400円が、我らの敵が炭鉱で我々がくたばるのにどれだけ満足しているかを示している。‘風が吹き抜けていくように、彼女はもう居ない、彼女の場所も、彼女をもう知らない’（そして2日後にはここの人たちも同様だ、ここでは人間がひどく、ひどく冷たくなるのだ）。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年7月30日

僕は仕事場で気分が悪くなった。丁度オダセの日、あるいは生産日で、全力で働く日だ。オダセは1日14時間労働を意味する。朝7時半に出て、夜8時半かもっと遅くに戻る。くたくただ。その日、僕たちはそれほどきつくなかった。5人で15台の石炭車を一杯にする。つまり、切り崩し、積み込み、押していく。1台で30分の仕事だ。一人当たり3個のおにぎりが褒美だ。おにぎりとは何も付いていないご飯を丸く握り、通常ロバック [大根] 一切れか塩梅干しなどが入っている。ヤップ達も戦争捕虜も同量もらう。僕にとってはまたこれが [地中] 炭鉱の最初の日だ。次の日はまた‘コガイ’ [上炭坑] の卵形石炭のところ仕事で、そこでも同じ事が起こった。1時半に僕は気分が悪くなり、夜には兵舎病になる。まあまあだ、これより早くなることはないのだから。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月5-10日

炭鉱ではいまだに作業長が怒鳴ったり、殴ったりを継続的にしている。これは、どれだけ僕たちが怠けようとしているとしても、比較すれば成績が向上しているのにも関わらずだ。彼らが怒鳴

---

<sup>55</sup> E.G.A.ケレナス曹長は1944年6月にタイ（シャム）から日本に移送された戦争捕虜グループの一員だった。

るのも、まったく訳のないことではない。僕たちの分隊は作業妨害を芸術の域にまで高めるのに成功しているからだ。僕たちは、最高どれだけのことができるかの、決して見せはしない。少し重い石は一人で持ち上げることは‘できない’ので、そういう事は他の人と一緒にやり、その人は呼ばなければならず、呼ばれた人はそこまで歩いてこななければならない。この全てには時間がかかり、我々の成績を圧迫しているのだ（そしてそれを見ていなければならないヤップの血圧を上げる）。

ルーヘ

福岡 21

1944年8月10日

工兵隊の [K] ファン・ブルゴンニャ曹長死亡。‘ハコ’ [トロッコ] と天井の間に頭を挟まれたのだ。今日の夜、警備に入るため、僕たちが丁度2つ目の‘マヌキ’ [排水ポンプ] を通り過ぎたとき、それが倒壊してしまった。第4坑道のポンプ故障。坑道の下の方に大量の水。仕事が終わってから空襲警報が有り、そのためにやっと4時半になって宿舎に帰った。

我々のシフト

日中グループ	集合	05.40	帰還	17.00時
午後グループ		13.40		01.00時
夜グループ		21.40		09.00時

つまり我々は1日12時間労働だ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月16日

今日は炭鉱で死亡事故があり、これは坂道で重いフカン [換気パイプ] を転がし落とすというヤップの愚行の結果、オーストラリア人のトロッターが殺されたのだ。

オーステルハウス

福岡 15

1944年8月16日

アター・ディース [不幸の日] 我々の友人のトロッター、私が戦争捕虜として出会った中で最も

気高いオーストラリア人の一人が、炭鉱での仕事の犠牲者として逝ってしまった！‘第二リング’の間違いのせいで、2つのフカン（空気用パイプ）の間で、文字どおり砕かれてしまった。また一人死亡！この終わりのない列は何を意味するのか、僕たちの証人として立ち現れ、世界が落ち込んだ戦争地獄に対する無力の非難者としてそこに立つ者たち！これはヤップの400円と綺麗な言葉の並べられた綺麗な紙と、重々しい感じのする葬儀のほかに、一体何を意味するのか。1日、せいぜい2日間、またもや一人死んでしまったことを思い、そしてまた時を過ごし、7日後には‘花が咲いていた場所’も覚えていないなんてことが、我々の人生にいったい何の意味があるのか！

ウェストラ

福岡 17

1944年8月28日

[僕の相棒の] コンは最初の‘サイタン’日 [炭鉱労働の日] に指の骨を折り、そこら中に擦り傷を負った。もっとひどいことにならなくて良かった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡15

1944年8月26-30日

スホットホルストは日本人にゴマをするため、危険な場所に自ら石炭を取りにいった。100kgの石が落ちてきて、彼は一賢くと言うより偶然にも一横に跳んで避けた。この良い授業の代金を、彼はすねの傷と一望むらくは一驚愕で支払った。次の日は坑道の中で大きな落盤があり、これは我々は何日も前から予想していたのだがヤップは時間の無駄使いになると言って何もしなかったのだ。その危険な場所で、僕たちは互いにくっつき合うようにして後片づけをさせられた。食事に行くとなると、使っていた籠はその場が危険すぎるから置いておいてはいけないというのだ！

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月31日

ヤスメの日 [休日] は皿洗い仕事をし、僕たちの分隊は2人しかいないので、食事は腹一杯食べ



た。不思議なのは緊張した胃や内蔵に痛みはあっても、空腹に、少なくとも食べたい気持ちには、なることだ。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年9月1-4日

新規到着者<sup>56</sup>の8人が僕たちの坑道で働きに来るといふ、祝うべきニュースだ。最初の共同労働日は眼の覚めるような日だった。初めて僕たちは、他の多くの人たち同様に、[仕事の後で]まるでこれから炭鉱に入るかのように生き生きと帰ってきた。

ルーへ

福岡 21

1944年9月3日

2番目のマヌキ [排水ポンプ] で火事があり、天井の一部が落盤した。トンネルの中の上に穴を開け、爆破して、トンネルの後方に広がった (支柱の横木) 火を消そうとした。原因はコンプレッサーの破裂。もう何度も閉鎖機能が動かないと報告していたのに。

へレ

宮田 (福岡 9)

1944年9月3日

また夜中じゅう仕事をした。昨日 [の夜] 7時半にドアを出て、今朝7時半に戻ってきた。おにぎりを2つと紙巻きたばこを3本もらい、台車を90台 [一杯に] した。オダセ [生産日] 今日は本当は休日なのだが、何にもならない、疲れすぎていて目を開けるのも難儀だ。これで明日の朝はまた楽しく仕事を始めなければならないのだ。炭鉱仕事は最近まあまあ。僕は慣れ始めている。[...]戦争捕虜の役をするのも慣れてきた、と言うべきだろう。炭鉱仕事でいいのは、時間が矢のように過ぎていくことだ。あっという間にまた一月が過ぎていき、この時にも終わりがあり、それに近づいていると思うと、ああ、なんとかなる。

---

<sup>56</sup> この章 1944年7月21-28日、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

ルーへ

福岡 21

1944年9月9日

坑道の一部は崩れ続けている。掘削係は毎日水に浸かっている。ポンプはまだ直っていない。炭坑は今もこれからも危険だ。

へレ

宮田（福岡 9）

1944年9月17日

月末に200人の増員がある。そのために収容所は3つの新しい大兵舎を増築する。これを手伝うのは兵舎病人の仕事だ。一朝に300の瓦を、坂道を運びあげる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年9月17-18日

僕たちが今朝8時に炭坑から上がってくると、台風の目がすぐ近くを通ったために地上は荒れ果てていた。全ては傾いているか、壊れていた。窓ガラスは破れ、発電所は機能を停止し（炭鉱内のトロッコは動かず、収容所でもパンは不可能だ）、その上、海が襲ったかのような水が、空から落ちてきていた。収容所までの道で僕たちはずぶ濡れになり、風に向かって歩くのはほとんど不可能で、しょっちゅう柱や木に掴まって呼吸を整えなければならなかった。午後になって、炭坑は仕事を中止し、その日はヤスメの日〔休日〕となり、翌日は午後シフトに入ることになり、それが14日間続く。交代の時、新参者の分隊は、再び独自の坑道で仕事をし、[H.]クアードグラスの第8分隊が僕たちを手伝いに来ることが分かった。掘削は空気が悪いためにひどく遅く、毎日2時間半も掛かる。幸いにも僕たちは3人のグループで3日に一度に分けることができる。

へレ

宮田（福岡 9）

1944年9月30日

〔へレは臀部のねぶたのため兵舎病になっていた〕

収容所内の仕事は重労働ではない。この2日間、僕はウサギ用の草刈りをし、その時には最低1時間は、屋外の、水田の間の草地で気持ちよく日光浴をする。これ[兵舎病でいること]はすぐに終わってしまうと思う。2つのねぶたも治りかけている。膝にもでき始めている。これが進めば、[10月]15日まではまた兵舎病でいられる。兵舎病では稼ぎがとて少ないことだけが残念で、仕事をして1日10セントにしかない。

オーステルハウス

福岡 15

1944年10月3日

雨が降っている。収容所労働者たちは雨が止んだらすぐにでも‘丘で’仕事をするために、食堂で待っている。そう、僕も今やただの収容所労働者なのだ。僕はいわば、自分の窓に石を投げて壊したのだ。ほぼ1週間前、‘あの下士官’が、[提出した]ハエの代価の紙巻きタバコを払うために僕の所に来た。朝の9時[だった]。[しかし]彼が僕を見つけたのは図書館ではなくて僕の部屋だった。そしてそれは起こった。伝統的鉄拳制裁も、もちろん含まれていて、その後すぐに、嵐と雨で崩れていた(なんと安心なことだ!)塹壕造りの仕事に行かされた。午後にはスレウ[中尉]から、僕はすぐにでも、あの下士官によれば死んでしまっても何の問題もなく、炭坑に入ることになったと知らされた。これはしかし後になってましになり、それは最後には炭鉱ケイギョウ<sup>57</sup>に変わり、それがまた恒常的収容所労働に変えられた(スープも皿に入れて給仕されてしまえば、熱いままで食べられることは決してないのだ!)。さらに僕の‘友人’のヨシカワが多分口添えしてくれたのだろう。

嵐に関して言えば、なぜなのか原因は不明だが[...],炭鉱内の高圧電源が壊れ、午後のグループも夜のグループも炭鉱に入れなかったのに、昼間のグループは定時に帰ってきた。先の2つのグループはもちろん喝采を叫んだ。しかし夜になるまではその日がどうなるか分からないものだ。この数時間の儲けは、ヤップにすぐに公式休日宣言され、‘恒常的労働者’と収容所労働者はこの後20日間、休み無しで働くことになったのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年10月4日

これで終わった朝シフトだと、朝4時に点呼で食事、点呼、炭鉱内労働、宿舎で風呂、兵舎内雑

---

<sup>57</sup> 炭鉱内の軽作業。

務、食事、30分間読書、点呼、30分間雑談してベッドにはいる。時間はすぐに過ぎてしまう。炭鉱内では僕たちはまだノボリにいて、[予定の] 115メートルの内の80メートルの所にいる。8人での仕事は軽く、フランス・リフトとヤン・ル・コントとで気分良く中心グループを作っている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年10月10日

この頃はまた10日に1度休日がある。その前2日間は‘オダセ’で、つまり(=増産)14時間から17時間の特別長時間労働だ！

ヘレ

宮田(福岡 9)

1944年10月15日

雑用探しにいった、これは炊事場の雑用で、エクストラ[食糧]のためだ。僕はまたこれで2日間炭鉱に入っており、夜間シフトで、昼間寝る。最初の2日間は昼間寝つけないので、朝には米をつぶすなどの炊事場の雑用をする。夜間シフトだと昼の12時には食事が無く、夜12時に食べるのだ。[...]

僕たちは今日、また危ういところを免れた。‘ハライ’に向かう坑道が崩れた。上のもう一つの坑道はすでに完全にふさがっていて、ネズミの通るような穴をのぞいて、後は実質的に2方向とも閉じこめられてしまった。その穴を這って出てきた、さもないと宿舎に帰れなかっただろう。炭鉱労働は思ったよりずっと良い。僕たちの所には新上司が来て、前のと比べるとずっと柔軟性がある、もちろん日本人にしては、という意味だが。

ルーへ

福岡 21

1944年10月18日

2番目のマヌキ「排水ポンプ」はまた全力稼働している。<sup>58</sup>修繕に出されていたコンプレッサー

---

<sup>58</sup> この章のルーへの日記抜粋、1944年9月3日と9月9日分参照。

が10月10日から戻ってきたのだ。ポンプ類もよくなった。この頃はモーター類にもよく気を付けている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年10月21日-11月10日

スホットホルストの目に石が当たり、角膜に傷が付いて治療を受けている。今や彼は収容所内作業員だ。ファン・ローンは手に炎症を起こした。ドウ・ハーンは疲れ切って熱を出し、病室で休んでいる。我々のノボリは100メートルの長さで息詰まりそうに熱い。[...]

炭鉱内では右坑道の中でノボリを造る作業をしており、崩れてしまって韓国人達が先に進めなかったところだ。非常に危険だ。毎日大きな塊が落ちてくる。数日間は‘リング’によって使用禁止になっていて、僕たちは左坑道で仕事をした。作業長の怒鳴り声や殴打がまたひどくなった。

ルーヘ

福岡 21

1944年10月31日

[L.]ドロッサエルス下士官は今朝大きな怪我のため死亡、2時半。‘ハコ’ [トロッコ] [...]のケーブルが切れて天井下のワク [支柱] を引き抜き、天井が崩れ落ちたのだ。一緒に仕事をしていたP [日本人] も死んだ。

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1944年11月5日

可愛い人よ、炭鉱にはいる前に数行書こう。この1ヶ月間は静かだった。炭鉱労働はきつなくなり、しっかりやり終えることができた。2回のオダセの日 (増産日) もうまく行った。12時間労働後も、それほど疲れてはいなかった。その後のおにぎりも結構うまく、ただ2日目の僕のおにぎりは小さなめではあったが。

ヒルフマン

福岡 9

1944年11月15日

25人の将校が〔収容所に〕来て、収容所内に‘開墾’〔畑〕を耕す特別任務を負うことになるという通達があった。それまでの間、現在いる将校達〔Th.〕パウ大尉と僕を除いてが、8時から〔午後〕4時まで畑仕事をする（そのために特別食ももらうことなく）。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年11月11-20日

僕たちはノボリで怖い日々を送ったが、今は亀裂の部分が終わったため、危険の少ない部分にやってきました、ただし気を付けるに越したことはないのだが。

死亡したのは[E.J.]クラーで、トロッコの反対側から降りようとして大腿部を引き裂かれた。彼は6週間とても苦しんだ。分隊の一員として、[P.]ケスラーが増員されて来た。

ヒルフマン

福岡 9

1944年11月20日

フィル・ドウ・ブルス、281番は、炭鉱事故に遭い、左腕を骨折した。上腕を一カ所、下腕を数カ所、ラディウス〔とう骨〕とウルナ〔尺骨〕に数カ所。日本の病院に送られ、添え木をあてられた。ヒュメラス〔上腕骨〕の骨折はどれも発見されなかったようで、下腕しか添え木をしていなかった。上腕は上体に縛りつけてあったが、骨の場所はずれていた。下腕は2枚の木製の添え木をあて、包帯を巻かずに肌に直接つけてあった。我々は線型添え木から支え添え木に変え、上腕や下腕に多少は引っ張りの効果が出るようにした。<sup>59</sup>

---

<sup>59</sup> フィル・ドウ・ブルスはバイオリニストで、‘ステーガイガー’であり、小弦楽団の団長として蘭領東インドで成功していた人であった。骨折した腕はうまく治癒しなかった。戦後、彼はオーストラリアで手術を受けた。(Hilfman 92, 106)

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年11月23日

また兵舎病になり、取り合えず〔11月〕26日までだ。石が足に落ちてきて、しばらくは歩けない。僕は働きに行きたいと切に思っていて、というのも炭鉱労働者は米を100グラム余計にもらえるからだ。いつも米が余計にもらえるときにはヘレは兵舎病だ。まあ、これが長引かなければいいが。もうかなり寒くなったが炭鉱の中は暖かく、ハライにはもう雨も降らない、ここの外は陰惨な天候なのに。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年11月21-26日

今日は休日ではなく、1つのシフトを挟んで2つのシフトで仕事をした。僕たちは〔朝〕6時に夜間シフトから帰ってきて、そしてまた1時半には午後シフトに出たのだ。ちゃんとした食事、150グラムの米と400グラムのウビ〔サツマイモ〕をもらい、その埋め合わせになった。ただ、ひどく寒かった。我々はまだノボリで仕事をしており、事故のない1日1日が神の御慈悲としか思えない。

一昨日は切り羽の半分を掘ればよかった。僕は右側の掘っていない切り羽を通して粘土の詰め物を前に運んでいて、丁度通り過ぎたときにあの地層の半分が落ちてきた！その少し後には、僕が土出しのために立っていた場所に数百キロのものが落ちてきた。こんな風に毎日が過ぎていき、僕はできるだけ賛美歌の23番とともに生きるようにしている。‘*Though I walk through the valley of the shadow of death, I shall fear no evil for Thou art with me. Thou staff and Thy rod they comfort me.*〔たとえ私は死の陰の谷を歩むとも、災いを恐れませんが、あなたが私と共におられるからです。あなたの鞭と、あなたの杖は私を慰めます。〕’僕は‘ヘビー・ケア’を書き写して、暗記した。<sup>60</sup>

---

<sup>60</sup> この歌詞は次のようなものである：愛しき神よ、あなたの全能の手が私の地上の運命を導くであろう。全てはあなたの掟に従うことを知らぬ人々には、私がつと不幸に見えたとしても。従順に私はあなたのご意向を受け入れるでしょう。あなたに祈りつつ、しかし私によって誰も傷つけられる人がいないようにしてください。神よ、あなたが全てを知っているにしても、私はそれを理解するには若すぎます。旅の終わりまでの紆余曲折の道のりに、存在する中で最も重い罪を犯し、私の兄弟を海に突き落とすことを恐れます。（*The Catholic Anthology*, Mc Millan Co. - New Yorkの中のColonel O'Rordian (1874) 作、‘Care is heavy’）  
Dear God, though Thy all-powerful hand  
Should so direct my earthly fate  
That I may seem unfortunate  
To them who do not understand  
That all things follow Thy decree,  
Staunchly I'll bear whate'er 's Thy will

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月3-4日

寒さのために、僕たちは今や暖かな炭鉱に入るために前室を通るとほっとする。僕たちは右支線第4坑道で働いている。空気が悪く、そのためにすぐに精気をなくし、動く毎に考え直さなければならぬ。そのかわり、あのひどく危険な右支線第三坑道のノボリは韓国人に開発させるために修復して提供したので、僕たちは働く必要がなくなった。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年12月5日

ベルフとワグナーは夜間シフトの時、炭鉱でつぶされるのを逃れた。どのように明らかなご加護の下でも、死を逃れることができないというのか。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月8-16日

体重測定で僕は1.5kg太って今や62.5kgになったことが分かった。これは[僕たちが今仕事をしている]場所のせいもあって、右支線の第4坑道ではそれほど汗をかかなくなったからだ。そして水平なところで仕事をしている、これはノボリよりも安全だ。僕たちがあそこで事故に遭わずにきたのは奇跡的だ。アショシマ-さんはまだ僕たちと仕事をしていて、あの神経質で一日中細かく監視しているリングに良い影響を与えている。

---

Praying Thee but to grant me still  
That none shall come to harm through me;  
For, God, although Thou knowest all,  
I am too young to comprehend  
The windings to my journey's end;  
I fear upon my road to fall  
In the worst sin of all that be  
And thrust my brother in the sea.



ヒルフマン

福岡 9

1944年12月11日

一昨日 [フュージャリア連隊歩兵、W.A.] グルリッツ、[収容所番号] 494、[炭鉱の中で] 挟まれた。重度の骨盤骨折と内出血。日本の病院に入院。そこで輸血（我々の自前の人々から）。最初のショックの後で、目に見えて改善。[下士官のR.] スタムを看護人として後に残した。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月17日

[夕方] 8時15分前に死亡。W.A.グルリッツ[...]上記の炭鉱事故のため。（オス・イリウム [腸骨] とオス・イスキウム [座骨] 左側の骨折、内出血。肛門出血。繰り返し輸血。ネスローズ [細胞壊死] とペリネウム [会陰部] のデマルカシー [壊疽]。）これで20人目の死亡者だ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月18日

日本人出席の、グルリッツの葬式。遺体は安置され、我々の仲間は四角く取り囲み、日本の責任者と日本の兵隊。日本の責任者達は、一人一人棺に向かって頭を下げに来た。理由：彼の死の原因となった炭鉱事故のため。これは起こってはいけないことらしい。だから病院でもグルリッツを助けるためにあれだけの努力をしたのだ。それでもあのような原始的で不器用な治療で、大きな成功は期待できないのだが。ひどいショック状態の患者の回りに10人もの叫び散らす看護婦や介助人。激しい痛みにも関わらず、‘心臓衰弱’のためにモルヒネは使えなかった。（グルリッツは胸の痛みを訴えていた、おそらくは打撲のため）。ひどくお粗末な輸血、硬いベッドにエアークッションもなく。西洋人にしてはそれほど大きくもない(1.76cm)男にも小さすぎるベッド。セントラルヒーティングではあるが、欠けた窓ガラスときちんと閉まらない扉。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月17-23日

我々の収容所のシャムグループの一人、[E.V.]ドウ・ヴィットはケーブルが切れて台車に挟まれ、即死した。[...] [12月] 19日にも死亡事故があり、ハコ [トロッコ] がはずれてシャムグループの[J.]ヒューズを殺した。

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1944年12月20日

昨日はタイから来た新しい若者<sup>61</sup>が初めての炭鉱事故で死亡した。内臓打撲。僕は彼に 100ccの血を分けてやった。事故直後に4人の若者が輸血用の血液を提供させられた。大げさにヤップたちによって葬式が行われた。全ての炭鉱責任者達が盛装して列席した。

今日は5日間にわたる、夕方7時から朝の9時半までの残業の最後の日だ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月21日

今日の [午後] 1時半、第2炭鉱で、石炭車に轢かれてインパル、アレキサンダー・ペトラスが突然の死を遂げた。[...]これで21人目の死亡者だ。死因：コンチュシオ・セレブリ [脳細胞損傷] に加えて、フラクチュラ・カピティス [頭蓋骨骨折]。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月22日

今日、インパルはグルリッツ同様のやり方で埋葬された。(12月18日を見よ)

---

<sup>61</sup> おそらくヘレはここでグルリッツを意味しており、ヒルフマンによれば12月17日にすでに死亡している。グルリッツは1944年6月にシャムから来たグループに属していたようである。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年12月25日

月末に炊事場から7人が出され、その代わりに弱っている人達が入る。僕にはチャンスはない、まだ十分に弱っていない。そうでなかったら最高の機会だっただろうに。一度そうなったら、そこから出るのは難しい。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月24日-1945年1月始め

僕たちは1月2日まで、Dカタ [階] の寒い坑道で仕事だ。2日目に、我々の後できたイギリス人がひどい事故に遭い、僕が一度はパンと米とを交換しようとしていたアダムスを含めた2人が、落ちてきた石によって殺された。これは2メートルの高さの炭層を必死になって採掘しようとして支柱をしっかりとしなかったためだ。

翌日にはイギリス人の一人の背中に石が当たって両足が麻痺し、もう一人は足に石が落ちた。大晦日にそこに戻って仕事をするのは心臓が縮む思いだった、そこは今や4、5メートルの高さの天井下で、しかも最後の支柱から4、5メートルはみ出したところなのだ。僕たちはそこで第2小隊と共に、石炭を片づけなければならなかった。4人交代でかき集め、つまり80分に1度、20分間危険ゾーンに居ることになる。[支柱から] 5メートル以上離れたとき、僕たちは作業を拒否し、すると作業長とリングは自分たちがその下に立ち、僕たちは抗議しながらも働くことにした。これは我々の基本方針にもとるものだが、時には妥協も必要だ。早めの10時にもう上に行ったときには嬉しかった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月4日

我々は皆一同に、日本人の働き方に関して意見が一致している。走っているか止まっているかのどちらかだが、止まっている方が多い。働くときにはすごい勢いで熱心に仕事し、我々の感覚ではついていけない。しかしその直後には突然弛緩し、横になって寝てしまう。炭鉱の中を見回せば、至る所で日本人が寝ている。その結果として、我々の仲間も（少なくともある一部の部門では）何時間も眠ることができる。[...]

1月1日から、炭鉱労働時間がひどく短くなった。日中グループは8時に出ていき、  
[夕方] 5時か6時にはまた帰ってくる。夜間グループも同様だ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年1月

[1月]1日に、僕たちを支えのない天井の下で働かせるリングに対して苦情の申し立てをした。  
しかし残念ながら、彼がその責任をとるために呼び出される時には、彼はすでに他の分隊に異動  
になっていた。偶然か? [...]

[1月]10日に最後の台車とともにひきあげていたとき、僕は前で引っ張っていて、  
小石の多い狭い部分に先に入っていった。一杯に積まれた台車が僕を追い越していき、僕のふく  
らはぎに2回当たり、そのために僕は横に跳んで避けて補助支柱と通り過ぎる台車の間に入って  
しまい、しぼり機にかかったようになってしまった。僕は喉を振り絞るようなひどい叫び声をあ  
げたらしく、一回転して地面に座り込み、為すすべもなくあえぎながら、しかし怪我はしていな  
かった。最初に僕の脳裏に浮かんだのは‘これは神が僕をひどい出来事からお守り下さったのだ、  
補助支柱は通常レールのすぐ近くに立っていて、通り過ぎる台車との間には手も入れられない位  
なのだから!’ 夜に僕は小隊の人達に紙巻きタバコを振る舞った、これは僕や他の人達にとって  
最も祝い事を感じを与えるもので、スラムタン [宗教的な感謝の食事] のようなものだ。

ルーへ

福岡 21

1945年1月10日

炭鉱に韓国人が多く来た。15歳から18歳の若者が沢山いる。全ての高等教育は初等教育より  
も大変で、閉鎖された。ここでは12歳から14歳の子供達も大勢仕事をしている。あらゆる事  
が、炭鉱が生産のための準備をしていることを示している。[...]炭坑ではまだ小さな事故が起こ  
り続けている。ほとんどはハコ [トロッコ] の事故だ。

ウェストラ

福岡 17

1945年2月6日

僕は活力があって健康だ。仕事はやればできる。小さな石のトンネルで事故に遭いそうになった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年1月27日-2月16日

スホットホルストが病気になり、僕たちはまた5人 [のグループ] で仕事をしているが、作業長達<sup>62</sup>の態度がましなので、仕事もずっとやりやすい。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年2月17-24日

僕たちは3夜、オーバーコートを着て第二トロッコの荷下ろし場で働いたが、1時間仕事をして、その後は寝ていた。楽賃仕事だ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年2月25-28日

日本の炊事場で仕事をしていたヘンゼルは急にまた炭鉱に入ることになり、僕たちの分隊に入れられた。彼がいてもあまり役には立たない、というのも彼は台車を押すか籠の受け渡しをするかしかできないからだ。彼は背中故障のためにヤップから証明書を受けている。もちろん偽装で、彼が炊事場で働いていたときには、あれこれ持ち上げられないなどとは決して言わなかったはずだ。

---

<sup>62</sup> ‘日本人の収容者に対する扱い’の章、1945年1月19日—2月16日のファン・ウェスト・ドウ・フェールの日記抜粋参照。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年3月3日

炭鉱の中も落ち着いてきた。第5炭鉱全部がこのすぐ近くにある小さな第8炭鉱に移された。ひどく激しく仕事する必要はなく、ただし最近は何も怠け者で仕事をしないと苦情を言われる。もちろんこれは反対の極にある。いずれにしてもここでは殴られることはない。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月4日

長い、たっぷり12時から12時のシフトが終わった。水の中の仕事で死ぬほど疲れる。[...]コニーも良好だ。彼は幸いにも長壁<sup>63</sup>から数日間離れた。梁を乾かし、長壁の予備掘削をしている。[J.Chr.]サナーは石が崩れ落ちてきて死んだ。幸いにも即死だった。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月7日

今日はサナーが死んだところで仕事をした。僕は恐くて泣きそうになった、それくらい危険で気味の悪いところだ。僕も石炭の層が背中に当たりそうになった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年3月1-7日

今日僕は3ヶ月間休みなく仕事をしたので、褒美にカラシの粉を一箱もらった。注意しておくが、これは僕の功績ではない、侮辱されたように感じるくらいだ。弱って気分が悪くなくても休みをくれなかったのはヤップの方なのだ。しかしこれで僕は—ブルフハルトが指をなくした時に屋根から落ちてきた木のために目に青あざができて5日間休んだ時を除いて—9ヶ月間継続して炭

---

<sup>63</sup> おそらく、鉱石を採掘する切り羽のこと。

鉦で仕事をしてきたのだ。感謝すべき事実であろう。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年3月8-12日

僕たちは第9カタ[階]に仕事をしに行く。[...]第9カタは上方へ1時間半登って行くところで、つまり、帰りは遅くなるし、行きも早く出なければならない。我々の作業長は、我々よりよく‘作業妨害’をしていて、というのもブレーキ傾斜<sup>64</sup>の所から造らなければならない新しい坑道は石に全て亀裂が入っていてとても危険だからだ。1週間で僕たちは支えを1つ作り、石炭車を3台、石を1台詰めた。それでも、いかに軽い仕事でも危険な仕事は最も嫌いだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月30日

僕はかなり良くなってきて<sup>65</sup>、もう少ししたら軽作業者（タール作業者）として第二シフトと一緒に行くだろう。天気はこの頃素晴らしい。これまでは収容所内の仕事を少しして、太陽の下でいい気持ちだった。こうして地上で仕事をしていると初めて、地下で何を見失っているかが分かる。早くこの全てが終わってくれたら！

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年4月1日

炭鉦内で、聖なる守護天使のご加護を受けた。6人で空の石炭車に乗り、一杯に積んだ台車がその後が続いて上に向かっていった。一杯に積んだ車が脱線し、長く、狭く、天井が低く、急な坑道の中にはベルも綱もなかった。<sup>66</sup>数百メートル前に引きずられてから、上のガタガタ機械は働かなくなった。それが僕たちにとっては幸いだった。

<sup>64</sup> ブレーキ傾斜は炭鉦の中で2つの階を結ぶ道。

<sup>65</sup> ウェストラは耳が痛んで聞こえなくなったため炭鉦に入らなくてもよくなっていた。‘健康と医療情況’の章、1945年3月21と26日のウェストラの日記からの抜粋参照。

<sup>66</sup> そのようなベルや綱を使ってレールの先にいる巻き上げ機操作手に信号を送り、トロッコを止めさせることができた。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年4月19日

僕たちは現在炭鉱の中で最も危険な場所で仕事をしている。僕たちが働く部署は大きなねずみ取りだ。70人から80人の男達が毎日そこに仕事に行き、ヤップは一人石炭車一台を要求する。長い、激しい労働で、極端に危険だ。ここで仕事をしていると、すぐ隣が落盤する。炭鉱奴隷になった気分だ。前はここに韓国人が使われていた。前夜は丁度支柱を過ぎて、1秒したら天井から数トンの石が落ちてきた。これを‘難逃れ’と呼ぶ。数週間前には前壁が思いがけなく崩れ落ちた。危うく後ろに跳び下がったが、僕が持っていたスコップは握りの部分まで石炭に埋もれてしまった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年4月12-21日

我々の最後のシフトでは幸いあまり多くをしなかった。毎日なにか大量生産を阻むことが起きた。時々第2小隊と一緒に石炭生産の仕事をし、その場合は上でおにぎりをもたらえるはずなのだが、2回は知らん顔をされた。

ヤップは全く何をするか分からない、次のようなこともある。僕たちが炭鉱に入るときには誰かが一交代で一ひどく長く鉛のように重い‘ハッパセン’（＝発砲線）を持っていかねければならない！これは収容所番号の順番で回ってくるのでいつ自分がその番になるかは分かっている。確かに重労働で、特に上に登って帰っていくときには大変だ。ダイナマイト用の穴の開けられた壁の爆破は、その線を使って、切り羽のそばがきれいに掃除され、他に仕事がないときに行われる。その仕事は発砲<sup>67</sup>の後に、崩れた石や石炭を片づけ、支柱を立てることだ。

ある日、穴が開けられ、導火線が設置され、アラク-さんは‘ニヒャク・ハチジュウ・ロク’（＝286、つまり僕だ）‘ハッパセンヲモッテコイ（発砲線を持ってこい）’と叫んだ。その時、僕は仕事場から1時間半歩いたところにある入り口に、それを忘れてきたことに気付いた、つまり、持って帰るにも1時間半かかるのだ！僕はひどく殴打される（理由あって）ことを覚悟した。アラク-さんは吹き出して、言った。‘なんて馬鹿なやつだ、これから3時間歩くことになる、その間我々は3時間休めるのだ！！’彼はそれで僕が十分に罰せられたと思ったようだ。しかし、彼は時計を持っていなかったのだから、僕は自分の持っていた腕時計でチェックもせずに4時間かけることができたのだ。

---

<sup>67</sup> ここでは‘爆薬に火を付けて破裂させること’。



ウェストラ

福岡 17

1945年4月25日

僕は最近巻き上げ機の後ろに座っている。素晴らしい職場だ！

ウェストラ

福岡 17

1945年5月7日

まだ軽作業だが、もう完全に直って元気になっている。農家に行ってきた。またこうして牧草を見、カブトムシや、カエルや花や草や緑を見るのはとてもいい気分だ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年4月22日-5月11日

[4月]27日からヤップと一緒に7階のノボリの最上階で仕事し、そこは息詰まるように熱くて30分静かに仕事しただけで発汗のためにびしょ濡れになってしまう。気温は90度Fくらいあるだろうと思う。炭鉱労働者はいまや全員石炭生産にあたっており、石の坑道は休止中だ。

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1945年5月14日

僕は今、洗濯屋をさせられている、1日2時間だ。まあいいや、自分の洗濯物も、他人の石鹸と一緒に洗っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年5月12-19日

今日は1時間砂を運ばされた。[H.G.W.]ストルカーと一緒に、肩に担いだ木に砂をぶら下げて、約250メートル先まで3回運び、それでひどく疲れてしまった。こうして初めて、自分がいかに非力かが分かる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年5月22日

炭鉱内では第2小隊と一緒に仕事をしており、5階と9階と交互に、石炭の採掘量を上げるために側壁を荒掘りしたりしなかったりで、このため坑道の状況はどんどん悪くなり、居心地も空気も悪い。さらに本当に毎日なにかあって、生産量が、しいては我々の仕事量も、予定より少なくなった。その上17人での仕事は我々の分隊7人だけであるより楽だ。分隊長がファン・ローンからドウ・ハーンに代わったことも、もちろん改善につながっている。

ウェストラ

福岡 17

1945年5月24日

コニーは収容所の‘農夫’になった。彼にとっては最良の職だ。思う存分草むしりをし、耕し、育て、気持ちよく日に焼けて黒くなった。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月8日

まだ車の所にいる。僕は‘二本線’に気に入られている。爪を1枚失い、この仕事のために小さな傷が沢山できた。でも僕は元気で活力がある。[...]僕が裸足でふんどしをして車の後ろにぶら下がっているところを想像してごらん。君たちが僕のこのひどい姿を見なくて幸いだ。もしこれを後になって君たちに話したとしても、僕がこの51キロ（つまり今の僕の体重）の身体で、生

きていくためにどのように暗闇の中で怠けようとしているか、思い描くこともできないだろう。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年6月21日

落盤の絶え間がない。僕たちの所でも立て続けに3回あった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年5月29日-6月23日

僕たちは2日間、韓国人達と一緒に低いノボリで仕事し、死ぬほど疲れた。これでまた、自分がいかに非力であるかを感じさせられる。[...]

限りなく楽しい朝シフトになった。17人で9日間に22の台車を一杯にする、これは一人一日30籠だ！あらゆるところで全ての間違いが起こり、レールやパイプは壊れ、換気は止まる（これはひどく気分が悪い、30分もするとひどく息苦しくなる）。ヤップは何年にも渡って頑張りすぎ、そのためにもらうもの（食糧も含めて）が少なすぎて疲労の極限を超していて、政治的な悪影響もあり、何かにしっかり対処したり、きちんと組織したりするような気力を全くなくしてしまったのだろうと思う。なるようになるさ、が日常だ。落盤したそこら中の坑道に、ヤップにとってはひどく高価なはずのパイプやレールがそのまま残されており、全トロッコでさえもこうして使えなくなってしまう。作業長たちはいたずらにねじを上へに輸送される巻き上げ機に投げ込む。

大きなブレーキ傾斜の巻き上げ機操作手の居眠りについては、僕たちは悪い冗談のつもりで‘台車がケーブルも何もかも一緒にリールを越えて機械室に入ってしまう前に彼が目覚ましさえすればね。’などと言っていた。そして本当にある日、僕たちがレール上を歩いて上に行ったら、ケーブルも台車も見えなかった。そして彼は機械室の‘中’で、機械の間に押しつぶされ、石炭は機械室中に散らばっていた。操作手は目が覚めるのが少々遅れたのだ。言い換えれば、これは国民的過労のしるし、少なすぎる休日と、少なすぎる食事と、常に眠気と脱力感だ。[...]第8カタ [坑道] での仕事はまた中止され、[今は] 第7のノボリで仕事をしている。[...]我々の坑道で、僕たちと交代しに来たイギリス人の一人の‘ジャック’が、機械が逆さに引っ張られて台車に押しつけられ、死亡した。イギリス人の間ではなんと多くの事故があったことか！

6月の夜間シフトは、仕事に関して言えば、またもや成功だった。17人で、9日間に19台 [一杯にした]。最後の夜は台車の供給がなかったので僕たちは寝ていて、僕は昼間、

対して疲れもせずに3回歯医者に行き、2本の虫歯を充填した、これはつまり、削りも消毒もせずに‘詰めて塞いだ’のだ。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年6月23日

今日でもう2日間、上炭鉱で仕事をしている。どれだけ持ちこたえられるかみてみよう。[...]全ての将校も今や働かされている。作業場で機械工と仕事をしているのもいるし、庭仕事や農場で働く者もいて、商船の将校たちはこの収容所の中で最も重労働の火焚きの仕事をしている。まあ、彼らにとっても悪くはない、何かやらせておこう。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月25日

巻き上げ機が壊れたので、僕は3日間、簡単な‘小石仕事’をしている。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年6月26日

大炭鉱事故。坑道を掘りすぎた。80メートルまでしか掘ってはいけないところで、ヤップたちは93メートルを平気で超えていた。水溜め池のすぐそばで。それが突き崩され、死傷者が出た。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年6月24日-7月10日

我々の分隊と第2小隊は第7[階]から第3トロッコまで誘導され、そこで高いノボリを造ることになるらしい。炭鉱のこの部分は大規模にできていて、がっしりした感じだ。それというのも、この全部が、あまりヤップたちが関与せずに我々で造ったものだからだ。彼らは僕たちが眠らな

いように‘監督’していただけで、自分たちは寝ていたのだ。

[6月] 26日に下に降りたが、そこではいつも台車が足りないために長く待たねばならず、そこにクアードフラスの分隊の事故による怪我人を乗せた、4台の悲しげな台車の行列が来た。彼らは[オリシ?]に向かってノボリを造っていて、そこにはポンプで排水されるはずの水があった。そのポンプが機能せず、水が増えて中間にあった石炭層の圧力を越えたとき、突然水が溢れてきて、丁度そこで掘削していた4人の男達を巻き込み、全ての支柱、フカン[換気パイプ]、石炭などと一緒に100メートル下まで押し流した。

最初の台車には[J.H.F.]ベアが乗っていて、足や腕を折り、僕たちが見に行ったときには死亡していた。その後ろにファン・ヘイトウンベーク、ファン・ヘウトウン、ブロンと続いた。オジンガがファン・ヘイトウンベークに気分はどうかと聞くと、彼は‘大丈夫、だが寒い’と答えた。僕はオジンガに、彼がきている2枚のコートの内の1枚を彼の上にかけてやってくれと頼んだ。始めは僕の声が聞こえなかったらしく、それから彼は‘ドウ・フェール司法修士氏が私に話しかけるとは驚きですな’と言った。もう一度僕が頼むと、彼は拒否して余計なお世話だと言った。僕は打ちのめされてしまった。僕たちはここではこんなにも人に冷たくなってしまうのだ。[...]

[M.G.]ジェルヴェはやっと玉転がし<sup>68</sup>になり、ノールト、ホフアイゼル、ダンカールトと同じだ。ダンカールトはロッテルダム出身の運び屋の手本のような男で、普段の仕事でも100kgの袋を‘軽々と’背負って偉容を誇っていた。始めの内はここでも、そんなことをしていると自分自身を‘食いつぶす’ぞ、という僕たちの警告にも関わらず、石炭や石でそれをやってヤップたちの大賞賛を浴びた。彼の力強さはもうかけらも残っていない。収容所内社業員をしている間に少し元気を取り戻すとよいのだが。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月11-12日

僕たちが無意識のうちに疲労を蓄積させていることは(10日間の昼間シフトの後で、夜は6時間半しか眠らず)[7月]11日の9時に眠りに就いてから20時間石のように眠り続けたことでも分かるだろう。これは兵舎内のほとんど全員が同様だ。ノミは夜の安息をかなり邪魔するが、昼間はお引き取りだ。日本中で同様のようで、ヤップとの普通の会話で例えば、夜のシフトは炭鉱の中でノミに煩わされることなく眠れ、昼間家に居るときは夜より害が少ないのでとても良い、と彼らは話している。

---

<sup>68</sup> 収容所内作業員(軽い兵舎病)のこと。

ルーへ

福岡 21

1945年7月17日

今日、オーストラリア人が死亡した。腹部に石が落ちてきたのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月13-20日

夜間シフトで台車の荷下ろしの仕事をした。とても静かで、というのも時間の半分は何か動かず、そのために休憩することができたからだ。機械類は全てすり減っていて、水を油代わりに差している。

オーステルハウス

門司(YMCAビル)

1945年7月20日

‘門司’と‘エンカン’。そこに僕たちは働きに行く。いや、酷使されに行くのだ。‘門司’はここでは実際には港のことだ。‘エンカン’は岸壁の倉庫だ。‘エンカン’での仕事の内容は：船の荷下ろし、倉庫への荷運び。台車に砂糖、米、キビ、トウモロコシ、トウモロコシ粉、油（カチャン [ピーナッツ] 油、魚油、機械油）、タウチョー [発酵大豆]、大豆、竹、炭、薪等々を積んだり降ろしたりする。砂糖1俵100kgから110kgの重量、キビや豆は90kg。米：40, 60, または100kg。これを半日あるいは丸1日、船から運び出し、板を渡って台車に入れるということがどんなことか、想像できる？

幸いにも‘エンカン’では弱い人間と強い人間がいることを考慮に入れていて、僕は多くの場合この重労働はしなくてもすむ。それでもガンドルン [キビ] を運ばされ、丸一日60kgの米を運ばされた。そして後ろには一日中‘ハンチョーズ’ [班長達=管理人達] (音の通りに綴った) が‘ハリアップ’ [急げ] とか‘ハイランカ’ [入らんか!] とか怒鳴っていて、棒は彼らの手足の延長になってしまった。そしてここにヤップ独特の性格が出てくる。弱い者や病人を知らず、あるいはペストのごとく憎んでいる。弱かったり病気だったりするのは基本的に本人の責任だと思っていて、この論理では仕事ができなかったり重度の下痢をしていたりする者は激しい殴打に値するのだ。僕は体が弱く、定期的の下痢を起こし、脚気のために僕の足はしょっちゅう2倍に膨れ、そのためにとても衰弱している。それでも僕は4月25日以来毎日のように仕事

をしているのだ。

今日は2ヶ月ぶりに、だと思いが、やっとヤスメ日〔休日〕になった。これは実際に何もしなくてもよい日だ。少なくとも30人ほどの人にとっては。残りの人達には何やかやとやらなくてはいけない雑用がある。僕もそれに指定されたのだが、幸い次の日の‘パン’2つ（仕事に行くときにもらえる、2つの小さなパン）で他の人に頼むことができた。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年7月21日

今日はまた炭鉱で‘難逃れ’だった。脱線した石炭車をまたレールに戻そうとして上から下まで落としてしまったのだ。幸い死者は出なかった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月21-26日

このヤスメ日〔7月21日の休日〕は他の人達と、一月2度の〔休みの〕日にしかできない雑談をしてまたとても楽しかった（このグループは11日に働き続けたので〔2度になった〕）。[...] 前のシフトでは作業長から遠く離れた荷下ろし場で仕事をして気分よく働いた、これが直接僕の体重によい影響を与える気がする。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年7月22日

今日で‘潜り’始めて丁度1年だ。炭鉱では‘マギー’の操作手に任命され、これは一杯になった石炭車を上に揚げ、空のものを下げ、炭鉱労働者を下に降ろし、そしてまた引き上げる機械だ。責任の重い仕事だが、‘石炭’仕事よりは重労働ではない。素人として、僕は大きなガタガタの機械の前に立っていた。しばらくの間見てから、自分で操作しなくてはならず、神の助けでなんとかうまくいった。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月23日

コニーは‘農夫達’の大部分と共に炭鉱に入った。幸い昼間シフトで、それほどの重労働ではない。

オーステルハウス

門司 (YMCA ビル)

1945年7月23日

毎日5時に起床ラッパ。6時半か7時に仕事へ。帰り、これは3時から7時の間で、仕事の量によっていろいろだ。しかしこの頃はいつも決まって‘シェキ’で、これはこの近くに沢山あるトンネルや個人の家で(!)する仕事で、土の移動、石運び、4kmから5kmの距離の丸太運びなどで、早くても終わるのは7時15分過ぎ、遅ければ8時半だ。それから急いで暗い中<sup>69</sup>を食事取りに行く。風呂に入ったり他のことをしたりする時間はもちろんない。それから9時か9時半に石のようにベッドに倒れ込む、夜間に1度あるいは数度は起き出さなければならないからだ [空襲警報のため]。(時には一晩に3回の時もある!)そして5時にはまた元気に(?)起きるのだ。[...]僕たちは、時には僕たちの脚が、毎朝まるで従順な機械のようにまだ僕たちを仕事場に運んでいくことに驚いて、顔を見合わせてしまうことがある。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月27-31日

僕たちは‘採炭’(=炭鉱)で荷下ろし場ではなくてその反対の極、140メートルの長さのノボリで45人の男達とともに、12人の作業長達が手分けして僕たちを働かせ、休み無しに働かなければならなくなったことにごっかりしている。最初の日が最もひどかった。石炭日で、僕はずっとかき出し続けていた。通常は僕らのシフトは溝や鎖やケーブルを延長し、石炭の山を作る。この方が少し楽だが、しかしそれでもこれまでの炭鉱仕事の中で最も疲れるものだ。

---

<sup>69</sup> 毎晩‘ブラックアウト’(灯火管制)していたため。



イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年8月

1945年8月3日から4日にかけての夜、自身が‘難逃れ’。ガタガタで古く、専門家によれば設置方法が間違っている‘引き上げ機’はうまく機能せず、操作の責任はより重くなっていた。ギア右側のベアリングが熱くなった。水筒のふたで、僕は‘高圧電力戸棚’の中からオイルを取りだした。突然僕は電気に触れてしまった。大きな炎が上がり、電流が僕の身体を流れた。僕は絶縁されていたため、驚愕と火傷だけですんだ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月5日

フレージャーが[炭鉱での]考察を述べた。炭鉱（8 [番]）ではもうほとんど仕事されていない。日本人も韓国人も働かない。監督する人はもうほとんどいない。今夜は45分働いただけだ。レバーを操作する日本人たちが、さいころ遊びをしていた。上司から叱責されると怒って出ていってしまい、その上司が自分でレバーを操作しなければならなくなった。そうでなくともしょっちゅう電気がショートし、仕事はちっとも進まない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月1-7日

採炭[炭鉱]の仕事は石工事人としては、そして‘建設的’仕事に重点を置きたければ、おもしろい。時間が早く過ぎ、生産はしなくともよければ。一般的には石を積むのは重労働だが。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月12-14日

[作業班の組み替えが行われた] 僕たちは夜間シフトで炭鉱に入ったとき、1943年以来僕たちを全てにおいて奴隷扱いしてきた、苦しみ鬼のアラク-さんと‘農夫’が、本当に他のシフトに

異動になったことが分かった。採炭〔炭鉱〕は大変だが、これで僕たちも大勢の中で普通の作業班員となり、‘286’と‘275’（ドウ・フェールとル・コント）だけが、何が起こっても全ての責任を被されて殴りつけられる、ということがなくなった。僕たちのテンポはここでは普通のこととして受け入れられ、僕たちの働き方も同様だ。それでもこれは、炭鉱内でこれまで経験した中でも最も危険で重労働だ。これ以上の事故が起こらなかつたら奇跡だ（しかし例えば先週は、我々の6番目の石山で石炭壁が突然横ずれを起こし、ジョーンズが脚を失った）。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月13日

仕事はほとんど何もなくなり、しょっちゅう停滞している。ヤップはひどく神経質で、自分たちもほとんど休みをもらえず、それを僕たちに当たり散らす。気を付けなければいけない。数ヶ月前から韓国人との全ての接触が禁じられた。僕は健康で元気だ。いまだに、1年以上炭鉱で働いて、たくさんの石や石炭塵を被ったにもかかわらず肺は悪くなっていない。

オーステルハウス

門司（YMCAビル）

1945年8月14日

[7月28日から29日にかけての夜に連合軍の空襲があった後]

‘エンカン’は完全に燃え尽きた、‘門司’（今度は別の意味<sup>70</sup>）は完全に破壊された。ここで少し前に大騒ぎをして行われた仕事、1日に数百の袋をへとへとになって運んだ仕事は1発で終わってしまった。火事の翌日はもちろん‘待機’で、翌二日間も実際には仕事はなかった。その後は我々の一部は片づけの仕事をさせられ、一部はまだ残っていた‘エンカン-2’に送られた。そこでは‘エンカン-1’の神経をすり減らす競争が多少遅いテンポで継続された。輸送ばかり、食糧、特に豆の輸送だ。毎日数十台の豆。（忙しいときには30台でも普通の数だ。それぞれの車に90kgの袋が約200個、30人から40人で僕は屈強であったことは一度もないので、これは長い間続けられることではない。<sup>71</sup>

<sup>70</sup> オーステルハウスは門司を、同名の都市とその港の両方に使っていた。この場合はおそらく港を指す。

<sup>71</sup> 8月にはオーステルハウスの内蔵が疲弊して何日も食事がとれず、脚は炎症を起こして通常の2倍に腫れあがっていた。戦争期間の最後の週はこのために働かなくともよかった。

## 健康と医療情況

オースターハウス

小倉病院

1943年5月7日

[オースターハウスは1943年4月24日に日本に到着して以来、赤痢のため病院に入院していた。]

患者の看護に関しては不足なことが多い。特に初期には薬がほとんど無かった。必要な食べ物(果物)も無い。人々はネズミのごとく死んでいく。この最初の週で25人以上[の戦争捕虜]が死んだ。僕自身も7日間食事をしなかったが、これを書いている時(5月12日)には奇跡のそのまた奇跡で回復している(少なくともここしばらくは。これについては神に心の底から感謝している)。僕たちの多くは注射だけで保っている。初期には平均1日3本の注射だ。時にはそれ以上。血清、ビタミンBにC、グルコース、生理食塩水<sup>72</sup>などを1回に330ccまで。悲惨の極地で、ビタミン不足が口内に現れ、すぐに大きな傷になり、物があっても食べることもできない状態になった<sup>73</sup>。まあしかし、ここで我々の苦しみを並び立てても仕方がない。今は僕も幸いにも柔らかなご飯やスープは食べられるようになった。立ち上がることはまだ全然できない。僕の脚は確実に半分にはやせ細ってしまった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年6月15日

炭坑では仕事にしょっちゅうせき立てられ、今や僕は尻をむき出しにして、そのためには休みをもらうこともできない痔疾持ちになっている！その上僕は猿疱瘡<sup>74</sup>に罹り、これはに治療法がない。僕たちは今日10日間仕事した後体重を量り、全員痩せしまっていた。僕は2,5kg(今[の体重]は63.5kg)

<sup>72</sup> 蒸留水に9%の食塩を溶かしたもの(体液と同様の濃度)。(Coelho, p 287)

<sup>73</sup> おそらくオースターハウスはビタミンB群の不足から来る欠乏症の驚口瘡に罹っていたものと思われる。(Coelho, p 745)

<sup>74</sup> バクテリアによって起こる、かゆみを伴う皮膚炎で肌に赤斑ができ、それが(化膿した)おできや小胞にかわっていく。(Coelho, p 385)

オースターハウス

小倉病院

1943年7月2日

昨日で10週間病院に居たことになる。この頃、‘健康’がゆっくりと戻ってくるに従い、昔の欲望や思い出が、新しい力を持ってわき上がってきた。[...]僕が心配している唯一のことは‘バーニング・フィート’<sup>75</sup>で、これにはほとんどのオランダ人が、多かれ少なかれ悩まされている。医師は新しい実験を僕たちに施し、それは背骨にB1を注射することだ。ちょっと気味が悪いが、まあ大丈夫だ。効果は全く様々で、ひどく思いがけない効果が出るが、頭痛にはまあ必ずなる。ある人達は注射1本で痛みが無くなったり、足が痺れたりしている。僕は注射1回後には全く何も好転しなかったが、それでも11週間後にやっとここから出られることになって嬉しい。<sup>76</sup>

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年7月4日

僕は痔がもう一つでき、数百の猿疱瘡がある。[日本の]作業長が僕を殴り、僕たちが[彼にやられて]上り坂の、せいぜい高さ75cmの坑道に痛みをこらえて座っていたとき、僕は後ろ向きになり、ズボンを下げて鳩の卵ほども大きさのある2つの痔ができた僕の後ろ側を見せてやった。これはある程度効き目があり、彼は僕がそこにどのような姿勢でも座ることができないということを理解した。

オースターハウス

福岡 15

1943年8月28日

僕たちは「7月13日にこの収容所に到着して」先ず‘病棟’で様子を見ることになった。毎日小さな雑用があり、少しずつ増やされていく。大体7日後には炭鉱に行き、[それでもまだ]地上だ。杭やレール運びなどだ。すぐにまた下痢になり、3回倒れた。病棟に逆戻り。(ここでヤップに病棟に押し込まれるには半分死んでいなければならない。)

---

<sup>75</sup> 脚注33参照。

<sup>76</sup> オースターハウスは7月12日に‘収容所’に出発することになると聞かされた。

オースターハウス

福岡 15

1943年9月8日

まだ僕はここに居る。下痢は治った。今は脚が悪い。[...]この収容所でも大勢がすでに死んだ。ペラグラ！いつまで続くんか？一昨日、我々の医者がやっと‘スパイナル・ニードル’[脊髓針]をもらった。ここではヤップの医者は‘肉屋’と呼ばれている。これで充分分かるだろう。

オースターハウス

福岡 15

1943年10月15日

まだ病棟にいる。すでに4本の脊髓注射を受け、やっと改善の兆しが見え始めた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年10月31日

僕は兵舎病で、黄疸のために安静にしていなければならないが、全体的には（少々のイクテラス<sup>77</sup>以外は）全然悪いところは感じられない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年11月9-30日

僕はまだ兵舎病だが、イクテラスもとても少なく、2日に1度ヤップの医者が来るときにはいつも‘アルベイトン’と言われるのではないかと思ってしまう。[...]

数日間またもや下痢で、腹の痛みでうずくまるように寝ていた。便は全くの水だったが、早々に治った！風邪だったのかも知れない、数日間の気温は0度より少し上なだけであったから。テンコ（＝点呼）の時、僕たちは震えていた。[...]

ヤップの医者の最近の趣味は僕たちのペニスを計ることで、そこから魔法の方程式の

---

<sup>77</sup> 肌、粘膜、体液の黄化。(Coelho, p 378)

ようなものを使って僕たちの最適体重を割り出すのだという。(これを彼の博士論文にするのかな?)

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月1-4日

このところとても調子が良い、これは僕たちの仕事場の空気がよいことにもより、それから、先の11月21日にもう終わってしまったがエクストラの食糧、それに炭鉱での軽い仕事によるものだ。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月5日

ニッポンの医者による‘衛生検査’(事情調査のみ)。この医者は週に1度しかここに来ない。僕は日本の軍曹と看護兵の下になり、彼らの言う通りにやらなければならない。

多くの場合、間違っただけをさせられる。僕の強い抗議にも関わらず、例えば患者を痛めつけるような無用な注射や、殺菌消毒を充分にしていないイルリガートルに冷たすぎる液を使ってのハイパーデルモクリス[皮下への液注入]などだ。[...] [薬剤師のTh.] パウ([収容所]番号2)と僕は赤十字で、4人の看護人(プロ[看護婦]は居ないので、ボランティアだ)とともに病棟兵舎に入れられた。自分たちでは何も決められない。ニップが全てを決定する。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月6日

日本の医師の命令による沢山の測定の始まり。体重、身長、胸囲、握力、ヴィスス、BSE。<sup>78</sup> 昨日から病人の数が増えた、ほとんどが下痢、赤痢、気管支炎、リウマチ痛だ。

---

<sup>78</sup> ヴィススは視力を意味する。BSEはエリトロシテン(赤血球)の沈下速度。(Hilfman, 54)。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月7日

視力検査。腹を壊した患者が58人！毎日15人くらいの新しい患者が来る。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月12日

健康状態は急激に悪化している。数人は重度の赤痢でダゲナン<sup>79</sup>にも反応を示さない。

12月11日5時半に[L.M.J.]シアウが、赤痢と急性のアストマ・カルディア<sup>80</sup>で死亡した。彼は12月11日午後に火葬された。もう一人、重体の患者が居る。ヤップは危機を感じ、様子を見るために直ぐに4人の医者を出した。散々話し合いが行われた。最終的に[兵士G.]ドゥ・ウィルデ（重体の患者）に対するいろいろな改善策が取られた。ヒポデルモクリス（だが十分に殺菌されていない、上記参照）、輸血、ミルクの小瓶を何本かまで！他の患者にはほとんど何もされていない。食事も全く何も変わらない。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1943年12月13日

昨日、初めての死亡者が出た。ここにいる400人の内、100人が病院に入っているのだから。一つには食事のせいで、もう一つには寒さのせいで、ここでは嫌だというのを通り過ぎるくらい下痢になる。赤痢がまた広がり始め、昨日最初の死亡者が出た。その男は日本式に火葬され、その灰は僕らの元に戻された。これはこれからも続くだろうと思う。

---

<sup>79</sup> ダゲナンは（硫黄を含有した）抗バクテリア剤。

<sup>80</sup> 心臓の衰弱による激しい呼吸困難症。（Hilfman, 54）

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月13日

収容所司令官の、なぜこのように罹病率が高いのか、という質問に答えて、

1. 栄養失調
2. 寒さ

少なくとも一部屋に一つはストーブをおくことを提案した。答え：日本中どこにも、個人の場所でストーブを焚いているところはなく、事務所だけである。このため、外来診療所には置くことができる。しかしそこは全ての人を収容するには狭すぎる。[午後] 3時20分に、ドゥ・ウィルデが赤痢のために亡くなった。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月15日

この収容所にいつも居ることになるという、新しい日本の医者が到着した。‘日本の司令官が二人の死亡者が出たことでを危惧したから’<sup>81</sup>いずれにしろ、前よりはました、というのも、僕はやっと軍曹‘医者’の使い走りになったからだ。彼が僕にどの注射をするかを命令し、僕はそれを拒むことはできない。今日は、もうこれ以上病人を出してはいけないという命令を受けた。兵隊に、自分の健康管理をするようにと命令しなければならない(食事の改善はこれまでも全くなかった)。病人の数は少し減った。

ヘレ

宮田(福岡 9)

1943年12月17日

今や僕自身が病院に寝ている。腹風邪を引いた。忌まわしいペストのような下痢。もう3日間も流動食で、下痢止めの粉をもらっている。これは僕の体重維持のためには、もちろん良くない。

---

<sup>81</sup> ヒルフマンはこの後、この医者が次の日にはもう出ていったと記している。(NIOD, 蘭領東インド日記コレクション、M.M. Hilfmanの日記).



ヒルフマン

福岡 9

1943年12月20日

毎日30人から50人のBSE測定。天然痘予防接種、ウェイル [病]<sup>82</sup>に対する種痘! [...]多くの人達がストマチチス (栄養失調症状) にバーニング・フィートと足の凍傷<sup>83</sup>が重なっている。僕自身も足が腫れ、夜、足が暖まると焼けつくように痛む。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月21-24日

医者にとってみれば、収容所内の病気、症状の変遷は非常に興味深いものだろう、薬不足でフラストレーションは溜まるだろうけれど。最初の皮膚病は消え、その変わり鼠蹊部と包皮の痒み、それに皮膚下にしこりができて腫れてくる。こういう症状が突然多くの人に現れるというのは一種独特だ。マルガダントは膝がレーウォーター<sup>84</sup>になり、ふくらはぎに深い傷を負い、そこから膿を取るために包帯を幾筋も押し込んであって、悲惨な状況だ。その手当は毎日彼を苦しめ、彼は悲痛な様子をしている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月25-31日

胃や内臓を全く空にせずにノボリで仕事をすると、数分間で腹痛になる。しっかり空にしてからだと、その痛みが来るのは最高数時間後で、その上、背中が痛み、今ねぶと状の変な傷が幾つもできている臀部が痛む。この状態で僕は尖った石炭の上に座らなければならない。またその上に痔もあるが、今は幸い内痔になっている。これ以外は快調で、この間の体重測定で、特別食を何ももらわなかった期間<sup>85</sup>ではあったが、僕の体重は維持され、とても良い兆候だと思う。だが寒

---

<sup>82</sup> ウェイル病は急性伝染病で、高熱を伴い、ヘパティティスによる濃いオレンジ色の尿のでる黄疸症状、出血、主にふくらはぎの筋肉痛、肝臓と脾臓の肥大などの症状が出る。感染は粘膜や傷口が、ネズミの尿で汚染された水に接触することで起こる。(Coelho, 862-863)

<sup>83</sup> ストマチチスは口内粘膜の炎症。(Coelho, 755)栄養失調症とバーニング・フィートに関しては脚注33参照。

<sup>84</sup> 関節に異常に水が溜まる症状

<sup>85</sup> ファン・ウェスト・ドウ・フェールは11月始めの3週間、兵舎病で特別食をもらっていた。

さはとても辛い。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月1日

呼吸器系の病気が多い。ヌーモニア [肺炎] が何人か居る。幸いにまだダゲナンが有る。それからプレウリチデン [肋膜炎] と気管支炎。咳をしながら歩いている者が多く、[クリスマスに赤十字社からもらった] ペルツシン<sup>86</sup>が大いに役に立つ。赤痢は概ね終わったが、風邪のために下痢をしている者が多く、ただ殆どの者は立って歩くことができる。多くが‘収容所足’になっており、軽度から重度の浮腫、激しい神経性の痛み、無感覚症、足を横切る筋感覚。痛みは寒さの中では無くなるか、あるいは減少するが、暖かくなると、特に夜間にひどくなる。患者の中には夜、足を冷たい水の中に突っ込む者まで居る！そうしないと痛みで眠れないのだ。足は脚気患者のようになっている。[...]

ストマチタイト「口内粘膜の炎症」が多く、ペルレッシュ [口角のひび割れ]、唇が荒れてかさつき、内側は火のように赤い。舌も火のように赤く、しなびて、まるで無色透明の油を塗ったようにつるつるしている。舌も喉も、塩やペディス [辛い (香料)] でひどく痛む。喉も赤く、柔らかな上側が荒れて硬化している。<sup>87</sup>[...]少しずつウルチカリアル症状 [蕁麻疹のような症状] の患者が増えており、限られた場所に、長期間、石灰がないためにしつこく長引く。原因は僕には分からない。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月2日

丁度僕たちの仲間が一人、入ってきたところだ。腫れ上がった顔をして、目は全く開かない (ビタミン不足)。彼は我らの (賞賛しつくせない) [H.]ラッパルト医師、人間として、将校として、医師として偉大な人の所から帰ってきたところで、‘レンペイキュウ’という、日本の字が書かれた木の板で、これがあると兵舎病患者であることが証明され、炭鉱に入らなくても良くなるものをもらってきたところだ。兵舎病患者であることはこの収容所内で最もひどいことだろう。これは小病院に入院するほどの重病ではなく、しかし炭坑に行くには体調が悪すぎることを意味する。毎日、この哀れな人達は様々な作業のために何回も寒さの中に整列しなければならない (彼

---

<sup>86</sup> 咳止め液剤の商品名。

<sup>87</sup> 脚注33参照。

らはコートはもらえない)。休息は実際にはほとんど無い。

もう前に書いたように、ここで病院に入院するには半分死んでいなければならない。今僕たちが看護しているこのイギリス人[E.A.チェンバース]の場合もそうで、医者は彼が第一クリスマス日に死ぬだろうと思っていた。幸いにも彼はうまく持ち直し、多分‘回復線’まで行くだろう。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月5-6日

(夜)。チェンバースはまだ死と闘わなければならないようだ。彼の容態はまた悪化した。3時間毎のカンフル注射<sup>88</sup>を、もう1週間もしている。だんだんとこのようなことも普通になってくる。最初の死は君の世界を一瞬止めてしまう。しかし、38回目にはもうほとんど何も感じない。僕が覚えているのは、もう何年も前、母が病院に入院していたとき、あの病気の人達皆の顔と、あの独特のエーテルとクロロフォルムの、僕の意識を無くさせる臭いだ。今では我らの勇敢なる医師、ラッパルトが、補助器具もほとんど無い状態で、毎日この医療室で最も目をそむけたくするような傷や炎症を治療しているのに、僕は何も感じないでいる。

そして今は我らの友人マゲンダンス<sup>89</sup>のことを考えている。彼は‘ハコ’[トロッコ] (音の通りに書いた) にぶつかり、単純な傷を負った。感染と合併症により、膿瘍が脚全体に広がった。<sup>90</sup>膿を出すために、医者が麻酔無しで脚に新しい切り口を開ける度に、可哀相なこの男が耐えなければならなかった痛みは、想像するのも困難なほどだ。それに‘付随して’下痢を伴ったときには、自分がそうなったときでなければ、これも想像できないだろう。これまでの全てにも関わらず、その脚[マゲンダンスの]は、明日切断しなければならない。今でも不安と悲嘆で打ちひしがれているというのに。

また別のケース。工学部学生のドゥ・ローフは、大木のような男だが炭鉱で気を失い、医務室に運ばれてきた。1941年10月23日以降の記憶をすっかり失っている。呆然とした目つきで周囲を見回し、回りで何が起きているのか全く理解できないでいる。問題の日の前に付き合っていた人間だけを識別できる。原因は食糧不足による徹底的疲労困憊。このようにいろいろなケースが続く。何十ものケースが毎日病気報告書に書かれ、それはまた同じような症状だ。

---

<sup>88</sup> カンフル (樟脳) は、 *cinnamomum camphora* の木を蒸留して得られる物質で強心剤として使われた。 (Coelho, 413).

<sup>89</sup> おそらくこの人物はファン・ウェスト・ドゥ・フェールが‘マルガダント’と呼んだ人物と同一であろうと思われる。この章、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの1943年12月21日から1944年1月始めにかけての日記参照。

<sup>90</sup> 裸足で歩くことにより、小さな感染や傷から、通常下肢や足に、(深く食い込んだ) 熱帯性、あるいは収容所膿瘍がおり、これは食糧事情の悪さやビタミン不足から起こる。(Coelho, 605, 823)

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月始め

僕はまた原因不明だが下痢している。おそらく単に寒さのためだろう。[...]突然一カ所が白癬にかかり、薬不足のため、これは治らないだろう。

マルガダントの脚は切断しなければならない。これを聞いた時、僕は丸一日打ちのめされていた。それはすねの小さな傷で始まり、そこから化膿がどんどん広がっていった。その後彼は赤痢になり、脚気になり、そして今や白股腫<sup>91</sup>のようだ。それが上に上がってくると死に至るので、今なんとかしなければならぬのだ。

僕のすねの2つの小さな傷は順調に回復している。僕は半年前に比べると、断然調子がよい。おそらくは僕がもらっているエクストラな食糧と、たぶん定期的にビタミン剤を飲んでいるからだろう。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月10日

私の直属の上司は日本の軍曹で‘in the near future [近い将来]’に医者になるはずで、患者を‘研究’もする。さらにここには、日本人の看護兵がいる。1週間に1度、日本の中尉医者が検査に来る。始めの内は一緒に仕事をするのが非常に困難だった。今では私にも多少自由に治療させてくれる。しかし、我々がジャワから持ってきた薬は全て‘薬局’に鍵をかけて仕舞われ、日本人に連絡して、その人に鍵を（私のリップス [オランダの鍵メーカー] の鍵なのに！）開けてもらうまでは、我々には使えない。それ以外にも、ニップからも幾らかの薬をもらった。‘レジオン-アンプル（サルファニル・アミド<sup>92</sup>）’、ニトラス・ビスムティカス・バシクス、デルマトル、<sup>93</sup>包帯少々。軍医以外にも、ここによく検診にきて、我々の患者にも結構人間的に対応（！）する、2人の民間医がいる。何度も頼んだ後、尿尿瓶一つと、‘オマル’一つが手に入ったが、後者は使い物にならなかった。

<sup>91</sup> 脚の皮下細胞に起こる、痛みを伴う水っぽい腫れで、産後の婦人に多い。(Coelho, 607)

<sup>92</sup> 硫黄を含んだ化学療法剤で、静菌作用がある。(Coelho, 765)

<sup>93</sup> デルマトルは皮膚の傷に対する殺菌用粉剤であるが、胃腸病にも使われる。酸を中和する作用がある。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月11日

「おまえは運の良い奴だ」と、今日は何度も言われた。その通り：今日の午後、炭鉱病院に日本の医者が訪れた。全ての‘病棟’の患者は整列だ。検査。その結果：患者の徹底整理が行われた。

11人にも及ぶ人がレンペイキュウ [兵舎病] に昇格（あるいは落伍？）した。筆者は最初に検査された人間だ。診断：レンペイキュウ。ラッパルド医師の嘆願で、病院の患者は日本の服をもらっていないので戸外の寒さの中で働くのは困難である。最終的には：レンペイキュウ無し。

しかし全体的には：多くの‘古株’達、もう5ヶ月も7ヶ月も病室で寝ていて、そこで終戦を待とうとしていた人達は、退院させられた。多くのレンペイキュウ達も、彼によって‘健康’と宣言されたものは今日また炭坑に送り込まれた。（しかし、昨夜また、炭坑で倒れた者が運び込まれてきた。栄養失調と過労だ。）

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月11-14日

また歯医者に行くことになった、先回の‘押し込まれた’2つの詰め物が柔らかいままで、その内1つはすではずれてしまったからだ。最大の荒っぽさでまた削られ、先の尖った何かの器具を僕の口から出すときには、どうも僕の頬にも穴を開けないとできないようだった。虫歯はまた、何か怪しげな物で塞がれた。

マルガダントの脚は膝の上で切断され、彼の状態は現在良好だ。イギリス人のチェンバーは栄養失調性浮腫で死んだ。彼の身体は水分で膨れ上がり、通常の3倍も重くなっていた。赤十字小包は、彼にとってとても良かったが、しかしそれも遅すぎた。彼を火葬場に運ぶ男達には大変な仕事だった、彼の身体は棺にも、葬式用の車にも、焼きがまにも入りきらず、これは彼の身長もとても高いためでもある。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月15日

死は収容所の38番目の被害者に取りついた：チェンバーは3日前に死亡した。[...]マゲンダンスは、これから1本脚で生きていかなければならない（もしも、医師が彼に与えた四分の1のチ

チャンスが本当になったとしたら)。四番目の鼠蹊ヘルニア患者が昨日運ばれてきた。[...]  
もっと続けようと言うのか？炭鉱内で、ほとんどみんながやられるめまいの発作や卒倒について話そうか。いや、そんなことをしても意味がない。単調になるだけだ。それに、実際にはそれは、例えばコップに四分の一、米を多くもらう事ほどにも、心を動かしはしないのだ。[...]

炭鉱労働者は全員、昨日炭坑を出るに当たってワカモトの錠剤を三つもらった。(僕たちはここではビタミン剤で生き、絶対の信頼を寄せている一瓶一杯のワカモトB1, B2, A-DにハリファA-Dが、ここではどんどん飲み下されている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月15-21日

今日10時、予備役将校候補生J.C.P.ファン・ラールテンがクループ-ヌーモニー<sup>94</sup>で死亡した。これで3番目の死者だ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月21日

[今朝] 9時35分にランドストーム市民兵のP.H.フルンヌフェルトが、ヌーモニーで死亡した(4番目の死亡者)。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月22日

[朝] 6時半に、兵士のJ.P.D.ドゥ・ブラウンが胸膜炎で死亡した(5番目の死者)。[...]保健状況はまだ大いに改善の余地がある。ダゲナンの在庫は急減しているのに、ヌーモニー[肺炎]が多い！その上、このヌーモニーはダゲナンにうまく反応しない。だいたい2日後に峠を迎えるが、1日後にはまた熱が上がり始める。患者は咳をし続けるが、スプタム[痰]は少なくなる。

今は大体5人のひどく腫れた足の患者がいる。ひどい痛みをとまなうが、脚気の症状

---

<sup>94</sup> クループはジフテリア菌が原因で起こる炎症で、喉頭や気管粘膜が狭まる。症状は息苦しい咳と共に現れる。ヌーモニーは肺炎(Coelho, 427,620)。

ではない！その内の2人には広範に渡るサブキュタン [皮下の] 出血がある。この2人はひどく瘦せていて、少々の痴呆症状を示し、トレモルン [震え] も来ている。この1週間は医療作業が多少やり易くなった。軍曹とその助手は私により自由にやらせてくれるようになった。私が兵舎病の書類を出し、通常は私自身で患者を入院させる。2週間前に病院の幾つかの部屋に石の炭火鉢 (コンロ) が置かれ、幸いにもその部屋では厳寒にはならずすむ。

へレ

宮田 (福岡 9)

1944年1月24日

一昨日、この一月半で6人目の死亡者が出た、単に栄養失調と肺炎のためだ。肺炎患者が大勢いる。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月24日

現在病院には50人の患者と、兵舎病20人

オースターハウス

福岡 15

1944年1月25日

腐れ縁は続くもの。ヤープはまたもや病室に戻ってきた。僕は作業をするレンペイキュウ [兵舎病] を、余分の '丸パン' のために始めた。4日後には足がひどく腫れて痛み、全く使い物にならなくなってしまっ、それも終わりになった。昨日病気報告に： 'また入っおいで'。症状：脚にくぼみが幾つもでき、脚の間に炎症を起こした傷。2サイズ大きかったはずの僕の靴が、きつくなった。ペラグラ症、壊血病、口峡炎、脚気....全く、敬意を表すべきリストだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月29日

病気報告だ。ラッパルト医師の下ではこれはいつも、何とかユーモラスな話しとなる、ここでまだユーモアと言えればの話のだが。いつもまた、粥、硬い飯、柔らか飯、下痢、等々に関する手強い闘いになる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月15日から1月末

寒さはやっと我慢できる程度で、僕はできるだけ厚着をし、1日に15錠のワカモト・ビタミン-Bを食べ、最近では疲れに悩まされることなく仕事をしている。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月4日

アンダーソンはほぼ3日ほど、ほとんど気が狂った状態だった。今は少し回復してきた。(時には皆、風車の羽根に頭をはたかれたようになる) [...] ラウディーは、僕の病室に入院してきた。彼は少し‘ぼけている’（‘神経症’と、レンペイキュウ [兵舎病] の彼の症状蘭と、病人帳には、書いてある)。おそらく彼の兄弟が日本人に処刑されるのを見てショックを受けたのだろう。僕の足はまだ格闘し続けている。足の裏に新しい炎症。歩くのは困難だ。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月8日

マゲンダンスの下肢切断された脚はまた感染した、日本の手術技術の‘お陰様で’（4回の手術の内、3回感染した）。



オースターハウス

福岡 15

1944年2月11日

多分ここには‘ブロック部屋’ができるだろう。ゆっくりではあるが、注目に値する3人という数の精神的脱線者が出てきているからだ。アンダーソンは今やまた完全な理解障害に罹っている。ラウディーは、妄想症で、幻聴がある。ドウ・ローフ：‘船長、お早うございます’（医師が入ってきたとき [彼は言った]）、‘我々はムントクを過ぎたところです。もう、水深は計ったか、アダムス？’（これは自分の弟に向かって）。‘あの航位確認をしたのは誰だ？’まじめな顔で、彼は医務室の窓下方の磨りガラスをじっと見つめて立つ。引き出しを開け、何か（無いものを）取り出し、考え深そうに手を丸めて作った穴から外を見つめる、等だ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月12日

顕微鏡が来た、新品だ。携帯用で、折り畳み式の載物台に、折り畳み式の脚が付き、レンズが3つ、液浸法機器が一つ、血圧計、計量器、トーマ血球計測器。日本の炭鉱医師は、試薬<sup>95</sup>を幾つか、約束してくれた。数日前、彼は若い日本人医師と、看護婦（？）あるいは女医と一緒にここに来たのだ。数人の患者を見せた、特に、バーニング・フィート [b.f.] を見せ、これが最も彼らの興味を引いた。‘b.f.’の患者の内何人かは脚の凍傷にも罹っており、それは足指の先から始まる。‘b.f.’に罹っていない患者で凍傷の人はいない。この理由はおそらく：

1. ‘b.f.’では血液循環が正常に行われず、明らかなスターゼ [血液の停滞] が見られ、そのために通常の足よりも寒さに弱い。
2. ‘b.f.’の患者は痛みを和らげるために、足をなるべく冷たくしておく。

バーニング・フィート、ネウリチス・レトロブルバリス<sup>96</sup>、口内炎、デルマチチス・スクロタリス<sup>97</sup>のような皮膚病、めまいやアタクシア [連動動作障害]（[ファン] ロンベルグ症<sup>98</sup>のポジティブな症状）が、ここで見られる病状で、その様々な段階があるだけだ。<sup>99</sup>これらの病気は通常単独で現れるが、しかし一人の患者に続けざまに現れる。ここでは伝染病が続いた、最初は口内

---

<sup>95</sup> 一定の化学反応を起こさせる薬剤で、これを使って、一定の物質の存在を確認することができる（それによって病気診断の助けとなる）。

<sup>96</sup> 眼球の後ろの神経炎症（いわゆる“収容所目”）。

<sup>97</sup> 辜丸皮膚の炎症（いわゆる“チャング・ボールズ”）

<sup>98</sup> ファン・ロンベルグ症：目を閉じ、足を揃えて立つと倒れる現象で、筋肉や関節の反応機能障害、あるいは平衡感覚障害の症状である。（Coelho, 690）

<sup>99</sup> 脚注33参照。

炎、それからバーニング・フィート、その後めまい。デルマ [チチス]・スクロタリスは少なく、新しい収容所目も少ない。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月13日

44年2月12日から13日 [にかけての夜]。暗い影が数回、‘医療診察室’の外の廊下を動いた。それからドアが注意深く引き開けられた。赤茶けた髪と、まるで死に追いやられた鹿のようにおびえた目をした顔、そしてラウディー自身。おどおどと彼は部屋に滑り込む。‘どうした、ラウディー?’と、医師の落ち着いた声が尋ねる。彼は近くに寄る、まだ何も言わず、より近くに、医師の直ぐ側まで。それから言葉が困難を乗り越えるように出てくる。‘あのヤップ・・・僕を・・・狙ってる。彼は・・・僕を殺そうとしている!’ 死の恐怖が彼の短い話しを押しつぶしそうになっている。そこに彼は居る。彼はまだ若い。多分22歳だ。子供のように、自分が信頼できると思う唯一の人を頼って逃げてきたのだ。医師は安心させるような言葉をかける、暗闇を恐れる子供に向かって言うように。やっとな彼は出ていく。小さな赤茶けた頭は深く襟の中に沈み、迫り来る危険から隠れているようだ。彼はドアを滑り出る、想像上のヤップから、こっそりと逃れようとするように。

そして今は夜だ。僕は当直をしている。右にはアンダーソンが、左にはドゥ・ローフが、そして前にはラウディーが寝ている。3人の気違い、3つの切り裂かれた人生、狂った世界の3つの悲劇。いやいや、彼らは危険ではない、何も変なことはしない。2年間の戦争捕虜生活に身体も魂もみくちやにされたら、そんなことはできない。疲れてしまうのだ、全く疲れるのだ。そうなったらもう横になり、眠り、忘れたいだけ。忘れすぎて、何も分からなくなってしまおう。彼らは僕たちよりも幸福なのだろうか。我々、まだ全てを(?) 知覚している者たち。我々は、この全てをまだ乗り越えようとしている者たちか?

オースターハウス

福岡 15

1944年2月15日

下痢がまた来た。M.M.Xとタンノル [をもらう]。足はひどくなり、腫れて、あちこちに傷口が開いている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月10-19日

今や約60人が兵舎病で、我々の食事の悪さのために浮腫や全身的衰弱の人が多い。

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月20日

患者の治療に大きな困難 [を感じている]。あの [日本人] 軍曹看護人が、僕がここに留め置こうとする患者を皆診たがり、そしてほとんどをまた炭鉱に送ってしまう。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月22日

ドウ・ローフは、幸い普通に戻った。アンダーソンも多少普通に話すようになった。

レンペ [イキュウ] [兵舎病] が80人、入院が40人=120人=25%近く [戦傷捕虜の内] が、不活動の状態だ。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月24日

最後の荷物は最も重い—そしてこれはまだ最後の荷物でもないのだ！2月23日：アテル・ディエス [悪い日]。[...]アンディ（あの‘狂人’）が目覚め、彼と同室に新しく入った患者を起こそうとした。しかし、起こすことができず、その時、彼の暗い脳髄も、何か異常があることを理解した。‘僕の・・・部屋に・・・死人・・・が居る。『英語』’と彼は隣の部屋に、ひどく冷静に報告した。その通り、39番が死んだ、4時間後には40番がその後を追った：[A.L.]スヘルペニス。1日に二人、そして3番目の患者がその境界線にいる。

偶然にもその午後、日本の炭鉱医師がレンペイキュウ [兵舎] 病報告の時に現れて、いつもはこれはレンペイキュウや入院患者の著しい‘屠殺’という結果を生む。今回も、その予

定だった。しかしラッパルト医師は抵抗した。厳しく、皮肉に、彼の言葉はハッタ医師の面前で響いた。

[ドイツ語で]

‘ムンロ、479番—ひどく衰弱している。’

— ‘労働は?’

‘全く不可能。’

— ‘レンペイキュウは?’

‘不可能!’

信じられないという表情のハッタ医師。[ドイツ語で] ‘レンペイキュウを試してみるか?’彼の言葉はまるで哀願しているように聞こえる。

「ドイツ語で」

‘オーケー、彼も昨夜の男のように死ぬかも知れないし、死なないかも知れない、試してみることはできる。’

ムンロはレンペイキュウ、オースターハウス、レンペイキュウ。ラッパルト医師は患者一人一人のために闘う。彼は歯に衣着せない。その結果: 5人が病院から退院、18人がレンペイキュウ。これにいったい何を言おうか。アンディの人生訓を我々も取り入れなければいけないのか。[英語で] ‘これももう長くは続かないさ!’

オースターハウス

福岡 15

1944年2月29日

僕の足はまたもや素晴らしく腫れ、下痢も栄光の光に満ちあふれ、しかし幸いにも小倉 [病院] にいた頃よりましだ。1日、5、6回に対し、小倉での50回から60回だ(小倉では1日150回まで ‘下って’ いた人たちもいた)。ペラグラはまたもや我々の収容所に御入所だ。皮膚炎と下痢は凱歌を響かせている。我々のほとんどの人達は人生これまで、ここでほど多くの錠剤や粉薬を飲んだことはない。[...]とてつもない量を飲み下している。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月26日

一昨日の夜、ラッパルト医師とドゥ・フリース中尉が日本の収容所長の所に報告に行った。[現在] 107人のレンペイキュウ [兵舎病と] 50人の入院患者、合計157人の病人=全体の3

1. 7%。これは今やいわゆる、窮すれば・・・[道自ずと開く] というやつか？それとも我々はこれ以上の窮状にも耐えられるのか。所長に魚を頼んだ。（[答えは] 天候が荒れていて漁に出ていない。）トーフ！（水が塩辛すぎる！）肉は？（車はすでに数回、ここに来る途中で壊れた。）等々。

[ラッパルト] 医師自身が調子が悪いという以上のものだ。彼が最も重労働をしているかも知れない。朝は10時に約40人の病气報告—診察。その前に入院患者の治療をする。2時にはレンペイキュウの診察。100人もだ！5時にはまたもや炭鉱労働者達の診察、約50人。夜、7時から9時の点呼の後で特殊ケースの治療。気管支炎や肺炎は日常茶飯事だ。（病院には5人の肺炎患者が居る）。[...]僕も今またペラグラになった。

ヘラ

宮田（福岡 9）

1944年3月3日

僕は今、気管支炎から回復中で入院、でもまるで焚き付け用の小枝みたいにやせ細ってしまった。体重がどのくらい有るか分からないが、多くはないのは確かだ。ありがたいことにもうすぐ夏になる。もちろん僕は炭鉱内で風邪を引いたのだ。ところで、僕たち気管支炎患者がここには8人寝ており、6日前には3人が肺炎で死んだ。炭鉱の中ではいろいろな坑道でそれぞれ気温が違い、そのために1つの坑道から他の坑道に行くとひどい寒気が走ることがある。地下水が雨のようしたり落ち、ずぶ濡れになって家路に向かうとき、特に炭鉱の神に挨拶する<sup>100</sup>ために遠回りをしていったりする内に、あちこちで風に吹きさらされ、特に抵抗力が落ちているときには直ぐに肺に来る。僕の場合もそうだった。[...]

とにかく、10番目の死者が出ようとしている。これはほぼ10日に1人の割合だ。[...]ここしばらく、春になるまで僕は1ヶ月は病院に入院し、しっかり回復しなければならない。

オースターハウス

福岡 15

1944年3月10日

収容所内の〔戦争捕虜の〕34.1%は病气だ。

---

<sup>100</sup> ‘娯楽と信仰’の章、1945年7月21日付イエッテンの日記、および‘収容所内の雰囲気／戦後の人生に対する考え’の章、1944年1月15日から1月末付けのファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記よりの抜粋参照

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月20日－3月12日

今日、僕は突然下痢になり、痔になった。それから栄養不良性浮腫で顔が腫れている。いまは収容所内作業員が70人、30人が病人で、炭坑に行っている男達の半分以上は気分がすぐれないが、兵舎病になって飯半分になるのが嫌で、がまんしている。

この休日と、それに続く数日は厳しく冷え込み、我々はなるべくベッドに潜り込んで過ごしたが、それでも暖かくはならなかった。どういうことかということ、夜間シフトから帰ってまた、10時から30分間、点呼場の雪かきをしなければならなかったのだ。その後では暖かくなりようがない。僕は次の日に病気になり、あまりに食欲がなかったので12時間何も食わず、余った飯を煙草と換えてしまった！[...]

僕は今結構沢山のビタミン剤を飲んでいるが（主にヤップに煙草を提供して、買い足したり交換したりしている）、それでも1日15回から20回という頻度の下痢は不愉快で、痔のためにひどく痛む。[...]僕の記憶力はひどく悪くなってきている。数日前には弁当箱をどこかに置き忘れ、どこに置いたのか全く思い出せない。腹が激しい痙攣を起こし、外の寒い便所で全てのガスと水のような便が逃げ出すのをやっとの思いで待ち、その後では毛布に潜ってもとうてい暖かくはならない。[...]

ラップルト医師に何回か頼み込んでAとDの錠剤瓶を手に入れることができ、やっとまたビタミン剤を摂る事ができるようになった。今は全490人の内、105人が兵舎病人で47人が病院にいる。

ヒルフマン

福岡 9

1944年3月11日

しばらく前から気力が出ない、下痢で、足が腫れ、その上シヌシチス・フロンタ [リス] [前頭洞炎] だ。すでに多くのビタミン製品を使ったが効果がない。数日前から、自分自身に1日1個の卵を許可し、ビタミンB1の注射をしている。<sup>101</sup>

---

<sup>101</sup> 食品中の長期的ビタミンB1不足は脚気の原因となる。ビタミンB1の投与は神経炎症に効果がある。(Coelho, p851)

オースターハウス

福岡 15

1944年3月14日

昨日という日はまたもや出来事の多い日であった、少なくとも戦争捕虜にとっては。今日の午後、[M.A.ファン]ヘッキング・コールンブランダー、42番に最後の別れを告げた(昨日肺炎で死亡)。全ての将校、日本の司令官、そして数人のヤップが前庭の棺の周りに立った。‘キオツケ、ケーレー’日本の司令官が[言った]‘ゴッド・ブレス・ヒム。メイ・ヒー・レスト・イン・ピース。[彼に神の恩恵有り。やすらかに眠れ。]’スレウ中尉は‘我らの父’を読み、我々皆で復唱し、別れの歌として[オランダ国歌‘ウィルヘルムス’から]‘我の盾であり信頼の・・・’[の章]を唱った。

そのせいで昨日、4箱ずつ小包の入った赤十字の箱が25個来たのか？そのせいで我々は今日から一人3個の[ビタミン]A-B-D錠剤をもらえるのか？そのせいで280個入りの卵が6回収容所に入ったのか？(そこから僕はすでに4回、2個ずつ消費した。)[...]

三日前、レンペイキュウの病気報告の時刻(2時)頃になって、ラッパルト医師、ハッタ医師、そしてヨシカワの居る医務室でなにか大きな騒動があった。その後およそ100人のレンペイキュウの診察があった(我々のエネルギーな医師のおかげでこの数に達しており、そのために彼はヤップの覚えがめでたくないのだ)。およそ18人がハッタ医師によって炭鉱に送られた。残りは収容所ケイギョウ、またの名を収容所内作業員に、‘軽い’と‘重い’に分けて昇格(あるいは降格—これは見方による)になり、およそ20人が実際にレンペイキュウに残り、これらの人達は本当に病人だ。著者は軽いケイギョウに入れられており、毎日2個の卵を取り上げられ、その代わりに‘トーニョー’(=大豆乳)になった。次の日には病室の55人が処分された。本当の病人として18人が残り、およそ10人が直接‘軽いケーギョー’になり、残りはレンペイキューだ。あちらこちらに移動で忙しかった。

ヒルフマン

福岡 9

1944年3月16日

数日の間にデング熱<sup>102</sup>が4件発生した。最近ではエヌレシス・ノクチュルヌ[夜尿症]が多くなった。シンクター・ヴァーチカル[尿道口括約筋]の奇妙な機能障害だ。

---

<sup>102</sup> デング熱はビールス性の病気で日中に活動する蚊によって媒介される。症状は風邪に似ており、高熱、眼球後部の激しい頭痛、筋肉痛、関節痛、発疹を伴う。症状は1、2週間で消えるが、その後数ヶ月間、疲労感を残すことがある。何度も感染すると死に至る可能性がある。(S.P. Smits著、*Hoe blijf ik gezond in de tropen* [熱帯で健康に過ごすには]。(アムステルダム、1990、p 67-68)

ヒルフマン

福岡 9

1944年3月21日

アンケートで次のような結果が出た（視力に関して）。

調査対象：327 [人]。このうち、外から異常が見られて痒みのある者：87，異常の見られない者：18。

眼が悪くなった：137

耳が悪くなった者：37

めまいのする者：135

筋肉痙攣：112

収容所足（感覚障害）：41

収容所足（浮腫）：26

へレ

宮田（福岡 9）

1944年3月22日

僕はまだ病院にいる。気管支炎はほぼ終わりだ。まだ時々、胸に痛みがある。これの格式張った名前はヌーモニア [肺炎] だ、と僕は思う。回復するまでに、少なくともなんとか歩けるようになるまでに1ヶ月かかる、嫌な病気だ。最初の月には炭鉱には入らないだろう。そうなるのは、4月の終わりか5月の始めであろう。

オースターハウス

福岡 15

1944年3月23日

43番：[G.J.] フランクハウセンは昨日、我々の元から、行った者は誰も帰ってこない別の国に旅立った。原因：肺炎（まだ重体が3人、診断：肺炎）。全員が栄養失調と全身衰弱のためだ。これはラッパルト医師の意見で、この意見を包み隠さずヤップに伝えたところ、即座に職から外され、そのために今では我々はネルンセイ医師という‘馬医者’、英国人の医者で、[これまでは]医療に関わっていなかった人の温情にすぎることになった。彼の診察でレンペイキュウの数が驚くほど減ったという事実が、全てを物語っている。[...]

今丁度、日本の‘医者’が任務に就いているという知らせがあった。これはつまり、



ケイギョウ [収容所内労働者] は病气報告に行かなければいけないということだ。ショッキングな知らせがもう届いた。10人の内7人は炭鉱に送られることになった。僕も行って見てこよう。

そしてここには‘ラッパルト医師計画’がある。戦争が終わったら（‘それまでにはまだ2年かかる’とスレウ中尉は言う！）我々皆（オランダ人、英国人、オーストラリア人）で協力して、彼にふさわしい敬意のあかしを表し、彼を勲章候補に推すようにするのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年3月13-31日

昨夜、[ファン] ヘッキング・コルンブランダー、昔の砂糖農園業者<sup>103</sup>で、この前炭鉱で2本の指先を失った男が、気管支炎で亡くなった。最近ここでは、命は深夜のろうそくのようなようだ。ただ単に、全く無気力で、生き甲斐や、そのために闘うものが全くなく、まるで人生の目的を失ったようだ。これはチャンギでも、とくにインドネシアから来た男達がそうだった。ジャワから離れたこと自体が打撃で、英国人も驚いたことに、最初の、それほど致命的でもない赤痢に襲われてバタバタと死んでいった。[...]

昨日は体重測定があり、僕はまた3kg痩せた。今や60kgだ。下痢と3週間の兵舎病（食事減少）、それに寒さが、もちろんその原因だ。6週間前に計って以来、皆3kgから5kg減った。[...]3週間の兵舎病で3kg体重を失った後の、最初の炭鉱の日はひどく辛く、僕はまるで夢の中のようにぼーっとして上まで自分の身体を引きずってきた。ひどい下痢のために内臓が疲弊し、周りにはそれを支える脂肪が無くなってしまった。両手を下腹に押しつけて歩きたい、そうすると痛みが和らぐからだ。

スレウ [中尉] のところにも、この数ヶ月急激に体調が悪くなってきていて、彼が僕のために、例えば僕を炊事場作業に回したりして、なんとかしてくれなければどのような結果になるかも分からない、と言いに行った。今はまだ少しは力が残っているが、全く力つき、そこに風邪や肺炎などが来たら致命的になりえる。スレウはもし医師がそのような指示を出せばよいだろう、といった。医師もそれに同意したので、今や僕は空きが出るのを待っている。これで少し元気が出た。[...]

現在は、1日ビタミン剤が3つ、朝食時に出る。その上時にはひどく寒くなり、フランクハウセンと[G.K.]ストレイフが、この収容所の42番目と43番目の被害者として、数日間の病気の後、肺炎で亡くなった。肺炎用の注射は、日本人も前線で必要だからという理由で充分支給されておらず、ラッパルトが要求し続けたところ、彼は日本人から‘セルフイッシュ [利己的]’だと、解雇されてしまった。今や病人はネルンセイ [医師]、別名‘自転車修理屋’にかからな

---

<sup>103</sup> マールテン・アブラハム・ファン・ヘッキング・コルンブランダーは、戦前チェリボンの西にあった砂糖会社カデヒパーテンで働いていた。

ければならない。書類上では急に病人が減り、これは多くのレンペイキューたちが収容所内の軽作業や重労働に回されたからだ。これは来るべき検査に関係しているかも知れない。[...]

顔の浮腫は引いてきた、僕もだ、しかしまだ足は腫れ上がっている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月1日

単純な水分摂取制限と‘アペゼ’錠剤（ビタミン ABCD）の組み合わせで、足の浮腫が治る例が幾つもあった。排尿によってビタミンが体外に排出され過ぎていたということだろうか？それで水分制限が直接、間接に効いたのか。つまり、直接には水分を与えないことによって浮腫が元に戻り、間接にはビタミンを体内に維持することによって原因となった病気を治したのか？

オースターハウス

福岡 15

1944年4月8日

[A.M.]ファン・リフテンは我々の元を去った。肺炎。[F.]バッカーは一昨日亡くなった。肺炎。我々は、これら全てをひどいと思うことを止めた。これらは徐々に 戦争捕虜収容所の通常の出來事に属しつつある。ああ、それに547人の内で46人の死亡者数は、新入りのアメリカ人看護師二人が言っていた、フィリピンの収容所に比べれば、それほどひどく多くもない。そこでは2万人の収容所人口の内6千人が死んだ。赤痢。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月9日

デング熱の症例はなくなった。最近非常に多くなった痒みはシラミによるものようだ。幸いにもここにはまだデリス粉末剤<sup>104</sup>がある。先回の検査（4月1日）ではおよそ20例のフルンケル [せつ腫症] があった。

---

<sup>104</sup> デリス粉はドクフジ属のデリスの根から作られる殺虫剤。

ヒルフマン

福岡 19

1944年4月18日

この数日間、回復期の患者の間で、本当の一斉検挙が行われ、多くの人はまだ早すぎるのに、炭鉱に送られた。確かな原因のある症状で診察室に来る人達の多くが、それでも働き続けることを強要されている。[...]3週間前、日本の医師が2人の看護婦を助手にして痔の手術を2回行った。時代遅れのやり方だったが、非常にうまくいった。しかし術後治療はひどくお粗末だった。患者は[今]大体回復した。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年4月1-19日

スレウ [中尉]によれば、僕は炊事場には行かない、あれはどうもエープリルフールの冗談だったようだ！[...]収容所ではファン・リフテンが肺炎で死亡した。[...]収容所内で、21歳のバッカーが死亡したと聞いた。

僕はいま、体力が衰弱し、炭鉱の作業現場に2時間かけて行ったり、また2時間かけて戻ったりする、その行程だけで死ぬほど疲れてしまう。翌日になっても回復せず、その上痰を伴った激しい咳が出る。顔もまた腫れていることもあって、ラッパルト医師は僕にレンペイキュウの申請を出すことを勧め、4月14日にその許可が下りた。夜2倍の量を（弁当を含めて）続けざまに食べるのは祭りのようだった。 [...]

僕は今は軽い収容所内作業員で、殆ど働く必要はなく、食事が少なくなったこともあまり気にならない。今だにここには約150人の病人と収容所内作業員が居る。 [...]

それぞれのグループの中で最強の男と言われていた[G.H.F.]スネイダーも、[A.G.D.]ヘンゼル同様に今では兵舎病だ。分隊 [作業班] は今や始めの21人の内の3人しかいない！これは[H.]プリンスにとっては致命的で、というのもブルハルトは彼を支える僕たちが居なくなったのでインドネシア系の男独特だがー、ヤップの怒鳴り声の第一声、最初の殴打でもう直ぐに、自分を重労働に追い立てるからだ。彼らは今や4台の台車に積み込み、掘り、爆破しなければならず、彼 [プリンス] が疲れ切って帰ってきたとき、どうであったかと我々が聞くと、突然泣き出してしまった。ナーバス・ブレイク・ダウンの一種だ。僕は彼のためにネルンセイ医師のところに行き（彼は僕が彼を起こしたので怒っていた。彼はしかも朝8時15分にはまた寝てしまうのだ）、プリンスについて説明し、彼に木札<sup>105</sup> [と] アスピリンをやってくれと頼んだ。病气報告

---

<sup>105</sup> プリンスが兵舎病であるという印。

の時間になったとき、プリンスは行きたがらず、僕が彼のために行き、プリンスはまだ自分に自信が無く、自分のことを喋るとまた泣き出してしまうのではないかと恐れているのだ、と説明した。幸い僕は、彼のために木札とアスピリンをもらうことができた。

午後には僕たち全員が病気報告に行かなければならず、58人の兵舎病人が追い出され、その内の35人は新しい炭鉱ケイギョウ [回復期の兵舎病患者] のグループに入れられた。ラッパルト医師が今朝僕にそうなるだろうと言っていたような変化は起こりそうもない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年4月20-30日

今日はまた突然、僕たちが病気報告に呼び出され、今度は22人が炭鉱ケイギョウで仕事をするためにより出された。僕も含めて殆ど全員が、あさってはまた炭鉱に入らなければならない。僕の [浮腫によって] 太った顔が、健康そうに見えたのだろう。僕はヤップの看護人のところに行ってもう一度試してみようとしたが、彼はまだ3人受け入れられるのだが僕の試みは成功しなかった。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月22日

[収容所] 番号260, [W.F.A.]コップスハール軍曹はブルーリチス [胸膜炎] とエンピエーム [胸腔に膿が蓄積する病気] で、手術のため病院へ。何ヶ月も病気だ。7回の穿刺法で3.1/2リッターの膿を除去した。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月28日

[今日午後] 5時15分にJ.M.フロレンチヌス兵士、[収容所] 番号365が、クルペウズ・ヌーモニアで死亡した (11番目の死者)。

へレ

宮田（福岡 9）

1944年4月29日

僕はまだ病院で寝ている。寝ているという言葉は当たらない、まだ全然気分は良くないのだが、一日中菜園で働いている。今日は仕事中にめまいがし、頭痛がしてベッドに潜り込んだ。どうとでもしてくれ、もう少ししたらアスピリンをもらいに行こう。[...]しばらくの間炭坑に行かないで済むのを心底望んでいる、そしたら3ヶ月間 [炭坑に行かずに] 頑張ったことになる。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月1日

この数日はインフルエンザの症例が大変多く、その殆どは3日から5日かかり、およそ38, 5度の熱が出て、軽いカタラールの症状<sup>106</sup>が出る。収容所長は所内作業員の一斉検拳を始めた。[彼は] 病人も含めて殆どの人達を炭鉱に送る。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月1-10日

[ヤン] ル・コントは丁度雨が降っているときにエクストラの下着を着ずに炭鉱を出て風邪を引き、何日か熱を出していた。彼は僕を呼んでバラン [荷物] をここの友人達に遺すという遺書を書き、ばかばかしい競売やくじ引きにならないようにした。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月13日

[今日の午後] 1時半に死亡：R.ミデンドルフ、兵士、戦争捕虜番号58, 過労、プレウリチス・エクスタチヴァ<sup>107</sup>、ヌーモニア・クルポサで（14人目の死者）。最後の3人の死者は3人とも

---

<sup>106</sup> 粘膜の炎症で痰が出る。

<sup>107</sup> 湿性胸膜炎。

完全にやせこけて疲れ果ててから病気になり、そのために全身の抵抗力が全くなかった。この3週間はインフルエンザが流行したが、かなり軽くすんだ。死亡者たちはインフルエンザに感染もしていたかも知れないが、しかし悪化したのは3人とも痩せていたことと過労のせいだ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月17日

午後3時20分に W.Ch.マルクス、二位軍曹がインフルエンザ、気管支炎、それに下痢のため死亡した（16番目の死者）。戦争捕虜番号75。一昨日、死亡者が出たことから、スズキ医師と話しをした。僕は彼に、ここにいる人達は皆自分が死ぬのではないかと恐れている、と言った。スズキは僕に、死亡者が出る原因はどこにあると思うか、と聞いた。私：一つには食糧不足のため、またもう一つには重労働のための過労による。そのために患者は感染に対する抵抗力がない。

スズキ：日本人は1日320グラムしか米をもらわない。おまえ達は710だ。

（実際にはこれは650）

私：しかし君たちはおかずが沢山ある。

スズキ：我々はおまえ達よりずっと少ないが、‘精神力 [ドイツ語で]’がある。

私：しかし、カロリーも必要だ！

スズキ：日本人は炭鉱でも一人1日2300カロリーしか必要としない。

私：我々は3500必要だ。

つまり、話しはいつものように途切れてしまった。このような話し合いを、我々は様々な言い方で、全ての関係者達とした。その結果としていつも何かの、全く目的に添わない処置がとられる。ビタミン支給とか、我々の健康に留意するという演説とかだ。‘君たちは健康で、強靱な身体でジャワの家族の元に帰らなければならない。’これはしかし、その同じ夜に全軍を氷雨の中で30分間待たせることの妨げにもならない。炭鉱の‘ハライ’の仕事も重労働過ぎる。そこでは常にしたり落ちる水の下で仕事をしていて、すぶ濡れだ。その場所から殆どは病気になる。[...]この20日の間に、6人が死んだ！収容所内の雰囲気は落ちこんでいる。次はいったい誰か、と自問してしまう。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月22日

赤痢に対する種痘（5月14日に最初の接種；今日は2回目）。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月23日

人々の‘通常の’体温や心拍が下がったようだ。多くは体温36度になっている。昨日足がだるいと言って来た人は体温が35度以下だった。心拍は40から50のことが多い。これはおそらく蛋白系食品が少ないことから来ているのであろう。多くの人々は、そのためいつも寒さを感じている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月7-14日

8人を除いて、全ての兵舎病は廃止され、[Th.A.]セルダーベークと[F.J.]スホットホルスト[軍曹]は病院から退院させられ、収容所内作業員にさせられた。ヤン・ル・コントは病気になった、きっと我々が受けた赤痢の注射のためだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月15-18日

昨日は僕は63kgの体重だった、つまり1.5kg減った。おそらくは水分[浮腫の]のためで、他の男達と同じで、僕はこの方がずっと調子がよい。

ヒルフマン

福岡 9

1944年6月21日

新しく来た人達<sup>108</sup>は殆ど全員がマラリアや、赤痢、脚気に罹ったことがある。彼らはそれでも、この3ヶ月間[タイで]結構良い生活をしていた。<sup>109</sup>これ以降は昔からのグループをA、新しい

---

<sup>108</sup> 6月17日に到着した100人。‘輸送と宿泊’の章、1944年6月18日付け、ヒルフマンの日記抜粋参照。

<sup>109</sup> 日本に来る前の3ヶ月間、このグループはビルマーシャム鉄道建設作業の辛勞から回復するための休養キャンプに居たようである。

グループをBと呼ぼう。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年6月21日

ロブ・ミデンドルフがここで死んだ<sup>110</sup>、栄養失調と疲弊のためだ。僕は彼の埋葬を手伝った。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月21日-7月7日

この頃またひどく疲れ、また一度ラッパルト医師と話しをした。彼は薬をくれた。彼はそこから奇跡が起きると思っているのか、それとも単に暗示療法か？ラッパルトはもちろん炭鉱に入ったことは一度もなく、現在のように炭鉱医として、そこで何が起きているかと言うことに対する十分な理解が無い！一度は、12階の仕事をさせられ、（100メートル以上の深さだ）そこは換気が最低で、気温は108ファーレンハイト、我々は日本のふんどしという不十分な服装で、座って食事をしているときでさえ汗は滝のように流れた。僕はまた鼠蹊部の湿疹に悩まされ、病气報告の時にラッパルトに見せた。彼のアドバイスは：これは暑さから来る発疹だ、なるべく汗をかかないようにしなければいけない！

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月4日

最近Aの人々の中でおよそ5人のエリテマ・ノドサム<sup>111</sup>（ペリフェレピチス・ミグランス<sup>112</sup>）に最も近い人々を見た。下肢におよそ5cmほどの大きさの斑ができ、化膿して痛み、赤くなり、少し腫れ、軽い熱、リウマチのような関節痛、特に足の関節、軽い全身的不快感。[...]

2週間前にアメリカ赤十字社から、大量のマルチ・ビタミンと麻酔錠剤が幾らかと、アテブリン等の入った2つの薬木箱を受け取った。合計4つの薬木箱が赤十字から来たことになる。

---

<sup>110</sup> この章 1944年5月13日付ヒルフマンの日記抜粋参照。

<sup>111</sup> 主に下肢にできる、痛みをともなう赤黒い結節。結節性紅斑。(Coelho, p247)

<sup>112</sup> 動脈周辺の細胞、あるいはその外側の層に起こる、移動性の炎症。(Coelho, p599-600)



ヒルフマン

福岡 9

1944年7月6日

何人かのハーモルホイド [痔] とプロラプサス<sup>113</sup>の患者がおり、やせ細ったことから起こる症状のようで若者も老人もいる。すでに6人が、日本のスズキ医師による手術を受けた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月8-12日

ひどく暑い、炭鉱の中も暑く、皆風疹にかかり、シラミにやられている、ノミのことは言わないとしても。

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月12日

全収容所住人の視力検査。全部で469人の検査が行われた。両目とも正常な人が何人も居た、279人。68人は片目は正常でもう片方が異常。122人は両目とも視力1.0以下だ。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月20日

僕の足はまた怪しくなってきた。丁度包帯を取ったら、膿があらゆるところから吹き出ている。なるほど彼らは僕を炭鉱には入れないが、しかし楽しめるわけではない。特に昨夜の病気報告の時のように、明日の‘例の’検査のために、包帯室にきちんと積み上げられているために、薬も包帯も使えない、などという時には。<sup>114</sup>

---

<sup>113</sup> プロラプサス・アニは直腸粘膜が肛門からはみ出す病気。(Coelho, p640)

<sup>114</sup> ‘収容所組織／西洋人と日本人収容所幹部’の章、1944年7月20日と27日付のオースターハウスの日記抜粋参照。

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月25日

我々の兵舎病患者が日本の一斉検挙にあい、多くは炭鉱に送られた。病人が多いのは確かだが、それは誰のせいだ？ 23人が病院に寝ており、41人が兵舎病、21人は回復期か衰弱、そして10人の籠作りたち（これも弱っている人達）が居る。<sup>115</sup>

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年7月30日

僕はもう2日間も、僕の臀部のねぶとのために兵舎病になっている。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月30日

ヤープはまたレンペイキュウ [兵舎病] になり、その結果としてまた病室に寝ている。‘さあ、熱がないのならレンペイキュウにはできないね。’ 体温計はしかし37, 2度を指し、そのためにネルンセイ医師はやっと冷静な良心で、弱り切り、炎症を起こした脚に休息を与えることができた。（これだけ実直だと、患者にとっては重荷で、時には危険でさえ有る。）

ウェストラ

福岡 17

1944年8月3日

風疹やニキビの発疹がある。[G.]プラス医師のおかげで兵舎病になれた。僕はこれで3日間宿舎にいる。それ以外は健康だ。

---

<sup>115</sup> ‘仕事’の章、1944年2月1日付け、ヒルフマン日記抜粋参照。

ヒルフマン

福岡 9

1944年8月3日

今日、病人は全て日本の医師のところに行き、彼に何らかの変更をさせられた。誰かを宿舎に留め置くことは、私にはできなくなった。<sup>116</sup>

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月5-10日

鼠蹊部にまたもや湿疹ができ、ワカモト錠を買う努力をしようと思う。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月11日

[今は] 病院に150人の病人がおり、80人は収容所内労働者で、兵舎には50人のマラリア患者が居る。君たち、これを読む君たちは、このことのはっきりした意味を判断できるか？僕たちは嵐の直中に立ち、地に足をつけているのも困難な状態だ。君たち、岸に立っている君たちはこの嵐が本当にこんなに激しいものなのか、それとも僕たちが真ん中において幻想を見ているだけなのか、教えてくれるかい？日本の戦争捕虜収容所で784人中280人が病気だというのは多いのだろうか？ああ、もちろんそんなことはない。タイではもっとずっとひどかっただろう？

ウェストラ

福岡 17

1944年8月13日

僕は到着時よりも2キロ軽くなった。今は60キロだ。ノンプラドック [タイの] では65だった。発疹と吹き出物のために10日間宿舎にいた。後から考えればとても良かったと思う。初めて、自分がどんなに疲れていたかが分かる。

---

<sup>116</sup> 日本の看護人の手紙がなければ仕事を休めなくなった。‘日本人の抑留者に対する扱い’の章、1944年7月31日と8月3日付け、ヒルフマンの日記抜粋参照。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月16日

近づきつつある8月18日の日本の大佐による‘視察’<sup>117</sup>のために、また徹底的な‘大掃除’が病院と収容所内作業員に対して行われた！ヤープは8月12日から、また収容所内作業員になった。しかし足はまだひどく、歩くのはまだ拷問で、スレウ中尉（今やケイギョウ [回復期の兵舎病人（収容所内作業員）の‘王様’] はそのため、僕を内緒で兵舎休養にしてくれた。

ヘラ

宮田（福岡 9）

1944年8月17日

指の炎症で、今日また兵舎病になった。僕は炭鉱もそれほど嫌ではなくなった、食事も結構なものだ。激しい仕事にも慣れている。今はまた兵舎病の食事になった。今は、今日までの経験の中で、最もひどいものだ。これほど米が少ないことは今だかつて無かった。それでもまだ仕事もしなければならない。今日は片足で、下水清掃員をやった。汚物溜から汲み出して、畑に持っていくのだ。僕の筆跡から僕の手がよく動かないことが分かるだろう。手はひどく腫れている。しかしまあ、これももう長くはないだろう。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月16-20日

ラップルト [医師] からビタミンA&Dを買うことができ、その後で、炭鉱の中でワカモトも手に入った。そこら中にできている紅斑や吹き出物のために、また沢山の錠剤を飲もう。体重は65kgから62kgに減った。

---

<sup>117</sup> ‘収容所内組織／西洋人と日本人の収容所幹部’の章、1944年8月19日付け、ヒルフマンの日記抜粋参照。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月21日

また体重測定があり、その結果著者は尊敬すべき70kgの重さであった（読み上げ、書きとめよ、七十キロ）。（先月は68, 5kg）これは確かにここでは珍しい体重だ。僕以外にもこの収容所内で70kgを越える男が5人居たら、驚くべき数だ。[...]

血液検査！この住人全員の血液型が測定された。（僕はA型だ。）

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年8月28日

僕は[8月]29日の夜にまた炭鉱の夜間シフトに行く。また炭鉱外の良き日々であった。炭鉱の外にいる1日1日が貴重だ。僕の筆跡からも分かると思うが、僕の指も良くなった。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年8月28日

テガル出身の[Th.J.]ボッシンク氏が亡くなった。<sup>118</sup>手術後に感染し、寝ていて肺炎になった。死体は収容所の外の火葬場で焼かれた。僕はその準備をし、葬儀に付き添った。彼が全てに気付いていて、全てを理解していたことは、僕が彼の亡くなる直前に彼を訪れたとき、彼が‘我らの主を’[聖餅]と言ったことが証明している。彼は長い間信仰とは無縁だったが、収容所に来てからまた始めたのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月26-30日

帰ってきたらボッシンクがダブルヘルニアの手術の後で寝ている間にかかった肺炎で亡くなっ

---

<sup>118</sup> オースターハウスの日記によれば彼は8月29日に亡くなっている。

たと聞かされた。ヤン・ル・コントと僕は、誰かが死んだと聞かされた時に、おそらく我々全員が感じる微かな安堵感がいかに恥ずべきものであるかについて話し合った。多分その深層心理には、我々は幸いにもこんなに強く、最後まで生き残れるのだという思いがあるのだろう、たとえ悲しく思い、そのために思い悩んだとしても。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月31日

この戦争が要求した何十万もの死者に対して、我々の収容所がその膨大な数にまた一つ付け加えた死に関して語るなど、殆ど馬鹿げて聞こえるだろう。ボッシンクが8月29日に、二重ヘルニア（炭鉱内で起こった）の手術の後、安静に寝ていて罹った肺炎のために亡くなった。僕らは彼が大好きだった。落ち着いた、物静かな人物だ。オランダに夫人と何人かの子供を遺している。後何人なのだろうか？ブルンスは、戦争捕虜として死ぬのだろうか？治療方法のない癌患者として、祖国から遠く離れて死を待っている彼も？

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年9月17日

今日は休日、またもや兵舎病、もう二日間もそうで、臀部にできた9つのねぶとのためだ。3つの大きなのと6つの小さな奴。僕は炭鉱労働者というより兵舎病人であるようだ。老人のような衰弱であり、日本の忌々しい食糧が徐々に効いてきているようだ。僕は幽霊のようで、布巾のように力が出ない。

ルーゲ

福岡 21

1944年10月24日

最近腹痛の患者が多い。今日は36人が粥だ。どんどん寒くなる、大体8度くらい。全員が足を濡らして炭鉱から帰ってくる。炭鉱の中は結構暖かい。そのため、炭鉱を離れるときの変化が、多くの人にとっては急激すぎる。その結果：多くが腹を壊し、風邪を引く。

ヒルフマン

福岡 9

1944年11月15日

我々の歯科医、[R.]スタム軍曹はこのすぐ近くの‘歯医者’によく行き、すでに幾つかの矯正具を作製した。眼鏡はこの頃はまあまあ簡単に手に入る。つるは7, 50円だ。眼鏡全部で15から22, 50円で、比較的、とても安い。矯正具毎の義歯（スタムが作ったもの）は15から20円で、つまり材料費だ。

医薬品は手に入れるのが難しい。ダゲナン、ヨウ素やヨード化合物は全く無く、アスピリン、デルマトル、ビスマスは少々。アルコールはなく、ワセリンももう無い。包帯：1m毎に署名が必要で、ほんの少しずつ支給され、使用後はまた返さなければならない。絆創膏は手に入らず、我々は絶縁テープを使っている。

ウェストラ

福岡 17

1944年11月20日

ここでオランダ人が二人亡くなった。（その内の一人は[H.W.]スパニヤード）

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年11月26日

象足病<sup>119</sup>で病院に入院、そこで僕はたっぷり14日間大人しくしている。病院、僕が入院していたのはずいぶん昔だ。長所はしっかり休息できることだが、しかしかなりの空腹に耐えなければならない。病院では全てティム食〔蒸した米〕で、ヤップは規則を決めて、マグカップ山盛りの飯の変わりに、カップ丁度の粥にした。しかしまあ、休息にも価値はある。病院はほぼ満員になってきている。毎日2人か3人が退院し、そして毎日新しい患者が来ている。殆どは脚の怪我か化膿だ。[...]ここ病院では何にも煩わされない。点呼もなく、食べ物飲み物は時間どおりに来、後は全て自分の時間だ。

---

<sup>119</sup> 象病は慢性皮膚病で高熱発作を伴い、特に下肢や生殖器の皮下結合組織に水が溜まって浮腫となる。(Coelho, p 225)

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年11月27日-12月2日

このところ3番目の肺炎による死者が出たことの影響で、今日は初めて炭鉱にヤップのコートを持っていくことができた。クノピー[H.B.E.クノッピン]、[E.J.]コーラー、そして今[J.]プリッセ、全員シャムグループの第7カタ[坑道]だ。足の傷のために脚が腫れあがってしまったプリンスの見舞いに病院に行って来たが、そこで僕は、健康で炭鉱に行けることがどんなに幸いなことであるかという事に気が付いた。脚気に罹った英国人は風邪でゼイゼイ息をしながら便器に座るのに助けを必要としていた。プリッセはうわごとを言いながら死にかかっており、これが全て十分な看護もない中でなのだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年12月2日

我々の死者の数は57に増えた。一人は炭鉱事故で、肺炎が沢山。今やなんと軽々しくそれをやり過ぎてしまうことか！

へレ

宮田(福岡 9)

1944年12月5日

また病院から退院し、後数日は兵舎病だ。まだ分からないけれど、あまり長くはかけず、また炭鉱に潜ると思う。もう数日間様子を見よう。

ルーゲ

福岡 21

1944年12月10日

病人の数はもうほぼ10%位しかない。マラリアはもう殆ど無くなった。



ウェストラ

福岡 17

1944年12月12日

首にねぶとができ、そのために1日兵舎病だ。[...]僕は健康で気力があり、心配する理由は全く何もない。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月13日

病人の数は増え続けている。病院は満員だ。今や兵舎病が増え始めている。腹の病気、インフルエンザ、腫れ上がった脚が多い。高熱が続き、チフスの症状ではないのだが、しかしそれらしい症例が幾つか有る。試験室での検査は不可能。症状：激しく上下する体温が、およそ12日間、その後3日間熱は出ない。軽い下痢、細く、黄色で血や粘膜は含まない。気管支炎。舌は少々チフス舌に似ている。感覚は犯されていない。皮膚は蠟のよう。(他の原因かも知れない：軽い皮膚浮腫か?) 脾臓は触診できない。肝臓：特記すること無し。食欲減退。[...]全ての患者は1ヶ月前にチフス/パラチフスの種痘を受けている。ロゼオラ<sup>120</sup>は見られない。長期的な高熱の割合には患者は衰弱していない。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月14日

我々の仕事に器具が不足していることは特徴的だ。1年間ここに居て、まだベッド用便器も室内用便器もない。我々は一種の室内便器を作り、それはヘルメットを逆さまにしてそこに排泄するものだ。我々が持っていたガラスの尿尿瓶は壊れ、新しいものは来なかった。患者は空になったミルク缶に排尿している。今、我々は木箱を無理矢理もらったセメントで覆って便器として使うようにしようとしている。

---

<sup>120</sup> 小さな、赤い斑点で血液によって起こるのではなく、指で押すと消える。チフスや、種痘の後などに表れることがある。(Coelho, p 691-692)

オースターハウス

平戸（福岡 1）

1944年12月20日

我々の4人の医師—英国人2人とオランダ人2人—がここでひどく原始的な、木の皮とストローでできた病室の中で、どのような器具を使って仕事をしなければならないかは、悲しむべき状況だ。これまで10日間で11人が死んだ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月24日

今朝、およそ1時頃、突然C.W.ファン・デン・フレイフーフ〔憲兵長〕が死んだ。[...]考えられる死因：衰弱による心臓停止。患者は下痢で、昨夜も汚れたズボンを浴室で洗った事で、報告が上がっていた。外観検死：特記すること無し。痩せた男で、外傷無し、目は閉じている。死に抵抗した跡はない。毒物は発見されなかった（22番目の死者）。

今日の午後4時半に〔肺炎で〕死亡：[...]ロビン・オリーヴ、ランドストルム市民軍兵士。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年12月25日

最近は痛烈に寒く、クリスマス前の暗い日々だ。炭鉱がかなり暖かいのは良い点で、24時間中10時間は夏の気温の中において、残り時間の内の8時間は毛布の下にいる。最近はひどい当たり時だった。昨日は2人が死に、この1週間で4人立て続けだ。その内一人は朝テンパチャ〔寝床〕で死んでいるのを発見された、眠りながら死んだのだ。彼にはもう生きる気力があまりなかった。こうしてこの冬にはもっと続くだろう。僕は尿や便を我慢できなくなっている。排尿していると後ろからも同時に出てくる。さらに、トイレには走って行かないといけない、そうしないと脚を伝ってくるからだ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月26日

今日の午後4時15分に病室で突然死：ノールトホールン、ヨハン・コルネリス、[...]1897年4月14日生まれ。患者は慢性的アメーバ症<sup>121</sup>患者だった。しかし、最近は、痩せていたとはいえ、とても順調だったのだ。トイレに行くために立ち上がり、そのまま崩れて死んでしまった。死因：これまで耐えた疲労と衰弱のため（24番目の死者）。

数日前にパルク・ダヴィスのサルファダイアジン錠剤1000錠入りの瓶が‘ボリス’[ある日本人のあだ名]の机の上にあるのを見た。非常に喜ばしい。どうやらこれは我々用だったようで、ボリスもそれほど悪い奴ではない。すでにオリーブのために28錠受け取った、すでに死亡してしまったが（12月24日を見よ）。

ただ、これらの、どうやら赤十字から来たらしい薬品がそのまま我々に渡されないのは奇妙だ。しかし、この面でも我々は悪い待遇ではない。27人の新規到着者達<sup>122</sup>は彼らの前の収容所[福岡1]（捕虜600人、オランダ人医師2人（[J.F.]ドゥ・ワイン<sup>123</sup>と[H.]エンシング）、イギリス人医師一人、アメリカ人医師一人）では、アスピリン1錠にも日本の医師の許可が必要だと言っていた。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月2日

僕は快活で、気力があって、快調だ。痔が少々気になるが。結構痛い。後でちょっと医者に行つてこよう。ほんの少しのことでも、僕は‘薬’に向かう。危険を冒さないのだ！

---

<sup>121</sup> 脚注180参照。

<sup>122</sup> ‘輸送と宿泊’の章、1944年12月3日付けヒルフマンの日記抜粋、および1944年12月5日付けヘレの日記抜粋参照。

<sup>123</sup> J.F. ドゥ・ワインは1947年に*Deficiëntie-verschijnselen bij krijgsgevangenen waargenomen bij langdurige ondervoeding in krijgsgevangen-kampen te Batavia en Fukuoka (Japan) gedurende de Japanse bezetting van Nederlandsch Oost-Indië (1942-1945) in het bijzonder over haematologische bevindingen bij pellagra sine pellagra* [日本占領下蘭領東インド(1942-1945)のバタビアと福岡(日本)における戦争捕虜間の長期的食糧不足状態に観察される栄養失調性障害、特にペラグラ・シヌ・ペラグラでの血液学的見解。]というテーマで博士号を取得した。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月4日

全員が、今日下痢の治療及び予防薬としてニンニクを一片食べさせられた。日本人から見ると下痢が多いのだろう。昨日、兵舎病人に聞いたところによると、病室には下痢患者が2人居る。このような極端なことはよくある。去年は突然、全員帰宅後に過マンガン [溶液]<sup>124</sup>でうがいさせられた。そのためにコンクリートの箱が作られたが、始めから漏り、しかし今でも浴室の前に説明書きと共に鎮座している。うがいは3日以上は続かず、それ以降は関心が無くなった。同様に1年前は軍隊にビタミンが支給され、そのために‘アペゼ’錠剤の木箱が三つ来た。全員が1日2錠もらった（普通の適量は20錠なのに！）。その時には、本当に必要としている何人かの患者に全適量を飲ませるため、我々は結構な量を秘密に持ち込んだ。この錠剤はおそらくよく知られたワカモト錠剤と同じで、ビタミンB（1？、2？）を含有しているのだろう。ビタミン剤が終わったら、日本人のこれに対する関心も終わった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月8日

私の体重はほぼ70kgに保たれ、戦前の体重と同じだ。それでも軽い脚気に罹っていて脚が少し腫れ、いつもビタミンB1を飲まなければならない。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月11日

僕は52kgの重さだ。僕は健康。ここには肺炎が蔓延している。

---

<sup>124</sup> 過マンガン酸カリクスは濃い紫の水溶性の塩で殺菌作用がある。(Coelho, p601)

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年1月9-18日

長い苦しみの後、[ウィム]ドウ・ハーンの友人の[C.A.]エンゲルンベルグが、赤痢、胸膜炎、肺炎で死んだ。[...]この数日雪が積もっており、氷点下3度から6度だ。また誰かが肺炎で死んだ。ここには大勢の病人や収容所内作業員が居る。僕自身は多少せき込み、痰が出る。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月31日

昨日はインフルエンザ患者全員（26）が新しい兵舎2に移動 [しなければならなかった]。昨日、将校と看護人は直接新兵舎2に引っ越し、インフルエンザ患者は我々の兵舎に（一時的に）運び込む、という命令を受け取った。幸い私はこれを阻止することができた。3日前からインフルエンザが流行している。今のところそれほど深刻ではない。しかし病院は満杯で、そのために彼らは兵舎でそのまま寝ていなければならなかった。このため、インフルエンザ患者は日本の司令官によって、新しい兵舎に隔離されたのだ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年2月7日

インフルエンザの流行は下火になった。現在は何人もの肺炎患者がいる。サルファディオリンがよく効く。病院は超過状態だ。

ウェストラ

福岡 17

1945年2月13日

やっとまた、1週間、[仲間の] コニーと一緒に下痢のために宿舎内にいる。今やっと炭鉱に居たときに失っていたものを感じるようになった。ここはひどく寒い。毎晩凍る。昼間は曇って雪が降り、冷や水のような寒さだ。偶然今日は太陽が出て、僕の手もいつものように凍えてかじか

んでおらず、いつものようにしょっちゅう暖めなくても書き続けられる。暖かな湯たんぽはとても気持ちがよい。少ししたら僕は気持ちよく暖かな風呂に入りに行く。首まで浸かって。そしてらほっとする。こうして、まあなんとかなる。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年2月14日

僕自身は病気、膿瘍だ。メスを入れなければならず、数日は病院だ。全くひどい寒さ、雪と餓え。病気のために炭坑に行かない者は収容所内労働者として150グラムの米だ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年2月15日

[今朝] 4時15分前に、ファン・ドルモーレン、ヨハン・ピーター・ヤンがクループ性肺炎と浸出性左肋膜炎で死んだ[...]。戦争捕虜番号490（32番目の死者）。7時半にファン・デル・スハウト、ヤンが消耗（ひどく痩せた）と右グルタエス膿瘍[右臀部の膿瘍]で死んだ。戦争捕虜番号140（33番目の死者）。この死亡者達に対する新しい日本人司令官の反応は、我々が毎日ほぼ100グラムの肉と共に、2倍の赤十字物資を受け取るということだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年2月17-24日

僕はまた痛みを伴う痔になった。また大勢の収容所内労働者が居る。今では昨年のように最低38度の熱がないと収容所内労働者にはなれず、何人かの命が失われたと時と違って、少しでも熱っぽければ誰でもなれる。赤十字社支給の大した量でもない追加食糧でも、傷は早く治り、新しい膿瘍患者は出ず、去年は5日毎に出ていた肺炎による死者も、今月は一人も出ないという効果が表れている。

へレ

宮田（福岡 9）

1945年3月1日

僕は病院に寝ているよ、君。2ヶ月間書かなかったね。第一には寒すぎて、第二にはやりすぎ、意気消沈し、落ち込み、ブレイクダウンしていたのだ。鉛筆を持つには寒すぎて、ストーブもないことが第三番目だ。この冬はかなり寒さが厳しかった。朝、氷点下7度か8度になるのも珍しくなかった。何と深く雪が積もったことか！ともかく、最もひどい時期はまた過ぎ去り、そして僕たちはまだ生きている。今は素晴らしい春の陽気だ。外は15度で、川柳の花穂も芽吹いてきた。春だ。まだ何日か、嫌な日もあるだろうが、僕はこれから2週間は病院内で保護されている。僕の苦難の道の、最初から始めよう。

1月の、クリスマスのすぐ後にひどい下痢から始まった。食べ物を見るのも嫌になった。これが最初の打撃で、というのも僕はそのまま働き続けたからだ。それから嫌らしいねぶとがいくつもでき、左の尻にできたものは煙草の箱ほどもあった。一つが治ると次のができた。1月26日に、辞めなければならなかった。もうそれ以上は無理だった。布巾のように力無く、精神的に参っていた。炭鉱では何の助けにもならず、物差しのように痩せていた。僕は毎日のように殴られ、僕の仲間達でさえ嫌な態度をするようになった。馬鹿野郎め、とか何とか言われた。彼らはそうなると、前は僕が言い返してやるので、やる勇気もなかったようなことをし、僕はなされるがままになっていた。これはこの収容所独特の現象だよ、一緒にやることができない者は、他の人たちから突き放され、無視される。

1月26日に僕は兵舎病になった。2月いっぱい僕は兵舎病で、医者のところでも少し仕事をした。図書館の本を綴じたり、包帯を洗ったり、あらゆる軽い仕事だ。僕は多少回復したが、症状は同じだ。ねぶとに次ぐねぶとで、2月末にはついに右の尻に膿瘍ができた。それは切開され、かなり深く、そこに毎日綿球を押し込まれ、僕は収容所中に響くような叫び声を上げた。僕より1週間前に死んだ人が居る、[J.]ファン・デル・スハウトで、彼も同じ病気だった、しかし、彼はその上全く衰弱しきってこれに耐えられず、こと切れてしまった。ファン・デル・スハウトもチラチャアアップの人だった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月3日

今日、赤十字医薬品6箱を受け取り貴重な物が沢山入っていた。しかし血清その他の、我々には何の役にも立たない物も多い。

この新しい日本人収容所長は英語が5単語分かり、私は日本語が10語分かる。それ

でも私たちは身振り手振りに助けられて、話し合いを進めることができる。日本人所長は患者に対する‘責任’を私に持たせ、それはつまり、患者を死なせてはいけないということだ。私は日本人所長に、より正確な診断をするために医学書をもっとよく読んで勉強するつもりだ、と伝えた。‘よしなさい。’と彼は言った。‘本を読むのはよくない、患者を治す、それが仕事だ。’

多く（およそ20）の肋骨障害、その内およそ10から15例は右肋骨弓の軟骨中にある。触診的には異常は見られず、骨折した感触はない。一例（エイフンハウセン）では、日本の病院でレントゲンを撮ったが骨折は発見できなかった。しかし呼吸や咳の時にはいつも痛みをとれない、患者はそこを下にしては寝られない。強い圧迫痛があり、かなりはっきりした押し上げる痛みがある。殆どいつも咳と一緒に来る。[...]これは‘収容所現象’なのか？食事[に依るものなのか]？蛋白欠乏？ビタミン欠乏？<sup>125</sup>[...]

3週間前から1日13缶のミルクを供給しており、その内およそ3缶が衰弱者と歩ける患者用だ。

へレ

宮田（福岡 9）

1945年3月3日

今日、3月3日、ゴムの排出パイプが[右臀部の膿瘍に]入る。これで終わりだ。[...]僕は今や毎日1リットルのミルク、毎食1／3リットルずつもらえ、もうすでに快復し始めているのが感じられる。午後には僕は米の粥にミルクを入れた物を作り、なかなかいい味だ。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月4日

最近では1日2人ずつ死ぬ。

---

<sup>125</sup> 1952年、*Nederlands Tijdschrift voor Geneeskunde* [オランダ医学誌]にW.H.D. de Haas [ドゥ・ハース]の‘De ziekte van Tietze’ [ティーツェ病]と題された記事が載った。そこに書かれた症状はヒルフマン医師にとって福岡の患者に観察された、そしてそれ以前にも1941年KMA [王立海軍大学]やバンドンのCORO (予備士官隊内教育)の教師および担当医として仕事をしていたときに見られた症状によく似たものだった。(Hilfman, 120)



ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年3月1-7日

軍曹に関する面白い話しは次のような物だ。2月28日の夜12時に彼は時計を持って座っており、それが12時を指した時、彼は叫んだ。‘バンザイ、今月はこの収容所内で全く死者が出なかったぞ。’ 昨年、人数は2分の1くらいしか居なかったときには10人死んだ。他の全ての収容所では1ヶ月に10人から20人だ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月7日

現在、神経系の病気が‘流行’している。足、手、鼻、耳の‘痛みをともなう麻痺状態’ [それに] 脱毛、アタクシア [運動失調]、視力低下。息切れ、疲れ易さ、めまいもある。大量のサルファ調合剤のおかげで、様々な慢性の腸の病気を治すことに成功している。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月13日

多くの下痢（腸炎、赤痢？）と風邪が新しいグループの間に見られる。<sup>126</sup>兵舎4は片づけられ、部屋2は兵舎4に移り、部屋2は特別に腸炎患者用隔離兵舎となった。3月10日、腸炎87例。3月11日、28人の腸炎 [患者]。3月12日腸炎を患う者1人。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月17日

昨日は僕の休日だった。病気になって残念だった、そうでなければ炊事場で働けたのに。しかし、ここしばらくはねぶと2つのために兵舎病だ。さらに僕の片耳が聞こえない。いずれにしろ、な

---

<sup>126</sup> 3月10日到着、フォルモサ [台湾] より。‘輸送と宿舎’の章、1945年3月10日付けヒルフマンの日記抜粋参照。

んとかなるだろう。コニーも病気で、水っぽい腫れた脚をしている。[A.E.]ランゲラール死亡。僕は死体守りで、そのために夜中に追加の食事をもらった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年3月13-20日

[3月]17日に、[J.]ファン・タインが、弱っていたために窓から落ち、数時間後に死亡した。[...]外ではインフルエンザがかなり猛威を振るっている。我々は2日間、炭鉱から帰ると過マンガンでうがいをしなければならなかった。その後は注射をしたために必要なくなった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月20日

1時にファン・リフテン、ルイ・アンリ・ヤンが[...]エンセファリティス [脳細胞の炎症] で死亡した (外傷による?)。36番目の死者。ボクサーだった。[患者は] 性格が変わってしまったようだ。この収容所ではポスト・エンセファリティス・パーキンシヨニズム<sup>127</sup>に似た、物を凝視し、にやにや笑いをし、プロパルジョン<sup>128</sup>のある奇妙な態度を見せるようになった。3月17日に強い傾眠状態で入院した。彼はクスマウル呼吸<sup>129</sup>をし、右虹彩は広がり、左虹彩は狭まり、頭は常に右に曲げた状態で、徐々に深い意識不明に陥いった。(中央?) 嘔吐。トーニッシュ [痙攣的な] 筋肉の引きつり、失禁、体温は徐々に上昇。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月26日

まだかなり痛いカビ病が耳にある。ここしばらくは僕は内部だ。コニーは病院 [に居る]。彼の状態は良くない。看護人によれば死の危険もある。僕はセーターと戦闘服を42, 50<sup>130</sup>で売っ

<sup>127</sup> 脳細胞の炎症後に起きる、パーキンソン病の特徴を表す症状。(Coelho, p 230)

<sup>128</sup> 突然前方に進み、転びそうになる傾向。(Coelho, p 642)

<sup>129</sup> 意識不明時に時に起こる、非常に深く軀をかきながらする息の短い呼吸。(Coelho, p429)

<sup>130</sup> おそらく、円。

たので、彼と僕のためにもっと食糧を買い足すことができる。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月30日

コニーは少し快復してきた、良かった！また食欲が出て、時間をつぶすためのことを始めた。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年3月30日

まだ病院に入院しているが、確実に快方に向かっている。僕の左足はまだ腫れているが、それ以外の炎症はなくなった。僕の最後の炎症は内臓内部で、5回も便所に行き、腸から出るのは血と膿ばかりだった。ある日それは終わり、痙攣もなくなった。時には僕は便所で泣いていたものだ。放尿する時でさえ、そのためにはらわたと一緒に引きつるので痛いときがあった。それが終わって良かった。僕の血液は、12月以来ねぶとや膿瘍ばかりできていたのだから、ひどく汚れてしまった。僕がジャワに戻ったら、タペ〔発酵させた米、あるいはカッサバ芋〕やプジューム、これはケテラ〔カッサバ芋〕を発酵させたものだが、これらを沢山食べよう、そしたら10セントで、〔スナ？〕アグン<sup>131</sup>で飲み込まなければならなかったビール・イースト錠剤まるまる一瓶よりも、もっと効果がある。ここでは医者、僕の病気の自然治癒を待ち続けた。時間と休息が効果を出すのだ、と彼は言った。

ファン・ウェスト・ドウ・フェーレ

福岡 15

1945年3月21-31日

春の最初の日、フーセンスは数ヶ月も振りで一緒に〔炭鉱に〕行き、我々は8人に強化された。しかし、次の日には彼はまた気管支炎で休みだ！これが肺炎に変わらなければよいが！我々はまた、外で流行している何かにたいする注射を受けた。[...]

やっと春になる。病院にいた病人や収容所内労働者はまた炭鉱に送られる。

---

<sup>131</sup> 何の名前であるかはっきりしない。おそらくは会社の名前。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年4月5-11日

冬着がないために、<sup>132</sup>今でも感じる寒さのため、スホットホルストと[M.G.D.]ブルックマンが肺炎に罹った。[...]それでなくともまだ約80人の収容所内労働者と70人の病人が居る。炭坑に行く人はいつも同じだ。天に健康を感謝するが、僕だとして危険がないわけではない。

ウェストラ

福岡 17

1945年4月12日

僕は健康で気力がある。[...][B.]ドゥ・ローイが死んだ。[...]ここでは大勢が死ぬ。1日二人、特に肺炎だ。僕らの身体はもう何にも耐えられないようだ。僕も気を付けよう。もっとも、ずっと気を付けてきたが。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年4月19日

僕はまだ病院に入院していて、まだ力が出ない。医者は僕に、病院で体力を付ける時間をくれる、というが、あてにはならない。場所を空けなければならなくなれば、出ざるを得ないのだ。しかし特に収容所は今、楽しいとは言えない状態なので、月末まではここに居続けたいと思う。

ウェストラ

福岡 17

1945年4月29日

〔4月〕25日に、僕は病気になった。ひどい風邪に罹り、インフルエンザか何かだ。神経も関係し始めている。他の人の言うには、最近僕は神経を痛めていたようだ。食欲が全くなく、激しい発熱発作。マラリアと肺炎の検査をしたが、陰性だった。熱は頭の中で脈を打ち、そのために

---

<sup>132</sup> 冬着は数日前に提出しなければならなかった。‘食糧と物資状況’の章、1945年4月1-4日付けのファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

起こる耳の痛みが激しい頭痛になる。何日間か何も食べなかった。そのため今は布きれのように力がない。それでも一つだけ良いことがある、それは精神はいつもはっきりしていることで、最もひどい熱発作の時にも大丈夫だった。つまり、大事には至らないだろう。

ヒルフマン

福岡 9

1945年5月4日

特記に値する。よく知られた医学論文からサルファ調合剤に関するニュースを入手することができ、それもアルベルト Q.マイセルの、*Miracles of Military Medicine* [軍医療の奇跡] からだ。なるほど、私がここに持っている最新の [医学] 出版物は、1941年の *JAMA* [*Journal of the American Medical Association*, アメリカ医療協会ジャーナル] ではある。1943年のウェクスラー著、*Neurology* [神経学] を、将校グループと来てまた出ていった同僚のピューから贈り物としてもらうという幸運もあった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年5月10日

痔疾の患者が多い。私は彼らを保守的なやり方で治療している。なぜなら何人もがスズキ [医師] によって手術を受け、その度に悪くなっているからだ。手術後に必ず出血し、感染することもある。痔疾多発の原因は？便所でしゃがむことか、痩せたためか、緊張のせいかもしれない。ヘルニアの患者が何人もいる。原因はどうやら痩せたことのようなのだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年5月14日

コニーは病院から退院した。彼は幸いにも48キロから54キロになった。彼は今農業部隊にいて、そこには収容所内労働者も沢山居る。そこでは彼は‘汚職で’結構多くの追加物資をもらえる。ここしばらくは彼はまだ兵舎病だ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年6月3日

今日はチフスの2度目の予防注射（1度目は10日前）

へレ

宮田（福岡 9）

1945年6月4日

僕は〔5月〕26日に病院から退院し、半日労働に就かされた。僕は日毎に丈夫になっていく気がするが、ただ、‘水’があるのではないか、細胞に水が溜まり浮腫になる水腫症ではないかと思う。腫れた足首、脚、それに腫れた顔が特徴だ。ここではよくある。1ヶ月で急に5kgも体重が増え、これが水のためなのだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月18日

アリー・ファン・デン・ヒルが死んだ。最近はまだ赤痢が多くなった。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年5月29日-6月23日

ウォリー、〔収容所〕番号511が、突然黄疸で死んだ。出ていった大工組<sup>133</sup>の中では、〔W.J.〕ドゥ・ホーイヤー、大柄で赤ら髪の方が死んだそうだ。

---

<sup>133</sup> ‘輸送と宿泊’の章、1944年11月27日-12月2日付け、及び1944年12月3-4日付けのファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

オースターハウス  
門司(YMCA ビル)  
1945年7月2日

厳しい時だ。2月2日から4月25日まで病気で内部にいた。肺炎、胸膜炎、下痢。どのように感じているかを書いたり言ったりするのは不可能だ。僕はこれで第二回目の死に際まで行った、と感じていると言うだけで充分だろう。その上、食糧は粗悪、医薬品は少ない。[...]多くの病人、多くの悲劇。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール  
福岡 15  
1945年6月24日-7月10日

僕はまた病気報告に（ラッパルト [医師] が名誉回復<sup>134</sup>した今は）、病状について、いわゆるテニス腕らしいものについて、話しをしに行った。そのためには僕は本当は休息しなければならないのだが、そうはできず、配給の少ない収容所内労働者になることは辞退した。腕や指を回す動きをする度に肘に痛みが走る。

病気報告に来る人達を見ているとひどい光景だ。慎重1，80メートルで40から50kgの体重の人達も多く、腫れた脚、そのための包帯もなく膿の出ている傷口が至る所に見られる。僕はこれを見たとき、僕のテニス腕に満足し、歯をもう少し噛みしめて炭鉱労働を続けることにした。

ウェストラ  
福岡 17  
1945年7月16日

神経がやられ始めていて、何かを待ち受けて緊張し、症状が悪化している感じがする。

---

<sup>134</sup> ラッパルト医師は戦争捕虜の利益を主張したため、しばらくの間日本人から停職処分を受けていた。この章 1944年3月23日付けオースターハウスの日記抜粋、及び1944年3月13-31日付ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月13-20日

左下腕の筋肉痛は取れない、今は僕は休息しているのにだ。炭鉱では力が感じられず（多分、今は作業長の下で緊張して働かなくても良いので、自分たちの気分のままに流れているのか？）、しかし僕は健康で炭鉱に行けることを毎日神に感謝している。病院や病気報告の時には中国中部の飢餓状態の映画を撮るのに丁度良いような人達は何十人もいる。そのような何人かが、どうやって仕事をまだ続けられるか、信じられないほどだ。我々の体重は、昔65kgから90kgだった人達で、今は40から60kgだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月23日

僕は6日間兵舎病になっていて、今はまた大分良くなった、まだ100%という感じではないけれど。この地上では炭鉱の中で失っていた物が何なのかやっと分かる。太陽、相対的休息、十分な睡眠。僕はこの間に、昼間も夜も時間があれば眠り、随分と体調を取り戻した。

ヒルフマン

福岡 9

1945年7月29日

6時半にラングハウト、ニコラス[...]が消耗とプレウリス・シッカ<sup>135</sup>のための、心臓衰弱で死亡した。（45人目の死者）日本の伍長は棺を覆うためのオランダ国旗を渡すことを拒否した。この旗はこの収容所で作られ、棺を覆うために使われている物だ。約2ヶ月前にこの旗を日本の事務所に差し出すように命令され、必要ならば申し出るようにということだった。その通り、[6月22日に死亡した][ヨハン・アルベルト]フッペンの葬儀の時などには我々に渡された。彼が拒否したのは今回が初めてだ。

---

<sup>135</sup> ‘乾燥肋膜炎’、胸膜炎。(Coelho, p617)



ヒルフマン

福岡 9

1945年8月4日

日本の医師と日本の司令官が一緒になって、47人の患者を、診察もせず、殆ど[私の]診断書を見もせずに、病院から‘退院’させた。こうして彼らは部屋2と部屋3を空に掃き出してしまった。それは皆衰弱した人達で、まだ病気からすっかり治っていないか、治る見込みのない人達だった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月5日

日本の通訳に、早すぎる退院をさせられた患者の運命を懸念すると伝えた。彼は私が全く正しいと言い(彼のいつもの戦術)、日本の医師は日本の司令官の影響を受けすぎているという意見だった。それでもこの話し合いの成果はいつも通り、ゼロだ。[...]

少しずつ、すでに約60例の自然発生的肋骨骨折。しかし、今はX脚の例もある。[...] その男(ニュービー、28歳)は1ヶ月の間にそうなってしまったと言っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月1-7日

炭坑に行くときに、我々はまたビタミン剤、あるいはB-29<sup>136</sup>と冗談で言っている物もらった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月12-14日

僕はパンを豆と取り替え、ガスにひどく悩まされ、巨大痔になりそうだ。収容所ではナルンセイの病気報告に行き、奇跡のそのまた奇跡で座薬があった。夜にもまたナルンセイのところに行き、

---

<sup>136</sup> 米軍のB-29爆撃機を指す。

ドゥ・ヨングと[K.E.]ブレスラウ隊長の助けで収容所内労働者になった。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年8月16日

僕は今のところ風疹のようなものにひどく悩まされていて、チャンギでベルトが同じようになっていたのを思い出した。おそらくは野菜と、それから塩の不足によるもので、両方ともチャンギでも少ししかなかった。汗をかくと、たちまちその場所が、脇の下や両足の間が、ひどく痒くなる。そこには小胞や瘤ができ、そこが炎症を起こし始めたら、一卷の終わりだ。それは疥癬のようだ。



福岡周辺地図



日本降伏後の福岡第9収容所

## 娯楽と信仰

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年5月29日

夜には、僕は[S.]デュヴコット<sup>137</sup>の聖書を読む会に行っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月1日

僕は図書館にあるフランス語文法からメモを取っており、ペアーズ・シクロペディア<sup>138</sup>から不規則動詞を書き写し始めている。殆どの単純な知的作業が、僕にどれだけ大きな満足感を与えるかは、独特のものがある。炭鉱の中で座りながらできえ、帰ってからまた作業にかかれると思うと楽しくなる。

オースターハウス

福岡 15

1943年12月4日

過去の幾つかの出来事。11月5日<sup>139</sup>。そう、ここでも僕はやはりそれを祝った。僕のルームメイト、デュヴコット(最も純粋な部類の救世軍士)は朝早くから手作りの室内履きで僕を驚かせ、図書館から帰ってきたら<sup>140</sup>驚くなかれ、部屋には薬瓶に差した白い花が飾られ、僕の‘枕’の上には幾つかの‘怪し気な’包みがあり、クッキーや煙草が入っていた。夜の信仰の夕べで‘デュヴ’は賛美歌103番について語った。こんな誕生日は簡単には忘れられない。

---

<sup>137</sup> S.デュヴコットは救世軍将校。

<sup>138</sup> ペアーズ石鹸会社が毎年出版する、1巻ものの百科事典。

<sup>139</sup> オースターハウスの誕生日。

<sup>140</sup> オースターハウスは本の配布の手伝いをしていた。‘仕事’の章、1943年12月4日付オースターハウスの日記抜粋参照。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月5日

我々の聖ニコラス祭は静かに、祝い事もせずに終わった、収容所の中には祝うための物資が何もないからだ。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月12日

私の40回目の誕生日は少人数でコーヒーを飲んで祝った（[G.J.] ディッスフェルトと[J.W.] ドウ・フリース [両中尉] の提供）。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1943年12月20日

クリスマスのために沢山のものを注文したが、全ては配給制で、注文したものは手に入らなかった。それでも何もせずに過ごしてしまう事の無いようにしたい。‘新年にはトーマスフェールとピーターネル<sup>141</sup>を、等々’。長官はクリスマスツリーを約束してくれた。どうなるか見てみよう。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1943年12月23日

今日はこの近くでクリスマスツリーのために樅の木が切られた。ヤップは我々のために煙草を400箱買い、僕たちに1/4瓶のビールをくれると言っている。さらに焼き魚を一切れくれる。多くはない、僕たちはまだ配給先の中に数えられていないからだ。しかし、いずれにせよ、なにがしかのものだ。どうなるか見てみよう。家を離れて [戦争捕虜になって] 以来、3度目のクリ

---

<sup>141</sup>トーマスフェールとピーターネルは、元々はフォンデルの悲劇*Gysbregt van Aemstel* [ガイスブレフト・ファン・アムステル] (1637)に登場する人物で、新年に、昨年(のアムステルダム)の政治的社会的状況を批評するもの。

スマスだ。

ヒルフマン

福岡 9

1943年12月26日

クリスマスの夜（昨日）は‘晩餐会’。日本の司令官が客人だ。氷のように冷たいダイニングルームで、しかしきれいに飾られ、特別の魚、ジェルック [レモン果実]、クッキー [があった]。昨日の朝は赤十字のクリスマス小包：保存食、ココア、塩、ペルチュシン「咳止め飲み薬」が3箱。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1943年12月26日

昨日はクリスマスの夜だった。全員で飾り付けられた部屋へ。日本の司令官も座っていた。卓の上には茶碗のご飯とサジュール [野菜料理]、それに大きな魚があった。ただただうまい。それからまだビールを一杯、16人で3本だ。[それにまだ] ミカン二つ、砂糖菓子一切れ、ラスク半分とココア一杯。少ないが、それでも有るだけ良い。部屋は樅の緑で飾られ、装飾されたクリスマスツリー、壁には僕たちが描いた様々な絵が架けられ、やたらにいい感じだ。僕たちは松かさを持ってきて、飾りに使った。それに糊を塗り、ガラス（踏んで粉にした）の上に転がし、その後石灰を振りかけた。安上がりで、いい感じだ。さらに我々はレバーペーストやトマトソース、ミルク等の様々な缶詰入りの赤十字小包を10個受け取った。将校達は日本兵達がそれに触らないようにするためにかなり苦労していた。彼らはみんな泥棒だ。

オースターハウス

福岡 15

1943年12月27日

[英語で]

我々の収容所におけるクリスマスの印象(福岡戦争捕虜収容所内でのクリスマスの祝いについて、日本人に聞かれて。1943年12月26日)。

12月25日よりかなり前から、私はこの異国でのクリスマスがどのようになるのか

心配していた。もちろん、以前の、全く違う状況で祝った他のクリスマスの事が私の記憶にあった。最初の勇気づけられた知らせは、クリスマスには収容所内の戦争捕虜達が全員休日をもらえるとということだった。さあ、これでうまく行くだらう。さらに、私たちはいろいろな噂を聞いたが、誰もどれが真実なのか知らなかった。しかし、今やクリスマスも終わり、どの点で我々の期待が満たされたか、あるいは裏切られたかを語る事ができる。

プログラムは朝、12時までの自由時間で始まった。時には‘ヤスメ’の日も収容所内で疲れる集まりをしなければならないときがあり、私はこの朝もそのようになるのではないかと少々恐れていた。しかし、今回はそうはならなかった。我々は他の兵舎の友人達を訪問する事ができた。どこかで、午後のミサのためにクリスマスキャロルを歌っている合唱団の声が聞こえた。至る所で人々が互いを祝福し、‘メリー・クリスマス’と言っているのが聞こえ、全員が上機嫌だった。幾つかのグループは、ブリッジやチェスをしており、他の人達は本を読み、皆がそれぞれのやり方で楽しんでいた。午前中に、全く予期しなかった楽しいサプライズがあった。突然、全員が‘整列’と呼ばれた。そして日本人の収容所長が短い演説をし、彼はその中で私達を祝福し、戦争捕虜にたいする好意を表明した。この演説には、手袋、靴下、石鹸やスカーフなどのクリスマスプレゼントが続いた。

クリスマスの食事に関しては我々はあまり期待していなかった、というのも、全ては配給制になっており、我々はすでに収容所外の一般市民よりも沢山もらっているのを知っていたからだ。そのため、‘ティファン<sup>142</sup>’はもう一つのサプライズだった。コーンビーフの切り身、紅茶用のスプーンにいっぱいの砂糖、揚げ魚をいくらかと、おいしいシチュー、昼食はとてもおいしかった。もっとご飯が沢山あったら良かったのに、と思ったことは本当だが、欲するものを全て得ることは不可能である、これも本当だ。午後には収容所の外の遊技場で、スポーツをした。丁度私たちはすてきなオーバーコートをもたらしたところで、野を吹きすさぶ風の音を聞く事ができた。その間にダイニングホールでは教会ミサの準備が全て整えられ、遊技場から戻ると直ぐに始まった。クリスマスツリーや、花輪、イチイの木の大枝、色紙で飾られたホールは、故郷で過ごした日々を思い出させた。深い静寂の中で我々は皆、古くて常に新しい、地上に肉体を持って現れた我らの主からのメッセージを聞いた。我々は皆で古く、よく知られた、主を讃えるクリスマス聖歌を唱った。

これはこの日の最高潮の一つで、もう一つはその直ぐ後に来た、クリスマス・ディナーだ。我々のクリスマスメニューを書き出しておくので、私が大げさに言っているのではないことがあなたにも分かるだろう。

1. シチュー 2種類
  - a. ポーク・シチュー
  - b. ビーフと野菜のシチュー
2. キャベツと醤油付きご飯

---

<sup>142</sup> インド英語で昼食、(インド式) ライス・テーブル (品数の多い馳走料理) のこと。



3. 揚げ魚
4. 果物（リンゴとオレンジ）
5. 砂糖入りココア
6. ワイン

この日の終わりには私の心も胃袋も大変満足していた、と言える。1943年のクリスマスの総合的印象は、日本人は我々がこの偉大な日を外国で過ごしていることを忘れさせるために最大限のことをした、ということだ。

-----  
[以降オランダ語]

さて、ここまでがヤップ用。ヤップには言えない考えや記憶が交錯したことは当然だろう。それは、この状況の中では実に最大限に成功させた日だった。[...]そして今は年越しと正月がどうなるか待っている。それはヤップの最大の祝日だ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月25-31日

やっとの事で、今やクリスマスの祭日が終わった。[...]リングによれば [クリスマス・イブの] 11時に上に行くはずなのにもかかわらず、ヤップ達は自分たちが休めないのに我々が休めることに嫉妬して歌を唱うことを禁止し、殴り、蹴り、11時には台車をもう一台積み込むように命令した。その後はまだ、打つ [坑道壁を爆破する事] ように命じた。しかし我々のクリスマス気分を壊すことはできなかった。収容所ではとてもうまいコーンビーフ入りスープと小魚が我々を驚かせた。

翌朝はひどく寒く、我々は飾りの花で装飾された食堂で、いつも通りの朝食の後、また毛布の下に潜り込んだ。11時には整列させられ、日本の司令官が我々にクリスマスの祝福をするのを聞いた (我々の誰かが食堂にこっそり書いたような、より幸福な新年を、ではなかった)。

[...]

午後には、先ず赤十字スープを2カップと、コーンビーフ一切れに、砂糖を一匙もらった後、運動場で運動大会があった。肉をまた味わうのは信じられない気持ちだった。一缶の1/6が、あんなにうまいとは。その後、ご飯と砂糖を食べた。運動場ではオランダ人が3-0でイギリス人に勝った。その他にも、100メートル走、リレーがあり、勝者は煙草か練り歯磨きをもらった。速く走る必要はないよ、と医師は言った。‘ハッパセン’を取りに行くときくらいの速さだね、と[J.Th.v.d.]ホーフトは言った (つまり、爆破用の線のことで、可能な限り長く、帰ってこないようにする)。胸は8枚重ね、腿は5枚重ねだったにもかかわらず、しばらくすると

ひどい寒さを覚えた。

帰ってくるとイギリス・オランダ共同で、宗教ミサがあり、しっかり練習した合唱が付いた。最後の仕上げにクリスマス・ディナーが用意され、リンゴ一つ、ミカン一つ、生キャベツに醤油かけ魚二切れ、飯、スープ2カップ、酒、砂糖入りココア。特にこの最後の味が、こんなもので恍惚としてしまう我々が、いかに哀れな境遇にあるかを思い知らせ、凝然とさせた。しかも多くの胃にとっては重すぎ、夜には胃腸が怪しくなった。

この頃、僕は決めた。僕の周囲で、多くの人達がどんどんそうになっていくのとは反対に、僕は自分が受け取るものに満足する。他の人達がもらうものには目を向けない（配食の時に、他の人の皿によそう、しゃもじさえも見ない）。聖書の中の最も美しい例は、ブドウ畑で、畑用に奴隷を借りに行く人の話<sup>143</sup>だと思う。この話の意味も、我々は自分の運命に満足し、他の人が自分より良いのではないかと見てはいけない、ということだ。他の人達が自分より良い思いをしていたら、その人達のために喜ぼう。僕にはそれができる、そしてそれを心をこめて実行に移そう。

ヒルフマン

福岡 9

1944年1月1日

全員休日。ミサ。‘トーマスフェールとピーターネル’と幾つかの暗唱、そして私の開会演説をした午後の集会。赤十字缶詰を使った特別の食事。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月2日

そして今日<sup>144</sup>、我々は新年を‘祝った’。[...]本当に休みだった。今日の午後、短い‘教会’ミサを、氷のように冷たい食堂で、震えながらコートをまとっておこなった。夜はご飯と汁に添えて、一人にリンゴ一個、魚一切れが付き、今日も煙草とクッキーをもらった。特にこの最後のものが、多くの人にとっては新年の印だったということ、悲しむべくも認めなければならないだろう。

---

<sup>143</sup> ファン・ウェスト・ドゥ・フェールはここで、マタイの第20章 1-16、‘ブドウ園での労働の均一性’の話しを指している。

<sup>144</sup> オースターハウスはこれを 1944年1月1日から2日にかけての夜に書いている。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年1月9日

我々は新年をナシ・ゴーレン [チャーハン] とデザートプリンで祝った、全て我々自身のクリスマス・プレゼントから来ている。ヤップは何も支給しなかった、油も、何もし。僕たちはナシ・ゴーレンを肉の缶詰の脂肪で炒めた。全てのプリンの缶はごちゃ混ぜにされ、本当にうまかった。いずれにせよ、ヤップは休日くれた、自分たちが祝日だからだ。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年1月初頭

噂では年末には炭鉱労働時間が短くなるはずだったが、全くそうはならなかった。反対に年末の数日と新年の数日は、労働前線部隊として生産性を上げるため、1時間長く働かなければならなかった。そのとおり、確かに僕たちは地下で交代が来るまで待ったが、ヤップ自身が全くその気がない事が早々に分かった。我々は2倍の食事時間を与えられ、早めに上に行って、トロッコの側で公式の出発時間になるまで待っていた。大晦日の夜は水平のノボリで仕事をしていたが、11時半になると僕たちは2番目のトロッコに座り、そこには時間が経つと共に12時には上に行こうとする労働者達が続々と集まってきた。僕はヤン・ル・コントの隣に座り、我々の妻と子供達が、一緒にどのように我々のことを考えてくれているだろうか、と話し合った。12時になったとき、我々は互いに手を握り合い、新年おめでとうを言い合った。ヤップ達はそれをせず、驚いた顔をして我々を見ていた。[...]

新年の朝には収容所でコーンビーフ・スープと‘空腹’<sup>145</sup>、飯に、2番目の小魚ももらえた。食べきれないくらいだ。次の日はリンゴ半分（残りの半分はヤップによって消えて無くなった）、しかし炭鉱経営者からの魚、酒、それに追加の飯は我々には届かず、煙草もなかった。181の赤十字輸送品の小缶詰は入り（95はヤップの元に消えた）、クリスマス小包40くらいに当たるが、これ以外の455個は欠けていた。これを使って5回分のうまい食事を炊事場に作らせることになった。1月の最初の日、幸い我々は休みだ。日本の中尉は、彼自身によれば、神に我々の幸運と平和を祈ったという。

---

<sup>145</sup> この‘空腹’とは、最初に食糧を全員に分けた後に、その残りを追加として分けるもの。‘互いの関係’の章、1943年12月5日付けファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月11-14日

[1月] 12日は丸一日座ってマッケールのサマー・リーグスを読み、やっと僕の頭脳にする事を与えられたことを楽しんでいた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月15日-1月末

一日中食べ物について考え、喋り、夢見ていることの無いように、僕は沢山、1日に3, 4時間本を読み、僕の考えを良い方向に持ってきている。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月1日

今日はまたヤスメ日 [休日] だ。日曜午後のような静けさが辺りに満ちている。落ち着いた医者  
の部屋で、[F.A.]ベルグは座って縫い物をしていた。マゲンダンスは診察台で昼寝をし、マルス  
デン、またの名を‘ロフティ’は、いつものように暖炉の前で暖をとっていた。医師 [H.ラッ  
パルト] は永遠に歌う森を読んでいたが、いましがた注射器を盗んだと自供してきたラウディー  
と供に出ていった。我々の上からは、新しく、危険な上階住人の音が、時々している。日本の曹  
長で、一多分一時的に一事務所の改装工事に伴ってここに引っ越してきた。もう少ししたら、医  
師と僕とはもう一度チェスをする。ああ、人生はまだ進んでいく、表面的に見れば。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月10-19日

僕はステークルの、盗癖と放火癖に関する本[Peculiarities of Behaviour]を楽しんでいる。これは  
また、こここの煩わしさから僕を救い出してくれる。[...]

今はコーランを読んでいて、神の影響の存在を描写するために、聖書の話しが沢山出

てくる。しかし、ポジティブな、つまり、良きモスリムとはどのようなべきか、とか、モラルとは何か、ということよりも、不信仰である場合の、あの世での罰が、より強調されている。それでも、これはキリスト教にとっても近いものだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月26日

僕は昨日の夜、長い間しなかったお祈りをまたしたよ、M、本当に祈ったんだ。多分僕は今、自分の兵舎でも宗教集会の夜を持ちたいと思っていて、昨日の夜は一人しか来なかったからだろう。そして、僕は感じているんだ、これは祈りで果たすものだ。自分の力だけで直ぐになんとかできるものではないのだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月29日

でも、M、僕は文句を言うてはいけないんだ。良い点もある。一昨日に我らの祈りの夕べは4人で始まった。昨日の夜は6人だったんだ！そして...僕はまた祈ることができる！そして、それは力があるのだ！3倍の飯よりもためになるのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月20日-3月12日

図書館で仕事をしていると、ここにいる人達の独特の文芸に対する好みが見えてくる。高等教育を受けている [H.] クアードグラスや[Th.A.]セルダーベーク（中退したが）などは、良い本を読むこともある、特に前者は。さらに、両者とも、様々な料理の本や菓子作りの本を読み、研究している。一般的には皆‘殺人物’や‘探偵小説’を読んでいる。将校の中ではラッパルト医師だけが時々良い本を読んでいるが、それ以外は最もくだらない少女恋愛物だ。[G.J.]スロットには僕が探偵物の代わりにマックオーレイを一度読んで見させることに成功した。イギリス人は殆ど良い本を読まない。面白いのは物静かなイギリス人（スープ分配人）が、もうオランダ語を読めるようになったことだ、喋ることはできないが。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年3月13-31日

寒さは去り、我々はまた部屋で（コートを着て）座って本を読むことができる。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年4月1-19日

僕の誕生日[4月5日]にはいつものように僕の分隊に煙草をおごった。炭鉱では酷い日だった。帽子をかぶらずに食事をしていたためにペンチで頭を殴られた。宿舎では我々が皿洗い当番になっていて兵舎清掃もあり、夜にはぐったり疲れてほとんど喋ることもできないほどだった。面白くないのは、ダイクメスターが僕に追加食糧を約束していたにもかかわらず、最後にはこの次に追加のオレンジを、とかなんとか言っただけだったことだ。僕は男は男、言葉は言葉で守るべきであると思う。[...]

復活祭の祝いはヤップに許可されなかった。卵をもらえるだけで、休日は拒否された。それでも去年、復活祭の日に乗船した<sup>146</sup>ことを思えば、それよりは状況はずっと切迫していない。

オースターハウス

福岡 15

1944年4月8日

聖土曜日。この土曜日は祭日ではない。明日が復活祭だということも、カレンダーを見なければ分からない、いやそれよりも、この収容所では月の位置で判断する。カレンダーは見たこともない贅沢品だ！

---

<sup>146</sup> ‘輸送と宿泊’ の章、1943年4月24日と26日付けのファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月9日

復活祭日曜日。あさってから振り替えて、休日だ。全員卵一個をもらう。[計画してあった]桜の公園への散歩<sup>147</sup>は、悪天候のため中止になった。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月14日

7人の将校全員が、収容所長と供に長い散歩をした。弁当を持って。山の清水の脇でピクニックをした。沢山の桜の花。素晴らしい自然。[J.C.P.]ファン・ラールテンの葬儀の時[1944年1月10日]を除いて、収容所から初めて出た。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月1-10日

一年間手をつけずに置いた、その後で、僕はまた南スマトラに関する日記を書き始めた。毎日1時間書き、夜満足して眠りに就くために必要な精神的充実感を与えてくれる。

ヒルフマン

福岡 9

1944年5月31日

この収容所内では猥雑な冗談は聞かれない。女性に関する話題はなく、もう関心がない。関心は全て食事に向いている。互いに、これまでに食べた、あるいはこれから食べようと思う、うまい食べ物の話しをすることで発散している。多くの人達は調理法の帳面をつけていて、このキャンプ内で回し読みされている何冊かの古い雑誌のレシピを研究している。

---

<sup>147</sup> おそらくこの散歩は将校のみ対象であったと思われる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月29日-6月6日

[6月1日の]夜は、この軍曹の指揮下に入って3/4年目にして初めての愉快的な夜で、あらゆる古い歌や小話が繰り出された。全ての[赤十字]支給品や感情の動きに、我々はどうもひどく興奮してしまったようで、夜中になっても半分以上の人達は眠りに就けず、2, 3時間も眠っていない。このようなことでも、我々がいかにもろい神経の持ち主になってしまったか、そして外の忙しい生活には全く適応できないであろうということが分かる。

イエッテン

折尾(福岡 15)

1944年6月18日

[収容所内には]神父はいない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月19-20日

[6月19日に我々の収容所に新しく来た人達<sup>148</sup>は]僕たちよりかなり太っているが、最近僕たちが点呼の後で新規参入者達としなければならない、徒競走や綱引きでも分かるように、それは力にはなっていない。我々の側のチームに入っているのは主に炊事係と看護人達で、炭鉱労働者達は走るような元気は無い。僕はせいぜいゆるい駆け足くらいで、それ以上は僕の内蔵が、いわば一脂肪層の欠如のために一腹の中で‘支え’もなく揺れて、ひどく痛むからだ。

イエッテン

折尾(福岡 15)

1944年7月1日

宗教の会、スピーチとともに。主題：人間の人生における宗教。

---

<sup>148</sup> ‘輸送と宿泊’の章、1944年6月19-20日付け、ファン・ウェスト・ドウ・フェールの日記抜粋参照。



ルーゲ

福岡 21

1944年7月7日

休日。[...]毎休日には音楽やキャバレットの催し物ができる。P [日本の] 長官は全面協力している。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月11日

最近はあまり書くことができなかつたよ、M。それに僕が書いたことから、君は君の婚約者の余りはっきりしたイメージは描きにくいのではないかと思う。試してみよう、M、君に本当の、ヤープの内面を語る努力をもう一度。神は僕の人生の中に存在するか？キリストの中に僕の人生はあるか？時には、僕はあると思う。するとそれは不思議なほどの落ち着きと信頼を与える、まるで大地を覆う霧のように。僕が君の最後の手紙に見て感動した、そして時には君をうらやましく思う、それと同じ落ち着きだよ、M。しかし、残念ながらそうではないことが多い。すると、キリスト者である部分はほとんど残りはしない。‘私を誘惑する事なかれ！’でも僕は簡単に誘惑されてしまう。[...]病室へ行く。煙草を賭けてトランプをする、ここでは金を賭けるのと同じだ。兵舎のハエを提出する。5000匹<sup>149</sup>。ここで1000匹ごまかして多く言えば、煙草2箱儲かる。ヤープのもとで雑用をする。赤十字缶詰の缶を平らに叩き、靴の箱を破り、フダン [倉庫] に持って行く。そこには日本の縫い糸の玉がある（ここでは珍しく、高価な物だ！）。その後はもう分かるだろう。等々、等々。これもヤープ・オースターハウスだ。今は自分自身の日記に通常表れる方向とは別の方向から見た物だ。

そして、それから又彼は毎回、神の戸を叩く気になるのだ。そして、すると彼は不思議なことにも、その度に神から祝福されるのだ。ああ、M、すると僕は、今朝自分で朝の宗教集会の時に言ったような気持ちになる。‘汝、愚かなる者よ、あなたの魂は今夜の内にも取り去られるであろう。自分のために宝を積んで、神に対して富まない者よ！’（ルカ伝第12章20－21）。神の前ではとても富むことができるからだ。何者にもまして富み、そして幸せに。この収容所の中でさえも。

---

<sup>149</sup> 脚注 132 参照。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年7月11日

〔宗教集会〕 主題：信仰と信頼。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年7月16日

ヤスメ日にはヤップの相撲大会を見ることが義務づけられた、退屈な光景だ。このような国技に対する日本側の関心も大して見られなかった。なんと太った男達だ！最も重い奴は300ポンドも有ろうかと思われ、全員長い髪を頭の上で団子にしている。アフターオール、ひどくのろまな物だった。

明日は〔地上の〕卵石炭の方に行けるよう、切に願っている、なぜなら班長が、彼から習っている日本語のレッスンを書き取るためのノートを持ってきてくれるといていたからだ。このインキも彼からもらった、彼が今日、僕の万年筆に補充してくれたのだ。彼がノートを持ってきてくれると良いが。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月13-20日

語彙を少し増やすために、フランス語の辞書をAから学習し始めた。

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月21日

昨夜はキャバレットの公演があり、非常に意気が揚がって成功した、素人の素朴な物ではあるが。閉会時には‘ウィルヘルムス’〔オランダ国歌〕〔が歌われた〕。

イェッテン

折尾（福岡 15）

1944年7月27日

10時に〔炭鉱で作業中に事故死した E.G.A.ケレナルス曹長の〕葬式。ヤップの命令で〔オランダの〕長官は僕に炭鉱に行ってはいけないと伝えた。〔僕は〕‘サービスマン’なので宿舎に残らなければならない。全収容所住人が整列した。日本の上官達と炭鉱経営者達〔がいた〕。合唱団が組織された。短いミサ。‘ミゼレール’からの数節と、‘我らが父’から3節、アベマリア3節、‘最後の審判’から数節、ミサ典書からこの場に合った福音章句、‘天国で’。炭鉱社長は4000円の入った封筒を、事故死者の妻のために棺の側に置いた。日本の収容所長の演説、オランダの収容所長の演説、炭鉱社長の演説、等々。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年7月30日

ノートはもう手に入らないので、僕は日記の続きをこの、病院に寝ていたときに自分で作った帳面に書く。この紙は1890年の物で、M.M.D.<sup>150</sup>の火薬庫の下の、古文書室にしまい込まれるまでは将校達の処罰記録用紙だった。ヤップはそこから、燃やしてしまうためにとり出し（よくやった！）、僕はさっさと行って取ってきた。これを僕はチラチャップでは兵舎病の書として使い、ここで日記帳に作り変えるまではそうだった。[...]これが遂には最後のノートになることを願っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月11-15日

朝シフトから夜シフトに変わるとき、24時間2回のうち、34時間眠った！気付かないうちに、どれだけ我々が疲れているかという証だ。僕は幸いにもまた読書を始め、ヘイズン・エディション・オン・レリジョンの2冊、ジーザスと〔キリスト教徒の〕信仰と民主主義を楽しんでおり、将来は購入したいと思っている。僕は3ヶ月くらい、何も読んでいなかった。

---

<sup>150</sup> 蘭領東インド軍の一部隊、軍事モーターバイク部門 [Militaire Motor Dienst.] の略。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年8月11日

アベマリアの3詩節の、9日間の祈りを一緒に捧げることに決定。我々がマリア様のご加護によって無事に妻や子供達の元に戻れますように。ヤスメ日に宗教集会。スピーチ。聖母昇天祭に関連して、マリアの生涯から。

ヒルフマン

福岡 9

1944年8月27日

今夜はキャバレット。8月31日の祝い<sup>151</sup>に、‘国家的プログラム’で、それは今日がほとんど全ての人達にとって休日だからだ。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年8月28日

前に確か書いたと思うけど、僕たちはこの日本で、キャバレットを復活させた。普通の歌や、音楽、朗読が何幕もあり、オランダの歌の‘コミュニティ・シンギング’で終わり、‘ウィルヘルムス’で締めくくる。生き生きとした関心が、主に日本側から寄せられる。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月31日

それでも、M、天にまします我らの父は、ここにいる僕も見ている力を与え、そして彼がジーザス・クリスタスの中で僕の父でもあることを知っている。この慰めは今や僕の人生にとって全くの真実となり、今朝は完璧な心で夜の宗教集会に先立つ、我々の女王と、平和と自由のための祈祷をすることができた。そして、僕は毎日毎日、今日読んだミーニング・オブ・プレイヤーの中

---

<sup>151</sup> ウィルヘルミナ女王の誕生日。

の美しい詩に書かれている事を経験している。

[英語で]

展望のない、回廊付きの部屋がある  
天国のように高く一日のように遠い  
たとえ私の足は群衆に混じろうとも  
私の魂はそこに入って祈ることができる。

耳を傾けたとしても知ることはできない  
私とその敷居を越えてしまえば、  
私の祈りを聞くのは、彼だけであるから、  
ドアの閉まる音をもう聞いたのだ。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年9月1日

「聖なる心」への献身の普及のために、宗教集会の時、聖マルガレータ・マリア・アラコケ<sup>152</sup>の生涯に関するスピーチをした。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年9月3日

今朝炭鉱の夜勤から帰ってきたとき、直ぐに今日が9月3日だということに気付いた。僕たちは今日で4年間結婚している。その内2年半は全く僕らの役に立たなかったけれど、君、僕たちはきっとその期間を取り戻すぞ。来年にはこの日の記念に、少なくとも君と小さな晚餐会をしたいと願っている。今朝僕はカーレル・フェルステーフに、祝いの印に煙草をおごり、それから眠りに就いた。

---

<sup>152</sup> マルガレータ・マリア・アラコケ(1647年7月22日-1690年10月16日)はフランスの神秘家。1920年に聖人の列に加えられた。彼女の記念祭は10月17日。キリストが繰り返し彼女の幻想に現れ、「聖なる心」への信仰をカソリック教会全体に普及させるように呼びかけた。「聖なる心」祭の祝いは聖マルガレータの努力を記念する物。

オースターハウス

福岡 15

1944年9月12日

9月1日にまたもや‘義務の’娯楽会があった。その夜の神髄は、我々にとって破壊的な結果を呼ぶことになりそうな、下記の詩にあった。(念のため、これは僕が書いた物ではない)

1. 福岡で食事の時間、  
お客は列になって準備完了、  
飯に豆を混ぜた物、  
量には不満があるが、  
執拗な目をした面々、  
‘箱’の中を鬼のように掻き取る、  
昼の弁当にはしっかり錨を付けて、  
でなければ窓も扉も閉めておけ。

繰り返し：

人生に喜びを盛りつけよ、  
そして歌いながら炭鉱に行け、  
彼らは溢れるほどにくれようとするが、  
だがね、弁当箱は小さすぎる、  
デザートには粉炭を少々、  
だがスプーンは自分の所だけに抑えて、  
人生に喜びを盛りつけよ、  
そして炊事場に友人を探せ！

2. 収容所はヤスメの日、  
説教椅子がまた用意され、  
働き者達はほくそ笑む、  
それはノーベル賞受賞者だ<sup>153</sup>、  
それは煙草2箱だ。  
そして飢えた顔つきで、  
最大怠け者達は、  
急いでちよいと目をつむる。

---

<sup>153</sup> ある一定期間毎に、通常は休日に、日本人は彼らが‘働き者’と認めた者に褒美を出していた。(NIOD, 蘭領東インド日記コレクションより、J.オースターハウスの日記から)

繰り返し（2番の）

人生に喜びを盛りつけよ、

石炭採掘楽しくない、

ハコ\*に積むのは際限ない、

[\*トロッコ]

掘削、支え、何という列だ。

そしておまえは頭に石を受ける、

シドージン\*\*の約束通りだ。

[\*\*日本人の監督官]

それでは人生に喜びを盛りつけよ、

そしておいらを内部作業に。

3. 昔あるところに炭鉱の働き者、

小さな小さな問題あり、

それは少しのテルティアナ\*、

[\*マラリア・テルティアナ]

脚には小さな潰瘍が、それは少々痛みます、

少し衰弱、見えない眼、

そして手には包帯巻いて

アスクレーピオス\*\*的判断は

[\*\*医術の神]

アスピリン、2日後、炭鉱に潜りなさい、

良い方の手でね。

繰り返し

人生に喜びを盛りつけよ、

悲しみは横に押しつけて、

誰もあなたに与えられない物、

それをあなたは持っているから。

完璧に安全ではないとしても、

まだ命のあることに喜びを、

人生に喜びを盛りつけよ、

それでも病気になるのはなぜだ？

4. 風呂場に於ける諸問題、

真っ黒男が山のよう、

穴を見つけて潜り込む、

そしたらがちり捕まえろ。

桶には気持ちの良い湯がいっぱい、

大きな石鹸が最上だ。

‘汚れている方がましさ’と不潔太郎、

‘ほっぺたに火傷を負うよりも’。

繰り返し

人生に喜びを盛りつけよ、

鼻の汚れは拭き取って。

生き続けるのは苦勞だよ、

炭鉱労働者の血の元ではね。

もうすぐかあちゃんところに戻ったら、

首まで粉炭にまみれてね、

そしたら人生に喜びを盛りつけよ、

きちんとしたシャワーを浴びて。

収容所長は‘尊敬すべき’関心を不幸なやり方で表明し、嵐のような拍手喝采と、詩に出てくる日本の言葉で怪しく思った。紙は持って行かれ、英語に訳された。その結果：14日間煙草無し。それは戦争捕虜にとっては重罰だ。‘炭鉱パン’の値段が煙草5箱から6本（書き留め、読み上げよ、6）に変わったら、これは大変なことだ。何杯もの飯や汁、パン、‘ワカモト’の瓶、針、服、石鹸、つまり少しでも商品価値のある物はこの14日の間に持ち主を変え、全ては戦争捕虜がここに持つ唯一の嗜好品のため、彼が炭鉱におらず、食事をして寝てもいないときの数分間のためだ。食事や、睡眠や良い風呂以外にも必要としている物。—ここから、この収容所に居るほとんどの人達のひどい貧困と空虚さを、少しでも感じられるだろうか？彼らの支えや慰めを信仰に見いだせない、絶対的救いのなさを。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年9月5-16日

この間のキャバレットの夕べに紹介された、我々全員がとても楽しみ、ヤップが翻訳させた歌（‘彼らは我々にもっと飯をくれようとするが、弁当 [箱] が小さすぎる’）のために、我々は今や14日間煙草無しだ。この値段がひどく上がった。僕はまだ40持っていたが、そのために、1本につき4円でパン1/4買える。



ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年9月24日-10月3日

[妻の] リリアの誕生日に、炭鉱でロムボック [唐辛子] とパンケーキを2つもらった、何というサプライズだったことか。僕は彼女の誕生日をまた分隊や知り合いに煙草を配ることで祝い、自分は韓国人からあっさりパンケーキを2枚もらった。ウン、ウン、なんと、うまかったことか、自分に何が起こったのか分からないくらいだった。

イエッテン

折尾 (福岡 15)

1944年9月24日-10月末

1944年9月24日に室内での宗教活動が禁止された。10月になったので収容所長と共に日本の事務所に行き、バラ十字の月 (10月) の関係で毎日ロザリオの祈りを捧げる許可を得た。集会にはならず、つまり分散してやらなければならない。ヤスメ日の全ローマン・カソリック信者収容所住人の宗教の時間は残された。1944年10月21日のヤスメ日にキリスト王の祭りを祝った。‘あなたに、おお、永遠の王よ’ を歌って締めくくった。

アトカンソンという若いイギリス人で父親は海軍大尉、母親はマレーシア人の男が、僕に ‘レリジャス・インストラクション’ つまり宗教教育をしてくれないか、と言ってきた。僕たちが1944年10月3日に、小テレジア<sup>154</sup>の祭りを祝ったことを聞き、彼はマレーシア作戦<sup>155</sup>の時 ‘ザ・リトル・フラワー’ の取りなしで無事でいられたらカソリック信者になると約束していたからだ。トーマス・アトカンソン [の申し入れを] 承諾。

ウェストラ

福岡 17

1944年10月22日

僕は自由時間 (ほんの少ししかない) には野球をし、チェスをし、少し読書もし、気を紛らわすことで精神を高く保とうとしている。時々牧師のところに行く。彼の説教はやはりためになる！

---

<sup>154</sup> フランス人、リシュエのテレジア(1873-1897)は、‘小さな聖テレジア’とも呼ばれ、全てのカトリック伝道の守護者と見られている。彼女の理想は簡単な教えで、神への愛は‘小さな道’つまり他の人々への配慮で達成される、とした。テレジアは民衆に人気のある聖女。1925年に聖人の列に加えられた。彼女の祭りは10月3日。

<sup>155</sup> マラヤン作戦とは、1941年12月から1942年1月にかけての日本軍によるマラッカ征服作戦のこと。

僕はなるべく自制し、普通にしようとしている。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年11月2日

全ての魂の日。ミサを指導し、出された質問に答えた。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年11月15日

我らの信仰仲間 [Chr.] ロンドの葬式。そこで神の信頼を強く意識し、聖ヨハネス・クリソストムスの、皇后は彼女が望むところどこにでも彼を追放できる、と言う話しをした。<sup>156</sup>しかし、彼らも、神の居ないところに彼を送ることはできないのだ。

ヒルフマン

福岡 9

1944年11月15日

捕虜用の楽器があるようだ。どの楽器が必要なのか申し込むことができた。クリスマスの祝い用に日本人は多くのものを提供してくれた。追加食糧、装飾品。赤十字社から12の箱が届いたが、取り合えず彼ら自身でしまい込んでしまった。

---

<sup>156</sup> ヨハネス・クリソストムス（＝金の口）は354年にアンチオキエ（シリア）で生まれた。彼は説教のうまさで大変有名になった。398年にアレキサンドリアのテオフィラス総大司教により、コンスタンチノーブルの司教に任命された。しかし彼の批判的態度は教会内及び皇帝周辺の反発を呼んだ。皇后ユードキシアの怒りを買って、皇后は皇帝に司教を追放させた。追放の地、アルメニア国境のカカサスから、彼は友人達と連絡を取り、影響力を行使し続けた。3年後に敵対者達は彼をもっと遠くに追放させる。ヨハネス司教は407年9月14日に追放の地である黒海東岸に行く途中で死亡した。1568年に法王ピウス5世は聖ヨハネス・クリソストムスを教会博士に昇格させた。法王ピウス10世は彼をキリスト教説教者の守護神とした。彼の祭りは1月27日。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年11月11-20日

この頃は炭鉱から帰るときに楽しみにできる趣味が無くなってしまって残念だ。これまではいつも何か持っていた、というよりは、体験できた、それは宿舎に帰ることを首を長くして待ち、楽しみにするために必要なことだ。大体いつも、とても良い本か、縫い物、あるいはメモを取る等があったが、今では‘食事鍋’以外に無くなり、そうすると家事のことしかしゃべれない女性になったような気がする。情報[戦況に関する]も昔のようには存在しない。ジャワでの僕の戦時記録を継続しようかとも思うが、書き物をするには寒い時期になり始めている。

イエッテン

折尾(福岡 15)

1944年11月24日

イギリス人バーンスの葬式。病院で彼の心の準備を指導した。癌[だった]。イギリスの長官、フンバー中尉と相談して僕は葬式を手配した。バーンスのイギリス人の友人達は葬式を全て英語でやって欲しいと希望し、僕は神の助けの元に真剣に準備してやり終えた。

オースターハウス

福岡 15

1944年11月27日

[オースターハウスは11月5日の誕生日の話しをしている。その日、彼は2日間閉じこめられていた牢屋から出された。]<sup>157</sup>

僕の‘クッション’の上には、秘密めいた包みがあった。僕の聖書は広げられ、そこに美しく刺繍したしおりと紙があった。‘ヘブル人への手紙12章、1-13を読み’。

2束の花が良い香りを放っていた。ごらんM、これで気分が和む。これは暖かな、本当の友愛だ。暗い中に輝く金だ。これは僕にとって、もう一つの、忘れられない誕生日になった。小さな、あるいは大きな贈り物だけではなく(おお、戦争捕虜収容所の中ではもう誰も金持ちではなく、互いに多くをあげることはできない、少なくとも物質的には。しかし本当の友情と共感とが、この日を忘れられない日に仕立てたのだ。—普通の生活では、丁度この反対ではないだろう

---

<sup>157</sup> ‘日本人による抑留者の扱い’の章、1944年11月27日付けオースターハウスの日記抜粋参照。

うか、多くの物質と少ない心?)、特に夜の点呼の後で祝った‘誕生祝いの訪問客’達によって!

贈り物が何かということ:ピム、あの良き、忠実なピムからはミトンと花、コル[ファン・ラヴィエレン]からは素晴らしい運動用靴下、ヘールトからは、イギリス製の革靴一足、ほとんど新品。ヘールト、これにいつかは充分お礼ができるだろうか!‘デューヴ’からは煙草3箱、ヤープ・クーズキャンプからは煙草一箱ときれいな花束。ヤン・クラーンからはチューブ入り練り歯磨き、本物だ!ヤン・ストラウクからは手袋、ベルフからは、あのきれいな本のしおり!ヤン・ドゥ・モスからはタウチョ[発酵させた大豆]入りのパン!おおヤン、多分余り知らなかったと思うけど、君の存在は巨大なものだった!ほとんど毎日君にもらったパンと、君が日本の食堂に食事を持っていく時に僕にかけてくれた慰めの言葉が、いかにその度に僕を救ったことか。エスケスからはディナー・ジャケット用のボタンセット。M、神に誓おう、後に僕らの結婚生活の中でも、この人達がいかに僕によくしてくれたか決して忘れまい、そして僕らのその後の人生でも、彼らは僕らの心と家に大事な場所を占めることだろう。

誕生日の訪問会で、僕らはコーヒーを飲んだ!(日本製、でもうまかった、内緒で持ち込み、5円プラス煙草5箱で買った)。パイプと紙巻きタバコを吸い、レコードを聞いた。上記の人以外で来ていたのは:テッド・セルダーベーク[と]アントネイズ(僕のルームメート)、ルーク、アピー、[J]ボールスマ、[G.L.G.]‘スチップ’v.d.ウェルフ、トールンストラ、フェルス、ラウエンホルスト、ウィルストラ、ファン・エルク、ディルク・ファン・ヘルダー、[S.E.]ラパポルト、[R.A.]スースマン、ピート・ティレマ(彼からも煙草一箱もらった)。僕の胸はいっぱい、溢れんばかりだ。そして、父よ、‘祝いの喜び’のただ中で、僕たちは詩編103番と、ヘブル人への手紙、12章1-13を読みました!主よ、来年もこれをジャワですることができますように、君と一緒にね、M!

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月2日

我々はクリスマスの準備に忙しい。僕が指揮する合唱<sup>158</sup>の練習、装飾のための絵。

---

<sup>158</sup> 20人から成る合唱団以外にも、将校で構成する男性四部合唱があった。G.J.ディッセフェルト、H.スィンケル、M.A.レース、そしてヒルフマン医師自身もバスとして参加していた。(Hilfman, 95).

イエッテン

折尾（福岡 15）

1944年12月3日

聖フランシスカス・クサヴェリウス [フランシスコ・ザビエル] [祭]<sup>159</sup>。彼に、僕たちが日本にいる間守ってもらうよう、毎日忠実にアベマリアの祈りを捧げた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月5日

今夜、ヤン・ル・コントと僕は、1,50ドルで、パンケーキを一つ買い、ひどくお祭り気分になった。

ルーゲ

福岡 21

1944年12月8日

昨日、僕たちは聖ニコラス祭を祝った。それはとびきり良い日だった。聖者も居た。僕らのパンの中には [砂糖漬けの] ジンジャーが入っていて、一人につき煙草4箱、砂糖菓子、アーモンドペースト入りパン、それにクッキー17枚 [をもらった]。

ウェストラ

福岡 17

1944年12月12日

今日は休日だ。なんと気持ちの良い休息！ザ・レインズ・カムを読んだ。素晴らしい本だ！

---

<sup>159</sup> スペイン人、フランシスカス・クサヴェリウス(1506-1552)はパリで留学中に同国人のイグナチウス・ロヨラと知り合い、彼に支えられて‘ジーザス・ソサイアティー’（イエスイット教団）を設立した。1541年に宣教師としてインドに発つ。ゴアから彼はモルッカ諸島や日本に旅をした。彼が東洋で宣教師として大きな成功を収めたのは、彼の外国語習得の才能と、そのために現地の人々の道徳や習慣を理解でき、現地の、彼によって改宗した人々の助けを借りて伝道事業を組織することができたからであった。日本は中国を通して初めて改宗するであろうという考えから、彼は中国に旅立った。広東の近くで、過労のため死亡。フランシスカス・クサヴェリウスは1622年に聖者の列に加えられ、1927年にリシューのテレジアとともに、伝道の守護聖人に祀られた。（脚注239および250も参照）。

イェッテン

折尾（福岡 15）

1944年12月25日

日本でのクリスマス。午後3時にローマンカソリックのミサ。会場はぎっちりいっぱいだった。後で聞いたところでは、中に入れなくて数十人が帰っていったそうだ。インドネシア系の若者達、ウォルフ、クルース、ドゥ・ヨング、A.デュラン、全員ジョッキヤ出身の芸術家兼手品師が、祭壇を作り、キリスト降誕の飼い葉桶模型も、実にきれいで、シンプルだが芸術的で、見た人は皆、雲の中を歩くような幸せな気分だ。クリスマスの日中ミサとクリスマスの説教。ベツレヘムの話。我々が親愛なる主が飾り気のない岩穴にいたように、我々はこの祭日を、それにふさわしい貧しい環境の中で祝った。しかしそこには暖かな、心を捉えるカソリックの雰囲気があり、我々一つだ、と感じた。終わってから、アンドリッセンがこれから一生、毎年、クリスマスは教会で祝う、と誓ったと聞いた。ミサが終わってから、ローマン・カソリックの合唱団が、もう一度大食堂で収容所全体のために四部合唱で‘サクリス・ソレムニース’から、‘パニス・アンゲリカス’を歌った。午後3時に病院に居る病人のためにベツレヘムに関する、歴史的地理的な講話をした。

夜はクリスマス・ディナー。ヤップは赤十字支給品を渡した。[我々は]会場を飾った。日本のスタッフや炭鉱重役が祭りの手伝いをし、写真を撮った。プロパガンダだ。‘日本の戦争捕虜達はこんな暮らしをしています’。だが、僕たちは知っている、クリスマスには赤十字社のおかげで全く空腹に悩まされることはなかったとしても。

クリスマスのミサの時、僕は信仰仲間たちに、この近くの鉄鋼精製センター<sup>160</sup>で、クリスマスに‘パパ・フランソ’によって、我々のために2つの聖なるミサが行われるであろう、と知らせることができた。炭鉱ではカソリックの[日本人の]炭鉱監督と連絡が取れ、彼も他のヤップと少しも違わないが、しかし僕の書き付けを宣教師に届け、ロザリオと‘アワ・レイディー・オブ・ミラキュラス・メダル’<sup>161</sup>のメダルを持ってきてくれた。全ては完全な秘密裏に、それがないと、この連絡を取ったことでひどく重い処罰を受けなければならないからだ。

---

<sup>160</sup> 北九州の八幡鉄工所。

<sup>161</sup> ‘奇跡のメダル’のこと。祈りが聞き届けられたり、キリスト教に改宗したり、病気が治ったりするのはこのメダルのおかげだということになっている。マリアがパリのデュ・パ通りのチャペルで尼僧のカタリーナ・ラブレに2度目に現れた1830年11月27日に、カタリーナは表面に手を差し伸べるマリアの像、裏面には一つのMの文字と、そこから立ち上る十字架、Mには横棒を入れ、ジーザスとマリアの2つのハート、それぞれ茨の冠をかぶったものと剣で刺し通されたものが描かれたメダルを鑄造するようお告げを受けた。メダル全体は星の輪に囲まれている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年12月25日

クリスマス。全員休み。しかし、第2炭鉱[の労働者達]はやっと9時になって帰ってきた。溢れるほどの食べ物、種類豊富。多くの赤十字社の食糧。総数127プラス124箱のアメリカ赤十字社小包を受け取った。オースターホフ指導のミサ。

夜は大食事会。将校カルテットと20人の合唱団のクリスマス・ソング。フォンデルの*ガイズブレヒト*から、‘おお、クリスマスの夜は日々よりも美しい’<sup>162</sup>のコーラス。僕が書いたクリスマス物語‘灯された光’（オースターホフによって朗読された）。僕のスピーチ。‘我々は大きな家族となった。私は[収容所長として]家長になった気持ちである。いたずらな子供を罰したこともあり、聞き分けの良い子供を誉めたこともある。それでも、我々是一个の家族である。互いに与え合い、そのことをこれからも証明していこうではないか。’全員満足し、啓発された。

ルーゲ

福岡 21

1944年12月26日

昨夜クリスマスを祝った。それは、とびきり楽しい日だった。食堂は飾り付けられ、クリスマスツリーもあった。十分な食べ物、その上オレンジ1個、煙草40本、クリスマスクッキー、ミルクと砂糖入りコーヒー、4人で1本のビール。つまり、とても良い日だったのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月24日-1945年1月初頭

イブの晚餐に、我々が12時に食堂に行くと、全体が見事に飾られており、樅の木の緑、ヒイラギ、大きなクリスマスツリー、窓ガラスやツリーには緑の小片、それにガーランド[花綱]！それは、我々の仲間が作った、本物のクリスマス飾りだった。プログラムと挨拶が、本当にすてきな絵の上に書かれていた。僕たちは本物のクリスマス気分で食事し、しかもストーブが点いて暖かだった。しっかり暖まってベッドに行けば、朝まで暖かく、いつものようにしょっちゅう起き

---

<sup>162</sup> フォンデルの悲劇*Gysbregt van Aemstel* (1637)中の、‘*Rei der Klaerissen*’の始まりの部分。

あがって小便に行く必要もない（そうすると兵舎を出て便所に行かなければいけないのだ）。

翌日はいつも通りの朝食の後整列し、ヤップからハンカチ（この前 [のハンカチ] は、確か去年のクリスマスにもらい、僕は煙草20本と交換に、もう一枚買い足した）と石鹼2つ、それに煙草を10本もらった。ここのヤップは僕たちが大好きのようだ。

そうこうしているうちに申し込んでいた2時の散歩には間に合わなくなり、僕は散歩をあきらめた。昼食の時には食堂にレコード・プレーヤーがあり、‘ラルゴ’とバッハの曲、それにダンス曲などが掛けられた。僕は全く陶然として2時まで座っていた。音楽が呼び覚ました記憶に身体が痺れ、この様なものが外の、自由の世界にはまだあるのだ、と思うと言葉も出なかった。僕は、我々の炭鉱労働者の生活に、このような繊細な時間が余り無いことを、ほとんど良かった、と思った。もしあったら、僕たちの生活はもっと辛くなっていただろう。僕たちが収容所で過ごした期間—16ヶ月強—に、これまで一度もゆっくり良い音楽を聴いたことはなく、これは大変不足なことだ。[H.G.W.] ストルカーと僕は、時には思い出した曲を口笛で吹いたりしたが、しかしそれとは違うのだ。ある夜、僕は遠くに微かにバッハの曲のようなものを聞いた。起きあがっていってみると、それは日本人将校の事務所のラジオらしかった。収容所の中で僕には立入禁止の一兵舎から便所に行く道筋にもない一場所において、見つかったら打ちのめされる危険を冒しながら、僕はそこに座って聞いていた。素晴らしかった。

このクリスマス日のプログラムによれば、3時にホームスケルク中尉の（あまり想像力をかき立てない、そのために冷たい）クリスマス・スピーチがあり、4時にはイギリス人がとても上手に‘ジングル・ベル’を合唱し、5時に点呼だった。その後[G.H.F.] スネイダース、[H.J.] フレドフォード、[J.] ボールスマの部屋に我々が構成する二つの‘テーブル’が集まり、それは彼らに加えて [ヴィム] ドゥ・ハーン、[ヤン] ル・コント、[W.J.] ポリス、[N.J.A.] ファン・フルスト、[G.J.] スロット、[J.F.] ファン・ダー・ポル、コーニング（プラス [脱穀していない米] を隠れて持ち込んだというので入れられていた営倉から出てきたばかり）、ストルカーと僕で、煙草を喫みながら8時に次のグループが食事に来るまで、愉快に話しをした。

テーブルについての僕たちに饗されたものは：チャーハン、スープと酒で、これは炊事係が僕たちに給仕してくれた！！テーブルの上には塩味おつまみ2本、ウビ [カッサバ芋] コロッケ一つ、ミカン二つ、600グラムの大きなケーキ、ビスケット、詰め物をしたパンがあった。豚肉の入ったチャーハンが、最高だった。次が、ほとんど皆が食べきれなかったケーキ。僕は食べてしまったが、夜中に戻さないように、パンとビスケットは取っておかなければならなかった。ケーキは夢のようなおいしさだった。音楽のためにスピーチをするのは不可能で、[こうして] クリスマスの唯一の磨かれた側面は失われた。おいしいものを、沢山食べるというのに留まった。その意味では成功した。リアと子供達のことがしきりに思い浮かばれ、彼らも楽しく祝っているといいと思った。[...]

[大晦日には僕たちは10時まで炭鉱で仕事をしなければならなかった。] 11時半に、誰もいない風呂場で気持ちの良い暖かな風呂を浴びた後、食堂のストーブの周りで年越しを祝った。僕は我々の分隊と第二小隊に煙草をおごった。2時半まで、僕たちはそこにいて、故郷の家



族のことを思っていた。去年の、炭鉱の中での祝い<sup>163</sup>よりも楽しいものだった。

ルーゲ

福岡 21

1945年1月1日

また1年が過ぎた。新年は我々に何をもたらすのだろうか？全員が自由を、そして故郷に帰ることを熱望している。僕たちは愉快的な年越しをした（僕は炭鉱の中にいた）。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月1日

全員休日。赤十字社物資支給。祝いの言葉。ファミリーパーティーで午後の集会。歌、詩の朗読、演説。休日にはいつもこのような‘家族の集まり’をし、‘心から心へ’というスピーチをしようと思う。これの最初のはクリスマスに行われた。1年の間に、我々は大家族になった。今日[話したこと]は：我々は兵士である、第一にはヤップは我々を兵士として抑留しているから、第二にはそれが我々のオランダに対する、そして我々の女王に対する義務であるから。次に[話すの]は：兵士として、我々には規律が必要である。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月2日

[正月には]夜遅くキャバレット、スピーチ、日本の朗読[があった]。あまり特別なことはなかった。

---

<sup>163</sup> この章、1944年1月初頭付け、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

ルーゲ

福岡 21

1945年1月10日

寒さのために、精神的にもまいっている。娯楽無し。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月11日

良い本が、ものすごく読みたい。(しかし、それだけではない!集中力が僕には欠けている) [...] 僕の誕生日は沢山の食べ物とパンプディング([僕の仲間] コニーの発明品!)で盛大に祝った。一言でいえば、なんとかなる、この調子で行けば僕は家に帰ることができる。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月31日

ベアトリクス[王女]の誕生日。朝の点呼でスピーチ。罰を受けた者も、今日は免除。赤十字からの追加の煙草。

イエッテン

折尾(福岡 15)

1945年2月1日

純潔マリアが1858年にルールデスに現れた事を記念する祭り。ミサが終わってから、そこに行ったことのあるファン・エムステードに、ルールデスに関する話しをしてくれるように頼んだところ、この祝日、丁度ヤスメ日に、彼は引き受けてくれた。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年2月-3月

断食の始まり。断食の5回のヤスメ日に、苦難の話しをした。この話しの源泉は：ジーザスの、イスラエルの国と民の中での生涯。我々の断食の捧げものは、毎日聖母マリアにアベマリアを三回唱えることと、聖フランシスコ・ザビエルに3回、早く復活祭を祝うことができますようにと祈ることだった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年1月27日-2月16日

僕はカソリックの要理を勉強していて、僕が知らなかったカソリックの信仰、教義、倫理について教えられることが多い。礼拝も、今や全く、受け入れられないものではなくなった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年2月25-28日

イルヴィン・ストーンのラスト・フォー・ライフを読んだ、格別によい本だ。次の赤十字経由のリリアへの手紙にはこのことを書いてあげよう、クンストクリングの図書館にもあるはずだから。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月3日

今日、新しい、Y.M.C.A.の本50冊を受け取り、その多くが最近のもの（1943年）だ。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年3月8-12日

カール・アダムスのザ・サンズ・オブ・ゴッドを堪能した。また赤十字の本が入った。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年3月30日

聖金曜日。[...]半年ぶりに、食堂でミサが行われた。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年3月30日

聖金曜日。聖なる十字架の道行き、そしてウォルフはセメントと木とペンキで、素晴らしい十字架の像を作製した。終わってから僕たちは一人一人その十字架の前を通った、我々なりの、‘十字架崇拝’表明だ。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年4月1日

復活祭、僕はミサを指導した。賛美歌を歌う。神のさらなる誉れと栄光と、聖人達に向けて、‘炭鉱労働者の祈り’を作った。‘あなたに、おお、永遠の王よ’で締めくくった。またもう一度、‘パパ・フランツ’に手紙を書き、近づく復活祭義務の完遂のために、彼に復活祭の祝福をしてもらった。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年5月14日

誕生日 [5月7日] はうまくいった。僕は朝、バター付きラスクを食べ、3回、2倍の量を食べ、直ぐに胃を壊して便所に直行になった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年5月22-28日

僕は毎日2時間から3時間イシドール・オブラインのザ・ラウフ・オブ・クリストを読み、そこから僕の聖書にメモを取っている。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月13日

二重線<sup>164</sup>に英語のレッスンをする。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年6月21日

長崎の造船所から、捕虜達が炭鉱で働くために僕たちの収容所に移ってきた。コンタクトを取る心理的な瞬間を僕は逃がさなかった。彼らはここが始めてで、慣れておらず、ここにカソリックの生活があるということを感じ、知らなければならない。僕はすぐに活発に動いた。兵舎を訪問し、ミサの時間を知らせ、信仰の分野で僕たちがどんなことをしているか教え、信仰仲間の名前はローマン・カソリック収容所抑留者のリストに書き込まれた。

---

<sup>164</sup> 二重線は炭鉱でウェストラが仕事をしている荷車場の監督官。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年7月1日

ミサ。新しい人達に心から歓迎の意を表す。カソリック復活の兆しについてスピーチ。集まりは成功で、満員の人、前もってコンタクトを取ったおかげだ。終わってから新しく来た人達の人、長崎でも信仰の面で活動していた、バタビア石油会社社員のファン・ダイクとかいう人が、‘ここの人達は出来る’と言ったそうだ。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年7月7日

収容所内のカソリック組織。ヤスメ日毎（10日に1度）に一般的ミサ1時間が許可されている。兵舎は16あり、収容所全員で1100人。カソリックのオランダ人、イギリス人、アイルランド人、アメリカ人、オーストラリア人の総数は400。それぞれの兵舎にカソリックの中核になる人たちがいて、毎日自分たちの兵舎の中で（そこの男達は全員同じシフト）ロザリオの祈りをあげる。核の指導者は同じ兵舎の病人達を病院に尋ねる義務がある。これまでは病院の病人を僕一人で訪問していたが、大変な仕事過ぎ、しかし重大な意味のあることだ。交代で誰かが幾つかの兵舎を訪問し、人々を‘カソリック・マインデッド’にするために、聖人の話やローマのこと、ルールデス等々に関する朗読や信仰的談話をする。宗教講座をヤスメ日に行う。カソリックでない人で、カソリシズムに率直な関心を示す人達が多い。周囲の事情で十分な知識が得られておらず、カソリックの人生とその例を見て関心を示す人達が非常に多い。収容所内のカソリックの、主義を貫く態度が、不活発だったカソリック教徒を熱心なものに変えている。

病院の、カソリックではない医者と議論をし、死の危険のある場合のカソリックの立場、[我々の]見方や義務についてはっきりと伝えた。彼の言ったことに反対した。‘おお、もし我らが主が彼らを欲しないとすれば、・・・’。終油の秘跡について話し、死の危険がある場合は家族か友人が神父に知らせるべきである。彼は臨床していて病人が自分で神父や宗教の助けを求めた例はほとんど見ていない。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年7月21日

炭鉱に降りる前、点呼の後に、ヤップの命令で回れ右をして炭鉱神社に向かって頭を下げなければならぬ。我々カソリック教徒にとっては、神に‘炭鉱から出た上の’安全を願い、聖処女や聖なる心に向けて短い祈りを捧げる、絶好の機会だ。この‘お辞儀事件’も我々はこうして、我々のやり方で解決した。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月23日

僕は少しフランス語をやっていて、チェス大会にも参加している（丁度勝ったところ）。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡15

1945年7月21-26日

音楽の夕べは‘通常のリズムを外した日’になって、僕はひどく神経が高ぶり、30時間も眠っていないのにほとんど眠ることが出来なかった。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年7月31日

聖イグナチウス祭。<sup>165</sup>全ての核で聖イグナチウスに向けて9日間の祈りを捧げることにした。彼の手本が我々の心に火のような願望を起し、我々全ての力を持って隣人の中に神と至福の栄光

---

<sup>165</sup> ロヨラのイグナチウスはスペイン・バスクの聖人。1518-1521の間、彼はスペイン副王ナヴァラの軍隊の将校だった。スペイン-フランス戦争のパンプロナ防御戦で、彼は両足に重傷を負う。病床についた長い期間に信仰が深まり、回復後はラテン語を学ぶために学校に戻ることに決めた。その後彼はパリに行き、グループを作り、6人の同じ考えの者達と共に、‘ジーザス・ソサイアティー’（ジュスイット教団）を結成する。伝道事業はジュスイット教団の中で重要な部分を占めていた。ロヨラのイグナチウスは1622年に聖者の列に加えられた。彼の祭日は7月31日。

を高めますように。

ローマン・カソリックの軍隊の守護神祭。点呼の時、長官と兵舎長が、今日の午後3時に、ローマン・カソリックの軍人（と希望者）のために講話がある、と発表した。‘守護神祭に関連して、ロヨラのイグナチウスの生涯について’ オーストラリア人の G.D.ケネディーは、諜報部の人で[...]カソリックではないが、聖イグナチウスに大変関心を持ち、それは彼の父親がよく話していたのを聞いたからだ、マラヤン作戦の時に、1607年に遡る聖イグナチウスのメダルをもらっていることが分かった。いつも彼はそれを土に埋めて、ヤップから、そして収容所内の泥棒から隠していた。彼はそれを特別に大切にしているようだ。それでもそれを、聖イグナチウス [連盟] に贈り、オリジナルのコピーで、私が保管している。

[英語]

福岡、1945年7月23日

メダル-聖イグナチウス・ロヨラ

私は上記のメダルを、私の賛辞と共にジャワのオランダ軍に贈ることを決めました。一つだけ、簡単なお願いがあります。適切な祭日に、マラヤン作戦で亡くなった、あるいはその影響で亡くなった、煉獄にいる全てのオーストラリア兵の魂のために祈って下さい。予定としては、最初にこのメダルは、父に見てもらうため、大切にオーストラリアの我が家に持ち帰るつもりです。それが終わったら、安全かつ確実に包装し、書留でジャワの関係機関に郵送いたします。[...]

(署名) ダグラス・ケネディー

[オランダ語]

聖イグナチウス祭の時に、仮の譲渡が行われた。ミサと講話の後、贈り主の名に於いて、私がメダルを‘聖イグナチウス’連盟に譲渡した。メダルは薄青い絹布に留められ、見学することができる。

仮譲渡書三通作成

聖イグナチウス理事長の地方代理として、提供された聖イグナチウスのメダルを、ここに感謝と共に受け取ります。下記に署名した者は、寄贈者に対する、彼の1945年7月23日付の書類に記された義務を果たすことを、ここに厳粛に約束いたします。メダルは寄贈の目的に従い、感謝の心で、信仰の忠告者との話し合いと承認の元に、神のさらなる栄誉と栄光を連盟の旗にもたらすために使用します。

聖イグナチウス祭、1945年7月31日



カクシマ村、福岡県、九州島、日本。

(署名) 歩兵少尉 H.G.M.ナイスン[...]  
曹長 J.L.フフナー[...]  
曹長 F.C.オーストダイク[...]  
軍曹 W.P.ファン・カンペン[...]

信仰仲間にたいする我々の活動は無駄ではなかった、会場は満員だった。この日、これほど素晴らしいことができる時に、一度‘外に向けた’行動を取っておくのはよいことだった。‘ローマ・カソリック信者、それは我ら’ [の歌] で締めくくった。

イエッテン

折尾 (福岡 15)

1945年8月11日

ヤスメ日。礼拝で、[早急に安全に家に帰れますようにと] マリアへの嘆願書を奉じた。

## 収容所の雰囲気／戦後の生活に関する考え

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年10月31日

いつも、毎日、そして毎時間、僕の思いの基礎にあること、それはリリアと子供達。このように書いてみるとちょっと奇妙だが、しかし、本当だ、何をするときにも彼らのことを考えている。毎時間彼らのことを考えている、というそれは少なすぎる。何かするときにはいつも、彼らのことを考えていると言うべきだ。朝の点呼の寒さの中で、立って待ちながら消えゆく最後の星を見るとき、僕は思う：彼らはまだ安らかに寝ているだろう、と。その後食事に行くときは、祈りの中でいつも神がリリアと子供達に今日また与えて下さるだろう全てに感謝を捧げる。どこかからの帰り道、時には‘あの可愛いおちびちゃん達’などつつぶやいてみる。特に彼らの何かに関して考える、とかいうのではなく、ちょっと彼らの存在に思いをはせ、彼らが居ることを‘意識’する。

我々をお守り下さる神に対する意識も、同じようなものだ。行動したり体験したりするときはいつも神が僕の思考の中にあり、僕はいつでもできるだけ彼の側に行き、触れ合いを感じるようにする。収容所内の多くの人達が、そして世界中の多くの人達が同じように感じていることは分かっているが、しかし僕らはまだ道に到達しておらず、信仰をより篤くしなければならぬことを益々自覚するようになってきている。僕はかなりの頻度で聖書を読み、リリアと子供達も同じようにしていることを、リリアが子供達に神について語り、マンシイが、きつともう日曜学校に行っていることを願っている。

我々の仲間たちが炭鉱から戻ってくるのを見ていると、独特のものがある。黒く汚れ、寒さに震えて疲れているが、それでも...警備官に帰所報告をするとすぐに宿舎に向かって走っていき、兵舎病の者達と冗談を交わし、急いで支度して風呂に向かう。この抑圧的状况の中にもかかわらず、人々がいかに快活で活発でいるかは驚くべきものがある。これが、動物の上に立つ、人間の精神の柔軟性というものであろう。我々は精神によって、元々自分が属さないような、様々な状況にも適応することができる。それでなければ動物達のように、捕らえられることによって萎えてしまうであろう。

オースターハウス

福岡 15

1943年11月25日

今日はもっと沢山書く努力をしよう。これはしかし、余り日記風ではなくなっている。書きたい気持ちはここでは全くなくなってしまう、他の多くのことに対するやる気がなくなるのと同様に。それでも幾つかの題材は外界に対して記録に残しておく価値があるかも知れない(僕たちにとってはこの全てが、‘普通’で‘日常的’なことで、退屈の余りある一日と他の一日の区別もつかないほどだが)。それではここでまだ重要なことは何か？それは食糧とそれに関連する全てのこと。

オースターハウス

福岡 15

1943年11月23日

日曜夜。意に反して古い記憶が今夜は僕の心に忍び込んだ。日曜にオランダの家で、M、君と一緒にいる。日曜が、いかに本物の祭日だったことか。午前中は教会へ、その後、気持ちよく暖房された居間で一杯のコーヒーを飲みながら一緒に新聞や雑誌を読む。

オースターハウス

福岡 15

1943年12月4日

これは奇妙な日記だ。本当は前回(11月28日)にもっと沢山書きたかったのだが、単に書けなかった。考えを全面的に、そして十分に紙に向けるような精神力に欠けていた。ここで何を願望しているかを書き留めることは、単純にできないし、そのために時として心に沸き上がってくるものにはほとんど耐えられない。言葉は貧しいものだ。しかしそれでも、全てはそれでもやっとな近づいてきて、自由が実際に地平線の果てから顔を見せ始めているような気がする。

へレ

宮田（福岡 9）

1943年12月17日

僕の体重が59,5[キロ]ということはもう書いたかな？オランダでは75キロの体重だった。僕は君に要求する、僕たちが再び家に帰り、一緒になったら、早急に僕の体重を元に戻すようにすること。うまいものを沢山作って、ほとんど一日中食べ続けられるように。脂肪の少ない米の飯はもう無しだ。力強いオランダ料理、できたらね。そのことを考えるだけで腹が減ってくる。餓え、この2年間で餓えとはどういうものかが分かった。全能の神よ。僕たちの当然の報いかも知れない、構やしない、それでも早く終わりが来ることを願っている。[...]

僕は僕たち二人のための一軒家の設計をしている。4人で住めるような小さな家。くつろぐ場所。あまり値段が高くてはいけない。まあ見ておいで。さて、愛する人よ、またね。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月21-24日

昨日の夜、僕たちの隣の部屋で、クリスマスの歌が唱われていた時、僕の隣に寝ていたブルハルトが突然泣き出した。実を言うと僕もぐっときていた。ここに居る人達の中には、感覚が麻痺してしまって、第一の本能、つまり食欲だけが重要になっている人達もいる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月25-31日

[12月]24日、(イブの晩餐)僕は元気よく快活でリングのせき立てにもかかわらず、様々な古い曲を歌った。そして故郷でリリアと子供達がどうしているか、夜教会に行っているだろうか、と考えた。僕は皆からちょっと離れて暗い坑道に座り、リリアとフランス語で声を出して会話し、すっかり楽しく嬉しい気分になった。

オースターハウス

福岡 15

1943年12月27日

M、君は知っているね、僕の心の中には別のクリスマスの祝いが生きていて、そして僕たちが最後に一緒に祝ったときのことを考えている。この次はまた一緒に祝えるだろうか？僕たちがいかに病室内で毎晩の夜礼拝の時、祈りと共に早く自由が来ることを願い、そして君たちがその夜故郷でどうしているかをいかに考えているか、ここに来て見てほしいくらいだ。それから僕たちは新聞から入手できる、数少ない良い知らせにすがりつく（ああ、分かっているとも、わらにすがりついていることは）。すると僕は心の中で次のクリスマスは再びジャワで祝える事を確信する。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月1日

これを僕は大晦日の夜に書いている。暖かな医務室で重病のイギリス人を座って見守りながら。これは、M、君のためだけに書く、なぜなら僕は今、この静かな時間の中で全く君と二人きりになりたいから、そして君に僕の心の最も奥の、ほとんど外には出てこないけれど、もう4年半前になってしまったあの心地よい時にはいつも僕たちが素晴らしくしていたように、最も純粋な考えを話したい。毎晩寝る前には、あの時のことをいつも少しでも思いだそうとする。小さな事、言葉、考え、毎晩またくる別れ、クリスマスの祝い、テスヘリング [オランダの島] でのバケーション、緑地を通る散歩。それから将来についても、どのようになるのだろうかとよく考える。君の蘭領インドへの到着、僕たちの会合（君はとても変わったのだろうか？前以上に君を愛することができるだろうか？）バンドンでの僕たちの結婚式、僕の居心地の良い離れ屋で二人きりになること、結婚して初めての夜。そうだよ、M、特に最後のこと。一般的にはこれを表立っては言わないことは僕も知っている。でも君は僕を理解してくれることも分かっている。君も僕と同じように、初夜が結婚生活にとってとてもとても大事だと言うことを知っている。僕たちは身体も魂も一体になれるだろうか？

おお、愛する人よ、君を再びこの胸に抱きしめることができるまで、後どのくらいかかるのか。君を僕の大きな愛で包み、かこむことができるまでに。僕ら自身の幸運と僕たちの巢のために考え努力する事ができますように。なんて不思議なんだろう、M、愛がこれほど大きく強いなんて、4年半別れていながら大きくなるばかりのようだし、君の思い出は毎日の僕の生活で最も重要なものだ。そして今、この変わった正月の朝（今は2時）に、僕は君の側にいる、M、すぐそばに、そして僕の腕はもう決して離さないというように君を抱き、君は僕の肩に頭をあずける。そして僕は君に口づけする、M、この新年の朝に、長い口づけ、新しい約束のように、固

い信仰のように、僕たちの思い出の年、天にまします我らの父からいただく、僕たちの両手に受け取りきれないような大きな、完璧な幸福の年が今始まるように。そして僕の唇は君の名を呼び、君だけが、僕にとってそれがどのような意味があるか知っている、M、僕のM。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月15日

そうさ、M、君がこれを読んだら、もう君が理解できないことに驚くか悲しむだろう。しかし、一つだけは、愛しい人、不変かつ不可侵の宝物として僕の心にしまわれている。そして君はそれがなんだか知っている。これは変わることがない、そして僕たちがまた一緒になったら、それは全ての誤解や行き違いを終わらせ、消え去らせるだろう。僕たちはまた互いに歩み寄り、昔、遠い昔にそうだったように、お互いの中で成長していくだろう。後どのくらい・・・？

君はこの書き物から、僕が厳しく、荒く、冷たくなったと思うかも知れない。しかし、僕は知っている、君の目と柔らかな手が、再び僕を助けてくれることを。この日、僕の心や生活に何が起こったのか。僕は勇気を持って君の前に僕の心を広げ、その中の黒い部分をみせよう。物欲、誰かが僕よりも少し多く米や汁をもらったこと。病室では僕が汁を配膳するので、いつも僕自身に他の人より少し多くつけること。あるいはほんの少し甘いお粥を食べる、なぜならエマソン（いい奴だ、ここでの親友の一人）が午後のためにもう一杯、残していることを知っているから。[...]怠け心、自分でやるより、誰か別の人に‘バケツ’を洗わせようとする事。

わかる？M、これがヤープの、心の奥底だ。そしてそこにしか見つけることはできないのに、そこに逃れる道を探すことは少ない。夜の礼拝は僕にとってはほとんど言葉でしかない。それは僕の魂にとっては乾燥し、枯れすぎている。おお、神よ、僕を助け、この精神的泥沼から抜き出して下さい、物質よりももっとひどい泥沼から。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年1月15日-1月末

炭鉱に入る前の、強制的日本の祈り<sup>166</sup>の時に、いつも僕は自分の祈りを捧げている、つまりリリアと子供達の健康を願い、必ず彼らの顔をちょっと思い浮かべる。しかしこの頃はマンシーの顔

---

<sup>166</sup> おそらくファン・ウェスト・ドゥ・フェールは炭鉱神社への祈りを指している。‘健康と医療情況’の章、1944年3月3日付、ヘレの日記抜粋、および‘娯楽と信仰’の章、1945年7月21日付け、イエッテンの日記抜粋参照。

を目に浮かべることが難しいときがある。写真入りの、僕の財布が盗まれてからもう1年近く経つ。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月1日

それからまだ炭鉱労働者（我々の社会の‘背骨’）、しかしこの背骨は、あらゆる努力でなんとか持ちこたえさせなければならず、その骨髄はどんどん折れていく、等々、といったものだ。そしてそのために僕たちは今やみんなひどく楽観的で、それはそうでないと時に全てが少々ひどくなりすぎるからだ、分かるかい？なぜなら半分気がおかしくならなければこの全てに耐えることができないからだ。だから僕たちはまたもや一度互いに言い合うのだ、噂も実はいいもんだと、そして日本の新聞に、6月には我々をジャワに送り返すと書いてあったと。これはまだ5ヶ月も先の話だということに、はっきりは思い至っていない。医師はこれを危険な兆候だ、という。彼が正しいのかも知れない。今、そんなに遠い将来のことではないので唯一楽しみにできること、それはこの次の、米の飯と良かったり良くなかったりするスープの食事だ。（今夜はスープに肉が入っている！！と言っている）

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月10-19日

僕たちが戦争捕虜状態から普通の社会に戻ったら、始めのうちは、普通の生活全ての感情が僕たちには激しすぎて、うまく適応できないのではないかと思う。[...]

僕はリリアと子供達のことをしょっちゅう考えていて、こうして書いていると、これを一度、夕べに僕たちが楽しく隣同士に座って、リリアに読んであげられたらよいが、と思う。これを書かなかったら多くのことは失われてしまう、僕たちの記憶力はひどく悪くなっているし、その上、僕はあまり楽しくないことは早く忘れてしまう人間で、今体験していることは、そのカテゴリーに入りうるものだから。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月20日-3月12日

近頃はひどく落ち込んでいた。そんなとき、皆がどれだけ弱っているか、そしてほとんど全ての人がまた病気を抱え込み、ヤップはこれに何も対処しようとしなのを見ると、あまり希望の持てるものではない。[...]

僕は2年前の〔2月〕27日、僕がリリアと一緒に僕たちの家〔バタビアのボンチウスヴェフ5番地〕を売り、一緒に子供達のおもちゃを買いに行った時のことをよく考える。リリアが、少なくとも金銭的な心配だけはないだろうと思うと、本当にほっとする。ここにいる多くの、そしてその多くは現地の婦人と結婚した職業軍人は、妻達がどのようにして生活を維持しているかが分からず、全く別の心配を抱えている。その人達にとってはヤップがサディスティックに、彼らの夫人達は皆日本兵の娼婦になっている、と言ったりすると、ひどい打撃だ！自分たちの子供達のために収入を得ようとして、そんなことになっていないとも限らないと、ひどく恐れている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年3月13-31日

ジャワの収容所で前に組織された多くの講座は、生きる気力を奮い立たせる絶好の方法だった。同じようにここでも、多くの本、時にひどく難しい、炭鉱で仕事をしながらも考えるような本を読むことだ。僕はあらゆる詩を暗唱して、これを炭鉱内で繰り返し、少なくとも覚えているようにする。僕がとても美しいと思う幾つかは、僕の聖書の見返しに書いておいた。それには2つある。一つは、まあ普通のもの、もう一つはとても変わっていて、ナザレのジーザス、4つの福音の調和という題で、ジーザスの人生を、4つの福音書を同調させて一つの話しにした、というようなものだ。



ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年3月22日

病院で、ちょっと一息ついた。<sup>167</sup>僕はここでは将来の夢を見、僕たちの家について、僕がそれをどのように変えようか等という夢だ。庭に関しては沢山プランがある。庭用椅子や、新しい縁取り、ちゃんとした菜園、良くできた鶏小屋、乳山羊、等だ。それに関しては、捕虜になってとても多くを学んだ。例えば山羊は1日瓶一杯のミルクを出す。さらに僕が食べたい全てのインドネシア料理のことを考える。僕たちが戦前まで使っていたようなバカな調理人はもう要らない、今度はジャワ人を雇おう。また、僕は沢山のスケッチを描いた、君の裁縫机や僕たちが欲しかった長椅子や。さらに僕は一軒家の建つ土地や、僕の買いたいきれいな本を夢見る。君のために鶏や犬の飼育に関する本を買わなければ、なぜなら僕はもう田舎の野良犬は飼わない、そして純血種の犬にはスホル夫人が持っていたよりももっとちゃんとした知識が要るのだ、彼女は彼女の犬小屋をめちゃめちゃにした。 [...]

いつになったら終わるのか？ ヒル、ヒル、僕はホントにひどく終結を熱望している。2年が過ぎた、しかし僕は今ほどひどいめにあっていると思ったことはない。あの犬めらは‘キープ・ユア・ボディー・フィット [健康を保て]’と、もごもご言いながら、他方では人を火葬場に駆り立てる。時と共に骨壺に消える人達が増えていく。

オースターハウス

福岡 15

1944年3月23日

ここ収容所の生活は‘普通に’行われていて、外界の人達は多分大して関心を示さないだろうと思われる、小さな出来事が時々あるだけだ。いろいろな兆候から、近々3000人の新規入居者があるようだ、という事が、我々にとってはとても重要な事で、毎日の会話の大きな部分を占めている。それでは、我々の一部はどこかに出ていくのか？ 入ってくるのはアメリカ人か？ オランダ人か？ 食堂後方にある、僕たちの‘行きつけのテーブル’では、‘テンコ’の後で日本の‘タバコ’を詰めたパイプや、もう少し程度の良い紙巻きタバコ等を‘満喫’しながら、このことについて徹底的に話し合われる。しかし、タバコが一月か二月、飲めなくなる危険を冒さないように、よく気を付けなければいけない。夜勤のグループが、7時以降に食事を始めたら、公式には他の誰も食堂に入ることはできず、将校の旦那方は（ストーブのすぐ側で！）被害者を見つける事ができないかと目つき鋭く窺っているからだ。しかし、その危険を冒す価値はある、それは一日の

<sup>167</sup> ヘレは肺炎で病院に寝ていた。‘健康と医療情況’の章、1944年3月22日付、ヘレの日記抜粋参照。

うちでも、最も‘愉快的’時だからだ(この‘愉快’という言葉には苦々しさがこめられている)。そうになると、ニックが僕の隣に座り、ヘールトが向かいに座る。そして将来に関する、山のような仮説を構築する。いわく、僕たちは一緒に遊びに出かけよう、前よりずっと地味に生きることができるようになるに違いない！(そう言いながらも、ジャワの岸に上がったらすぐにでも食べようと思っているあらゆるうまいものが見えてくる!) 僕たちの‘家族’をもっと大事にし、そのために時間を割こう、等々。すると一杯のコーヒーとは、そしてパンの上に、バターやチーズを少々のかせたものはどんな味がするのか、あるいは純血戦争捕虜としてその全ての後遺症を背負った僕たちが、早急に普通の市民に変身することができるのか、と自問してしまう。

するとこの3週間、すぐ近くの福岡空港から全く飛行機が飛び立っていないのはなぜか、なぜこの4ヶ月間も、全く新聞が目に入らないのか、今夜炭鉱から、もう何度目かの噂として入ってきたように、遂にやっとドイツは降伏したのか、と空想をひろげる。そして、ケンペイタイが3月18日に赤十字小包(356箱)を、実際に徹底的に検査した今、遂に僕たちもそれにお目にかかるチャンスがある(?) (そして味わう?)。それは明日のヤスメ日かもしれない(12日間シフトの長い日々の後で)。わかる? 夕方に、これら全てのことを座って話し合い、炭鉱服や、食物鍋や、即興の灰皿(水入り)や、胸の番号(114!) やらを、好意的に無視すれば、そしたらやっと、愉快的な時を過ごせるのさ。

オースターハウス

福岡 15

1944年4月8日

こうして君も戦争捕虜収容所体験をたっぷりし、一日中喋っていられる。炭鉱についてもだ。これは自分の経験からではなく、他の人の言うことを聞いている。‘ハコ [トロッコ] に何杯?’ ‘シドージン [日本の監督官] が、また、く・意地悪だった。’ ‘2時間眠れたぜ!’ ‘今は寒い坑道で仕事している。’ (だが‘暖かな’坑道で仕事をすることもあり、その時には禪一丁だ。) ‘おい、ロムボック [唐辛子] もれえたかい?’ ‘いんや、タバコだ。だがめったやたらにうるさくなったぜ。’ [...]

しかし、ほとんど、あるいは全く喋らない人達もいる。そういう人は多い。この人達は炭鉱後の作業終了報告の後に、最初に風呂に入るために部屋に走ったりせず、先ずしばらく自分のテンパチャ [寝床] に座っている。そしてタバコを1本吸い、それから風呂に行き、それから食堂に行き、それから又テンパットに行つて眠ろうとするが、疲れすぎて眠ることができない。そしてまた炭鉱に行かなければならない時間になると、また同じ堂々巡りの始まりで、ある日倒れてケイギョウ [収容所内作業員] になるか、レンペイキュウ [兵舎病] になるか、あるいは死ぬまで続く。これも日本の戦争捕虜収容所の一面だ。これらの人達も、時には故郷や妻や子供達のことを考えることがあるが、それは自分ではたどり着くことのできない、おとぎの国の天国と

して考えるのだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年4月13日

‘花嫁を持つものは花婿である。しかし花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ’（ヨハネ伝、第3章29）

こんな時、こんな状況の中では昔よりも、嬉しきことに喜びを見いだすのは難しいのだろうか？利己主義はこの頃、確かに強い。梯子段上の喧嘩は、最高点、一あるいは最下点に、もう達しただろうか（？）。そうすると真珠のような友情は今や非常に珍しく、そのためにより貴重なものになっている。本物の友情、本物の分かち合う喜び、本物の同情、そして彼らはこの収容所でも一緒に人生を深く掘り下げ、純化する。ニック、君はここでさえも、なんと貴重な日を持ったことか。こんな時に、君の心が喜びを、子供のような喜びを持てることに、神になんと感謝したらよいか。4月11日。<sup>168</sup>君がこの世で一番愛している彼女について、来年も一緒に喜びを分かち合えるかい？神がそれを賜りますように。[...]

そして、もしリンゴ丸々1個がエクストラに有り、それはうまく成功した取引の結果で、次のようにいった：アメリカのタバコ→紙巻きタバコ4箱とリンゴ1個→懐中時計、そして、君の夫人が誕生日であることを、もっと強烈に意識する。（戦争捕虜が、なんとうまく物質的刺激を精神的反応に転化することか！）そして君の友人が夜になってリンゴの芯を手に入れば、そして彼はその嬉しきことにより大きな喜びを見いだせる。これは皮肉でも冷笑でもない、これを後になって読んだり聞いたりするかも知れない人達！これが戦争捕虜の心理なのだ！これは昔は僕たちが不動で絶対のものだと思っていた人生価値の変換、転化なのだ。究極的には昔と同じ人々で、この不可思議な物事から喜びと解放を汲み取れる（神よ有り難う！）人々なのだ。

君たちの目には子供っぽく映るかも知れない、その中で僕たちの考えが、毎日毎日動いている、小さな物事の永遠の輪と同じように。自由、故郷、噂、食事、労働、噂。アメリカ人か否か？....引っ越しか否か？おお、それは全て、我々にとっては非常に重要なことだ。野菜入り（葱までも！）の大グロバック [荷車]、馬鈴薯入りの車。僕たちはこれらのものを普通に徹底利用している。僕たちはそれを徹底的に調べ上げ、最大限に利用し、中にあるもの（そして無いもの）も、全て取りだし、そして他の人達のことを、ボケているとか半分気違いのようなものだと言っている！—多分程度の差だろう。

---

<sup>168</sup> ニックの妻の誕生日。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年4月1-19日

僕の誕生日<sup>169</sup>の前の日に夢を見た。雪のアッセン [オランダの町] で自転車に乗り、リリアが泊まっていたベネス家の家の前を通り、彼女に向けて口笛を吹いた。分隊 [作業班] の中で、僕以外に3人、自分の妻の夢を見た人たちがいる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月28日

この頃僕はリリアと子供達のことを心配している。彼らがいまだにあの暑い蘭領東インドにいることを。金銭の心配は、幸いなことにないだろう、だから少なくとも、十分な食糧は買えるだろう。しかし、2年経って戦争が近々終結するという見込みも無い今となると、心理的な面も心配になってくる。彼らはこの事態をどのように受け入れているのか、気をしっかり持っているだろうか、そして自分たちの生活を、きちんと組織しているだろうか? [...]

時間がどんどん経っていくと共に、非常に簡素な基盤の上に生活しながら、それでもとても幸福でいられる、ということを今僕は知っている。もしここに僕の家族が居たら、そして以前の生活状況を忘れれば、僕は完璧に幸福になれるだろう。僕の精神的教育を忘れたとは思わないし、僕の子供達のためにも良い教育をと願ってはいるが、僕のいわんとするところは、人生の幸福は、貧しさとも一緒になって成立しうる、ということだ。もしかしたら、贅沢さとその複雑さよりも、よりうまく成立するかもしれない。僕たちが餓え、衰弱、虚脱との境目にいつも居る必要がない程度の十分な食糧さえ与えられるのなら、ここの生活は結構耐えられるものだということができる。炭鉱で苦力のように働かされる司法公務員にとっても。

ウェストラ

福岡 17

1944年6月27日

僕は考え事が多い。家のことも。僕は故郷を理想化していなか? ヘティーとアネカはどうしているだろう? 誰が僕の生涯の伴侶なのか? 彼らのことをしょっちゅう考えている。

---

<sup>169</sup> ファン・ウェスト・ドウ・フェールは4月5日が誕生日。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月11日

夜11時、蚊帳の下。壁ジラミやノミやシラミのために眠れない。それで君の最後の手紙をまた読んだ、そしたら君が、また一度に僕の隣に来たよ、M。オランダで、女の子などというものが僕を待っていてなんて事を、時々忘れそうになる。時間が全ての傷を癒してくれて良かった、そうでなければこんなところで生きていけない。ホンのために、古傷がまたうずき出す。それはすごい痛みだ、M、君が時には大きくなりすぎる。その時にはこれが決して終わらないのではないかと思ってしまう。毎朝、3回鐘が鳴る。そして毎朝、勇気が身体をまたもや炭鉱に入る準備をさせる。そして毎月8日<sup>170</sup>に、旗がいつも楽しそうな様子で門の所にはためく。そして今日、ホルマンが死んだ。[死亡者リストの]49番。後何人死ぬのか？そしてイギリス人やオーストラリア人は故郷から手紙を受け取る、沢山、長い手紙を。おお、すると僕も、また見覚えのある字体で書かれた封筒を受け取りたいと熱望してしまう、M。

ウェストラ

福岡 17

1944年7月23日

休日。僕は夜勤のため、結構落ち込み、死ぬほど疲れた。数時間眠って、それから君たちの手紙を読み直した。これはとても僕の気分を引き立ててくれる。安息や共感、理解とはどういうものか教えてくれる。僕はオランダのことをよく考えている。それはここが夏のせいだと思う。ライデン [オランダの大学町] のシングル運河沿いの、僕たちの小さな家で、夏のある日庭に居て、僕の望むもの全て、特に平安がある。君たちの手紙があって良かった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月21-28日

昨夜はリアと子供達の、本当に愉快的な夢を見た。彼らはある保養地において、僕は彼らを訪ねていく。僕が着いたとき、子供達はもうベッドに入っていた。彼らは起こされ、僕は一夢の中でさえ子供達が、別れたときよりも大きくなっているのを知っていたので、夢の中でも彼らは成長

---

<sup>170</sup> おそらく、1941年12月8日の日本軍の真珠湾攻撃を記念して。

していた。マンシー、ピートゥース、マリアナは彼らの柔らかな顔を上げた。マンシーはすぐに僕に気付き、ちょっと驚いてゆっくりと‘パピー’と言った。本当に可愛くて、僕はリアと子供達とただ一緒に座って‘おお、また一緒になれるなんてなんてすてきなんだ’と言った。その後の夢ではリアと僕は(カサブランカだと思うが)あらゆる食料品を買いに、僕が戦争捕虜だった事を多分知らないだろう店に行った。緊張した雰囲気の中での販売は、僕にとっては時間がかかりすぎ、僕は半ポンドの塩2つとロムボック[唐辛子]10包みを僕のケープの中に隠したが、カレーは見あたらなかった。販売人は日本人だった。その後僕たちはモーターバイクに乗って出ていった。まるで映画館で映画を見ているようだった。

ウェストラ

福岡 17

1944年8月3日

望みうる限り最高の夏の日だ。食事がひどく少なく、そこに赤十字社小包が入荷したということなので、昔の、故郷の様々な思い出がどんどん思い浮かんでくる。昔は、いつもあんなに素晴らしい家庭生活だった！それを少ししか楽しめなくて、もったいなかった！今度帰ったらどうなるだろう？君たちのあらゆる細かなことが思い浮かぶ。カメと僕のプリン。もしかしたらもうすぐ家に帰るかも知れない。今年中に？チュンカイでのオリヴィエを通じた、オリヴィエとママのヘルプを思い出す。書きたいことは山ほどあるのだが、忘れてしまったり、うまく書けなかったりする。ものすごく沢山の思い出が僕の頭をよぎる。そこに僕は少々すがっている。戦争と将来に関する希望。美しい夕日を貴重なものだと思う。昔のようにいろいろなことに楽しみを見いだせる間は、自分自身のことは心配していない。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月11日

M、僕は戦争捕虜の人生は2年半後には焼きゴテで焼き焦がされているものだと思っていた。幸い、そんなことはなかった。毎晩のように探し求める、失った楽園の場所を探すように。毎晩、古い、よく知られている物語を読んで、もう一度新しい美しさを吸収しようとするように。毎晩のように、古い記憶を辿り、僕たちの人生から小さな出来事をもう一度探し出そうと、魂の片隅のどこかに君が隠れていないかと、どん欲に探し回る、それによって一人の戦争捕虜の心を温めることができ、まるでコート掛けにコートを掛けるように、自分の人生を預けることができるものを。この願いは永久に消えないのか？これは行き過ぎることはないのか？僕たちは将来に失望

することはしないのか？あるいは愛は実際にそれほど大きく、限りないのか？計ることのできない宇宙なのか？彼女はそれほど全てを司り、戦争捕虜の苦しみも人生も、狂おしい熱望や絶望的な望みも、全て彼女の膝に包み込めるのか？彼女は人生をもう一度楽しいものに、僕たちの心にこれまで浮かんだこともないような、僕たちが、ここでさえも見たこともないような、そんなものに変えることができるのか？そうなのかい？

ウェストラ

福岡 17

1944年8月14日

少し前僕は数学の勉強をしていた、だけど僕は全くダメになっている。ものすごく簡単なことでさえ、もう忘れていて！もう止めて、将来、全く価値のない人間になっているのではないかと少し落ち込んだ気分になった。もちろんそんなことはない、僕は今ひどい状況にあり、空腹であるし、などなど。それに僕はママが書いてきたように、‘酸っぱく’なっていない。‘酸っぱく’なってさえいなければ、そして全てに価値を見いだすことができれば、将来まだ挽回できる。

ウェストラ

福岡 17

1944年9月21日

図書館から歴史の本を借りた。実にアメリカの本だ！現代の高度に発達した文明を示している！12番の小屋にアコーディオン。そして突然、僕がこれから数ヶ月炭鉱に入ろうとそうでなかつた、どうでも良くなった。全ての歴史を通して、悲惨な戦争の後にはまた良い、幸せな時期が来ているからだ。音楽とワルツの古きウィーン、ルイ14世時代の貴族のパリが戻ってくる！それは僕たち自身にかかっている！僕たちが自分でそれを作ることができるのだ！自由のアメリカ、本当の、そして偏狭なカメラ・オブスキュウラのオランダ<sup>171</sup>、月明かりのライン川、東屋にワイン。カール・ハインリッヒ時代のバイデルベルグだ！戻ってくる、もちろんそれは戻ってくるのだ。前と同じではない、しかし心地よい、ロマンチックで現代的な落ち着きを持ち、忙しい仕事と、チロルでのような、ゆったりした休息。それが人生をとっても心地良いものにする。そうだ、炭鉱はなんて取るに足らないものなのだ！数ヶ月がなんだ？もうすぐアネケ（！！）と、君たちと、僕が‘酸っぱくなる’のを妨げたマミーと一緒に僕がしてること全てが正しかったかどうか判断を下すのだ。

<sup>171</sup> Hildebrand [ヒルデブランド] (牧師で文学者であるニコラース・ベーツ 1814-1903 のペンネーム) が、*Camera obscura* という題を付けてまとめた本に出てくる、オランダを皮肉った記述を指している。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年10月4-9日

日記にはあまり書かないが、僕の思考はリアと子供達のことですほとんど埋まっている。それが今の僕にとっては最大の生きる希望であり、ここでの生活に唯一意味をもたらすものだ。昔一緒にいた頃をもう一度振り返り、リアがいかに僕にとって大切であるかを感じる。僕はリアと子供達の夢、どのように僕が帰っていき、子供達を抱きしめるかという夢をよく見る！すると一日中また気分良く、明るくなり、彼らの姿に心が和む。彼らのためによく祈り、全てに充足し、良き友に囲まれて健康に生活し、整った生活をしているように。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年10月15日

妻よ、君は一昨日誕生日だったね。本当におめでとう。忘れたわけじゃない、でも書く時間が無かったんだ。[...]君も年だね、26歳だったよね。会うとき、君がどんなになっているか興味津々だ。君が僕を見て驚かないといいが、だって君の所にくるのは弱った骸骨で、多分まだ生命が少しだけ残ってはいるが、なんだか知らないがひどく大人しく無口な男だからね。

ウェストラ

福岡 17

1944年10月22日

色々な簡単な仕事を一緒にしているヤンから、いつも潑刺として明るくて、身だしなみもきちんとしている（他の人に比べて、という意味、もちろん）と誉められた。これはとても大事なことだ。こんな事がまさしく、僕が落ち込んでいるときに気を取り直させてくれるものなのだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年10月27日

又雨模様で、同時にもう幾つかのことを‘日記’に書く良い機会だ。そうでもしないとほとんど



何も起こらない。周りで起こっていること全てが、まるでガラスの向こうを滑り落ちていくように感じる。生きていることはいるが、機械仕掛けになったような感じだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月11日

君たちの写真を見た。見るといつも気分が良くなる。ヘティーのひどくポーズを付けた写真と違って、僕の持っている写真はとても親しげで懐かしい。僕はひどく変わっただろうか？多分変わっていると思う。この後の自分の人生を、しきりに君たちの目から見ようとしている。僕も将来を恐れているからだ。[...]今後、どうなるのだろうか？牧師は、信頼しろ！と言う。僕は信頼しているか？この数日間、友達で、僕の避雷針のようにになっているコニーに対して以外は嫌な気分を抑えてきた。僕は今、決めたのだ。待とう。起こるべく事はいつか必ず起こるのだ。僕が、将来小市民的で偏狭にさえならなければ。[...]

大4小隊は送り出された。特にコニー！彼は死ぬほど疲れている。全てを気にしすぎている。全てを忘れ、何をするのも遅い。澁刺さや気力もない。僕は彼にいらいらすることが多い。しかし僕は彼を引き上げなければ、彼もここを生き延びるのだ。そのために僕は半分エネルギーを消耗するが、それでもやらなければ。仕事はなんとかかなる、寒さもそれほどではない。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月14日

ハーグドールンには子供がいるが、写真は持っていない。彼は毎日、写真を持っているフィンクの所に、その写真を見せてもらいにくる。僕は最初衝動的に、彼を喜ばせるために僕の写真も見せてやろうかと思った。しかし暫くするとできなくなった。なんだか自分のひどくプライベートな心の内側を見せるような気がするからだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年1月21日

この頃はなんだか不安がつづっていた。聖書を読んでまた少し落ち着いた。

ウェストラ  
福岡 17  
1945年5月24日

この頃ひどく神経質になっている。なぜだか僕にもわからない。

ウェストラ  
福岡 17  
1945年6月13日

僕を屈服させることはできないぞ。僕は炭鉱ではもう単に何もしない。僕はきっと生きてここから出てみせる。冬になったとしても、‘よれよれの箱’でしかなくなったとしても、僕は生き抜く。チラチャップやキンサヨック<sup>172</sup>に居たときのように、踏みこたえるぞ、という気持ちになっている。

ウェストラ  
福岡 17  
1945年6月18日

コニーも僕も気分良く、元気だ。僕はこの頃すぐ歌が出てくる。

ウェストラ  
福岡 17  
1945年6月29日

コニーには困る。彼は生きる勇気がもう無い。もうすでに、戦後の、我々若者にとっては大きな可能性のある時期も、生きていく元気が無いという。自分は劣っていて、職に就けないと思っている。彼は完璧な劣等感に陥っている。

---

<sup>172</sup> 彼がジャワとタイで抑留されていた収容所の名前。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月1日

コニーは心理的に参っている。生きる希望無し。生きる勇気がない。僕は彼と将来について散々に話しをしたが、彼には気力が全くない。

オースターハウス

門司(YMCA ビル)

1945年7月2日

街が燃えているのを見た!<sup>173</sup>これは全てを忘れさせるような大きな印象を与え、この3ヶ月間最大の山場、神髄だ。この3ヶ月間はおそらく僕の人生で最も辛い期間だったが、そこにも終わりが、救いがあるはずで、それがこの最初の文に現れているのだ。

イエッテン

折尾 (福岡 15)

1945年7月7日

我々は消耗しきっている。食糧はもっと少なくなった。虚ろな瞳で炭鉱に行き、虚ろで死ぬほど疲れてそこから出てくる。後どれだけ?このような時にこそ、聖なる思いを忘れてはならない、**彼**に全ての信頼を寄せているのは無駄ではないのだ。毎日我々の‘上での無事’つまり炭鉱を無事に出ることを祈っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月13-20日

僕はいつもリアと子供達のことを考えていて、僕らの家を売った金があるので、彼らの物質的、身体的な状態にはあまり心配していない。しかし彼らにとっては、僕たちからの手紙が届かないので、僕たちが大丈夫であるということを知るのはずっと難しいであろう。

---

<sup>173</sup> オースターハウスは連合軍の門司空襲を指している。‘戦況に関する情報と噂’の章、1945年7月23日付け、オースターハウスの日記抜粋参照。

オースターハウス

門司(YMCA ビル)

1945年7月20日

M、僕はもうほとんどダメだ。ここで起こったこと全てを書くなんてとてもできない。僕の精神が死んでしまった。身体は死にそうだ。大事件が起こっているが、それを自分の中で処理することが我々にはもうできない。これは僕が戦争捕虜として体験した中でも最も難しい時期だ。

## 互いの関係

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年10月31日

全員が、自分は独立した個人で、ここでどのように、時には他人を犠牲にしても（と、多くの人は思っている）生き抜くかは自分の問題であると感じている。共同体意識は欠けている。将来また復活するであろうオランダ社会への連帯や義務感は存在せず、将来の社会に対する、そしてそこで課されるであろう規律に対する確固たる信頼もない。これはイギリス人においては全く違い、彼らは自分たちがまだ大英帝国の一員に属すると強く感じている。ここで彼らに罰が下されれば、それが後には関係省庁に報告されるであろう事を彼らは知っている（職業軍人の場合は確実に）。その自覚はここでもよい影響を与えている。オランダの‘ヤン太郎’は、将来的に降格されるかも知れないという警告に関しては一笑に付している。生き残ってから考えることさ、と言い、戦後の厳しい懲罰は信じておらず、あるいはそうなったら別の職業に就いていると思っている。

この収容所で初めて、僕たちがいかに倫理観念、誇り、正直さ、仲間意識、スポーツマンシップ、などで育てられたかを知った。少なくとも僕には他のバタビア市民軍団の友人達<sup>174</sup>が、今の僕と違うように行動したり考えたりするとは思えない。もし、するとすれば、僕の父や母の親族達は中産階級や下層階級の人達よりもかなり高いレベルの教育を受けてきたに違いない。嘘、盗み、強欲、だまし、詐欺、などは今の僕の周辺の人達にとって、自分や自分の友人がする分には大してひどいことではない。友人でない人達（そこには全ての上流階級の人々が含まれる）がやって初めて大きな口を利くようになる。ねたみから、すごい批判をする。そして‘紳士はあんな事はしない’などと言うのだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月5日

炭鉱で、我々は食事と、‘空腹’（これは配膳してから、追加に少しずつ分けることを言う）は我々全員に来なければいけないのに、一日90食分もを配膳係が追加としてもらっているシステムに対する不満を話し合った。ヤン・ル・コントと僕が代表してこのことをドウ・フリース中尉に知らせに行き、‘空腹’は炊事係が管理するようにしたらどうかと提案した。彼は我々の意見にす

---

<sup>174</sup> ファン・ウェスト・ドウ・フェールは日本軍の蘭領東インド攻撃の時、ランドストーム市民軍団に配属されていた。

ぐに賛成し、24時間以内にそのシステムが導入された。その後数日、収容所全体が我々に配膳されるようになった追加の食糧に驚き、楽しんだ。21人の配膳係は1日に90食以上の飯や汁を我が物にしていたことがわかった。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1943年12月21日

配膳係を廃止して全員に平等に分配させる、という我々の提案は最初は大変うまくいったが、しかし人々は2回列に並んで2食分を取るといふ、盗み行為が行われていることがわかった。これは特にイギリス人が多い。我々はまた炭鋏で案を練り、それを僕がスレウ [中尉] に説明し、それをドゥ・フリース [中尉] に伝えてもらった。彼はその案を、形を変えて導入し、そのためにまた間違いの起こる可能性があった。[A.G.D.]ヘンゼルが、デモンストレーションのために2食分を抱えて将校達のところに行って初めて、またシステムが変更された。

病院でも盛大なごまかしが発見された、看護人がもう何ヶ月も食事をかすめ取り、売っていたのだ。彼らはスレウによって2ヶ月の罰を受けた。彼は僕に、これを公式な犯罪事件としてもっと重罰を科すには十分な証拠がない、などと言い訳を言っていたが、しかしまあ、これでも良いだろう。それでもまだ夜には、そこに居る人数の割には馬鹿馬鹿しいほどの大量の食糧が行く。バケツ 5.1/2 のスープ=160カップが37人用だ！これもいつかは糾されるだろうと思っている。

良くないことが起こったのは、イギリス人が我々の将校には処罰の権限がない事に気付いたときだ。日本軍事務所のイギリス人当番兵—半国賊—は我々の将校の命令を全く聞かず、彼が[H.]ラップルト医師の不在中に、医師のバラン [荷物] から本を抜き出したというのでフンバー [中尉] が罰したところ、日本人に文句を言いに行き、事も有ろうにそいつはフンバーを殴り倒した。この事でスレウは日本人将校のところに行き、もし彼の懲罰が無効にされるなら規律を保つ責任は持てない、と言った。それで彼は日本人将校から、事後承諾を得るという条件付きで懲罰の権限を与えられた。そうでなければ盗難がはびこっていただろう。数日前に様々な兵舎から服や金銭が盗まれている。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1943年12月25-31日

ヤップ達の様々なことについてよく悪口が言われるが、時には理由無く言われることもある。た

たとえばヤップは我々のコート用の番号を作るために兵舎病人たちにハサミを8丁渡した。完成したとき、ハサミが3丁無くなっていた。ヤップは彼らを寒さの中で3時から6時まで整列させた。すると部屋から2丁出てきたが、1丁は見つからなかった。これは我々ヨーロッパ文明に対するイメージを悪くする。我々に何かを貸せば、たちまち取られてしまう、と。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年1月初頭

[炭鉱のノボリで] 下の、覆い付き溝の端で機械のそばに2人の男が立っていて、溝に添って鎖を下に引き、それに石炭が付いていくようになっていた。それは[F.J.P.]フロスカンプという最年長の、同時に分隊長でもある男と、ヤップに働きかけてその職を得たXだ。モーターのスイッチを入れたり切ったりするのはもっと弱っている仲間でもできることなので、彼がしているのは正しくない、すくなくとも弱い者と交代できるようにすべきであると思っていた。Xはそんなことをする必要は無いと言い、機械のそばにいる順番を決めるくじに参加するのも拒否し、最終的に我々の取り決めに従う気はないのかと聞かれると、‘分隊の4分の3はもう自分に敵対している。なんでこの仕事を僕に与えたヤップまで敵に回す必要があるか。’と言った。これはナンセンスで、他のノボリと同様に交代でやりたい、と彼が言ったとしてもヤップはすんなり受け入れるに決まっている。これはもう裏切り者的な態度としかいいようがなく、我々と協力するよりヤップと力を合わせたい様子で、我々はもう彼を無視することにした。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月18日

すでに多くの賢者、識者たちがこのような、つまり餓えの時代には、人間の中の野獣が表面に出てくる傾向がある、と言っている。彼らは正しいと僕は思う。今ほど盗みが巧妙に、数多く横行している時を見たことがない。配給された食事や服や赤十字缶詰が、鍵をかけておいた箱の中からでさえ盗まれる。ここの中には1日1回は実際に何かを胃に入れた、という気分になりたいという人がいる。彼らは朝の飯を夜まで取っておく。しかし、しっかり隠しておいた鍋はひょっこり発見され、夜炭鉱から帰ってくると空の鍋が待っている。本当だ、胃と人間の中の野獣には緊密な関係がある！

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月15日-1月末

僕は今、ヤン・ル・コントや、僕の今の同居人たち、そして一緒に口笛でバツハのブランデンブルガー・コンサートを再現しようとしている[H.G.W.]ストルカーといった、とても良い友人達が居る。リンブルグ炭鉱の元技術エンジニア、[G.H.F.]スネイダースもいい奴だ。[...]

色々な方面から炊事場に対する苦情が出ており、もう誰も炊事係を信用していない。我々が1日に受け取る280グラムの米(プラス200グラムのパン1回)は炊くと550から700グラムになるといい、炊く前と後に計ることによって、いわゆる係数や分配量を計算しているが、それを我々がコントロールすることはできず、時には明らかにごまかしている。たとえば公式には590グラムもらえるコック達は、病人のためにそこから100グラムを提供しているが、その分またヤップからかすめ取っていると認めた。ヤップの残りは昔から病人に行くことになっていたのだから、彼らからの提供は何の意味もないことになる。このような不平不満から一度はコントロール・チームが自分たちで調理して飯を分ける事が許された。その許可が下りるか下りないかの内に、炊事場から来るカップは山盛りになり、コントロールの必要もなくなった。

上官達も時には不器用なことをする。病人用に飯を寄付する桶のそばに、寄付する人の番号をチェックする人を立たせ、寄付しない者は、後で自分が病気になったとき330グラム以上は決してもらえないようにする、とラッパルト医師は言った。僕は非常に腹を立て、それに反対して、医者には性格の悪い者はそのまま死なせるという習慣があるのか、と尋ね、そうしないと90人の我々のシフトから必要な2カップは決して寄付されず、桶に入っている物を取っていく者すらいるであろうという彼らの主張にも関わらず、チェック係が立たないようにさせることができた。事前から悪くなることを前提とするのは間違っていると僕は思うし、幸い実際にも、人間をまだ信頼する僕が正しかったことが証明された。[...]

室内からも多くの者が盗まれるが、それを見つけるのは難しい。最近死んだイギリス人、[E.A.]チェンバースは最後まで赤十字小包のうまい食べ物だけを食べて、米はタバコと交換していた(この米を、彼の健康を犠牲にして彼から買っていた無責任な人達と)。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月25日

医務室のスナップショット。収容所最大の仮病使いF.が入ってきて(耳が遠い)大声で言った。  
‘ドクター、わしをまた炭鉱に行かせてくれ。この食糧じゃあ生きていけん。’この感じで、医師が彼を軽くからかいながら医師とF.の会話が続く(F.は病院に入院しようという彼の試みはと



ん挫し、レンペイキュウ [兵舎病] になる価値はない、ということは理解した。)

オースターハウス

福岡 15

1944年1月26日

炊事場と食事に対する不満と不信が最終的には西洋人収容所幹部に対する組織的な運動となって現れた。その結果：激しい摩擦。最後には日中シフトから4人の代表者を選んで一任し、信頼の於ける将校、ラップルト医師、[ベルナルト] アダム中尉、ベルグ歩兵少尉が立ち会って、米とパンの調理と計量を3晩続けてコントロールすることになった。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年1月末-2月初頭

僕たちの部屋で一日に僕のタバコが3箱盗まれ、他の日には僕のコートのポケットに入れてあった瓶からロムボック [唐辛子] が盗まれた。規律評議会の事件が幾つか有った ([K.E.] プレスラウ大尉<sup>175</sup>が、僕に司法の専門家として評議会の会員になるように頼んできた)。S.はストルカーの巻きゲートルを売ろうとして捕まった。彼は様々な物をヤップに売り、我々の兵舎中の盗難の嫌疑もかけられている。D.は彼とK.の飯入り弁当が炭鉱で盗まれたと言い、そこにいた全員の承諾を得て追加の飯をもらった。後になってクリンクは良心が痛み、それが‘作り話’であったことを白状した。D.は1日牢屋行きなどの重罰を科された(S.は1週間の罰！)

自分の健康を心配しすぎる事の最後の表明として耳が聞こえない振りをしたF.は、病院の日本人医師に健康だと言われ、そのためにラップルト医師に対してひどく腹を立て、医師も彼をもう信用せず、ケイギョウのグループに入れれないというので悪口をわめきたてた。このように人間のいろいろな嫌な面を見る。一方では我々のグループは病人のために充分の寄付をするであろうと楽観しているが、今では5%を自動的に病人行きにした方が全員にとって簡単であろうと思う。[...]

分隊長のB.は2回飯を取りに行ってみつけた。始めはドゥ・フリース [‘炊事場中尉’] は罰を発表しなかったが、僕が3回尋ねると、やっとそれは修正された。しかし最初のクッキー分配の時、それでもドゥ・フリースはB.にもそれを配った。ドゥ・フリースのやり方に対する不満は多く、アダム中尉を炊事場に入れる運動を僕たちはしているが、残念ながらこれは成功し

---

<sup>175</sup> K.E. プレスラウ司法修士は日本軍による占領前にはジャワ西部国内執行部の第一監査官であった。

ないだろうと思う。

こうして我々のここでの小さな人生は、この小さな世界の出来事に様々な文句を言うことで成立している

オースターハウス

福岡 15

1944年2月4日

規律評議会は忙しい。対象者の一人、S.はタバコ、砂糖、クッキーを6ヶ月間差し止められ、その上7日間牢屋入り！！それは寒さ、塩気の強いおにぎり、お茶無し、少々の水、を意味している！

ヒルフマン

福岡 9

1944年2月12日

毎日のように盗難がある。犯人が見つかるのはホンのたまのことで、見つかる私の指図によって日本の司令官の罰（牢屋入り）を受ける。今日、私のカミソリが盗まれていることに気が付いた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月10-19日

将校達の態度は非常に悪い。医師は診察時間に読書やチェスをして人々を外の寒さの中で待たせ、アダム中尉以外は全員、我々がまるでクーリーであるかのような言葉遣いをする。屋内作業員としての配給量は600グラムであるにもかかわらず、自分たちは炭鉱労働者達よりも多く食べている。彼らは太って栄養行き渡り、ずっと大変な生活を送っている我々に偉そうな口を利く。ストーブのそばでは、我々をまるで犬のように追い払う。[...]

[雪の積もった] 最初の日、日本の大尉は我々を、夜の点呼の後、収容所中を回って駆け足させた。多くは素足、あるいは靴下をはいて木靴であり、怒鳴りつける日本兵に追い立てられて雪の中を裸足で走った者達も居た。全員の足が氷のようになった。僕はその雪の日にはヤン  
[ル・コント] の靴と、靴下をはいていて運が良かった。寒い駆け足の後、ストーブで少し足を

暖めようと食堂に行った何人かはドウ・フリース [中尉] に ‘ストーブのそばに立ってはいけない’ といわれて追い払われた。こうしたことがヤップや我々の将校の行為として簡単には忘れられないことだ。 [...]

収容所では収容所長のスレウの態度が常軌を逸した。彼は炊事場の監督権も得て、その辺りを懲罰を与えるために歩き回っている。長椅子をストーブのそばに寄せたからタバコ15箱、カップを使ったから20箱、他の人達の食事時間に食堂にいた（それほど不思議でもないが）から同様の罰、風呂場から暖かな髭剃り用の湯を持ってきたから同様の罰、など。まるで恐怖政治だ。

だから僕はドウ・フリースに苦情を申し立てにいった。炭鉱の重労働の後、そしてヤップに痛めつけられた後に帰ってきたら、我々の兵舎での生活をなるべく過ごし易い物にするのが将校の役目であり、現在のように、帰ってきたらまた我々自身の将校のテロにあうなどというのはあるべきではない。規律は互いを尊重することでも得られるものだが、港湾労働者のような言葉使いで我々に対するスレウのやり方ではどうも望めない。この間も ‘スープ鍋のそばの、このちび野郎は石炭をストーブに投げたからどやされたのだ。二度とするな、さもないとこの次は自分自身がこんちくしょうだぞ。’ たいしたもんだ！！

とにかく、僕の話は実を結び、次の朝には幾つかの処罰は盗難の処罰と比較しても適当なほどに変更され、スレウは黙って食堂を歩き回っていた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年2月20日-3月12日

昨夜 D.はまた、粥と飯を取りに行くとき、盗みを働いて捕まり、24時間、食事無しで牢屋行きになった。盗難は、今や物不足のため深刻な状況を呈している。個人的には今やしっかりブレーキをかけなければならない、今、他人の食事を取ることも同じように重罪としなければならないと思うのだが、私と同意見の人はほとんどいない。[N.J.A.]ファン・フルストが毎日ゴミの山の中から食べられる残飯を探していることは、それで誰にも迷惑をかけるわけではないので大してひどいことだとは思わない。しかし他の人達はそれを最も非難に値することだと思っているようだ。 [...]

昨日、外部長官の B.は米を盗んで捕まり、その後兵舎からの盗難も白状した。P.、L.に S.と、我々の兵舎は大した仲間を抱えていたものだ。これでもまだ足りないかのように、炊事場からは突然7人の男達が解雇された。原因はつまらないことだ。将校の食事を待たせたから。他にも引き合いに出されたのは、自分たちのために馬鈴薯茶を入れたこと。しかしこれは皆、スレウによって長く保護され過ぎていた炊事係の何人かに対する果てしない不満の結果だ。これが目に余るようになって、フンバー（イギリスの中尉として、日本人しか上官として認めていない）

がスレウに、この炊事班が出ていかないのなら自分が日本人に苦情申し立てをする、と言い、スレウも誰かを探して罰せざるを得なかったのだ。

出ることになったグループはそれを残る者達のせいにし、陥れられたのだと言い、こうして急にお互いの責め合いが始まり、それが M. に対する、コーンビーフの缶を開けた時に食べたという罪があるという非難になり、彼からは L. その他に対し、その翌日に、コーンビーフをパンにのせて食べたという嘘の告発をしたという非難になった。スレウ以外の将校は全員規律評議会の会員であり、そこでは、ネガティブな事実を証明する、つまり M. [自身] がコーンビーフを食べなかったことを証明するようになっており、ラッパルト医師は尋問の大部分を私に任せた（僕が彼に、ネガティブな事実は証明不可能であることを説明した後に）。2日後には炊事係全員が尋問され、L. その他は無罪となった。

判決の後で僕は関係者達に‘無罪’（つまり、単に証明不可能）の意味を説明し、最初の件では M. がコーンビーフをパンにのせて食べたことが、2番目の件では彼がそれをしなかったことが、それに当たる。このようにはっきりさせることが重要だと思ったのは、L. が丸1年かかっても M. に仕返しをしてやる、と言っていたからだ。やっぱり、僕の話の後で、L. は M. のところに行き、‘これはお互いに忘れることにしようじゃないか。’と言い、握手をした。この裁判の最中に、炊事場係は素晴らしい仕事であり、そしてあまり正直ではなかったことが明らかになった。[...]

兵舎病の最後の3日間は午前と午後、炊事場事件に関する規律評議会の裁判に出た。重箱の隅をつつくようなことをしても仕方がない。今月この男達は出ていくことが決まっているのだから。フンバーの要求で、L. は盗みで告発された。分かったことは、L. がカカオを、それを使うと作ったものが苦くなってしまって使えないので、‘よけておいた’ということだけである。後になって、L. はそれをどうしたらよいか、病院に送るのか、と聞いている。フンバーに、‘自分のために取っておく’という事実が無いときには盗難とはいえないのである、と説明するのはなかなかいい気分であった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年3月13-31日

収容所内の判決の出し方は絶望的で、気まぐれだ。ダイクマスターは法律のことは何も覚えておらず、G. とスネイダーに意見の食い違いが出て、G. はスネイダーがチャンギから持ってきて、もう1年間も所有している皿を自分のものだから返せ、とやってきた。僕はスレウに‘所有していることは完全なる権利を意味する’から、G. が自分が所有者であるということを立証しなければならないのだと警告したが、ダイクマスターは弁護士としてこれを全く理解せず、スネイダーに立証の義務を課した。[H.G.J.]リンデブラット [の件では] 反対だった。彼は[W.]ドホントが

亡くなったとき持っていたレインコートを返してもらえなかった。

D.は重複して食事を取りに行ったことをこれで3回見つかり、1週間牢屋に入った。

[...]

[炭鉱の] 石炭掘りで汚くなっていなければ、僕は沸騰しそうな湯で風呂に入ったりしない、多分肌にも良いわけではないだろう。僕のグループの仲間の一人が、それを利用してドゥ・フリース [中尉] に、僕があまり風呂に入らない（つまり、炊事場の仕事には向かない<sup>176</sup>）と申し立てた。ひどく狡猾でいやらしい陰謀家だ。スレウは僕がやはりまだ炊事場の仕事につける時期ではない、と匂わせた。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年4月20-30日

グループ分けやシフトで、僕がいかにも嫌な所に押し込まれるか、全く悲惨だ。[...]ドゥ・フリース中尉が、ちょっと、突然他の分隊のインドネシア系の者達と一緒に部屋に僕をいれた[事も気分が良くない]。執事でさえテーブルのどこに誰を座らせるか注意を払うのに、ドゥ・フリースにとってはそんなことも面倒なのだ。僕が新しい分配のリストを持ってテーブルに座ろうとしている彼のところに行くと、彼は食事中は邪魔されたくないと言い、下層階級の僕としては彼が終わるまで待てなければならない。そして僕は[F.J.]スホットホルスト [軍曹]、[ヤン] ル・コント、[Th.A.]セルダーベークと同じグループに入れてもらうことができた。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年5月18-27日

この頃いつもワカモト錠剤とロムボック [唐辛子] が無くなる。馬鹿馬鹿しく聞こえるが、僕が風呂場に行っている間に、部屋仲間の誰かによって盗られているとしか思えない。現場を捕まえることもできるかもしれないが、それでどうなるものでもない。僕は彼に錠剤60個が無くなり、犯人は知っているが、3ヶ月間タバコ無し、食事無しで2日間営倉に送るには忍びない、と言った。君だったらどうするか、A&Dの瓶を他の所に保存するか、それとも犯人を訴えるか、と聞いた。彼は僕に最初の方を勧め、盗難は収まっている。[...]

---

<sup>176</sup> 健康がすぐれないため、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールはスレウ中尉に炊事場の仕事をくれるように頼んでいた。‘健康と医療情況’の章、1944年3月13-31日付け、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

我々のパンは220グラムで、非炭鉱労働者とは20グラム違う。間違いを防ぐために<sup>177</sup>、200グラムの夜のパン [取り合えず全員用] を作り、我々の追加分100グラムのパンを110グラムにするように頼んだ。これは拒否されたが、パン屋から、いわゆる220グラムのパンは、内部作業員と同じものである、と聞かされた。つまり彼らは不法に10グラムや15グラムを得るために様々な方法を試み、そのために嘘やごまかしをしていたのだ。これでは将校紳士方への敬意は増さない。僕が炊事場に行くことをヤップが邪魔をした、というスレウの言葉は、嘘であることがはっきりした。また新しい男が入ったからだ：インドネシア系の男。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月28日

D.は巻きゲートルを盗み、軍曹から兵隊に格下げされた。彼が気にするだろうとも！判決は彼の会社に通達されるだろう。彼は知らん顔だ。しかし、我々に何ができるだろう？イギリス軍のようになに棒叩きの権限はない。それは効果があるかも知れない。

オースターハウス

福岡 15

1944年5月31日

前にもよく話したが、戦争捕虜も時にはひどく嬉しくなることもある。本当に嬉しく、子供のよう嬉しく。さて、今日もそんな日だった。満足し、感謝の気持ちになる日。気前よく、ルームメートにスプーン一杯のカレー粉(2円で買って、命の危険を冒して炭鉱から持ち込んだばかり)をプレゼントし、ここでは希少価値のある(一部の人達から‘ホントに良すぎる’等々といった評価を受けている人たちと、他の、特にキリスト教徒の人達を除いては)タバコを一本差し出す。このような精神の反応を起こさせる、具体的抽象的な詳細は、例えば：

a. 食堂で、明日(ヤスメ日)はアメリカ製煙草と赤十字物資の支給があるという発表があった。

(これだけで精神の変調をきたしそうになる)

b. 将校の‘従卒’になり、炊事場でうろつくことの多いヘールトが、合図を送る。丁度高価な食事を押し込んだばかり(ほぼ600グラムの飯と豆、トウモロコシ、ケデレ[大豆]、魚、それにフィッシュスープを一椀)の食堂をこっそり抜け出す。ヘールトは何気ない汚いシ

---

<sup>177</sup> ファン・ウェスト・ドウ・フェールはここで、220グラムのパンが200グラムのパンとすり替えられないように、ということの意味している。

ヤツをかぶせた洗濯バケツを手品のように出して見た。それをそっと部屋に持ち込む。  
（‘部屋への食物持ち込みは堅く厳禁！’）どきどきして見てみる。その結果：また同じよ  
うな量の飯とそのおかず、プラス魚、ひどくうまい日本の‘事務所用スープ’一椀それに  
日本の‘事務所用魚’一切れ。わかる？、これを丁度腹に押し込んだばかりで、しかしそ  
の時、戦争捕虜はもう一度これを食べてしまうことができなかった（それだけでもすごい  
ことだ）。

c. ヤン・ヤンセンが突然9本の煙草を目の前に置く。‘これを君に’ - ‘いや、しかし’ - ‘どう  
こういわずに、これは君にだ！’

d. ‘デュージュ’ [S.デュヴコット]が皿の上に突然煙草を3本置く。‘いや、しかし・・・?’ ‘大  
丈夫、これは君のだ’

（デュージュ、ヘールト、ヤンは僕から語学のレッスンを少し受けているが、でもそれだからとい  
って、収容所内で最も貴重なものである食料や煙草をしょっちゅう僕に投げてよこすほどにひど  
く僕に感謝するなんて！）しかし丁度良いタイミングだった、ヤープは友人を訪ねて、許可無く  
第一兵舎に行ったというので‘煙草5箱’の罰を受けたところだから。

ヒルフマン

福岡 9

1944年6月11日

盗難はさらにひどくなっている。犯人はほとんど捕まらない。全ては盗まれる、食糧、服、金銭、  
等。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月21日-7月7日

浴室で衣服を洗ったこと（暖かな湯があるので魅力的だが、禁止されている）が見つかり、煙草  
2ヶ月もらえないことになったが、幸いベルナルド殿下の誕生日 [6月29日] には罰はいつも  
撤回されるので、あまり重罰にはならない。それでもこの罰は、米を盗むことの罰と比べると馬  
鹿馬鹿しいほど重い。それは1ヶ月の煙草無しだ！

昨日は新しく来た人達の作業長から、弁当が2つ盗まれた。この人達は収容所裏の丘に  
防空壕用の穴を掘るため、収容所で働いているのだ。我々は全員2時間整列して気を付けをし、  
その間に部屋の中総てが搜索された。弁当は洗い場で空になって発見された。その上、2日間食  
事無しのはずだった D.の所で、パンが2つ半見つかった。どうやって彼がそれを手に入れたか

は不明だが、正直な方法でないことは確かだ。 [...]

浴室で僕が服を洗ったことに対する罰はスレウ [中尉] が次の日、14日間の浴室清掃に変えた。僕が彼に‘だからそれは今日、ベルナルド殿下の誕生日だから、無くなったのだろう’と聞くと、‘いや、これは今日から有効で、これは恩赦にはならないと僕が決めたのだ。’と言った。‘つまり、それは不名誉な罰にだけ適用されるわけだ。’と僕がクールに言うと、彼は怒りだし、僕には懲罰-規律評議会に不満申し立てをする機会があったはずだ、といった！その評議会には、この僕が入っているのだ！

ヒルフマン

福岡 9

1944年7月6日

道徳レベルはいまだにひどく低い。食糧の‘たかり’<sup>178</sup>は一般的には犯罪だと思われていない。誰かがそのために捕まり、罰せられれば、その人は運が悪かったことになる。しかし金銭や衣服なども盗まれる。犯人は通常は見つからない。私は次のような対策を取った；犯人を追加支給の内容で罰する。名前を全軍の前で発表する。兵舎長、部屋長たちは、その人達を入舎、入室禁止にする権利を持つ。階級を持つ者で盗難を犯した者には降格の可能性。我々の畑から来た可能性のある物が見つかった場合、その部屋の者全員が一様に罰せられる。

前向きな対策として、我々のプロテスタント牧師、ヒルケマ [軍曹] になるべく多くの人達と話しをして、罪深い人達にはその行動を指摘する権威を与えた。さらに、全軍に何度か、ジャワを思い出すように、家族や将来のことを考えるように、というスピーチをした。最後に、私は全ての罰に関してリストを作り、これはジャワに持ち帰って、必要な処置をするつもりだ。

<sup>179</sup>

オースターハウス

福岡 15

1944年7月14日

ニックとウォーカーは、遂に長らく待った爆弾を爆発させる事になった。

#### 1. 忘れ者 (?)

---

<sup>178</sup> ここでは食糧の‘盗み’を意味している。

<sup>179</sup> ヒルフマンはこれについて、戦後書いている。‘処罰リストはまだ持っている。ジャワに帰ってからは、我々の仲間同士の非をあげつらうよりも別の心配事があった。さらに、彼らは状況の重圧によってそのような罪を犯すようになったのだとも考えられる。’ (Hilfman, 84)



2. 規律がない
3. 命令に従わない。

その結果:ニックは14日間の兵舎雑用と牢屋に1晩、そして身体検査で時計を取り上げられた。これは彼の中で何かを壊してしまったのだと思う。彼は今、前とは人が変わってしまった。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月13-20日

F. [...] は赤十字支給の靴やハンケチを、一切もらえない。彼は近頃赤痢に罹り、そのために24時間食事無し、24時間粥だった。翌日彼は、本当はまだいけないのに、炊事場から追加のスープを欲しがった。彼がそれを見つかり、ドウ・ヨング大尉に大口を叩いたとき、スレウ [中尉] はそのことをヤップに盗難として報告し、彼は食事無しで牢屋入り2日間、1日おにぎり3つで5日間の牢屋入りの罰を受けた。幸いにも最後の5日間の罰は免除された。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月21-28日

S.はこれで4日間我々と共に炭鉱に行き、またもや‘ハーレマーハウトの嫌な男’<sup>180</sup>として行動し始めている。おそらく、彼が職業軍人の軍曹として、ジャングルにしょっちゅう送られていたことから来ているのであろう。例えば、我々は必ず45分間、座って弁当を食べ続けることによって、45分間は確実に休憩となり、作業長がその前に我々を蹴飛ばして仕事に駆り立てるのを妨げていた。S.も数日は同じようにしたが、その後は20分後にはこれみよがしに腕組みをし、ヤップに大いに誉められ、我々の模範に据えられた。翌日は我々も彼に寄生させて営倉に入るリスクを犯す(そのように脅された)よりはと、食糧箱を規定の30分間で食べ終わった。この卑怯者の他の面は、ヤップがそばに居るときには—自分で大げさに仕事して我々のゆっくり作業を台無しにするが、我々が何かの有利なことのために、働き続けようとするときにはほとんど何もしない。どうしようもない人間で、時にはヤップよりも、彼の方に困らされる。

---

<sup>180</sup> ここで日記著者はヒルデブランツのカメラ・オブスキュラの中にある物語、‘ハーレマーハウトの嫌な人’に出てくる、‘甥のヌルクス’を暗喩している。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年7月29日8月4日

S.はまた反対ばかり始めた。彼は本当の確固たるつまはじきで、故意に別世界に住む。[...]S.はまた機嫌を悪くし、炭鉱で諍いがあったとき悪口雑言を言い始め、今回は前のような‘ごろつき’ではなく、‘糞野郎’‘ユダヤ人’‘ヤップのおべっか使い’（僕が航海中日本炊事場で仕事をしたというので<sup>181</sup>）だ。僕はもう勘弁せず、ドゥ・フリースに侮辱罪で苦情申し立てをした。2日後にはS.は全く変わって静かになり、S.もなりふり構わぬ悪口を後悔しているようだし、裁判の後の屈辱や苦々しい思いよりも、悔悛する事の方に意義があると思うので、ドゥ・フリースのところに行って、申し立てを取り下げた。それに、炭鉱の中では皆気が立っていて、友人同士でも地下では互いに悪口を言い合い、上に来るといったいなぜそんなことをしたのか分からなくなることもあるくらいだ。そんな経験を、ヤン・ル・コントと僕も一度している。つまり、S.と僕ほどに立場の違う人間同士の間では、そんなことももっと起こり易いだろう。‘OK’とドゥ・フリースは言い、彼はどうも、これを裁判にまで持ちこむ気は全くなかったようだ。

収容所内判決の特徴は：将校が気分を害されれば処罰は24時間以内に決定される。しかし普通の兵隊が100%侮辱されても、何もする必要はない。ドゥ・ヨング大尉とブレスラウ大尉（国内執行部の補助総督）の下では裁判もましになるだろうと僕は思う。スレウ [中尉] は最年少の将校としても収容所長ではなくなり、収容所内作業員の司令官になって、丸一日山の斜面で太陽を浴びて畑作りを監督している。これに反発して彼は上司のすること全てを非難し当てこすりを言い、[...]あの3人の、ヤップによる昇格の書類等に署名するのを拒否している。だが、彼に署名を頼みはしないだろうと僕は思っている。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月16日

ネルンセイ医師は診察、またの名を人形芝居、をする。誰かがねばり、悪いところが沢山あって、本当はレンペイキュウ [兵舎病] にするべきだ。しかし、彼はその日すでに4、5人レンペイキュウにしているのに、またもう一人なんぞ！ヤップが何という事やら！彼は2つの岩場の間をくぐり抜けなければならない。ヤップと患者、その内の一つにあまり強くぶつからないように（ぶつかるとすれば後者の方に）。だから：

‘黄色い嘴を開けるな！’

<sup>181</sup> 日本に来る途中ファン・ウェスト・ドゥ・フェールは短い期間肉切り係として炊事場で働いた。‘輸送と宿泊’の章、1943年4月27日付、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋参照。

‘ドクター、僕には口があります。’

‘言っただろう、嘴をつぐめ！’

‘ドクター、言ったでしょう、僕には口があります！’

‘嘴をつぐんで行ってしまえ’

患者は去る。ドアの所で彼は振り返り、もう一度‘ドクター、僕にはそれでも口があるんです！’その時、この小さな男を襲った激怒の嵐を書く能力は僕にはない。無力の怒りに燃えた馬医者は、書類提出で被害者に仕返しをしようとした。しかし幸い、この収容所にはまだ‘普通の’将校もいる。訴えの答えは無罪であった。

ヒルフマン

福岡 9

1944年8月17日

今日から、兵舎内での盗みは、休日に‘兵舎泥棒’と書かれたボードを首から下げて見せしめにする罰とする。

オースターハウス

福岡 15

1944年9月21日

ピート、僕は今手に‘汚れた箱’を持っている。(この‘汚れた箱’は最近珍しくなくなった)前に配給の減少(150グラム)について書いた。しかし、これは‘定職の’収容所内作業員には適用されないのだ。それは;エブー作り[平らなざる作り]、畑仕事、床屋。僕たち7人ほども、実際的には定職収容所内作業員で、でも公式の米200グラムはもらえない。今や、僕たちはテンコの後、毎晩日本の炊事場の残りを食べて良いことになった。昨日もそうだった。食べ物が無くなったとき、3人居なくなった。その後、もう少しの追加が日本の炊事場から来た。それは僕たち4人で食べてしまった、収容所の中で残りの3人をそれから探し出すのはほとんど不可能だし、こういうことは結構良くあるのだ。その結果:結構な精神、つまり夜間シフトその他の‘積極的’観客(いつも嫉妬とねたみで一杯になってみていた)が、それをすぐに例の3人に知らせた。さらに、親切心から僕は‘馬鹿な’事をし、自分がもう沢山食べたので、たまたま隣に座っていた収容所作業員にその追加分の食べ物をやってしまったのだ。さて、ピート、食物はひどく、ひどくデリケートな問題なのだ。この結果として、今朝、特に僕の名前が最も嫌悪を持って皆の口に上がった。今日の夜、シモンズは‘おまえ、おまえが、この僕に食事配分についても一度言おうものなら……’などと言った。

ウェストラ

福岡 17

1944年9月21日

徐々に悪弊が広くはびこり始めている。病院の食事が少なすぎるという苦情には‘それでは出ていけ’という答えが来る。看護人が一番ひどい。彼らは患者の食事を取って自分で食べてしまう。他の収容所内作業員ではそれほど目立たないが、それでもそこもひどい。推定では一日400食が余計に支給されている。これは釘箱汚職<sup>182</sup>だ。おまけに炊事係は食糧を売っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月8-16日

僕は自分のレベルを高めようとしており、24時間はたとえ他の人達が気分の悪いことをしても自分はユーモア精神を忘れぬ事、他の人達のうわさ話をしないことを決めた。

ルーゲ

福岡 21

1944年12月10日

この頃食糧がひどく沢山盗まれる、厳しい態度で望んでいるにもかかわらず。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月4日

多くの噂がいまだに行き渡っており、喜んで信じる人が多い。心的傾向の特徴的な例：歩兵少尉のデュックは誰かに、[オランダの] 収容所長は、一つのブドウパンに、他のパンよりもブドウが1つ余計に入っていたから、もうブドウパンを作らせないようにするだろう、と話した。そのために、何人かの人達がひどくまじめに、その不満を乗り越えて、お願いだからまたブドウパンを作らせてくれ、と頼んできた。

---

<sup>182</sup> おそらくここでウェストラは、大工達が、満杯の釘箱から数本の釘を盗っても、穴が空くようなことはないと言って釘をくすねることと、食事を出すときの炊事係の汚職とを比べている。

ヒルフマン

福岡 9

1945年1月9日

礼儀正しさや他人に対する気遣いはもう見られない。それでもまだ、同階級の兵士の間でも‘何々さん’と言っている。しかし、互いを尊重したり、他の人に良かれ、と考える事は全く、あるいはほとんど見られない。人々は自分のことしか考えていない。自分の声しか聞いていない。相談の話し合いでも、僕の助言には半分しか耳を傾けず、その後すぐに忘れてしまう。話し合いの途中で、できる限りの無礼なやりかたでさえぎって話の内容とは全く関係のない、しかし多くの場合利己的な要求を含んだ質問をする。こんなだから、私は私の部屋に入る前にノックをすることをしっかり守らせている。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年3月1-7日

我々の将校は恥さらしだ。LとMは弁当飯や米をもう何度も盗み、舞台の上で、軍曹-籐の茎を手を持って-から、何回、何の罪で営倉に入れられたかを言わされた。軍曹がどのような罰を与えるか、と聞くと列の中から、‘むち打ち’のような声が聞こえた。僕は‘1ヶ月間彼らとは口を利かない’と叫び、ドゥ・ヨング大尉がそれを軍曹に伝えた。しかし最後にはドゥ・ヨングとヘームスケルク [中尉] は50回の藤つる打ちを提案した。軍曹は後ろを向き、‘今回はOK’ (=免除) と言った。むち打ちの罰をいつも提案するなど忌まわしき我々の将校だ。午後にはデュブコットが‘あなた方の中で一度も罪を犯したことはないものは、等’ という説教をした。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年3月13-20日

盗難は続いている。ヘームスケルクは、次に捕まった泥棒は彼が尻をむき出しにさせて藤つるの鞭で打つ、と発表した。それは日本のやり方だ。イギリス軍のように、公式に罰として認められている場合は別だが。

Sとはまたいざこざがあった。車を皆で押しているとき、彼は押していない、と僕が言うと、彼は毒々しく僕から批判されたくない、もし今度したら棒で殴り倒してやる、といった。もし僕が我々の上官のところに行ったら、彼は先に日本の事務所に行ってやる。自分の武器で

は僕に対抗できないものだから、それでは敵に頼もうと、このちんぴらは思っているのだ。僕はニーナバーにこの事を知らせ、長い熟考の末、彼はスネイダーを我々の分隊の長官にするように努力するそうだ。そうなったら全く素晴らしい。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年6月24日-7月10日

第二 [小隊] のインドネシア系グループとの関係は改善の余地がある。我々が [日本の] 作業長を避けるために何か提案したり、言ったりすると、彼らはトトク [純血オランダ人] が指図をしたがっているのだと思って、動こうとしない。その間にも我々は彼らに大きく譲歩して、[石炭を] 迅速に掻き取る<sup>183</sup>、などをしているが、しかしヤン [ル・コント] と僕は今では多勢に無勢だ。フランス・リフトとヤン・ル・コントのグループで、芸術の域にまで高められた我々の素晴らしい作業妨害法も、これで終わりだ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月4日

この頃、いつも、収容所内で最も人助けをするのは‘ごろつき達’であることに気付いている。ファン・B、B.、ファン・V、H、T、K、等々。病人に助けが要るときにはいつも彼らが進んで買って出ている。

---

<sup>183</sup> ファン・ウェスト・ドウ・フェールはできるだけゆっくり仕事をしようとしたが、‘インドネシア系の男達’は日本人の怒りを買うことを恐れたようで、そのために早めに仕事をした。

## 拘留所外部との接触

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1943年12月1日

11月20日、我々が最近書いた原案を葉書にタイプされ署名済みの、家に向けた手紙が突然戻って来た！それらが中尉の所で受け取られた時、私は突如自分の物がそこにはないのではという感が働き、そして思った通りだった。それらは翌日発送される事になっていたの、私はドゥフリーズとスレウ中尉連の所へ行ってそれらがどこにあるのかを聞いたが彼等は知らなかった。その後中村の所へ行き、彼は私の物を見つける為原案の中を探させてくれた。そこには‘1944年’が‘新年’に変更され、当時それが35語数以上になったので、‘孤独な時に’がそこから取り外されていた。私は誰がそれを受け取れたのかを探し続けるしかなかった、というのはホープ氏が‘リリーゴッグ’とタイプした記憶を持っていたので！スレウは私に言った、中村が私に新しい葉書を渡さなければならなくなるだろう、と。大日本帝国は各人につき葉書1枚のみ使用できるように決めていると唱えながら彼はこれを拒否し、私は‘大日本帝国の紙’を使用したわけだ。スレウが事務所に来た時、中村は風呂場に居て、その後間もなくスレウが私に白紙の葉書をくれた、それを私はホープによりタイプさせなければならず、それは日本の炊事場で慌てまくって、そして緊張状態で実現した。それから署名し提出する。翌日それらは発送されたが、後になって私の物が兵士‘ヨハネス’に分配されたことが分かったので、ひょっとすると私からは2通。まあ、何も無いより2通の方が良い。リアがこの葉書をいち早く受け取ってくれる事を私は切望している。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1943年12月25日－31日

我々は再び35語の手紙を書くことを許可され、私はリアに対する自分の気持ちがいかにここで自分の人生を満たしているかを彼女に知らせようと試みた。

[英語で]                      可愛い妻へ

良い気候に恵まれ、君への真実の愛により幸せに暮らしている。

君を幸せにする為私を帰還させてほしいと神に祈っている。

子供達に宗教、音楽、絵画、フランス語のレッスンを与えるように。自信を持って快活に。

沢山のキスを ヤン

オーステルハウス

福岡 15

1943年12月29日

昨日僕達は再び家を書く事を許可された。これは1942年3月8日以来今で4回目だ。自宅では皆本当に手紙を受け取っているのだろうか？それを切に願っている。今までの所僕達（オランダ人達の事）は未だ何の手紙も受け取っていない。（小倉病院のアメリカ人看護師達は家から、既に5通ないし12通の手紙を受け取っていた。）

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年1月18日

僕達は再び書く事を許された。僕は君に40語で書けた。それがスラバヤにある君の古い住所に届く事を祈る。<sup>263</sup>

ヒルフマン

福岡9

1944年4月9日

1943年のクリスマスに書かれた葉書が、公式な葉書用紙にタイプで打ち直された後、2週間前にやっとの事で発送された。

---

<sup>263</sup> 恐らくヘレの妻は戦争状況によりスラバヤに避難し、そこで彼女の義両親の元に引き取られた。



ウェストラ

福岡 17

1944年7月3日

今日は僕の最初の休日。ヤンとチェスをした後、僕は皆からの手紙と葉書をもう一度読み返した。この降伏直後の物から強い家庭的な絆が見える：ラジオの傍に座る事など。例えば皆が僕の名前をラジオで聞いたり、特に僕が電話した時などはいかに安堵したことか十分想像出来る。それから又皆が収容所に入った後の葉書：純粹の母親である母さん、とても心配して；7月23日付けのには彼女が何の連絡も受け取らなかったことで早くも絶望的ださえある。既に今シヤムから僕の2通の葉書を彼女が受け取っていると願ひそして間違いないと思う。父さんの葉書：かなり簡潔明瞭で中味が濃い、実に彼らしい；本当に父親だ、実に元気付けてくれる。オラフの葉書、オラフそのものだが、以前よりもっと逞しく男らしい。ヘティの葉書、未だ幼い少女の様、もっと子供っぽい心配をして。

そして今僕は日本に居る。察するに書く事がもう許可されないのだろうけれど、母さんはヘティからもはや何の便りも無いので心配している。ヘティは今僕から1枚の葉書を手に入れている、父さんも。母さんが受け取るのは次のだ、というのは他の者達はかなり移動し、彼女が自分の一定した(?)居場所で彼等がどこに居るか知っていて情報を手渡してくれる。オラフ或いは父さんが既に日本に居るのかは分からない。それは恐らく未だであろう。そして僕自身はここ鉾山に居る。他の者達は全く想像出来ない事だ。君達がかかなり良い食事をしていた(?)間、僕はチラチャップで空腹だったが、チラチャップは良くなった、<sup>264</sup>僕は船でキンサヨック、チュンカイ、ノンプラドックに居た。

オーステルハウス

福岡 15

1944年7月30日

やあーっとのことでオランダから2通の手紙。1匹の羊が土手を越えると、他もそれに従う(?)、僕にも？ 君から、M？

---

<sup>264</sup> 多分彼はここでチラチャップがショウノ エイジ (愛称 ‘おじいさん’)、年配の日本人、による統治下であって、彼の到来により前任タキタ (‘アルバ’) の恐怖支配が終わった時期を示唆している。‘おじいさん’の下では例えば海辺での運動場施設の許可が与えられたり、海で泳ぐ事が出来、雑役金は分配、そして配給量が増加された。(L. ドゥ ヨング、*Het koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog* ; 11 b、第2巻半編、(ライデン 1985) 651 そしてR. ニューエンハウス、*Een beetje oorlog* (アムステルダム 1979、86-87) 参照)。

オーステルハウス

福岡 15

1944年8月16日

僕達は又再び書くことが許された。‘手紙’の複写：

僕の愛しい人々とピートへ、

僕は元気だ。僕の足に少々問題あり。作業は僕に合っていて重労働ではない。  
マタイ書6章25節等を読んでくれ。ピート、僕達が一緒に過ごした最後の時間を忘れないで。

ヒルフマン

福岡 9

1944年8月27日

我々が日本へ来て以来2度目になるが、自宅に手紙を書くことが許可される。公用語は英語。言葉数の制限無し。

へレ

宮田（福岡9）

1944年8月28日

愛しいヒルへ、

僕達は再び書くことが許可される。僕は日本で戦争捕虜収容所において元気、そしてこの悲惨な戦争が間もなく終わって再び自宅に帰還出来る事を切望している。僕はベルトと共に健康で重任に耐えている。それは9ヶ月前になってしまった。僕のことは心配せず、決して不安がらない様に。君の両親に君とフォケのことを聞く為僕はオランダに手紙を書いた。僕の家族も大丈夫である事を望んで。

フェリー

-----

拝啓 御両親様、

僕は日本で戦争捕虜収容所に居て、元気にしています。僕のことは心配しないでください。ヒルダはスラバヤでフォケと一緒に私の両親の自宅に居ます。1年前彼等から聞いたかぎりでは皆大丈夫です。ベルトも戦争捕虜ですが、ヘレ家全員は元気です。貴方がたご家族に何も起こらなかった事を願っています。ヘンクと家族に僕の所在を伝えてください。 貴方の義息子よりご多幸を祈って。

フェリー

---

僕達は再び書くことが許され、この機会を利用して両親にも書いた、ただし1人に付き手紙1枚しか許されていないので、それは他の者の名前で行われなければならなかった。それらは双方前頁に載っている。噂を聞いたのでそれらが届く多くの望みを僕は持たない。赤十字の仲介を通してオランダ行きは多分大丈夫だろうが、蘭領東インドへは接続が余り良くないらしい。

ヘレ

宮田（福岡9）

1944年9月3日

書く事を許された手紙が何とか発送されることを願っている。日本軍は彼等がタイプしなければならない紙が倉庫から盗まれてしまい、それが戻って来なかったなら手紙を送る事が出来ないと報告した。彼等はいつも言い訳を用意している。

オーステルハウス

福岡15

1944年9月21日

全イギリス人とオーストラリア人がここで大量の手紙を受け取った、時には1度に12通、そしてオランダ人達は問い合わせ申し込み用紙を貰った、そして僕も君の生きている証がほしい。そうさ、M.、僕が未だ昔のようにこんなに感傷的になれることに気付く。

ヒルフマン

福岡 9

1944年11月15日

2週間前私は我々のお金を家族に委任することが出来るかどうかの可能性を日本人中尉に聞いた。今受け取った知らせでは、我々は理由を供与した上でそれを行いたい者達のリストを作成しなければならないということだ。奇妙なことに、とても少い人数しか見つからないようだ。我々は部隊に何が利点であるか詳細を説明した：妥当な為替相場（ギルダールは実際円よりかなりもっと価値があると推定できる！）、あとは生きている証。それは近い内もはや出来なくなる可能性がある。経済的な助力としてこの委任は勿論大金を振り込むことの出来るその少人数の関心だけにしか過ぎない。

オーステルハウス

福岡 15

1944年12月2日

イギリス人とオーストラリア人達に流れ込み続く手紙は気持ちを嫉妬で一杯にし、ここで初めてジャワから‘僕等の仲間’の1人に届いた1通の手紙も早合点は禁物のようだ。

オーステルハウス

ヒダオ（福岡1）

1944年12月20日

数日前再び1200通の手紙が僕等の連合軍‘同胞達’に届いた。でもストライボス中尉は63通の書類<sup>265</sup>がオランダから到着していて、それらは彼により英語に訳され既に発送された、という喜ばしい情報を持って昨日赤十字社本部から戻ってきた。（あー、M.、ついに君からの何かがそこに入っていればよいのだが？）

その赤十字活動について話すと：近頃好意的な変化が現れている。（これがその時の兆候だろうか？）今日この収容所から10語の電報を2通送ることが許可され、13名が150語の‘放送’—申込用紙に書き込むことが出来る、と聞いた。凄く嬉しいことには僕がその内の1名を占めることが出来た。

---

<sup>265</sup> オーステルハウスはここに赤十字メッセージはそれぞれ25文字であったことを後で記入している。（NIOD, 蘭領東インド日記収集、J. オーステルハウスの日記）。

ヘレ

宮田（福岡9）

1945年1月2日

愛しいヒル、

僕等は再び書くことが許されている。君達皆に謹賀新年を祈る。  
早い再会を祈っている。僕は元気で勇気百倍、そして今年に期待。  
君と家族の何かが聞けることを祈っている。  
君達皆に多幸を祈って。

フェリー<sup>266</sup>

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡15

1945年1月19日－26日

5通の手紙がジャワの妻達から届いた、1年以上も前の、ここからの手紙の返事として。ヴィム・ドゥ ハーンはハーレムの両親から手紙を貰い、彼等は彼がここに居たことを1943年12月既に知っていた。そこでの生活は単調だった。[...] 1945年1月20日我々は26回目に発送された手紙に署名させられた。私はスフラーヴェンハーゲ（デンハーグ）のボルネオ通り10番に住むA. A. ファン ウェスト夫人に書いた。

親愛なる叔母様

私は元気です；状況は良好。リリアとの連絡に失敗したので貴方に書きます。  
私の毎動悸がリリアと子供達との合体と彼等を幸せにすることを切望しています。

ヤン

---

<sup>266</sup> ヘレはここで1945年3月29日付けの彼の日記に次の様に付け加えた：「多少の変更後この葉書に署名が出来る、それで3ヶ月後、そしてこの葉書は未だ発送されていなかった。」

ヒルフマン

福岡 9

1945年2月27日

日本人司令官から我々が月毎に2通の電報を赤十字経由で家族に送ることが許可されるとの報告。10語。受取人による支払い費用25円。

ファン ウェスト ドゥ フェール

福岡 15

1945年3月21日－31日

[3月]27日軍曹は赤十字社供給を止めたが、これはいつも日本軍により思いより違って事が進むわけで、30日には千個という数の新しい赤十字社物資小包が、ジャワからたくさんの郵便物を組にして届いた。なかんずく [ヤン] ル コムテの奥さんから3通の葉書、内容は、全て良好で彼女は既に拭き掃除を習った事！手紙の日付けは1943年の1月と5月だった(つまりその時我々は未だ日本に居なかった)。あー、いつかりリアから連絡がほしい。私がここに居ることを彼女が知っていること、思いは益々彼女のこと、そして彼女と子供達の全てが大丈夫であることを私は望んでいる。

オーステルハウス

門司 (YMCAビル)

1945年4月9日

[ヒダオ (福岡第1) で] 赤十字社の手紙を僕は殆ど忘れるところだった、これは1月6日に家から受け取ったもので、今までのところでは家から連絡を受け取った凄く少数のオランダ人達の1人として。雑用から家に戻ってきた時エリックが第1兵舎の所に立っていたのが未だ目に浮かぶ：「ヤープ、僕は君に上げる物があるんだ！」彼の顔相は神秘的で驚きを隠しきれない風だった。

ウェストラ

福岡 17

1945年5月7日

昨日は母さんの誕生日。まだまだ長生きしてね！僕は75語の電報と1枚の手紙を送ったよ。

ヒルフマン

福岡 9

1945年6月3日

今日全収容所に日本人通訳の演説。各人40語の葉書を書くことが許される。他には作業で最善を尽くした者達には一緊急の場合一10語の電報を送ることが出来る（全ては通訳の見解による）。

5月28日あたりに私は日本人通訳と次の事について話し合った [...]：イギリス人将校達はそれぞれ200語のラジオーメッセージを送ることが許されているが、オランダ人達にはそれが無い。我々は未だ自分達の家族から1通たりとも(!)連絡を貰っていないという私の説明後、彼は我々に同じ事を認めた。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年6月4日

僕等は昨日の休日に再び書くことが許された。僕は前回<sup>267</sup>の様に同じ手紙を送った。それはどうせ届かない。これが僕の書く最後の物と望む、噂はそういった風なので、そうなることだろう。

ファン ウェスト ドウ フェール

福岡 15

1945年7月21日－26日

我々は再び書くことが許され、私は自分の名前で東京のスイス領事館宛に書いた：

---

<sup>267</sup> この項目 1945年1月2日付けのヘレの日記抜粋参照。

拝啓、

今までのところあらゆる連絡に失敗しておりますので、どうかスイス出身でバタヴィアにいるドゥーフェールーティッフェンバッハ夫人宛てに、彼女の夫は良い状況の中で元気であると書き送って下さることを所望します。万一の返事には大いに感謝致すところです。

ドゥーフェール

他にはファンヘーメルトの名前でリリア宛に、[M. G.] ジェルヴェの名前でティネ叔母さんと [J. H.] デメルスの名前でカサブランカへ書いた、タバコ1箱を代償にして、今現在彼等自身は誰も書く相手が居なかったのです。

ファンウェスト ドゥーフェール

福岡15

1945年8月1日ー7日

リリア宛と東京にあるスイス領事館宛の私の手紙は日本人陸軍大尉によって保留された。後者は多分その目的を達成するチャンスが得られそうだったからであり、そして前者は他の名前で書いたのが発見されたからだ。



## 戦況に関する情報と噂

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年6月8日

チュニスが陥落し、17万人が戦争捕虜になった。

オースターハウス

福岡 15

1943年9月8日

英語で書かれた日本の新聞をよくもらう。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年11月9日

10月1日までの新聞は入ったが、今では炭鉱から来た噂が広まっていて、連合軍はジャワ、スマトラ、シンガポールに対する攻撃を開始したという。僕はまだ本当には信じられないが、しかし、もし本当だとしたら迅速に、大規模に展開して欲しい、それでないとならぬと我々の妻達が大変な時期を迎えることになるだろう。もしその攻撃が成功し、あちらでの生活がまた通常に戻ったなら、などと想像力を逞しくする。まだあちらにいた戦争捕虜達は、そしたらまた就職し、我々がここから家に帰ったなら、様々な職業が復活しているだろう。僕はこの噂に対してひどく懐疑的だ。自分で見聞して、そこから何らかの証拠を構築できなければ認めないような風になってきているからだ。11月15日にスカルノ、モハマッド・ハッタ、それにアリクスマ<sup>184</sup>がここに来たことが発表され、ある炭坑夫がジャワで‘タタカイ’ (=戦争) があると明言してから、僕はそれを

---

<sup>184</sup> スカルノ工学修士(1901-1970)はインドネシア民族主義運動の最も重要な指導者で、後にインドネシア共和国の初代大統領になった。日本占領下で、スカルノは、例えばバタビア中央諮問評議会議長など、様々な重要な地位を占めた。1943年11月13日、彼は同様に中央諮問評議会メンバーであるモハマッド・ハッタとキ・バグース・ハディクスモの二人と共に2週間の滞在のため飛行機で東京に着いた。彼らが日本に来たのは市民が政府の政策に意見を述べることのできる諮問評議会の創設に対して、日本政府にジャワ住民の感謝を伝えるためであった。三人のインドネシア人は日本の東条首相に迎えられ、明治神宮と靖国神社を訪問し、天皇に拝謁して、その際三人とも勲章を受けた。(Brugmans, p579.)

信じた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月1-4日

ジャワの噂を信じている人はもうあまりいない。

オースターハウス

福岡 15

1943年12月4日

11月10日以来、ジャワが解放されたという根強い噂が広まっている。シドージンたち〔日本人の現場監督（炭鉱の）〕が何度も何度も言っている！そして今日はまた新しい新聞の配送があった（11月1日から30日まで）。ジャワについて書いてあるだろうか？

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月21-24日

アメリカがブーゲンヴィルで大敗したという悪い知らせが来た。日本の新聞によれば戦艦5隻、巡洋艦8隻、航空母艦8隻が使用不能となった。これで我々の解放は1年先に延びるだろう。[...]

僕たちはこの頃皆しきりに故郷のことを考えている。特に今はジャワ解放の噂が消えないために。それでも僕はこの噂を信じていない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1943年12月25-31日

炭鉱の新聞に地図が載っており、そこから枢軸国<sup>185</sup>が優勢を失い始めているということが窺えた。

---

<sup>185</sup> ‘ベルリン-ローマ枢軸’、ナチス・ドイツと独裁イタリアの同盟。1940年9月に日本はこの同盟に参画し、その後はベルリン-ローマ-東京枢軸となった。

オースターハウス

福岡 15

1943年12月31日

大晦日も静かには終わらないようだ。昨日、僕たちは炭鉱からの最も空想的な噂で驚かされた。  
(噂というものはここでは常に炭鉱から来る。つまりそこで生産されるのは石炭だけではないのだ。) さあ、いくよ。

1. ‘トージョー<sup>186</sup>、チマラン、トージョー、ジョートーナイ’ [東条は好かれていない、東条は良くない] (結論：民衆の間に不満が募っている?)
2. ショータイチャー [炭鉱労働者小グループの監督] がヨーロッパの地図を描いた。アイスランドからノルウェーへ、そしてイギリスからオランダを通過してドイツへの矢印。‘ダブル・リング<sup>187</sup>’ が、ほぼ同じようなことを言った。(あの遠いオランダにいる君たち、年越しをまた自由な国で祝えるのかい？神よ、それが事実でありますように。)
3. 日本は太平洋の大海戦で大敗した。
4. ドイツもアイスランドのそばで大型巡洋艦を失った。 [...]

1944年は解放の年になるだろう！展望が開けてきた！シドージン [日本人現場監督] や炭坑夫はすでに3ヶ月から4ヶ月という数字を上げて、そしたら僕たちはジャワに戻ることができるだろうと言っている。そしたら、M.、僕が君にまた会えるまでにどのくらいかかるのだろう、今や僕が昼も夜も考え続けている君に。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月15日

これは終わりの始まりだろうか？炭鉱からの噂で信じられているように、東条は本当に近衛殿下に代わったのか(?)<sup>188</sup>、オランダは本当にもう解放されたのか？ロシア人は今やポーランドで戦っているのか？他の、書きとめる価値のある噂は、ジャワの‘我々の’女性達がロシアに移されたという。東京はまた空襲を受けた、など。なるほど、収容所内の全体的雰囲気は、確かに楽観的になってきている。

---

<sup>186</sup> 東条英機大将、日本の首相であり、陸相、軍需相を兼ねた。

<sup>187</sup> ‘ダブルリング’は、炭鉱での日本の監督官やシドージンのヘルメットに付く炭坑用ランプに描かれた2本の輪を指した呼び方。

<sup>188</sup> ギルバート諸島とマーシャル諸島が、それぞれ1943年11月と1944年1月に陥落した後、東京では東条首相に対する反対勢力が強くなった。前首相の近衛文麿殿下は、反対勢力に属していた。やっとなら7月18日に、天皇が東条に対する不信任を表明してから、彼は辞任した。その時彼の代わりに首相になったのは近衛ではなく、小磯将軍であった。(De Jong 11b 前半、p111-113)

オースターハウス

福岡 15

1944年1月18日

今日、1月15日付の日本の新聞:ロシアの最前線はポーランドにほぼ50マイルほど侵入した。  
全体的な喜び:我々は今年家に帰るぞ!

オースターハウス

福岡 15

1944年1月25日

噂

- a. アメリカとイギリスはフォン・リベントロップ<sup>189</sup>の招聘により、スペインで和平交渉をしている。
- b. トルコはロシアに宣戦布告した。
- c. スカルノは徴集兵のジャワへの返還について、日本政府と交渉している。
- d. ジャワ、スマトラ、シンガポールは連合軍の手に落ちた。フィリピンの半分も連合国側に入った。

オースターハウス

福岡 15

1944年1月29日

最新の噂:今度の7月に、炭鉱の仕事は終わる。コリアンが‘我々’の代わりに来て、(最高だ!)  
僕たちはジャワに帰る。[...]

この間の噂:

1. ヒトラーを退任させるという条件で平和交渉。
2. 全ての前線で、戦いは終わっている。

---

<sup>189</sup> ヨアヒム・フォン・リベントロップはドイツの外相。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年1月15日-1月末

僕は噂から遠ざかり、オランダ侵攻とか、今、炭鉱の2方向で明言されたといわれているような、ドイツとアメリカが和平を結んだ、などということも全然信じない。ロシアは一国だけで戦いを進めているという。もし僕たちが来年の9月に解放されたとしても、大して文句は言えないというのが僕の見解で、なぜなら日本はさして大きな負けを喫しているわけではないのだから。そしてそれはリリアの妊娠期間と同じ長さ、つまり3年半だろう。[...]

ジャワとマラッカが解放され、フォン・リベントロップと連合国側で和平交渉をしているという噂は根強いが、僕はあまり信じていない。それでもイタリアは多分あまりうまくいっていないだろうという事は信じるし、ロシアがポーランド国境を越えたというのも本当かも知れない。新聞はこの数ヶ月来ていない。<sup>190</sup>

オースターハウス

福岡 15

1944年2月8日

[ベルナルド] アダム中尉と木箱入り良質葉巻25本を賭けた。彼：僕たちは8月1日前に家路に向かっている。僕：8月1日以降。(ほとんどの将校達の中にさえある楽観的雰囲気を表している。)

噂

1. ワルシャワが陥落した。ポーランドは2/3はロシアの手に落ちた。(ボッキー・マース[によれば] これは日本の新聞に書いてあった。)
  2. ツーロンがドイツ軍に爆撃された。
  3. アメリカがフォルモサ[台湾]で戦っている(少々素晴らしすぎる)。
- 今朝2回空襲警報があった。本物か、演習か？

---

<sup>190</sup> 1944年4月25日の福岡9に対する赤十字代表団の訪問時、最後の新聞の日付は1943年11月であることが分かった。その収容所長は「戦争捕虜の間に不穏な空気が起こるのを避けるため」に新聞を見せなかった、と説明した。赤十字代表団はこの規制は福岡の収容所全てに及んでいるであろうと見ていた。(1945年5月24日付、'Mededeelingen van het Nederlandsch-Indische Roode Kruis [蘭印赤十字社報告]'、(NIOD, IC 080243<sup>2</sup>), 4-5)。脚注45も参照。

オースターハウス

福岡 15

1944年2月15日

6万のアメリカ軍がビルマ上陸？ビルマはフィニッシュ？イギリス軍は蘭独国境で戦っている。  
どうぞやってください。噂車は止まることを知らない！

オースターハウス

福岡 15

1944年2月18日

噂

1. 日本はインドシナから撤退した。
2. シシマ（クリール [千島] 列島の一つ）をアメリカが攻撃した。
3. ‘おまえ達は第6の月にジャワに行く’（ [日本人の] 民間警備兵 [によれば]）

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年2月10-19日

全員が弱っていていららしており、それを必要としているものは、多くの良い噂を楽しんでいる。（例えば、僕たちは6ヶ月後にジャワに戻る、僕たちはここから農業収容所に移される、ロシア軍はワルシャワにいる、など） [...]ビルマ陥落の噂が出てきて、ヨーロッパではまたもや和平に近づいている。）

オースターハウス

福岡 15

1944年2月26日

この間の噂。ワルシャワは陥落した。ロシアはダンジィヒを越えた？チタゴンとマドラスはヤップに攻撃された？

オースターハウス

福岡 15

1944年2月29日

炭鉱からの噂によれば中国人が僕たちと交代に来て、僕たちは出ていく。噂ではロシアはボヘミアの幾つかの場所でドイツの国境を突破した。噂は多く・・・そしてわざわざしか語らない。

オースターハウス

福岡 15

1944年3月10日

噂が雨後の竹の子のように湧いてくる。イギリス人とオーストラリア人は10日後に出ていく？我々は6週間後だ。門司で乗船し、暖かく、食べ物の多い国に行く（シドージン [日本の現場監督] によれば）。[...] [他の] 噂。ロシア軍がドイツに入った？スターリンは48時間の最後通牒を突きつけた？今朝、[誰かが] イギリスとオーストラリアの身分証明書を事務所で見た、などなど。

オースターハウス

福岡 15

1944年3月14日

日本の曹長がもう一度、僕たちが近々出発すると言った、という。ドイツが降伏した？（もう何度目だ？）それに先だって：ドイツと日本の国交断絶。僕たちの収容所には遂に300人のオランダ人（？）が来るだろう。ここからだけでも、今どのような雰囲気収容所を支配しているかが分かる。もしここでまだ、植物的になってしまった人々の、普通に身に付いてしまった、いらだちを含んだ無関心の中に、ある種の雰囲気を起こさせることができるとすればの話のだが。

（[J.]ボールスマと賭け [をした]：10月1日前にジャワにいる、葉巻の小箱一箱。[J.] コーマンスと賭け：8月1日以後にジャワにいる。‘喫煙具’ 2, 50ギルダー分。）

オースターハウス

福岡 15

1944年3月19日

今、いったい何が起きているのか？本当に何か起こりつつあるのか？何かを周辺に感じる（少なくとも、そのように想像する）。噂を聞き、周りで起きていることを見、戦争捕虜の心理で、そこから素晴らしかったりそれほどでもない理論的仮定を構築し、しかしそれは常に変わることなく楽観的見方に帰着する。

噂：イギリスがドイツに最後通牒。もしそれが受け入れられなければ毎日3万5千機の飛行機で爆撃。グアムとウェイクはアメリカが奪還した。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年3月13-31日

噂ではロシアはルーマニアで戦っている。200人のフィリピンからの輸送とともに、2人のアメリカ人看護人が収容所に来た。その人達によれば、あそこで追いつめられた6万6千人の内、赤痢で3万1千人が死に、その内2万8千人がフィリピン人、3千人がアメリカ人だったという話した。それ以外のニュースは彼らは知らなかった。

オースターハウス

福岡 15

1944年4月8日

‘ニュースあるかい？’（次第に、誰かに会うと自動的にこの問いが出てくるようになった。）  
‘ああ、炭鉱でニューギニア、マーシャル諸島、サロモン諸島の載った地図を見た。’（彼はそれを5ヶ月前にももう見えて、4ヶ月前、3ヶ月前、2ヶ月前にも。だがそのような地図からは毎回何か別の期待を抱くものだ。それに僕たちは地理に関しては非常に優秀で、世界の中でも特にその地域には詳しいのだ。）それから‘リング’[日本人現場監督]も何か言ったし、ショウタイチョー[炭坑夫グループの長]もだ（しかし、それは用心深く極秘に話された）。そして彼らが言ったことから何が起こったことは一度もないのだが、それでもあらゆる素晴らしい噂に騙されてみたくなる、そうするとしばらくは何とかやっていくことができる（？）。



ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年4月1-19日

新聞で誰かがイギリスとヨーロッパの海岸線の載っている地図を見た；人々はそれは連合軍の攻撃の図だと解釈している。だがそれがヒトラーの新しい策略で、イギリスへの侵略を表しているのではないと、誰が言えるだろう？そのようには誰も考えていない。[..]炭鉱で我々の戦争捕虜期間が最長いつままでになると思うかというアンケートをとった。[A.G.D.]ヘンゼル、ブルハルト、[H.]プリンスやボールスマなどの数人の単純な考えの持ち主は、それぞれ最長期間を1ヶ月、6ヶ月、1年、1年と答えた。しかし[G.H.F.]スネイダース、[ヤン]ル・コントや僕は早くても1945年末、最長では1951年になるかも知れない、と見ていた。不満なのは連合軍側の大規模な勝利の話が全く聞かれないことだ。それとも、そうした話しは日本では全く報道されないのか？そういうことも充分あり得る。[...]

今度は、ヨーロッパへの進攻は無く、あちらの前線は膠着状態で、英国領インドでは州の一つがヤップたちに奪われ、グアムではまだ戦いが続き、ウェイクでも同様、という噂が入った。[...]フランスへの攻撃とオデッサやワルシャワの戦いという噂がある。

ヒルフマン

福岡 9

1944年4月9日

我々には全くニュースが入らない。1943年11月のニッポン・タイムズ<sup>191</sup>を読んだきりだ。

192

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年4月29日

今日は天皇誕生日だが、何も変わったことはなかった。ヤップも何もせず、状況が深刻<sup>193</sup>なので祝いはしないらしい。彼らはどうもうまく行っていないようだ。

<sup>191</sup> 日本の英語で書かれたプロパガンダ新聞。

<sup>192</sup> 脚注 282 参照。

<sup>193</sup> 1944年2月にアメリカ軍はマーシャル諸島の幾つかの珊瑚礁の島を奪還し、4月22日にはマッカーサー將軍の軍隊がホランディア（ニューギニア）に上陸し、4月始めにはインドとビルマ国境における日本軍の大攻撃作戦が英国とインドによって停止させられた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年5月1-10日

7月と8月にジャワに行くという噂はヘンゼルがヤップから聞いてきた話で、ジュネーブの停戦会議の話もそうだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年5月18日

昇天祭。

課題：

- a. あの曹長は今朝幹部の中に入って写真を撮った。そこに居たのは、日本人収容所長、新しい軍曹テガス、アリオスと、もう一人、新しい軍曹。それから軍曹はどこへともなく消え去った。
- b. 前に振り込んだ金銭が、今日返された。<sup>194</sup>
- c. 5月27日に兵隊達が来る。6月13日に我々は出ていく（ヘームスケルク中尉の‘公式’ニュース）。
- d. 約30箱の赤十字物資が入荷した。
- e. 新しい新聞が入った（?!）。

証明すべきもの：

自分の好きなものなら何でも全部（だが、我々が近々出ていく、というのが一番良い）。

証明：

収容所を出るときは普通その直前に待遇が良くなる。あの[日本の]曹長はいつか‘もし僕が出ていったら、君たちもすぐそれに続く。’と言っていた。[だから]僕たちは早々に出られる（q.e.d<sup>195</sup>。）そう、こうして時々は、昔の古ぼけた話を別の言い方で話す事も必要だ。[...]いつも同じ事で、そしてその度に僕たちは、つ・い・に・今度は本当であることを願う。

---

<sup>194</sup> オースターハウスはここで、抑留者が日本の銀行口座に強制的に振り込まされた金銭を指している。

<sup>195</sup> Quod erat demonstrandum の略。以上証明済み、という意味。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月7-14日

スレウ [中尉] は食堂で発表をし、ヘームスケルクが警備の軍曹を通じて言わせた所によると、アメリカ人とカナダ人、イギリス人が大パラシュート部隊などでノルマンディー侵攻をした、と言った<sup>196</sup>。僕が最初に思ったことは、彼が話しをきちんと理解して言っていればよいが、ということだった。そして2番目は、もし本当なら、連合軍がそこで今度こそは、これまでの汚名を全面挽回し、活発に作戦を進めてくれるといい、ということだ。午後には、それが炭鉱で確認された。僕はそれを僕の小鍋に彫り込んだ。次の日、二日酔いの頭痛のようなニュース：ロシアはモスクワまで押し返された。 [...]

フランス侵攻に関しては幾つかの地図を見たが、大規模なものだったようだ。聞いたところによれば、1万1千人のパラシュート部隊、4千隻の船、70隻の戦艦からの爆撃で60万人が投入された！今や皆はチャーチルはフランスにおり、ルーズベルトはイギリス(ロンドン)に、そしてロシアはフィンランドで戦っている、と言っている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年6月16日

夜に初めての本当の空襲警報があった。3時間に渡って爆撃され、サーチライトや対空砲が使われた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月15-18日

4時に空襲警報。7時には全てを覆い隠さなければならなかった。ヤップは全く普通にしていたので、皆演習だと思っていたが、翌日僕たちが炭鉱から帰ると、夜には爆撃機が収容所の上を飛び、多くの銃撃の音がし、飛行機が何機か打ち落とされて炎上していた、と聞かされた。残りはその後また西の方向に飛んで戻っていったという。外ではアメリカ軍だったと言い、収容所内ではロシアだったと言った。後者は僕にはちょっと空想的すぎると思われる、日本とロシアの間の

---

<sup>196</sup> 連合軍のノルマンディー侵攻は1944年6月6日に始まった。

戦争についてはまだ何も聞いていないのだ。それでもこれで少し軌道に乗ってきたようだ。[...] 爆撃は門司港とその近くの製鉄所を目標としていた。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年6月21日

全ては通常通りに進んでいる。少ない食事と多い仕事。ただ、[6月]16日と17日に素晴らしい爆撃を経験した。深夜にベッドからたたき起こされ、そう、その通り。飛行機の轟音と高射砲のすごい光、それにものすごく沢山のサーチライト。聞くところによれば、門司、福岡、長崎それにもう一カ所が爆撃された。さらに6月3日にフランス侵攻が行われ<sup>197</sup>、つまり遂にドイツにお返しをするときが来た。1944年末には多分、神のお望み通り。[...]

グアム、ウェイクそれにヤブが連合軍の手に。日本は次第に包囲されてきている。僕たちには配給において、そのことが感じられる。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月1日

6月16日に初めての爆撃を経験した。ここから10kmと離れていないところで製鉄所が爆撃された。夜間ずっとブラックアウト[灯火管制]で、僕たちは時々うなりをあげて飛んでくる破片や対空砲弾に震えを覚えながら横になっていた。飛行機(アメリカ軍)が2機撃ち落とされた。僕たちの解放に向けて、実際の行動が取られているという、この初めての実感できる印に、収容所がどれほどすごい歓喜に包まれたか、想像できるかい？

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年6月21日-7月7日

今日、夏の始めの日に、ロンドンに対する爆撃が行われ、ひどい打撃を被ったようであること、ノルマンディーにほとんど進展がなく、シェルブールとル・アーヴルはまたドイツ軍の手に落ち

---

<sup>197</sup> 実際にはこれは1944年6月6日だった。

たと聞いた。ニューギニア、マーシャル諸島、カロリン諸島、そして中国では日本が後退しているという。グアム沖の海戦や、サイパンへの上陸成功の噂もある、日本からは1800km 離れているが。[...]

そして他の噂では我々は、もうここで一年働いたので、長崎の休息用収容所に送られるであろうという。デュ・セ [神のみぞ知る]！さらに、僕には信じられないが、連合軍のスペイン上陸の噂もある。ロシアとフィンランドの戦争。ノルマンディーは捗らないようだ。この戦争がこれからまだヨーロッパで決着を付け、その後アジアになるとすれば、僕たちが1945年に解放されることもあまり期待できないだろうと僕は思う。そのために僕は悲観主義者と呼ばれ、[H.]ラッパルト医師は僕が浮かぬ顔で歩き回っているという。それは恒常的疲労感からも来ているのだ、と僕は彼に説明してやった。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1944年7月8-12日

夜には2回目の空襲警報があったが、飛行機が来た様子は全くなかった。食糧配給の悪化から日本の内閣交代があったというが、本当の理由はあの海戦とサイパンを失った<sup>198</sup>ことにあるらしい。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月14日

‘国内’ ニュース：アダム中尉によれば、8月2日に収容所内部で大規模な移動があり、‘シャム人’<sup>199</sup>が、我々の崩壊した分隊を補完し、炭鉱に行くことになる。結論：我々はここを出ては行かない(??)。[...] ‘海外’ ニュース：サイパンはアメリカが手に入れた。[連合軍の] 飛行機集結。そこから、そして中国から日本への爆撃が増える。ここでは空襲警報が多くなる。

---

<sup>198</sup> 1944年7月8日、アメリカ軍はサイパン（マリアナ諸島）占領に成功した。サイパン陥落は日本にとっては大きな衝撃だった。(F.N.J. van Dijk 他 (監修); *Noord Sumatra in oorlogstijd, oorspronkelijke dagboeken uit de interneringskampen chronologisch samengevoegd*. (Makkum 1997) AP II: 1943-1945, 565).

<sup>199</sup> ビルマ-タイ鉄道から移送された戦争捕虜達。

ウェストラ

福岡 17

1944年7月23日

北フランス侵攻は本当のようだ、今やそれは確実だ！ドイツはこれで早々に退却するだろう。僕たちはクリスマスには家にいるかも知れない！船に乗っていたときから聞いていたが、今やそれは確実だ。僕は家に帰る船旅をととても楽しみにしている。そして家で君たちと一緒にの休息！

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月21-28日

ヤン・ル・コントは、噂に対する僕の批判的かつ現実的（人は悲観的というが）な見方が、多くの人達にとってはその度に希望を失わせ、彼らが大切にしている楽しい期待を失わせるものだ、と僕に注意した。分かったよ、その全く理由のない至福の雰囲気の中で泳いでいたまえ、いつか幻滅の時が来るだろうけれど。それでは僕は批判を控え、はっきりと事実が確認されてから喜ぶことにしよう。中には噂から噂へと生きている人がいることは想像できるが、僕は勉強の際、最初から徹底的に、証言が真実で、整合性のあるときに初めてそれに対する意見を形作るように教えられてきたし、すべてがまだ曖昧な内は結論を出さないようにと学んだのだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月30日

噂は、以前より注意を払う価値が出てきた。

- a. サイパンはアメリカが手に入れた（ほぼ確実）。
- b. グアムには4万人プラス2万人が上陸した（同上、同上）
- c. ヨーロッパではドイツが全ての前線から後退している（?）。ガスを〔武器として〕使い始めた。ロンドンにラケット？トルコが戦争参加？パリは陥落した？

サバンでは何かがあったらしい。それが何であるかははっきりしない。‘人’によれば、それは爆撃による破壊から、完全な上陸までいろいろだ。<sup>200</sup>日本の新聞と、日本語が少し読める[H.]クアードグラスによって、これらの情報の適正価値を検証するエネルギッシュな努力が開始された。

---

<sup>200</sup> 1944年4月19日にサバン（スマトラのアチェ近海の島）が航空母艦からの戦闘機によって爆撃された。

(この新聞は最近日本の軍曹と僕とで‘一緒に’、定期購読料を払わずに読んだものだ！日本の事務所に毎晩蠅を提出しに行くとき<sup>201</sup>には、こっそり新聞をくすねることができることが多い。)

d. 10月1日に400人入ってくる。

現実：昨日（7月29日）二度目の空襲警報があり、実際に敵飛行機が数機、飛んできて、激しく撃たれ、追跡されていた。今度は真っ昼間だ。‘これはもちろんアメリカ軍がすぐそばまで接近していて、素晴らしく強い制空権を持っているのだ。’（戦争捕虜の論理-これは普通の頭脳でも帰着する結論だろうか？）

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年7月29日-8月4日

午後1時半に空襲警報があり、一時間以上続いた。20機ほどの戦闘機が飛び立ち、周囲で対空砲の音を聞いたが、それ以上何もなかった。このために我々は1時間余分に眠り、1時間半遅れて炭鉱に行ったが、われわれの作業長はおらず、全て変調をきたしていた。我々は5人で独自に坑道を片づけ、5台の台車に積み込み、その後1時間半休息することができた。[...]

新聞からクアードグラスが、アメリカのサイパン攻撃、そしてグアムはアメリカ軍の手に落ちた事を読み取った。ノルマンディーは遅々としている；大規模なカナダからの援軍が居るようだ。レニングラードでのドイツの活動、そしてヒトラー襲撃を契機に、国賊の一掃。ロンドン爆撃は大層ひどいようだ。最後に、連合軍はスマトラに上陸し、ジャワはスカルノの指揮の元に、独自にアメリカに宣戦布告した。<sup>202</sup>

へレ

宮田（福岡 9）

1944年7月30日

昨日はまた空襲があった。対空砲はまたもや元気に騒ぎ立てていた。僕たちは皆娯楽室に隠れなければならなかった。炭鉱は操業停止になった。1時半に始まり、2時半に終わった。28機の

---

<sup>201</sup> 脚注 132 参照。

<sup>202</sup> ‘独立した’ジャワ、あるいはインドネシアは（まだ）なかった。この報道はおそらく1944年3月1日の、‘銃後の戦い’への動員を目的として日本の厳しい管理の下に‘ジャワの奉仕心’を唱った民衆運動「ジャワ奉公会」の創立から来ているものと思われる。‘宣戦布告’の知らせはスカルノが提唱したスローガン‘Amerika kita setrika, Ingeris kita linggis’（アメリカはつぶせ、イギリスは叩き折れ）から来ているのではないと思われる。彼はこのスローガンを1943年4月29日、天皇誕生日に初めて使ったが、自分で大変気に入ったようで、以来何度も使っている。（Lambert Giebels 著、*Soekarno. Nederlands onderdaan. Biografie 1901-1950*, Amsterdam 1990, p291-292）

飛行機が来て、長崎が爆撃されたといっていた。それからのニュースは結構おもしろい。サイパンに関して、ヤップはひどく機嫌が悪い。内閣は即座に再組閣された。さらに、ロシア軍はワルシャワに迫り、アメリカ軍はフランスの大分奥まですでに入った。彼らはソンム、あるいはサオーヌを渡ったようだが、はっきりはまだ分かっていない。収容所全体がとても楽観的だ。皆、今年中だ、と予想している。

オースターハウス

福岡 15

1944年7月31日

[F.A.]ベルグが食堂から戻った：‘君たち、もうあのニュースを聞いたかい？バルト海諸国と東プロシヤがロシア軍の手に落ちた。’（？）（スレウ中尉が日本の新聞からこれを知り、食堂で発表したばかり）その後：最初の話しからすると大して楽観的にもなれそうもない；東プロシヤの半分で我慢しなければならないようだ、それでも悪くはないが。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月5-10日

ロシアはバルト海諸国を分断し、ダンジヒに迫っている。さらに、香港攻撃、マリアナ諸島沖海戦、フランスの連合軍はナントに迫っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月11-15日

夜、12時から2時まで空襲警報。我々はサイレンを聞いたとき、連合軍はベストを尽くす、我々は安心して寝ていればよい、と言い合った。数機の飛行機は高度高く飛んだ。対空砲は大きくはずれ、弾はとどかない、と我々は思った。ヤップたちは神経質にしていたが、面白い事に我々は我々の考えを持っていて、そのために安心して寝返りを打ち、眠り続けたのだ。



オースターハウス

福岡 15

1944年8月11日

あの全ての事実が問題なのではなく、物事の魂が重要なのだ。奇妙に聞こえる？僕には分からないけれど、今僕は、次のように感じている。僕たちの周辺で起こっていること全てに魂があり、2つの価値が、2つの形態がある：一つは我々に見せているもの、もう一つはそれが実際に内包しているもの。

空襲警報は3回有った（昨日2回）。そしてそれは、こんな、これほどの数の日本軍戦闘機、対空砲が有るか無いか、サーチライト（それが夜の場合）などの形で現れる。それは事実だ！

‘魂’は：まるで突然重石が取れた鉄製のバネのように、跳ね上がる。まるで突然実際の戦争とその活動に巻き込まれたように。アメリカ軍が、突然、我々はここにいるよ、君たちを忘れてはいない、助けに来たよ、と言っているかのようだ。空襲警報の魂は、突然、本当の新しい人生の可能性が、いっばいに流れ出し、歴史上これまでにない最大の出来事に関係しているのだと感じ、生か死かの闘いだ。永遠に繰り返す闘い、それは時々やって来て、人生を、喉を締め付けるような叙事詩に仕立て上げる。[...]

噂! これにも‘魂’があるのか？コルクのように乾ききってはいないか？

次のようではある：

1. パリとワルシャワは包囲された。
2. 小笠原とシシマ [?] [小笠原島；小笠原列島] は戦闘中。
3. 香港が攻撃された。
4. サバンは奪還した；ジャワは爆撃された。
5. アメリカ軍はフランスに上陸した。
6. セルビアの新政府はイギリス寄り。
7. スカルノはジャワに戻った；アメリカに宣戦布告した。
8. ポーランドの前線：ドイツ国境まで15 km？ベルリンから150 km？

噂の‘魂’はモルヒネ注射のようで、即座に効くところ、魔法のような威力から逃れることができないところが似ている。嵐が吹きすさぶ中の船のようなものだ。ある船は他の船より頑丈に造られ、舵もしっかりしている。ある船は他の船より激しい闘いを強いられ、重い錨、あるいは錨を降ろすのにまじな場所にいる。いずれにしても、それは人生を多かれ少なかれ不安定なものにする。水平線に目を凝らし、小さな、あるいは大きな光が見えたように思う、嵐が吹き寄せ、安全な港がまた視界から消えてしまうまで！安全な港-いつだ？

ウェストラ

福岡 17

1944年8月13日

一昨日、長崎と門司が激しく爆撃された。ここでも聞こえた！

ルーゲ

福岡 21

1944年8月15日

今日の午後、空襲警報。門司が爆撃された。自分で観察したこと：空中で沢山の銃撃。アメリカの飛行機2機、日本の飛行機3機が撃ち落とされた。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月16日

後幾つかの噂（！！）これから数日の間に1万6千人の戦争捕虜が日本に到着し、その内400人がこの収容所に来る。（食堂と風呂場はすでに拡張された。）小笠原はアメリカの手に落ちた。トルコでも何かがあったらしい。それが何であったかはよく分からないが、もちろんそこから、あらゆる仮説や新しいうわさが生まれている。<sup>203</sup>中国では激しい闘い等々がある。アメリカは炭鉱の地上にいるヤップたちによれば、どんどん‘よりジョートーナイ’[悪く]になっている。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年8月17日

今日の噂はロシア軍がドイツの領地内で戦っているということ。イギリス軍とアメリカ軍はパリから50kmの所にいる。ドイツはいずれにしても今年中、もしかしたら今月にも終わりになるだろう。イギリスとアメリカの軍隊が全力で日本に向かったら、日本も逃げ腰になるだろう、と言う意見だ。結局、多勢に無勢ではどうしようもないからだ。僕はいつも、クリスマスに家に帰

---

<sup>203</sup> おそらくこの噂はトルコが1944年8月2日にドイツとの経済的、外交的關係を絶ったことから来ていると思われる。

る、という気がしていた、どの年のかは分からないけれど。今年かも知れない。信じるには素晴らしいことかも知れないが、でも可能性はある。そうであると、心から願っている。

ヒルフマン

福岡 9

1944年8月21日

空襲：昼間一度、夜に一度。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月21日

しばしの静寂：8月5日付けニッポン・タイムスからのニュース。

1. トルコはドイツとの国交を断絶した。
2. 連合軍はパリから60km
3. 小笠原列島の一島をアメリカが取った。
4. チャーチルの演説：ヨーロッパの戦争は今度の10月で終わる。

さらに、噂：東プロシヤで戦車戦、ワルシャワで市街戦。中国の飛行場の多くが連合軍に取られた。この際後の噂は、昨日の2回の空襲警報を見ても、嘘ではないようだ。特に一回目の、戦闘機に先導された何10機ものアメリカの4エンジン型爆撃機が我々の上空に来たときは、特にヤップの感情を激しく刺激した。(すぐ側には九州一、それでなければ日本一の工業地帯、八幡がある。) アメリカの爆撃機3機が撃ち落とされた。多くの対空砲。多くの日本の戦闘機が空に。最後には我々は全員、収容所の後ろの丘に掘った、新しい、とても大きな防空壕に押し込まれた。2回目の、夜の空襲警報では日本の戦闘機2機などが撃ち落とされ、それは兵舎の上に落ちてきて、すぐに火を噴いた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月21-25日

午後4時に突然 B-29 が、収容所上空5kmから7kmに3機がグループになって飛んできたのがとてもはっきりと見えた。対空砲は届かなかった。日本には、200の、この巨人達が来たら

しい。戦闘機が2機を撃ち、1機はその上を飛ぶことで攻撃された、とヤップから聞かされた。それはやはり気分が悪い。我々は初めて防空壕に入らされた。休日にはひどく疲れて、24時間中の18時間眠った。

空襲警報の後、炭鉱では空襲警報の最中は地上の洗浄場が活動停止していたために、石炭車の渋滞が起こり、そのために僕たちは地上の操作場で車の荷下ろしをしなければならなかった（夜の雨の中で）。気晴らしにはなったけれど。そこで僕はヤップからワカモトを9瓶買うことができ、これで新年までは買い置きがある。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月22日

空襲警報。爆撃は無し。アメリカの爆撃機が上空高く飛んでいったようだ。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月27日

[英語で]

リスボンのドーマイ<sup>204</sup>特派員からの8月1日付の報告によれば、チャーチルは次の10月には遅くとも戦争を終わらせようとしており、対枢軸国の戦力と戦争物資を集結して、枢軸国との決戦に持ち込もうとしている。この関係で、ドイツの新兵器、V-1を容認しがたいとしているチャーチルは合衆国の戦争相、ヘンリー・スティムソンとの協議の末、この決定に至った、とも報告している。チャーチルが実際にそのような結論に至ったかどうかはもちろん疑わしい。しかし、状況を客観的に見れば、敵が短期戦を望んでいることが容易に窺える。特派員報告の‘遅くとも次の10月には’という言葉以外にも、疑う余地のない事実はアングロ-アメリカンの北フランス上陸作戦は彼らの当初の計画から大きくはずれている、ということだ。彼らはドイツの防戦態勢を考慮に入れていたかも知れないが、しかし、V-1のような素晴らしい武器のあることは予想していなかったに違いない。……<sup>205</sup>。ヨーロッパで事を急いでいる敵は、東アジアや太平洋でも事を急ぐに違いない。我々は総力を合わせて敵をくい止め、うち破らなければな

---

<sup>204</sup> 日本の通信社の名前。

<sup>205</sup> 日記著者は新聞記事全文を書き写してはいない。省略部分は点線で表している。丸かっこ内は著者のコメント。

らない。戦争は真に終盤に入った。(ニッポン・タイムス 1944 年 8 月 5 日)

.....

状況は一部で考えられているほど悪くはない。(!!)

.....

日本が敗戦した場合、100万(?)の日本人の骨はアメリカ人によってペンホルダーとして使われるであろう(!!!)。(チューリッヒ特派員は太平洋の前線で戦死した日本兵の腕の骨で作った、レターオープナーがルーズベルトに送られた、と暴露した。報告によれば、子供達はアングロ・サクソン人種の残酷性を顕わして、前線から戦争の戦利品として送られた頭骸骨で遊んでいるという。)‘我々はこの戦争を勝ち抜かなければならない。現在の巨大な戦争が我々側の勝利で終わらない限り、我々の骨は野蛮な敵国アメリカによってペンホルダーを作るために使われるであろう。’と東京のローマン・カトリック大司教ペーター・タツオ・ドイ博士は明言した。(!!!)

[オランダ語で] (戦争捕虜にはヒューモリストやパンチ [雑誌]<sup>206</sup>こそ無いが、結構ましな代替品がある。)

ウェストラ

福岡 17

1944 年 8 月 28 日

[フランス] 侵攻は確実。昨日、7月17日の新聞でアントワープの陥落が明らかになった。ドイツが8月9日に降伏した? 真実かも知れない噂だ。停戦に関する噂。クリスマスには自由になっているかも知れない!

ヘレ

宮田 (福岡 9)

1944 年 8 月 28 日

うわさ話は、もちろん、またもや素晴らしい。全ての炭坑、5, 3, 2, そして8も一緒だ。ドイツはイギリス、アメリカと停戦条約を結んだ。日本はアメリカに友好的に近づこうとしたが、拒否された。ワシントンは戦争は我々が考えているよりも早く終わるであろう、と言った。ダンジヒは戦いの真っ最中。ベルギーは解放された。連合軍はゼーランドとリンブルグを通過した。

---

<sup>206</sup> それぞれ、オランダの、そしてイギリスのユーモア雑誌。

ブレスラウは陥落した。これが最近の情報の見本だ。僕にはもう分からないが、どれか、ついには本当であって欲しい。早ければ早い程良い。[...]いずれにせよ、クリスマスには自由になっていたい。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月26-30日

前日に、戦車隊がパリ中心部まで到達した、と聞いた。僕はずっと、パリがまた連合軍の手に入ったら認印付き指輪をまた身につける、と言っていたが、それをする前に、もう少しアメリカとド・ゴールの地固めを待とう。ルーブル、パリ、ベルサイユが燃えている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年8月31日

今日、ルーマニアの油田がドイツに破壊され、ルーマニア軍は連合軍側に付いたと聞いた。ブルガリアはドイツから解放され、ポーランドは[情報によれば]ゲリラ戦を戦っている。

オースターハウス

福岡 15

1944年8月31日

海外ニュース：

1. ブルガリアとルーマニアの軍隊はロシア軍と共に戦っている。
2. ブカレストはドイツ軍に撃たれ、ルーマニアの油田からドイツは去っていった。
3. サイパンと小笠原はアメリカ軍の手に入った！
4. 香港、シンガポール、パリ、ワルシャワは陥落した。
5. 最近の八幡の爆撃で幾つかの爆弾が収容所に落ち、ヤップが数人死んだ。
6. 北スマトラ：ここからの情報は様々で：サバン陥落から、西海岸の数カ所、そして全北スマトラがアメリカの手に入った、というもの。
7. デンマークに侵攻。

コメント：

1と2は日本の新聞情報をクアードグラスが翻訳したもの。これはそのまま受け取ってよいように思う。

3は以前すでに日本の新聞で知らされ、今またヤップによって確認されたもの。

4はあまり信じられない、我々素人の戦略によれば、アメリカはまだこれをすべきではない。

6は難しい。北スマトラで戦闘が行われているのはほぼ確実だ！そして時々新聞にサバンやトバ湖の地図が載っていたとしたら、それが日本の観光客に薦めているものでないことは確かだ。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年9月1-4日

連合軍がパリの北と東に突入したと聞いたとき、僕は9月1日に認印付き指輪をはめることにした、この月がリリアの誕生日の月だからでもある。[...]それから僕たちは、連合軍がスイス国境の2カ所におり、こうしてドイツ軍を南フランスで包囲した、ときいた。僕が指輪をはめた数日後に、トロッコで横に座っていたヤップが、僕の指輪をさしてそれは何か、ときいた。僕は‘金’と答えた。彼は笑いだし、それは銅だ、と言った。彼はまだ金を見たことがないのだ！

ウェストラ

福岡 17

1944年9月5日

ヨーロッパの戦争は5周年を迎え<sup>207</sup>、丁度今、8月9日のドイツの降伏が確かになった。日本-アメリカ間の交渉確実。クリスマスは家で？

ウェストラ

福岡 17

1944年9月10日

変な空襲警報によって、和平の噂は少し低調になった。

---

<sup>207</sup>戦争は5年前、1939年9月1日のドイツによるポーランド侵攻で始まった。

オースターハウス

福岡 15

1944年9月12日

2時10分前。鐘2つが4回。午後シフトのグループは炭坑に出る用意。[H.A.R.]ニーブールは炭坑用の服のままちょっと僕のそばに来た。‘あの最新の噂は、悪くなかったね！’ 食堂に向かって歩く。‘まだニュースあるかい、オースターハウス？’ 食事をしている。‘また何か聞いたかい、ヤープ？’ などなど。ここではニュースを探しまくっている。そしてそれを掘じくり返す。犬が骨をひっくり返して、ためつすがめつするように、ここではニュースをいじり回し、手で重さを量り、計量し、一食べてしまう。

ウェストラ

福岡 17

1944年9月13日

戦争は終わった！！！！本当か？事実上そうだ。さてこれからどのくらい？

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年9月5-17日

クロアチアとチェコスロバキアの蜂起、ロシア軍はワルシャワとバルチック海におり、[9月]7日にベルギーではアントワープ―ブラッセル―リエージュのラインで戦っている、と聞いた。オランダが近々解放されるかもしれない、というのは何という気分だろう！！ドイツが自国の国境内でうち負かされるなんて雷が落ちたようだ。それからまだ、[オランダの] 水際防衛線にとっては大変な試練になるだろう。[...]毎日、戦争に関する、ほとんど良い情報が来る：9月10日、リエージュ陥落、9月17日はマーストリフトとアーヘン。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年9月17日

情報はとても有利なものだ。ゼーランド、ブラバント、リンブルグは解放された。ホラントは戦



闘中。さらに、アーヘンの近くのシーグフリード防衛線で戦っている。さらに、ロシアが満州に侵攻したかも知れない、そして日本がジャワに独立を与えた<sup>208</sup>、という噂。彼らがそれをするとすれば、おそらく彼らはそれをほとんど失っているということだ。ヤップたちが女性収容所を保護し続けるなら、それは素晴らしいことだと思う。全体的な意見は：来年3月には家に居る。それまでは頑張り続けなければ。ボロボロになって家に着いたとしても、家に着けさえすれば。1ヶ月で元通りに快復する。この冬は寒さと、もっと少ない食糧とで、ひどい冬になるだろう。

ウェストラ

福岡 17

1944年9月18日

多くのヤップは僕たちが炭坑で働くのはこれが最後で、早々にここから出ていこう、と言っている。赤十字バラン [荷物] が入った。野菜沢山、粉沢山、戦争宣伝はもう見られない。30日間空襲警報がなかった！外科医はもう手術をしようとしな。もうすぐ出ていくからか？

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年9月19-23日

スヘルトゲンボッシュとナイメイヘンは解放され、パラオ諸島はオランダ人を含めた21人のパラシュート部隊が占領した。エインドホーヘンでは流血の戦い。アーネムとユトレヒトにパラシュート部隊。サロニキは占領した。アメリカが近々フィリピンを攻撃するという記事。

オースターハウス

福岡 15

1944年9月21日

M、そしたら僕はまた、我々の‘情報’や‘噂’を君に話さないではいられない、最近はまだ大量にあるのだ。我々はもう、フランスのほとんど全部、ベルギー、オランダはワール/ライン川まで取り戻した。2万人のパラシュート部隊が‘ユトレクトー’、‘アルネム’と‘ニムウェグー’に降り立った。(ニックはナイメイヘンから来ていて、彼はオランダが載った新聞を見せ

---

<sup>208</sup> 1944年9月7日、日本の小磯首相は、はっきりした日付を上げず、将来は、インドネシアは独立すると声明を発表した。

たシドージンに、彼はその地域から来たのだ、と教えた。そのヤップが‘ニム-ヴェ-グー’と言うのを聞いて、喉が詰まりそうになるほど、まだ敏感な感性が残っていたなんて不思議なくらいだ。)

さらに、セラムとアンボン、パラオ諸島の2つの島が我々の手に入り、メナドでは激しい戦いをさせている。それに対して、中国の幾つかの飛行場はヤップの手に落ちた。最近は毎日宿舎に、炭坑ケイギョーの者が秘密に持ってくる新聞がある。(もちろんヤップは戦争捕虜と話すことを固く禁止されており、新聞を渡すなどもってのほかで、だから公式には戦況について我々は何も知らないことになっている。) ここには日本語を少し読める人が2人おり、新聞を訳してくれる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年9月24日-10月3日

ヨーロッパに関して有利な情報。アメリカ軍はシーグフリード防衛線を通り、マーストリフト、ナイメイヘンからエムデンに達した。ロシア軍はリガ、クーニングスベルグ、ボヘミアに居る。中国南部、フィリピン、台湾への攻撃計画。[...]作業長と‘リング’[日本の炭坑現場監督]は日本の中尉から訓辞があり、その中で、戦争のニュースを我々に伝えると死刑で罰せられる、といわれた。

オランダは順調にいかない。ナイメイヘンとアーネムでまだ激しい戦いが続いている。

ヘレ

宮田(福岡 9)

1944年9月30日

僕たちはまた危険人物となり、炭坑のヤップは我々に厳しく対処しなければならない。これはおそらく、オランダとジャワの政治的状況に関係しており、噂ではそちらで戦闘が行われていることになっている。まあ、その内分かるさ。噂は充分にある。情報は無い。僕たちは新聞を拾ってはならず、日本語や日本の漢字は習えず、ヤップは炭鉱内で政治の話をするのは禁止だ。これは考えさせられることだ。

ウェストラ

福岡 17

1944年10月10日

丁度‘空襲の危険あり’のサイレンが鳴ったところだ。それともこれも、先回のように演習か？  
僕たちは家に手紙を書いて良いことになった。ヨーロッパ [の戦争] は終わった。あちらでは、  
再建が始まっている。ここでは8月23日に何かがあった。停戦？近衛はアメリカ<sup>209</sup>に行った。  
交渉は決裂した。これは正しい情報か？

ウェストラ

福岡 17

1944年10月22日

いつ戦争は終わるのだろうか？この頃噂がない。来年半ばより長引きはしないだろう。

オースターハウス

福岡 15

1944年10月27日

毎日のように、ニュースを待っている。つい最近までは日本の新聞の形で、命の危険を冒して、  
時計のように正確に収容所に密かに持ってきていたものだ。少し前に日本の作業長達はまた、ニ  
ュースを新聞や、どんな形であれ、戦争捕虜に渡すと死刑にすると脅された。しかしこれも、い  
まだに多くのヤップ（この人達を敗北主義者と呼べるだろう）が忠実に我々に教えてくれるのを  
妨げるものではない。我々の状況は；

1. フィリピンの、最低3カ所で上陸。
2. 台湾で激しい戦闘。アメリカの失ったものは：航空母艦18隻、戦艦5隻、巡洋艦7隻、そ  
の他の船25隻。
3. 13隻から14隻の戦艦、航空母艦、輸送船、駆逐艦からなる連合軍の艦隊がニコバーレン  
で活動している。

---

<sup>209</sup> 昭和天皇の寵臣で1937年から1938年、1940年から1941年に日本の首相でもあった近衛文麿殿下  
(1891-1945)のこと。1941年8月と9月、日本とアメリカの戦争が避けられない状況になったとき、近衛は  
自分でワシントンに行き、ルーズベルトと妥協案を合意しようとした。アメリカ政府はしかし、合意する  
気は全くなく、その主な理由は日本が中国と、1940年9月以来占領しているフランス領インドシナから撤  
退する気のないことだった。近衛はこれを受けて1941年10月16日に辞職した。この‘ワシントン計画’  
が、おそらく近衛を和平の鳩派に見せることになり、その後和平の噂には彼の名前がよく出てくる。

4. フチャーがアメリカの速攻によって陥落した。

ヨーロッパに関しては：シーグフリート防衛線の状況は日本の新聞では余りよく分からない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年10月21日-11月10日

台湾での、300の挺身神風特攻隊によってアメリカが被った大敗の後では何か元気づけるものが必要だ。それほどの打撃であり、アメリカが急いでそれに対抗するものを考えない限り、戦況は芳しくならない。ヨーロッパからも、この頃は全く良いニュースがない。[...]ニュースももう入ってこない。将校達はそれを外に漏らさず、そのために我々の生活がこの頃却って良くなったことを忘れていて、10月末までは何も聞かされなかった。ただ、デン・ボッシュやアーヘンが燃えていたこと、フィリピンへの上陸などは少し聞いた。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年11月5日

噂は上々だ。フィリピンで激しい戦闘。レイテは陥落し、ルソンももうすぐだ。台湾に関してははっきりしない。日本はこうして、かなり包囲されている。輸送が切断されていることが感じられる。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月3-4日

セント・ニコラス祭の前日、ウェストワルが突破された、と聞いた。ライブチヒは陥落し、ロシア軍とアメリカ軍はそれぞれの側で、ベルリンに200kmまで迫っている。それが本当なら、ヨーロッパはクリスマスを平和の中で祝うことができるだろう！

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年12月5日

新規入所者[12月3日に収容所に到着した<sup>210</sup>]はジャワとシンガポールが解放されたであろうというニュースを持ってきた。もちろん、それはあり得るが、しかし僕はそうは思わない。

ウェストラ

福岡 17

1944年12月12日

クリスマスには追加の食糧、休日、赤十字物資などといったいろいろな良いわきが広まっている。本当かどうか待ってみよう。ドイツが降伏したという、公式情報が入ったという。本部までもその中に入っているという。これはなんだろう？

オースターハウス

ヒダオ（福岡 1）

1944年12月20日

ここのニュース供給はとても悪い。ここで聞いた、唯一の信頼できるニュースは、台湾への上陸だ。それから、僕たちの収容所から帰ってきたイギリス人は、ドイツが12月6日夜2時半に降伏したはずだと言った。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1944年12月25日

終わりに向かっている。フィリピンはアメリカの手に落ち、噂によればイギリス軍はジャワに居る。彼らはセマランに上陸したのだろう。いずれにしても、次のクリスマスは家で過ごせることを願っている。僕は1941年に注文するはずだった詰め物入り七面鳥が食べたいのだ。

---

<sup>210</sup> ‘輸送と宿泊’の章、1944年12月5日付けヘレの日記抜粋参照。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1944年12月25日-1945年1月初頭

西部前線は勢いが落ちた。ドイツはフランスに尖端基地があるようで、ルクセンブルグとブラッセルの間にいるようだ。[...] [年越しの頃には] まだ、ドイツ軍のマース-ディナン-セダンのラインの進攻は停止された、と聞いていたのに。変な話しでは、ギリシャがアテネ、サロニキなどを、イギリス軍とロシア軍から奪還した、それにアテネでギリシャ人による、チャーチル襲撃<sup>211</sup>。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年1月19-26日

マニラ陥落、台湾上陸は確認されていないが、チャーチル、ルーズベルト、スターリンの会合は確かなようだ。<sup>212</sup>

ウェストラ

福岡 17

1945年2月6日

数百機の飛行機、急降下爆撃機、戦闘機、B29爆撃機が、日本の飛行機に全く患わされずに飛び回っている。日本の飛行機は彼らにかなわないのだ。ヨーロッパはもういつでも終わる状況にある。ポーランドには3百万のロシア軍（新規軍）が、最後の決戦のために集結している。

---

<sup>211</sup> ギリシャの抵抗勢力は共産主義者と王党派とに分かれ、ドイツ占領軍に対してだけでなく、互いに争っていた。大英帝国はギリシャ王を支持していた。1944年12月（ドイツはその時すでに退却していた。）、ギリシャの共産主義抵抗グループはアテネで上陸していたイギリス軍との争いに巻き込まれた。クリスマスにチャーチルは自分で王党派政府および共産主義ゲリラと話し合うため、アテネに向かった。そこでは暫定合意に達した。チャーチルのアテネ滞在中彼が襲撃されることはなかったが、市内ではまだ激しい戦いが行われていたため、危険がないわけではなかった。イギリス首相は銃撃戦に出会って身を潜めなければならないことさえあった。アテネにロシア軍は居なかった。

<sup>212</sup> これはおそらく、クリム南岸のヤルタ会談を指していると思われるが、これは1945年2月に行われることになるものである。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年1月27日-2月16日

ロシア軍は東プロシヤのシレジエまで突破し、2月9日までにはベルリンから60kmのステインとフランクフルト・アム・オダーに達した。[...] [2月] 12日、カイロから知らせが入り、ドイツの敗退は間もなくだ、ということだ。日本の司令官は、輸送困難から、フィリピンは失ったものを見る、と告げた。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年2月17-24日

日本の新聞記事は、本土襲撃が、小笠原諸島への攻撃と、翌日の東京爆撃によって始まった、と報じた。ヨーロッパでは、ロシアは大きな、アメリカは寡少な進展を遂げ、会議が沢山行われている。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月1日

外部から、壮大な噂が我々の所にも届く。公式なニュースは入らない。1943年11月のニッポン・タイムスがあっただけだ。その後には、禁止になった。<sup>213</sup>大きな戦いの事はここでは分からない。我々にとって重要な出来事は、‘プリックマンズ’が異動になった、‘人’は前線に行っただけだと言っている。

---

<sup>213</sup> 脚注 282 参照。

ウェストラ

福岡 17

1945年3月17日

2月6日の新聞が来た。そこには、ロシアの本部がすでにドイツに置かれた、とあった。<sup>214</sup>  
さらに、カイロで、ヨーロッパ経済の悪化についての会議<sup>215</sup>。収容所中至る所に塹壕が軽業の者達によって掘られ、建物の解体によって、火災の危険を少なくしている。天井は取り壊され、必要のない外廊下は取り去られる、などだ。この頃は飛行機が沢山飛んでいる。彼らはここでもや  
っと始めるのだろうか？

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年3月13-20日

ケルンは陥落し、アメリカはウェストワルを越えてボンに迫り、ベルリン攻撃が始まった。その後、台湾とここの間、2つの島へ上陸の噂。[3月] 18日、空襲警報4回と八幡の火災。

ヒルフマン

福岡 9

1945年3月20日

4日前から何度も空襲。昼間にも夜にも、時には爆弾の落ちる音が聞こえる。日本人はひどく神経質になっている。幸い、我々は屋内に居てよかった。

---

<sup>214</sup> 1945年1月半ばに始まったソビエトの攻撃により、ロシア軍は戦前のドイツ-ポーランド国境を大きく越えた。この攻撃は2月にオダーで停止された。ロシアの本部というのは、おそらく前線軍の本部であろう。

<sup>215</sup> これはおそらく、1945年2月4-11日のヤルタ会談を指している。このニュースはカイロに居る通信社から来たものか？(1945年1月27日-2月16日付け、ファン・ウェスト・ドゥ・フェールの日記抜粋も参照。)カイロでの連合軍の会談(ルーズベルト、チャーチル、蒋介石の)も確かにあったが、それはすでに1943年11月に行われている。



ウェストラ

福岡 17

1945年3月21日

この頃はほとんど恒常的に空襲警報がある。数時間防空壕にすることが多くなり、時には7時間か8時間だ。すごく沢山の飛行機が飛んでいる。攻撃の始まりだろうか？春の攻撃？

ルーゲ

福岡 21

1945年3月24日

ほぼ14日前から、毎日、夜も空襲警報がある。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年3月30日

ここではニュースはほとんど何も聞かれない。アメリカ軍がすぐ側まで来ていることは、毎日のように空襲警報があるので、感じられる。フィリピン：終わり。台湾、価値無し、激しい爆撃。このすぐ近くの小笠原諸島はアメリカの手に入った。日本は今やあらゆる方向から包囲されている<sup>216</sup>ドイツの話はあまり聞かない。まだ降伏していないのがなぜだか誰にも分からない。ベルリンは今もう陥落したのか、そうでないのか、誰も知らない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年3月21-31日

3月後半は毎日空襲警報があり、炭坑から帰る度に、どこかがやられていた。一度は夜に地上に出てくると、大勢の兵士達とリング[日本の監督官]が僕たちを待ち受けていて、あらゆる所で、隠そうともせず、暗闇の中で我々を殴りつけた。僕たちはどうやら、アメリカ軍の飛行機より簡単に手が届くのだった。[...]近隣の炭坑2つが爆撃にあったようだ。対空砲の音はせず、戦闘

---

<sup>216</sup> 1945年2月19日、アメリカ軍は硫黄島（日本の南東、小笠原諸島の一つ）に上陸し、本土防衛線の最内部が突破されたことになる。（Van Dijk 他、p569）

機も見ない。[...]アメリカ軍はここから300kmの島を占領し、そこから毎日数回この島に爆撃機が訪れている。ライン川は幾つかの場所で、川越が行われた。

ウェストラ

福岡 17

1945年4月12日

日本の収容所長は、爆撃や火災の際には収容所内に居るように、そうすれば、彼と日本兵が、我々を日本の民間人の怒りから守ってくれると言った。<sup>217</sup>幾つかの言葉から、外部状況は日本に取ってあまりよくないようだ。激しい爆撃のため、食糧供給もやはり難しくなっているようだ。彼は、‘ザ・ワー・イズ・アト・ハイ・タイム’と言った。噂では：この数日の激しい爆撃は、成功した台湾の攻撃と戦いのための陽動作戦だった。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年4月19日

また少しニュースが入り、収容所全体は楽観的だ。日本の新聞が翻訳され、そこには新内閣が出ており、‘新和平内閣’と呼ばれていた。<sup>218</sup>ドイツの敗退は今月にも起こると見られ、ドイツ軍はほとんど壊滅状態だ。イギリスの艦隊はすでにこの海域に来ているはずで、マラッカへの攻撃が行われた。多くの人々はこの数ヶ月の内に日本の降伏があると思っている。僕もそう願うが、そんなに楽観的にはなれない。もう何度となく、失望を味わってきた。どうなるか見てみよう。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年4月12-21日

僕の母の誕生日に、ルーズベルトが死に、イギリス軍はブレーメンから16kmの所におり、こ

---

<sup>217</sup> ウェストラは後にここに付け足している：‘彼は正しかった。おそらく、この警告は他の収容所での出来事から来ていたのだろう。’（NIOD日記コレクション、C.Westraの日記参照）

<sup>218</sup> 1945年4月5日、戦況悪化のため小磯首相は辞職した（その4日前にアメリカ軍が沖縄に上陸した）。彼の後を継いだのは引退していた海将で、1904-1905年の日露戦争の英雄、鈴木貫太郎だった。人々は鈴木が軍部の反対を押し切って、アメリカとイギリスとの和平交渉を開始できると期待した。（De Jong 11b、前半、p 115-116.）

の近くの島はまた奪還され、ロシアは日本との不可侵条約を破棄した、と聞いた。さらに、僕たちはここから出ていき、赤十字小包は16日以内に使うてしまわなければならない。噂は充分にあるわけだ。赤十字小包に関しては噂が正しくないことがすぐに分かった。4月21日に、この収容所に来て2周年記念に、残っているバターとジャムを使い切る、というだけだった。

ウェストラ

福岡 17

1945年4月25日

東京の近くで、どこかの収容所が襲撃され、60人の戦争捕虜が殺された事から、我々はここで、憲兵隊の護衛を受ける、という噂がある。<sup>219</sup>さらに、台湾は我々の手に入ったという。ロシア軍はドレスデンを壊滅させ奪還した。<sup>220</sup>ロシア軍はベルリンに60kmまで迫っている。一般的印象：後2、3ヶ月後には終わる。そのために彼らは将校達を集め始めたのか？<sup>221</sup>

ウェストラ

福岡 17

1945年5月7日

噂は有利なものだ：ドイツは負けたか、あるいは最後だ。ベルリンは包囲されたか、陥落した。そこには前線はもう無く、ゲリラ戦だ。ここ東洋では琉球諸島の一部が陥落し、そこから次の作戦が遂行される。毎日空襲、通常は警報になる。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年4月22日-5月11日

今日は、ロシア人とヤンキーの、ドレスデンにおける歴史的会合の知らせがあった；4月25日

---

<sup>219</sup> この噂、あるいは知らせが、どこから来たものかははっきりしない。知られている限り、そのような出来事は起こっていない。しかし、奇遇ではあるが、この丁度1ヶ月後、1945年5月24日から25日にかけての夜に、東京の刑務所に入れられていた62人の戦争捕虜達が、アメリカの爆撃時に亡くなっている。

<sup>220</sup> 1945年2月13日と14日に、ドレスデンはイギリス軍とアメリカ軍により、激しく爆撃された。破壊された町は、やっと5月8日にソビエト軍が獲得した。

<sup>221</sup> 4月25日にほとんど全ての連合軍将校は収容所から連れ去られた。‘輸送と宿泊’の章、1945年4月25日付ウェストラの日記抜粋参照。

にベルリンはロシア軍に占領された。[...]皮肉な冗談が広まっている：誰かが夢を見て、我々は海のそばの収容所におり、突然遠くにオランダの船がこちらに向かって、我々を解放しに来た。徐々にその船は近づいてきて、やっとすぐそばに来たとき、人々は船首にベアトリクス女王 [当時の女王の孫娘] が居るのを見た！ [...]

5月1日に、丁度我々が炭坑から出てきたとき、ドイツが降伏したという噂があった。ヒトラーは最後までベルリンの地下室で防衛を指揮し、彼の軍隊は空軍によって食糧と爆薬供給されていたという。ああ、オランダがまた戦いの渦中になることなく自由になるとよいのだが。

[5月] 2日に、ヒトラーが毒薬を飲み（彼らしい非男性的やり方）、ムッソリーニは17人の他の男達とともに処刑された、と聞いた。ドイツの降伏は1945年4月30日、ユリアナ女王の誕生日であったという。ヨーロッパが平和に! いつもこの事を考え、その度にまた新しくこの事を喜んでいる。

ここでは、また軍事活動が盛んになり、道路や陣地の建設が見られ、軍曹が言った、我々がここから出ていく、という言葉が本当らしくなってきた。我々の、終戦までの期間の予測は3ヶ月から7ヶ月の間だ。僕は、軍隊や物資をここまで持ってくるのに3ヶ月かかるであろうし、その後の戦闘に、少なくとも3ヶ月かかると思う。それが、どのように我々にとって有利に終わるかに付いては、僕たちが互いに話さないことだが、全員がそれぞれの心配を抱えていると僕は思う。ヤップはアメリカが日本の国土に最初の一步を占めたとき、僕たちは次の、最初の空襲警報で防空壕に入り、そこにガソリンが撒かれて、火を点けられると言う。ゴムでの軍事活動の際にも同様のことがあったらしい。僕たちができる唯一のことは祈ることだ。 [...]

タラカンへの上陸と、我々のここからの出発に関する噂。僕たちが爆撃のないところに行けることを願っている。 [...] オランダではドイツ降伏の条件を話し合うために停戦になっているという。イタリアの無条件降伏。グーベルスとカイテル<sup>222</sup>が自殺した。5月7日にレイムスで停戦条約が調印され、[5月] 8日と9日は公式な平和記念日。 [...] 僕たちは心の中でヨーロッパと緊密に一緒に生きている。ここでは定期的に空襲警報があり、時計のように正確で、朝の点呼の時か、その前後だ。

へレ

宮田（福岡 9）

1945年5月14日

ドイツは負けた。ヒトラーは死に、ムッソリーニは殺された。ここでは毎日空襲警報。吉沢<sup>223</sup>は

<sup>222</sup> 人民広報宣伝相のヨセフ・グーベルスは1945年5月1日に自殺した。陸軍元帥のウィレム・カイテルは1945年5月9日、ベルリンでドイツの無条件降伏に調印した。彼は戦争犯罪人として訴えられ、ニュールンベルグの国際軍事法廷で死刑の判決を受けた。1946年10月16日、絞首刑になった。

<sup>223</sup> 知られる限り、前外相で1940年にオランダ領インドを訪れた経済ミッションのリーダーとして蘭印では非常によく知られた吉沢謙吉はこの時期、モスクワには行っていない。ただ、1945年4月5日のロシアに

モスクワにいる。収容所全体が楽観的で、今月にも、そうでなければ来月には終わり、いずれにしても、衝撃的なことが起こるだろうと思っている。現在の所ニュース無し。嵐の前の静けさだろうか？[...]昨夜は一晩中空襲警報で、今朝もまただった。20機のアメリカ軍戦闘機が収容所の上を通った。彼らは好き勝手にしているようだ。ヤップもこれで最期だ。

ウェストラ

福岡 17

1945年5月14日

昨日は空襲警報が4回あった。今朝ももう2回。これは上陸の始まりか？塹壕へしよっちゅう潜らなければならなかったのが合わせて2時間位しか寝ていない。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年5月12-19日

[5月]14日に、ここで初めて、飛行場を攻撃する急降下爆撃機を見た。毎日4回くらい空襲警報があり、200機から300機の飛行機で来ているようだ。

ヘレ

宮田(福岡 9)

1945年6月4日

噂では、僕たちはここをいつ出てもおかしくない。本土へ、あるいは大きな集中収容所へ、と予想しており、終わりの始まりだ。今月にもそれがあるはずで、[6月]15日にイギリス人、そして19日が僕たちだ。日本は交渉に入っており、早急にも辞めるだろう。赤十字食糧の肉製品は移動中の食糧として特別に分けて置かれた。<sup>224</sup>パン用の粉も同様で、そのために僕たちは当分パンをもらわないのだ。ユリアナ王女はデン・ハーグに戻り、女王になったようだ。先週は爆撃はなかった。もちろん、何かは本当かも知れない、いつもは、そこから何か出てくるのだ。これはつまり、僕が炭坑をもう見ることはなくなることを意味する。神に感謝。もう終わりが来る時期だ。

---

よる日露中立条約破棄のために、日露間では頻繁な外交交渉が続いていた。

<sup>224</sup> ‘食糧及び物資状況’の章、1945年6月4日付けヘレの日記抜粋参照。

ファン・ウェスト・ドゥ・フェール

福岡 15

1945年5月29日-6月23日

オランダ政府はデン・ハーグにいる。蘭領東インドはラジマンの自治の元にある<sup>225</sup>。ナルビックはロシアが占領し、オーストリア政府はロシアと障害ブロックを形成している。<sup>226</sup>[...]

4日間、空襲警報は1回もなかった。アメリカ軍は多分どこか他で忙しいのだろう。ここでの戦争は、ドイツ敗北の半年後に始めて順調に運ばれるだろうという僕の考えは、また優勢になってきた。[...]

アンボンとセレベルへのアメリカ軍 [の上陸] の話しと、ヤップが沖縄と中国から撤退している、と聞いた。[...]

女王はオランダに戻った。沖縄はアメリカの手に落ちた。[...]ベルギーのレオポルド王は83%の投票で、否定された、と聞いた。

ウェストラ

福岡 17

1945年6月18日

夜11時に空襲警報。炭坑の防空壕にはいる。地上に出たとき、地域全体に、小さな火が沢山燃えていた。炭坑の祈りの部屋もなくなっていた。250キロの焼夷弾が落とされたらしく、それが地上で何十もの小さな筒になって飛び散ったのだ。収容所にも、幾つかの爆弾が落ちたが、完璧な仕事をする消防隊によって、きちんと消し止められた。よくやった。我々の収容所は、こうしてみると、実際、我々の天国になるようだ。丁度1年前の門司を思い出させる。<sup>227</sup>

---

<sup>225</sup> ファン・ウェスト・ドゥ・フェールは、1945年4月29日に設立されたインドネシア独立準備調査委員会の委員長、ラジマン・ウェディオディニングラットを指している。

<sup>226</sup> 1943年10月に、アメリカ、イギリス、ソビエトはオーストリアをまた独立国にすることを決めた。しかし、その時にはオーストリア占領については具体的な取り決めはされなかった。1945年4月になって、赤軍の進攻がオーストリア国境まで達したとき、初めてソビエトは占領地域に関する交渉に応じた。この話し合いは7月まで長引き、その間に、連合軍はすでにオーストリアの様々な地域を占領していた。ソビエトは自分の統制地域で、カソリックと社会主義者、共産主義者の暫定オーストリア政府の設立させた。この新政府は始めの内、連合軍側から無視された。1945年11月に自由選挙が行われ、共産党は惨敗した。(John C. Campbell 他、*The United States in world affairs 1945-1947* (New York/London 1947), 198-201).

<sup>227</sup> 1944年6月17日の門司への到着時に、ウェストラは激しい爆撃を経験している。‘輸送と宿泊’の章、1944年6月27日付けウェストラの日記抜粋参照。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年6月23日

福岡は2日前に、全面爆撃されたが、全ての危険な収容所は非難した模様だ。第七収容所では1800人の捕虜の内、500人が爆撃の被害にあった。ここでは毎日大騒ぎだ。空襲警報は、全く鳴らないか、遅すぎる。昼も夜もアメリカの飛行機が飛んでいて、ここで我々が聞く爆弾炸裂の音は尋常な量ではない。[...]終戦に関する楽観論は少し弱まったけれど、爆撃がその雰囲気を少し保っている。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月1日

噂：近衛殿下が女性と子供は生き残るべきで、[本土] 侵攻は何を犠牲にしても避けるべきである、と言った。これで終わりになるか？制空活動は今だにとっても盛んだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月7日

この頃和平の噂が根強い。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月11-12日

昨日は20分間、北（門司の方向）に激しい爆撃を見、音を聞いた。[...]最後通牒とボルネオとジャワの成功、ロシア軍は朝鮮に侵攻したという噂が行き交っている。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月14日

近衛殿下はモスクワにいる。<sup>228</sup>これはほとんど確実。これで早く終わる！

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月13-20日

噂は山のようにある；人々はこれまで以上に耐えるのが嫌になってきている。

ウェストラ

福岡 17

1945年7月23日

数日間空襲警報無し！これはおかしい！どこか別の所で戦っているのだろうか？この消耗し尽くした身体と、毎日のように悪化する食事の中で、もう一度冬を越すことがないように願っている。

オースターハウス

門司(YMCA ビル)

1945年7月23日

3月始めに、やっところでは空襲警報が使われ始め、門司は破壊された、などという、前の収容所での噂を聞いていた我々にとっては落胆することだった。しかし、それからがうまく行った：毎日、時には2、3回から5回。収容所のそばにトンネルがある、大体500メートルほど離れている。とてもがっしりできていて、山に穿ってあり、しかし75メートルの高さの壊れかけた

---

<sup>228</sup> 1945年7月12日、旧首相の近衛は昭和天皇に召喚された。天皇は彼を特別大使としてソビエト政府に送り、連合軍側との交渉の仲介をしてくれるよう、要請しようとした。しかし、この計画は極秘裡に行われており、2日後にウェストラがここに書いているのは、単なる偶然の一致としか考えられない。スターリンはすでに日本への宣戦布告を決めていたため、仲介者の役割をする気は全くなかった。モスクワは協力せず、このため、近衛は日本に残った。(Leonard Mosley著、*Hirohito, Emperor of Japan*, (Englewood Cliffs 1966)、p301-308) .



急な石の階段を登っていかなければならないので、行くまでが大変だ。その階段を1日5回、弱った足で、ぎっしり詰められた羊のように前にも後ろにも行けないときでさえ狂ったように棒で殴りつける奴らが居るところで上り下りするのは楽しいことではない。一度は朝3時にトンネルに入り、午後6時まで居た。この2ヶ月はアメリカ軍はしょっちゅう夜、いつも大体12時か1時に来る.[...]

これが6月28日から29日の夜にかけてまで続いた。また空襲警報。しかし今度は遂に、爆弾は門司用だった。これは僕が経験した中で最も不思議な夜だった。最初の爆弾が落ちたとき、最後の人達はまだ入って（つまり、防空トンネルに）いなかった。ほとんどは焼夷弾だった。急いで我々は全員また外に出され、収容所と‘病院’の在庫、所有物を、落ちてくる爆弾の真ん中で、上に持って行かされた。一つは僕たちから大体25メートルの所に落ち、幸いにも（！）それでも爆発はしなかった。

それは厳しい夜だった。しかし門司全体をほとんど見渡せる、トンネルのある丘からの眺めは、これまで僕が見た中で最も幻想的なショーだった。ほとんど門司全体が燃えていた。<sup>229</sup> 2 km以上離れたところは大きな赤い炎の塊で、その間の所々に焼けた家の、幽霊のような枠組みが見え、人々の泣き叫ぶ声、救助隊の英雄的活動、そして軍倉庫では飛び交う爆発物や燃焼物の音が休みなくしていた。その熱はこんなに離れた僕たちの丘でも感じる事ができた。やっと飛行機が飛び去ったとき、彼らの仕事は完璧なものだった。門司は、実際的には、もう存在しなかった。‘エンガン’も‘門司’ももう存在しない。

3週間経った後も、豆や砂糖、トウモロコシや米はまだ燃えていた。3週間後にも赤い炎が空を染めていた。丘の上や少し離れたところの家は、所々にぼつんと建ってはいるが、それ以外は一つの煙を出す残骸の塊で、その間を女性や子供達が彼らの、無くなってしまった粗末な所有物を探してさまよっている。我々の‘収容所’は高い丘の上の有利な場所にあり、幸い焼け残ることができた。その上、これは石造りだ（これは日本では特別だ）。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月21-26日

自由になったジャワに関する沢山の噂があるが、僕には信じられない。そうなったら、どんな形であれ、僕はリアに関して何か特別の感覚を感じるはずだ、と思っている。ここでは空襲警報はあまりなく、それでも24時間に1回はあるが、晴れた夜の多くは、まだ静かだ。

---

<sup>229</sup> オースターハウスはここに後になって、門司の家のほとんどは木造である、と書き足している。YMCAの建物は数少ない石造りの建物の内の一つであった。(NIOD、蘭領東インド日記コレクション、J. Oosterhuisの日記)

ウェストラ

福岡 17

1945年7月28日

昨夜激しい空襲で、病院全体と古いアメリカ人の部分が焼け落ちた。丁度赤十字のチョコレートとチーズを分けるために置いてあった食堂もだ。オランダの兵舎は、風が燃え上がったところからこちらに向かって吹いていたにもかかわらず、奇跡的に助かった。襲撃のとき、看護職員達は奇跡的な仕事をした。英雄的勇気で、彼らは歩けない病人達を炎の中から救い出した。幸いどれも死ななかった。今朝も午前中ずっと塹壕に入っていた。これが終わりの始まりか？

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年7月27-31日

[7月最後の日々は]ほとんど恒常的に空襲警報。[...]月末に、アメリカ軍が、沖縄島の飛行場を、その向かいにある日本の主要島への将来の上陸に備えて使い始めた、ときいた。アトリーがチャーチルに代わった。ド・ゴールは大統領。女王はオランダ2ヶ月分の食糧や医療を買う資産を提供した。戦争捕虜は3年間[戦争捕虜として暮らした]分、プラス半分、プラス1/3の給与を政府から受け取る。

ヒルフマン

福岡 9

1945年7月30日

3時間強、日本人の通訳と話し合った。彼は、労働党が与党となったイギリスの内閣交代から、私がどのような結論を出すか知りたがった。その他は曖昧で、大げさな言葉の、一般的なこと以外はなかった。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月1日

状況は同じ：爆弾や飛行機が相変わらず。一度は大体300を数えた。こうしていると僕たちは

ひどい寝不足にはなる。[...]僕は火事で混乱した衣服リストとフダン [倉庫] を整える手伝いをした。<sup>230</sup>日本人から、褒美に赤十字缶詰をもらった。これをそんなことに使うなんて恥ずべき事だ。僕は舌づつみを打って食べてしまった。飛行機は知らないうちに頭の上に来ている。僕が食事をもらうために列に並んでいたとき、突然、機関銃掃破を受けた。激しい対空砲が浴びせられ、編隊を組んで飛んでいたB-29の一機に当たった。その爆撃隊はゆっくり、低く、編隊を組んで、まるで何事もなかったかのように飛び続けた。対空砲はひどく効果的で、一機を撃ち落とす。乗組員は地面に激突したが、一人だけパラシュートで助かった。彼はいったいどんなことになるのだろうか？戦闘機-急降下爆撃機は二重尾翼のロッキード・ライトニングだ。小さめのベル・エアラコブラもいて、小さな戦闘機だ。それは素晴らしく速く、重装備をしている。だかしかし、素晴らしい眺めだ！今や早急に終わるだろう。日本は瓦礫の山になっている。

僕たちは自由になった初めの時期のことをよく話し合っている。乗船すること、僕たちが行く快復キャンプについて。それは何処だろう？オーストラリアか、アメリカか？ジャワはどうなっているだろう？ジャワはもう解放されたのか？僕はもう長い間日本の地図を持っている、厳しく禁止されてはいるのだが。発見されないことを願っている。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月1-7日

ヤスメ日には、空襲警報無し、それに続く3日間もなかったが、しかし、その時は嵐だったのだ。戦争捕虜にとってはアメリカが今、丁度我々が停戦になるかも知れないと希望を持ち始めたときに、我々を見捨てるなどとは、どうしても解けない謎だ。[8月]4日にまた空襲警報があった。[...]和平の噂の高まりによって、あらゆる賭けの話が聞かれる。[H.G.J.]リンデブラットは1万ギルダー、あるいはなんなら、パン1個を、もう空襲警報はない、という方に賭けたいという。[...]

イレーヌ王女の誕生日に、アメリカのパンフレットによって謎が解けた。日本が降伏しなければ、全ての大都市を2ヶ月に渡って爆撃する（だから全市民は避難せよ）。日本は、こうなったら和平内閣を組織しなければならない。

---

<sup>230</sup> この章、1945年7月28日付、ウェストラの日記抜粋参照。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月8日

3年前には、戦争の期間に関して、多くの賭が行われており、その当時はいつも‘あと3、4ヶ月くらい’と言っていた。今、実際の終わりの時期が近づくと、何も聞かれなくなった。[..]

急襲で、約200機のアメリカ4エンジン式飛行機がパレード編成で飛んで来たとき、—それはまるでガラスの蜻蛉のようだった、何も抵抗するものはなかった—ヤップは驚いて見ていた。日本の所長はまるで小さな少年のように、‘あれを見ろ、そしてあちらを見ろ、あそこにもまだ来るぞ!’と叫んでいたという。

もう終わりの時間だ。ここでの3回目の冬は本当の破局となるだろう。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月8-11日

今日、僕たちは、炭坑で何度か電気が切れ、上に来たとき、174機のB-29と80機の戦闘機が襲った八幡と折尾が炎上しているのを見て、初めて脅かし[都市を爆撃するという]の兆候を受け取った。

それは良い雰囲気をもたらしたが、しかし2日後に、宿舎に帰ったときに、ロシアがその日、満州に攻め込んだ、ということを知ったときには敵わなかった。僕たちとの交代が待つ、通常炭坑の半ばで出会うところで、すれ違いざま、この人達が僕たちにこの最新ニュースを伝えた。何も特に言うことがなければ、例えば‘サニー’とか、‘ウェット・アンダーフット’とか言うような天気ニュースなのだが。ロシアは、つまり、日本に宣戦布告したのだ。

イエッテン

折尾(福岡 15)

1945年8月11日

屋外の畑で仕事する若者達が、パンフレットを持ってきて、それは例えば、強大なアメリカの水兵が、島から島へと渡り歩いている図だったりする。ヤップは不機嫌で楽しめない、ロシアが宣戦布告したのだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月13日

爆撃と機関銃掃射がよく、交代で行われる。すると [炭坑の中では] その度にまた、空気の吹き込みや、換気や電気が止まる。毎日数百の爆撃機が、国中に散らばってやってくる。この国の機能は次第に完全停止して来ているに違いない。[...]炭坑の中で、アメリカ人が疲れから、隅で寝入って、寝過ごしてしまった。大騒ぎ。僕たちは直ぐに上に行かされ、そこで数時間気持ちよくひなたぼっこをした。そして何機かのアメリカ戦闘機が急降下するのを見た。素晴らしい光景だ。彼らは雷光のような速さだ！

オースターハウス

門司(YMCA ビル)

1945年8月14日

この数日の精神的高揚が、僕が‘日記’を書けるようにまでしてくれるかどうか、試してみる。日を追っていくと、下関 [海峡の反対側の街] の炎上を書くべきだろう、それは7月1日から2日にかけての夜だった。この爆撃は [門司でのものより] もっと激しかった。5週間後にも、街はまだ燃えていた。 [...]

今朝は8時から12時半までトンネルに [入っていた]:九州全域に900機の飛行機。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月12-14日

眠れなかったので、風呂に入りに行き、多くの空襲警報、絶望的に高度の足りない対空砲、そして八幡への激しい爆弾を楽しんだ。 [...]

夜、グループが炭鉱に行く前 (8月14日から15日にかけて) にも、また八幡への爆撃があった。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月15日

噂ではロシアが満州に侵攻したらしい。これは日本の終わりを意味する！ドイツのことは何も聞かない、だからあちらではもう戦争は終わっているだろうと思う。ヨーロッパは混乱の極みだろう！

## 日本降伏の知らせ

ルーゲ

福岡 21

1945年8月15日

今日の午後2時に、僕たちは6人で、炭鉱に行くために整列していた（ヤスメ）、そのとき、炭坑の仕事は終わった、といわれた。もちろん、大バンザイだ。全員が、一つのことを考えていた：戦争は終わったのだ。今朝は全てのP〔日本人〕はラジオ演説を聞かなければならなかった。歩哨兵は銃剣を持たずに立ち、今日はまだ空襲警報もない。全員が、戦争は終わったことを確信している（停戦）。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月15日

奇妙な雰囲気だ。午前およそ9時頃から、静まり返っている。およそ12時頃、‘チネス・ヘイパール’<sup>231</sup>の演説と、その後国歌がラジオから流れた。日本人の秘密めいた挙動。この人達は口をつむっていることなどできず、‘センサー・オワリ’であると明かした。[G.J.] ディッスフェルト〔中尉〕は私を診察室から呼びだして、そのニュースを伝えた。我々には公式には何も告げられていない、その反対に、あらゆる作り事だ。しかし、その兆候は積み重なっている。炭坑グループと農業グループは早めに宿舎に送られた。炭坑ではいろいろな日本人から我々の男達にそのニュースが伝えられた。罰を受けた者全員（ハーゲン<sup>232</sup>も）、営倉から解き放たれた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月15日

午後2時に、午後シフトグループは、いつものように炭鉱に行くために整列した。少し後、2時20分に、日本の司令官の事務所に電話が入り、その後午後のグループは宿舎に残る、という知

---

<sup>231</sup> 天皇陛下、昭和天皇のあだ名。

<sup>232</sup> ハーゲンは日本の物資を盗んだという罪で閉じこめられていた。‘日本人による抑留者の扱い’の章、1945年8月5日付、ヒルフマンの日記抜粋参照。

らせが来た。こんな事はこれまで一度もなかった。からかうように、‘そらみろ、今日は空襲警報ももう無い、終わったんだよ’と言っていた。しかし3時にもう帰って来た朝シフトのグループから、彼らが炭坑を出るとき、5分間の黙祷をしなければならなかったと聞いたとき、僕たちはそれを信じ始めた。

それから僕たちは、天皇のラジオ演説を、ヤップの事務所で静まり返って聞いていたという話を聞いた！靴作りグループの一時的軍曹であるファン・ビュールデンは、面倒なことにならないように、当面は普通に働き続けるようにと僕たちに懇願した。僕は、‘君は、僕が後になって、自分の自由時間にもヤップの靴を座って直していた、などと言うとは思っていないだろうね！いや、僕は一度収容所の中を見回ってくるよ。’と言った。それでも少々恐怖を感じながら、日本の警備兵の横を挨拶せずに通った。この男は暗い顔つきであちらを向き、挨拶をするようにという命令の序文であり、その後に挨拶を忘れた罰の来る、‘ナンカ、コラ’（‘こら、それはなんだ’）も言わなかった。それは僕にとっては確信できる証拠だった。

全員が食堂に集まり、何人かはおずおずと互いに祝福し始めた。我々はこれを最大限に抑制して行った。僕たちはもう一度騙されたとわかり、もう一度炭坑に行かなければならなくなって、立ち直らなければならないような羽目になるのを恐れていたのだ。やっと、僕たちは将校達がヤップの事務所から出てきて、互いに祝福し合うのを見た。おお、おお、何という瞬間だろう。しかし僕たちにはその趣旨を理解できなかった（あるいは、その勇気がなかった）。心の中で、僕は神に感謝した、僕たちが炭鉱の全ての危険から守られ、戦争の暴力に遭遇せずに済んだことを、そしてこれを決して忘れない、と僕自身に誓った。面白い事もあった：外では作業グループが砂利を積んだ台車をひっくり返し、彼らのベントーを持って収容所に戻ってきた。炭鉱では輸送コンベアーの上方で散乱するままにして置いた。女性達は泣きだし、ヤップはあらぬ方角を見ていた。

僕はドゥ・ヨングと[H.]ラッパルト医師に、公式な発表の後、点呼で3カ国の国歌を歌いたい、と言った。だめだ、と2人とも言った。歌を唱う許可は出ていない。‘葬式の時にもそんな許可はなかった。’と僕は言い、‘その上、それなら一度、羽目を外すさ。’彼らはそうなることを恐れ、ヤップに許可を申請しようとした。僕がいくら、僕の人生のかけがえのない瞬間に、僕の感情を、国歌を歌うことで表すことに、ヤップの許可などいらぬと言っても。僕の言うことは受け入れられなかった。それは拒否され、点呼の前に、前もって禁止された。

夜に、2年半炭鉱で仕事をしてまだ健康な四肢身体でいられたことをつくづく考え、それを神に厚く感謝した。ベッドの中で、我々は眠られず、少しブリッジをし、その後僕は、子供達にきれいな人形、組立ボックス、メカノ〔自分で機械を作るおもちゃ〕を、リアには新しい結婚指輪（前のはスピッツファイヤーのために拠出した<sup>233</sup>）と、きれいなレコード盤か何かを持って行ってやろうと思った。

点呼で日本の司令官はアメリカが広島と長崎にテニスボールほどの大きさの爆弾を落と

---

<sup>233</sup> 脚注 76 参照。



し、日本はそれに対抗することができず、そのために今和平になった、と話した。この変な話しをヤン・ル・コントは多少理解でき、原子分裂の時には、小さなものでも巨大な爆発を起こさせることができる、と僕たちに説明した。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年8月15日

午後2時20分前、鐘が鳴った。‘午後シフト’の整列。しかし、驚いたことに炭鉱行きは無くなった。次の命令があるまで、食堂で待つ。日本の作業長が4人も現れた。天皇は12時から12時15分まで人民に向けてラジオ演説をした。3時には近衛殿下のラジオ演説。地上で働く者達が、収容所に行進して入ってきた。午後シフトグループはもう一度事務所前に整列だ。ベンターを机の上に置いて、木の塀の外の庭で草むしりをする。滴が漏れ落ちるように、徐々に分かってくる。終わったのだ！いつも‘噂’によって生きてきた何人かの人達は、信じる事を恐れた。私の‘カーブ’はいつも平らだった<sup>234</sup>が、これは私も直ぐに信じた。この日は、他ならぬマリア昇天日なのだ。9日間の祈りは聞き遂げられた。<sup>235</sup>嘆願 [早急に、無事に家に帰ることができますように、という]はお耳に届いたのだ。降伏は正式には発表されていなかったが、私は直ぐに、全てのカトリック信者に、今夜はそれぞれの兵舎で感謝のアベマリアを捧げる事を知らせに回った。

午後7時の点呼で公式に発表があった。停戦と直後から始まる和平交渉。第13分隊（12人からなる作業班）で、分隊長のファン・ワイクの要請で、統合感謝ミサが行われた。ファン・ワイク（プロテスタント）は幾つかの短い詩編を読んだ。彼は私に何か言ってくれと頼んだ。私はそれをした。第13分隊が身に受けた明らかな保護に対する感謝、戦争捕虜の困難から抜け出した事への感謝、我々が感謝の心を忘れないようにという祈り。

午後8時に私の部屋、兵舎9，部屋番号9で感謝のミサ。兵舎長と兵舎のカソリック教徒全員が居た。最後に講話をし、亡くなった仲間たちを偲んだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月16日

昨日の午後、僕たちが下で炭鉱に入ったばかりのときに、また上に呼び戻された。僕は工具室に

<sup>234</sup> イエッテンはここで、自分は噂に押し流されてはいなかったことを意味している。

<sup>235</sup> ‘娯楽と信仰’の章、1944年8月11日付、イエッテンの記述参照。

いる者達を呼びにやらされた。歩きながら、僕たちは様々な推測をした。ベメルと僕は感情で震える声でたわいもない話しをしていた。なぜなら僕たちは2人とも、戦争は終わったのではないかと思っていたが、それを口に出して言うことはできなかった。トロッコの所で、そして上でも、あらゆる方向から戦争は終わったと聞こえてきた。僕たちは収容所に戻り、そこで3人でまだ開けていない赤十字小包1個をもらった！全体が轟くような雰囲気だった。夜の食事は少々良かった。夜には、もちろんほとんど寝られなかった。今日、そして当分、僕たちは炭鉱には行かない！それでも全ては落ち着き、全員が、この事をひどく冷静に受けとめた。ヤップとも問題なし。恐れはそれほど深く根付き、僕たちはそれほど疲れ、栄養不良で、自分たちの気持ちを盛大に表現することを恐れ、できないのだ！全員が、これからどうなるか興味津々だ。本当に家に帰るのか？コニーと僕は調子よく、快活だ。僕たちは生きてここから出られるのだ！

ルーゲ

福岡 21

1945年8月16日

緊張に満ちた一日が過ぎた。全員が公式発表、赤十字小包、より多くの食事を待っているが、そのどれもまだ無い。満州は5日間でロシアに席卷された。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年8月16日

やっと、やっと、可愛い人、その時が来た。センサー・オワリ。それは終わったのだ。昨日が炭鉱に入った最後の日だ。やっと、天よ、有り難う。病院にいたとき、僕は8月19日を最も長くかかった場合の日として挙げた。それは15日になった。今朝、僕たちは服を来て門に向かい、‘潜る’<sup>236</sup>用意はできていたが、しかし僕たちは丁寧に戻された。‘フリオ・サギョウ・オワリ’、さっと退散。僕たちはすでに昨日、戦争は終わったと聞いていたが、それでもまだ信じることができなかった。しかし、明日は全員が同じ食事だ。病院も、兵舎病も、地上炭鉱作業員、地下炭鉱作業員、全員が、600グラムの粉や米の乾燥食糧、全員が同じだ。

最初から始めよう、前回[6月23日]以来起こった全ての出来事を。それは嵐のような日々だった。爆撃は毎日有った。サイレンも追いつかなかった。最後の頃には僕たちもそれに慣れてしまった。対空砲が火を噴き始めても、誰も興味を示さなくなった。数日前に、アメリ

---

<sup>236</sup> ‘炭鉱に入る’ という意味。

カ海軍の飛行機が、200メートル上空を飛んでいくのを見た。その時、ロシアが日本と戦争をしているという噂が来た。誰もそれを信じようとしなかった、それが、全ての方向から言われるまでは。満州と朝鮮は陥落、ヴォロシロフとブリュチャー<sup>237</sup>が英雄だ。その時、僕は日本に14日間を与えた。ヤップ自身は戦争に関してできる限り無関心になっている。最も熱狂的だった者も今ではすでに戦争に疲れている、特に最近のように食糧不足が深刻になってくると。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月17日

今日この日まで、我々には公式な和平の印は何も無く、最悪なことに、配給は、ちっともましにならないのだ。9時に[A.G.D.]ヘンゼルが蒼白になって、交渉は決裂した模様という知らせを持って入ってきた。僕たちは、またもや我々は早く喜びすぎ、今また炭鉱に行くとなれば二重の罰を受けるようなものだ、と感じた。アメリカは日本に、必要な保証を求めたようで、だがしかし、ヤップは欺瞞に満ちた外交をする。戦争が再開されると思うと胃が痛くなりそうだった。ヘンゼルは年老いた炊事場ヤップに、どうなっているのか個人的に聞きに行き、有り難いことに彼は少し後に、ハンセンを通じて、門司と長崎で船が我々を待っている、と知らせてきた。やれやれ、どれだけ安堵したことか。 [...]

午後に、我々は糞運び（つまり便所さらい）作業をし、その時、赤十字小包が放出される、と聞かされた。夜には三人に[一缶の]コーンビーフを楽しみ、雰囲気は直ぐまた高揚した。 [...]診察室は溢れるような医薬品を受け取り、これはこれまでヤップがいつも慎重に隠していたものだ。僕は痔用に良質の座薬をもらい、突然また出た猿疱瘡のために、なるべくきれいに身体を洗うようにしている。ヘンゼルと僕は互いの背中から、脂肪ニキビや石炭をこすりだし、我々の妻達の前に見せられる姿になろうとしている。

赤十字社の、あらゆる衣服や毛布がクジで分けられ、僕は毛のシャツで、それを100%純毛の毛布と取り替え、ヨーロッパに帰る船上で敷物にするのだ！煙草15本とグレーグリーンの短ズボン一枚で、もう一つ買い足した。スレウ[中尉]から、赤十字のコートをハンカチ二つで買い取った、ハンカチは煙草8本で買った物だ。 [...]アメリカ人は自分たちの服をみな売っている。アメリカ到着前に、あるいはもしかしたらアメリカの飛行機又は船に乗る前に、全て燃やされてしまうことを知っているからだ。それは僕たちの身にも起こるかも知れないことだ。

---

<sup>237</sup> これは間違い。満州と朝鮮に攻め入ったソビエト軍の総司令官はA.M. ヴァシレヴスキー元帥だった。K.Y. ヴォロシロフ元帥はソビエト連邦の参謀本部に属していた。1941年ドイツ侵攻時の大敗の後、彼には名誉職しか与えられなかった。V.K.ブリュチャー元帥は1938年の極東ソビエト軍の総司令官だったが、その年11月、スターリンの粛清が最高潮だったとき、処刑された。

ルーゲ

福岡 21

1945年8月17日

今日の午後2時半に、収容所の統括権が我々の司令官[G.J.]ラウツ第一中尉に渡された。軍の食料庫や赤十字小包の入ったフダン〔倉庫〕などが移譲された。より多い食事、良質な食事、うまい食事、など。

夕方には歌を唱い、オランダ、アメリカ、イギリス、ロシア、そして中国の旗が揚げられた。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月17日

ほとんどのヤップの態度は徹底的に変わった。彼らはまた礼儀正しくなり、卑屈でさえある。我々をあれほど犬のごとく扱った所長は、友好的にさえなった。ヤップ一人一人が、なぜ我々が仕事をしないかという持論を展開している。日本の軍曹（つい最近昇格した）は、この周辺ではやっている伝染病の話をし、どんな事があっても全員家に居なければいけないのだという。嘘はそれぞれが整合せず、つまり、ある一定の方向を指す。

日本の所長により、赤十字在庫が放出された。我々の兵舎に積み上げてある。1人当たり分けた物：クリーム・ミルク1缶、バター3缶半、ジャム1缶、チューインガム3箱。炊事場からは肉か魚が2回饗され、1日およそ160グラムだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月18日

僕たちは3日間の休みをもらった。収容所長はきっと東京の本部からの命令を待っているのだろう、それとも、政策的に僕たちを非常にゆっくり解き放そうとしている。炭鉱労働の終了の発表はもっと後になる。全ての赤十字在庫は分配され、例えば多くの種類の衣服などだ。悪党共が、これをもう少し早く冬に出していたら、あんなに沢山の人は死ななかつたのだ。全ての古い、すり切れ、あるいは壊れた服は提出した。これでシラミがずいぶん違う！新しい靴が支給された。何日かの内に（大体5日）防空塹壕に埋められていた赤十字缶詰を食べてしまうことになった。炊事場将校が鍵を手に入れたからだ。やっとまた満腹した。我々の将校が処罰権を得た。ヤップ

たちはひどく大人しく、僕の見るところ、我々が面倒を起こさないので大喜びなのだ。日が経つ内に煙草が徐々に少なくなり、缶詰が馬鹿馬鹿しいような安値で得られている：バターで煙草1本、クリーム・ミルクで煙草5本。

噂：600隻のアメリカ船が長崎に来ている。明日からアメリカの食事が来る、そして・・・明日イギリス人は出発する。倦怠感はずさまじい。喧嘩がかなり多い。

ルーゲ

福岡 21

1945年8月18日

みんな楽しんでいる。Pは僕たちを見て苦々しい思いだろう。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月19日

僕たちは体操や防空塹壕の埋め立てで暇つぶしをしている。アメリカ人指導者はなにもしない。彼らはいまだにヤップに対して処置を執るのを恐れている。恥だ！！牧師は少々期待はずれだ。彼もしっかりと対処しない。僕たちは、今や充分休んだのもものすごい食欲がある。僕はまだほとんどやる気がなく、物事に集中できない。何でも全て初めて、しかしそれを終わらせない。死者の骨壺が今日、収容所から持ち出された。

ルーゲ

福岡 21

1945年8月19日

所外には食べ物がもう無いという噂が広まっている：おそらく配給が難航しているのだろう。戦争は終わった。今日午後4時、市民軍軍曹、[J.J.F.]モダーが亡くなった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月19日

日本の飛行機が速報ビラを撒いた。その少し後、私は日本人の通訳に呼ばれ、彼は私の顔を殴り、荒い調子でしゃべりかけた。その理由：私が彼に赤十字バター缶を充分持っていらず、彼により多く渡すのを拒否して、それを制止したから。この話し合いの最中に‘ボリス’がすごい勢いで事務所から出てきて、通訳に何か言った。彼は跳び上がり、拳で手のひらを打って、‘いいぞ、戦争はまた続けられる、最後の最後まで！’と言った。その少し後に、全員仕事着で浴室の前（点呼場）に整列させられ、将校もそれ以外の人達もだ。2時間仕事した後また解散。全体的な憂鬱感。病院では絶望的シーン。その後、徐々に何かがおかしい、と思い始めた。サイレンも聞こえず、空襲警報もなく、日本兵や‘ゴーン’「日本の警備員」の態度は友好的すぎる。この全体が、後から考えればおそらくあの‘禿頭軍曹’の悪魔チックな芝居だったのだ。

髪は長く伸ばしてもよくなった。喫煙時間は廃止。

ヘレ

宮田（福岡 9）

1945年8月19日

僕たちは[8月]16日、すぐにも赤十字[小包]の残りをヤップから受け取った。まだ4人用の包みが254個あり、およそ1000箱だ。そこからはチーズ、煙草、コーヒー、干しぶどうなどは既に取り出され<sup>238</sup>、肉製品だけが残っていた。一人1箱もらった。魚肉製品は炊事場に行き、僕たちは一人当たりミルク1缶、ジャム1缶、バター3缶半、それに石鹼を2個もらった。食事は今や素晴らしい。1日乾燥量で720グラム、つまり米を360グラムと粉を360グラムもらい、ほとんど毎回の食事に赤十字の肉、あるいは魚ボールが付いている。僕のミルクは今朝飲んでしまい、より多くの赤十字[食料]が来、僕たちが早く出ていく、もう[8月]21日にも、と期待されている。公式にはヤップからまだ何も聞いていない。戦争が終わったこともだ。彼らによれば僕たちは5日間炭鉱から離れているが、それは収容所外でインフルエンザが大流行しているからだそうだ。僕たちがそんなことを信じているのだから。[...]

いずれにせよ、有り難いことに、終わったのだ。僕たちは新しい時代に入るよ、可愛い人、激しい仕事の時代、しかし望むらくはその成果が結実することを最終目的にした時代だ。落ち着いた時代になる、もうダモクレスの刀が頭上にぶら下がってはいないのだ。さらに、僕たちはこの事を考えなければいけない：解体と再建の時代は、数年間で普通の男より上にのし上が

---

<sup>238</sup> 脚注 316 参照。

る機会を与えるのだ。見ていたまえ。僕はできるだけ早く始めたい、可愛い人、僕たちは一ヶ月療養所に行かなければいけないほどボロボロになってもいけないのだから。

オースターハウス

門司(YMCA ビル)

1945年8月20日

そして今、平和が、本当に平和が来た。そして今、僕たちはこの5日間で、そのことを徐々に実感し、それがいったい何を意味するのか、毎日少しずつ理解し始めている。この8月15日を、僕は忘れることはないだろう。しかし、僕たちが喜びにはじけて熱狂する、という訳ではない。そのためには疲れすぎ、弱りすぎ、あまりに長く戦争捕虜でいすぎて、これまでのあらゆる素晴らしい噂や知らせに失望することが多すぎたのだ。

それはこんな具合だった。僕は午前中いっぱい‘上’でほとんど横になって寝ていた。12時：食事。そこで僕は、バルチェによれば [=本来ならば]、今畑で働いているはずの‘畑パーティー’ [畑グループ] を見た。そう、朝に数人の婦人達が深刻な顔をして、号外を持って上に来て、警備兵に何か言った。そして彼らは直ぐに宿舎に帰された(つまり、畑パーティーが)。興奮した話しが広まり、それは‘何か特別なことが起こっている’から‘今や平和が来た’まで、いろいろだった。後者はほとんど誰も信じようとしなくて、あるいは信じる勇気がなかった。トンネル、およびシェキ・パーティー<sup>239</sup>も1時に出発しなかったとき、僕たちには何がなんだか分からなくなった。最後に、労働パーティーも、予定よりずっと早く帰ってきて、彼らも僕たちに何も説明できなかった。ただ、数人の女性が口を滑らした。‘センサー・スندا’僕たちはそれを信じる勇気がなかった。

午後遅く、労働パーティー全員が整列し、トンネルから在庫(米、砂糖、赤十字小包)を出してきた。日本の大尉の短い演説があり、その中で数語だけが頭に残った。‘センサー・スندا’、平和、平和、自由、自由。そしてその言葉を、僕たちは既にこの1週間、繰り返して、いじくり回し、ひっくり返し、それが実際にどんな意味を持つ物なのか、見極めようとしている。そしてゆっくりと、喜びがこみ上げ、そしてゆっくりと、M、僕の婚約者が、僕の両親が、オランダがジャワが、現実のものとなり、ゆっくりと、ひとかけらずつ、おとぎの国から戻ってくる。

僕たちは叫んだり怒鳴ったりしなかった、歌いも、歓声を上げもしなかった(後になってするかも知れない)。ヤップからのコラ、コラはもう聞こえず、ハリー・アップも無い。殴られることもなく、命令されることもない。僕たちは実際まだこれを受け入れる勇気がない。考えてもごらん、ヤップに挨拶もせずに通り過ぎるなんて。僕たちは1日中いつでも煙草を吸い、ど

---

<sup>239</sup> ‘仕事’の章、1945年7月23日付オースターハウスの日記抜粋参照。

んな場所でも、ベッドの上でさえも吸う。そして夜-僕はこんな不思議な夜にはほとんど出会っていない。誰も眠らない。下の手洗い所脇では煙草を吸い、しゃべる人達の会合が、ずっと続いていた。

次の日にはあらゆる角や穴から、赤十字在庫が現れてきた。そして8月16, 17日は、実際、続けざまのセント・ニコラス祭だった。5人で1包み。そしてまた2人で1揃いの缶詰。それからまだ、余った物のくじ引き。靴下、靴等々の分配。そして：仕事無し！それはあまりに奇妙で、あまりに非現実的で、まるで夢を見ているようだ。

ウェストラ

福岡 17

1945年8月21日

昨日、公式な戦争終了の発表があった。今日、政治的状況の発表：ドイツは3つに分けて占領された。ヒットラーとムッソリーニは死んだ。オランダは解放された。ウィルヘルミナ女王がまた帰ってきた（あそこではその時、どんな日だったことか！）ジャワはまだ日本領。我々の将校が指揮権、点呼、処罰権を移譲された。日本には4万から5万人の戦争捕虜がいると見られている。主要部分はこの島にいる。僕たちの出航港は、おそらく長崎。ほとんどの収容所は門司と僕たちの収容所の間にある。

ルーゲ

福岡 21

1945年8月22日

今朝10時にPの中尉から戦争は8月18日に終わったと発表があった。

イエッテン

折尾（福岡 15）

1945年8月22日

夜、点呼の後で日本の通訳を通じて、日本とオランダの収容所長の列席の下で、福岡地区戦争捕虜の長官<sup>240</sup>の発表があり、彼の地区の戦争捕虜収容所の状況を描写していた。彼は先ず、我々が

---

<sup>240</sup> 福岡地区戦争捕虜の長官とは、おそらく菅沢亥重大佐のことであろう。



待ち望んだ日が遂に来たことを祝福した。しかし我々は港で連合軍側に引き渡されるまで、この収容所で待機しなければならない。彼は、我々がこの収容所で非常に困難な時を過ごし、死と闘う状況であったことを知っていた。国内の困窮のため、彼らは我々に供すべきであった物の半分も供する事ができなかった。今や幕は下りた。日本の作業長からはいつも、‘ニッポン・チョコレート、ニッポン・イチバン、メシ、メシ、タクサン’ と聞かされた、たとえそれが米、海草、ケダレ豆 [大豆] の食事であったとしても。

我々が唾然としたのは、福岡地区全ての戦争捕虜の長官が、通訳の口を通じて、幾つかの収容所では人民に贈り物をしたことを好ましく思う、と告げさせたことだ。我々の所ではヤップが自分たちで降伏の前、つまり、公式な発表の前に、我々が何も理解できないでいる内にクッキーを焼かせ、全ては門から出ていったのだ。彼らは市民からのがらくたを別れの印に持ってきたようで、我々の男達の一人が教会や十字架像の絵はがきを何枚か持ってきた。

ファン・ウェスト・ドウ・フェール

福岡 15

1945年8月22日

通訳大尉が全く片言の翻訳で POW 収容所長官の手紙を読み上げ、その中で彼は、‘国内の困窮した状況のために’ 我々に与えたい物の半分も与えられなかったことを申し訳なく思うと言い、しかし我々が、彼らが我々のために良くしようと努力してできないのを見て、幾つかの POW 収容所では衣服や食料を市民に与えたのを見た、と言った。彼は我々が大国の名誉と誇りを持って、出航の港で連合軍側に引き渡されるまで、落ち着いた態度を保つように、と要請した。我々は幸いこの‘アンダードッグ’ になった今、またぺこぺこしはじめた、ヤップのおだてに動かされることはなかった。

ヒルフマン

福岡 9

1945年8月22日

ここにいる5カ国（イギリス、アメリカ、オランダ、オーストラリア、カナダ）の代表者が日本の所長に呼び出され、所長は敵対関係は終わり、我々は近々帰還すると宣言した。その後全体点呼があり、彼は同じ内容の福岡本部からの伝言を読み上げた。終わってからまた5人で日本の所長のところに行き、次のことを先ず要請した：

1. 殴ることを止める（了承）。
2. 点呼は5時半でなく6時半にする（了承）。

3. 食糧を多くする（所長は最大限に努力するが果物は手に入らないであろう）。

日本の所長は日本兵200人の部隊が市民の敵意から我々を守る、と告げた。

点呼の時、日本の軍曹から通達があった：

1. 点呼はもう行わない。兵舎毎にディッスフェルト中尉に報告する。
2. 挨拶はもう強制ではない、日本の将校以外には。
3. 音楽演奏許可、大音響でなければ。

へレ

宮田（福岡 9）

1945年8月22日

今日、公式に、戦争が終わったこと、港町へ出発するまでこの収容所の中で待たなければならないことを聞いた。それからの収容所長のスピーチは大げさな物乞い演説だった。彼は僕たちのためにベストを尽くし、できるだけ僕たちが居心地良くなるよう、より多くの食糧を与えるようにしたが、いつも実現することはできなかった。それでも収容所の中には、彼らの気持ちを理解して自分たちの個人的な持ち物、衣服など [を市民のために贈った所が] ある。貧しい民族、貧しい政策。これが戦争をしかけ、戦争捕虜を餓死させ、そして最後になってその戦争捕虜に物乞いをする国なのか？彼らは僕からはびた一文もらえない。死に絶えさせた方がましだ。冬に僕たちが衣服を必要としていたときには与えられなかったのだ。それがアメリカの赤十字社から来た物であってさえも。それから、我々の配給量はまた最低限になった。彼らは米を1日ごとに持ってくる。朝には粥を一皿、昼に粥一皿、そして夜に米だ。全てはほんの少しずつだ。今や自由になり、もっと腹が空く。これが長くは続かないと確信できるのは幸いだ。

今日、我々は背囊を受け取り、受領証に従って時計や指輪を受け取った。最高の時計はヤップが盗むか、メカを抜き出し、あるいは銀の腕バンドが外されていた。公式に保管され、受領証ももらい、それでもなおかつ奴らにくすねられたのだ。これは名誉心のない、正義感のない国民だ。過去の物は全て捨て去り、そしていまだに新しい文明を築いていない。肉でも魚でもないのだ。

### **Staff Diary project**

Elisabeth Broers (editor Dutch)

Mariska Heijmans-van Bruggen (project co-ordinator)

Jeroen Kemperman (project assistant)

Elly Touwen-Bouwsma (programme director)

Richard Voorneman (editor Dutch)

### **Members Advisory Committee for the Diary project**

Dhr. R. Boekholt

Drs. E. Derksen (Stichting Tong Tong)

Dhr. F.N.J. van Dijk

Dr. mr. G. Jungslager (Stichting Japanse Ereschulden)

Dr. E.B. Locher-Scholten (Universiteit Utrecht)

Dr. Osamu Namba

Dhr. H.R. Toorop (Voormalig Verzet Oost-Azie)

Dr. H.L. Zwitzer